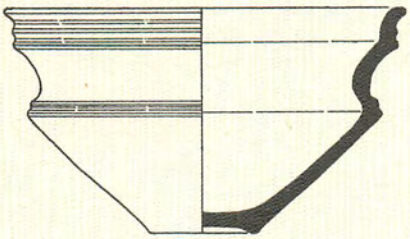
熊本県文化財調査報告　第78集

伊坂上原遺跡
石佛遺跡



1986

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第78集

伊坂上原遺跡
石佛遺跡

1986

熊本県教育委員会

序　　文

本報告書は、昭和57年度・同58年度護川地区県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。

世界屈指の大きさを誇る阿蘇カルデラの外輪山西麓には、広大な菊池台地が広がり、本県有数の肥沃な畑作地帯となっています。そのため、近年、この台地の農道・排水路・圃場等の整備事業が急速に実施されています。

ところで、この台地を浸食して流れる菊池川支流の矢護川流域一帯には、先土器時代以降多くの遺跡が存在しております。

本書は、これらの遺跡群の伊坂上原遺跡と石佛遺跡についての発掘調査報告でありますが、矢護川流域一帯の遺跡についての解明の手がかりとなり、文化財の保護・啓蒙の一助になれば幸せに存じます。

昭和61年３月31日

熊本県教育長　伴　　正　善

例　言

1．本書は、伊坂上原遺跡及び石佛遺跡の報告文である。第Ⅰ章～第Ⅸ章に伊坂上原遺跡についての報告を、その後に石佛遺跡の報告を掲載した。

2、伊坂上原遺跡及び石佛遺跡の調査から報告書執筆に至るまでの作業は、隈昭志指導の下に行なった。

3、伊坂上原遺跡の調査及び報告書執筆については、下記の①～⑤のとおりに実施した。

① 発掘調査は、村井眞輝・木﨑康弘・古森政次・西住欣一郎・廣瀬正照・河北毅・黒田祐司・清田純一・安達武敏がその任に当った。

② 報告書の執筆は、村井・木﨑・河北・黒田が行ない、村井が編集した。詳細は下に示す。

遺構図のトレース・歴史時代の遺物の実測・歴史時代の遺構の報告文・石器鉄器の一部の実測及び報告文は、村井が執筆した。

石器の分類・実測・一覧表作成及び報告文執筆は、村井・木﨑が中心となって行なった。

縄文時代と弥生時代の遺構・遺物の整理・実測及び報告文執筆は、河北が行なった。

第Ⅰ・Ⅱ調査区の遺構配置図は、黒田が作図した。

③ 発掘調査過程の写真撮影は、廣瀬が主に行なった。収蔵庫における整理後の出土遺物写真撮影は、河北が行なった。

④ 河北執筆部分の原稿整理及び校正は島津義昭・村井が行なった。

⑤ 各章の原稿執筆者は次のとおりである。

第Ⅰ章村井、第Ⅱ章村井・河北・黒田、第Ⅲ章村井・黒田、第Ⅳ章村井、第Ⅴ章河北、第Ⅵ章河北、第Ⅶ章村井、第Ⅷ章木﨑・村井、第Ⅸ章村井

4、石佛遺跡の調査及び報告書執筆については、下記の①②のとおりである。

① 発掘調査及び周辺調査は、島津義昭・安達武敏・山城敏昭が行なった。

② 報告書執筆は、島津・安達・山城が行ない、島津が編集した。

5、出土遺物の整理（洗浄・接合・復元等）は、熊本県文化財収蔵庫で行なった。収蔵庫の作業員の指揮は、松本健郎が執った。

本　文　目　次

序　章　調査の組織…… 1
第１節　発掘に至るまで…… 1
第２節　調査の組織…… 1

伊坂上原遺跡

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境と地形…… 3
第１節　遺跡の地理的環境…… 3
第２節　発掘調査及び報告書作成の過程…… 7
第３節　調査区の設定と地形…… 9
第Ⅱ章　第Ⅰ・Ⅱ調査区検出の遺構…… 13
第１節　縄文時代の遺構…… 13
１．住居址…… 13
２．埋　鉢…… 24
３．方形溝遺構…… 28
４．屋外炉址…… 30
５．土器・石器群…… 31
６．円形周溝遺構…… 37
第２節　弥生時代の遺構…… 40
１．円形周溝遺構…… 40
２．住居址…… 42
第３節　奈良時代より古い遺構…… 47
１．第Ⅱ－１号環状溝遺構…… 47
第４節　奈良・平安時代の遺構…… 49
１．竪穴式住居址…… 49
２．掘建柱建物遺構…… 70
３．土　壙…… 79
第５節　江戸時代の遺構…… 80
第Ⅲ章　第Ⅲ・Ⅳ調査区検出の遺構…… 82
第１節　第Ⅲ調査区の遺構…… 82
第２節　第Ⅳ調査区の遺構…… 84
１．奈良・平安時代の遺構…… 84
２．江戸時代の遺構…… 93
第Ⅳ章　第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ調査区検出の遺構…… 96
第１節　第Ⅴ調査区の遺構…… 96
第２節　第Ⅵ調査区の遺構…… 96
第３節　第Ⅶ調査区の遺構…… 100
第Ⅴ章　縄文土器…… 105
第１節　縄文時代後期・晩期の土器の分類…… 105
第２節　遺構に伴わない後期・晩期の土器…… 105

第３節　縄文時代の遺構内検出の土器……108
第４節　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の縄文土器の器種の変遷……112
第５節　縄文土器から見た遺構の形成時期……116
第６節　第Ⅵ調査区採集土器……116
第Ⅵ章　弥生土器……165
第１節　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の弥生土器の概要……165
第２節　弥生土器の分類……166
第Ⅶ章　歴史時代の土器及び陶磁器……176
第１節　歴史時代の土師器……176
第２節　歴史時代の須恵器……202
第３節　陶器及び磁器……208
第Ⅷ章　石器及び鉄器……211
第１節　石　器……211
第２節　鉄　器……216
第Ⅸ章　まとめ……254
第１節　縄文時代の遺構遺物について……254
第２節　弥生時代の遺構遺物について……257
第３節　歴史時代の遺構遺物について……258

石 佛 遺 跡

１．旭志村尾足所在板碑調査報告……261
２．尾足の地蔵板碑と沙門元志……267
３．姫井乙姫神社石塔塔身二例……271

挿　図　目　次

第 1 図　熊本県菊池郡旭志村伊坂上原遺跡位置図…… 3
第 2 図　伊坂上原遺跡周辺遺跡分布図…… 4
第 3 図　伊坂上原遺跡地形図…… 11
第 4 図　第Ⅰ・Ⅱ調査区遺構配置図…… 14
第 5 図　第Ⅰ調査区遺構配置図…… 15
第 6 図　第Ⅱ調査区遺構配置図…… 17
第 7 図　第Ⅰ—11号住居址遺構実測図及び遺物散布状況…… 19
第 8 図　第Ⅰ—11号住居址遺構の遺物出土状態…… 20
第 9 図　第Ⅱ—2号住居址遺構検出前の遺物出土状態…… 22
第 10 図　第Ⅱ—2号住居址実測図…… 23
第 11 図　第Ⅰ—1～4号埋鉢検出状況…… 26
第 12 図　第Ⅱ—1～4号埋鉢検出状況…… 27
第 13 図　第Ⅰ—1号方形溝遺構実測図…… 29
第 14 図　第Ⅱ—1号屋外炉（Y—3グリッド）…… 30
第 15 図　Ⅰ区11—D、12—C・Dグリッド遺物散布状況…… 32
第 16 図　第Ⅰ区F・Gグリッド列遺物出土状態…… 33
第 17 図　Ⅰ区7—G・Hグリッド遺物散布状況…… 34
第 18 図　第Ⅰ区G・Hグリッド列遺物出土状態…… 35
第 19 図　Ⅰ区9・10—Iグリッド遺物散布状況…… 36
第 20 図　第Ⅱ区1・2号円形周溝遺構実測図…… 38
第 21 図　第Ⅰ区1・2号円形周溝遺構実測図…… 41
第 22 図　第Ⅰ—5・6号住居址実測図…… 43
第 23 図　第Ⅰ—8号住居址実測図（弥生時代）…… 44
第 24 図　第Ⅰ—10号住居址（弥生時代）…… 46
第 25 図　第Ⅱ—1号環状溝断面図…… 47
第 26 図　第Ⅱ—1号環状溝遺構平面図…… 48
第 27 図　第Ⅰ—1号住居址実測図…… 50
第 28 図　第Ⅰ—2号住居址実測図…… 51
第 29 図　第Ⅰ—3号住居址実測図…… 53
第 30 図　第Ⅰ—4号住居址実測図…… 54
第 31 図　第Ⅰ—4号住居址2号カマド実測図…… 55
第 32 図　第Ⅰ—5号住居址カマド実測図…… 56
第 33 図　第Ⅰ—7号住居址実測図…… 57
第 34 図　第Ⅰ—9号住居址実測図…… 58
第 35 図　第Ⅱ—1号住居址実測図…… 60

第36図　第Ⅱ—1号住居址東西方向断面図…… 61
第37図　第Ⅱ—1号住居址カマド実測図…… 62
第38図　第Ⅱ—3号住居址カマド実測図…… 63
第39図　第Ⅱ—3号住居址実測図…… 64
第40図　第Ⅱ—4号住居址実測図…… 66
第41図　第Ⅱ—5号住居址実測図 …… 67
第42図　第Ⅱ—6号住居址実測図 …… 69
第43図　第Ⅰ—1号掘建柱建物遺構…… 71
第44図　第Ⅱ—1号掘建柱建物遺構…… 72
第45図　第Ⅱ—1′号（5号）掘建柱建物遺構…… 73
第46図　第Ⅱ—2号掘建柱建物遺構…… 75
第47図　第Ⅱ—2′号（4号）掘建柱建物遺構 …… 76
第48図　第Ⅱ—3号掘建柱建物遺構…… 78
第49図　第Ⅱ—1号土壙…… 79
第50図　第Ⅱ調査区溝遺構断面図…… 81
第51図　第Ⅲ調査区平面図…… 82
第52図　第Ⅳ調査区遺構配置図…… 83
第53図　第Ⅳ—1号住居址カマド実測図…… 84
第54図　第Ⅳ—1号住居址実測図…… 85
第55図　第Ⅳ—2号住居址カマド実測図…… 86
第56図　第Ⅳ—2・3号住居址実測図…… 87
第57図　第Ⅳ—4号住居址実測図…… 88
第58図　第Ⅳ—5号住居址実測図…… 89
第59図　第Ⅳ—6号住居址実測図…… 90
第60図　第Ⅳ—7号住居址実測図…… 91
第61図　第Ⅳ—1号掘建柱建物遺構…… 92
第62図　第Ⅳ—1号土壙実測図…… 93
第63図　第Ⅳ—1号溝平面図…… 94
第64図　第Ⅳ—1号溝断面図…… 94
第65図　第Ⅵ調査区遺構配置図…… 97
第66図　第Ⅵ—1・2号住居址実測図…… 99
第67図　第Ⅵ—1号土壙実測図……100
第68図　第Ⅵ調査区溝及び道路遺構断面図 ……101
第69図　第Ⅶ調査区平面図……102
第70図　第Ⅰ調査区縄文後期・晩期遺物分布図……117
第71図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……118

第72図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……119
第73図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……120
第74図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……121
第75図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……122
第76図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……123
第77図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……124
第78図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……125
第79図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……126
第80図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……127
第81図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……128
第82図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……129
第83図　第Ⅰ調査区出土縄文後期末～晩期初頭の遺物……130
第84図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……131
第85図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器……132
第86図　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器……133
第87図　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器……134
第88図　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器……135
第89図　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器……136
第90図　第Ⅱ—2号住居址出土の縄文土器……137
第91図　第Ⅱ—2号住居址出土の縄文土器……138
第92図　第Ⅱ—2号住居址出土の縄文土器……139
第93図　第Ⅱ—1号円形周溝遺構出土の縄文土器……140
第94図　第Ⅱ—2号円形周溝遺構出土の縄文土器……141
第95図　第Ⅰ—1号埋鉢実測図……142
第96図　第Ⅰ—2・3号埋鉢実測図……143
第97図　第Ⅰ—4号・第Ⅱ—1・2号埋鉢実測図……144
第98図　第Ⅱ—3・4号埋鉢実測図……145
第99図　第Ⅰ—1号方形溝遺構出土の縄文土器……146
第100図　第Ⅰ—1号方形溝遺構出土の縄文土器……147
第101図　第Ⅰ—1号方形溝遺構出土の縄文土器……148
第102図　第Ⅵ調査区出土の縄文中期の土器……148
第103図　第Ⅰ調査区弥生時代遺物散布状況配置図……170
第104図　刻目突帯文土器……171
第105図　第Ⅰ—6号住居址出土の土器……171
第106図　第Ⅰ—8号住居址出土の土器……171
第107図　第Ⅰ—10号住居址出土の土器……172

第108図　第Ⅰ—10号住居址出土の土器……173
第109図　第Ⅰ—10号住居址出土の土器……174
第110図　第Ⅰ—10号住居址出土の土器……175
第111図　土師器（坏の蓋及び身）……194
第112図　土師器（坏・皿・埦）……195
第113図　土師器（坏・盤・鉢・壺・甑及び瓦）……196
第114図　土師器（甑・甕）……197
第115図　土師器（甕）……198
第116図　土師器（甕）……199
第117図　土師器（甕）……200
第118図　土師器（甕）……201
第119図　須恵器（坏の蓋及び身・鉢・壺・甕）……206
第120図　蔵骨器（表採）……207
第121図　陶器及び磁器（碗・皿・甕・徳利）……210
第122図　黒曜石縦長剝片石器……235
第123図　石斧実測図（1～8）……236
第124図　石斧実測図（9～13）……237
第125図　石斧実測図（14～21）……238
第126図　石斧実測図（22～27）……239
第127図　石斧及び磨石実測図（28～34）……240
第128図　打製石斧の長さと幅の関係グラフ……241
第129図　打製石斧形態別残存状況グラフ……242
第130図　円盤状石器（1～6）……243
第131図　円盤状石器（7～13）……244
第132図　円盤状石器（14～21）……245
第133図　円盤状石器に伴う土器型式……246
第134図　敲打痕又は研磨痕のある石器……247
第135図　敲打痕又は研磨痕跡のある石器……248
第136図　敲打痕又は研磨痕のある石器……249
第137図　石　皿……250
第138図　石　皿……251
第139図　石　皿……252
第140図　打痕及び研磨痕のある石材の重量別個体数……253
第141図　五丁中原遺跡検出の住居址及び遺物……256

旭志村尾足所在板碑調査報告
第１図　板碑所在地……261
第２図　尾足地蔵菩薩立像自然石板碑実測図……263
第３図　尾足地蔵菩薩立像自然石板碑……264
第４図　旭志村石造文化財分布図……265
姫井乙姫神社石塔塔身二例
第１図　石塔塔身所在地……271
第２図　姫井乙姫神社石塔塔身実測図……272

図　版　目　次

図版１　第Ⅰ調査区遺構・遺物の検出状態……273
図版２　第Ⅰ調査区検出の竪穴式住居址（奈良・平安時代）……274
図版３　第Ⅰ調査区検出の弥生時代の住居址……275
図版４　縄文時代の住居址（第Ⅰ—11号・第Ⅱ—２号住居址）……276
図版５　円形周溝遺構及び方形溝遺構……277
図版６　第Ⅱ調査区検出の遺構……278
図版７　第Ⅳ調査区検出の遺構……279
図版８　第Ⅲ調査区及び第Ⅶ調査区の景観……280
図版９　第Ⅰ調査区（第Ⅰ—10号・第Ⅰ—８号住居址）出土の弥生土器……281
図版10　第Ⅰ・Ⅱ調査区検出の埋鉢の出土状態……282
図版11　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の埋鉢……283
図版12　土偶及び縄文土器（浅鉢・注口土器・高坏）……284
図版13　縄文土器（第Ⅰ—11号住居址１～16・第Ⅰ—１号方形溝17～23）……285
図版14　縄文土器（第Ⅱ—２号住居址１～18・第Ⅱ—１号円形周溝19～22・第Ⅱ—２号円形周溝23）……286
図版15　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の縄文土器（深鉢１～15・浅鉢16～34・鉢の底部35～52）……287
図版16　歴史時代の遺物（土師器１～17・須恵器18～26・鉄器27～29・越州31・近世の磁器30）……288

表　目　次

第１表　伊坂上原周辺の遺跡一覧表…… 5
第２表　第Ⅰ—11号住居址の柱穴一覧表…… 21
第３表　第Ⅱ—２号住居址の柱穴一覧表…… 23
第４表　縄文時代の遺構一覧表…… 39
第５表　第Ⅱ—１号住居址の柱穴一覧表…… 59
第６表　第Ⅱ—５号住居址の柱穴一覧表…… 68
第７表　第Ⅰ—１号掘建柱建物遺構の柱穴一覧表…… 70
第８表　第Ⅱ—１・Ⅱ—１′号掘建柱建物遺構の柱穴一覧表 …… 73
第９表　第Ⅱ—２・Ⅱ—２′号掘建柱建物遺構の柱穴一覧表 …… 77
第10表　第Ⅳ—１号掘建柱建物遺構の柱穴一覧表…… 93
第11表　歴史時代の遺構及び主な遺物一覧表……103
第12表　第Ⅰ調査区出土の縄文土器一覧表……149
第13表　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器一覧表……155
第14表　第Ⅱ—２号住居址出土の縄文土器一覧表……157
第15表　第Ⅱ—１号円形周溝遺構出土の縄文土器一覧表……158
第16表　第Ⅱ—２号円形周溝遺構出土の縄文土器一覧表……159
第17表　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の埋鉢一覧表……159
第18表　第Ⅰ—１号方形溝遺構出土の縄文土器一覧表……160
第19表　縄文土器の器種別・形式別口径分布表……162
第20表　伊坂上原遺跡出土の縄文土器編年表……163
第21表　黒曜石縦長剝片の一覧表……217
第22表　石斧の一覧表……219
第23表　円盤状石器の一覧表……232
尾足の地蔵板碑と沙門元志
第１表　尾足地蔵板碑と元志関連年表……270

序　章　発掘調査の組織

第１節　発掘調査に至るまで

伊坂上原遺跡調査については、昭和57年度当初、熊本県農政部耕地第１課から護川地区県営畑地帯総合改良事業に伴う埋蔵文化財の調査依頼があった。この依頼を受けて、教育庁文化課は、昭和57年５月中旬から６月にかけて試掘調査を実施した。

試掘調査の結果から、７ヶ所の調査区（面積約2.4ha）を設けた。発掘調査は、昭和57年８月13日から昭和58年１月31日までの約半年間実施した。

石佛遺跡調査についても上記同様に昭和58年度当初に、耕地第１課から同事業に伴う調査の依頼があった。

この依頼を受けて、教育庁文化課は、昭和59年２月21日から３月９日にかけて埋蔵文化財の発掘調査及び周辺調査を実施した。

第２節　調査の組織

調査責任者	岩崎辰喜	（昭和57・58年度　文化課長）
	米村嘉人	（昭和58・59年度　〃　）
	森　一則	（昭和59・60年度　〃　）
調査事務局	林田茂一	（昭和57・58年度　課長補佐）
	佐々木正典	（昭和59年度　〃　）
	大塚正信	（昭和57・58年度　文化課主幹・経理係長）
	柴田和馬	（昭和59・60年度　〃　）
	松崎厚生	（昭和57・58年度　文化課参事）
	花田隆二	（昭和58・59年度　〃　）
	森　貴史	（昭和60年度　〃　）
	谷喜美子	（文化課主事）
調査総括	隈　昭志	（文化課主幹・文化財調査係長）

第２節　調査の組織

伊坂上原遺跡 調査及び報告書執筆	村井眞輝	(昭和57～59年度　技師・昭和60年度　文化財保護主事)
	木﨑康弘	(　〃　〃　)
	廣瀬正照	(嘱託)
	黒田裕司	(昭和57年度　臨時調査員・昭和58～60年度　嘱託)
	清田純一	(嘱託)
	古森政次	(昭和57年度　嘱託・昭和58～59年度　技師)
	西住欣一郎	(昭和57年度　嘱託・昭和60年度　文化財保護主事)
	河北　毅	(昭和57年度　臨時調査員・昭和58～60年度　嘱託)
	安達武敏	(臨時調査員)
石佛遺跡 調査及び報告書執筆	島津義昭	(昭和58・59年度　学芸員・昭和60年度　主任学芸員)
	安達武敏	(臨時調査員)
	山城敏昭	(嘱託)
	坂本戸一	(旭志村文化財保護委員長・調査協力)
整理指導	松本健郎	(昭和57年～59年度　技師・昭和60年度　文化財保護主事)

イサカウエノハラ

伊坂上原遺跡

発掘調査及び執筆者

村井　眞輝・木﨑　康弘・廣瀬　正照

黒田　裕司・清田　純一・古森　政次

西住欣一郎・河北　　毅・安達　武敏

第１章　遺跡周辺の環境と地形

第１節　遺跡の地理的環境

伊坂上原遺跡は、菊池川水系の合志川（コウシガワ）の支流矢護川（ヤゴガワ）の左岸の台地上に存在する。矢護川は阿蘇山の外輪に源を発し、鞍岳の南麓を右廻して当遺跡の北西側（泗水（シスイ）町上住吉）で合志川に合流する。

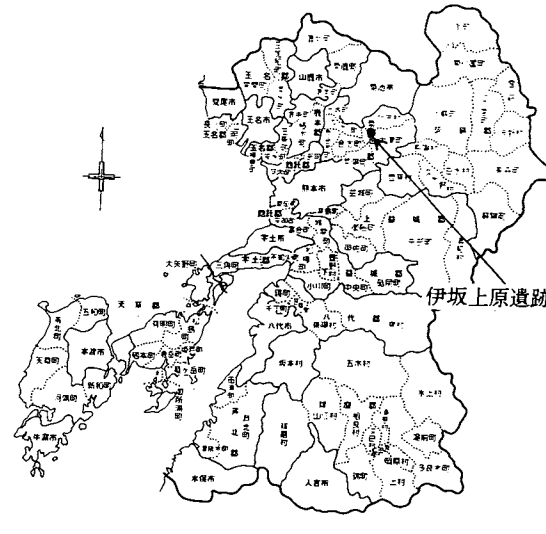
阿蘇カルデラの外輪の西に延びた裾野は広大な台地となっており、熊本県下有数の畑作地帯である。この台地縁部には縄文時代からの多くの遺跡が分布する。

江戸時代以前、隈府（ワイフ）（菊池市）と大津（オオツ）（菊池郡大津町）を結ぶ主要道路（往還）は隈府を発し、赤星・三本木を通って当遺跡の西側をかすめて南下し、大津に達していたと言う。この道路沿には多くの古代・中世の遺跡が並ぶことから、道路開削の歴史もかなり遡ると思われる。

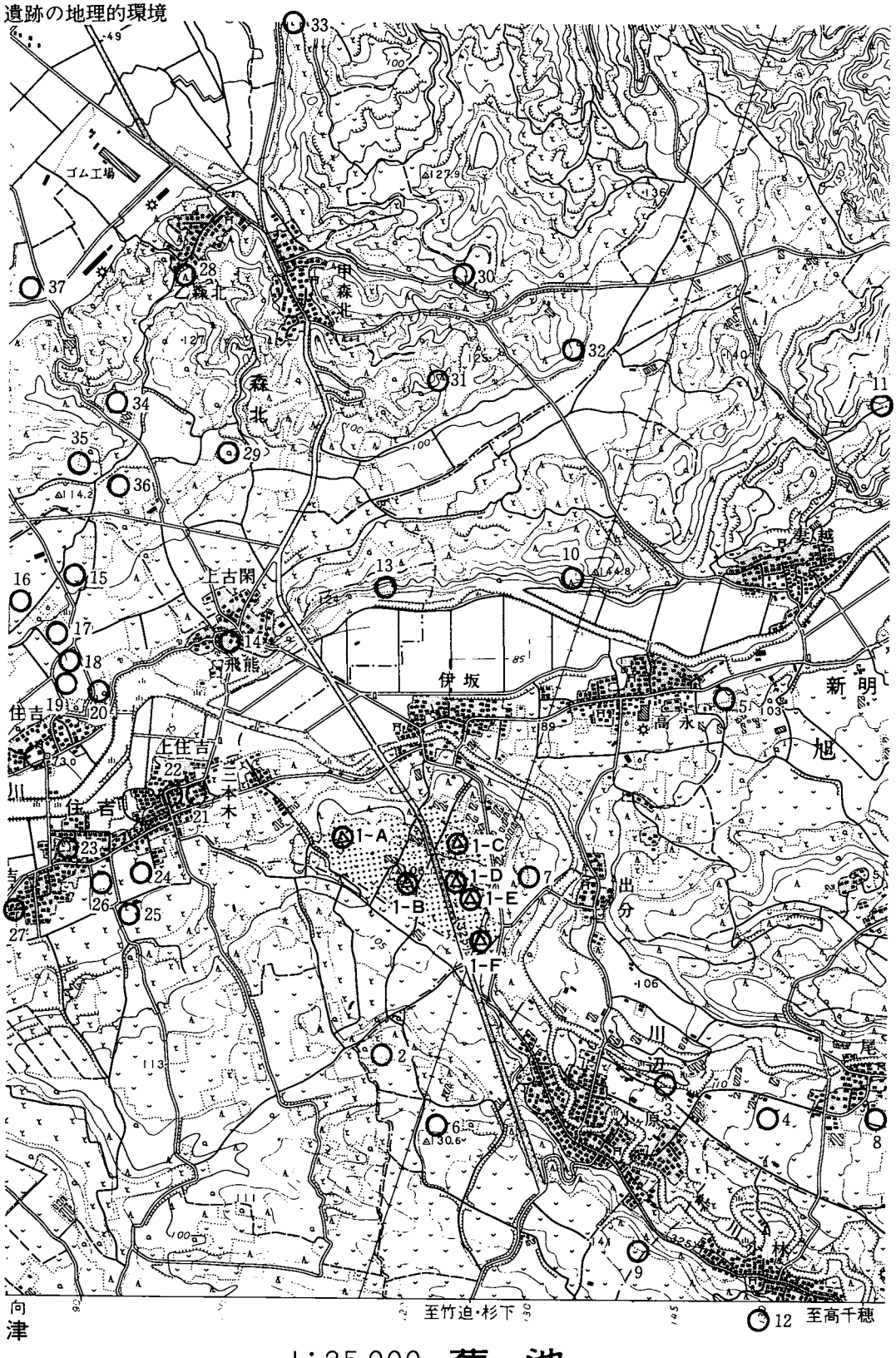
伊坂上原遺跡の試掘を開始して気付いたことであるが、第Ⅰ・Ⅱ調査区において、縄文時代の遺物包含層が極めて浅く、耕土層の直下がその層であり、その下位にはニガシロと呼ばれる土層が見られる。ところが、国道325号の掘削崖面を観察すると、大津町寄りには耕作土直下に黒色土層が存在することに気付く。この黒色土は奈良・平安時代頃に比定される遺構内に堆積した土に良く類似する。黒色土の堆積層が調査区内で欠落している点について、確かな理由は明らかでないが、古老の話しからすると「シバオコシ（芝起し）」が一つの原因となっていると推定される。

「シバオコシ」と言うのは、粟を作付けする頃に吹く突風のことである。この風の強さはきわめて強く、畑しだいでは耕した土をすべて吹き飛ばしてしまうほどであったと言う。そのため耕作土層が薄くなり、客土をよぎなくされた畑もあったと言う。

「シバオコシ」の外に「クダシカゼ（下し風）」も吹いたと言う。「クダシカゼ」と言うのは、陸稲の穂ぶくらみの頃から出穂の頃によく吹く強風のことである。この風は鞍岳の方から西方に吹き下り、フェーン現象がおこると言う。



第１図　熊本県菊池郡旭志村伊坂上原遺跡位置図



第２図　伊坂上原遺跡周辺遺跡分布図

第1表　伊坂上原遺跡周辺の遺跡一覧表

第2図中の番号	名称	種別	所在地	全国遺跡地図（熊本県7）	
				昭和56年3月の番号	旧遺跡番号
1－A	伊坂上原遺跡（第Ⅰ・Ⅱ調査区）	包含地 カマド付竪穴式住居址群 縄文住居址・弥生住居址	菊池郡旭志村伊坂上原	7－199	1242
1－B	伊坂上原遺跡（第Ⅲ調査区）		〃		
1－C	伊坂上原遺跡（第Ⅳ調査区）	カマド付竪穴式住居址群	〃		
1－D	伊坂上原遺跡（第Ⅴ調査区）		〃		
1－E	伊坂上原遺跡（第Ⅵ調査区）	平安時の住居址群 近世の溝	〃		
1－F	伊坂上原遺跡（第Ⅶ調査区）	銅鉾出土地付近	〃		
2	ヒララ石遺跡	縄文・弥生土器包含地・支石墓	旭志村川辺柏木	7－201	1230
3	四郎丸遺跡	縄文・弥生土器包含地	旭志村川辺小ヶ原四郎丸	7－203	1241
4	西鶴遺跡	包含地	旭志村尾足 通称（西鶴）	7－204	—
5	高永遺跡	縄文・須恵器包含地	旭志村新明高永	7－181	1243
6	柏木遺跡	縄文土器包含地	旭志村川辺柏木	7－202	1227
7	西原遺跡	縄文土器包含地	旭志村川辺西原	7－200	1228
8	尾足原遺跡	縄文・弥生土器包含地	旭志村尾足南原	7－205	1245
9	ワクド石遺跡	縄文土器包含地	旭志村川辺ワクド石・大津町小林	7－268	1229
10	土平横穴群	横穴	旭志村辨利土平	7－180	1253
11	松尾横穴群	横穴	旭志村伊萩松尾	7－183	1255
12	塔の本遺跡	縄文（押型文土器）	大津町杉水（塔の本）	7－269	1126
13	平町横穴群	横穴	泗水町住吉上鶴	7－144	1183
14	飛熊遺跡	経筒	泗水町住吉城下	7－168	1196
15	城山遺跡	蔵骨器	泗水町住吉城山	7－163	1195
16	長塚古墳	古墳	泗水町住吉西古閑	7－162	1182

第2図中の番号	名称	種別	所在地	全国遺跡地図（熊本県７）	
				昭和56年３月の番号	旧遺跡番号
17	城山Ｂ遺跡	甕棺・土師器・須恵器包含地	泗水町住吉城山	７－１６５	１１５７
18	城山Ｃ遺跡	〃	〃	７－１６６	１１４９
19	城山Ａ遺跡	〃	〃	７－１６４	１１４８
20	飛熊城跡	中世城跡	泗水町住吉城山	７－１６９	１１９４
21	上住吉遺跡	土墨跡 土師器包含地	泗水町住吉福島	７－１９８	１１９２
22	日頭山宣頓寺跡 合志家の墓	寺院跡・墳墓	泗水町住吉北小路	７－１９７	－
23	池上城跡	城跡	泗水町住吉古閑	７－１９３	１１９４
24	南山王遺跡	縄文土器包含地	泗水町住吉南山王	７－１９６	１１４７
25	東駄飼城蔵骨器	蔵骨器	泗水町住吉東駄飼城	７－１９５	－
26	山王宮跡	社殿跡	泗水町住吉北山王	７－１９４	１１９３
27	南住吉古墳	石棺墓	泗水町住吉古閑	７－１５９	１１７８
28	妙見後田横穴群	横穴	菊池市森北後田	７－１７７	１０８１
29	森北落水古墳	円墳	菊池市森北落水	７－１７６	１０８２
30	妙見後田横穴群	横穴	菊池市森北後田	７－１７７	１０８１
31	立石支石墓	支石墓	菊池市森北立石	７－１７９	１０６９
32	モドリ山横穴群	横穴	菊池市森北髻山	７－１７８	１０８０
33	真弓野横穴	横穴	菊池市赤星真弓野		
34	万太郎遺跡Ａ	縄文土器包含地	菊池市赤星万太郎	７－１６１	
35	万太郎遺跡Ｂ	縄文土器包含地	菊池市赤星万太郎		
36	城山遺跡	弥生・縄文土器包含地	菊池市赤星万太郎	７－１６７	
37	天城池畑遺跡	縄文土器包含地	菊池市赤星池畑	７－１６０	（１０６３）

フェーン現象がおこると、気温は上昇し・大地は乾燥し・陸稲は枯死状態となり、畑作物の収穫は激減したと言う。

伊坂上原遺跡周辺遺跡の分布は第２図に、遺跡一覧表は第１表に示した。この分布図及び一覧表から、合志川とその支流の矢護川の河岸沿いの丘陵縁部に多くの遺跡が分布することが理解されるであろう。

当遺跡の南方２kmには縄文時代後期から晩期にかけての遺跡として著名なワクド石遺跡が存在する。また矢護川の支流平川の右岸の大津町今村には、当遺跡と近い時期の遺跡が存在し、昭和59～60年度にかけて発掘調査中である。

第２節　発掘調査及び報告書作成の過程

発掘調査は、序章で述べたように昭和57年８月13日から昭和58年１月31日の間に実施した。

当遺跡は、故坂本経堯先生が調査されたことがあり、旧来より縄文後期から晩期にかけての遺跡として周知の遺跡である。今回の発掘により、遺物（縄文土器・弥生土器・土師器・石器等）及び遺構（住居址・溝・道路等）を検出し、多大の成果をあげることができた。

発掘調査終了目前の昭和58年１月28日未明、廣瀬正照氏は、心不全のため他界された。この悲しみを、筆舌につくすことはできない。ただ故人の冥福を祈るのみである。この衝撃は調査員一同の胸の中に残って、消えることはない。

発掘した遺物は、熊本県文化財収蔵庫に数回に分けて搬入し、水洗・注記・接合・復元等の作業を行なった。

発掘調査の終了した昭和58年２月から、遺物の整理に取りかかったが、諸般の事情から報告書を出版するまでには到らなかった。

昭和60年４月13日早朝、河北毅氏は心不全のため夭逝された。廣瀬氏の他界された日からわずか二年目であり、この二重の悲報に接し、調査員一同、悲しみのため放心状態になり、ただただ、冥福を祈り、合掌するのみである。

以下、調査日誌妙を掲載し、調査経過報告に変えたい。

８月13日（金）　菊池森林組合事務所の敷地内に、プレハブ小屋を建設する。

８月16日（月）　発掘作業員を地元から雇用する。

８月18日（水）　器材を収蔵庫から現場へ搬送する。茶園（第Ⅰ区）の伐採を開始する。

８月25日（水）　茶園（第１区）に重機（バックフォー・ブルドーザー）を投入して、表土剥ぎを開始する。

８月26日（水）　縄文土器・石器（石斧・十字形石器）が出土しはじめる。

９月７日（火）　第１区の住居址（カマド付き）の発掘を開始する。

９月13日（月）　住居址の実測図作成を開始する。縄文時代の遺構は、まだ検出されていないが、遺物の出土状態から、遺構が検出されそうだ。

９月21日（火）　弥生時代の遺構（住居址・円形周溝遺構）の発掘を開始する。

10月12日（火）　第Ⅱ区に重機（バックフォー・ブルドーザー）を投入し、表土剝ぎを開始する。(16日に終了する。)

10月15日（金）　住居址（第Ⅰ区）の実測を行なう。第Ⅱ区より、柱穴群（３棟分）を検出する。

10月25日（月）　第Ⅱ区にグリッドを設定する。第Ⅲ～Ⅶ区の重機による表土剝ぎを開始する。(11月５日に終了する。)

10月27日（水）　第Ⅳ区の重機による表土剝ぎを開始する。第Ⅳ区から、竪穴式住居址（カマド付き）及び柱穴群を検出する。

10月28日（木）　第Ⅴ区の重機による表土剝ぎを開始する。

10月30日（土）　第Ⅵ区の重機による表土剝ぎを開始する。

11月４日（木）　第Ⅶ区の表土剝ぎを開始する。第Ⅶ区の北側の桑園から銅剣が出土したことは非常に著名である。（昭和39月12月16日地主坂本伝男氏発見、同月20日坂本経堯先生調査）

11月24日（水）　第Ⅵ区の調査を開始する。

12月10日（金）　第Ⅰ区の調査を終了する。

12月14日（火）　第Ⅱ区の調査を終了する。第Ⅳ区の遺構検出作業を開始する。

12月25日（土）　第Ⅶ区より道路遺構を検出する。

１月24日（月）　第Ⅳ区の調査を終了する。

１月27日（木）　第Ⅶ区の平板測量を行う。矢護川の河原で、発掘器材（一輪車・鍬・シート等）を洗う。第Ⅶ区からは、道路遺構以外検出されなかった。

１月28日（金）　今朝未明、廣瀬正照氏は、急性心不全のため不帰の人となられる。

１月31日（月）　調査を終了する。現場小屋から、調査器材を撤収し、収蔵庫へ搬送する。

２月１日（火）　本日より、報告書執筆のため、遺物整理を開始する。

第３節　調査区の設定と地形

本遺跡の主体部は、熊本県菊池郡旭志村大字伊坂字上原に所在する。一部は小原字西原にまたがり、調査対象区の中央部を南北に国道325号が走る。この国道の東西の畑地24haが昭和57年度の圃場整備施工地域である。

発掘調査区は第３図に示すとおり、国道325号の西側に３ヶ所（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ調査区）、東側に４ヶ所（第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ調査区）設定した。

第Ⅰ区と第Ⅱ区は、南北に走る農道の東西に位置し、全く同一の遺跡である。グリッドも、通しで設定した。

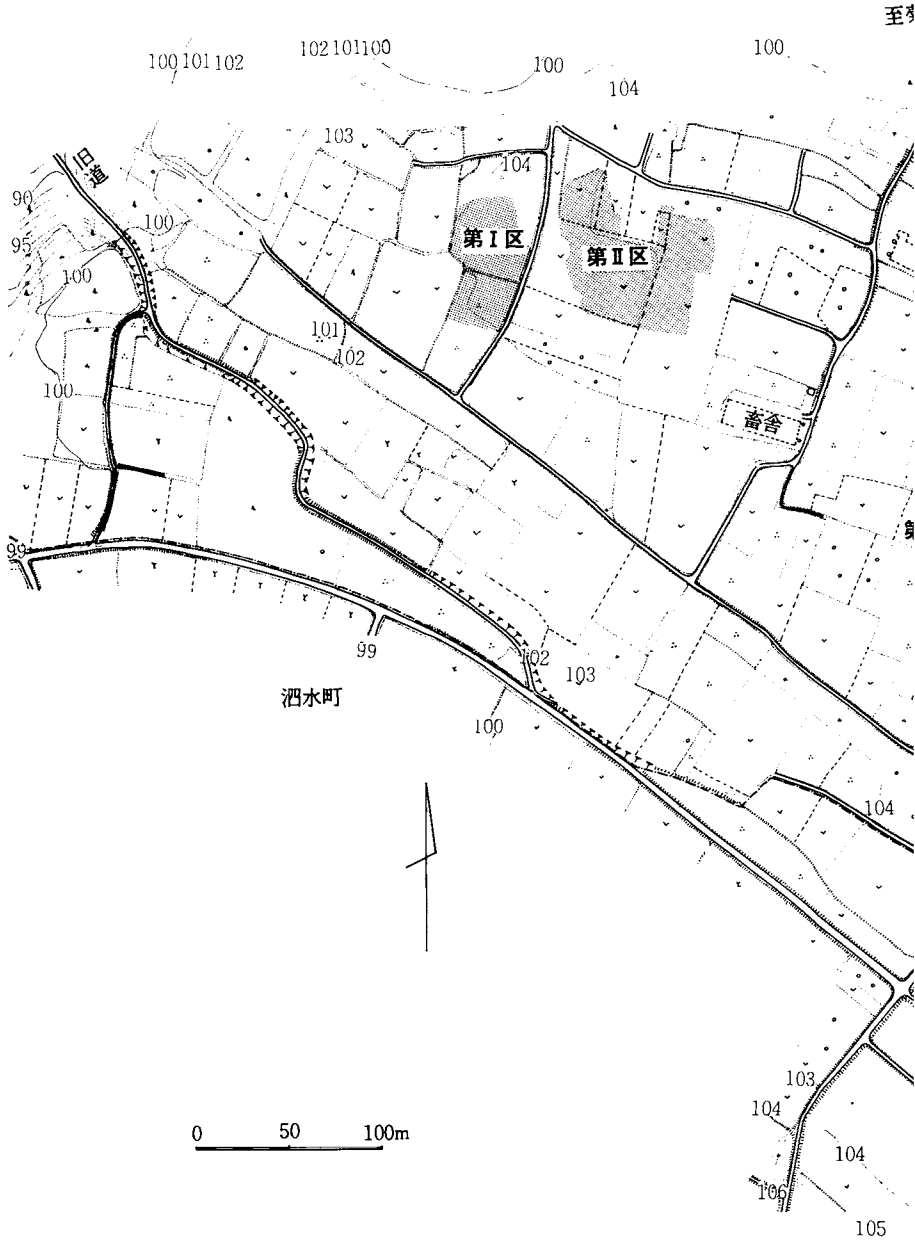
第Ⅲ区は、国道325号の西側に位置する高台である。表土を剝ぎ取った部分からは、焼土（２ヶ所・時期不明）と道路遺構（近世）が検出されたのみであった。しかし、皮肉と言おうか、調査した区域の西側隣境地（２ｍほど離れた地点）から、工事施工後に蔵骨器が表採された。

第Ⅳ区は、菊池森林組合の北側（国道の東側）に位置する。土地の小名は、『寺畑（テラバタ）』と称するので、寺畑遺跡とでも称した方が良い。踏査した時に、土師器や青磁が表採された。

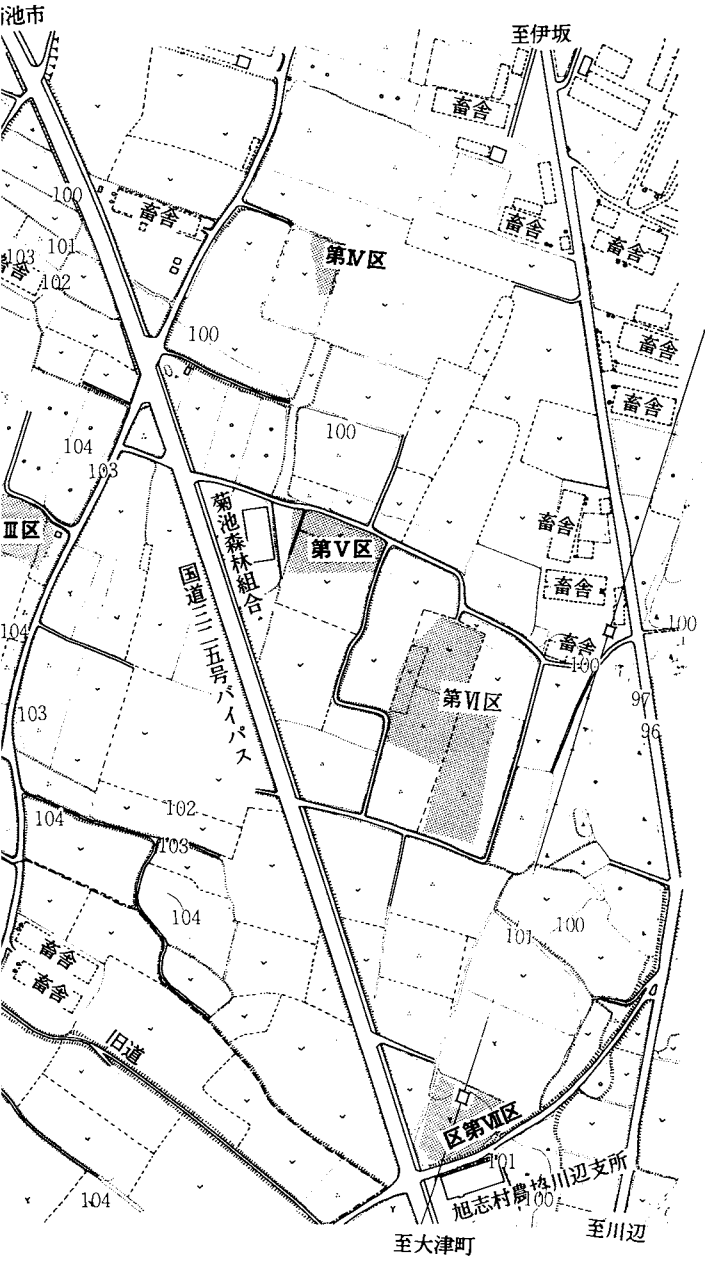
第Ⅴ区は、菊池森林組合事務所敷地の東側隣接地である。踏査においては、土師器の散布が見られ、試掘においても、土層の保存状態が良好であったので、表土を剝ぎ取ってみたが、何等の遺構も検出出来なかった。

第Ⅵ区は、第Ⅴ区の東側・第Ⅶ区の北側に位置する。畑地であり、作物は牧草と茶である。事前の踏査において、土師器片が表採された。

第Ⅶ区は西原に属するので西原遺跡に加えるべきであるが、調査の流れから、伊坂上遺跡第Ⅶ区と呼称することとした。ところで、第Ⅶ区の北側（鉄塔の北側）の畑地からは、先述のとおり昭和39年に銅鉾が出土し、坂本経堯先生により調査及び報告がなされている。


至
100 101 102
102 101 100
100
100
104
103
104
旧道
90
95
100
100
100
第Ⅰ区
第Ⅱ区
101
102
畜舎
99
99
102
103
泗水町
100
104
103
104
104
106
105
0
50
100m

第3図　伊坂上原遺跡地


池市
至伊坂
畜舎
第Ⅳ区
第Ⅴ区
第Ⅵ区
Ⅲ区
菊池森林組合
国道三三五号バイパス
旧道
区第Ⅶ区
旭志村農協川辺支所
至大津町
至川辺

形図

第Ⅱ章　第Ⅰ・Ⅱ調査区検出の遺構

第Ⅰ・Ⅱ区は、台地の西端部に位置する。第Ⅰ区と第Ⅱ区との間には、農道があるのみで地形的にも、出土遺物、遺構からも同一の遺跡である。第Ⅰ区(農道の西側)・第Ⅱ区（農道の東側）と２つの区域を設定したのは、発掘作業行程の都合からである。

第Ⅰ区は、40年近く経た茶園であった。表土を排除し、発掘調査した面積は0.22haである。Ⅰ区の北側半分の地域からの出土遺物は、主に縄文時代後期から晩期の土器及び石器であった。それ等の出土状態は第15～19図に示すように、足の踏み場もないほどに密集しており、しかも、第70図のように３時期に分れた。検出した遺構は、縄文時代の外に弥生時代・奈良平安時代・江戸時代後期～明治初期に比定される遺構である。

第Ⅱ区は、飼料用作物を作付してあった。表土を排除し、発掘調査した面積は0.43haである。第Ⅰ区からの主な遺構の広がりは、第Ⅱ区のほぼ中央部（西側半分）で終る。それより東側は畑地耕作により上部が強く削平されていた。

以下、第Ⅰ、Ⅱ区より検出した遺構について、時代を追って、説明を加える。

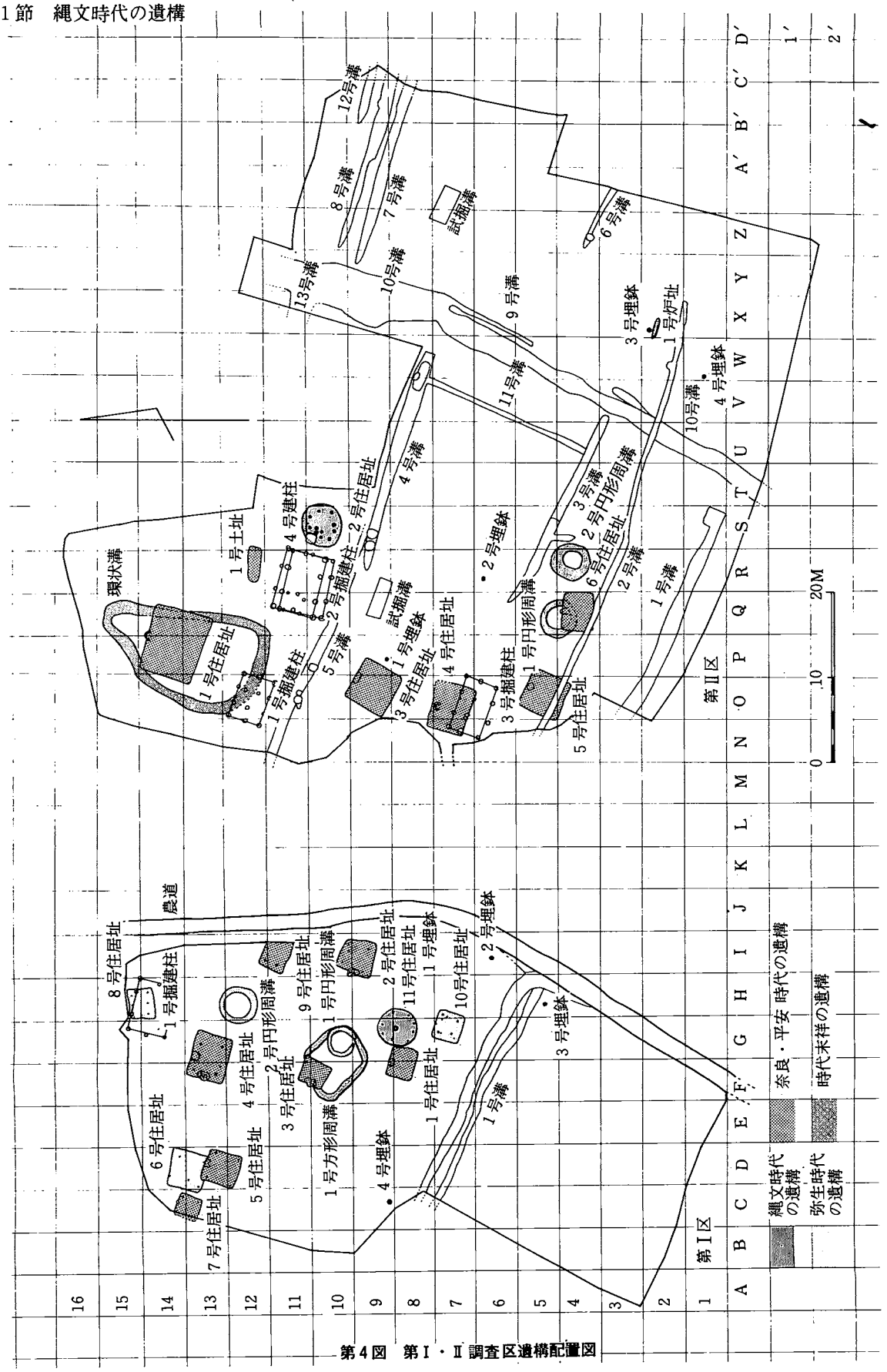
第１節　縄文時代の遺構

１．住　居　址

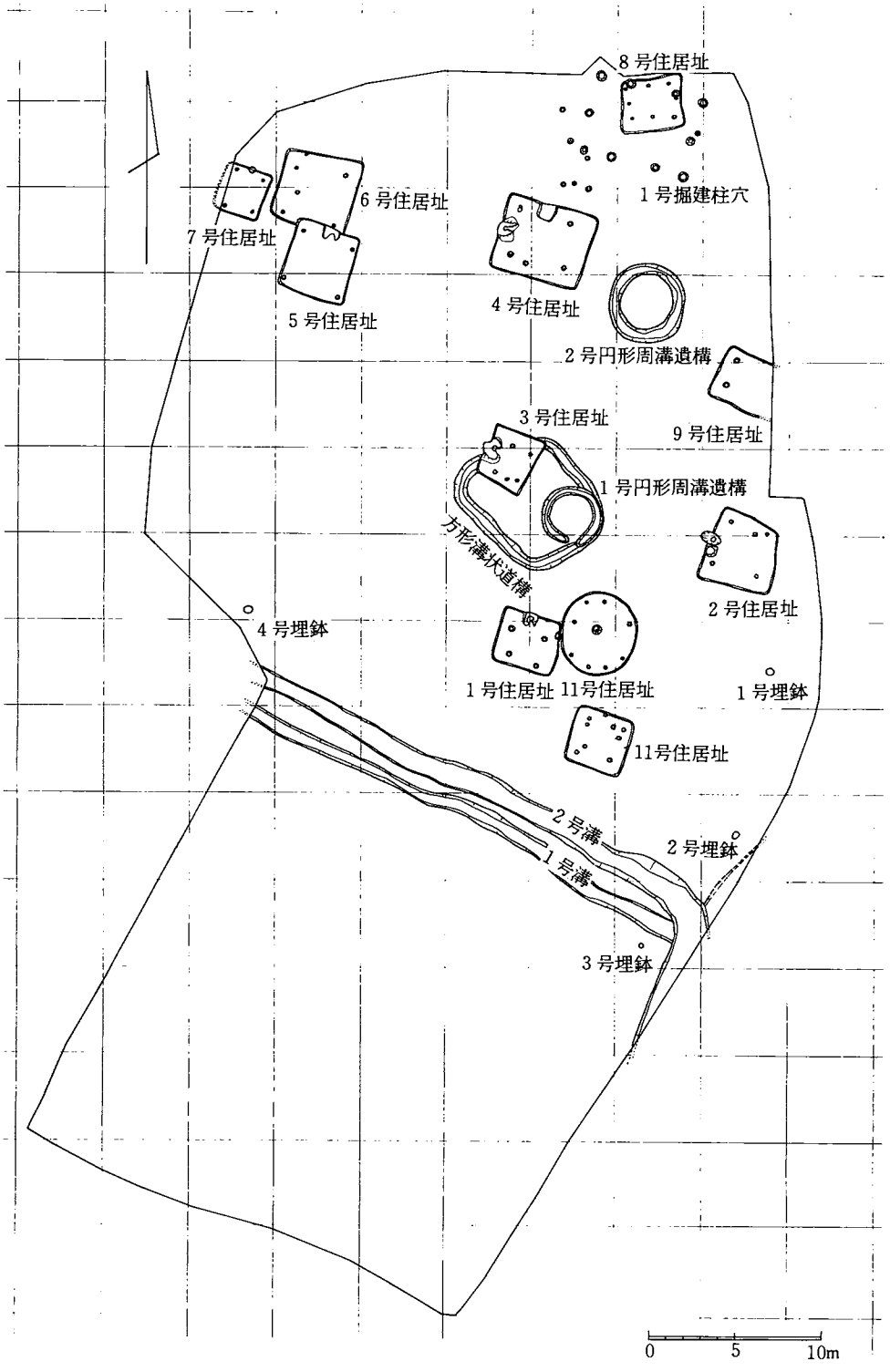
(1) 第Ⅰ—11号住居址（第７図　図版４）

本遺構は第Ⅰ区のほぼ中央部の8・9—G・Hグリッド発掘区に位置する。第Ⅰ—１号住居址と隣接し、当遺構の北側約２ｍ程先には方形溝遺構が検出されている。

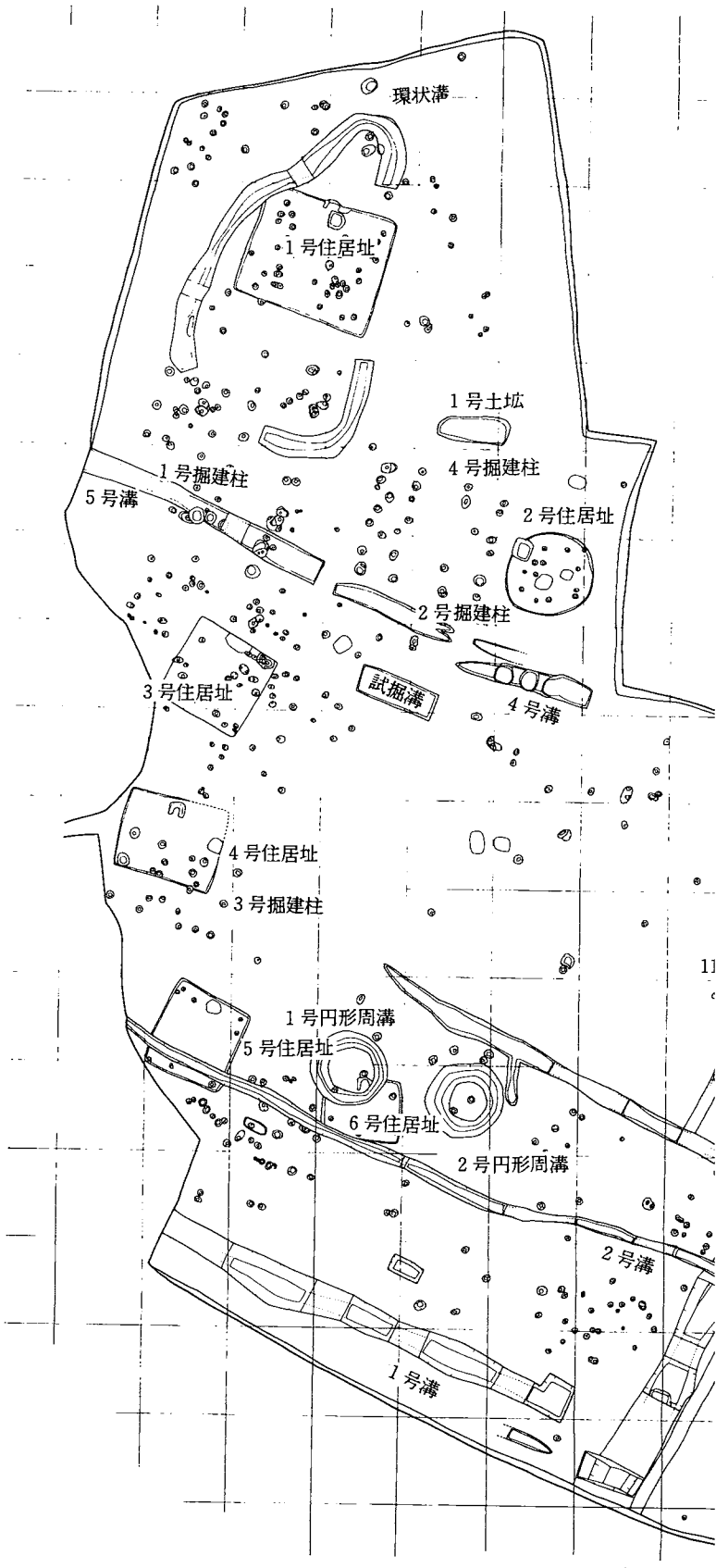
住居址の検出状況は、上層部に多量の遺物が散布した状態で確認された。規模は南北4.58m、東西4.50mでほぼ整った円形プランを呈する。壁面はやや垂直な立ち上りをなし、深さは15～20cmが残存し上面が削平されている。床面は若干の硬化面が残っている。柱穴は８個で壁ぎわに接近した位置から検出した。中央部に炉址が検出された。炉址には径20cm程の柱穴の切り込みがあり、埋土（充塡土）から観察すると平安期の掘り込みと考えられる。柱穴の規模及び形状は下の表のとおりである。



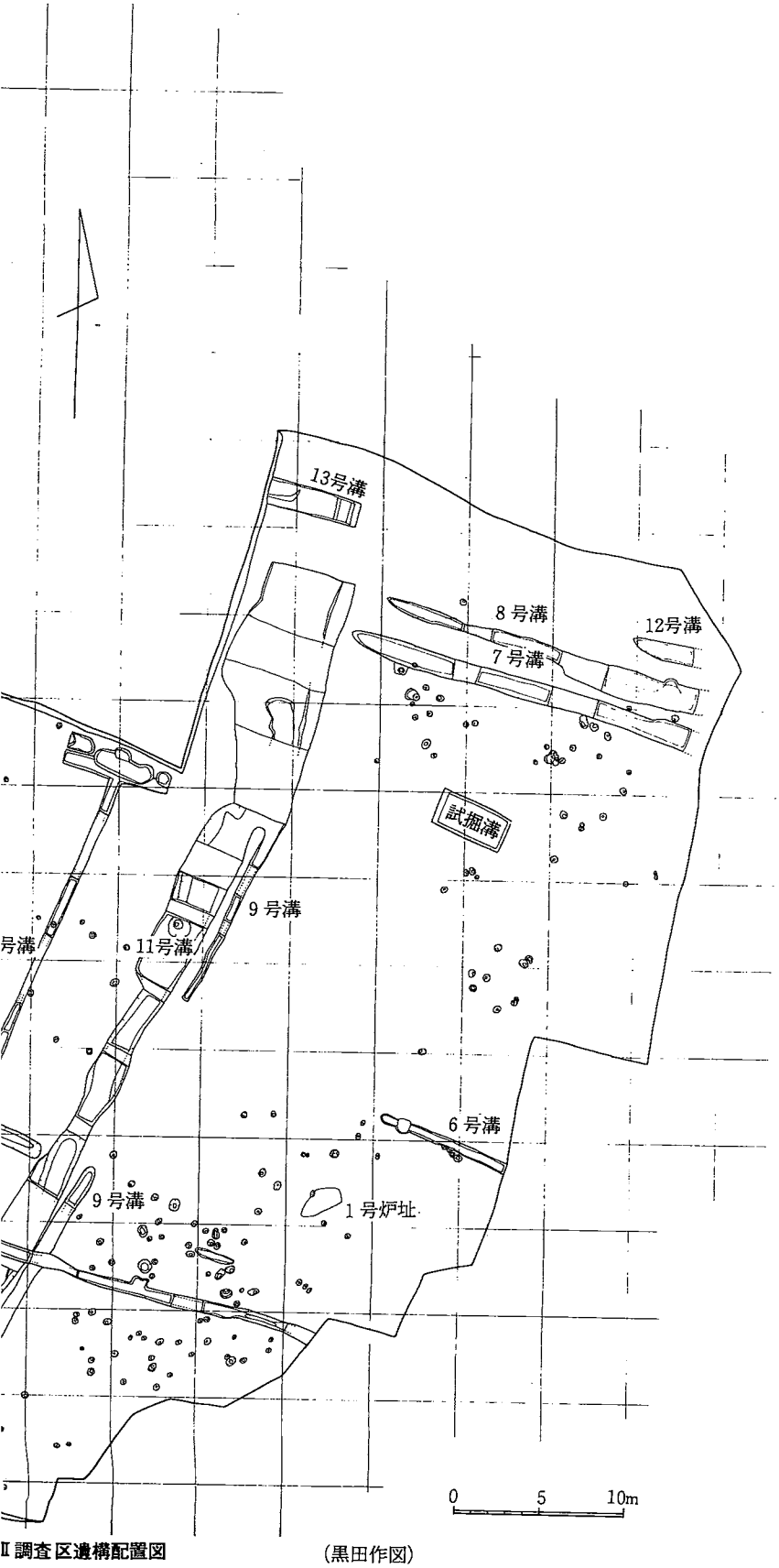
第４図　第Ⅰ・Ⅱ調査区遺構配置図



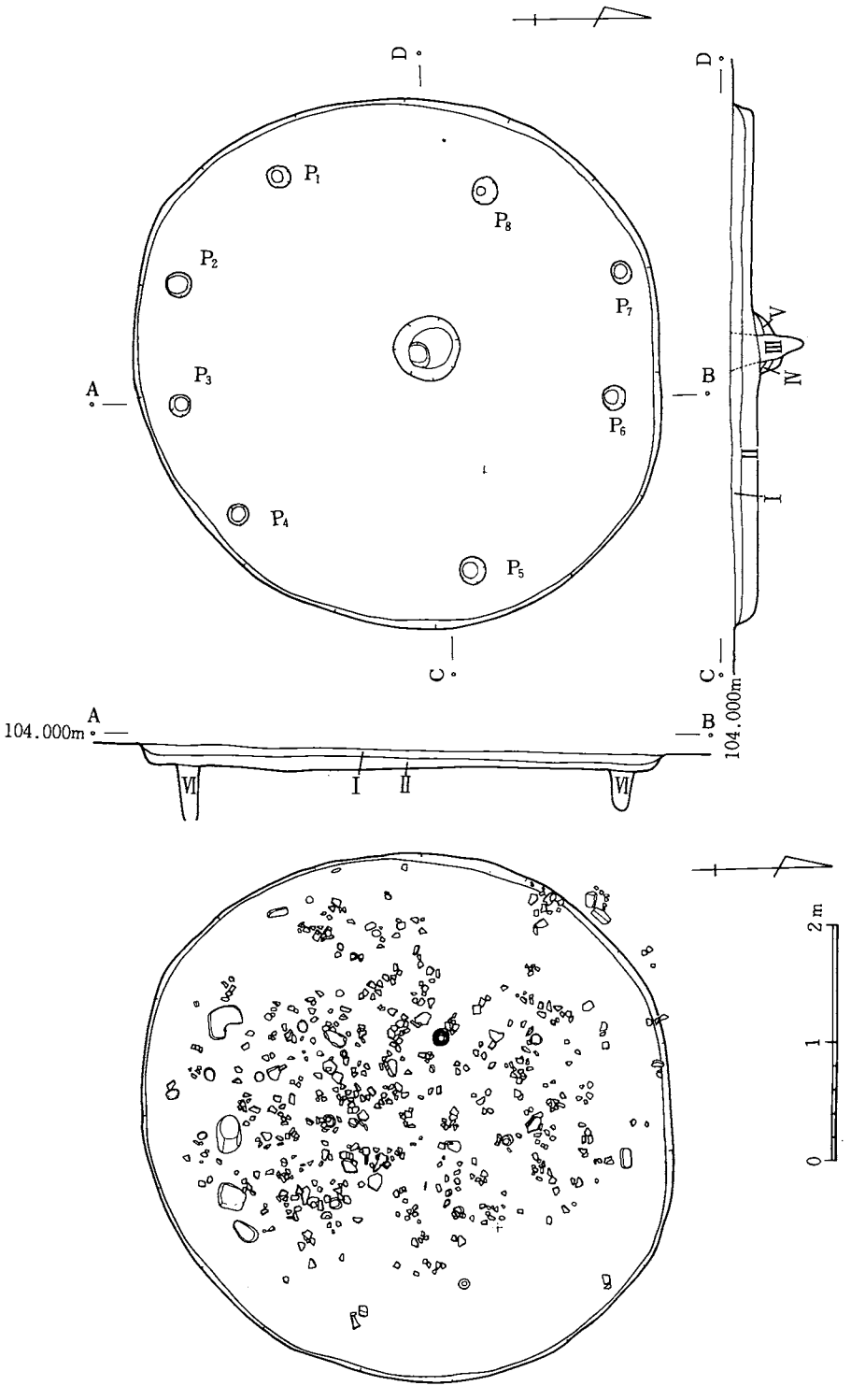
第5図　第Ⅰ調査区遺構配置図　　(黒田作図)


環状溝
1号住居址
1号土坑
1号掘建柱
4号掘建柱
5号溝
2号住居址
2号掘建柱
3号住居址
試掘溝
4号溝
4号住居址
3号掘建柱
1号円形周溝
5号住居址
6号住居址
2号円形周溝
2号溝
1号溝

第6図　第



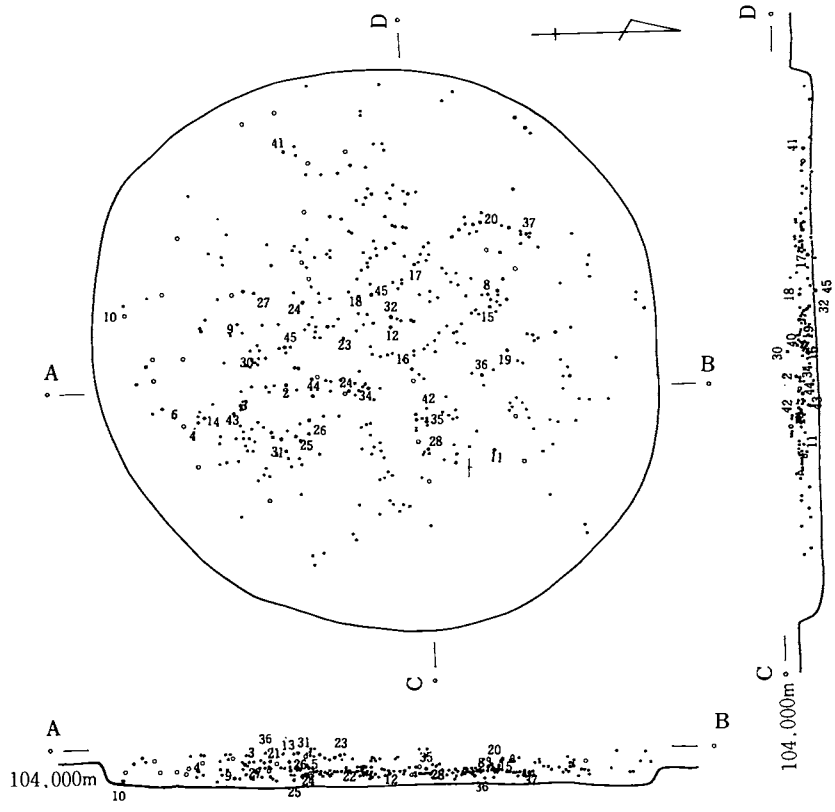
Ⅱ調査区遺構配置図　　(黒田作図)



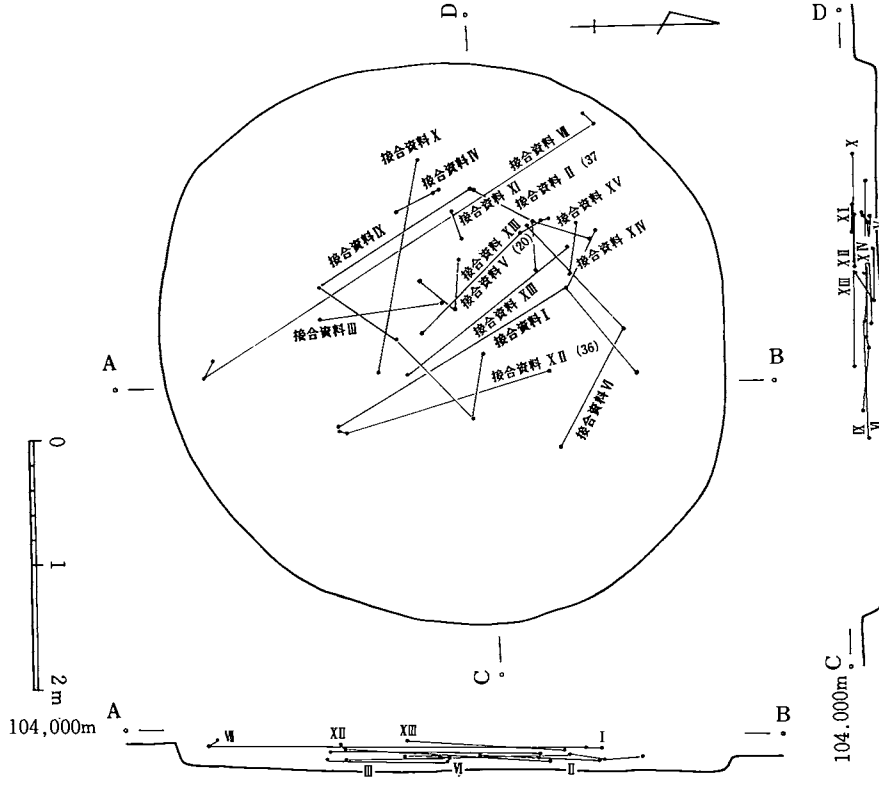
1．第Ⅰ—11号住居址実測図

2．第Ⅰ—11号住居址内遺物出土状態平面図

第7図　第Ⅰ—11号住居址遺構実測図及び遺物散布状況



3．第Ⅰ—11号住居址内遺物出土状態



4．第Ⅰ—11号住居址内遺物の接合関係

第８図　第Ⅰ—11号住居址遺構の遺物出土状態

炉址は円形をなし、東西55cm、南北59cm、深さ18cmを測る。埋土（充填土）は、Ⅰ層黒褐色（平安期）で本址の炉址の掘り込み面はⅡ層からⅣ層である。Ⅱ層は赤褐色土が全体をなし、カーボン・焼土粒子を多量に含み、Ⅲ層褐色土、Ⅳ層暗褐色土である。

本址の埋没土の堆積状態は、Ⅱ層に分かれる。Ⅰ層黄褐色土、Ⅱ層暗褐色土である。深さが20cm程が存残する。柱穴の埋土（Ⅵ層）は暗褐色土で、若干Ⅱ層より色調は明るい。

遺物の散布状態は、平面分布図（第7・8図）で観察すると、本址全面に散布し、壁面近くでは極一部に集中する。又、垂直分布図では、床面より5～15cm上面に多く散布し、床直の出土は極少である。遺物の総数は約300点を数え、内容は土器、石器、礫、土隅（1点）である。

接合資料は15例で、住居址中央部に散在する。平面分布図ではこの接合資料Ⅰ～ⅩⅩまでの

第2表　第Ⅰ—11号住居址の柱穴一覧表

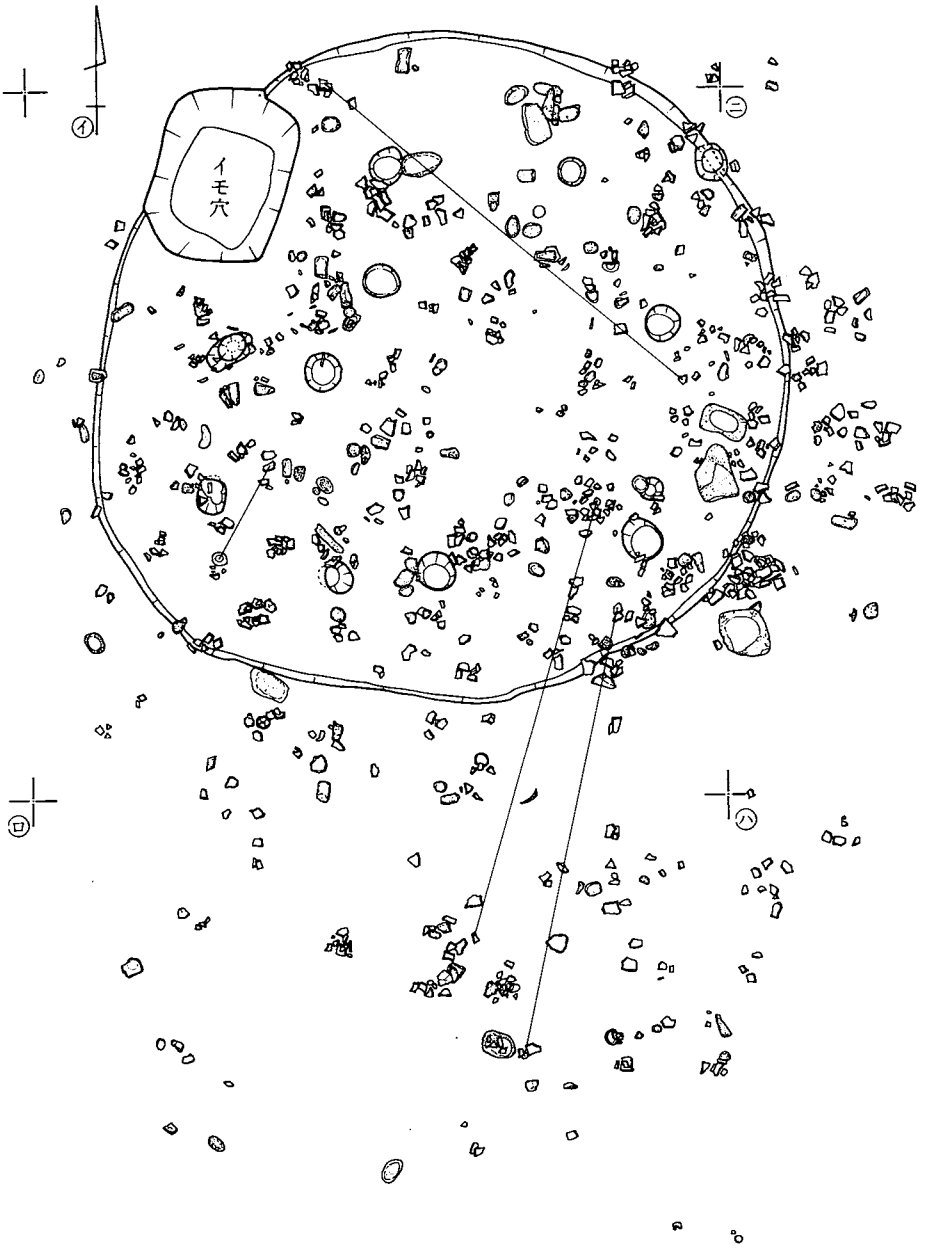
番号	平面プラン	規模（長辺×短辺×深さ）	底面プラン	規模（長辺×短辺）	備考
P 1	円形	22cm×18cm×43cm	円形	11cm×10cm	
P 2	〃	22 ×20 ×45	〃	17 ×15	
P 3	〃	18 ×18 ×47	〃	12 ×11	
P 4	〃	18 ×18 ×47	〃	13 ×12	
P 5	〃	23 ×22 ×33	〃	14 ×13	
P 6	〃	22 ×20 ×32	〃	12 ×12	
P 7	〃	20 ×16 ×30	〃	13 ×11	
P 8	〃	22 ×22 × 3	〃	7 × 7	

中で最大接合距離を持つものは、接合資料Ⅶで3.76m を測り、最小接合距離は接合資料Ⅸで26cmを測る。又、この接合資料を垂直分布図で観察すると、床面直上より4～27cm上面に散布する。接合資料Ⅴ（20）は深鉢の口縁部、接合資料Ⅵ（11）は浅鉢の口縁部で口縁に山形突起があるものである。接合資料Ⅵ（11）・Ⅶ（36）は浅鉢の底部である。他の接合資料は胴部の破片で図上復原が不可能なものである。

遺物の出土状況から推測すると第Ⅰ—11号住居址廃絶後にしかも短期間内に一括廃棄されたと考えられる。

(2)　第Ⅱ—2号住居址　（第9図　図版4）

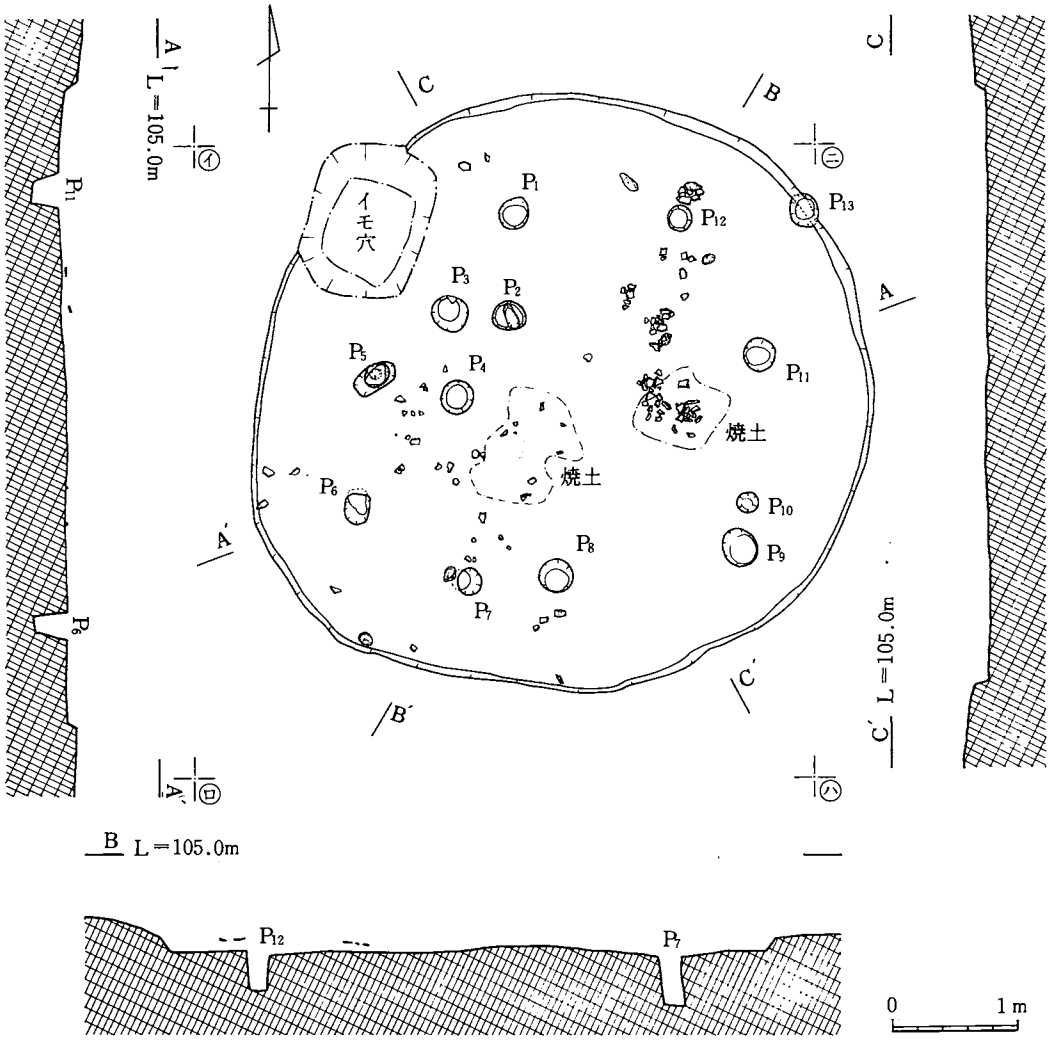
円形の竪穴式住居址である。遺構検出面より上部に足の踏み場もないほど多量の遺物（土器・石器）が出土した。遺物が多量に出土したのは、遺構が所在するS—10グリッドを中心にして、S—9・T—9・T—10グリッドにわたった。



0　1m

※図中の直線は接合関係を示す。
㋑㋺㋩㋥の４点はグリッドくい

第９図　第Ⅱ－２号住居址遺構検出前の遺物出土状態



第10図　第Ⅱ－2号住居址実測図

第3表　第Ⅱ－2号住居址の柱穴一覧表

柱穴番号		P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P8
大きさ(cm)	最大径	28	27	30	28	36	25	22	28	31	18	26	20	27
	最小径	24	22	28	26	20	20	18	26	26	16	24	20	24
	床面からの深さ	30	17	25	40	20	28	40	35	20	34	34	32	—
備考						二重の掘り方となっている				遺構に伴わない				遺構に伴わない

第Ⅱ区の発掘開始当初、遺構を切っているサツマイモの貯蔵穴(イモ穴)の壁面観察から、住居址があることを確認した。しかし、どうしても、平面形が明確でなかった。そのため、小さなサブトレンチを設定して、竪穴式住居址の壁面の位置を確認しようと試みたが、平面形を明らかにするまでには至らなかった。調査員一同の平面形についての意見は、円形と隅丸方形とに別れた。そこで、上部の遺物の出土状態を実測及び写真撮影し、遺物取り上げをした。その後、床面（硬化面）の広がりを確認しながら壁の立ちあがり部を検出することにした。その結果から、第10図に示すような円形の平面形を持つ竪穴式住居であることが、明らかになった。

平面形は円形（東西径5.0m・南北径4.7m）であるが、西側の一部が少しおしつぶされたように、歪みがある。12基の柱穴を検出したが、その内、２基は後世の柱穴であり、当遺構に伴う柱穴は10基と推定される。焼土は中央部に２ヶ所検出された。これは炉の跡と推定される。床面はほぼ平坦である。遺構検出面から床面までの深さは、0.2～0.1m である。

２．埋　　鉢（第11、12図　図版10）

埋鉢は第Ⅰ・Ⅱ区の調査区から、計８個確認された。第Ⅰ区から４個体・第Ⅱ区から４個体出土した。

第Ⅰ－１号埋鉢は８－Ⅰグリッドに位置し、掘り方は不明である。鉢はほぼ垂直に埋められている。第Ⅰ－２号埋鉢は６－Ⅰグリッドに位置し、横転して確認され掘り方は不明である。第Ⅰ－３号埋鉢は５－Ｈグリッドに位置し、西へ約30度傾き、掘り方は不明である。第Ⅰ－４号埋鉢は９－Ｃグリッドに位置し、ほぼ垂直に埋められており、掘り方の遺構の形状は円形を呈する。掘り方の規模は東西58cm、南北49cm・深さ21cmを測る。

第Ⅱ区から出土した４個の埋鉢の掘り方の平面プランはすべて円形をなす。

第Ⅱ－１号埋鉢は９－Ｐグリッドに位置し、上面が殆んど削平されていて、規模は東西30cm南北34cm、深さ７cmを測る。第Ⅱ－２号埋鉢は６－Ｒグリッドに位置し、規模は東西37cm、南北36cm、深さ18cmを測る。この第Ⅱ－２号の口縁部～胴部中位まで残存するが、胴部下半～底部にかけては穿孔により欠失する。第Ⅱ－３号埋鉢は２－Ｘグリッドに位置し、ほぼ直立して掘りこまれており、規模は東西39cm、南北40cm、深さ22cmを測る。第Ⅱ－４号埋鉢は１－Ｗグリッドに位置し、やや東側へ10度傾き、規模は東西44cm、南北39cm深さ22cmを測る。

Ⅰ・Ⅱ区出土の埋鉢と、縄文時代の住居址 との関係について考えてみる。まずⅠ区では第Ⅰ－１・２・３号埋鉢と第Ⅰ－11号住居址居住址との距離を測ると、第Ⅰ－11号住居址から第Ⅰ－１号埋鉢までの距離は８ｍで更に第Ⅰ－１号埋鉢から第Ⅰ－２号埋鉢までの間隔は10m、第Ⅰ－２号埋鉢から第Ⅰ－２号埋鉢までは８ｍとなっている。次にⅡ区では、第Ⅱ－２号住居址から、第Ⅱ－１号埋鉢までの距離は15m程の間隔を持つ。

これ等の埋鉢が埋葬施設と仮定すると、縄文時代後期においては、住居址の周辺に埋めたものと思われる。Ⅰ区の第Ⅰ―11号住居址（鳥井原期）と埋鉢までの距離は８～10m あるのに対し、Ⅱ区の第Ⅱ―２号住居址（御領期）と埋鉢との距離は15m 程であることから時代が新しくなるに従って住居址と埋鉢との距離は長くなると考えられる。

Ⅰ区―１号埋鉢(第11･95図)は口縁部から底部までの殆どが残存するが、口縁部の大半は欠損する。口縁部が内弯ぎみで最大径は胴部に位置する。底部はほぼ平底をなす。口径は39.6cm、器高は54.6cm、最大径41.9cm、底径8.0cmを測る。調整は口縁部に２本の横線を施文し、頸部は横研磨、胴部の屈曲部から底部にかけては縦方向の研磨、内面は横研磨が主体をなし、色調は黒褐色を呈する。

第Ⅰ―２号埋鉢(第11・96図)は口縁部～胴部中位までの一部を欠損するが、他は殆ど残存する。最大径は胴部上半にあり、胴部上半が強く屈曲し胴部上位から口縁部にかけて若干外弯する。底部は大旨上げ底をなす。口径34.6cm、最大径35.0cm、器高36.5cm、底径6.3cmを測る。調整は外面横研磨、内面は撫で消しと思われる。色調は淡褐色をなす。

第Ⅰ―３号埋鉢（第11・96図）は口縁部を欠損するが大半は残存する。最大径は胴部上半に位置し、30.7cmを測る。胴部から口縁部にかけては若干外弯し、底部は上げ底である。調整は外面で口縁部～胴部上半の屈曲部までは横研磨をなし胴部上半から底部にかけては縦研磨をなす。内面の口縁部から胴部屈曲部までは横研磨をなし、胴部屈曲部から底部にかけては撫で消しと思われる。色調は黒褐色（胴部下半は茶褐色)、内面は白茶褐色を呈する。

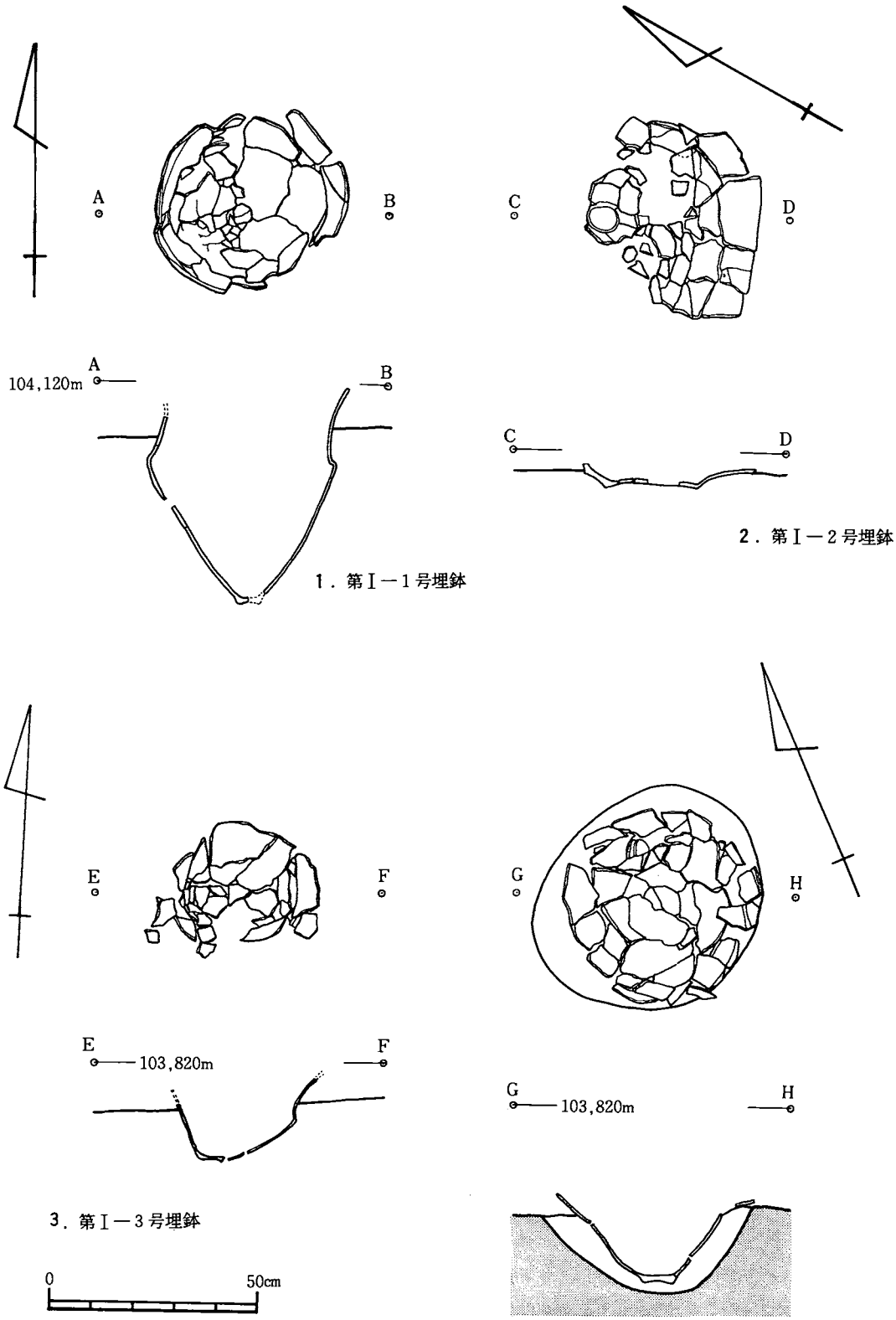
第Ⅰ―４号埋鉢(第11・97図)は口縁部を欠損するのみで殆ど残存する。胴部上位から口縁部にかけてやや外弯ぎみに開く。底部は若干上げ底をなす。調整は外面で口縁部から胴部上位にかけては縦研磨で、胴部下半から底部にかけて右斜め方向の研磨と思われる。内面は左斜めの方向研磨が施されている。色調は淡褐色をなす。

Ⅱ―１号埋鉢(第12･97図)は胴部下位から底部にかけて現存する。底径は9.3cmを測り、調整は外面磨り消し、内面横撫でを施す。色調は茶褐色をなす。

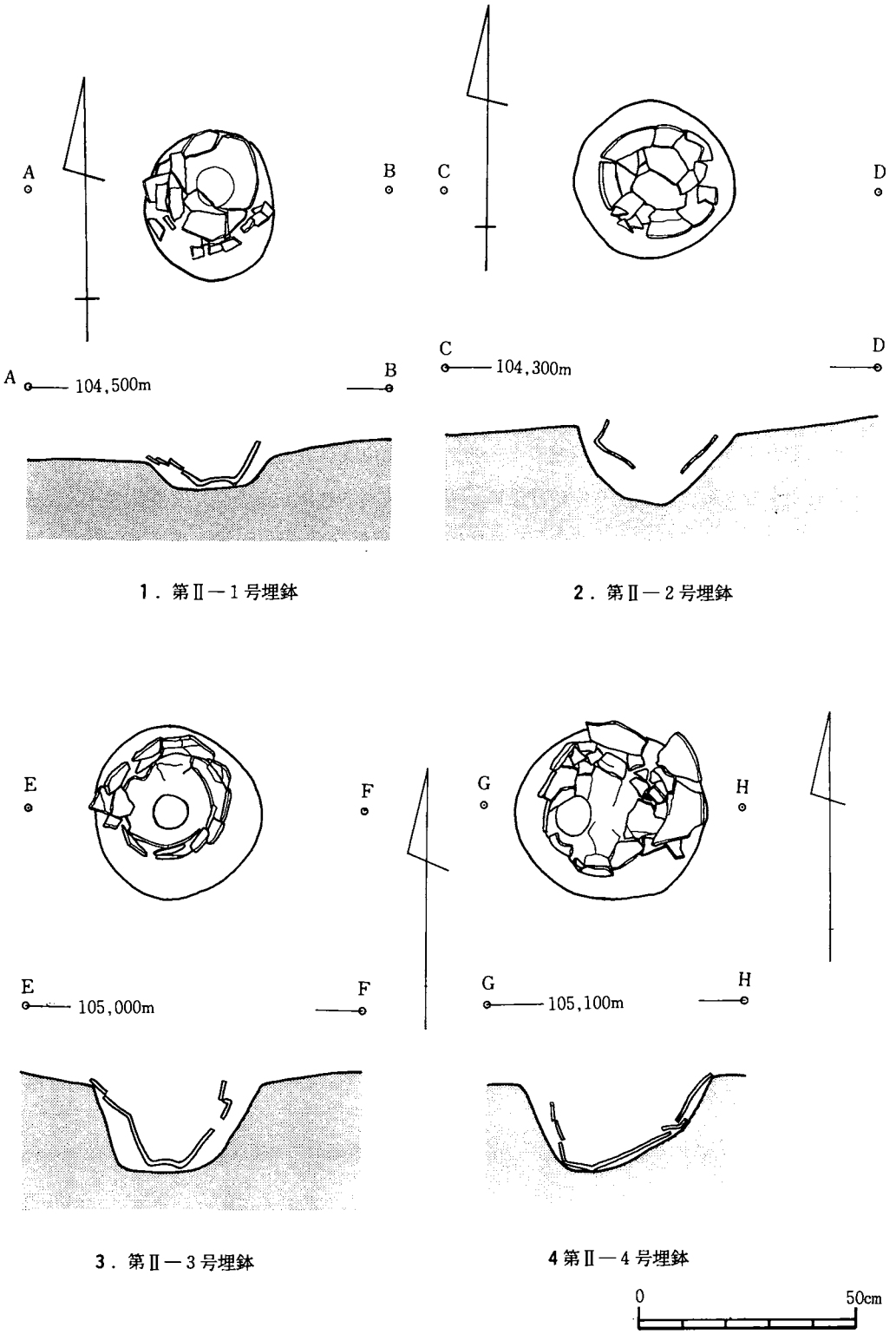
第Ⅱ―２号埋鉢(第12･97図)は口縁部から胴部下半まで現存するが、底部は穿孔したものと思われる。最大径は胴部上位で一条の横線をなし27.1cmを測る。口縁部にかけては若干外弯し、口径22.8cmを測る。調整は横研磨である。色調は黒褐色を呈する。

第Ⅱ―３号埋鉢(第12・98図)は口縁部が欠損する。最大径（29.1cm）の胴部上位はやや緩く屈曲し、口縁部へ外反する。底部は上げ底をなし底径6.6cmを測る。調整は外面で縦方向の研磨が主体であるが、胴部中位には横研磨を施す。内面は横研磨である。色調は暗褐色を呈する。

第Ⅱ―４号埋鉢(第12・98図)は殆ど完形で、胴部上位から口縁部にかけては外反ぎみで最大径は胴部上位にある。胴部は緩く屈曲し、底部は平底をなす。計測値は口径31.0cm、最大径29



第11図 第Ⅰ－1～4号埋鉢検出状況



1．第Ⅱ－1号埋鉢

2．第Ⅱ－2号埋鉢

3．第Ⅱ－3号埋鉢

4 第Ⅱ－4号埋鉢

第12図 第Ⅱ－1～4号埋鉢検出状況

.5cm、底径7.6cmを測る。調整は外面で縦研磨、内面では口縁部～胴部屈曲部まで横研磨、胴部屈曲部から底部にかけては横撫でが施されている。色調は淡褐色をなし、外面の口縁部～腹部上位にかけて煤が付着する。

３．方形溝遺構（第13図）

第Ⅰ－１号円形周溝および第Ⅰ－３号住居址に切られた状態で、方形溝遺構を検出した。切り合った三基の遺構の埋土は、それぞれ土色が異なることから、これ等の遺構の成立時期に時間的差異が有ることは明らかである。

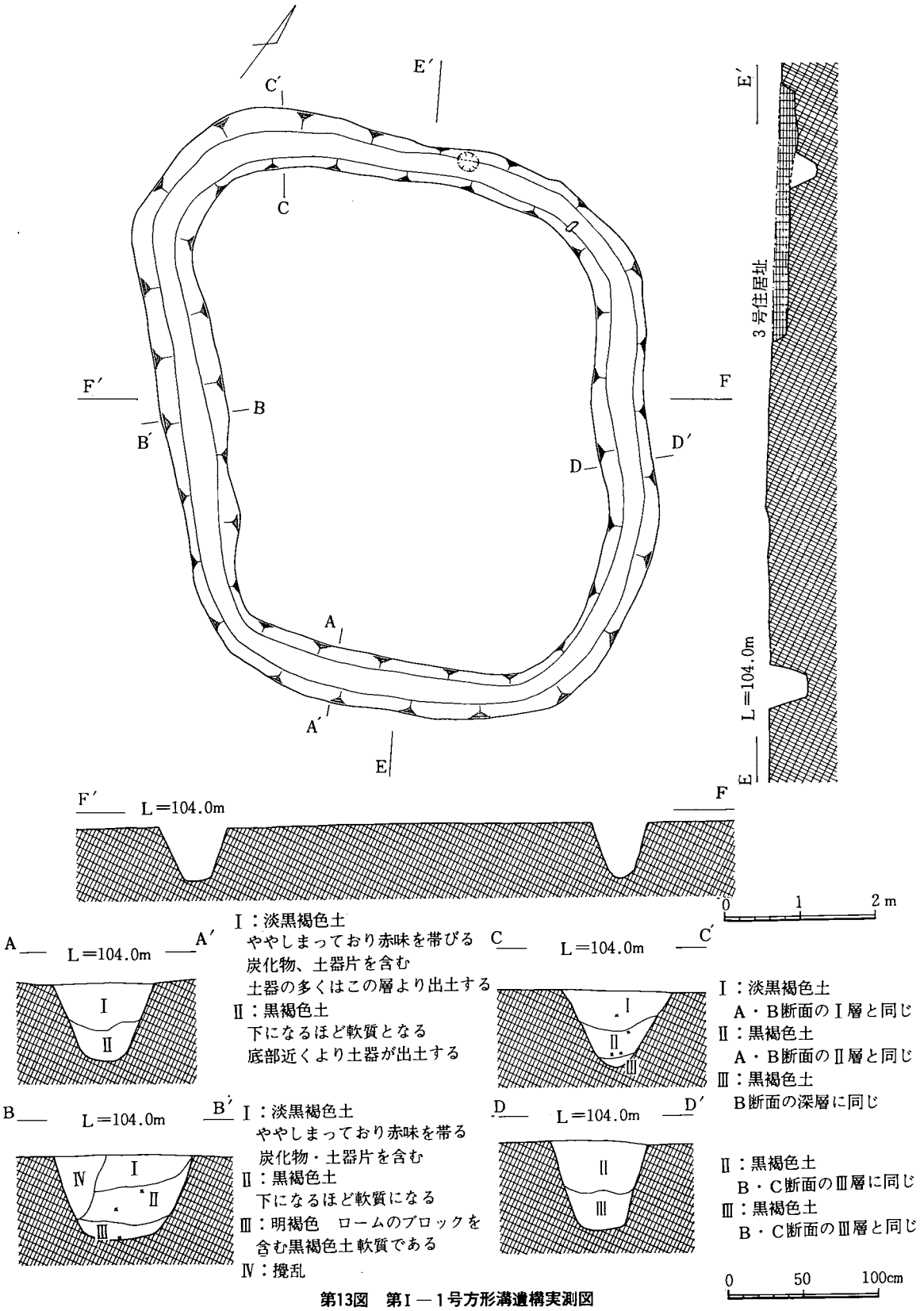
第Ⅰ－１号円形溝遺構の埋土の土色は第Ⅰ－10号住居址の埋土に、第Ⅰ－３号住居址の埋土はカマド付の他の竪穴式住居址の埋土に類似する。第Ⅰ－１号方形溝遺構の埋土は第Ⅰ－11号住居址の埋土と類似する。方形溝遺構の埋土は淡黒褐色土であり、基盤の土であるニガシロ状の土が風化したような土である。基盤の土と埋土との土色がきわめて類似するが、埋土の土の方が水を良く含むため、雨上がりの数日後に、遺構が検出された。このような遺構の検出過程は埋土の土色がきわめて類似する第Ⅰ－11号住居址（円形竪穴式住居址）においても経験した。

方形溝の遺構検出面での幅は0.5～0.9m、遺構検出面からの深さは0.3～0.7m を測る。溝の断面形はほぼ「U」字形を呈し、底面は少し波打っている。全体としては、ＢＢ'断面を実測した附近が一番深い。平面の東西外幅6.5m(内幅4.9m)、西北外幅7.4m（外幅6.3m）を測る。

溝の埋土は、三つの層に区分できる。上層より、各層の特色を以下述べる。

第１層の土色は、淡褐色を呈し、下層（第Ⅱ層）に比較して、やや硬くしまった土で、赤味を帯びる。層中に炭化物及び土器片（黒色系磨研土器）を包含する。当遺構より出土した土器の多くは、Ⅰ層より出土した。第Ⅱ層の土色は黒褐色を呈し、下方になるほど軟質となる。層の最下附近より縄文土器片（黒色磨研系）が出土する。第Ⅲ層は明褐色のロームのブロックを含む黒褐色土であり、軟質である。環状にめぐる溝の内側および外側周辺から、当遺構に伴うと推定される遺構は、検出されなかった。このことより、方形の環状にめぐる溝のみからなると推定される。当遺構の使用目的は何か、明らかではない。

このことは、円形周溝遺構についても同様である。



第13図　第Ⅰ－1号方形溝遺構実測図

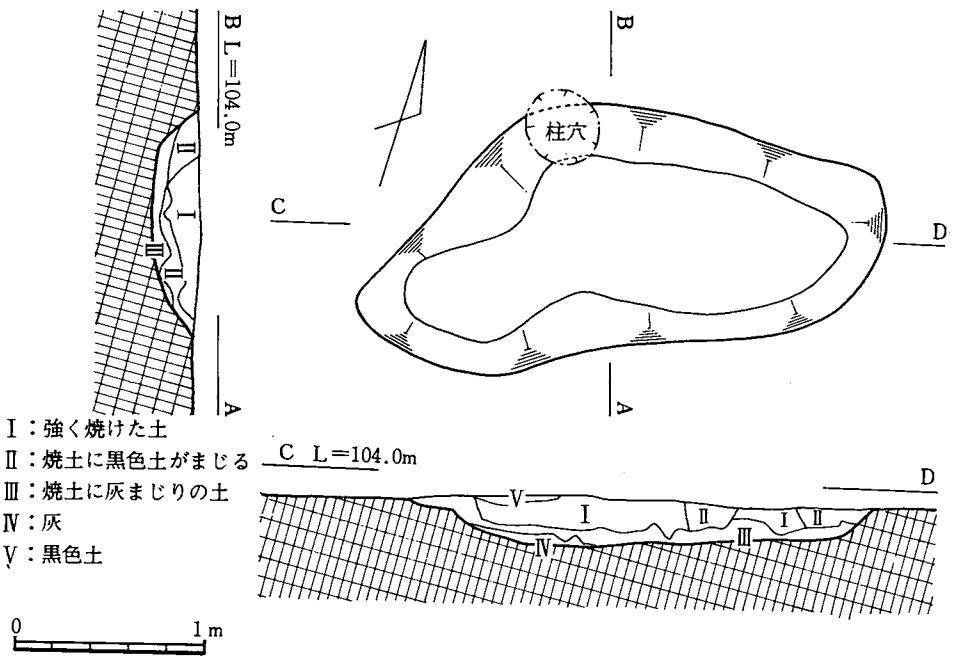
４．屋外炉址（第14図）

第Ⅱ区の東側隅近く（Ｙ－３グリッド）から検出した。平面形は、歪んだ楕円形状を呈し、断面は浅鉢状を呈する。遺構の一部は後世の柱穴（平安時代？）によって、切られている。

炉の長径2.55m・短径1.26m・遺構検出面から炉の底面までの深さ0.25m を測る。

遺構内の焼土は濃い赤燈色であり、強い火力を受けたと思われる。焼土中からは、赤変した縄文土器の小片（御領式土器と思われる）が出土した。

炉の検出状態及び焼土中から出土した土器片から、当遺構は、第Ⅰ・Ⅱ区で検出した土器群の示す時代の中で後半の時期の屋外炉と推定される。



第14図　第Ⅱ－１号屋外炉（Ｙ－３グリッド）

5．土器・石器群

第1区は非常に良く手入れの行きとどいた茶園であった。この茶の木を排除する時、多くの縄文式土器片及び石器が出土した。これ等の遺物は、耕作土に包含された遺物と耕作土の下の包含層に包含されていた遺物の一部であった。

耕作土（第Ⅰ層）の下の縄文時代の遺物包含層を第Ⅱ層と称することにした。第Ⅱ層の下の土は、一般に「ニガシロ」と呼ばれる土である。この土の上面は風化した黒色の土であり、硬いニガシロと第Ⅱ層との間層の状態を呈するので第Ⅲ層と称した。

各時代の遺構は、第Ⅱ層からニガシロ層を切るような形で検出された。

第Ⅰ区における遺物の広がりは、中央部の溝（第1・2号溝遺構）より北側は極度に密であり、南側はきわめて粗であり、南端部のグリッドの中には遺物が出土しないグリッドもある。

遺物の出土が極めて多く、しかも密であるため、限られた時間内で、遺物の取り上げ作業を進めるため、1つのグリッド（5m×5m）を25等分した方眼（1m×1m）をつくり、その中の遺物を取り上げた。又、各方眼には、北東の隅から南方へ番号を付し、西南の隅の方眼に「○○グリッドの25」の番号を付けた。

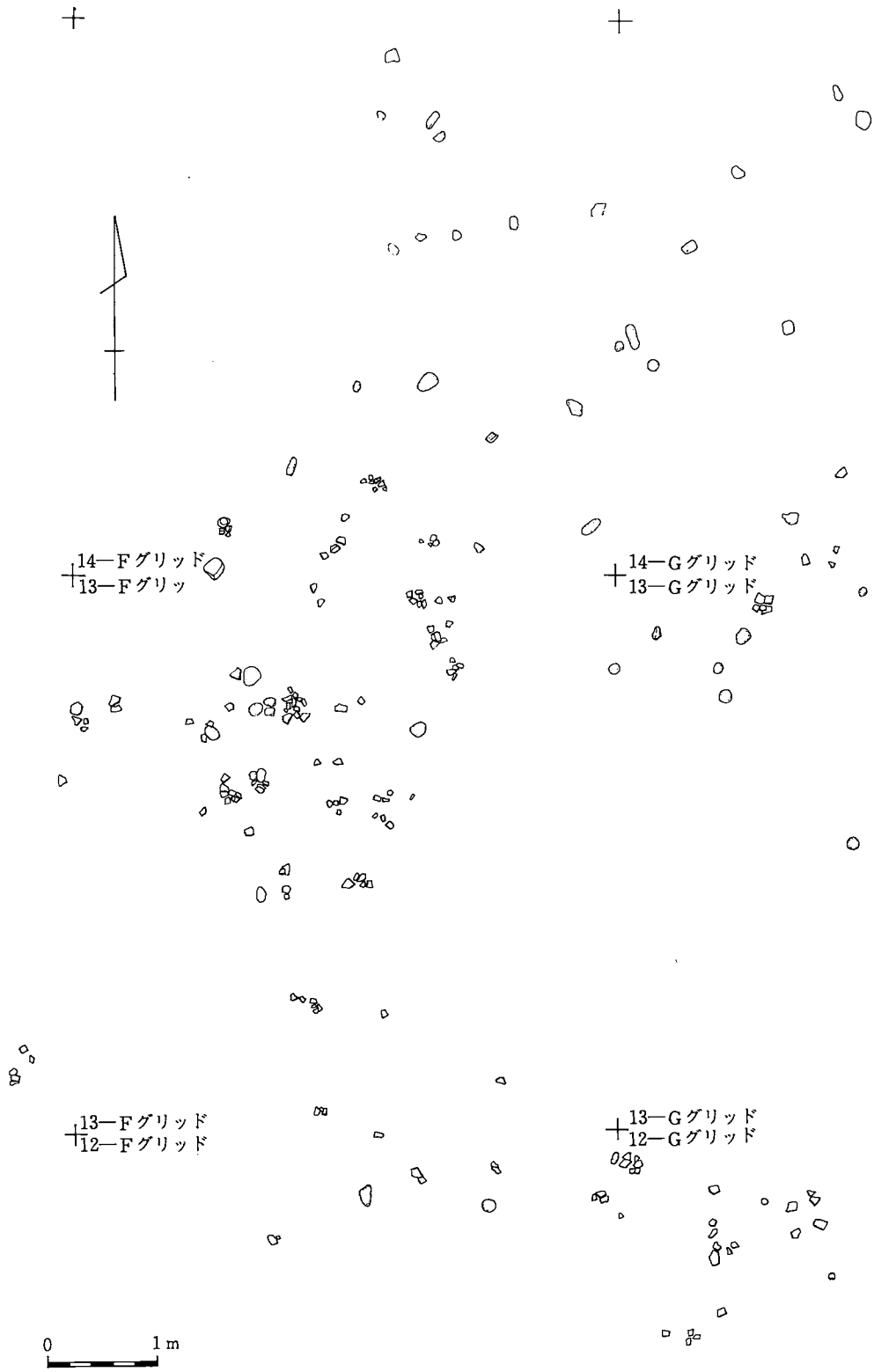
各方眼ごとに取り上げた土器を形式分類し、その密度から縄文土器の平面的広がりを図示したのが、第70図である。石器も又、土器と伴に混って出土したので、同様の広がりを示した。これ等の遺物の平面的広がりは、正に、貝塚の貝が消失した状態を推測させるような様子であった。概観した広がりは、南西側を向いた馬蹄形状を示す様子であることから、調査員の中には、貝塚をイメージしながら「ごみ山」・「貝のない貝塚」・「竪果塚」などと称していた。

包含層の厚さは20数センチメートルであり、層位を別けることが出来るような土色の差異はなかった。そのため、最初に取り上げた遺物に第Ⅱ層上部・後に取り上げた遺物に第Ⅱ層下部とラベルに記入した。

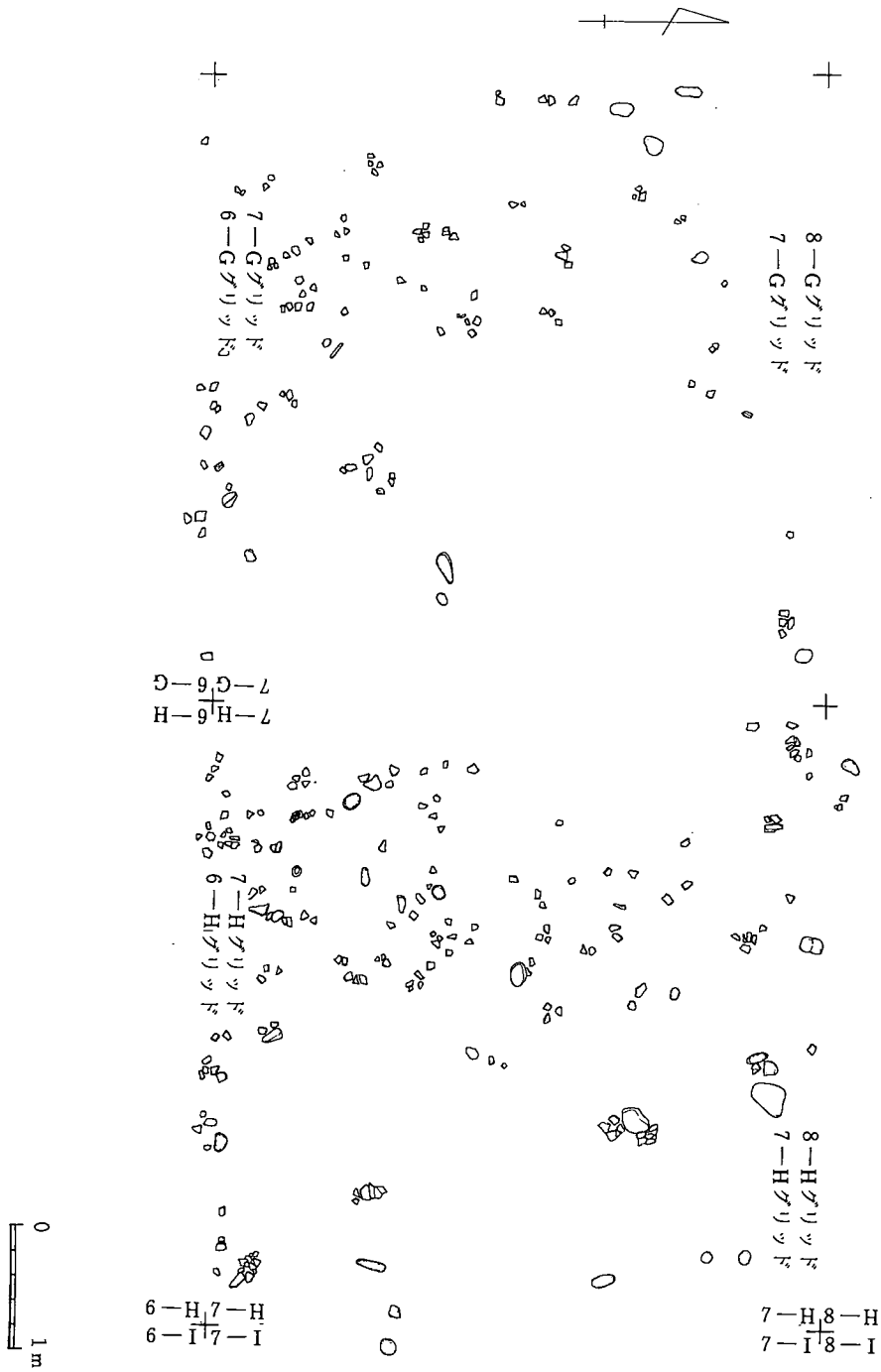
第Ⅱ区においては、第Ⅱ－2号住居址と第Ⅱ－2号円形周溝遺構とを結ぶ線より西側から多くの縄文時代の遺物を検出した。しかし、それ等の大部分は、第Ⅱ－2号住居址・第Ⅱ－1号円形周溝遺構と第Ⅱ－2号円形周溝遺構から出土した遺物である。第Ⅰ区で検出した一面に広がる遺物包含層は、第Ⅱ区までは広がっていなかった。

第Ⅰ区・Ⅱ区出土の縄文土器の形式分類から見ると、「概括的には、西側出土の土器が古く、東側に行くに従って新しい時期の土器が出土すると云える。」との結論が、調査員一同の意見である。

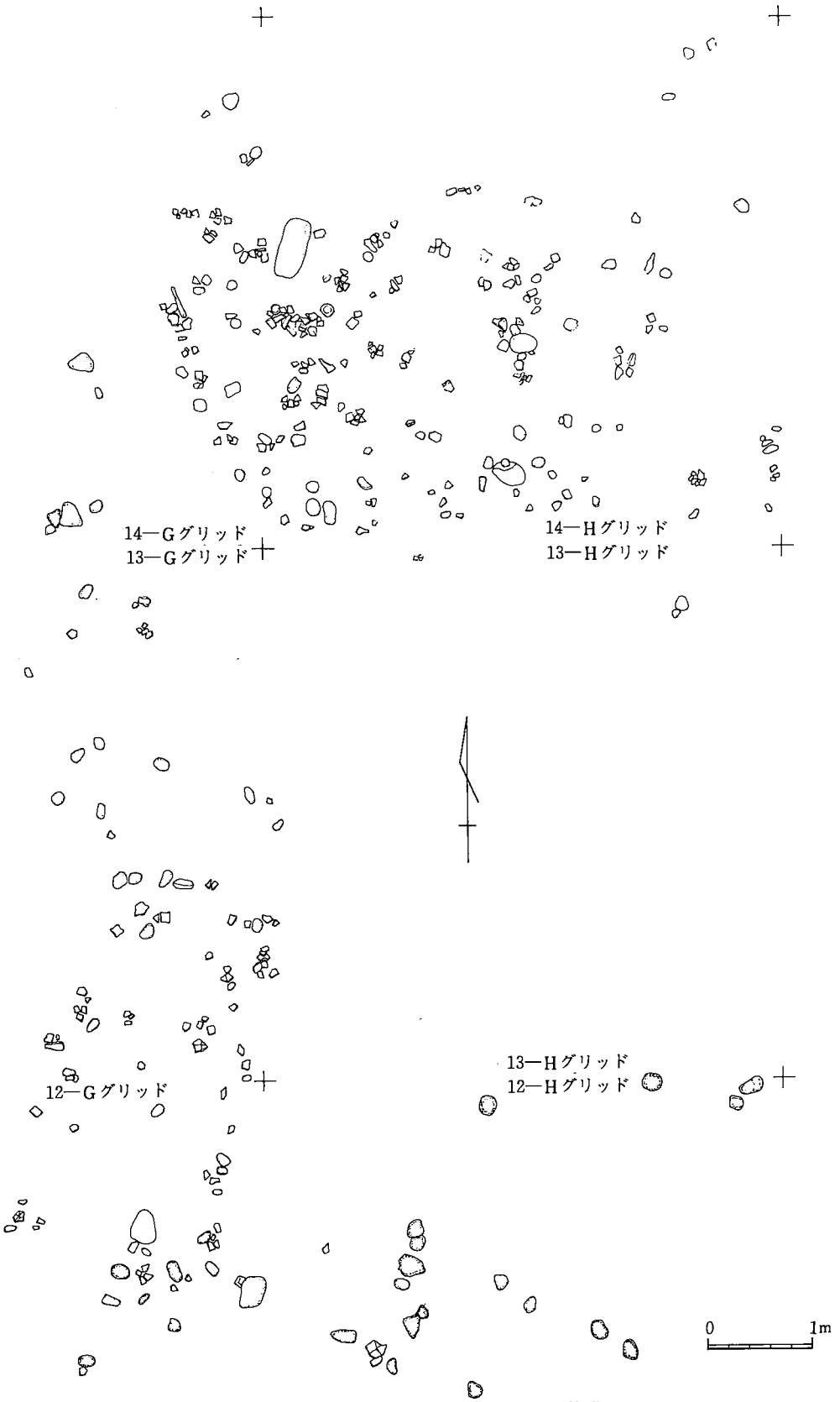
第15図　Ⅰ区11—D、12—C・Dグリッド遺物散布状況



第16図　第Ⅰ区ＦＧグリッド列遺物出土状態



第17図　Ⅰ区７—Ｇ・Ｈグリッド遺物散布状況



第18図　第Ⅰ区G・Hグリッド列遺物出土状態

第19図　Ｉ区９・10—Ｉグリッド遺物散布状況

6．円形周溝遺構

(1)　第Ⅱ－1号円形周溝遺構（第20図）

当遺構は第Ⅱ－6号住居址（カマド付竪穴住居址）によって、南側の3分の1（溝の上部のみ）が切れ、その外に、柱穴群（平安時代？性格不明）とも切り合う。

周構の南北の外径4.25m・南北の内径2.54m 東西の外径4.45m・東西の内径2.71m・最大の外径4.61m・最大の内径3.05m を測る。これ等の測定値から、外径4.4m・内径2.7m のドーナツ状に溝（幅1.4m）が廻る遺構である。

溝の立ち上がりは緩やか（30℃～40°）である。底面は平垣な部分と円弧を描く部分があることから、断面形は逆台形又は緩やかな「U」字形となる。

埋土は、基盤の黒色土（ニガシロ？）の風化したような土で、水分を含むと色が濃くなり、基盤の色とくっきりと色調の差異が認められる。埋土中および溝の底面から、黒色磨研の土器片・石器・礫が多量に検出された。また、周辺部にも周溝内より検出した土器と類似の土器片が多く出土した。

遺構は縄文土器包含層まで下げた状態で検出（上部層は耕作土層であり、重機により排除）しており、遺構内の埋土および遺物から伴断すると、当遺構の年代は遺構内より検出した土器の示す年代と同じと思われる。

(2)　第Ⅱ－2号円形周溝遺構（第20図）

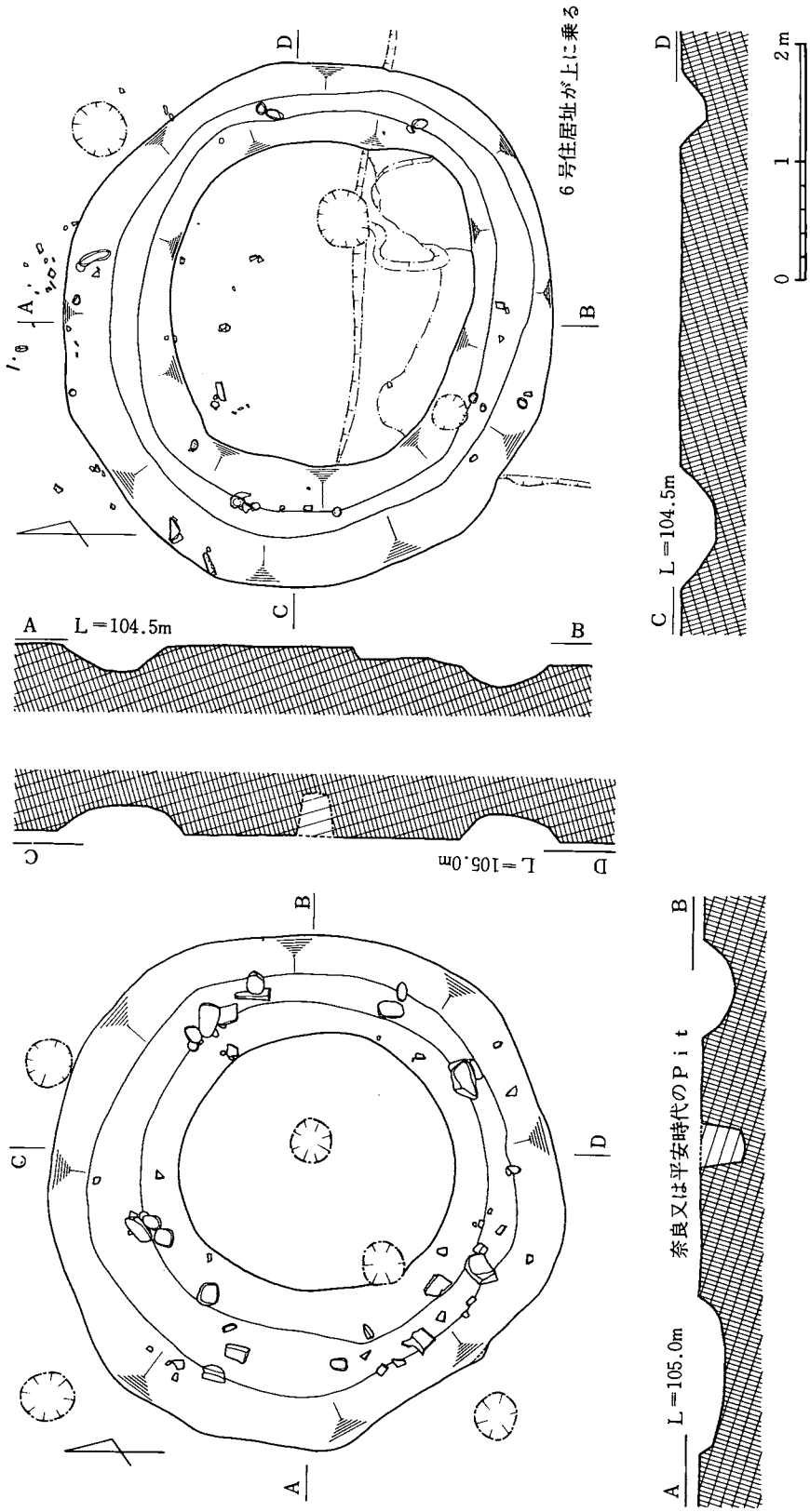
当遺構は第Ⅱ－1号円形周溝遺構の東側2m 隔れた位置から検出した。遺構の検出過程も第Ⅱ－1号と極めて類似しており、相前後して遺構を確認した。

遺構は柱穴群（平安時代？・性格不明）と重復しているが、幸にも、さほどの攪乱はない。

周構の南北の外径4.37m・南北の内径2.38m・東西の外径4.40m・東西の内径2.21m・最大の外径4.52m・最大の内径2.42m を測る。図より解るように、溝の幅が場所によって異なっており、同心円を描くように溝は廻ってはいない。しかし、平均的に見ると、上記の測定値から外径4.4m・内径2.3m・溝の幅1.1m の円形周溝遺構である。周溝の断面は、「U」字形と言うより、円弧を描くような緩かな立ち上がり（30°～45°）である。

埋土中および溝の底面から、黒色磨研の土器片・石器・礫が多量に出土した。遺溝の周辺からの遺物の出土は多くなかった。

第Ⅱ－1号円形周溝遺構と比較すると、溝の幅にはいくぶんの差異は認められるが埋土の土色・遺物の出土状態・遺物の種類および年代は、きわめて類似する。



1．第Ⅱ－１号円形溝遺構実測図

2．第Ⅱ－２号円形溝遺構実測図

第20図　第Ⅱ区１・２号円形周溝遺構実測図

第４表　縄文時代の遺構一覧表

遺　構　名	検出した調査区	遺構図(挿図番号)	主な縄文土器(挿図番号)
第Ⅰ—11号住居址	第　Ⅰ　区	第７・８図	第87～89図
第Ⅱ—２号住居址	第　Ⅱ　区	第９・10図	第90～92図
埋　鉢	第Ⅰ・Ⅱ区	第11・12図	第95～98図
第Ⅰ—１号方形溝遺構	第　Ⅰ　区	第13図	第99～101図
第Ⅱ—１号屋作炉址	第　Ⅱ　区	第14図	
第Ⅰ・Ⅱ区の土器・石器群	第Ⅰ・Ⅱ区	第15～19図・第70図	第71～85図
第Ⅱ—１号円形周溝遺構	第　Ⅱ　区	第20図	第93図
第Ⅱ—２号円形周溝遺構	第　Ⅱ　区	第20図	第94図

第２節　弥生時代の遺構

１.円形周溝遺構

(1)　第Ⅰ－１号円形周溝遺構（第21図）

当遺構は第Ⅰ—10号住居址の北側10m の位置にある。また、この遺構の北側10m の位置に第Ⅰ－２号円形周溝遺構が検出された。当遺構は周溝であるが、他の３基と異なり、南側に１ヶ所陸橋（幅0.45m）を持ち、溝が切れる。周溝のＡＢ方向（東北東から西南西）の外径3.50m・最大の内径2.61m を測る。これ等の測定値から、外径3.5m・内径2.5m のドーナツ状に廻る溝（幅0.5m）で、南側に0.4m の陸橋部を持つ遺構である。遺構検出面からの溝の深さは浅く、0.2～0.1m である。溝の立ち上がりは緩やかであり、断面の形は底面が円弧を描く。

遺構検出した後、南西側の溝上に、だ円形（長径0.6m・短径0.5m）の焼土が乗っていた。しかも、その焼け方は、溝の埋土まで達していた。このことから、当遺構は、この焼土より古い遺構であることは明らかである。焼土の年代を明らかにする遺物は検出されなかったが、遺構検出作業の過程から推測すると、第Ⅰ区から検出したカマド付住居址とほぼ同時代に比定されると考えられる。

周溝の埋土および溝底面上から、遺物は検出されなかった。しかし、埋土の土色が第Ⅰ—10号住居址（弥生時代後期）の埋土ときわめて類似するので、弥生時代の遺構と推定される。

(2)　第Ⅰ－２号円形周溝遺構（第21図）

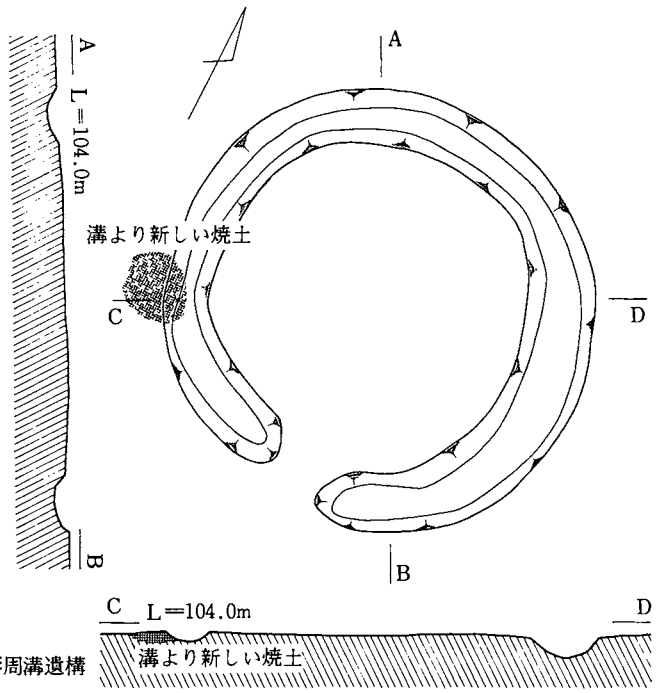
遺構の位置は先に述べたように、第Ⅰ－１号円形周溝遺構の北側10m の位置にある。

遺構の形状はドーナツ状を呈し、形が良く整っている。遺構の上部は、第Ⅰ－１号円形周溝遺構と同様に、削平されていると思われる。

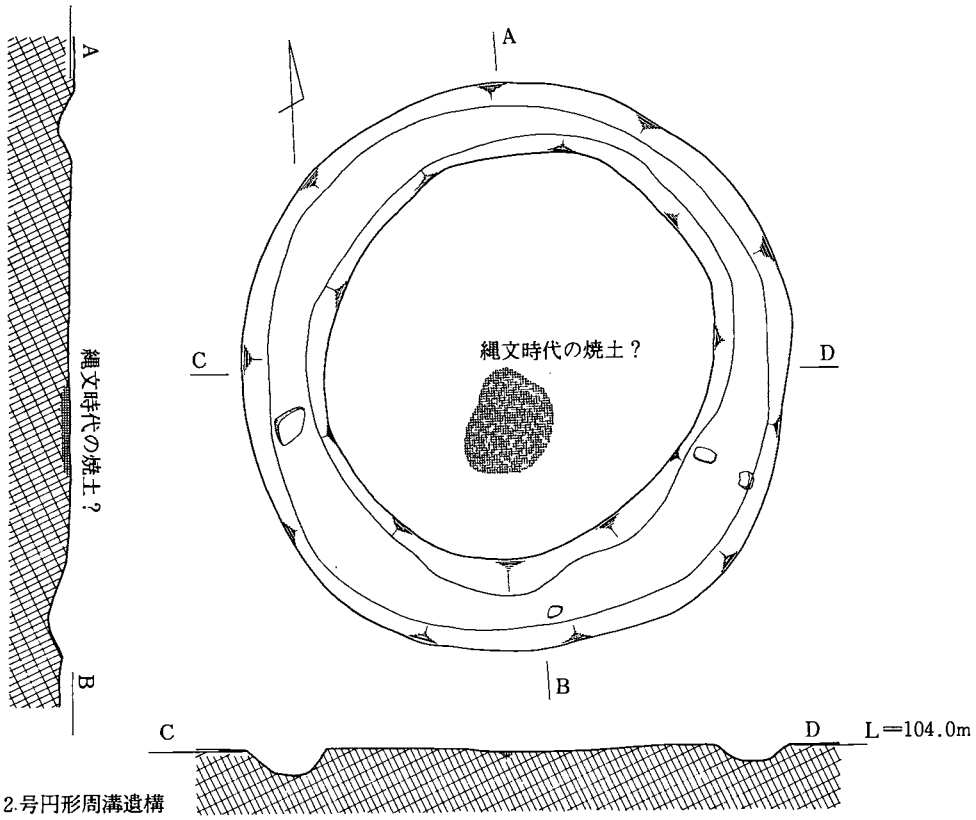
周溝のＡＢ方向（ほぼ南北）の外径4.49m 内径3.17m、ＣＤ方向（ほぼ東西）の外径4.41m・内径3.13m、最大の外径4.55m・最大の内径3.30m を測る。これ等の測定値から、外径4.5m・内径3.2m のドーナツ状に廻る溝（幅0.4m）の遺構である。遺構検出面からの溝の深さは浅く、0.2m 未満である。溝の立ち上りは緩やかであり、断面の形は上方が大きく開いた「U」字形・場所によっては「V」字形に近い「U」字形を呈する。

遺構の中央部に焼土（0.7m ×0.8m）が検出された。焼土中からは、擂石と縄文晩期の土器片が出土した。このことから、この焼土は、第Ⅰ区から検出した一連の土器群と時代を同じにするものと判断される。

周溝の埋土中および溝底面から、石および縄文晩期の土器片が出土した。しかし、埋土の土



1、第Ⅰ－1号円形周溝遺構



2、第Ⅰ－2号円形周溝遺構

0　1　2m

第21図　第Ⅰ区1・2号円形周溝遺構実測図

色は第Ⅰ・Ⅱ区検出の縄文時代の遺構と類似しないので、縄文時代の遺構とは考えられない。

埋土の土色が最も類似したのは、第Ⅰ－１号円形周溝遺構及び第Ⅰ－10号住居址の埋土である。このことから、当遺構は弥生時代の遺構と推定される。

２．住 居 址

(1)　Ⅰ－６号住居址（第22図）

先にも述べたように、第Ⅰ－５号住居址遺構によって当遺構の南側の一部が切られている。平面形は、ほぼ方形であるが、西側の壁の長さが短かいために、いくぶんか歪んでいる。各壁の長さを北側壁から右廻りに記すと、4.4m・4.5m（推定）・4.4m（推定）・4.1m である。

柱穴は５ヶ所（P_5・P_6・P_7・P_8・P_9）が検出された。桁および梁を支える４隅の柱は、柱穴P_5・P_6・P_8・P_9に建つと推定される。５基の柱穴の直径は0.20～0.25m、床面からの深さは0.17～0.36m である。

第22図のＥＥ′（P_5P_7・P_6P_8のほぼ中央を通る）を主軸に取った場合、主軸の方向は磁北に対して東に12°ふれる。

遺構検出面から床面までの深さは0.2m である。床面の高さは、切り合った第Ⅰ－５号住居址の高さと、ほぼ同じであり、完掘した状態では、相互の切り合いの前後はわからなくなった。

床面の硬化はさほど進んでいず、そのため、発掘作業開始直後に床の一部を掘り抜いてしまった。しかし、埋土の土層断面のようす・埋土中に含まれる遺物および床面上に散布する遺物（土器片・礫）によって、床面を確認することができた。

埋土および床面上からの出土遺物としては、弥生時代後期の土器（第105図）の破片と礫がある。脚付きのカメの底部は、当遺跡の年代を決定する上で、特に注目に値する。

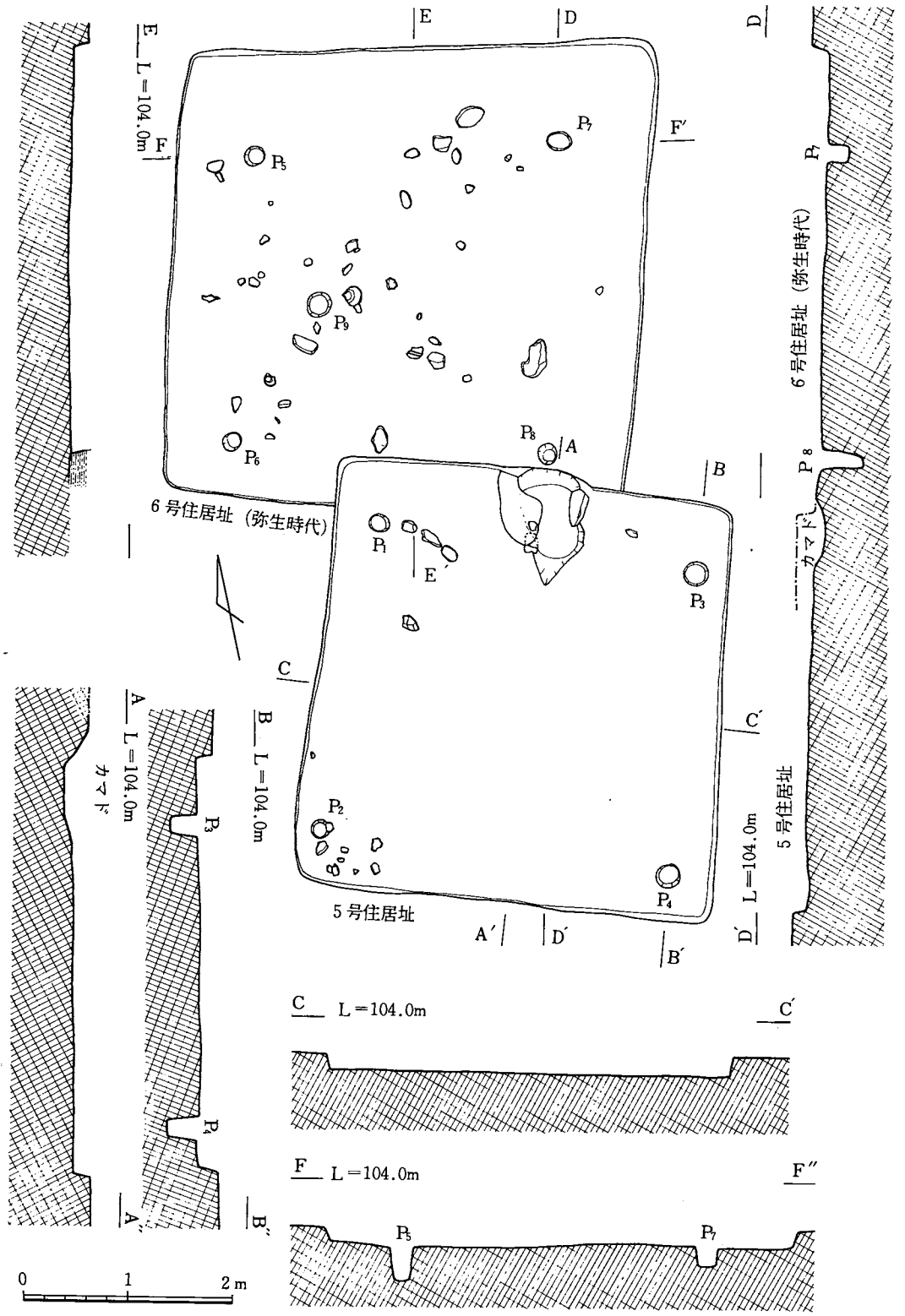
埋土中に包まれる大きな礫は、住居址の廃絶後に投棄されたものであろう。大きな礫は35cm×20cm×20cmの大きさがあり、床面から浮いている。

(2)　第Ⅰ－８号住居址（第23図）

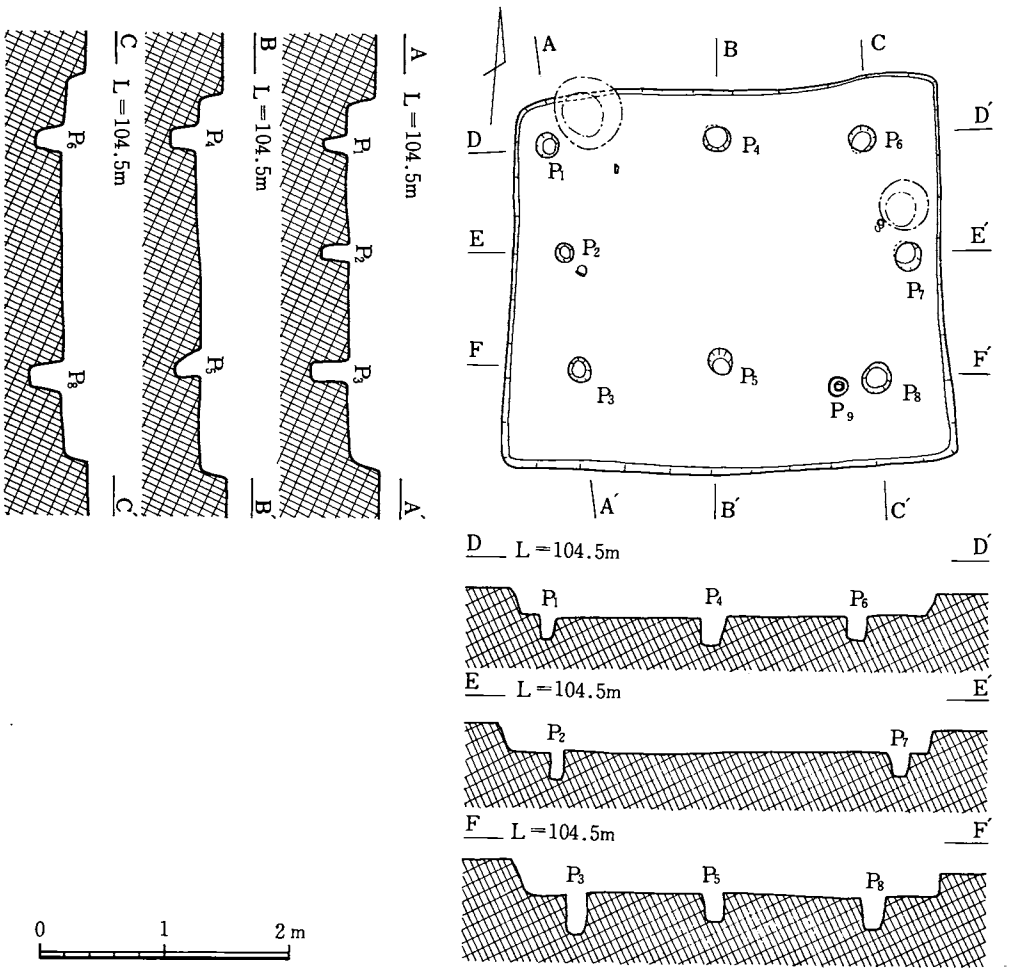
竪穴式住居址である。方形又は長方形を意図して建設されたものであろうが、台形が歪んだような形状を呈す。各壁の長さを北側壁から右廻りに記すと、3.3m・3.0m・3.6m・2.9m である。

当遺構は、柱穴群（第Ⅰ－１号掘建柱建物遺構）と重復しており、２基の柱穴によって、壁および床が切られている。

８号住居址に伴う柱穴は９基である。各柱穴の直径は0.16～0.25m、床面からの深さは0.2～



第22図　第Ⅰ－5・6号住居址実測図



第23図　第Ⅰ－８号住居址実測図（弥生時代）

0.3m を測る。これ等の柱穴を東西に結ぶ線（$P_1P_4P_6$、P_2P_7、$P_3P_5P_9P_8$）は、ほぼ並行（３列）になる。柱穴の並びから、桁の長さ1.2～1.3m・梁の長さ1.8m、東西方向（P_2P_7方向）に棟を特つ（P_1P_6やP_3P_8の間隔よりP_2P_7が柱穴の直径分長い。）切り妻の屋根を持っていた可能性がある。入口が妻入りか、平入りかについては、何等手がかりはない。

柱穴P_9は、柱穴P_8の位置と$P_3P_5P_8$の並び方から推測すると、P_8を補強するための添の柱と考えられる。

推定した棟の方向（P_2P_7の方向）を主軸と仮定すると、主軸は磁北に対して85°東にふれる。このことから、棟を東西に持つ南向の切妻の家屋が復元できるであろう。

遺構検出面から床面までの深さは、0.25m 未満である。床面の硬化は、歴史時代の竪穴式住居址に比較すると、さほど進んではいない。

出土遺物としては埋土および床面真上から、弥生時代後期のカメや鉢の破片（第108図）を検出した。

(3) 第Ⅰ—10号住居址（第24図）

方形の平面形を持つ竪穴式住居址である。一辺の長さは、約3.2m である。遺構検出面から床面までの深さは0.1m 以下であり、場所によっては、床面が露出している部分も有る。床の硬化は、さほど進んでおらず、ほぼ均等に全面が硬化していた。

柱穴と思れる穴が、9基検出された。9基の穴の内、2基の穴（P_8・P_9）は遺物（カメの破片）の下から検出した。当遺構からの検出遺物は、全て、床面上の遺物である。このことから、2基の穴（P_8・P_9）は、当家屋（遺構）が廃絶された当時には、柱が建っていないことが解る。

ところで、P_8に注目すると、床に垂直にあいた穴（径0.2m、深さ0.5m）の口をふさぐように、カメを伏せた状態で検出された。このカメ（第24図参照）の口縁から胴部にかけては、穴の口とカメの口縁を合せた状態で出土したが、胴部から底部にかけては欠失していた。(畑の耕作による。)

穴P_9に上の土器についても穴P_8の例と類似すると推測される。穴P_9（径0.22m・深さ0.2m）上にあるカメの破片及び周辺の土器片群（押し潰された状態）を接合したところ、カメ・壺・鉢（第107～109図参照）が復元できた。

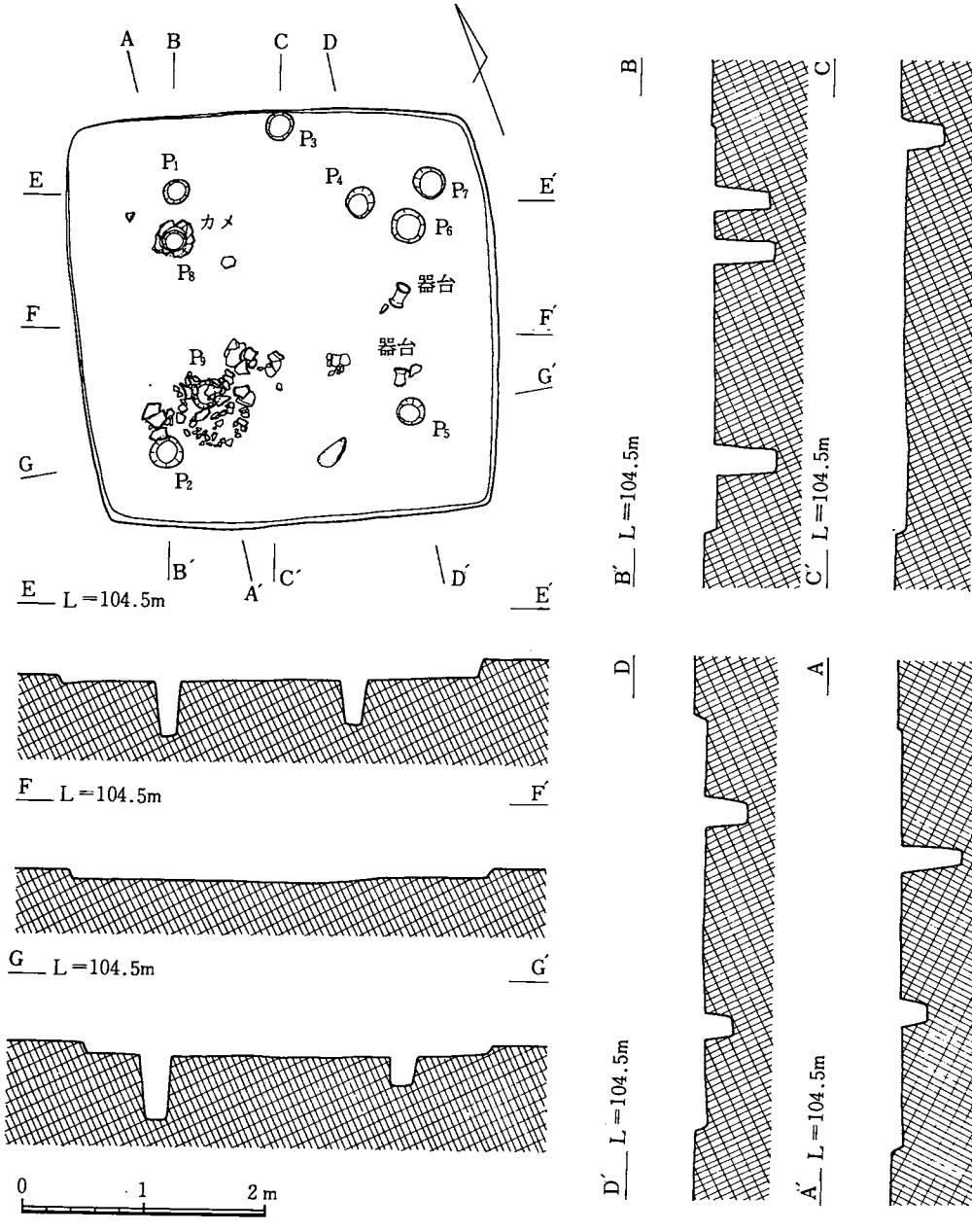
以上のことから、2基の穴（P_8・P_9）は、柱穴ではなく、貯蔵穴の可能性がある。もし、これ等の穴（P_8・P_9）を柱の建変えの跡と推定したとしても、一度埋もれた穴にP_8のように、ピッタリと口と口を合わせることはないであろう。やはり、貯蔵用の穴にカメで蓋をしていたと考えた方が妥当であろう。

9基の穴の内、上記の理由から残り7基の穴が柱穴と推定される。7基の柱穴の直径は0.2～0.3m、床面からの深さは0.50～0.18m を測る。

家屋の桁および梁を支える4本の柱の内、3本の柱の位置（P_1・P_2・P_3）については検出場所から見て異論がない。他の1本の柱の位置は、P_4・P_6・P_7の内の1ヶ所であろう。これ等3基の柱穴の床面からの深さを測ると0.35m（P_4）・0.22m（P_6）・0.18m（P_7）である。このことからP_4が4隅の柱の可能性が強い。他は、補強のための添えの柱か、建変えた柱の跡と思われる。北側壁の中央に柱穴P_3（径0.23m・深さ0.3m）がある。これは、棟を支える柱の可能性があるが、対応する柱は検出されていない。

住居址の主軸（CC′）方向をP_2P_3の中間と柱穴P_8の中央方向に取ると、磁北に対して22°東にふれる。（N—22°—E）

出土遺物（第107～110図参照）は、先にもふれたように、全てが床面上より検出された。出土遺物を並記すると、カメ・壺・鉢・器台である。この遺構は他の遺構との切り合いもなく、また弥生時代の遺構が近接した位置にない。このことから、当遺構出土の遺物は、第Ⅰ—10号住居址が元来持っていた1セットの容器と見なされる。



第24図　第Ⅰ—10号住居址（弥生時代）

第３節　奈良時代より古い遺構

１．第Ⅱ－１号環状溝遺構

溝に取り囲まれた遺構の全体の形は分銅形を呈する。一見、前方後円墳の周溝を粗雑に掘った形にも見えるが、中心部に死者を埋葬する施設はなく、遺物の出土もない。また、周辺部からも、古墳時代の遺物・遺構は検出されていないので、当遺構は古墳ではない。

溝が中心部を取り囲むように、環状に廻ることに注目すると、規模は大きく異なるが、第Ⅰ区から検出した方形周溝遺構と類似の遺構と思われる。

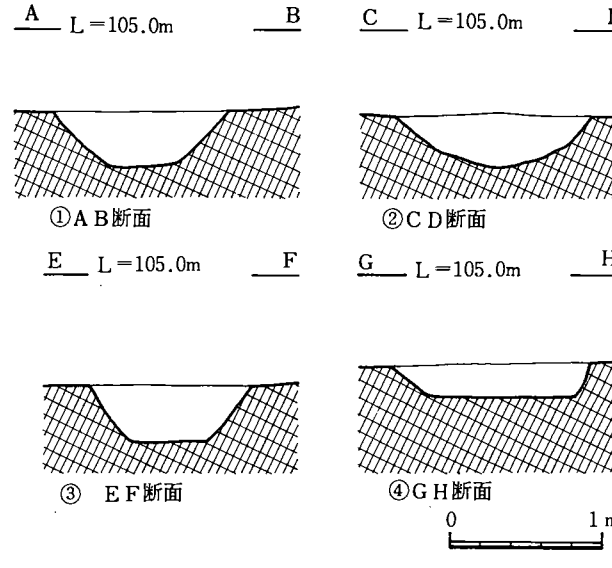
遺構は分銅形をしているので、東西の幅は測定位置によって異なるが、南側の最も幅広い所で6.4m（溝の内側5.2m）・括れ部で2.7m（溝の内側1.4m）を測る。南北の最大の長さは10.1m（溝の内側9.1m）を測る。溝によって取り囲まれた中心部の面積は、114㎡である。

溝の広さは、場合によって少しづつ違い、最小の幅0.75m・最大の幅1.32mである。溝の底面もまた、場所によって深さが異なり、ＧＨ断面を取った附近（西側）が浅く、東側から南側にかけての屈曲部附近が深い。遺構検出面から溝の底面までの深さは、0.2～0.4mである。

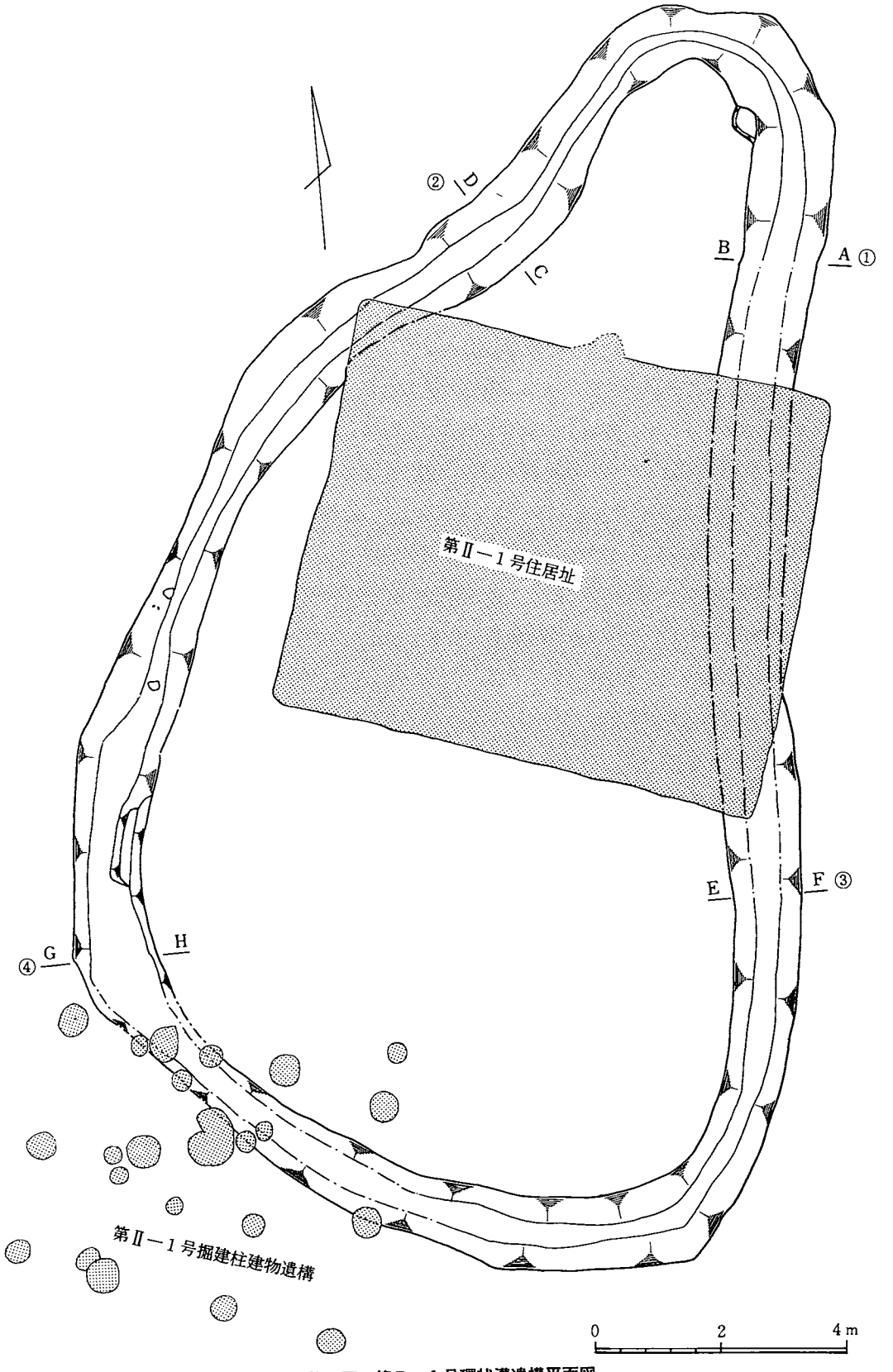
溝の断面形は、一部で円弧を描く部分も有るが、倒立した等脚台形状である。部分によっては、内側の傾斜面が急になる。

当遺構は、第Ⅱ－１号住居址（カマド付竪穴式住居址）と第Ⅱ－１号掘建柱建物遺構（２間×３間）によって切られている。溝中の埋土は、切り合う２基の遺構の埋土と明良に異なる。

埋土の土色からすると、縄文時代の遺構の埋土より明るい褐色であり、土色の違うこ



第25図　第Ⅱ－１号環状溝断面図



第26図　第Ⅱ－１号環状溝遺構平面図

とから縄文時代の遺構ではない。しかし、第Ⅰ—10号住居址（弥生時代）の埋土とも異なることから、それよりも新しい遺構と思われる。

埋土の堆積のようすから、溝は短時間の内に埋没した可能性が強い。また、埋土中及び溝の底面からの出土遺物は少数の礫である。遺構の切り合いと埋土の土色から当遺構の年代を推定すると、奈良時代の遺構又はそれより古い遺構とも考えられる。

第4節　奈良・平安時代の遺構

1．竪穴式住居址

(1)　第Ⅰ—1号住居址（第27図）

カマド付竪穴式住居である。平面形は、東西幅3.75m・南北幅3.3m（推定）のほぼ方形である。南側壁面は、幅0.2mのトレンチャー（茶園の中耕用掘削機）によって切り取られている。

柱穴は4ヶ所有り、柱の間隔は東西1.8m、南北1.5mと復元される。4個の柱穴（P_1・P_2・P_3・P_4）を結ぶとP_1P_2とP_2P_3は直角に交わるが、P_1P_4とP_4P_3は鈍角に交わるように見える。しかし、柱穴の一方の壁面を利用して柱を建てたと仮定すると上記のような柱の間隔となる。

カマドは、住居址の北壁に接し、北壁の中央よりも西方側にややずれた位置に存在する。カマドの袖は粘土で構築し、西側の袖の保強のために石を添えている。カマドの焚口近くの床の断面は円弧を描き、燃焼室部分の奥の火床は平担である。

床の大部分（壁際より0.1～0.5m内側）は硬化している。硬化面が南側壁面の際近くまで広がっている点とカマドを北側に持つことから、住居址の入口は南側に付くと推定される。

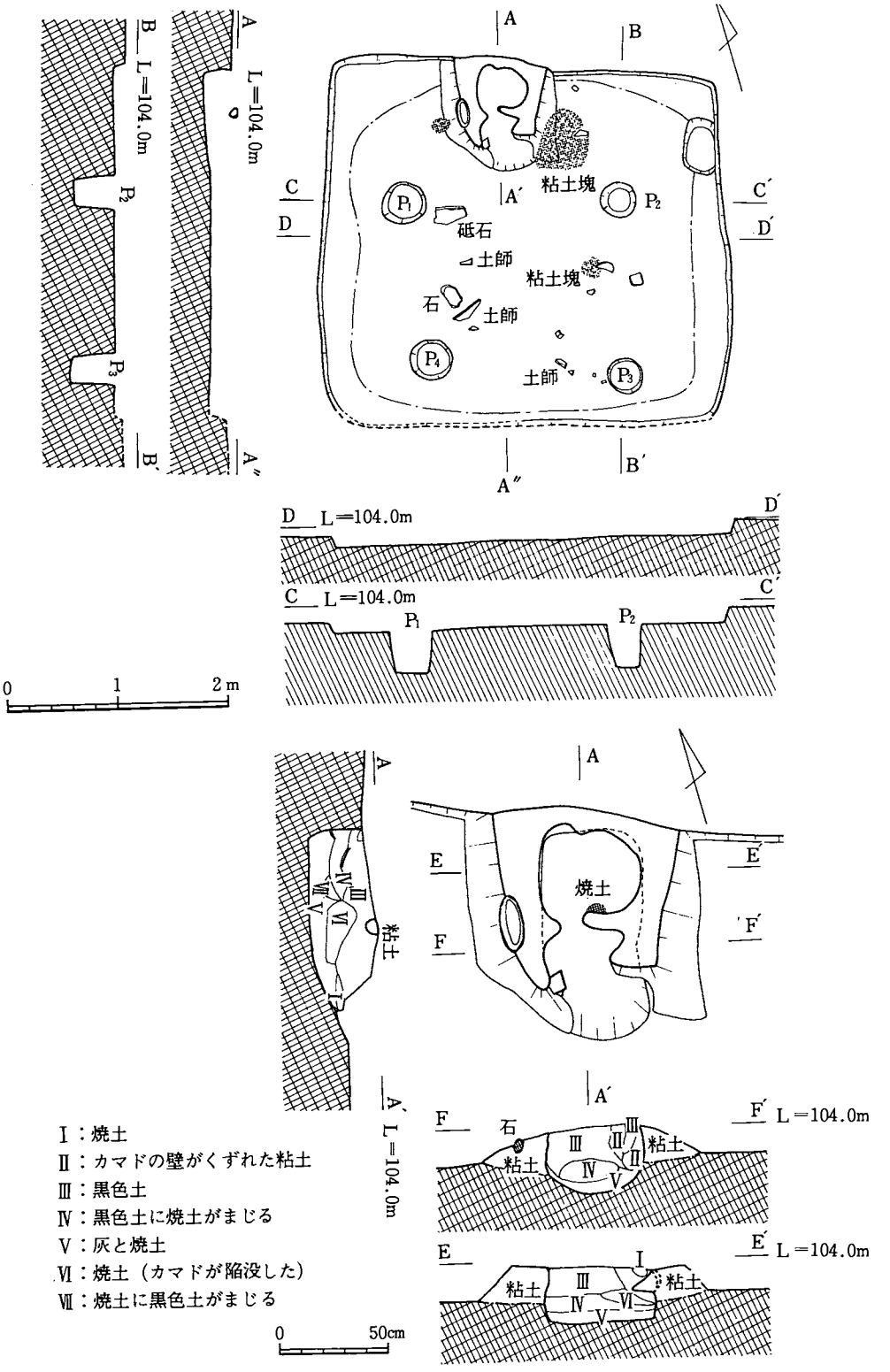
残存する壁の高さは、遺構検出面より0.2m未満である。東壁の北側には、長さ0.5m・幅0.3m・床面よりの深さ0.4mの穴（貯蔵穴？）がある。

埋土及び床面直上から、土師器片・砥石・自然石・縄文土器を検出した。

(2)　第Ⅰ—2号住居址（第28図）

カマド付竪穴式住居である。方形の平面形を意図して建築されたものであろうが、平面形に歪みがある。各壁の長さをカマドのある壁から右廻りに記すと、4.3m・3.6m・3.6m・4.1mである。

柱穴は5ヶ所検出された。4基の柱穴（P_1・P_3・P_4・P_2）を結ぶ形は、当住居址の平面形と



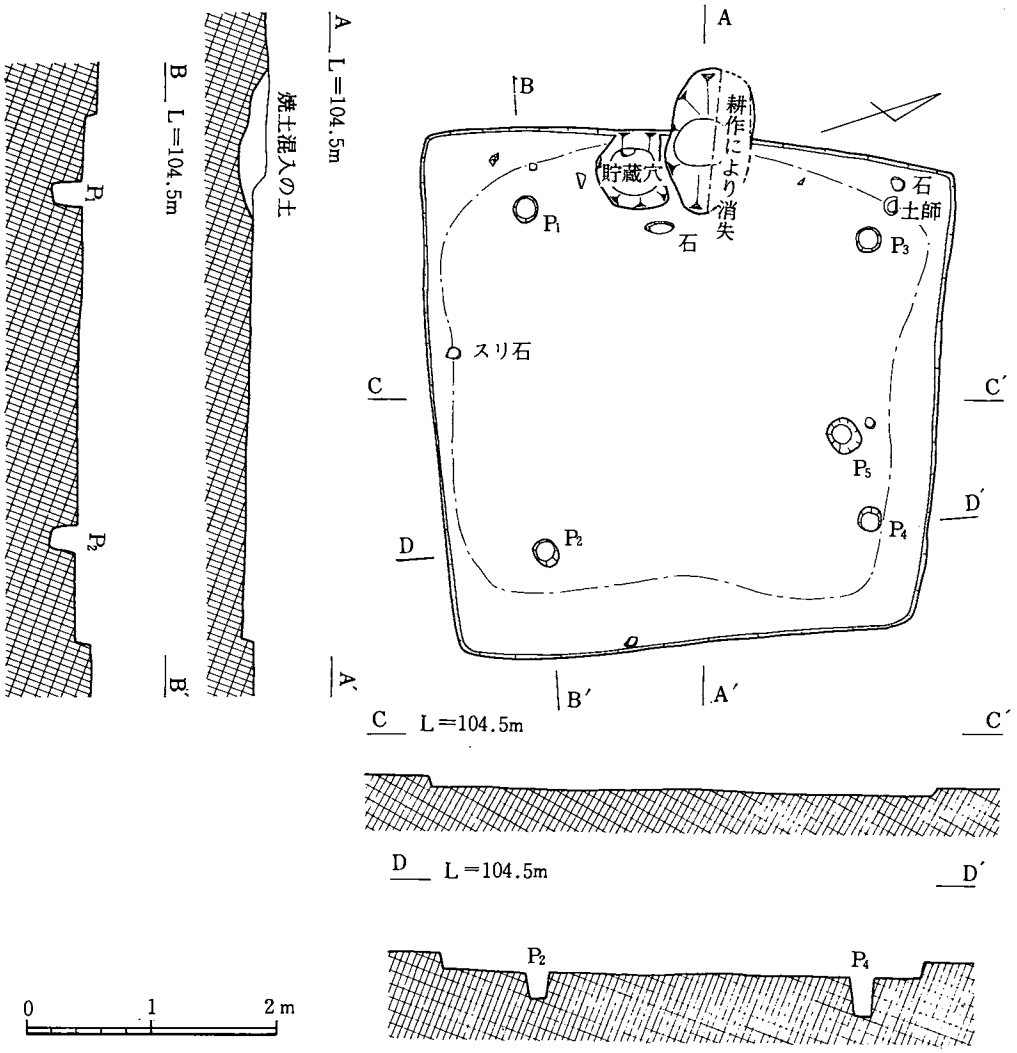
第27図　第Ⅰ－１号住居址実測図

ほぼ相似である。4基の柱穴の直径は0.20～0.25m、床面からの深さは0.2～0.3mである。柱穴P_5は、P_4の西側0.7mの位置（P_3とP_1の間）に存在し、最大径0.3m・床面からの深さ0.3mを測る。

カマドは、住居址の西側壁のほぼ中央に位置し、壁の外側に一部が突出していたと思われる。カマドの北側半分はトレンチャーによって切り取られており、燃焼室の床と焼土のみが残存するのみであった。カマドの左側（南側）には、カマドと壁に接する形で、貯蔵穴が残在した。平面形は歪んだ円形（0.5m×0.6m）であり、床面からの深さは0.15mである。

遺構検出面から床面までの深さは0.15m未満である。床の硬化は、中央部からカマドの前面にかけてが比較的に進んでいる。硬化面は南側壁際近くまで広がっていることから、入口は南側に存在したと推測できるであろう。

出土遺物としては、床面真上から検出した土師器の杯の外、土師器の細片・縄文土器片・磨石等がある。



第28図　第Ⅰ－2号住居址実測図

(3)　第Ⅰ－３号住居址（第29図）

カマド付竪穴式住居である。平面形は方形（１辺３ｍ前後）を意図して構築されたと思われるが、各壁の長さがまちまちで、形が少し歪んでいる。カマドのある壁から右廻りに各壁の長さを記すと、3.0m・3.0m・3.4m・2.8mである。

柱穴は５ヶ所有り、柱の間隔は南北1.8m・東西1.3mと復元される。柱穴P_1とP_3とのちょうど中間にP_2が存在する。柱穴P_1・P_3・P_5・P_4の直径0.2～0.25m・床面よりの深さ0.45～0.65mを測る。

柱穴P_2の直径0.28m・床面よりの深さ0.2mであり、他の４基の柱穴より浅い。

カマドは西側壁の中央に位置し、カマドの主軸と住居址の主軸は重なる。主軸の方向（磁北に対して）は西（N－63°－W）よりである。カマドの遺存状態はさほど良好でなく、粘土で造った左右の袖の基部が残るのみである。

遺構検出面から床面までの深さは0.15m未満であり、北側の方に床面が少し傾斜し、中央部の床面が少し高い。床の硬化した部分は、基盤となる土が硬化した床と焼けた粘土の床に分けられる。しかも、焼けた床の上に、カマドが造られていた。このことから、元来有った床面上にカマドを造っていることは明らかであり、一度焼失した住居址上に、再度、家屋を建設していると推定される。しかし、元の住居址の形状、年代等は明らかにすることは不可能である。

入口は、床の硬化面が全体的に南側壁の方に片寄っていることから、南側に存在した可能性があろう。

出土遺物は、床面直上から、土師器片が検出された。

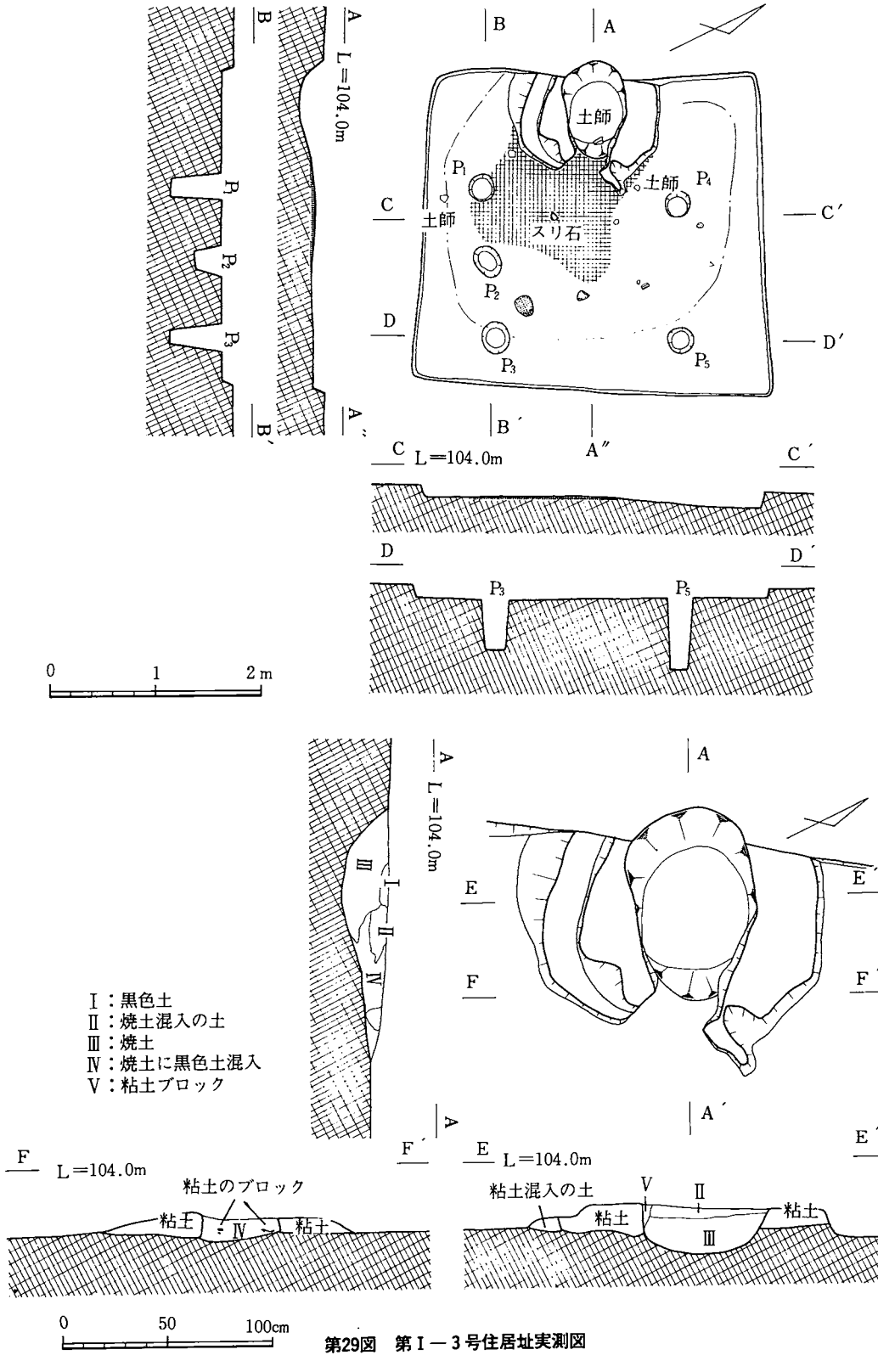
(4)　第Ⅰ－４号住居址（第30・31図）

カマド付竪穴式住居である。第Ⅰ区では最大の竪穴式住居であり、しかも、２基のカマドを持っている。平面形は、長方形であり、東西5.3m・南北4.3mを測る。

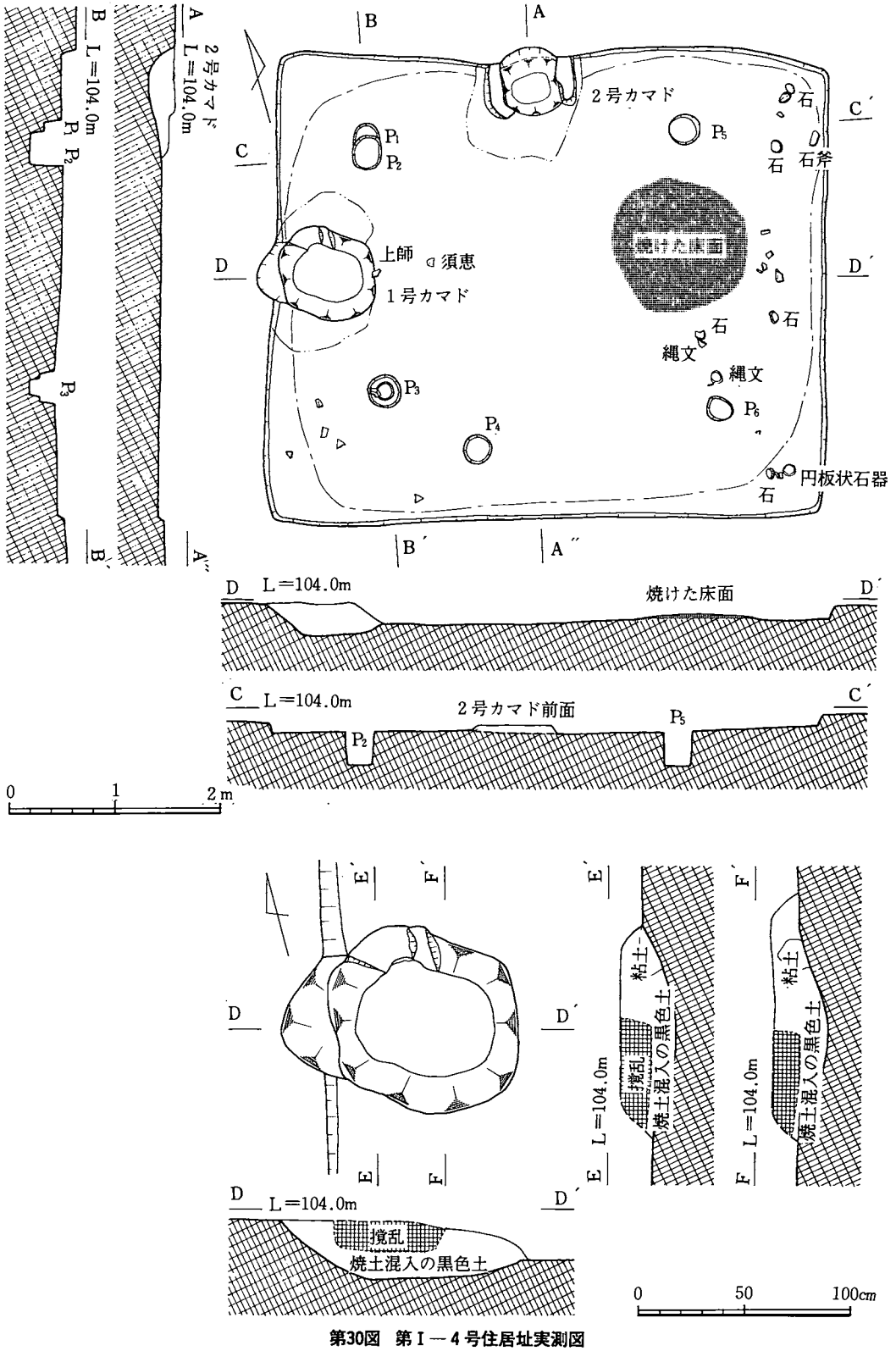
柱穴は６基検出された。柱穴P_1とP_2は切り合っており、P_2の方が新しい柱穴である。柱穴P_3は２段に掘り込まれており、外側の掘り方には石を込めて、根締めをしている。P_3の内側の掘り方の直径は、柱の直径とほぼ同じと考えると、柱の直径は16cm前後と推定される。

屋根の重みを支える４基の柱の掘り方（P_2・P_3・P_6・P_5）を結ぶ線はほぼ長方形となり、家屋の外観はかなりととのった姿をしていたのであろう。４基の柱穴の直径0.25～0.32m・床面からの深さ0.25～0.30mを測る。柱穴P_4は、P_3の南東側１ｍの位置（P_3とP_6を結ぶ線より南側に少しづれる）にある。柱穴P_3の直径0.27m・床面よりの深さ0.26mを測る。

カマドは、西側壁の中央部（１号カマド）と北側壁の中央部（２号カマド）にある。２基のカマドについて、同時に利用されていたか、あるいは、１基が破損した後、もう１基を造ったか、吟味する必要はあるが、それを知る手がかりはない。



第29図　第Ⅰ－3号住居址実測図



第30図　第Ⅰ―４号住居址実測図

1号カマドの左右の袖は、欠失し、燃焼室（0.9m ×0.8m）の床のみ残存するのみであった。その上、カマドの中央に畑地耕作による攪乱があった。1号カマド中の埋土は、焼土混じりの黒色土であった。

2号カマドの左右の袖の基部は、残存していた。燃焼室の大きさ（0.5m ×0.5m）は、1号カマドのほぼ半分の大きさである。燃焼室の中央には、大きさ15cm×13cm×33cm程の柱状の石（支脚）が立っていた。カマド中の埋土は、焼土混じりの黒色土であった。この埋土は、1号カマドの埋土より焼土が多く含まれているように感じた。このことは、遺構の残存状態が良く、小ぶりであるために、そのように見えたのだと思われる。

遺構検出面から床面までの深さは0.2m未満である。床の硬化した部分は、各壁の際まで広がっており、特に、東側壁と南側壁の方へ良く延びている。

出入口の所在位置は、硬化面の広がり具合いから、東側又は南側にあったと推測される。(北側および西側には、カマドがあるので、設置するのは不可能である。)

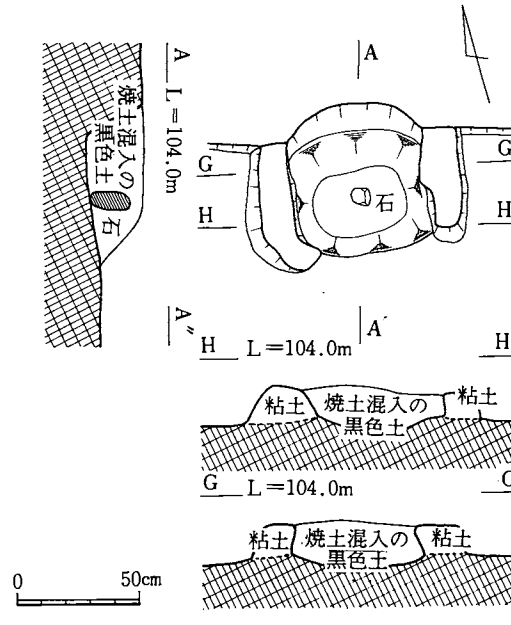
住居址の東半分の中央に、円形（径1.3m）の焼けた硬化面がある。円形の部分の中央は周囲より少し高く（盾状に）なっている。

2基のカマドを持つことと、床の硬化面に焼けた床面があることから、2基の住居址が切り合っているのではないかとの疑問があった。そのため、発掘過程で、何度も討議を重ねながら発掘したが、2基の住居址が切り合った状態の土色の変化は認められなかった。

上記の検討の過程で、焼けた硬化面は、焼失した家屋が存在して、その真上に、たまたまそれより大きい4号住居址が建設されたと推定された。

住居址の主軸（2号カマドの主軸）は、磁北に対して少し東方（N—14°—E）にずれる。

出土遺物は、床面直上から土師器・須恵器が出土している。その外、縄文土器片、円板状石器・石斧等も覆土中から出土した。



第31図　第Ⅰ—4号住居址2号カマド実測図

(5)　第Ⅰ－５号住居址（第22・32図）

カマド付竪穴式住居址である。第Ⅰ－６号住居址（弥生時代）と切り合っている。切り合った部分は相方の埋土の土色が異なるため、新旧の関係は明らかであった。また、カマドの位置からも、切り合いの状態が明らかになった。

第Ⅰ－５号住居址の平面形は、ほぼ方形（一辺の長さ４ｍ）を呈するが、平面形に少し歪みがある。各壁の長さをカベのある壁から右廻りに記すと、3.8m・3.9m・4.0m・4.0mである。

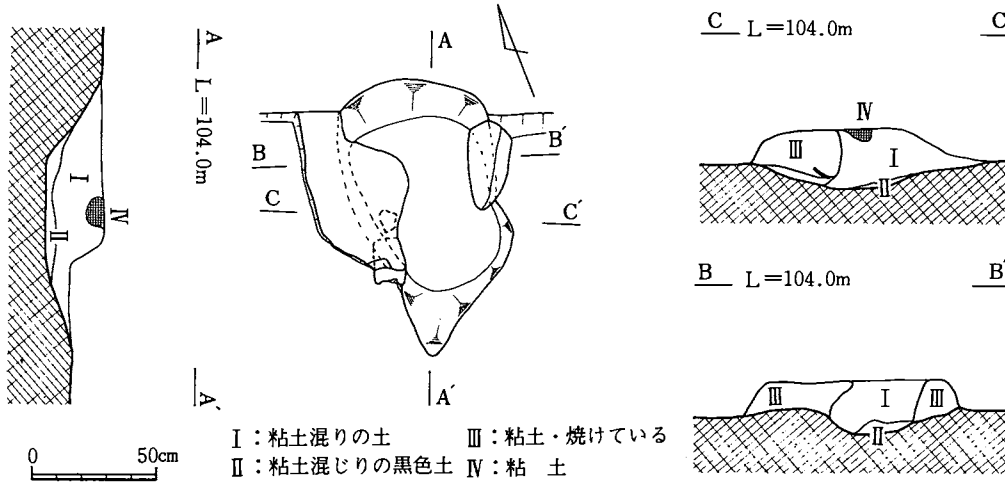
柱穴は４ヶ所検出された。柱穴の位置は、家屋の四隅の近くにあり、他のカマド付住居址に比較して、壁面に近い。４基の柱穴（P_1・P_2・P_3・P_4）を結ぶ形は、当住居址の平面形とほぼ相似である。４基の柱穴の直径は0.16～0.23mである。柱穴の床面からの深さは0.2m（P_1・P_3）・0.3m（P_4）・0.4m（P_2）である。

カマドは、住居址の北側壁のほぼ中央に位置する。カマド（第32図参照）の上部は欠失しており、右袖の基部・右袖の基部のほんの一部および火床のみ残る。右袖の焚口の側の部分には石を埋め込み、袖の補強をしている。カマド内から、甑（土師器）の破片が出土した。カマドの奥壁から焚口までの距離0.95m・燃焼室の火床の幅0.55mを測る。

遺構検出面から床面までの深さは0.2mである。床の硬化は進んでおり、カマドの正面が強く硬化し、周辺に行くに従って弱くなるが、ほぼ全面に硬化面が広がる。

住居址の主軸をカマドの主軸と同一と見なした場合、主軸の方向は磁北に対して東側に19°ふれる。

出土遺物は、先にふれたカマド内から出土した土師器（甑）の外、床面の直上から土師器が出土した。



第32図　第Ⅰ－５号住居址カマド実測図

(6) 第Ⅰ－7号住居址（第33図）

第Ⅰ区では、最小の竪穴式住居址である。西側壁は、開墾によって削平されているので全体的な平面形は不明である。しかし、柱穴の配置から全体の平面形を推定すると、方形（辺の長さ2.5m～2.7m）に近い形と推定される。

住居址の主軸は、磁北に対してやや東側（N－21°－E）にふれている。

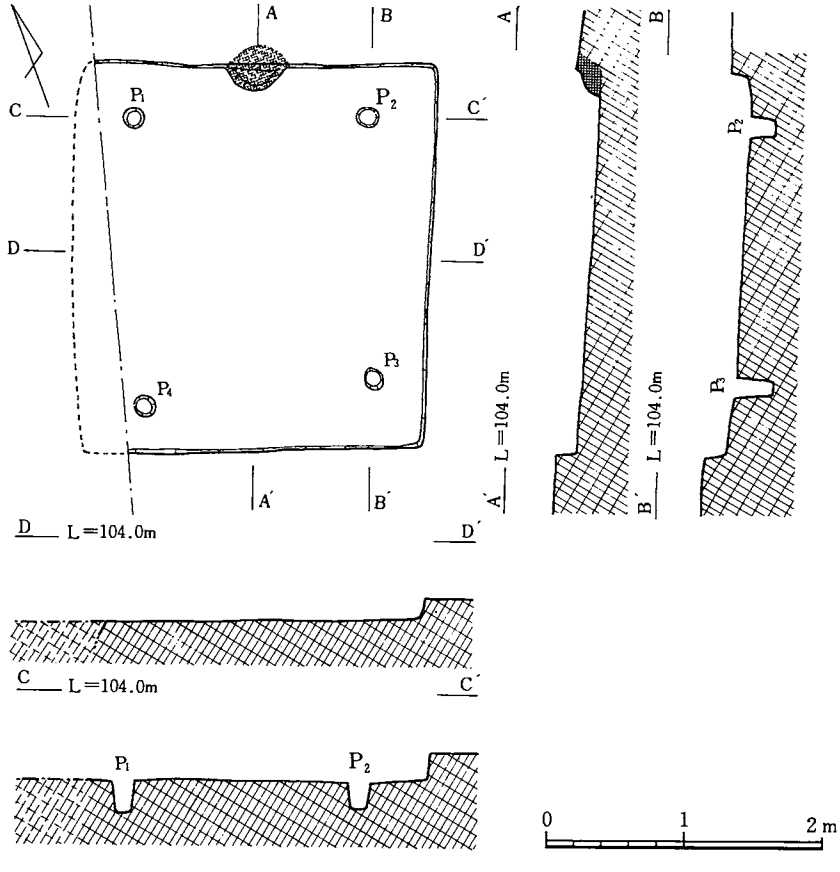
柱穴は4基検出され、柱間は1.7～2.0mと推定される。柱穴の直径0.15～0.18m・床面からの深さ0.2～0.25mを測る。

北側壁のほぼ中央部に焼土が検出された。しかし、床面からはカマドに伴う焼土は検出されなかった。このことから、この住居址がカマドを持っていたか、否か、断定できない。

検出面から床面までの深さは、0.15m未満である。床面の硬化は、他の住居址に比較するとさほど進んではいない。

埋土の土色を他のカマド付竪穴式住居址と比較してみて差異が有るとは考えられない。

床面直上および埋土中からの出土遺物は、土師器の細片（器種不明・年代不明）が少量あるのみである。



第33図　第Ⅰ－7号住居址実測図

(7)　第Ⅰ－９号住居址（第34図）

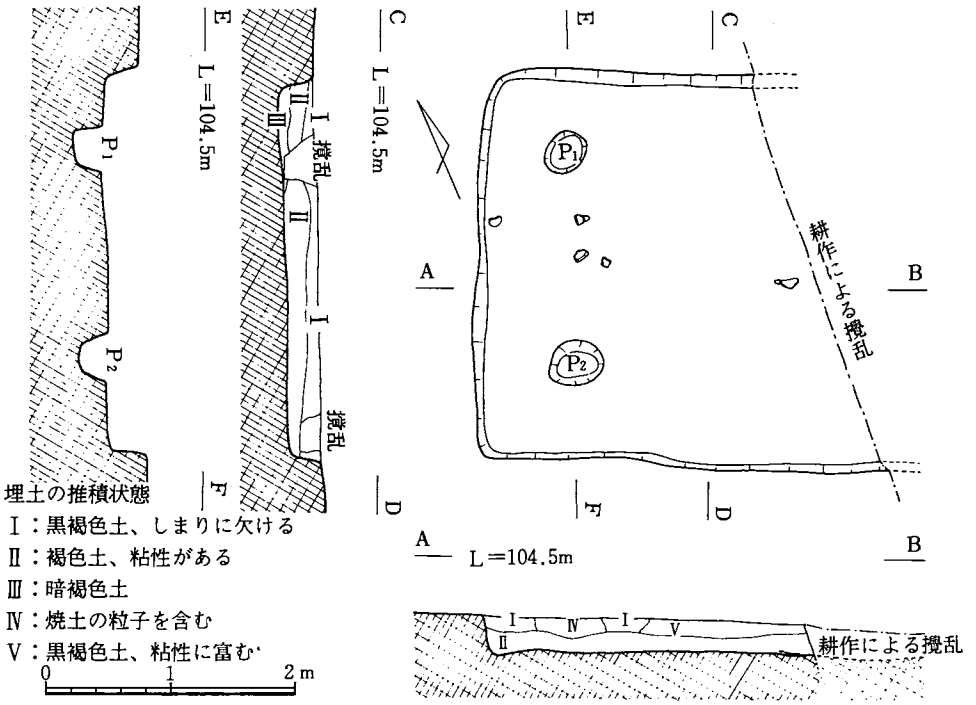
平面形が長方形の竪穴式住居址と推定される。住居址の東側を深く耕作しているために、東側の壁の全てと南北の壁の一部を欠失している。

柱穴は２基検出されたが、対応する２基は耕作による撹乱で消失したと思われる。残存する柱穴の大きさは直径0.35～0.45m・床面からの深さ0.20～0.25m を測る。

遺構検出面から床面までの深さは、0.32～0.35m である。床面の硬化はさほど進んでおらず、中央部がいくぶん硬い感じをうけた。

埋土の土色は黒褐色で、第１区から検出のカマド付竪穴式住居遺構の埋土と差はなかった。ただ、埋土の硬さは、当遺構の方がいくぶん柔いと感じた。

出土遺物は、埋土および床面上から土師器の細片が少量出土した。しかし、これ等の遺物の器種は、小片のため不明である。



第34図　第Ⅰ－９号住居址 実測図

(8) 第Ⅱ－1号住居址（第35図）

カマド付竪穴式住居址である。第Ⅰ－Ⅷ区の発掘調査において検出された竪穴式住居址の中で、最大規模の住居址である。住居址の平面形は長方形であり、東西幅8.0m・南北幅6.7mを測る。床の硬化面は、東西の柱穴列のほぼ内側・カマドの側より内側に広がる。しかし、南側は、南側の柱穴列よりも壁際まで広がる。このことから、入口は南側に位置していた可能性が考えられる。

柱穴の掘り方は、床面より37基・壁より外から2基（住居址内の柱穴の配列に対応する）検出された。柱痕跡は、確認できなかった。各柱穴の掘りの大きさと海抜104.5mからの深さは、第5表に示す。床面の海抜は104.3m前後である。

当遺構は、第Ⅱ－1号環状溝遺構（第25・26図参照）を切っている。

柱穴P_{11}とP_{12}を結ぶ線を主軸の方向（棟の方向）と仮定すると、その方向は、磁北に対して東側に16°ふれる。

屋根を支える四隅の柱の掘り方（P_2・P_6・P_8・P_{10}）の大きさ（径）は22～34cm、床面からの深さは32～71cmである。

住居址内より、必要以上に多数の柱穴が検出されたのは、柱の建替えおよび補強のために、柱が建てられたためと推測される。

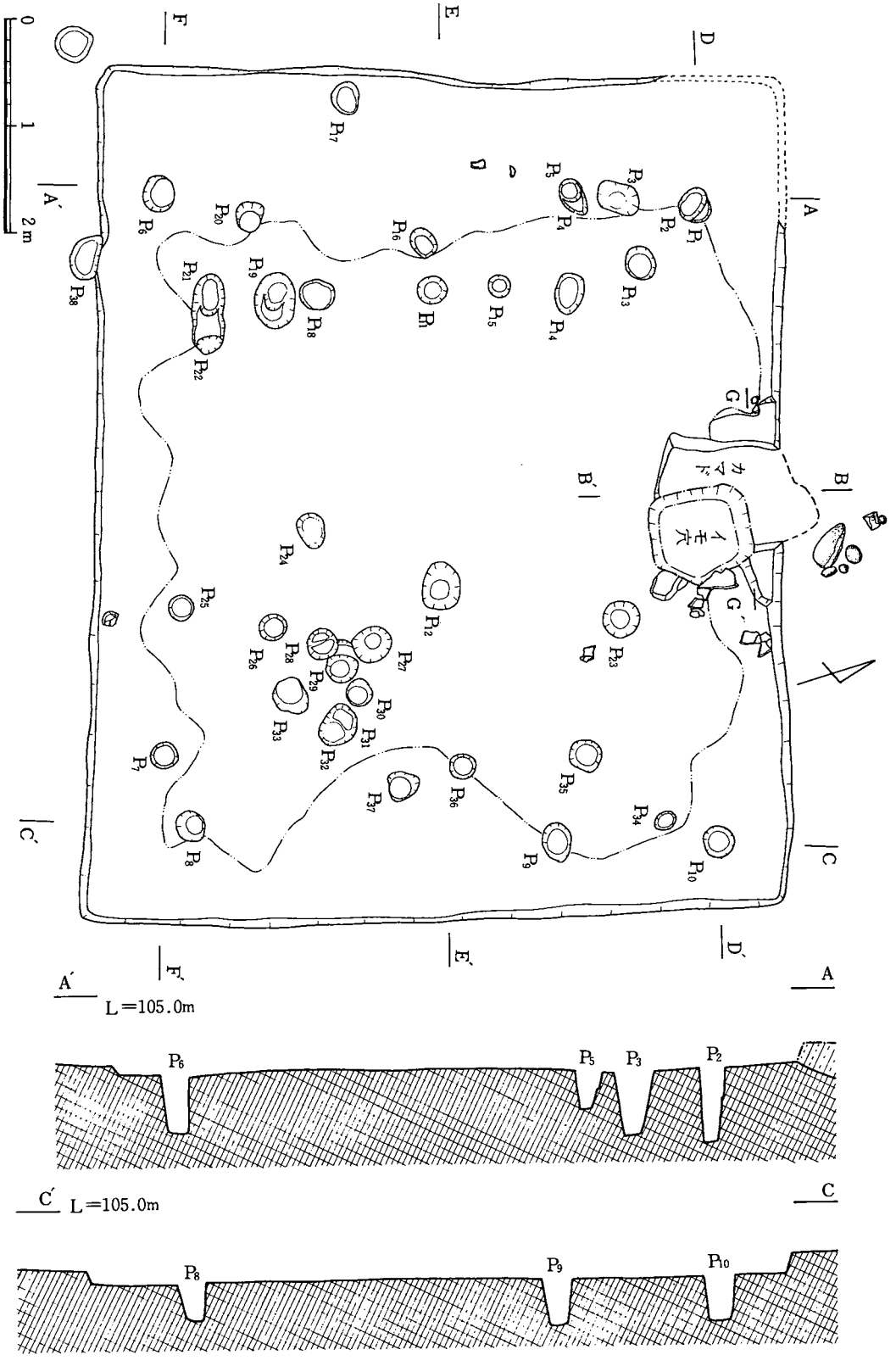
柱穴の並び方から、この住居址の屋根の形状は入母屋式と思われる。

カマドは、住居址の北側壁の中央に位置する。住居址の規模に比例するかのように、カマドの大きさも、他の遺構から検出したカマドよりずば抜けて大きい。

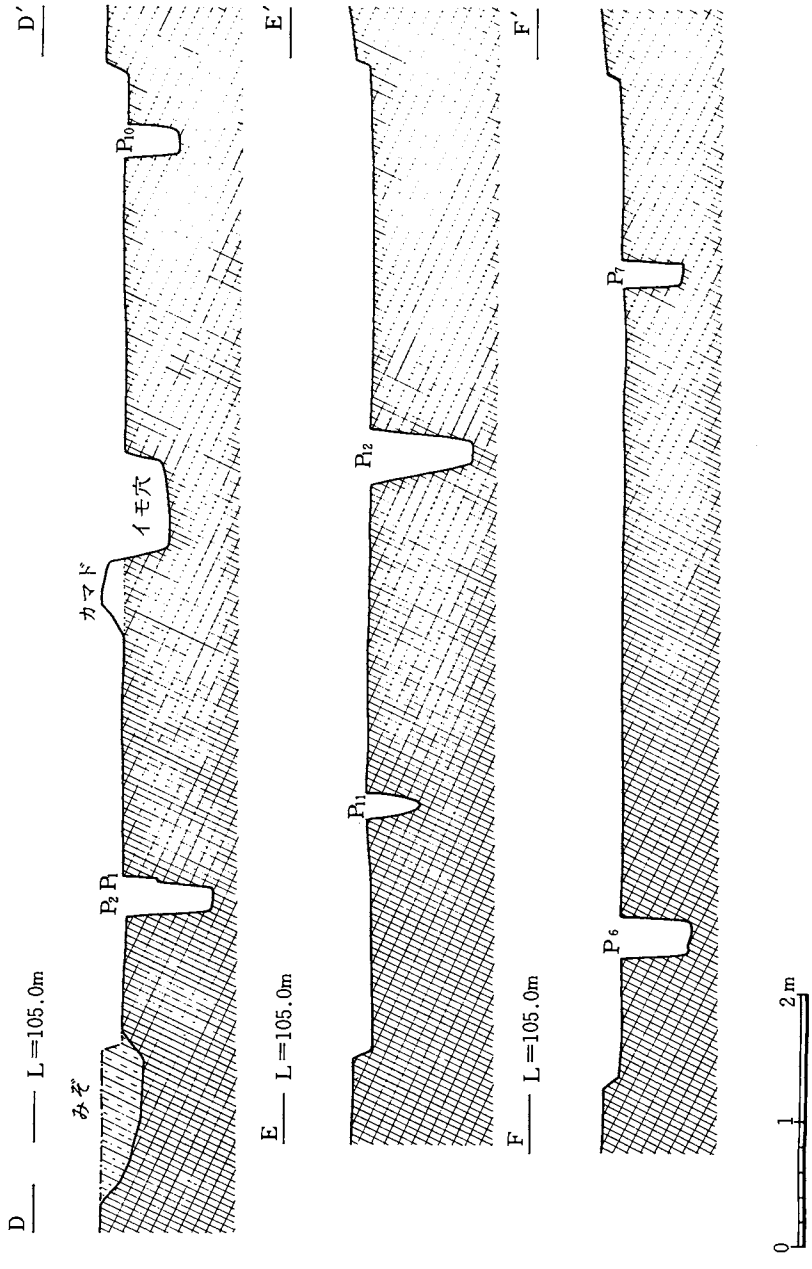
第5表　第Ⅱ－1号住居址の柱穴一覧表

柱穴の番号		※		※				※		※						
(第Ⅱ－1号の柱穴と比定した)		P_1	P_2	P_3	P_4	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}
柱穴の掘り方の大きさ	最大径cm	50	47	40	56	40	42	47	50	50	51	53	54	37	29	36
	最小径cm	44	42	35	52	(35)	40	42	47	46	50	46	53	37	28	36
	海抜 104.5m からの深さ	60	52	46	53	85	43	44	55	57	65	43	73	36	85	53

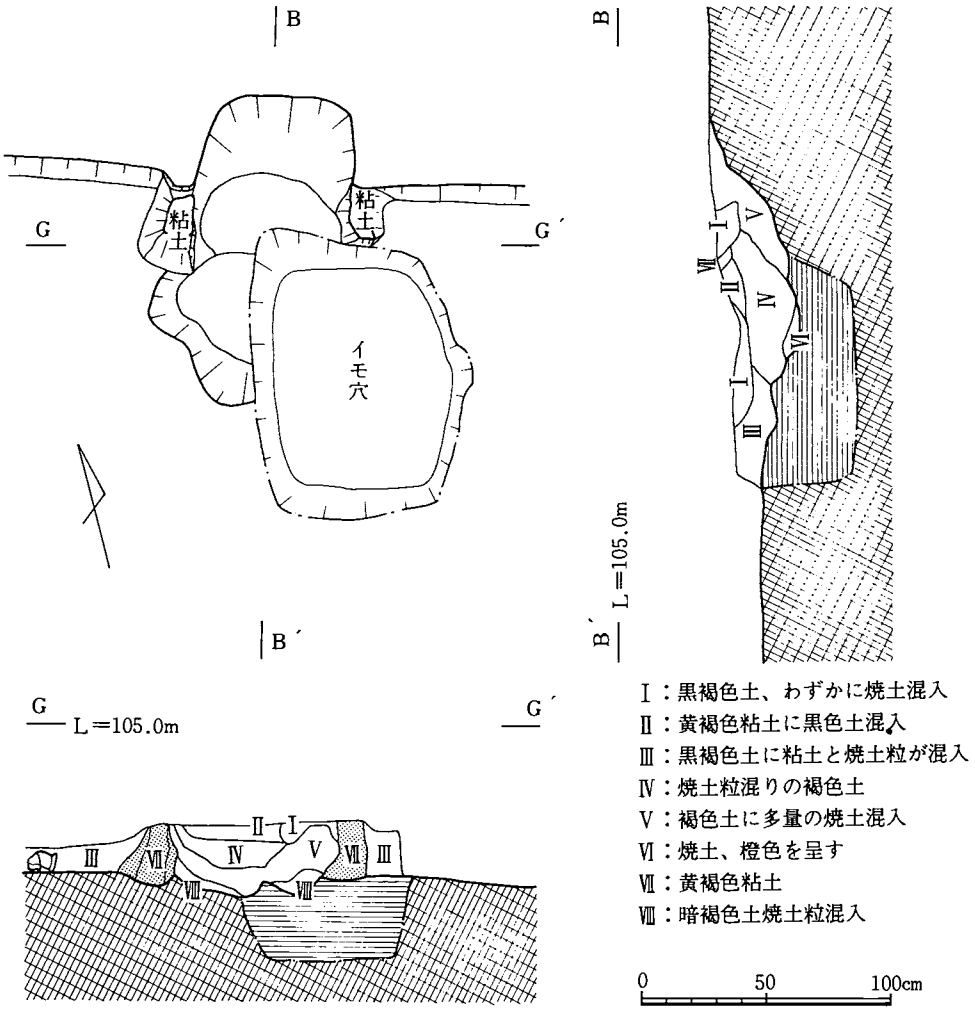
柱穴の番号		△	△		△	△	P_{20}			
（建構不明）		P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P'_{20}	P'_{20}	P_{21}
柱穴の掘り方の大きさ	最大径cm	33	28	30	28	33	55	(60)	—	32
	最小径cm	32	28	27	27	32	43	47	52	32
	海抜104.5m からの深さ	63	47	95	69	64	106	86	66	35



第35図　第Ⅱ－１号住居址実測図



第36図　第Ⅱ－1号住居址東西方向断面図



第37図　第Ⅱ－１住居址カマド実測図

カマド（第35図参照）の遺構の中央部は、後世の貯蔵穴（イモ穴）によって切り取られている。カマドの両袖の基部のほんの一部残るのみである。煙道は完全に欠失している。

焚口から燃焼室の奥壁までの距離0.9m、燃焼室の幅（袖と袖の距離）0.6m を測る。火床の形状は、焚口から燃焼室にかけては緩やかに下がり、燃焼室内では弧を描くようにくぼむ。

カマドの左右（北側壁際）から、甑の破片と推定される土師器が出土した。その後、土師器片が床面上から数点出土している。

(9) 第Ⅱ－3号住居址（第38・39図）

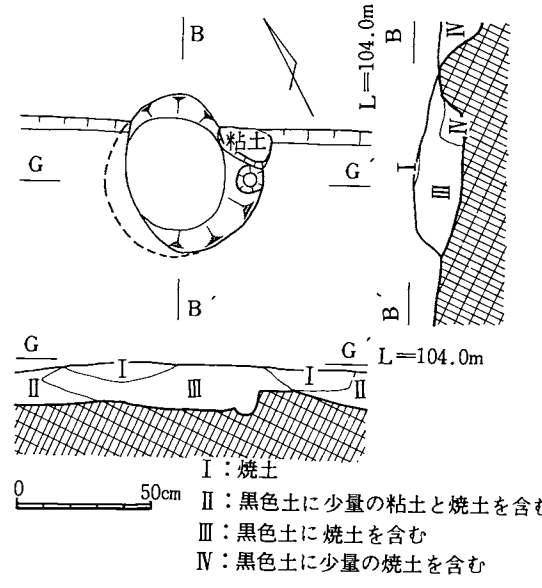
カマド付竪穴式住居である。方形の平面形を意図して建築されたものであろうが、形に少し歪みがある。各壁の長さをカマドのある北側の壁から右廻りに順に記すと、5.2m・5.0m・5.2m・5.1mである。

カマドと床面を残して、壁の立ち上りの部から上をほとんど削平された状態で遺構を検出した。幸にも、床面の硬化が進んでいたこと・床面の土の色と周辺の基盤となる土の色とにいくぶんかの色の差が認められたこと・埋土中に焼土粒や炭素粒が含まれていたため、遺構の検出が可能であった。

住居址の主軸がカマドの主軸と重なっていると仮定すると、主軸の方向は、磁北に対して30°東にふれる。

住居址の床面及び周辺部に、多数の柱穴群が検出された。これ等の柱穴は、壁の一部や貯蔵穴を切っているので、当遺構より新しい遺構である。

第Ⅱ－3号住居址に伴う柱穴は、柱穴の埋土及び検出位置から、P_1・P_2・P_3・P_4と推定される。柱穴の直径は0.33～0.45mである。床面からの深さは0.2m（P_1）・0.5～0.6m（P_2・P_3・P_4）である。柱穴P_1は、他の3基の柱穴に比較して浅いが、P_1に変わる柱穴は検出されなかった。



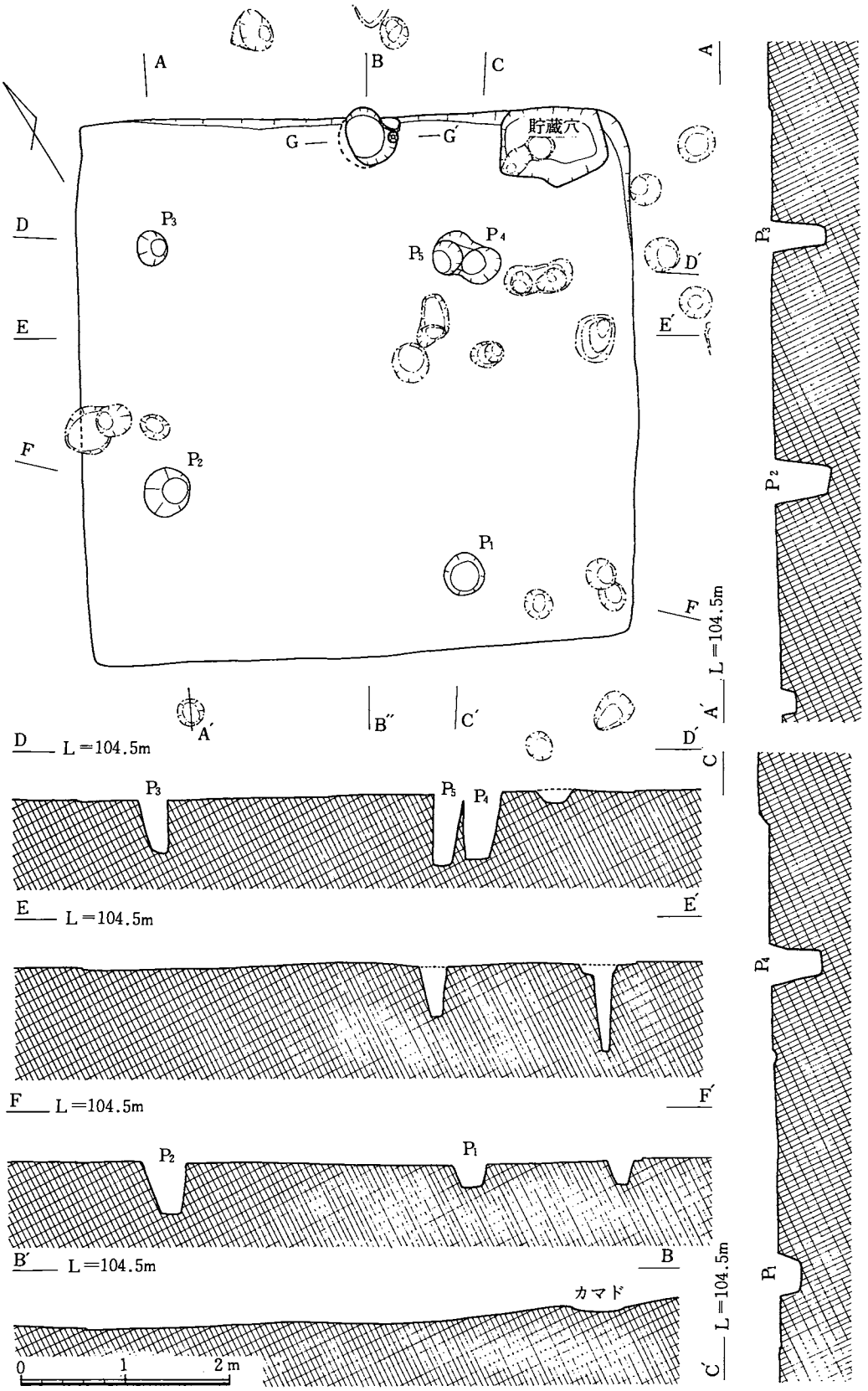
第38図　第Ⅱ－3号住居址カマド実測図

カマドは、住居址の北側壁のほぼ中央に位置する。右袖の基部のほんの一部が残存するのみである。火床の平面形は、円形（0.5m×0.4m）に近いことから、全体的な形状は焚口が短かくダルマ状を呈していたのであろう。

カマドの右袖にかかる部分に、小さな穴（直径7cm・床面からの深さ100cm）が検出された。この穴は、右袖を補強するために細長い石かそれに類する物を入れていた可能性がある。

カマドの右手の隅に長方形（0.5m・0.3m・深さ0.3m）の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴の埋土と住居址の他の埋土との差異は認められなかった。また遺物も出土しなかった。貯蔵穴のほぼ中央部は、先も述べた後世の柱穴と切り合っていた。

住居址内からの出土遺物は、土師器の細片（器種不明）が少量認められたのみである。



第39図　第Ⅱ－３号住居址実測図

(10) 第Ⅱ－4号住居址（第40図）

カマド付竪穴式住居址である。当遺構は、第Ⅱ－3号掘建住建物遺構によって切られている。また、カマドの東側4分の一は削平され、カマドの正面には貯蔵穴（後世のイモ穴）が掘られている。

住居址の平面形は、長方形（東西6.1m、西北4.6m）である。遺構検出面からの床面までの深さは0.1m未満であり、遺構の上部はほとんど削平されている。

第38図に示した硬化面の範囲をのぞいて、床の硬化は、さほど進んではいない。柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居址の北壁のほぼ中央に位置する。カマドの主軸は、壁に対して直角になっていない。カマドの焚口部分は、先に述べたイモ穴によって切り取られている。

カマドの両袖の基部は、幸にも残存している。カマドの最大幅1.3m、燃焼室の幅0.4mを測る。燃焼室の左側隅の柱穴は、後世の遺構である。燃焼室の埋土は、3層に分かれる。

カマドの構築面（袖の粘土を積み上げるための基底面）は、周辺の床面より少し高く（約5cm）なっている。このことは、カマドを構築した後に、周辺部（カマドの両側面及び床面の一部）を整形したためと思われる。

遺構内から、住居址の年代を推定する遺物は、出土しなかった。

埋土は、第Ⅱ－1号住居址の埋土より少し黒褐色の度合いが強いが、平面形が両者とも類似することから、互に近い年代の遺構と推定される。

(11) 第Ⅱ－5号住居址（第41図）

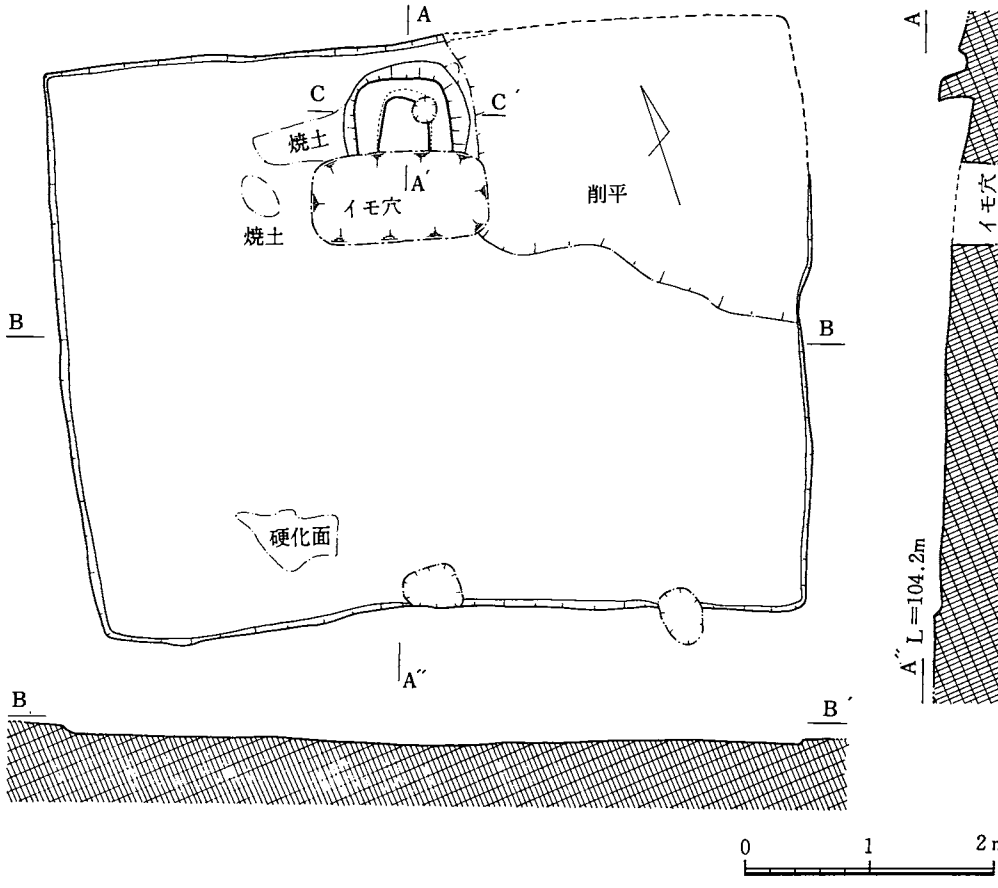
カマド付竪穴式住居である。平面形は、ほぼ方形であるが、形が少し歪んでおり、等脚台形状を呈する。カマドのある壁から右廻りに各壁の長さを記すると、4.6m・4.6m・4.6m・5.1mである。

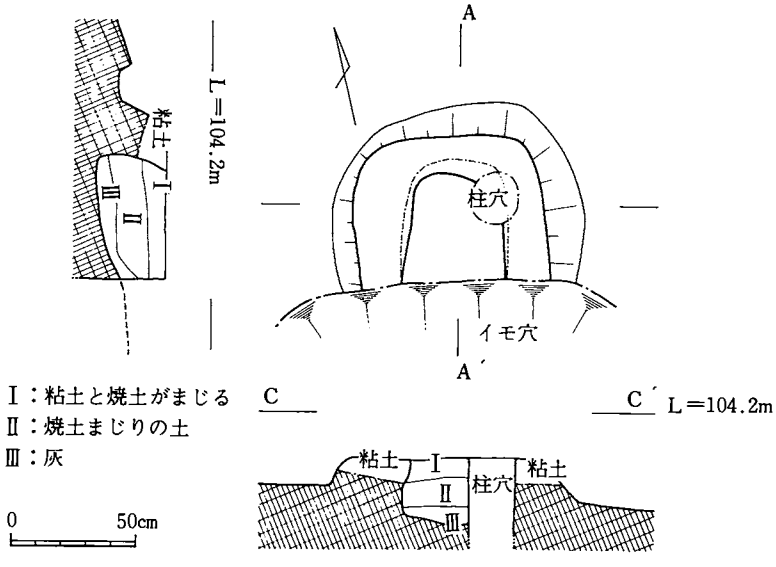
住居址の南側の一部を一直線に、近世の溝が切り取っている。しかし、南側の壁及び柱穴は幸にも残存していた。

柱穴は8基有り、四隅の柱の間隔は4.1～4.3mと推定される。四隅の柱の位置は、他のカマド付住居と比較すると、最も壁の近くに設けられている。このことは、住居内の利用可能な空間を最大に利用しようと工夫がなされていたと推定される。

柱穴の掘り方の径は37～22cm、最も深い柱穴と浅い柱穴の深さの差は34cmである。

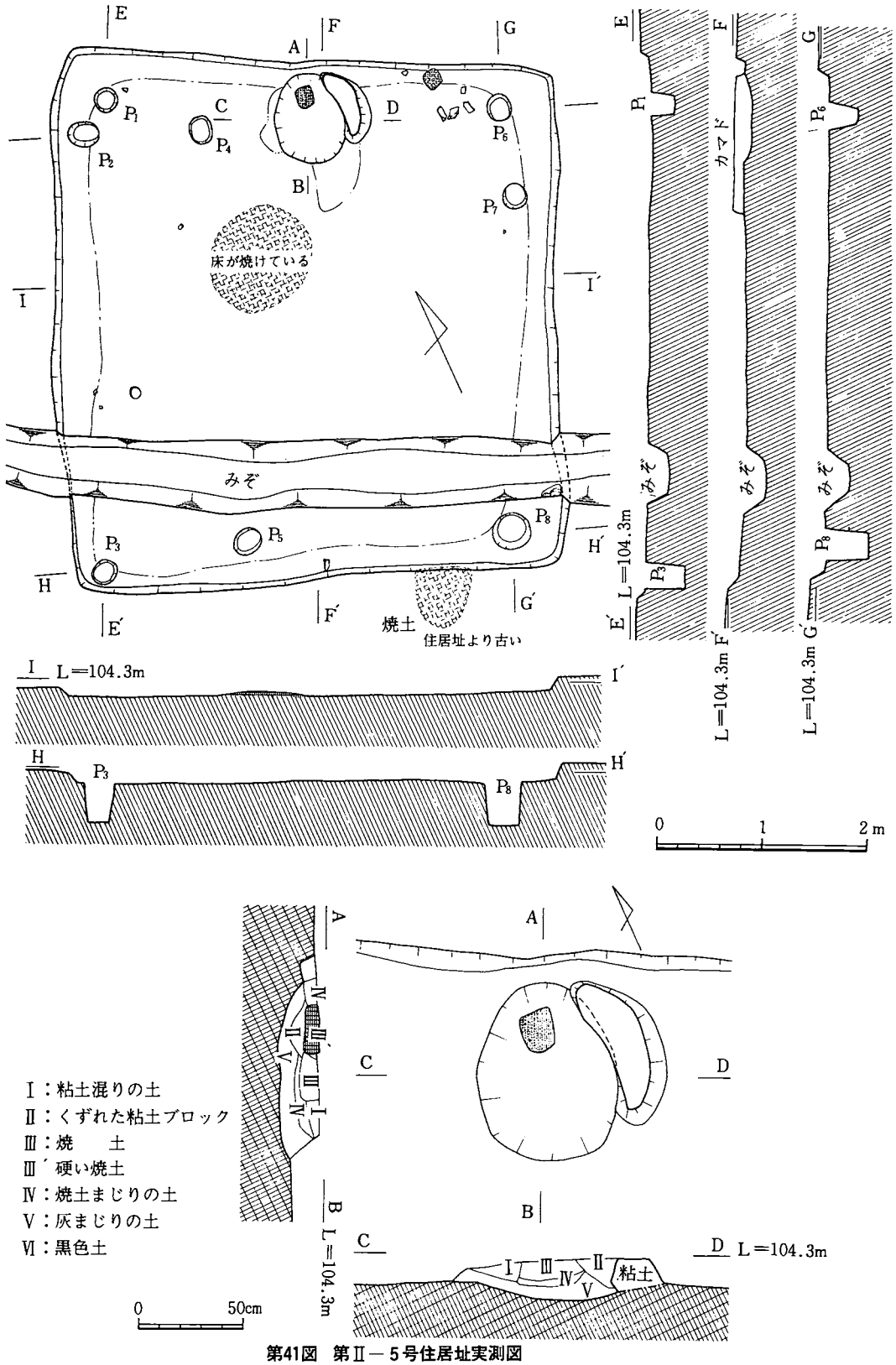
床の硬化面は、壁際近くまで広がる。硬化は中央部が強く、周辺部がやや弱くなっている。カマドの焚口近くには、隋円形（1m×0.9m）の焼けた床面が見られる。なぜ、この様な床面が有るのか、不明である。





Ⅰ：粘土と焼土がまじる
Ⅱ：焼土まじりの土
Ⅲ：灰

第40図　第Ⅱ－４号住居址実測図



第41図　第Ⅱ－5号住居址実測図

第６表　第Ⅱ－５号住居址の柱穴一覧表

柱穴番号		P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
柱穴の掘り方の大きさ(cm)	最大径	24	30	25	27	28	26	25	37
	最少径	24	23	23	22	24	23	24	35
	海抜 104.3m からの深さ	40	43	53	39	70	39	26	52

カマドは、北側壁のほぼ中央に位置する。カマドの主軸と住居址の主軸は、ほぼ平行であり、主軸の方向は磁北に対して25°東側にふれる。

カマドの遺存状態は良くない。ただ、右袖の一部と炉床のみが残る。炉床は、隋円形の盆状(84cm×68cm）を呈する。

遺構検出面から床面までの深さは0.2m 未満である。住居址の南側に、当遺構によって切られた焼土の広がりが有る。この焼土の年代は未詳である。

出土遺物としては、カマドの東側から、土師器片（カメの砕片）が出土している。

(12) 第Ⅱ－６号住居址（第42図）

カマド付竪穴式住居である。南西の隅が２号溝遺構によって切られている。２号溝遺構は、第Ⅱ区の東側で10号溝（近世の遺構）と切り合い、10号溝より新しいので、近世の遺構である。

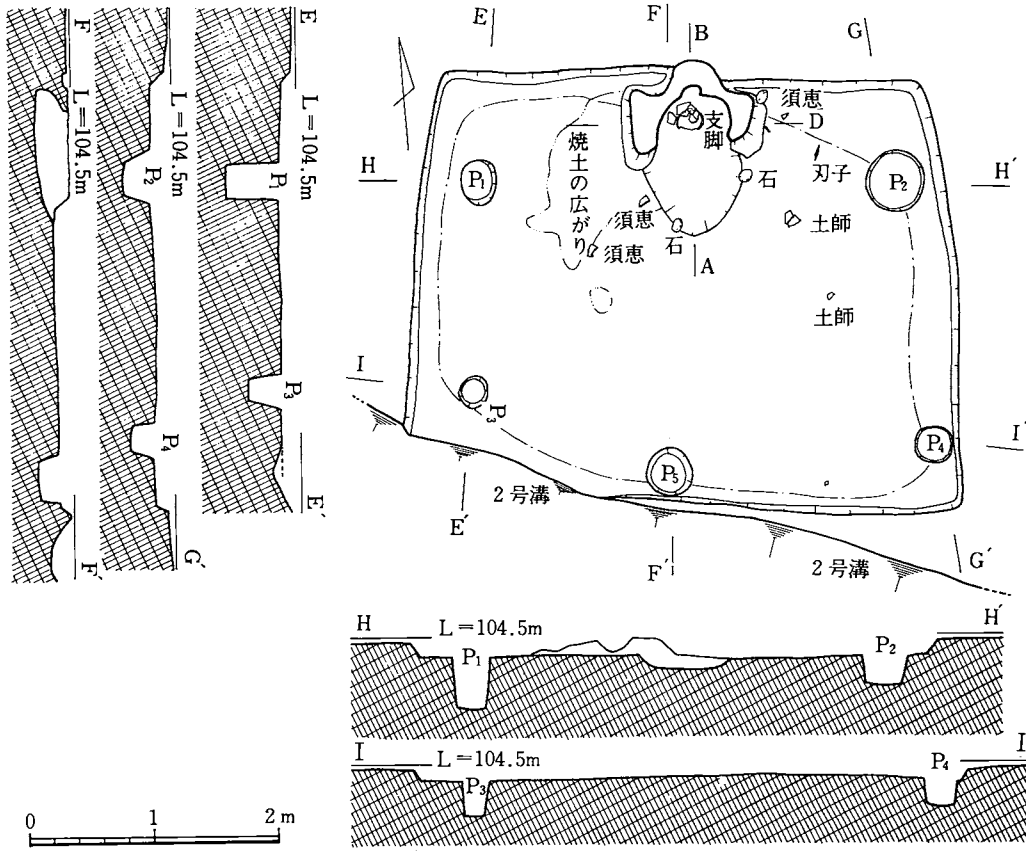
第Ⅱ－６号住居址の平面形は、方形を意図して建築されたものであろうが、平面形に歪があり、台形状を呈する。各壁の長さをカマドのある壁（北側）から右廻りに記すと、3.7m・3.4m・4.5m（推定）・3.4m（推定）である。

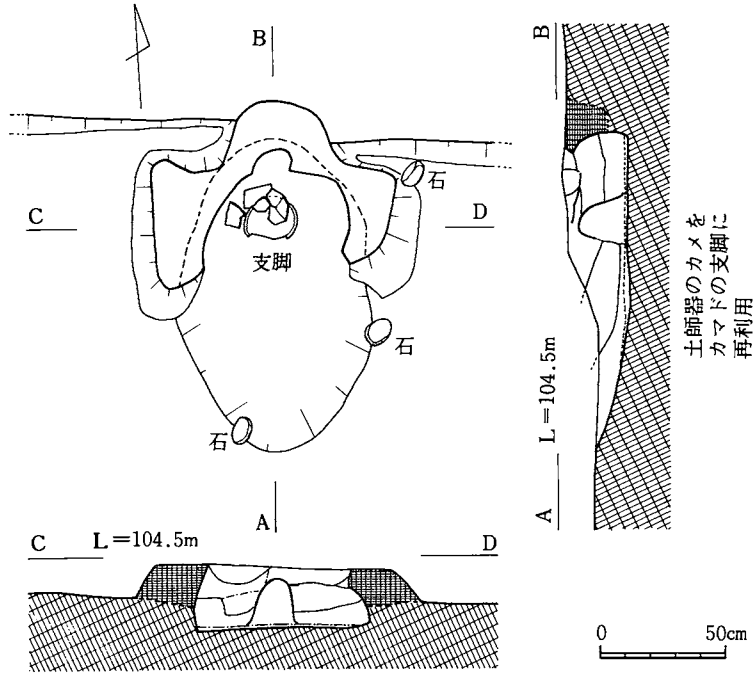
柱穴は５ヶ所検出された。４基の柱穴（P_1・P_3・P_4・P_2）を結ぶ形は、当住居址の平面形とほぼ相似になる。住居址の主軸の方向はほぼ磁北の方向に（N－5°－E）である。

４基の柱穴の直径0.25～0.50m、床面からの深さ0.2～0.4m を測る。柱穴P_5は南側壁際で、しかも、壁のほぼ中央に位置する。柱穴P_5の直径は0.37m、床面からの深さ0.15m を測る。

カマドは、住居址の北側壁のほぼ中央に位置する。焚口から燃焼室の奥壁までは、1.25m・幅0.75m を測る。カマドの両袖の前半分および煙道部を欠失する。燃焼室の床（火床）は平であり、焚口部の床はゆるやかな弧を描く。

燃焼室の中央に、土師器のカメを伏せて支脚として利用している。支脚の径0.2m・高さ0.18m を測る。この支脚は、カメの口縁の一部が欠失したものを再利用している。





第42図　第Ⅱ－6号住居址実測図

遺構検出面から床面までの深さは0.15ｍ未満である。床の硬化は、カマドの焚口の正面付近が強く進んでおり、床の南側は壁際まで硬化している。硬化の進み具合から、入口の位置を柱穴ＰとＰの間の南側正面と推定できるであろう。

出土遺物は、カマドから支脚（土師器）・土師器片、床面直上から須恵器片・土師器片・鉄製品等である。

２．掘建柱建物遺構

(1)　第Ⅰ－１号掘建柱建物遺構（第43図）

第Ⅰ区内において、掘建柱建物遺構としては当遺構１基のみである。柱穴の掘り方（９基）は円形であり、長方形の辺上にほぼ並んでいる。

柱穴の掘り方の直径0.4～0.6m、掘り方の遺構検出面からの深さ0.25～0.40m、柱痕跡の直径0.18～0.35m を測る。

柱穴の配列の様子から、切り妻の屋根を持つ家屋が推定される。P_2P_7の方向が棟の方向（主軸の方向）と仮定したとすると、主軸は磁北に対して105°東方にふれる。このことから、南向き（やや東にふれる。）の家屋である。

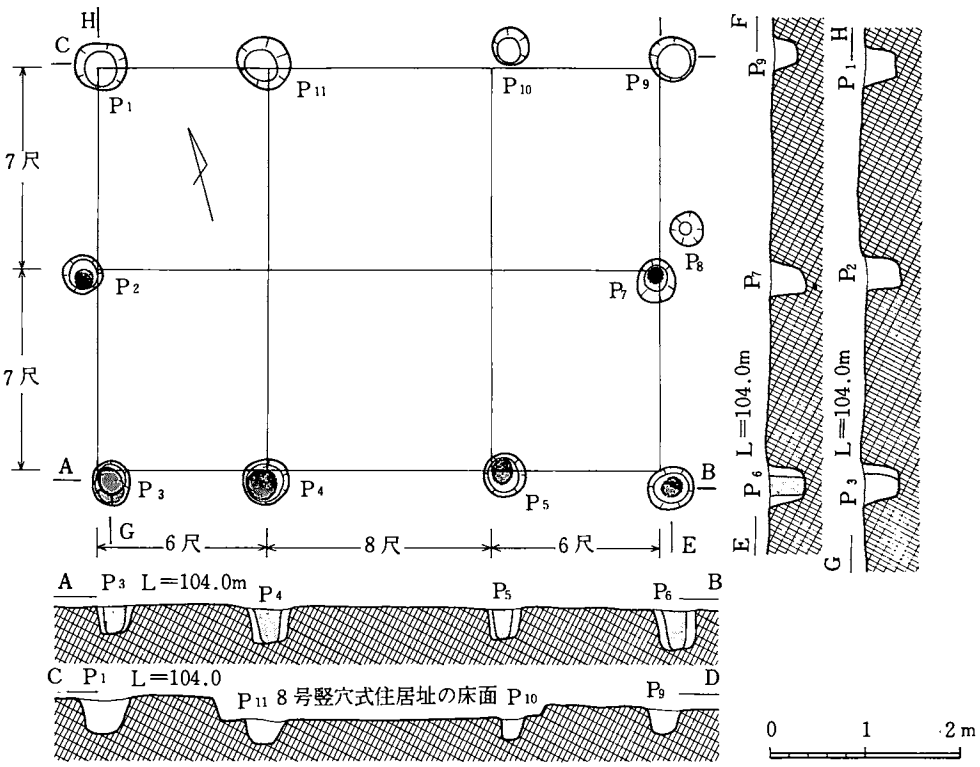
家屋の大きさは、第43図に示すように、東西６ｍ（２丈）・南北4.2m（１丈４尺）と推定した。しかし、柱穴の並び方をよく見ると、一直線あるいは直交するようにきっちりとは並らばず、千鳥に並んでいると思われる。このことは、家屋の復元した大きさを推定する時、柱の内面を取るか外面を取るかで、柱の直径分の桁や梁の長さに差異を生ずる。この桁や梁の長さの差異について、当遺構に適応させると、最小の柱痕跡を基準とした場合18cm（６寸）差異を生ずることになる。

第７表　第Ⅰ－１号掘建柱建物遺構の柱穴一覧表

柱穴の番号		P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}
柱穴の掘り方の大きさ	最大径 cm	55	42	47	51	45	50	46	35	49	40	58
	最少径 cm	48	40	40	49	45	43	40	33	48	38	53
	海抜104.6mからの深さ	47	53	46	48	43	53	52	37	42	46	52
柱根跡の大きさ	最大径 cm	—	21	38	33	26	23	17	—	—	—	—
	最少径 cm	—	19	29	31	23	19	17	—	—	—	—
	海抜104.0mからの深さ	—	52	42	48	43	50	50	—	—	—	—

柱穴P_8は、P_7の補強のための柱であろう。P_8を棟持柱の柱穴と考えて、柱穴P_2の周辺部を精査したが、柱穴を検出できなかった。このことから、柱穴P_8は棟持柱とは考えられない。

当遺構は、第Ⅰ－8号住居址の遺構（弥生時代後期）と切り合うことは、先に述べた。柱穴の埋土の土色は黒色であり、カマド付竪穴式住居遺構の埋土と類似することから、時期的差異は、さほどないと推定される。柱穴から、年代決定に結びつく遺物は、何等出土しなかった。



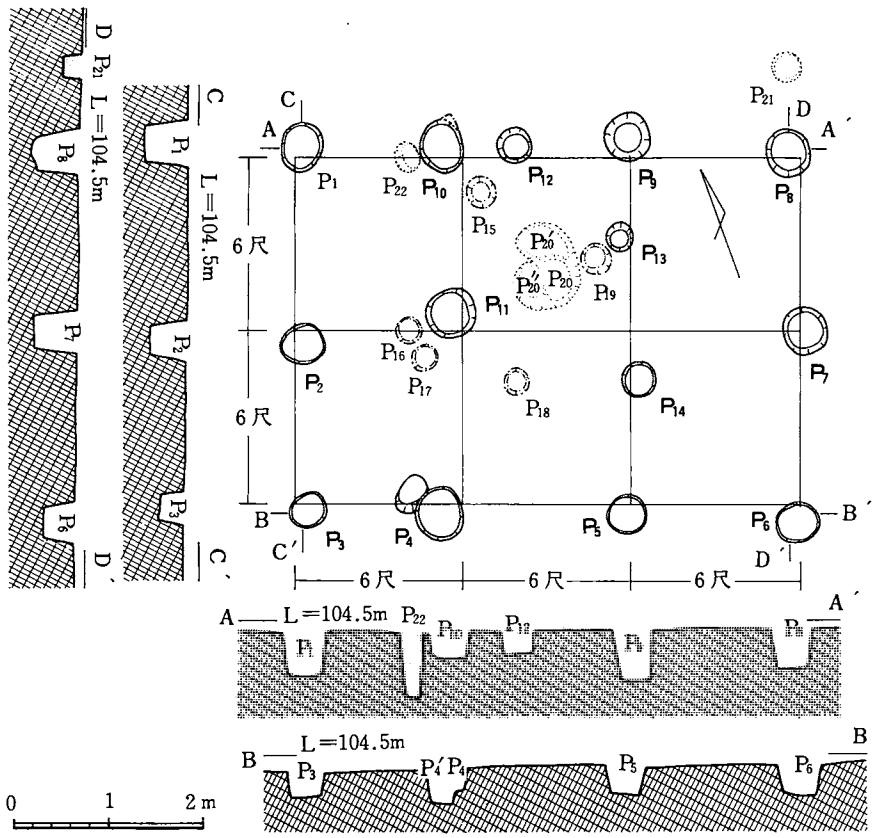
第43図　第Ⅰ－1号掘建柱建物遺構

(2)　第Ⅱ－1号掘建柱建物遺構（第44図）

第Ⅱ－1号環状溝の南西側の溝を切るように広がる23基の柱穴群を検出した。これ等の柱穴の内、対応関係が明良な遺構は、14基のみである。第Ⅱ－1号掘建柱建物の柱穴と推定した14基の柱穴の内、柱穴P_{13}は、柱穴P_9とP_5を結ぶ線上に有ることから、第Ⅱ－1号掘建柱建物の柱穴として比定したが、柱穴P_{12}・P_{13}の掘り方の直径が小さいので疑問がわずかながら残る。

柱穴P_{14}は、柱穴P_2とP_7を結ぶ線上から柱穴の掘り方の直径の大きさほど隔れているが、柱穴PとP_9を結ぶ線上にあることから、当遺構の柱穴と判断した。また、柱穴P_{14}の掘り方の直径は柱穴P_3の掘り方の直径と近似することから、疑問視する必要はないと思われる。

柱穴P_{12}は、柱穴P_{10}との間隔が狭いが、掘り方の直径は、柱穴P_{13}やP_{14}と近似する。また、柱穴P_1とP_8を結ぶ線上にあることから、当遺構の柱穴と思われる。



第44図　第Ⅱ－１号掘建柱建物遺構

柱穴の配列（第44図）から、当遺構は総柱の建物（２間×３間）と推定される。しかし、柱痕跡を確認できなかったので、柱の大きさは明確でない。各柱穴の掘り方の大きさ（径）と底面の高さ（海抜104.5m からの深さ）は、第８表の一覧表 に示す。

第８表から、柱穴の掘り方の大きさは、P_4が最大（ほぼ円形、最大径１尺９寸・最小径１尺７寸）であり、P_{13}が最小（ほぼ円形・径１尺）である。多くの柱穴の掘り方の径は、ほぼ１尺６寸～１尺７寸程度と見なされる。

柱穴の掘り方の底面の高さを各掘り方ごとに対比すると、最も高いのは柱穴P_{12}であり、次に高いのは柱穴P_{10}である。また、最も低いのは柱穴P_{13}である。最低と最高の差は49cm（約１尺６寸）と大きいが、他の柱穴間の差は15cm（５寸）程度であり、意外と均平である。

柱穴の全体的な並び方を観察すると、両端の柱穴を結ぶ線に対して、千鳥に並ぶことは、他の掘建住建物遺構と同様である。第44図に示すように、柱穴P_2とP_7を結ぶ線を主軸（棟の方向）と推定すると、南北幅3.6m（１丈２尺）・東西幅5.4m（１丈８尺）の総柱の掘建柱の建物が復元される。

上に示すような建物を推定したとき主軸の方向（棟の方向）は磁北に対して70°西にふれる。推定した柱と柱の間隔（柱間）は、第44図にも示すように、６尺（１間）となる。

第8表　第Ⅱ－1・Ⅱ－1′号掘建柱建物遺構の柱穴一覧表

柱穴の掘り方の番号		P_1	※ P_2	P_3	P_4	P_5	※ P_6	P_7	※ P_8	P_9	※ P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}
柱穴の掘り方の大き	最大径　cm	—	32	41	—	22	34	27	31	36	30	29	43	33	39	22
	最小径　cm	—	22	27	—	22	29	25	27	29	29	25	35	28	27	21
	海抜105.0mからの深さcm	100	143	135	90	109	128	120	104	113	110	112	150	119	114	108

P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}	P_{24}	P_{25}	P_{26}	P_{27}	P_{28}	P_{29}	P_{30}
29	30	34	36	30	40	25	35	33	25	26	37	30	31	25
22	27	28	36	26	28	10	32	25	24	25	33	28	26	25
106	116	104	134	135	130	128	116	115	118	120	140	97	117	120

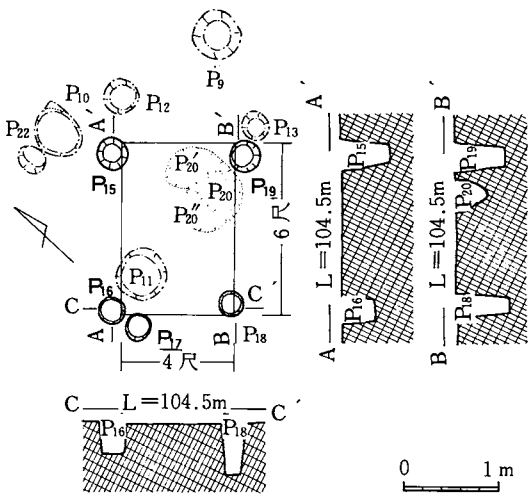
P_{31}	P_{32}	P_{33}	P_{34}	P_{35}	P_{36}	P_{37}	P_{38}	P_{39}	P_{40}	P_{41}	P_{42}	P_{43}	P_4	P
—	30	37	22	32	25	30	45	36						
—	24	31	17	31	23	26	25	33						
89	100	122	97	117	1	118	93	—(未決り定)						

(3)　第Ⅱ－1′号（5号）掘建柱建物遺構（第45図）

第Ⅱ－1号掘建柱建物遺構に伴う柱穴と推定される14基の外に、9基の柱穴が同一区域から検出されている。これ等9基の柱穴群との前後関係については、明らかではない。

9基の柱穴の掘り方について、それぞれの対応関係を調査過程で検討したが、どのような遺構が存在したか、全く不明であった。

9基の柱穴の対応関係を明らかにするために、図上において柱穴P_5・P_6・P_8・P_9を結んだ。その結果、南北幅4尺・東西幅6尺の小さな小屋のような遺構（4



第45図　第Ⅱ－1′号（5号）掘建柱建物遺構

本柱の建物）の平面図（第45図）が浮び上った。

４基の柱穴の掘り方（P_{15}・P_{16}・P_{18}・P_{19}）の形状はそれぞれ類似（円形・直径１尺）することから、４本柱の小さな建物の所在を推定することは可能であろう。また、柱穴P_{17}も上記４基の柱穴に類似し、柱穴P_{16}とP_{18}を結ぶ線に接し、柱穴P_{17}とP_{18}の距離が３尺であることから、この遺構の柱穴と思われる。

第Ⅱ－１′号（５号）掘建柱建物遺構の検出過程から、実在については、多少の不安が残る。しかし、類似する規模の５基の柱穴が実在することは事実であり、23基検出した柱穴群の中で、対応関係をどう見なすかであろう。参考のため、同遺構の所在について推測したことをここに述べた。

(4)　第Ⅱ－２号掘建柱建物遺構（第46図）

Ｒ－10グリッド附近より検出した28基の柱穴の内、25基の柱穴の並び方を見て、当初、２間×３間の母屋に３尺の庇を南側と北側に持つ建物であろうと推定した。

推定した建物の平面形を復元する意味で、遺構面に水糸を張り、各々の柱間を計測した。その結果、柱穴P_{12}・P_{20}を結ぶ線と柱穴P_1・P_8を結ぶ線が並行でない（柱穴P_{12}P間の距離が柱穴$P_{20}$$P_8$間の距離より少し長い）ことに気付いた。まず、この程度の建物に、はたして、両方に庇が付くかどうかとの疑問も出された。柱穴の埋土が、各柱穴とも類似し、柱痕跡も検出できなかったことが、このような議論を経ねばならなくなった原因である。

この議論から解るように、先の一棟説と後者の二棟説とに分れた。しかし、南北方向の柱穴の間隔から、２間×３間の建物が３尺ほど柱穴をずらせて建更えられたのであろうとの結論（二棟説）に達した。

第Ⅱ－２号掘建柱建物遺構の柱穴と推定される掘り方の数は、11基である。11基の柱穴の全てから、柱痕跡を確認することができなかったことは、先に述べたとおりである。

11基の柱穴の対応関係から、柱穴$P_2$$P_7$を結ぶ線（建物の主軸）を棟の方向とする掘建柱の建物（２間×３間）であると推定した。建物の主軸の方向（棟の方向）は、磁北に対して76°西方にふれる。各柱穴の掘り方の大きさ（径）と底面の高さ（海抜105.0m からの深さ）を、第９表の一覧表に示す。第９表から、柱穴の掘り方の大きさは、P_9が最大（だ円形・長径２尺６寸・短径１尺７寸）であることが解る。

柱穴の切り合が、P_3とP_5において見られることから、柱の建て更え（又は補強）がなされていることが明らかである。

柱穴P_3の掘り方内に巨礫（径0.2m 前後）を柱の根締めとして入れている。この礫と掘り方の径の差から、柱穴P_3に建っていた柱の径（約24cm・８寸）が推定される。

柱穴の掘り方の底面の高さを各掘り方ごとに対比すると、P_{10}の海抜が最も低く、P_5が最も高

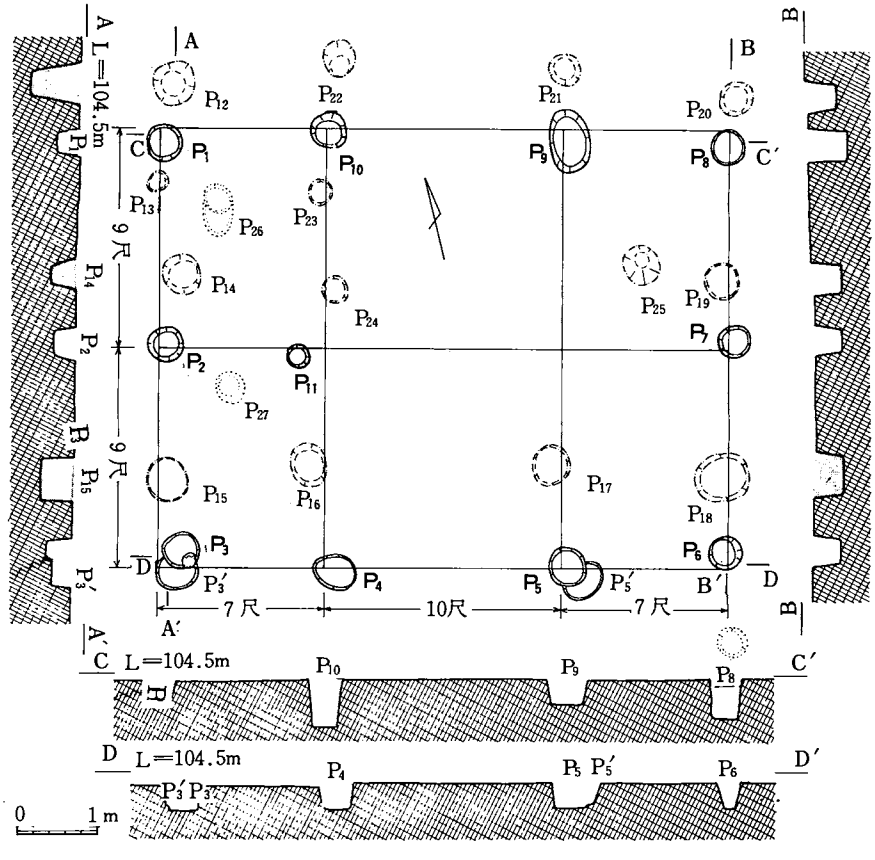
く、その差は35cm（約1尺2寸）である。

柱穴P_2とP_7を結ぶ線を主軸として建物を復元すると、南北幅（P_1P_3・P_6P_8）が 5.4m（1丈8尺）、東西幅（P_3P_6・P_1P_8）が7.2m（2丈4尺）と推定される。

柱穴の並びを観察すると、千鳥に並んでいることが解る。このことが、心取り（棟の方向や柱と柱を結ぶ中心線）を困難にする。推定した柱と柱の間隔は、第43図に示すように、7尺・9尺・10尺である。

両端の柱を結ぶ線を引く（心取りをする）と、柱の直径～半径の分（桁や染の直径の分？）だけさけて柱を建てたと推定される。このことを加味して、柱と柱の間隔を推定すると、上記の数値は、1間（6尺5寸程度）と1間半になる。つまり、この建物は、南北幅3間・東西幅3間半・広さ10坪半の大きさと推定される。

柱穴内からの出土遺物は、器種不明の土師器の微細な破片である。しかし、埋土の土色は、カマド付竪穴住居址の埋土と類似するので、それと近い年代の遺構であろう。



第46図　第Ⅱ－2号掘建柱建物遺構

(5) 第Ⅱ－２′号（４号）掘建柱建物遺構（第47図）

先に示した第Ⅱ－２号掘建柱建物遺構の柱穴群と同一区面内より検出した。２号の柱穴群と当遺構の柱穴群との並びの微小な差異から、当遺構の所在に気付いたことは、先に述べた。

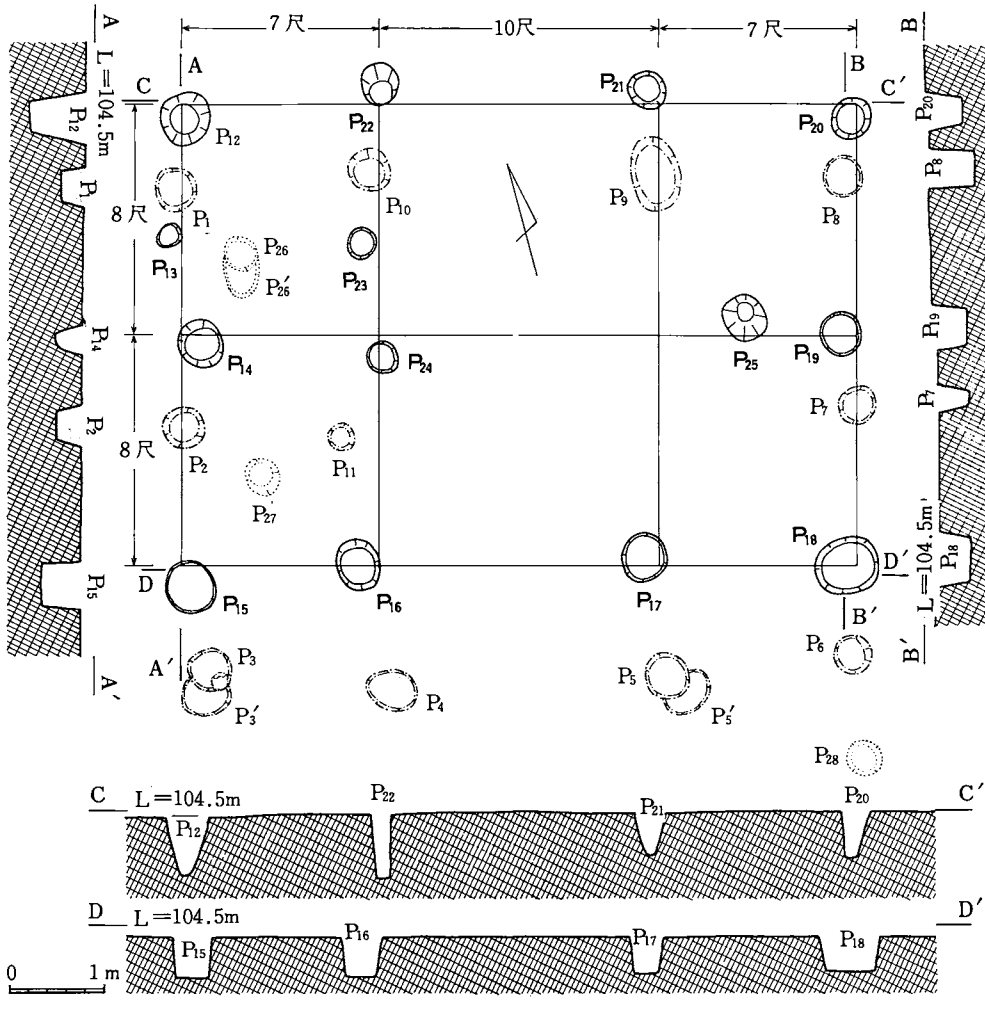
柱穴内から、柱痕跡を検出できなかったことは、２号掘建柱建物遺構の場合と同様である。

28基の柱穴の内、11基の柱穴は第Ⅱ－２号掘建柱建物遺構であり、14基の柱穴は第Ⅱ－２′号（４号）掘建柱建物遺構に伴う掘り方であると推定した。残り４基の柱穴（P_{26}・P_{26}・P_{27}・P_{28}）については、対応する遺構を検出することができなかった。

第Ⅱ－２′号（４号）掘建柱建物遺構の柱穴であると推定した14基の掘り方の大きさ（径）と底面の高さ（海抜105.0m からの深さ）は、第９表に示す。

第９表から、柱穴の掘り方の大きさは、P_{18}が最大（円形に近いだ円形、長径２尺３寸、短径２尺）であり、P_{13}（ほぼ円形・径８寸）であることが解る。

柱穴の掘り方の底面の高さを各掘り方ごとに対比すると、P_{20}の海抜が最も高く、P_{25}の海抜が



第47図　第Ⅱ－２′号（４号）掘建柱建物遺構

最も低く、その差は82cm（２尺７寸）である。

柱穴P_4とP_{19}を結ぶ線を主軸（軸の方向）とすると磁北に対して74°西方にふれる。

建物の南北の幅（$P_{12}P_{15}$・$P_{18}P_{20}$）は、4.8m（１丈６尺）、東西の幅（$P_{15}P_{18}$・$P_{12}P_{20}$）は7.2m（２丈４尺）と推定される。

推定した柱と柱との間隔は、第44図に示すように、７尺・８尺・10尺である。

第Ⅱ－２号掘建柱建物遺構とこの遺構と対比すると、南北の幅が２尺異なるのみである。つまり、柱と柱の間が９尺の部分が８尺になり、他に変化がない。

上記２棟の建物の間で生じた柱間の１尺の差異について、当初、南北１丈８尺、東西２丈４尺の建物（第Ⅱ－２号棟）があり、この建物の部材を再利用して、南北１丈６尺、東西２丈４尺の建物（第Ⅱ－２′棟）を建設したと推定してみた。古い建物の部材を再利用して建物を建てる時、桁・梁あるいは柱の長さを少し切り縮め、不足分を新しい材木で補うことは現在でも行なわれている。このように考えると、25基の柱穴群から復元された（推定される）２棟の建物の新旧関係は明らかであるが、これはあくまで推測でしかない。

柱穴内の埋土の中から、年代の手がかりとなる遺物は出土しなかった。しかし、埋土の土色は、カマド付竪穴住居址の埋土と類似するので、それと近い年代の遺構であろう。

第９表　第Ⅱ－２・Ⅱ－２′号掘建柱建物遺構の柱穴一覧表

柱穴の番号		P_1	P_2	P_3	P_3	P_4	P_5	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}		P_{26}	P_{26}	P_{27}	P_{28}
柱穴の大きさ	最大径cm	45	45	47	52	56	50	55	41	42	44	78	46	30		40	—	40	38
	最小径cm	42	44	44	—	42	47	—	40	38	40	51	45	29		35	34	35	37
	海抜105.0mよりの深さ	90	94	101	95	98	97	85	100	102	107	90	120	102		121	102	131	106

柱穴の番号		P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}	P_{24}	P_{25}
柱穴の大きさ	最大径cm	57	27	51	57	55	52	68	47	45	41	44	34	35	49
	最小径cm	52	22	45	52	46	48	58	43	31	39	40	30	33	42
	海抜105.0mよりの深さ	124	97	98	111	99	106	104	99	88	103	126	130	145	170

(6) 第Ⅱ－３号掘建柱建物遺構（第48図）

第Ⅱ－４号住居址（カマド付竪穴式住居）の遺構を切る15基の柱穴群から成る。当遺構は第Ⅱ区の西側の端から検出した。

15基の柱穴の内、12基の柱穴の掘り方の内部には柱痕跡が明良に確認された。このことから、

総柱の建物（２間×３間）であることは明らかである。

各柱穴の掘り方・柱痕跡の大きさ（径）と底面の高さ（海抜104.5m からの深さ）は、第45図の柱穴の断面図に示す。

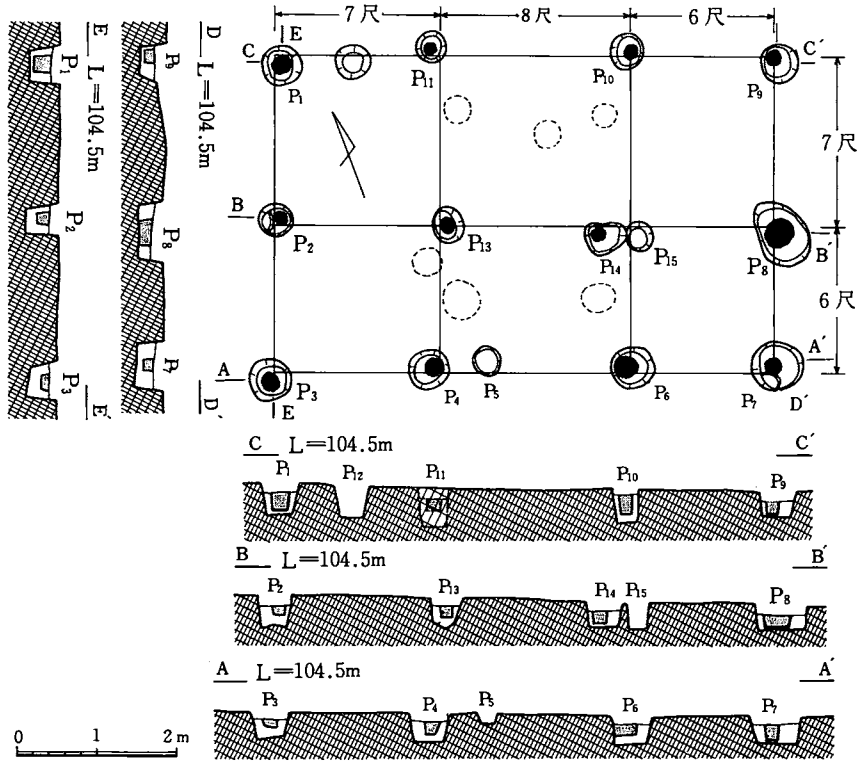
柱穴の掘り方の大きさは、P_8が最大（だ円形・長径３尺・短径２尺）であり、他はほぼ類似（円形・直径１尺６寸前後）することが解る。柱痕跡が残る柱穴の掘り方の底面の高さを各掘り方ごとに対比すると、P_3の海抜が最も高く、P_1が最も低く、その差は15cm（５寸）である。

柱痕跡についても掘り方の場合と同様に対比（最小値に注目）してみると、やはりP_8が最大（直径１尺１寸）で、次にP_6（径７寸程度）であるが他は６～７寸の大きさである。

柱痕跡の長径と短径の差および形状から見て、自然の丸太を柱として利用した建物と推定される。このことは、各柱痕跡の大きさのばらつきからも言えるであろう。

柱痕跡の底面の高さを各柱穴ごとに対比すると、P_3が最も高く、P_7が最も低く、その差は17cm（５～６寸）である。このことから、各柱の長さはそれぞれ異なることが解る。

柱痕跡P_2とP_8を結ぶ線を主軸として建物を復元した場合、南北幅（P_1P_3・P_9P_7）が3.9m（１丈３尺）、東西幅P_3P_7・P_1P_9）が6.3m（２丈１尺）と推定される。



第48図　第Ⅱ－３号掘建柱建物遺構

P_2とP_8を結ぶ線を主軸とした場合、主軸は磁北に対して70°西にふれる。

柱痕跡の並びを観察すると、千鳥に並ぶことが解る。この千鳥に並ぶ柱列に対して、両端の柱を結ぶ線を引き心取りをした場合、柱の直径～半径の分（桁や染の直径の分？）だけさけて柱を建てたと推定される。

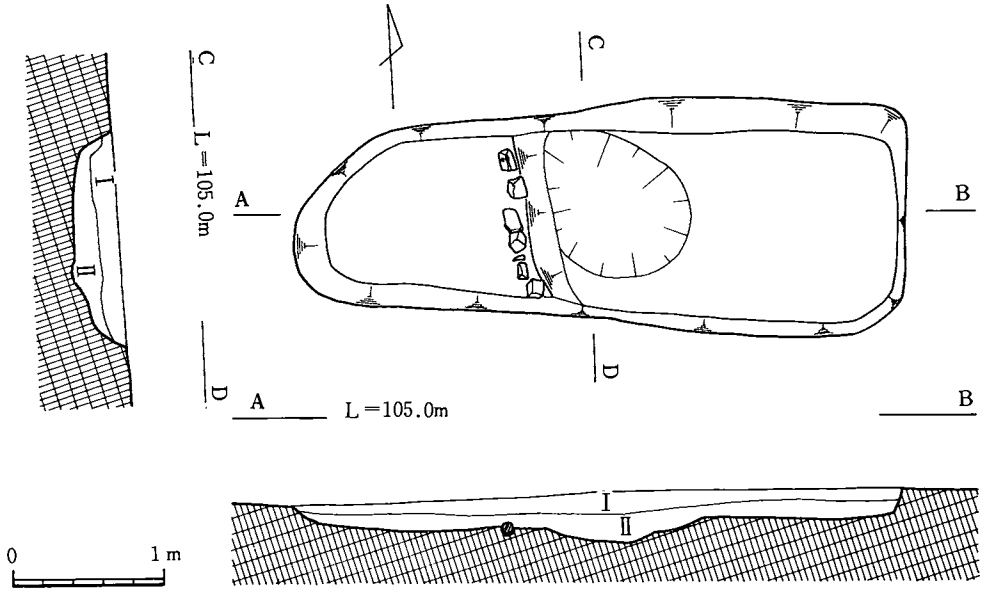
当遺構について、上記の点を加味して、再び建物の復元形を推定してみる。柱痕跡から、先にも述べたように、多くの柱の直径は６～７寸である。このことから、第45図で復元した柱間に対して、５寸程度の出入は許されることになるであろう。そのように考えると、南北１丈３尺を６尺５寸・８尺・６尺５寸に分けることができる。このことから、柱間（１間）は６尺５寸を基準とした建物であると推定される。

３．土壙

(1)　第Ⅱ－１号土壙（第49図）

船形状の土壙(東西4.1m、南北1.5m)である。第49図に示すように、東西に長く、中央部が一番低くなっている。この中央部の低くなる肩の部分（西側）には、こぶし大の角礫を並べて縁どりをしている。

遺構検出面から底面までの深さは、0.4m未満である。埋土は、２層に分けられる。埋土の上層は、当遺構附近から検出した柱穴（掘建柱建物遺構）の埋土と類似した土から成る。下層は、



第49図　第Ⅱ－１号土壙（R-12グリッド）

黒褐色の土からなり、硬くしまっており、間に水でさらしたような土が、縞状に重なる。

埋土から、遺構年代は、掘建柱建作遺構の年代と同じか、または、近い年代と思われる。

遺構の性格は、下層の埋土の様子から、水が留まっていたと推定されることから、何かを洗浄する場所として、利用していた可能性が強い。

第５節　江戸時代の遺構

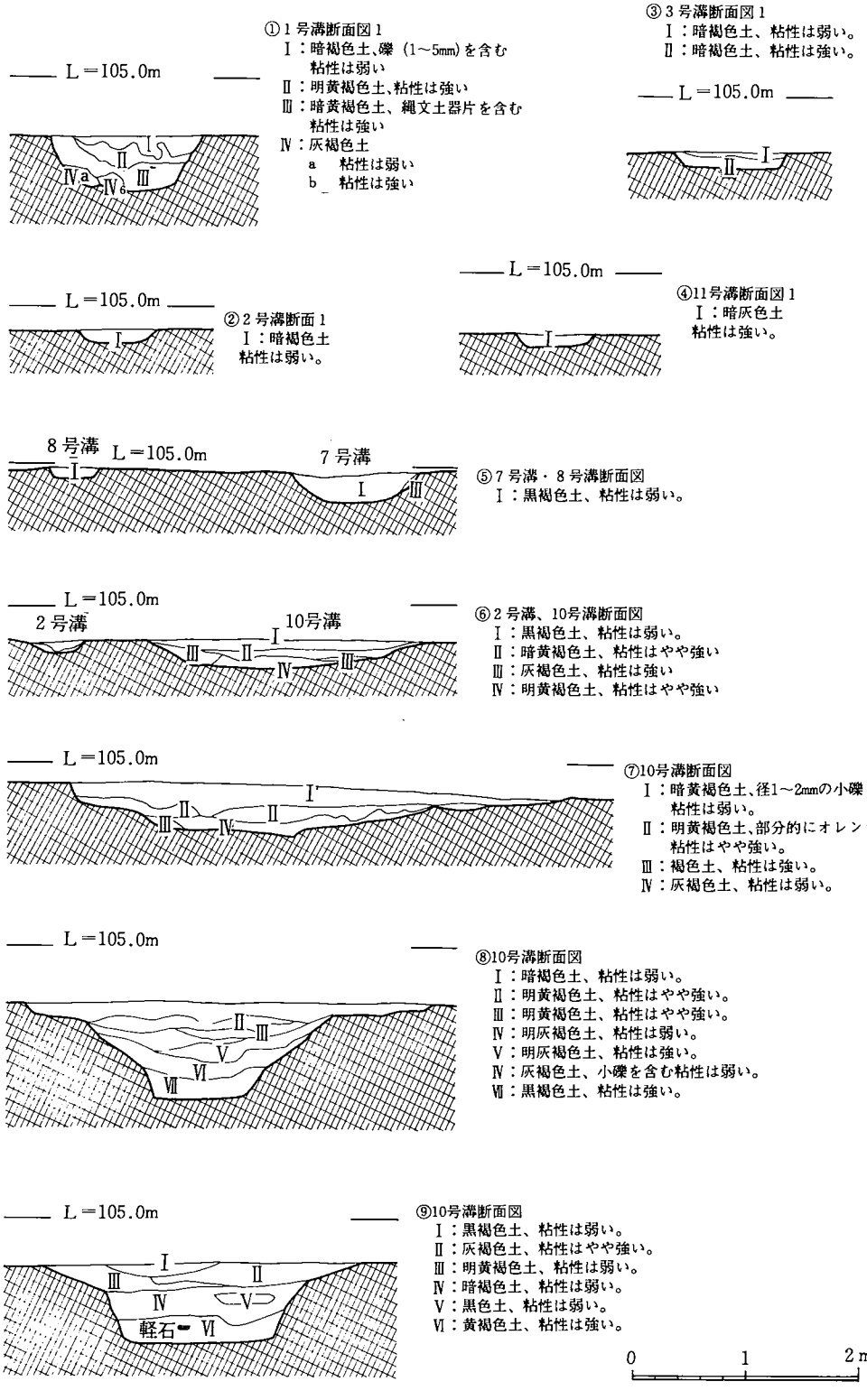
第Ⅰ区から２本・第Ⅱ区から12本の溝を発掘した。これ等の溝は、ほぼ東西又は南北に走っており、しかも、現在の畑の境界とほぼ一致している。

溝の幅や広さは各々異なっており、また同一の溝においても場所によって幅や深さが異なる。特に深さは所によって深かったり、浅かったりしている。１ｍ程度の深さの差違は普通のことである。しかし、全体的に見ると一定方向に傾いており、明らかに排水路としての機能を持っていたと推定される。

溝の底面の深さが異なり波打った状態になっていることについては、水の流速をおとすことに目的があるのではないかと推測される。

溝を掘削した理由としては、地表を流れる水によって、耕作土が流失するのを防ぐ目的が有ったのであろう。その外に、客土用の土を採土した跡も有るかもしれない。

溝は比較的に短時間に埋没しており、埋土中からは、染付けの碗や皿（波佐美焼、嬉野焼等）が出土する。



第50図　第Ⅱ調査区溝遺構断面図

第Ⅲ章　第Ⅲ・Ⅳ調査区検出の遺構

第１節　第Ⅲ調査区の遺構

当調査区は、第Ⅱ区の東側、森林組合事務所の西方に位置する。第Ⅱ区から東方に少しづつ高くなっている台地は、第Ⅲ区の東側で約３～４ｍほど急に低くなり、森林組合事務所の敷地の方へなだらかに続く。第Ⅲ区の南側の方へは、ゆるやかに台地が低くなる。

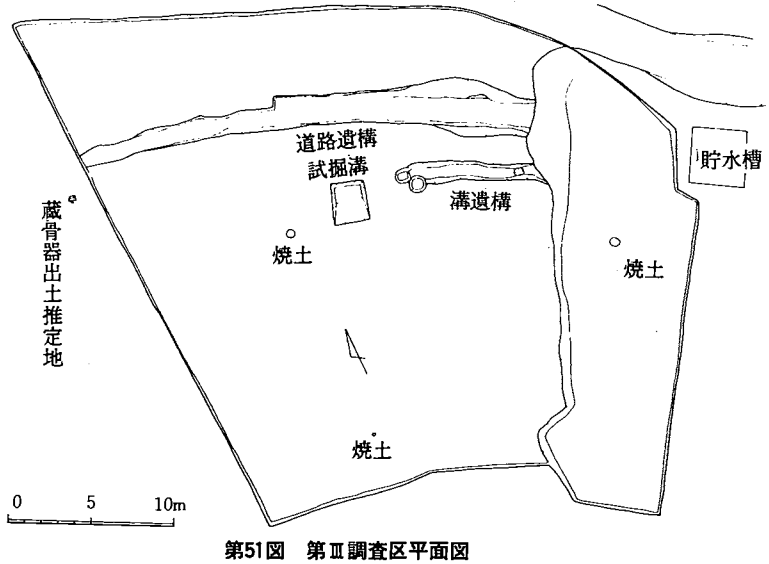
第Ⅲ区内は、普通作の畑と茶園であった。当地区の表土（耕作土）を排除したところ、焼土（３ヶ所）・道路遺構・溝遺構が検出された。

焼土は、赤色のローム状の土が焼けたものである。炉の上部を完全に欠失し、火床のごく一部が残存するのみであり、そのため、炉の形状および年代については、全く不明である。

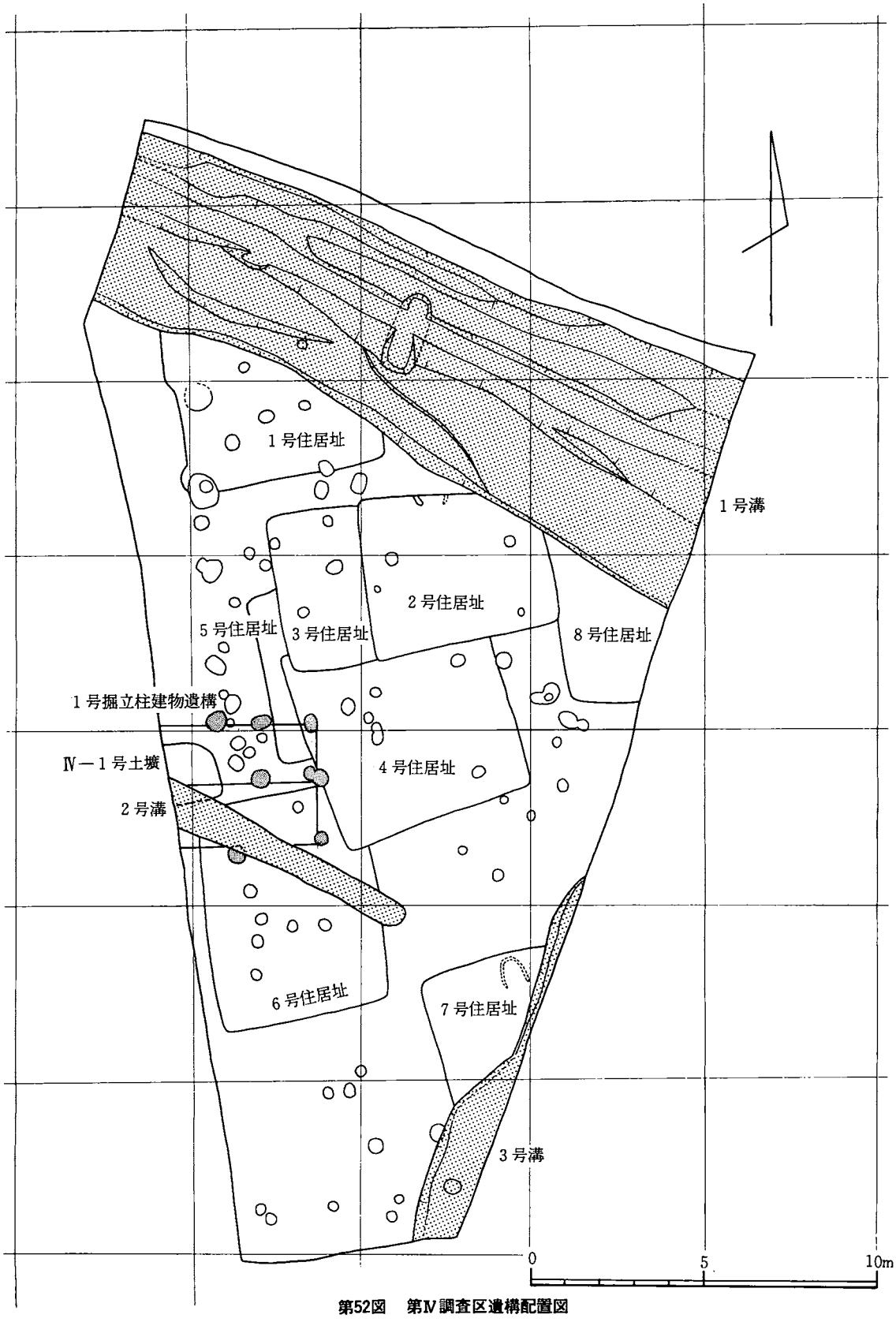
道路遺構は、江戸時代後半以後～明治時代の遺構と推定される。第Ⅲ区の北側の農道が設けられるまで、当遺構が道路として機能していたと思われる。溝遺構は、第Ⅱ区から検出した溝遺構と類似の遺構であり、江戸時代後期頃の畑地の排水路と推定される。

ところで、蔵骨器（第120図参照）が第51図に示す位置附近（調査区域外）から表採された。この蔵骨器は、第Ⅲ区の隣接地の地権者の方が偶然に採集されたものである。

以上述べたように、第Ⅲ区からは蔵骨器以外、特記すべき遺構・遺物は検出されなかった。



第51図　第Ⅲ調査区平面図



第52図　第Ⅳ調査区遺構配置図

第２節　第Ⅳ調査区の遺構

国道325号線の東側、菊池森林組合事務所の北側に調査区を設定した。調査区の形状は第49図に示すように、台形（上辺26m・下辺６m・高さ19m・面積0.3ha）である。調査区の現状は、畑地である。現状における耕作土は客土であり、その下にも旧耕作土があり表土(0.4～0.6cm)が深い。調査区内から検出した遺構・遺物の大部分は、平安時代と推定される。縄文時代の遺物は、ただ一点磨製石斧がぽつんと出土した。近世の遺物は、耕作土及び溝遺構中から出土した。

特記しておきたい遺物としては、第121図１・２に示す越州窯産と推定される磁器である。この遺物は、遺構検出時における排土中より検出したものであるが、検出位置から第Ⅳ－７号住居址の覆土中と推定される。

１．奈良・平安時代の遺構

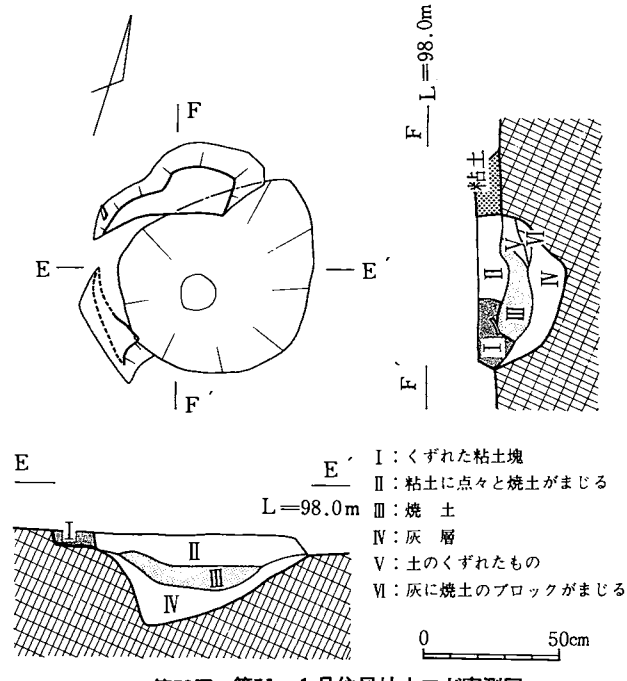
(1)　第Ⅳ－１号住居址（53・54図）

カマド付竪穴式住居址である。住居址の平面の２分の１は、近世の溝によって切り取られている。残存する床面には、弱い硬化面が、ほぼ全面に広がっている。平面の形は、一辺の長さが６m前後の方形の可能性がある。

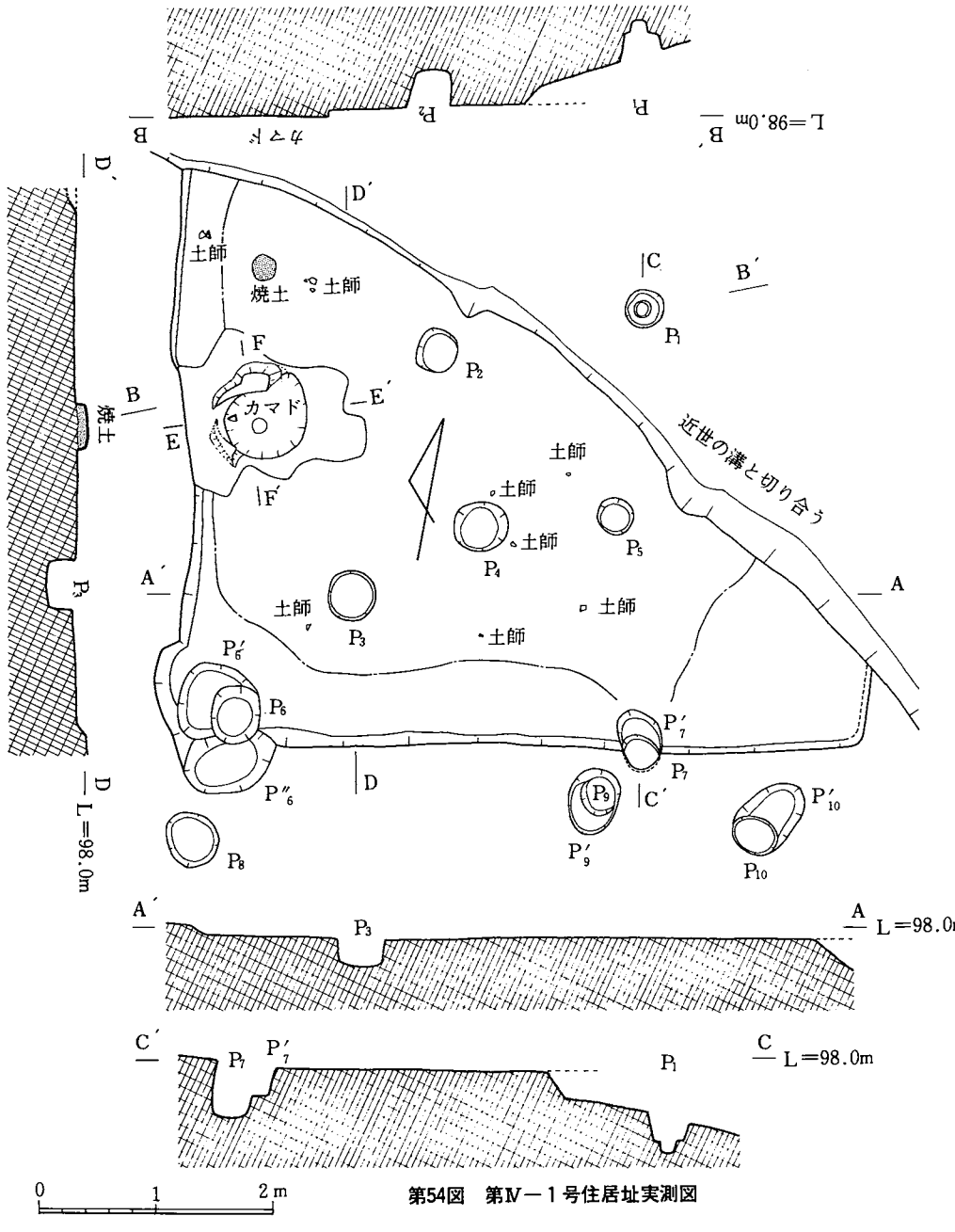
遺構検出面から床面までの深さは、0.1m未満である。床面上から、土師器片(坏・甕)が出土した。

柱穴は、住居址内および南側壁の外から10基ほど検出されている。しかし、住居址全体の２分の１は欠失しているため、柱穴の対応関係は明らかでない。

カマドは、西側壁のほぼ中央に位置すると推定される。第53図に示すように、カマドの袖の基部の一部が残存する。火床は、ほぼ円形（径0.7m）であり、燃焼室の中央部において、擂鉢状に深く窪む。



第53図　第Ⅳ－１号住居址カマド実測図



第54図　第Ⅳ－1号住居址実測図

(2) 第Ⅳ－2号住居址（第55・56図）

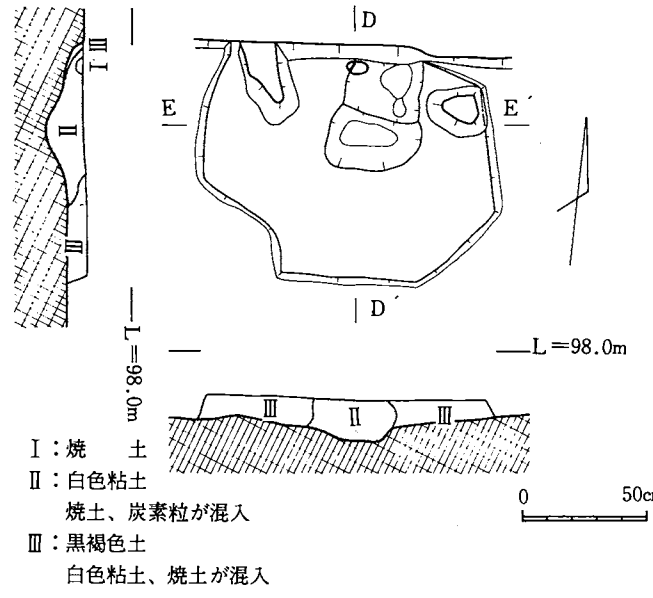
カマド付竪穴式住居址である。平面形は、ほぼ長方形(4.6m ×5.5m)であり、東西に長い。

遺構検出面から床面までの深さは0.2m である。硬化面は、カマドの前面を中心として、西側3分の2程度の部分に広がっている。柱穴は、4基持つと推定した。しかし、3基（P_1・P_2・P_4）を検出したものの、他の1基を検出できなかった。柱穴P_3も当遺構の柱穴と推定したが、

位置関係から補助的な柱と考えられるので、上記の３基に対応する柱穴ではない。

当遺構は、第Ⅳ－３・４・８号住居址を切っており、北東の隅を近世の溝によって切り取られている。

カマドは、北側壁の中央より西側に位置する。カマドの遺構の残存状態は良好でない。カマドの両袖の基部がわずかに残るのみである。火床の部分も少し変形しているので後世、破壊されたものであろう。



第55図　第Ⅳ－２号住居址カマド実測図

住居址の南西の隅から土師器の破片が集まった状態で出土した。他の遺物は、硬化面に埋もれた状態で土師器の細片および須恵器の細片が出土した。

(3)　第Ⅳ－３号住居址（第56図）

カマド付竪穴式住居址である。当遺構は、第Ⅳ－４・５号住居址を切っており、第Ⅳ－２号住居址によって切られている。

遺構検出面から床面までの深さは、0.2m 未満であり、第Ⅳ－２号住居址の床面より高い。

床面上には、焼土が大きく広がっており、その焼土は、第Ⅳ－２号住居址によって切られていることから、双方の切り合いが明らかとなった。床面の硬化は、南西の隅を除いて、強く進んでいる。

柱穴は、５基（P_5・P_6・P_7・P_8・P_9）検出されたが、対応する柱穴の関係は不明である。

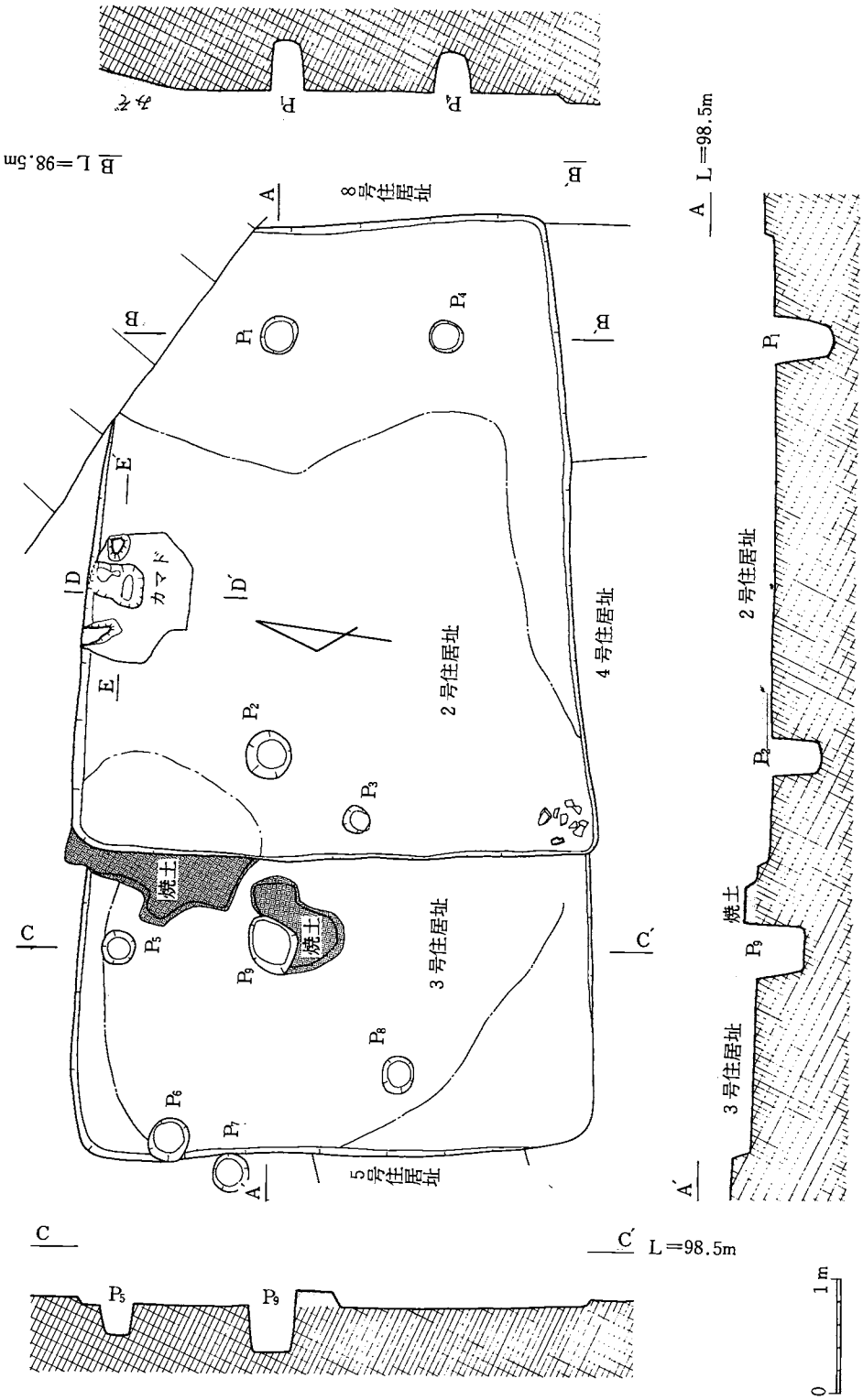
カマドは、北側壁の中央部に位置していると、焼土の位置から推定される。

カマドの位置が北側壁の中央と仮定すると、当遺構の平面形は方形（一辺が4.3m）であろうと思われる。

住居址内からの出土遺物は、土師器の細片である。

(4)　第Ⅳ－４号住居址（第57図）

粒土塊が住居址の北側中央部に検出されたことから、カマド付竪穴式住居址の可能性がある。



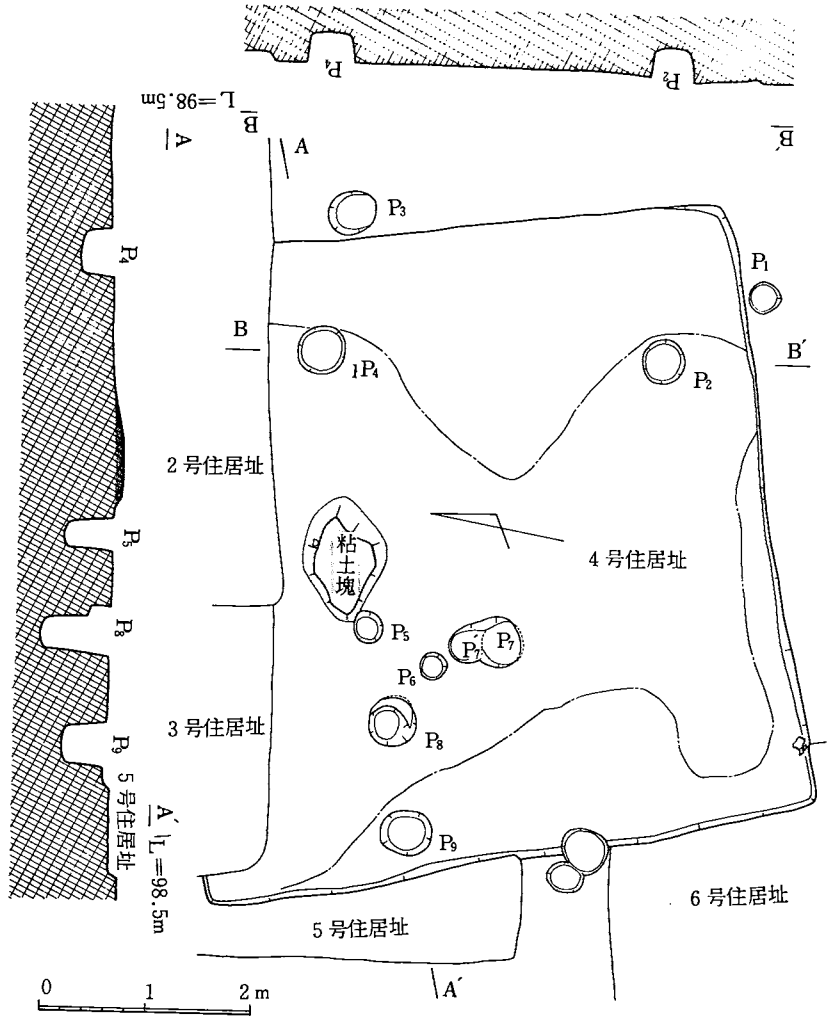
第56図　第Ⅳ－2・3号住居址実測図

しかし、カマドの位置と推定される部分が第Ⅳ－２・３号住居址によって切られているため、カマドの存否は不明である。

当遺構は、第Ⅳ－２・３号住居址によって切られており、第Ⅳ－５・６号住居址を切っている。当遺構の床面の高さは、第Ⅳ－２号住居址の床面より高く、第Ⅳ－５号住居址の床面より低い。

遺構の平面形は、ほぼ方形(5.9m ×6.0m)である。遺構検出面から床面までの深さは、0.1m 未満である。床面の硬化は、さほど進んではいず、硬化面は中央部に広がるのみである。住居址の主要な柱は４本と推定されるが、３基の柱穴（P_2・P_4・P_8）を検出したのみである。

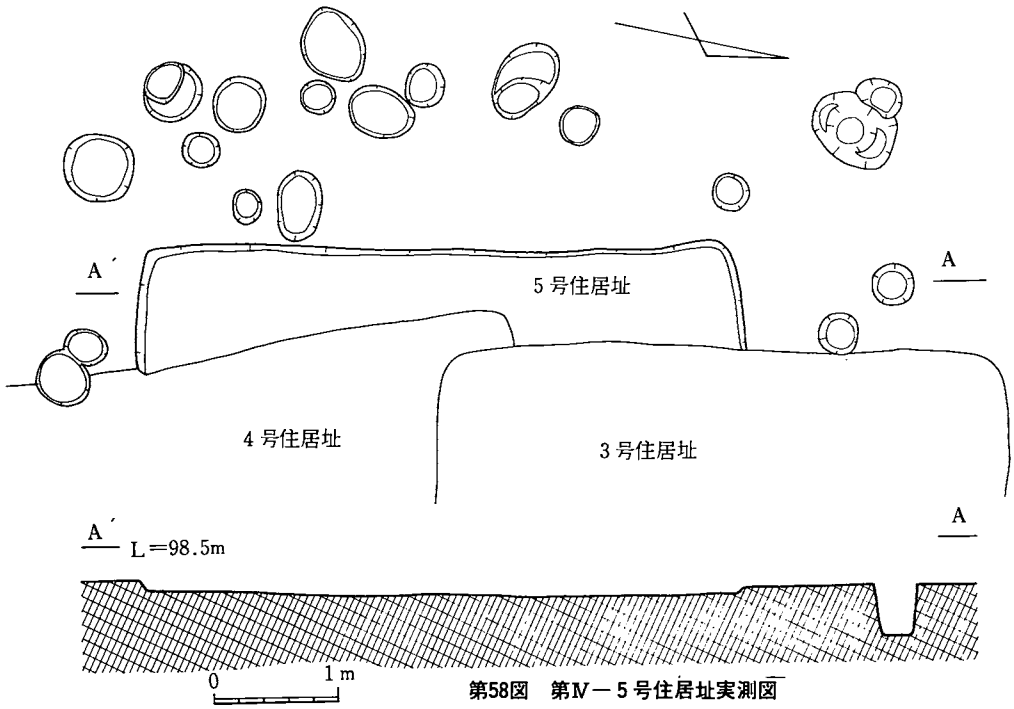
出土遺物は、土師器片と須恵器片が少量出土したのみである。



第57図　第Ⅳ－４号住居址実測図

(5) 第Ⅳ－5号住居址（第58図）

当遺構は、第Ⅳ－3・4号住居址によって切られており、西側壁（長さ4.8m）を残すのみである。そのため、平面の大きさ・平面形・硬化面の広がり等、一切不明である。



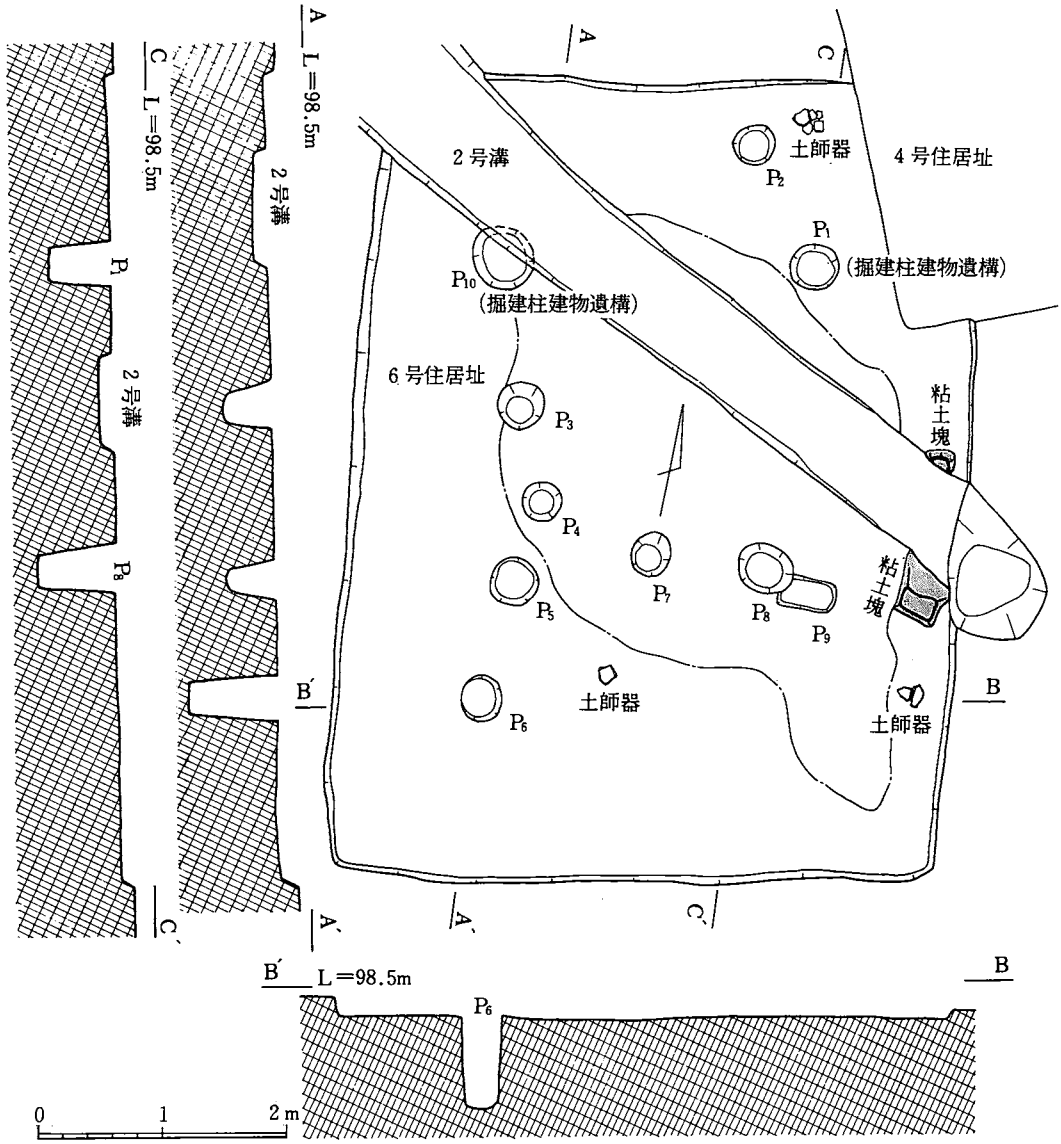
第58図　第Ⅳ－5号住居址実測図

(6) 第Ⅳ－6住居址（第59図）

カマド付竪穴式住居址である。カマドの部分から北西の隅にかけて、第Ⅳ－2号溝遺構（幅0.7m・中世？）によって切られ、北東の隅は、第Ⅳ－4号住居址によって切られている。また、当遺構及び第Ⅳ－4号住居址は、第Ⅳ－1号掘建柱建物遺構の柱穴によって切られている。

当遺構の平面形は、長方形（5.0m×6.3m）である。遺構検出面から床面までの深さは 0.2～0.1m である。床の硬化はカマドの正面付近を中心として中央部のみが進んでいる。

住居址内から10基の柱穴を検出した。この10基の柱穴の内の2基（P_1・P_{10}）は、第Ⅳ－1号掘建柱建物遺構の柱穴である。第Ⅳ－6号住居址の屋根を支えた主な柱（4本？）の柱穴は、P_6・P_3 以外に明らかにすることができなかった。

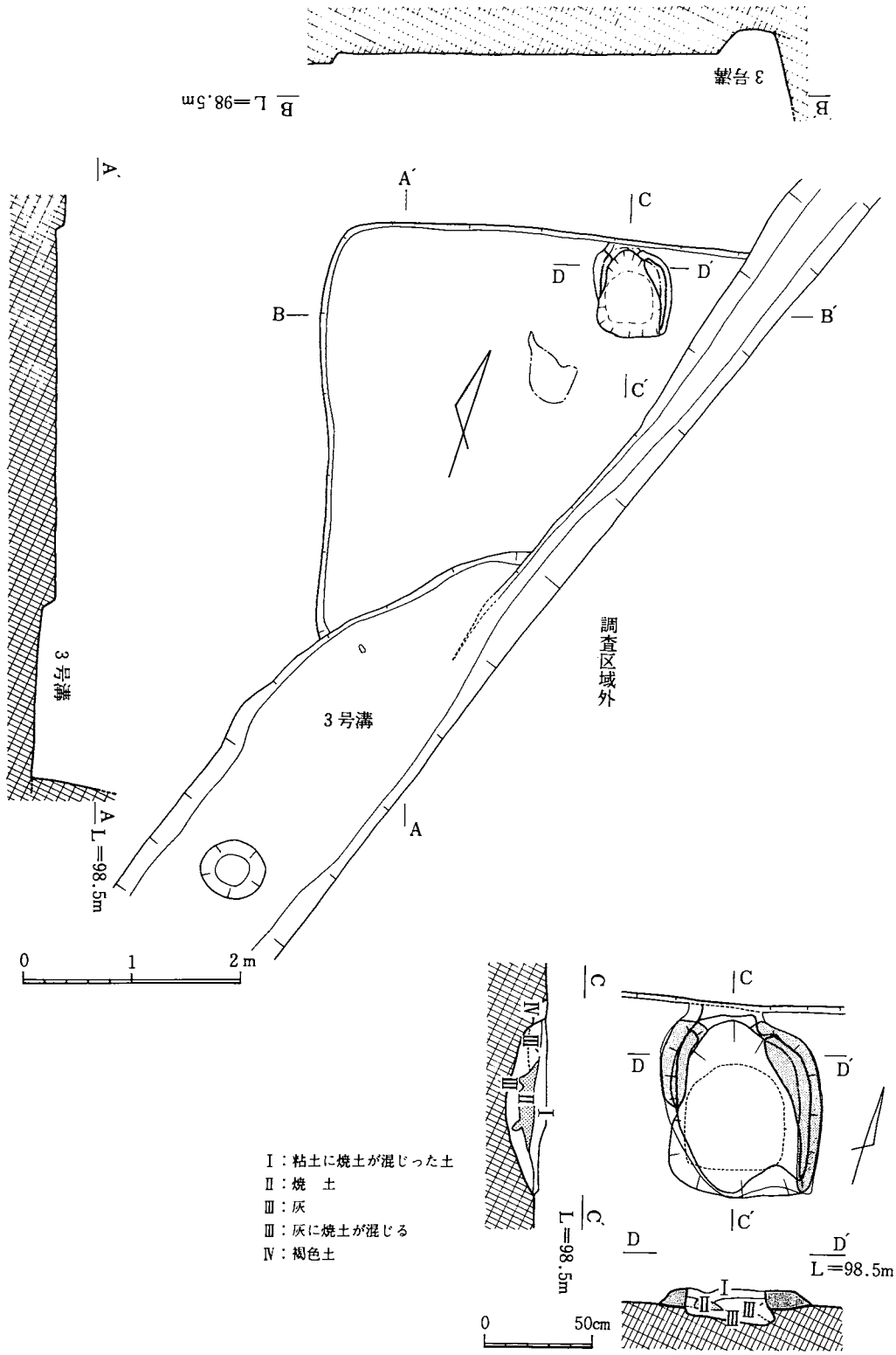


第59図　第Ⅳ－６号住居址実測図

(7) 第Ⅳ－７号住居址（第60図）

カマド付竪穴式住居址である。遺構全体の４分の１を残すのみであり、他は第Ⅳ－３号溝（近世）によって切り取られている。第Ⅳ－３号溝の幅が明らかでないが、溝の幅が狭ければ、住居址の一部が未調査区域に残存する可能性がある。

カマドは両袖の基部が残存した。右袖は保存状態が良好であり、焚口近くまで残存していた。火床部は釣鐘状を呈し、奥行0.8m・巾0.6mを測る。遺構検出面から床面までの深さは0.1m未満である。床面の硬化は、さほど進んでいない。出土遺物は土師器細片のみである。遺構検出時において、当遺構から排出した覆土の中に越州窯産と推定される磁器が出土した。



第60図　第Ⅳ－7号住居址実測図

(8) 第Ⅳ－８号住居址（第52図）

当遺構は第Ⅳ－２号住居址と第Ⅳ－１号溝によって切られている。

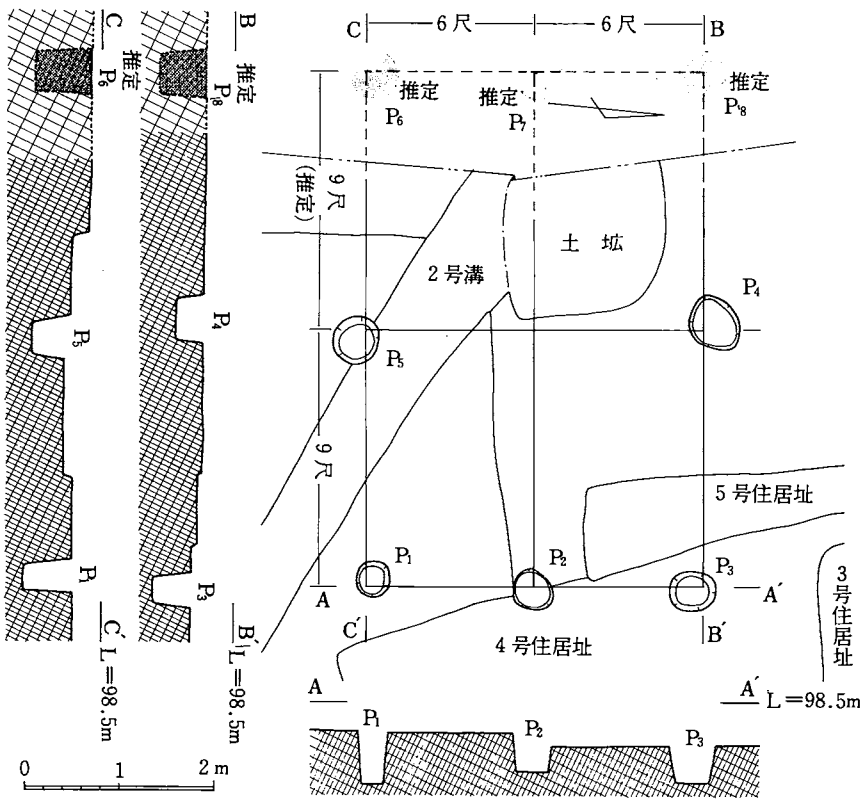
検出した遺構は硬化面のみであり、壁の立ち上り部分も欠失していることから、遺構の規模は不明である。ただ、第Ⅳ－８号住居址が存在していた事実のみ、ここに記載しておく。

(9) 第Ⅳ－１号掘建柱建物遺構（第61図）

第Ⅳ－４・６号住居址を切る柱穴および第Ⅳ－４・６号住居址周辺から、７基の柱穴群を検出した。これ等の柱穴の内、５基の柱穴が第61図に示すように、南北が６尺間隔・東西が９尺間隔で並ぶことに気付いた。ところで、掘り方は明瞭に検出できたが、柱痕跡については、検出不能であった。

この５基の柱穴群は、西辺よりにあるため、遺構が調査区域外まで延びている可能性がある。

第61図のように復元すると、南北１丈２尺（3.6m）・東西１丈８尺（5.4m）の２間×２間の掘建柱建物遺構と推定される。



第61図　第Ⅳ－１号掘建柱建物遺構

第10表　第Ⅳ－1号掘建柱建物遺構の柱穴一覧表

		P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
柱穴の掘り方の大きさ (cm)	最大径	38	44	50	63	52	—	—	—
	最小径	35	40	42	50	48	—	—	—
	海抜98.5Mからの深さ	87	74	84	62	73	—	—	—

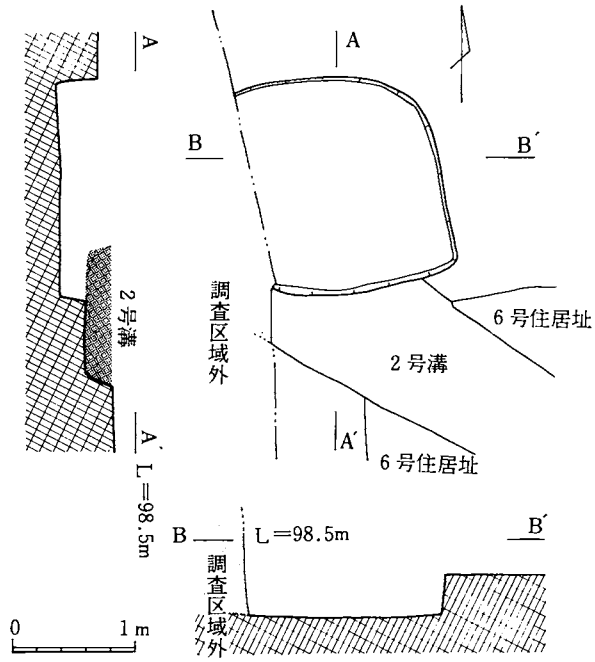
(10) 第Ⅳ－1号土壙（第62図）

当遺構は第Ⅳ－2号溝に一部が切られた状態で検出した。しかし、当遺構の底面が第Ⅳ－2号溝の底面より低かったために、底面の状態を観察することができた。

当遺構の底面は平坦であり、南北の幅0.82mを測る。東西の幅は、遺構が調査区域外まで延びているため不明である。

遺構検出面から遺構の底面までの深さは、0.35mである。

遺構の年代を推定する遺物は何等出土しなかったが、埋土の色調および遺構検出状態からカマド付住居址の時代と同時代と推定される。



第62図　第Ⅳ－1号土壙実測図

2．江戸時代の遺構

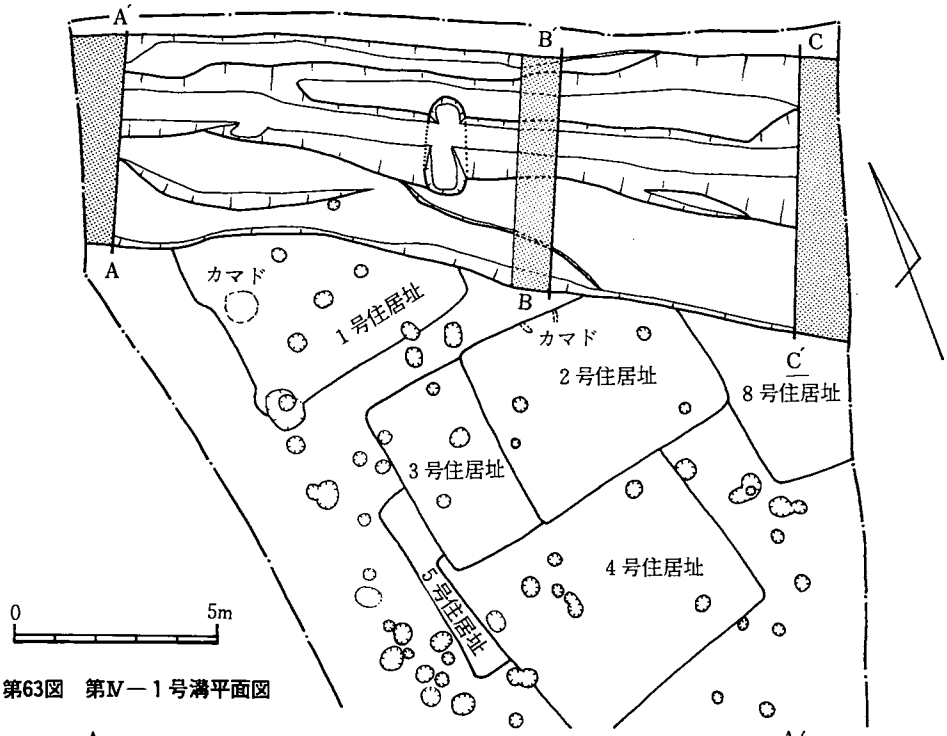
第Ⅳ区の北側を東西に走る幅10～14m・深さ1.0～1.3mの溝が第Ⅳ－1号溝である。

溝は数回にわたって掘削され、拡充されたと思われ、左右の壁が階段状になっている。埋没過程は、第64図に示す埋土の堆積状態から解るように、第Ⅴ層より上は一気に埋立てたと思われる。第Ⅵ層以下は自然に埋没したと推定される。

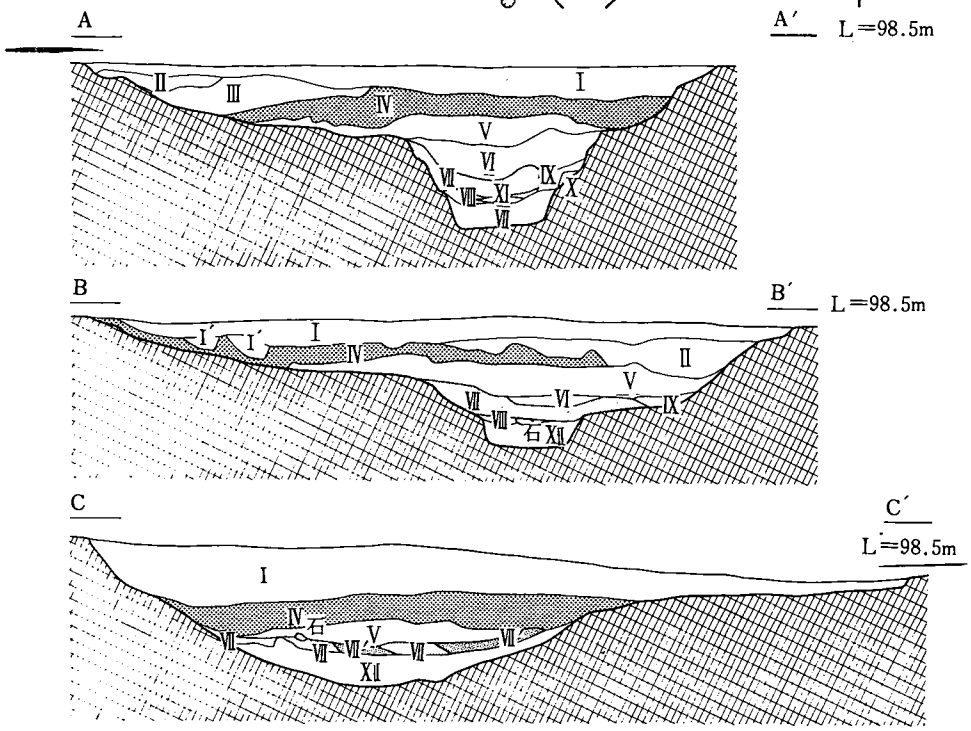
第Ⅴ層以上の埋立ては畑地開墾と深い関係があると思われる。このことは、当遺構の所在置が畑の境界となっていることからも同様の推定ができるであろう。

溝の底面は硬化しており、また、階段状になった側壁の一部も硬化している。このことから、この溝は排水と道路を兼ねた働きをしていたと思われる。

ところで、第Ⅳ区の近くから森林組合事務所の裏の方にかけてごく最近まで使用されていた



第63図　第Ⅳ－１号溝平面図



Ⅰ　：暗褐色土、焼土粒、炭化物粒が混入硬くしまっている。
Ⅰ′：溝の埋土、Ⅰに類似する。
Ⅱ　：黒褐色土に茶褐色土が混入・軟質
Ⅲ　：Ⅱの硬くしまった土
Ⅳ　：Ⅰに類似するが、Ⅰより軟い
Ⅴ　：Ⅰに類似する。Ⅰを強くふみかためたように硬い。褐色の土が少しまじる。
Ⅵ　：黒褐色土に茶褐色土が混入、軟質
Ⅶ　：暗褐色粘質土
Ⅷ　：黄褐色土、砂質、地山のブロック
Ⅸ　：暗褐色粘質土に著黄褐色土粒が混入
Ⅹ　：地山の土ブロック、黄褐色土
Ⅺ　：暗褐色土、硬質
Ⅻ　：暗褐色粘質土に少し黄褐色土粒が混入
ⅢⅢ　：暗褐色土、軟質

第64図　第Ⅳ－１号溝断面図

と言う窪道が排水路を兼ねたような形で残存している。この道は、荷馬車が普及する以前は重要な農道であったと聞く。ところが、最近の自動車の普及により、忘れ去られた道となったとのことである。恐らくは、第Ⅳ－1号溝もこの様な過程を経て、埋没していったのであろう。

溝の底面近くの埋土中から、波佐美焼の碗や唐津焼系の皿が出土した。これ等の遺物から、この溝は、江戸時代の終り頃の遺構であろうと推定した。

第Ⅳ－3号溝は、ほぼ南北に、第Ⅳ区の東縁部を走る。溝の走る方向から、第Ⅳ－1号溝と直交する可能性が強い。溝の幅は調査区域外のため不明である。溝の年代は、埋土の様子から第Ⅳ－1号溝と同一年代と推定される。

第Ⅳ章　第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ調査区検出の遺構

第１節　第Ⅴ調査区の遺構

国道325号線の東側々縁に沿って菊池森林組合事務所の敷地がある。この敷地の東側隣接地に第Ⅴ調査区を設定した。第Ⅴ調査区の東側に第Ⅵ調査区、北側に第Ⅳ調査区を設定した。

第Ⅴ調査区は、東西52m・南北34mの台形状（上辺18m・底辺34m・高さ52m・面積1400㎡）を呈する。

当調査区と森林組合の敷地との間には、廃道と化した農道が溝状に残る。この農道は第Ⅳ調査区の方へ延びる。

調査区からは、土師器の細片が表採された。また、試掘溝内から柱穴と思われるピットを検出したので、当地も調査対象地内に含めた。そこで、表土を排除し、遺構検出を試みたが、遺構であると確認できるものは検出されなかった。ピットの並びは不規則であり、形・大きさ・数も不揃いであるため、木の根の可能性がある。

以上のことから、当調査区内には、古代、中世の遺構は存在しないと判断した。

第２節　第Ⅵ調査区の遺構

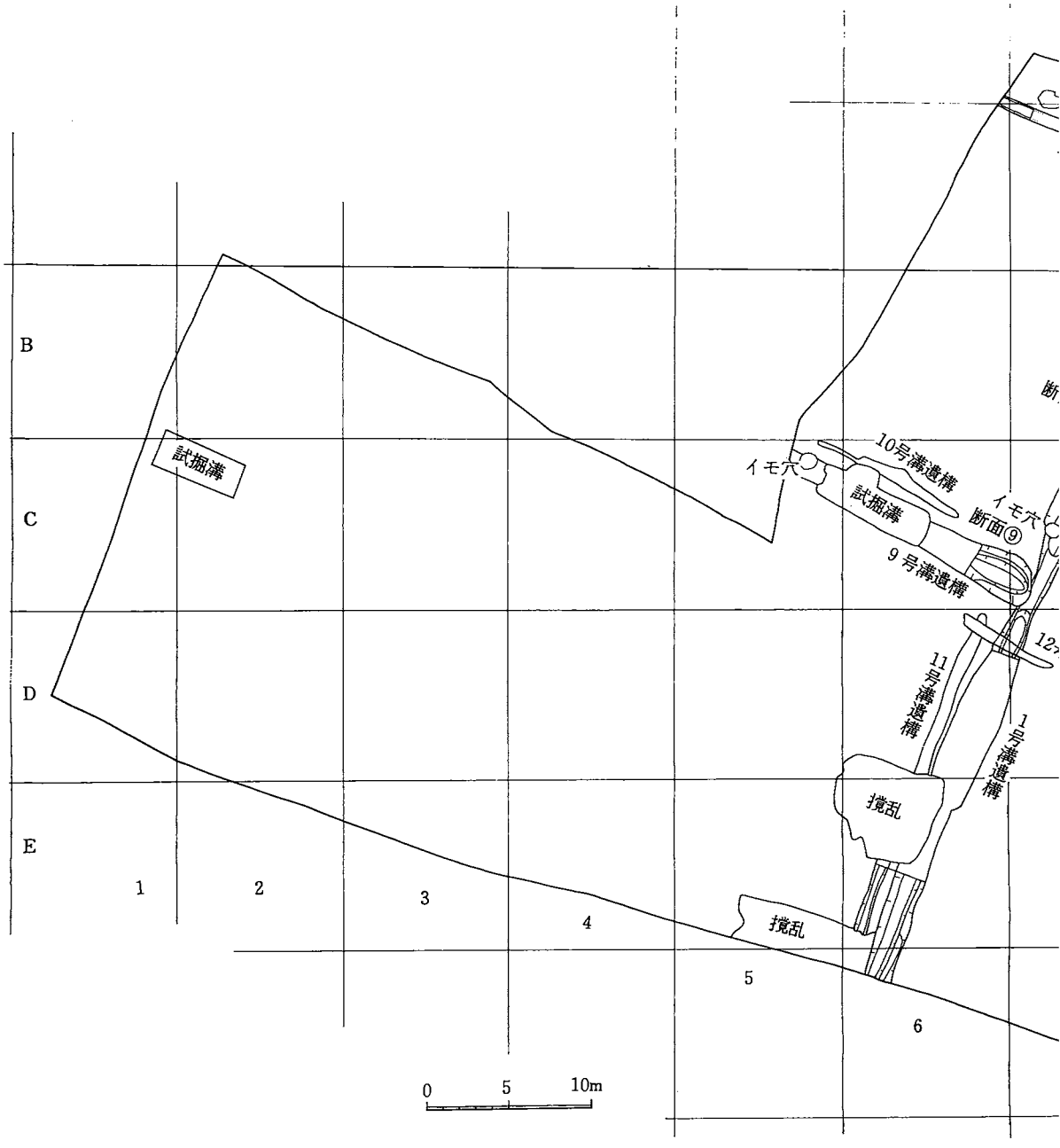
国道325号線の東側、台地の東縁部近くを東西50m・南北120m（面積4,600㎡）の範囲（第65図に示す）の表土を排除した。

第Ⅵ区の現状は、普通作の畑（牧草・サツマイモ）と茶園である。当調査区の北側の畑地は、「寺畑（テラバタケ）」と呼ばれ、牧草・サツマイモ・陸稲・茶が作付されている。

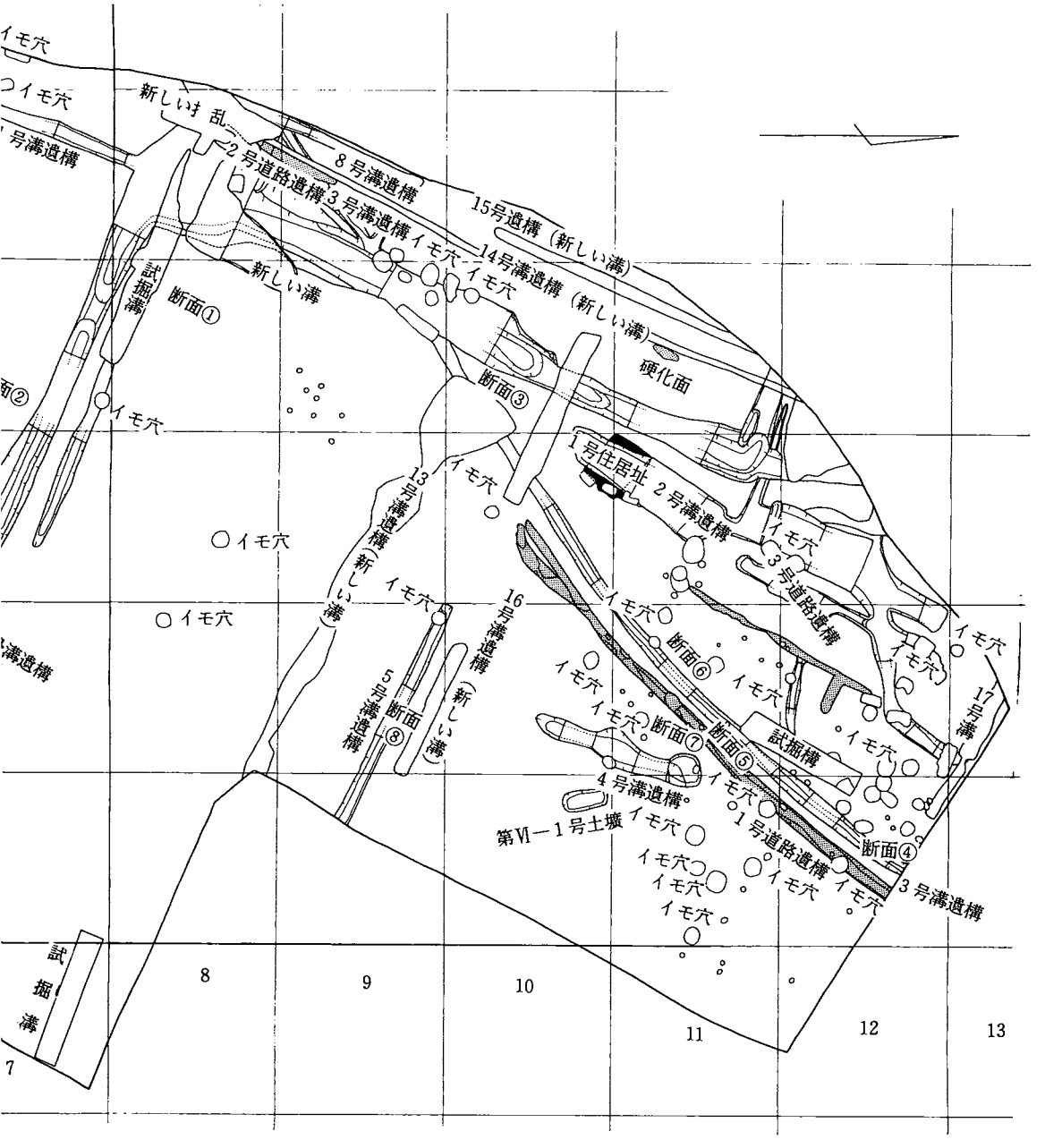
調査区の表土を排除したところ、溝遺構（16本）・道路遺構（３本）・竪穴式住居址（２基）・柱穴群・土壙（１基）・最近の貯蔵穴（イモ穴）が検出された。

溝遺構の中で、第１～12号溝の埋土は黒褐色を呈する。第13～17号溝の埋土は、耕作土に類似した土であり、第Ⅰ・Ⅱ区から検出した近世の溝と類似する。溝の埋土からこれ等17本の溝の年代を推定すると、第１～12号の溝は中世より古い溝であり、第13～17号溝は江戸時代後期の溝と推定される。

道路遺構は３本検出された。どの道路遺構も溝遺構に並行するように走っている。硬化面の


B
C
D
E
1
2
3
4
5
6
試掘溝
イモ穴
10号溝遺構
試掘溝
イモ穴
断面⑨
9号溝遺構
11号溝遺構
1号溝遺構
撹乱
撹乱
0
5
10m

第65図　第Ⅵ


イモ穴
新しい乱
2号道路遺構
8号溝遺構
3号溝遺構
15号遺構（新しい溝）
14号溝遺構（新しい溝）
試掘溝
断面①
新しい溝
硬化面
断面③
1号住居址
2号溝遺構
3号道路遺構
13号溝遺構（新しい溝）
16号溝遺構（新しい溝）
5号溝遺構
断面⑧
断面⑥
断面⑦
断面⑤
試掘構
17号溝
4号溝遺構
第Ⅵ－1号土壙
1号道路遺構
断面④
3号溝遺構
試掘溝
8
9
10
11
12
13
7

調査区遺構配置図

幅は0.3m程度であり、中央部はゆるやかに窪んでいる。

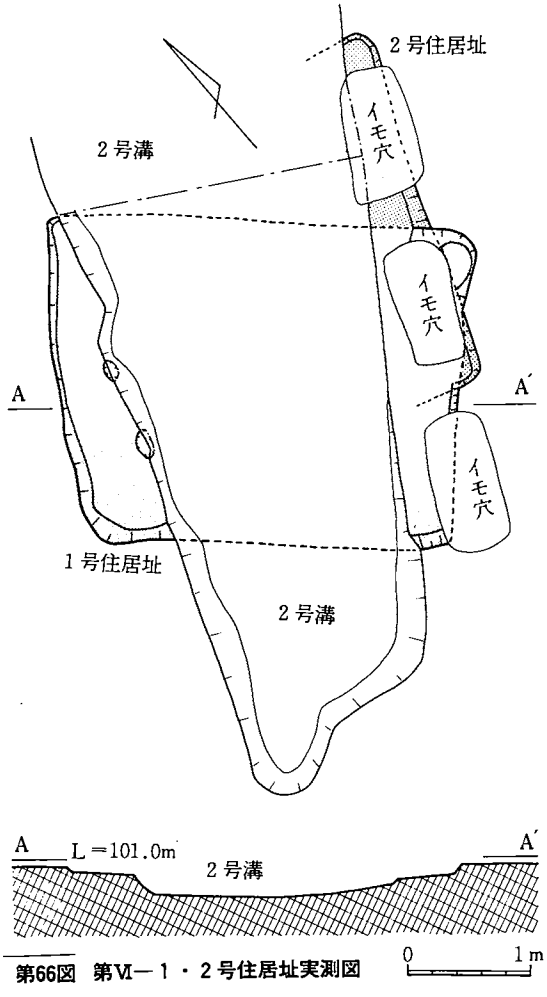
竪穴式住居址（第66図参照）は、2基が切り合った形で検出された。しかし、中央部が溝遺構で切り取られており、ほとんど残存していない。

柱穴群は、2ヶ所ほど検出されたが、対応関係が明確な遺構ではなかった。柱穴の埋土はカマド付の竪穴式住居址とほぼ類似することから、平安時代の柱穴であろうと推定した。

調査地区全面にわたって、最近の貯蔵穴(イモ穴)が検出された。伊坂上原の台地一帯では、戦前戦後を通して、陸稲・粟・サツマイモ・桑等が主要な作物であったと言う。

(1) 第Ⅵ—1・2号住居址（第66図）

第Ⅵ—1号住居遺構が第Ⅳ—2号住居遺構を切っている。また、両遺構の大部分は、第Ⅳ—2号溝によって切り取られている。



第66図　第Ⅵ—1・2号住居址実測図

第Ⅵ—1号住居址の平面形は長方形（歪があり、台形）である。各壁の長さを北側より記すと、3.4m・2.5m・2.8m・2.6mである。床面の硬化は、さほど進んでいない。出土遺物は、土師器の細片（器種不明）である。

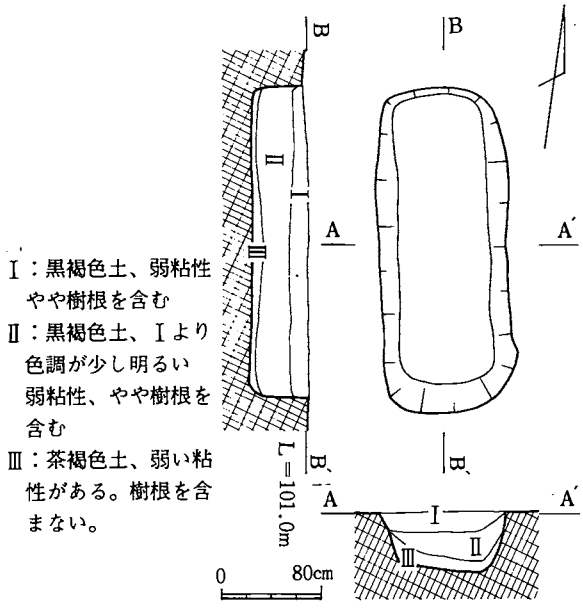
第Ⅵ—2号住居址は、西側壁の一部を残すのみである。壁の長さは2.9mを測る。出土遺物はない。

両遺構とも、年代を推定するに足る遺物は出土しなかったが、埋土の土色から推定すると、平安時代の竪穴式住居址と推定される。

(2) 第Ⅵ—1号土壙（第67図）

平面形は、南北に長い長方形（1.1m×2.6m）である。底面は、ほぼ平坦である。

埋土は三層に区分できる。この埋土中に、隣接地の茶の樹根が伸びて成長して



第67図　第Ⅵ－１号土壙実測図

いる。三層の埋土の内、第Ⅰ層の土色から推定すると、平安時代の遺構の可能性が強い。出土遺物はない。当遺構の使用目的については、不明である。もし、墓と仮定すると、死者は伸展葬であろう。第Ⅳ区一帯は『寺畑』と俗称されている。また、森林組合の北側および第Ⅲ区の西側隣接地からは、蔵骨器が表採されていることに注目すると、第Ⅵ－１号土壙が墓壙ではないかと推論することは、当を得ている。

(3)　近世の溝遺構

第Ⅵ区の北側半分にほぼ東西に走る溝とほぼ南北に走る溝が存在する。東西に走る溝も南北に走る溝も同一方向に走るものが数本あり、しかも隣接していることから、溝の掘り更えが行なわれていると思われる。

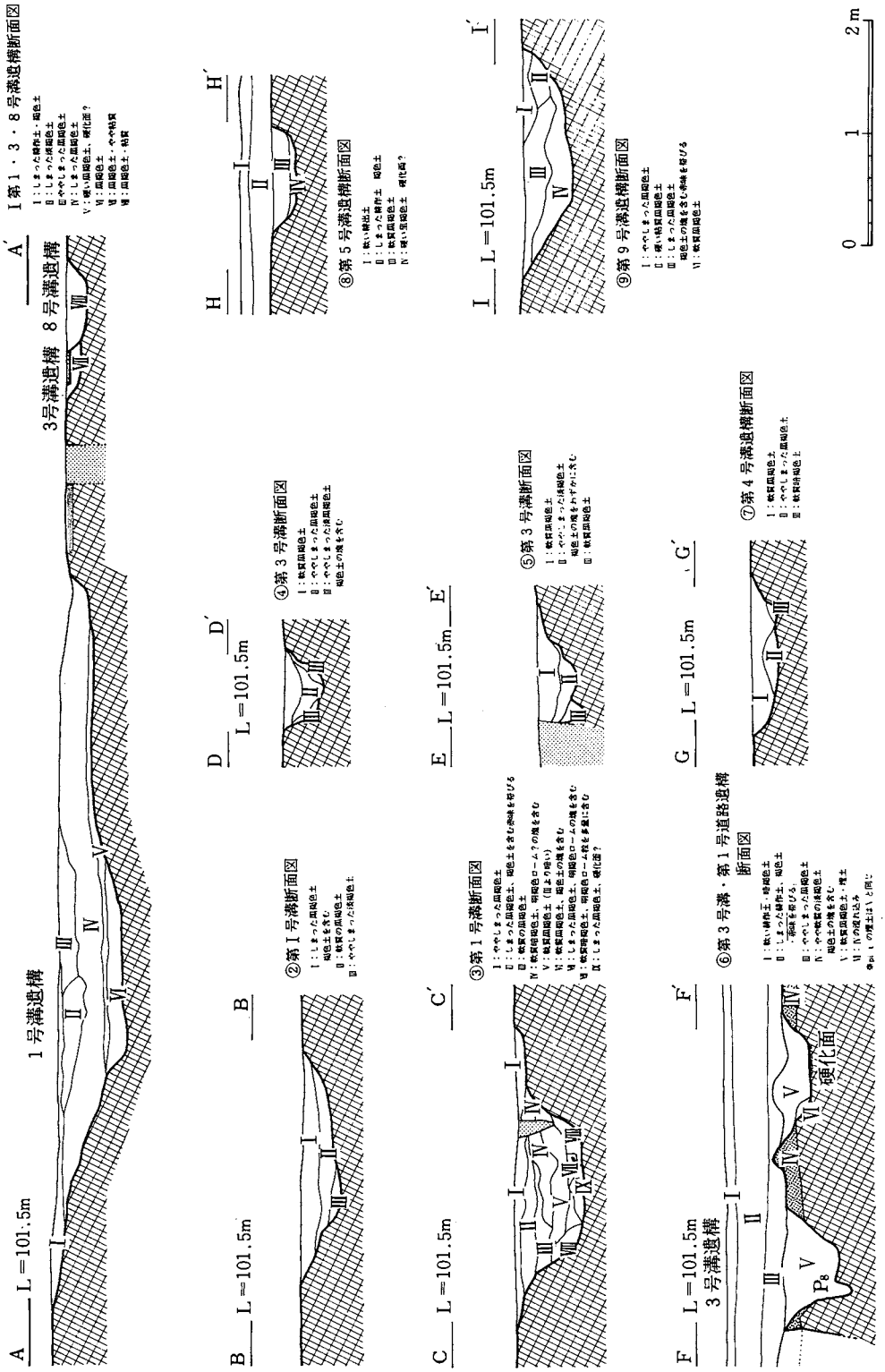
検出した溝の幅は0.2～４ｍ・深さは0.1～1.5m と種々様々である。幅の広い溝の底部の深さは所によって浅かったり深かったり波うっており、その差は１ｍ以上もある。このことは、水を一定方向に流すと云うことよりも地表を流れる水の流れの速さを抑える働きがあったと推定される。

南北に走る溝に沿って帯状の硬化面（道路遺構）が検出された。この硬化面は農道と推測される。溝の検出された位置は、発掘当時の畑の畦畔とほぼ一致することから、土地の地割線となっていたと推測される。

溝の覆土中からの出土遺物は、波佐美焼の碗・嬉野焼の皿や黒牟田焼の甕等の破片が少数出土した。このことから、第Ⅰ・Ⅱ区及び第Ⅳ区にも存在した溝遺構と近接した時期（江戸時代後期）と推定される。

第３節　第Ⅶ調査区の遺構

国道325号線ぞいのドライブインと旭志農協川辺支所に狭まれた位置に当調査区を設定した。



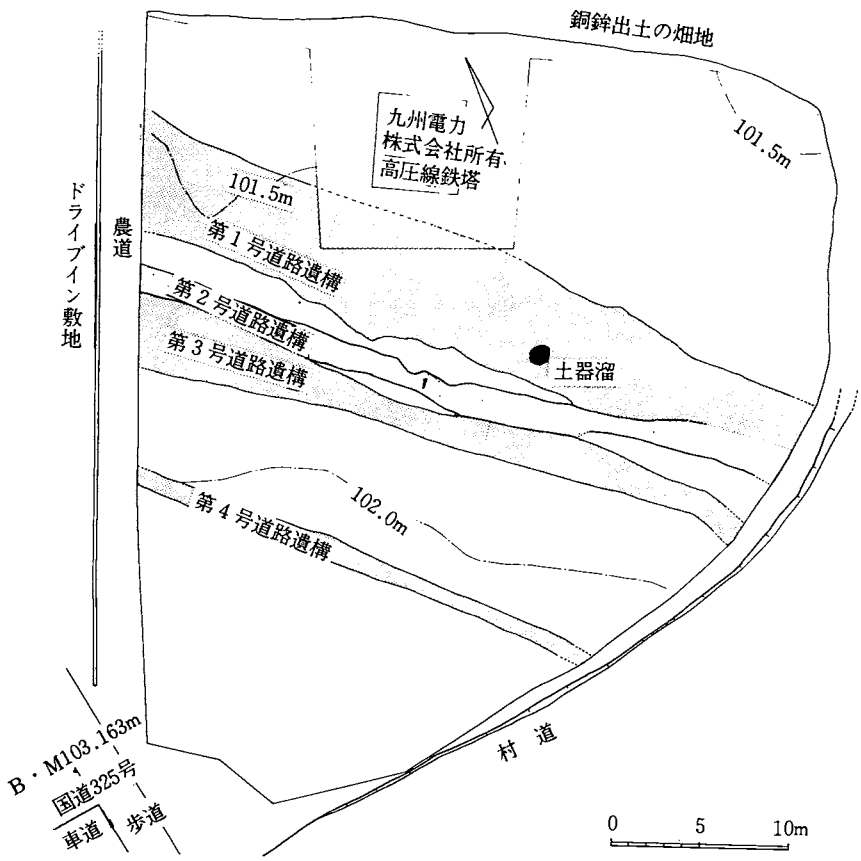
第68図　第Ⅵ調査区溝及道路遺構断面図

当調査区とドライブインとの間には農道が、また、旭志農協川辺支所との間には村道が走る。

調査地の現状は桑園であり、桑園の北側のへりには、送電用の鉄塔(九州電力株式会社所有)がある。この鉄塔の北側の桑園（当調査地の桑園より約１ｍ低い。 旭志村大字川辺字上西原1945、坂本伝男氏所有地）から銅鉾（昭和39年12月16日出土、坂本経堯氏調査)が出土した。同報告は『熊本県内の銅牟、銅戈―小林久雄先生の霊前に捧げる』坂本経堯・「九州縄文土器の研究」編集代表松本雅明、小林久雄先生遺稿刊行会　昭和42年７月10日に掲載されている。

調査区内から検出した遺構は、東西に走る４本の道路遺構である。４本の道路遺構の内、３本の道路遺構は互いに切り合っており、北側の第１号道路遺構が古く、南側の第２号道路遺構が新しい。一番南側を走る第４号道路遺構は、他の３本の道路遺構と切り合っていないので、新旧関係は明らかでない。しかし、３本の道路遺構が北側から南の方へ移動している点に注目すると、第４号道路遺構が最も新しい道路遺構であろうと推定される。

第１号道路遺構の中央部から土器溜が検出された。この土器溜からは、赤色顔料を化粧がけした土師器片や須恵器が出土した。この土器溜の掘り方は検出されなかった。



第69図　第Ⅶ調査区平面図

第11表　歴史時代の遺構及び主な遺物一覧表（第Ⅰ～Ⅶ調査区）

遺構			土師器				須恵器	陶磁器
分類	遺構名	挿図番号	坏・皿・碗盤・高坏	壺・甕・甑	鉢	その他		その他
竪穴式住居址	第Ⅰ－1号住居址（カマド付）	第4図、第5図 第27図	第111図、第112図、第113図	第116図 第118図				
	第Ⅰ－2号住居址（カマド付）	第4図、第5図 第28図	第111図				第119図	
	第Ⅰ－3号住居址（カマド付）	第4図、第5図 第29図	第111図	第115図　第113図				
	第Ⅰ－4号住居址（カマド付）	第4図、第5図 第30図、第31図						
	第Ⅰ－5号住居址（カマド付）	第4図、第32図 第5図	第112図	第115図　第114図				
	第Ⅰ－7号住居址（カマド付）	第4図、第33図 第5図						
	第Ⅰ－9号住居址（カマド付）	第4図、第5図 第34図		第118図				
	第Ⅱ－1号住居址（カマド付）	第4図、第35図 第6図、第36図 第37図	第113図	第114図　第114図 第117図			第119図	第93図
	第Ⅱ－3号住居址（カマド付）	第4図、第38図 第6図、第39図	第111図					第90、91、92図
	第Ⅱ－4号住居址（カマド付）	第4図、第30図 第6図		第118図				
	第Ⅱ－5号住居址（カマド付）	第4図、第41図 第6図		第116図 第118図				
	第Ⅱ－6号住居址（カマド付）	第4図、第42図 第6図		第113図　第117図 第118図				
	第Ⅳ－1号住居址（カマド付）	第52図、第53図 第54図	第111図					
	第Ⅳ－2号住居址（カマド付）	第52図、第55図 第56図	第111図、第113図	第114、115 117、118図				
	第Ⅳ－3号住居址	第52図、第56図	第111図					
	第Ⅳ－4号住居址	第52図、第56図						
	第Ⅳ－5号住居址	第52図、第58図						
	第Ⅳ－6号住居址	第52図、第59図	第111図、第112図					
	第Ⅳ－7号住居址	第52図、第60図						
	第Ⅳ－8号住居址	第52図、						
	第Ⅵ－1号住居址	第65図、第66図	第111図					
	第Ⅵ－2号住居址	第65図、						
掘建柱建物遺構	第Ⅰ－1号掘建柱建物遺構	第5図、第43図						
	第Ⅱ－1号掘建柱建物遺構	第4図、第6図 第44図						
	第Ⅱ－1′号(5号)掘建柱建物遺構	第6図、第45図						
	第Ⅱ－2号掘建柱建物遺構	第4図、第6図 第46図						
	第Ⅱ－2′号(4号)掘建柱建物遺構	第6図、第47図						
	第Ⅱ－3号掘建柱建物遺構	第6図、第48図						
	第Ⅵ－1号掘建柱柱建物遺構	第52図、第61図						
土壙	第Ⅱ－1号土壙	第4図、第6図 第49図						
	第Ⅳ－1号土壙	第52図、第62図						
	第Ⅵ－1号土壙	第65図、第67図						

遺構			土師器				須恵器	陶磁器
分類	遺構名	挿図番号	坏・皿・碗盤・高坏	壺・甕・甑	鉢	その他		その他
道路遺構	第Ⅵ－１号道路遺構	第65図						
	第Ⅵ－２号道路遺構	第65図					第119図	
	第Ⅶ－１号道路遺構	第69図	第112図	第15図、第17図 第16図、第18図				
	第Ⅶ－２号道路遺構	第69図						
	第Ⅶ－３号道路遺構	第69図						
	第Ⅶ－４号道路遺構	第69図						
近世の溝遺構	第Ⅰ－１号溝遺構	第４図、第５図						
	第Ⅰ－２号溝遺構	第４図、第５図						
	第Ⅱ－１号溝遺構	第４図、第６図 第50図						
	第Ⅱ－２号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－３号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－４号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－５号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－６号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－７号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－８号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－９号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－10号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－11号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－12号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅱ－13号溝遺構	第４図、第６図						
	第Ⅲ－１号溝遺構	第51図						
	第Ⅲ－２号溝遺構							
	第Ⅳ－１号溝遺構	第52図 第63図、第64図				第113図		
	第Ⅳ－２号溝遺構	第52図、第59図						
	第Ⅳ－３号溝遺構	第52図、第60図						
	第Ⅵ－１号溝	第65図	第112図					第121図
	第Ⅵ－２号溝	第65図						
	第Ⅵ－３号溝	第65図	第112図					
	第Ⅵ－４号溝遺構							
	第Ⅵ－５号溝遺構							
	第Ⅵ－６号溝遺構							
	第Ⅵ－７号溝遺構							
	第Ⅵ－８号溝遺構							
	第Ⅵ－９号溝遺構							第121図

第Ⅴ章　縄文土器

第１節　縄文時代後期・晩期の土器の分類

縄文土器の総数はⅠ・Ⅱ区合わせて約5,000点を数える。Ⅰ区では11号住居址、方形溝、Ⅱ区では２号住居址、１号円形周溝、２号円形周溝、第Ⅰ区の各グリッドの土器群から多量に出土した。ここでは特に伊坂上原遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土の土器群を指標とする。

まずⅠ区では６・７・８・９・10・11・12・13・14—C・D・E・F・G・H・I・J グリッド中に多量分布する。土器の分布する主要な範囲は第70図に示した。

第70図は、グリッド（５ｍ方眼）内を25等分（１ｍ方眼）して、１㎡中に出土した土器の点数及び形式分類を行なって作成したものである。この図は各時期において、分布の変遷と重復関係を示す。

実測した縄文土器の総数は267点で、器種の内訳は、浅鉢151個体、深鉢97個体、注口土器11個体、高坏５個体、碗１個体、その他２個体である。

浅鉢形土器をⅠ～Ⅲ類、深鉢形土器をⅠ～Ⅲ類、碗形器をⅠ類、注口土器をⅠ類、高坏をⅠ類に分類した。その中で更に細分し、浅鉢をⅠ—A～Ⅰ—D類、Ⅱ類をⅡ—A～Ⅱ—C類、Ⅲ類をⅢ—A～Ⅲ—E類とした。深鉢ではⅠ—A～Ⅰ—E類、Ⅱ類をⅢ—A～Ⅲ—C類、碗形土器ではⅠ—A類、注口土器はⅠ—A～Ⅰ—C類とし、高坏形土器はⅠ—A～Ⅰ—D類にした。

第２節　遺構に伴わない後期・晩期の土器

(1) 浅鉢形土器の分類

浅鉢形土器は主として「x」字状文或は羽状文を持つもの、口縁部に凹線や沈線を施こすものや口縁部に山形突起を有するものなどがあり、細分類は次のとおりである。

Ⅰ—A類（第71図25）は、口縁部に「x」字状文を施文し、胴部に上・下位二段の「x」字状沈線文が三本みられる。本遺跡での出土例は極めて少数である。

Ⅰ—B類（第71図　４～６）は口縁部が若干外彎ぎみで、口縁部に凹線を持ち羽状文を施文する。

Ⅰ—Ｃ類（第71～74図　７～24）は口縁部が外反・直立・内彎するものがある。口縁部には二条～三条の凹線文を持つ。７・８などは口縁部がほぼ垂直に近い立ち上りをなし三本の凹線文をもつ。９は口縁部が外彎し、口唇部内面には一条の沈線を施す。10･14～17は口縁部に二条の凹線文を施文し、口唇部が若干延びる。19は口縁部が内彎ぎみで底部はややレンズ状をなし、不安定である。22は口縁部が外彎ぎみで、凹線文は消えた状態である。23は口線が強く内彎屈曲をなす。口縁部には二条の凹線文を施文する。

Ⅰ—Ｄ類（第74図　25）は口縁部に三条の沈線を施文する。口縁部の立ち上りはやや直立ぎみに内弯する。

Ⅱ—Ａ類（第71図　２・３）は口縁部に文様帯を持たないもので、胴部屈曲部上位に羽状文を施文する。２は口縁部が外彎ぎみに開くのに対し３は外反する。

Ⅱ—Ｂ類（第Ⅰ—１号方形溝遺構より出土　第99図１・２参照）

Ⅱ—Ｃ類（第74図　26・27）はⅡ—Ａ類と同じく口縁部に文様帯を持たないが、胴部屈曲部上位に沈線を施す。26は胴部から口縁部にかけて外彎し二条の沈線を施す。27は三条の沈線を施し、外反し口縁部へと続く。

Ⅲ—Ａ類（第76図　34～37）は口縁部に山形突起をもたず口縁部に二条の横線を施すものである。胴部屈曲部に一条の凹線文を施す。

Ⅲ—Ｂ類（第74図　28）は口縁部に若干の山形突起があり、口縁部はほぼ直立し、押点が見うけられる。胴部屈曲部には「x」字状凹線文を廻らす。

Ⅲ—Ｃ類（第75図　29～33）は口縁部に山形突起を有し、凹線文を施す。31は口縁部に押点があり、若干外彎するが、29・30のように口縁部は直立しない。29は口縁部と胴部屈曲部に押点と一条の凹線を施す。30は口縁部に二条の凹線を施し、押点をつけている。33は口縁部が「く」の字形に屈曲し、一条の凹線を施文する。32は口縁部が緩く外反し、二条の凹線を施す。口縁部に押点と、胴部屈曲部の上位に一条の凹線文をなす。

Ⅲ—Ｄ類（第76図　38～40）は口縁部に山形突起を持たず、二条の凹線を廻らす。

Ⅲ—Ｅ類（第Ⅱ—２号住居址より出土　第90図　７・第91図　８参照）

(2) 深鉢形土器の分類

深鉢形土器は口縁部に羽状文・凹線文・沈線文を施文するものや、口縁に文様帯をもたず胴部屈曲部上位に凹線を廻らしたものである。胴部から口縁部にかけて外反するものや直立するものがある。

Ⅰ—Ａ類（第77図　45）は口縁部が内彎ぎみで羽状文を施す。

Ⅰ—Ｂ類（第Ⅰ—11号住居址より出土　第88図　18・19参照）

Ⅰ—C類（第77・78図　46～53）は口縁部に二条ないし三条の凹線を廻らす。

Ⅰ—D類（第79図　54・55）は口縁部に二条の沈線を廻らすもので、口縁部がほぼ直立するものや若干内彎ぎみのものが見うけられる。

Ⅰ—E類（第Ⅰ—1号方形溝遺構より出土　第100図　12参照）

Ⅱ類（第79図　57）は肩部から口縁部にかけては内彎ぎみに外反し口縁部へと続く。肩部に一条の凹線を廻らす。

Ⅲ—A類（第71図　1）外面に「x」字状の沈線を施す。

Ⅲ—B類（第79図　56）は頸部から口縁部にかけて直立ぎみに外反し文様帯は持たない。

Ⅲ—C類（第79～81図　58～63）は肩部から口縁にかけて外反し文様は持たない。59～61は肩部が緩やかに屈曲するのに対し、63は肩部がやや強く屈折をなす。また口縁部が直立するのもある。

(3) 注口土器の分類

注口土器には口縁部及び胴部に羽状文を有するものや凹線文、篦状文等で構成されたものがあり。Ⅰ—A・B・Cに3分類した。

Ⅰ—A類（第82図　65～67）の文様構成は羽状文を主体とし、65は口縁部に四条の沈線を廻らし羽状文を施す。66は肩部に二条の凹線文に羽状文を施し、胴部の屈曲部には一条の凹線に羽状文を施す。肩部の羽状文と下位の羽状文で交差する所が見うけられる。67は胴部に五条の凹線文を廻らし、羽状文を施文する。

Ⅰ—B類（第82図　68～70）は胴部に二条ないし三条の凹線を施文する。

Ⅰ—C類（第82図　71）は肩部に二条・胴部に二条沈線を廻らす。胴部の沈線の間には上・下位二段に篦による施文をなす。文様構成は弧彎状のものを上・下位逆向きに描く。器種としては注口土器であるが、形状等は壺形土器の器形に類似している。(第82図　76～78）も注口土器の注ぎ口の破片である。

(4) 高坏形土器の分類

高坏形土器は口縁部及び脚台片で羽状文を有するものや凹線文等を持つものがある。

Ⅰ—A類（第83図　72）は脚台に凹線文を廻らし、穿孔を有する。底面は若干レンズ状をなす。

Ⅰ—C類（第83図　73）は脚台下位に羽状文を施し、穿孔する。底面は上げぎみである。

Ⅰ—D類（第83図　75）の脚台は底面が上げ底をなし、一条の突起を廻らす。

Ⅰ—B類（第83図　74）は文様帯を持たず、底面はやや上げ底を呈する。

(5) 碗形土器の分類

碗形土器は１個体の出土である。第43図は口縁部から胴部大半にかけてのもので、数条の凹線を廻らす。

Ⅰ類（第85図 148）はほぼ球形に近く底面は平底を呈する。

(6) 鉢の底部の分類

底部は浅鉢をⅠ・Ⅱ類、深鉢をⅢ・Ⅳ類に分類した。

Ⅰ類（第84図　79～111）は上げ底ぎみの底面を有する。このⅠ類の底部は、前項で浅鉢を９分類し、その中でA－１～C－22・C－２C類の浅鉢の底部に多く見うけられる。

Ⅱ類（第84図　112・113）は底面が丸味を持つものはC－２ｂ類の底部と思われる。

Ⅲ類（第84・85図　114～130）は底部が上げ底をなし、129・130は底面から１cm程まで直立し立ち上がる。

Ⅳ類（第85図　131～147）は底面が平底をなすもので、132・134～136は器が薄く、138・143・147などは厚くなっている。

第３節　縄文時代の遺構内検出の土器

(1) 第Ⅰ－11号住居址内の土器（第86～89図　１～44）

本址の土器の器種は浅鉢では、Ⅰ－B・Ⅰ－C・Ⅱ－A・Ⅲ－A・Ⅲ－D類、深鉢ではⅠ－B・Ⅰ－C類に該当する。(分類基準は第Ⅴ章第２節参照)

浅鉢形土器

Ⅰ－B類　１は口縁部に２条の凹線文を廻らし羽状文を施す。

Ⅰ－C類　２～10は口縁部に２条の凹線文を廻らすもので、4－６は口唇部がやや長く伸る。９は口線部の凹線文が消え無文に変化する段階のものと考えられる。

Ⅲ－A類　12～16は口縁帯に２条の凹線文を廻らす。

Ⅲ－C類　11は口縁部に山形突起を有するもので２条の凹線文を廻らし、押点を施す。

Ⅱ－A類　17は口縁帯を持たず４条の凹線文を廻らし底面は上げ底をなす。

深鉢形土器

Ⅰ－B類　18・19は口縁部に２～３条の凹線文を施し、山形突帯を廻らす。18は口縁部に押点を施す。

Ⅰ—C類　19～23は口縁部が「く」の字状に内彎する。口縁部には2条の凹線文を廻らす。19は口縁部に押点を施す。

底部の浅鉢では上げ底をなすもの（第89図25～33Ⅰ類）があり、深鉢では底面が上げ底のもの（第89図 34～42 Ⅲ類）と底面が平底をなすもの（第89図 43・44 Ⅳ類）などがある。

以上が本址出土の浅鉢と深鉢である。浅鉢では2～10（Ⅰ—C類）ように口縁部が短く屈折し2条の凹線を施文するものが大半を占める。深鉢では、大半は口縁部に2条の凹線文を施すものであるが、8～19のように口縁部に山形突起を有するものや、押点を施文したものなどがある。

土製品（第87図　45）

45は土隅の足の破片で炉址周辺から出土した。残存高は7.1cm、幅は2.8cmを測る。残存部上面には突帯を廻らす。

以上、住居址内出土の遺物を示す。

(2) 第Ⅱ—2号住居址内の土器（第90～92図　1～23）

本址の土器群は浅鉢・深鉢である。浅鉢ではⅠ—C・Ⅲ—A・Ⅲ—B類の3種類である。深鉢はⅠ—C・Ⅰ—D類の2種類がある。(分類基準は第Ⅴ章第2節参照)

浅鉢

Ⅰ—C類　1は口縁部から胴部にかけて彎曲ぎみな形をなし口縁部に2条の凹線文を廻らす。

Ⅲ—A類　2～4は口縁帯に2条の凹線文を施すものである。

Ⅲ—C類、6は口縁部に山形突起を有し、2条の凹線を廻らし押点を施す。

Ⅲ—E類、5は口縁部に山形突起を有し、口縁部には二条の凹線文を施し、胴部屈折部には2条の沈線文を廻らす。6は口縁部に山形突起を有し、沈線を廻らす。共に口縁部に押点を施す。

深鉢

Ⅰ—C類、8～12は口縁部に2条の凹線文を施し、9は口縁部が強く内彎し、胴部の屈折部も明確である。11は口縁部に2条の凹線文と胴部屈曲上面に1条の凹線を施す。

Ⅰ—D類、13～15は口縁部の文様帯は2条の沈線文を施す。

底部は浅鉢で上げ底をなすもの（Ⅰ類16～18）と深鉢では平底をなすもの（Ⅳ類19～23）である。

浅鉢ではⅠ—C類は1点で殆ど見られなくなる。又、Ⅲ—C類の口縁部の凹線文も沈線に近くなっておりⅢ—E類のように文様帯が沈線化しているのが窺える。深鉢でも文様帯に凹線を施すものも存在するが、Ⅰ—D類のように口縁部の文様は沈線に変化している。

以上が第Ⅱ－２号住居址出土の土器である。

(3) 第Ⅱ－１号円形周溝遺構内の土器（第93図　１～８）

出土遺物は浅鉢・深鉢で、浅鉢ではⅠ－A・Ⅱ－A・Ⅲ－A類で深鉢はⅠ－C類に該当する。

浅鉢

Ⅰ－A類、１は口縁部に３条の凹線文を廻らし、羽状文を施す。内面口唇部には１条の凹線文を廻らす。

Ⅱ－A類　２は口縁帯を持たず胴部屈曲上位に２条の凹線文を廻らし、羽状文を施す。内面口唇部には１条の沈線文を廻らす。

Ⅲ－A類　３～５は口縁部に２～３条の凹線文を廻らす。５は内面の屈折部に１条の沈線を廻らす。

深鉢

Ⅰ－C類　６は口縁部が内彎ぎみに屈折し口縁部に２条の凹線文を廻らす。

底部の８・９は深鉢の上げ底でⅢ類に相当する。

浅鉢ではⅠ－B・Ⅱ－A類のように口縁帯及び胴部上位に凹線文と羽状文を施すものが初期に出現し、Ⅲ－A類などの時期まで継承されたと考えられる。

(4) 第Ⅱ－２号円形周溝遺構内の土器（第94図　１～６）

本溝からの出土土器は浅鉢でⅠ－A・Ⅰ－B・Ⅲ－A類の３種類である。深鉢ではⅠ－C・Ⅲ－C類の２種類が出土している。

浅鉢

Ⅰ－A類　２は口縁部が屈曲ぎみに内彎し、３条の沈線文を施す。

Ⅰ－C類　１は口縁部に２条の凹線文を施す。

Ⅲ－C類　５は口縁部から胴部下半の½が現存し、胴部屈折部から口縁部にかけては外反ぎみに開く。

底部６は浅鉢で底面が上げ底をなす。(Ⅰ類)

(5) 埋鉢（第95～98図　１～８）

第Ⅰ区から４基、第Ⅱ区から４基を検出した。検出位置は第４図に各埋鉢の検出状態は第11・12図に示す。第Ⅰ区における検出位置（グリッド）は、７－Ⅰ（第Ⅰ－１号）・６－Ⅰ（第Ⅰ－２号）・５－H（第Ⅰ－３号）・９－C（第Ⅰ－４号）である。第Ⅱ区における検出位置（グ

リッド）は、9－P（第Ⅱ－1号）・6－R（第Ⅱ－2号）・2－X（第Ⅱ－3号）・1－W（第Ⅱ－4号）である。

8基の埋鉢とも深鉢である。第Ⅱ－2号埋鉢は底部を穿孔されているが、他の7基は底部は残存する。

8基の埋鉢を本章の分類基準に対比させると、Ⅰ－C類（第Ⅰ－1号）・第Ⅱ類（第Ⅱ－2号）・第Ⅲ－C類（第Ⅰ－2・3・4号、第Ⅱ－1・3・4号）に分類される。

(6) 第Ⅰ－1号方形溝内の土器（第99・100図　1～29）

本溝の土器群は浅鉢・深鉢・注口形土器が出土している。浅鉢ではⅡ－B・Ⅲ－A・Ⅲ－B類、深鉢ではⅠ－C・Ⅰ－E・Ⅱ類、注口ではⅠ－B類の分類に該当する。(分類基準は第Ⅴ章第2節を参照)

浅鉢

Ⅱ－B類　1・2は口縁帯を持たず胴部屈曲部上位に2条の凹線を廻らし、器内面の口唇部に1条の流線文を施こす。

Ⅲ－A類　3～6は口縁部に2条の凹線文を施し、5は口縁部に押点を施す。

Ⅲ－C類　7・8は口縁部に2条の凹線文を施し山形突起を有する。

深鉢

Ⅰ－C類　9～11は口縁部が屈曲内彎するもので口縁部に2条の凹線文を施し、8は口縁部上・下位に押点を圧する。

Ⅰ－C類　12は口縁帯が無文である。

Ⅱ類　口縁帯を持たず胴部屈曲部上位に1条の凹線を廻らす。

注口土器

Ⅰ－B類　14は胴部片で胴部屈曲部に3条の凹線文を廻らす。

底部は、浅鉢で15～23（Ⅰ類）のように底面が上げ底をなすものがあり、深鉢では24・25（Ⅲ類）のような上げ底ぎみの底面で、26～29（Ⅳ類）は底面が平底をなすものに分類できる。

浅鉢ではⅡ－B類のような口縁帯を持たず胴部に凹線文を施すものは本溝の特徴である。深鉢ではⅠ－C類の口縁部に数条の凹線文を施すのが大半で、Ⅰ－E類のように口縁部に文様を持たないものも見うけられる。

以上が第Ⅰ－1号方形溝出土の土器群である。

第4節　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の縄文土器の器種の変遷

以上、伊坂上原遺跡の土器群の大半を抽出して、分類した。これらの土器群は包含層が薄いため、層位的識別はできなかったので器種の形状等で分類した。特に第19表土器形式別口径分布表で観察すると、Ⅱ式（鳥井原式と平行）の段階で急激に大小の差が現われることが理解される。

(1) 浅鉢形土器の変遷

浅鉢形土器のⅠ類は口縁部が外彎ぎみで胴部が屈曲する器形をなし、Ⅰ—B類は口縁部に羽状文を施したもので主として第Ⅰ—11号住居址や第Ⅱ—1号円形周溝遺構などに見られる。Ⅰ—C類としては口縁部に2～3条の凹線文を廻らしたもので、第Ⅰ—11号住居址や第Ⅱ—2号円形周溝遺構から出土している。器形としては口唇部が伸びぎみのものや口縁部が若干内彎する器形もある。このⅠ類ではⅠ—A→Ⅰ—B→Ⅰ—C類の順序で変化すると思われる。

Ⅱ類は口縁部に文様帯を持たないもので、胴部屈曲部に文様を廻らすものである。Ⅱ—A類は胴部屈曲部に2条の凹線文を廻らし羽状文を施し、1号円形周溝遺構のものが主体をなす。又、第Ⅰ—11号住居址出土の浅鉢（第87図　17）のように口縁帯を持たないが4条の凹線を廻らしているが、「本来なら別に分類すべきであろうが、三万田式の要素を持っていることからⅡ—A類に入れた。」Ⅱ—B類としては、Ⅱ—A類と同じく口縁帯を持たないが、胴部屈曲部に2条の凹線を廻らすものである。特に方形溝遺構から出土している。又、Ⅱ—A類の第Ⅱ—1号円形周溝遺構出土のもの（第93図　1・2）とⅡ—B類の第Ⅰ—1号方形溝状遺構のもの（第99図　1・2）は口唇部の内面に1条の沈線文を廻らしており、Ⅱ—A→Ⅱ—Bに変化したことが窺える。Ⅱ—C類は口縁部及び胴部屈曲部に文様帯を持たない無文のものである。このⅡ類はⅡ—A→Ⅱ—B→Ⅱ—C類の順序で変化すると思われる。

Ⅲ類としては、口縁部に山形突起を有するものと山形突起がないものがある。Ⅲ—A類は、口縁部に山形突起を有し胴部屈曲部に「x」字状凹線文を施す。この土器は在地系の土器とは異なる。外来系の土器の可能性が強い。Ⅲ—Bは口縁部に山形突起を持たず、口縁部と胴部屈曲部に2条ないし3条の凹線文を廻らす。Ⅲ—C類は口縁部に山形突起を施し口縁部と胴部に1～2条の凹線文を施す。Ⅲ—D類は山形突起を有し1～2条の沈線文を廻らす。主として2号住居址の出土である。Ⅲ—E類としては口縁部に山形突起を持たず、口縁部に2条の凹線文を廻らす。Ⅲ—B類の土器は口縁帯を貼り付けており、外せばⅢ—A類の器形と同類になる。Ⅲ—A類（外来系の土器）からⅢ—Bに変化したと考えるのは若干不自然のように思われる。むしろⅡ—A類の影響を受けⅢ—B類に変化したと考える方が自然であろう。このⅢ類はⅡ—A類の影響が見られ、Ⅲ—B→Ⅲ—C$\begin{smallmatrix}\rightarrow\text{Ⅲ—D}\\ \rightarrow\text{Ⅲ—E}\end{smallmatrix}$に変遷すると考えられる。

(2) 深鉢形土器の変遷

深鉢形土器では口縁部に文様帯を持つものと持たないものに分けられる。

Ⅰ類はⅠ—A類として口縁部に羽状文を施すものである。Ⅰ—B類は山形突起を有し、口縁部に3条の凹線文を施す。口縁部に押点を施す。Ⅰ—C類は口縁部に2条の凹線文を施すもので、Ⅰ—D類は口縁部に2条の沈線文を廻らすものである。変遷については、Ⅰ—A→Ⅰ—B→Ⅰ—C→Ⅰ—D類と変化すると考えられるが、Ⅰ—B類などは口縁部に山形突起が若干残っており、明らかに浅鉢Ⅳ—C類の口縁部から胴部の幅がやや伸びているものから変化したと考えるべきであろう。

Ⅱ類は口縁帯を持たず胴部屈曲部に1条の凹線文を施すものである。

Ⅲ類は口縁部が外反ぎみに開き文様を持たないものである。Ⅲ—A類は西平式土器の影響を強く受け継いだもので、胴部に「x」字状文を施しているのが特徴である。Ⅲ—Bは口縁部が直線的に外反胴部が球形に近くなっている。Ⅲ—C類としては胴部から口縁部にかけては外彎ぎみな立ち上りをなす。ここでは胴部屈曲が緩やかなものとやや強く屈曲するものに区分した。

Ⅱ類とⅢ類では或はⅡ→Ⅲ類に変化するとも考えられる。しかし、Ⅲ—B類の器形を観察するとⅢ—Aの継続を受けて作製されたと考えるべきではなかろうか。(Ⅱ—C類では鳥井原期のものがやや緩やかに屈曲するものに対し、御領期のものは、屈曲部がやや強い屈曲をなし胴部の屈折部が変化していることが窺える。)

(3) 碗形土器の変遷

碗形土器はⅠ類に分類し、やや球形をなす。

注口土器（第82図　65～71）はⅠ—A類として口縁部や胴部に数条の沈線及凹線文を廻らし羽状文を施す。Ⅰ—B類としては胴部に凹線文を廻らしたものである。Ⅰ—C類は胴部が球形状に内湾し、篦状工具による文様構成と3条の沈線文を施すものである。この注口土器の器種の変化についてはⅠ—A→Ⅰ—B→Ⅰ—C類の順序で継列すると考えられる。

(4) 高坏形土器の変遷

高坏形土器では4分類し、羽状文を施すものをⅠ—A類、数条の凹線文を施すものをⅠ—B類、突帯を有するものをⅠ—C類とした。文様帯を持たない脚をⅠ—D類とした。

Ⅰ—B類とⅠ—A・C・D類は系列が異なると思われる。脚部が上げ底ぎみのものとしてはⅠ—A→Ⅰ—C→Ⅰ—D類の順列で変化するものと考えられる。

以上が伊坂上原遺跡の縄文後期後半～晩期初頭の土器群を器種別に分類し系列化して、変遷

を辿ったものである。この器種の変化で浅鉢・深鉢と大別されているが、深鉢の中にも浅鉢の系列を受け継いで作製されたと思われるものも存在することから完全分離することが出来ないものも存する。又、第19表の器種別・形式別口径分布表で観察すると浅鉢Ⅰ—A・B類（三万田式と平行）はそれほど口径の差は見られずⅠ—C・Ⅲ—A・C類、深鉢ではⅠ—C、Ⅲ—C類（鳥井原式～御領式と平行）にかけて大・小のばらつきが目立ち始める。おそらくこの頃から土器の大量生産が行われはじめたと考えるべきであろう。

(5)　形式設定及時期（第20表）

伊坂上原遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土の土器群は、縄文後期後半から晩期前半代のものである。この時期の型式について考えてみよう。

まず、後期後葉の型式名としては「三万田式」が設定されている。後期終末では「御領式」が設定されている。この「三万田式土器」と「御領式土器」の中間的存在として「鳥井原式」が型式化されている。晩期前半代としては「天城式」が型式設定されている。

三万田式土器については、『九州縄文土器の研究』で知られる小林久雄氏や、三万田東原遺跡等の調査を行なった坂本経堯氏によって「三万田式」の名称がつけられた。以後多くの研究者達によって「三万田式土器」の土器編年について検討が行なわれた。

富田紘一氏は後期後葉の三万田式土器をA・Bに分類し、「五・六本の横足沈線を基本として「x」字のように反転する文様」を三万田A式土器とし、更に「口縁部と胴部の文様帯に凹線文を引きその間に細い毛羽のような羽状文が付けられている」を三万田B式土器と設定している。又、終末期の御領式土器と三万田B式の間に位置するとして鳥井原遺跡があげられている。この鳥井原遺跡については富田氏は「三万田B式から次の御領式に移行する中間的な型式……文様帯では凹線の幅が広くなって凹線と凹線とが接し、その間が稜線をなす……」として鳥井原式土器と設定している。又、宮内克己氏は福岡市四箇遺跡出土の土器群を分類し三万田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式に設定した。「磨消縄文土器群を三万田Ⅰ式……羽状文土器群は三万田Ⅱ式……凹線文土器群は三万田Ⅲ式土器」として細分類している。

後期終末では御領式土器があげられる。この御領式土器は漠然と縄文終期の土器として考えられていたが、小林久雄氏が「後期終末の土器」とし、以後山内清男、坪井清足氏等は御領式土器を後期終末に位置づけている。

御領式土器に関しては、1957年江坂輝弥氏が御領式土器を細分し御領1を後期、御領2を晩期としている。1965年乙益重隆氏は晩期と型式化した。1980年島津義昭・清田純一両氏は後期後半を天城Ⅰ式、後期終末を天城Ⅱ式、晩期前半を天城Ⅲ式と型式設定して、天城Ⅲ式からを晩期とした。1982年には高橋信武氏が大分県宮地遺跡の晩期土器の編年試案として、「天城式を後期終末、古閑式を晩期初頭」に位置づけている。

1980年古閑式土器については賀川光夫氏が晩期の土器と位置づけられている。

以上が縄文後期後半から晩期前半代にかけてのもので、前述のように三万田式・鳥井原式・御領式・天城式・古閑式に各々型式設定されている。

伊坂上原遺跡の土器群は6区分し、伊坂Ⅰ—A式、Ⅰ—B式、Ⅱ式・Ⅲ式・Ⅳ式・Ⅴ式に分類した。

Ⅰ—A・B式は坂本経尭氏の編年による三万田A・B式を標式とし、Ⅱ式は鳥井原式、Ⅲ式は御領式、Ⅳ式は天城式、Ⅴ式は古閑式平行とし、各々の型式名を使用することにする。

Ⅰ—A式

第Ⅰ調査区10—C、11—Dグリッド周辺に極少数分布する。浅鉢ではⅠ—A類のように口縁帯に3条の沈線を廻らすものである。深鉢のⅢ—Aは三万田A式に見られるように「x」字状沈線文を施すものである。本調査区内ではⅠ—A式に相当する遺物の分布や遺構等は全く把握できなかった。

Ⅰ—B式

第Ⅰ調査区では5・6・7—F・G・H・I、9・10・11・12・13—C・D・E、12・13・14・15—F・G・Hグリッドの3ヶ所に分布(第70図)が見られる。又、11号住居址からも出土している。

第Ⅱ調査区では1号円形周溝などが相当する。

浅鉢形土器ではⅠ—B・Ⅱ—A類、深鉢形土器ではⅠ—A・Ⅲ—B類、注口土器はⅠ—A類、高坏形土器はⅠ—A・B・C類が該当する。

Ⅱ　式

第Ⅰ調査区では遺物廃棄状態は馬蹄形状をなす。Ⅱ式に相当する遺構としては方形溝及11号住居跡出土土器があげられる。浅鉢としては、Ⅰ—C・Ⅱ—B・Ⅲ—A類、深鉢ではⅠ—B・Ⅱ・Ⅲ—C類、注口土器Ⅰ—b類などである。

Ⅲ　式

第Ⅰ調査区では遺物の廃棄状態はやや緩やかな馬蹄形をなす。浅鉢ではⅠ—D・Ⅱ—C・Ⅲ—C・Ⅲ—D類、深鉢ではⅠ—C・Ⅲ—C類（第Ⅰ—2号埋鉢）などが相当する。

Ⅳ　式

第Ⅰ・Ⅱ調査区に分布し、Ⅱ区の2号住居跡及4号埋鉢などに見られる。浅鉢ではⅢ—E類、深鉢ではⅠ—D・Ⅲ—C類などが相当する。

Ⅴ　式

第Ⅰ調査区で検出され、深鉢ではⅠ—E類、碗形土器Ⅰ類、注口土器Ⅰ—C類、高坏形土器Ⅰ—D類などがあげられる。

以上伊坂上原遺跡の土器群をⅠ～Ⅴ式に6区分したが、後期後半に位置づけたⅠ—A・B・Ⅱ式については大きな時間差はないと考えられる。

第５節　縄文土器から見た遺構の形成時期

第Ⅰ・Ⅱ調査区から検出した住居址２基、円形周溝２基、方形溝１基は縄文時代後期後半～晩期前半に比定できる。

後期後半の時期に比定される遺構としては第Ⅱ－１・２号円形周溝と第Ⅰ－11号住居址があげられる。第Ⅱ－１号円形周溝出土土器（第93図　１・２）のように口縁帯に３条凹線と羽状文を施すものや口縁帯を持たず胴部屈折部上位に２条の凹線を廻らすもの等はⅠ－Ｂ式（三万田Ｂ式平行）の時期に相当する。11号住居址では、出土土器等から観察すると、口縁帯に何条かの凹線に羽状文を施すものや口縁帯に凹線文を廻らすものが主体を占め、時期はⅠ－Ｂ式～Ⅱ式（三万田Ｂ～鳥井原式平行）の期間内の所産と思われる。２号円形周溝出土のものは口縁帯に２～３条の凹線を廻すものなどで、Ⅱ式（鳥井原式平行）に相当する。

後期後半～終末の時期に相当する遺構としては第Ⅰ－１号方形溝があげられる。この方形溝出土土器は口縁帯を持たず胴部屈折上位に２条の凹線を廻らすものや山形突起を有する浅鉢などはⅡ式～Ⅲ式（鳥井原～御領式平行）の期間に相当する。

後期終末～晩期前半に相当するものとしては第Ⅱ－２号住居址があげられる。第Ⅱ－２号住居址出土の土器は浅鉢では山形突起を有するもので口縁部等に凹線及沈線文を廻らすものなどはⅢ式～Ⅳ式（御領～天城(Ⅲ)式平行）の所産と考えられる。

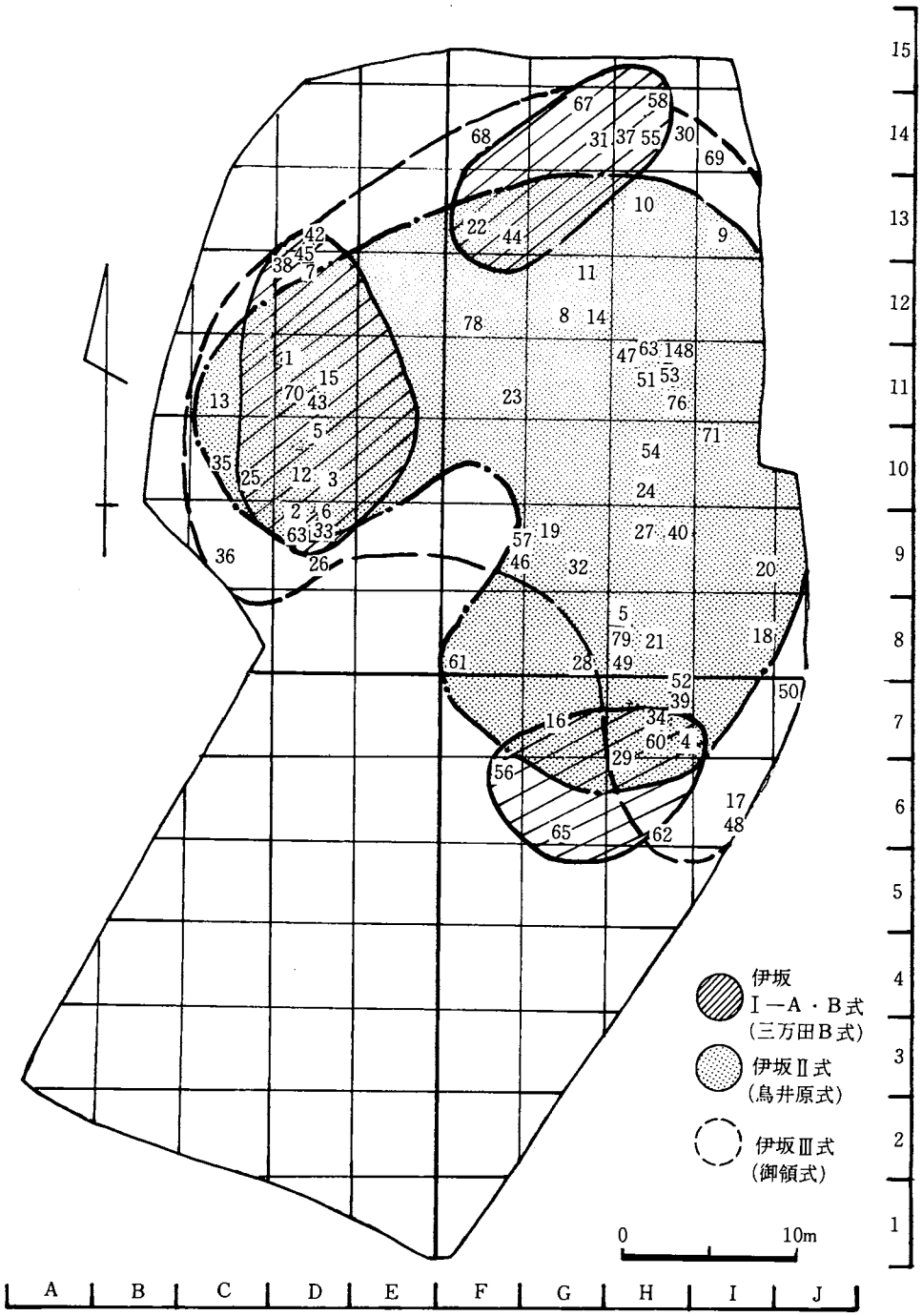
この第Ⅰ・Ⅱ調査区の縄文時代後期後半～晩期前半の遺構の製作時期を順列すると、第Ⅱ－１号円形周溝→第Ⅰ－11号住居址→第Ⅱ－２号円形周溝→第Ⅰ－１号方形溝→第Ⅱ－２号住居址と変遷を辿ることができる。住居址に関しては第Ⅰ－11号住居址（伊坂Ⅰ－Ｂ～Ⅱ式）と第Ⅱ－２号住居址（伊坂Ⅲ～Ⅳ式）の２軒が確認されている。住居址の変遷については確認軒数が少ないだけに不明瞭ではあるが、大方西側から東側へと集落が移動すると考えられる。

第６節　第Ⅵ調査区採集の土器

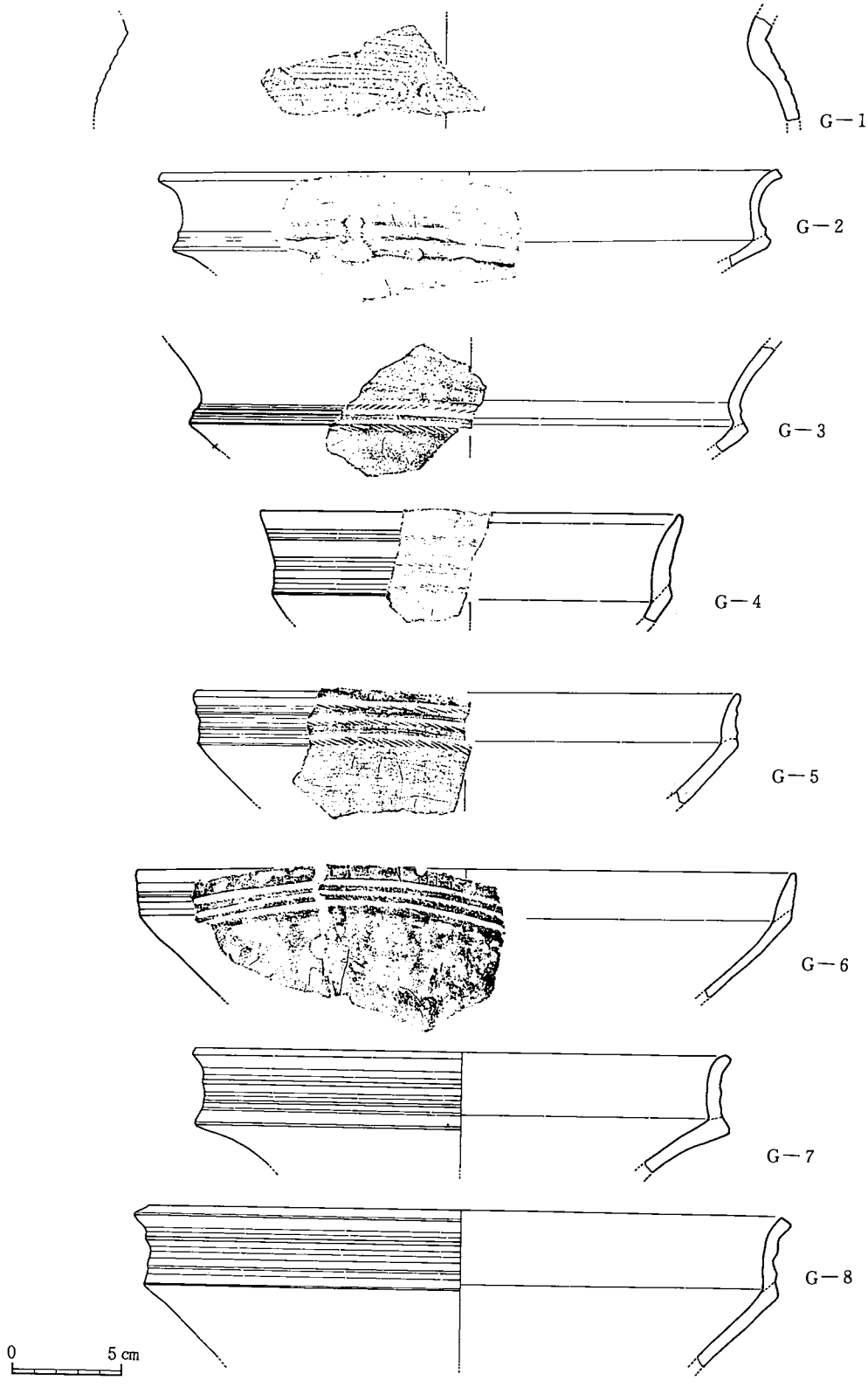
第Ⅵ調査区内から忘れられたように２点（第99図参照）の縄文土器片を採集した。当調査区内より検出した縄文土器はこの２点のみであり、遺構に伴う遺物ではない。

第99図の１は、深鉢の口縁部である。口縁の外縁部には指による押点が見られる。外面は粗く整形されている。阿高式土器の破片と推定される。

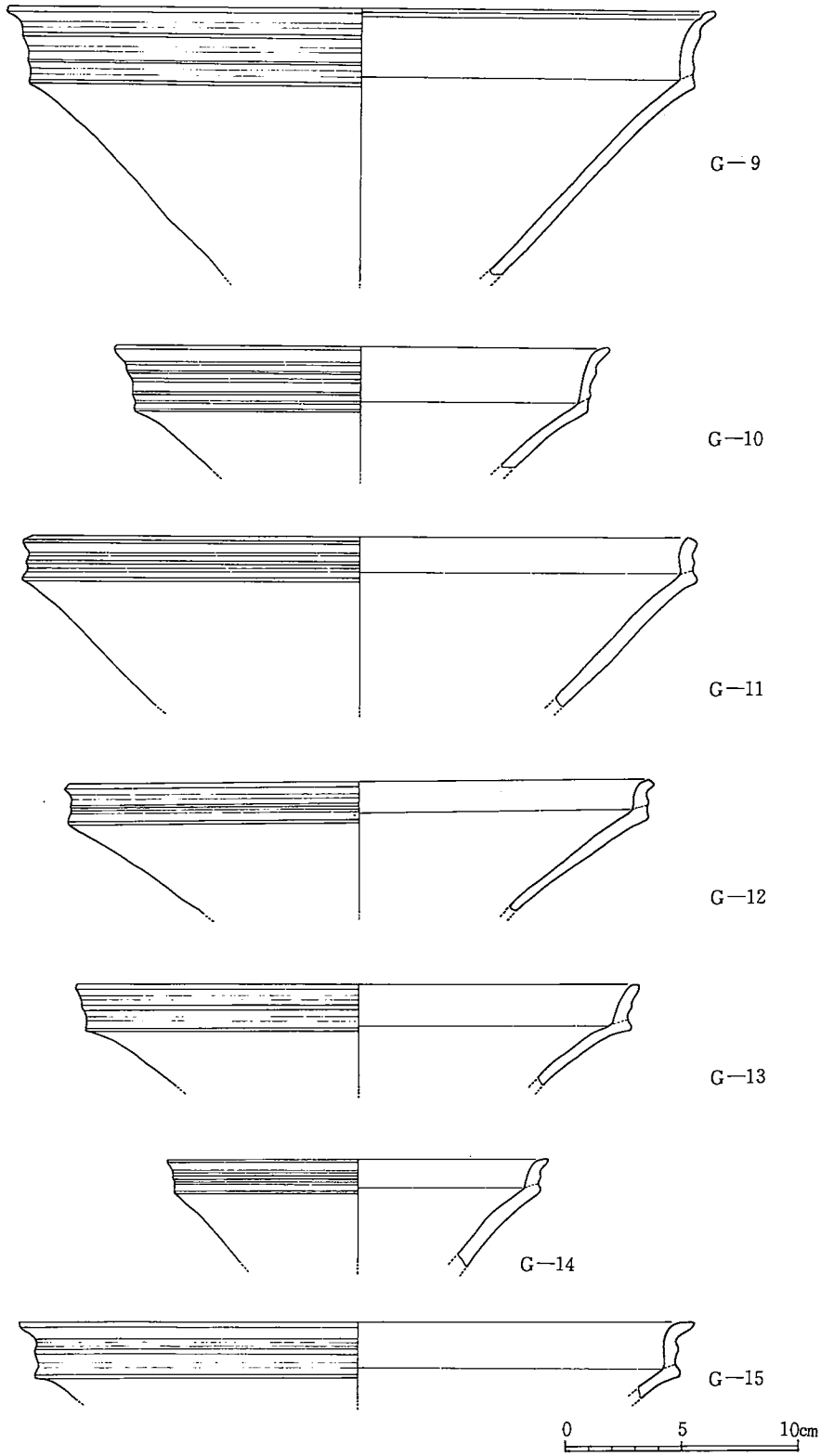
第99図の２は、鉢の口縁の少し下部から胴部にかけての破片と思われる。口縁部は欠失している。焼成は良好であり、硬く、色調は黒色である。胎土中に砂粒を含む。北久根式土器に比定される時期の土器と思われる。



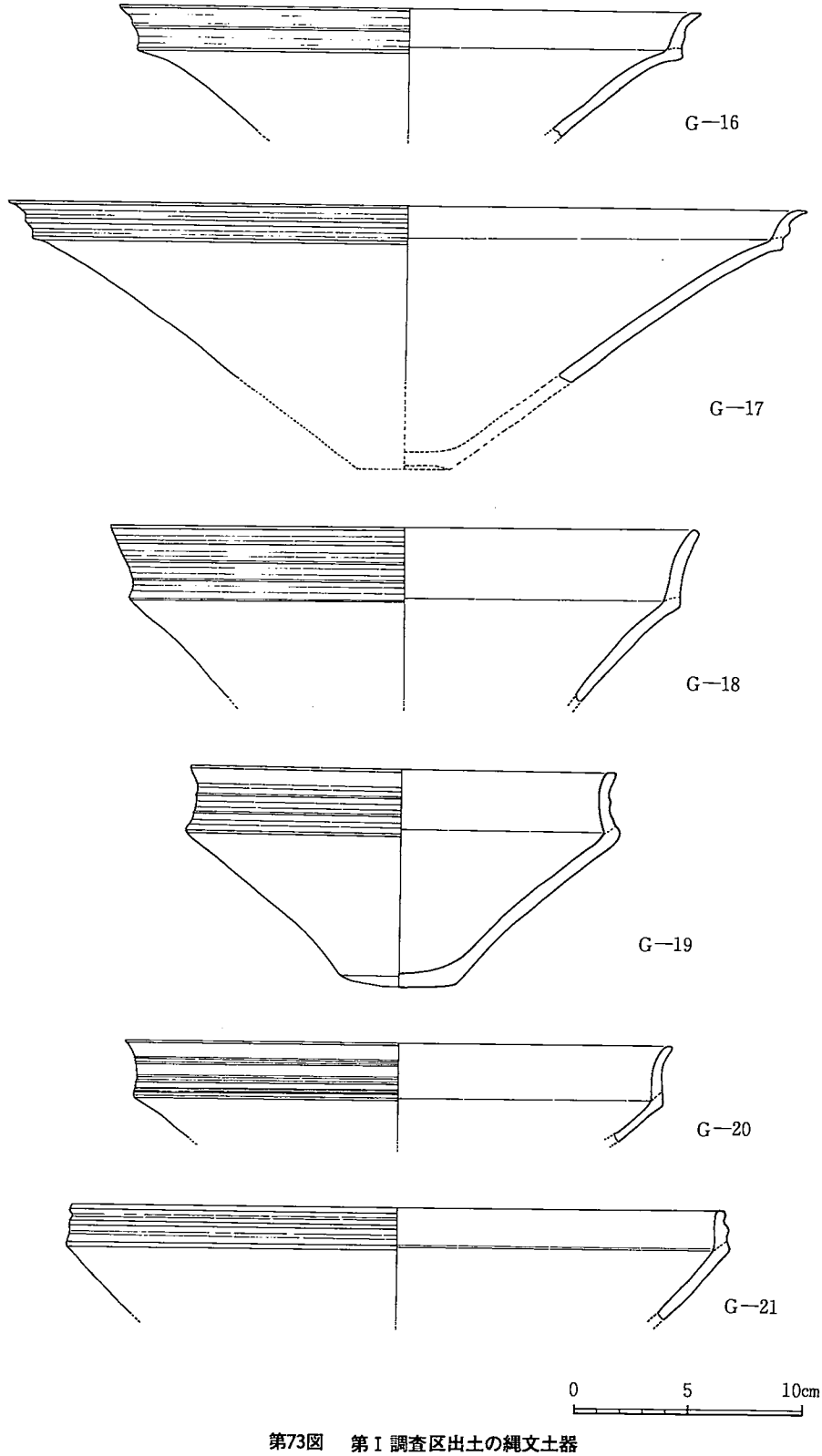
第70図　第Ⅰ調査区縄文後期・晩期遺物分布図



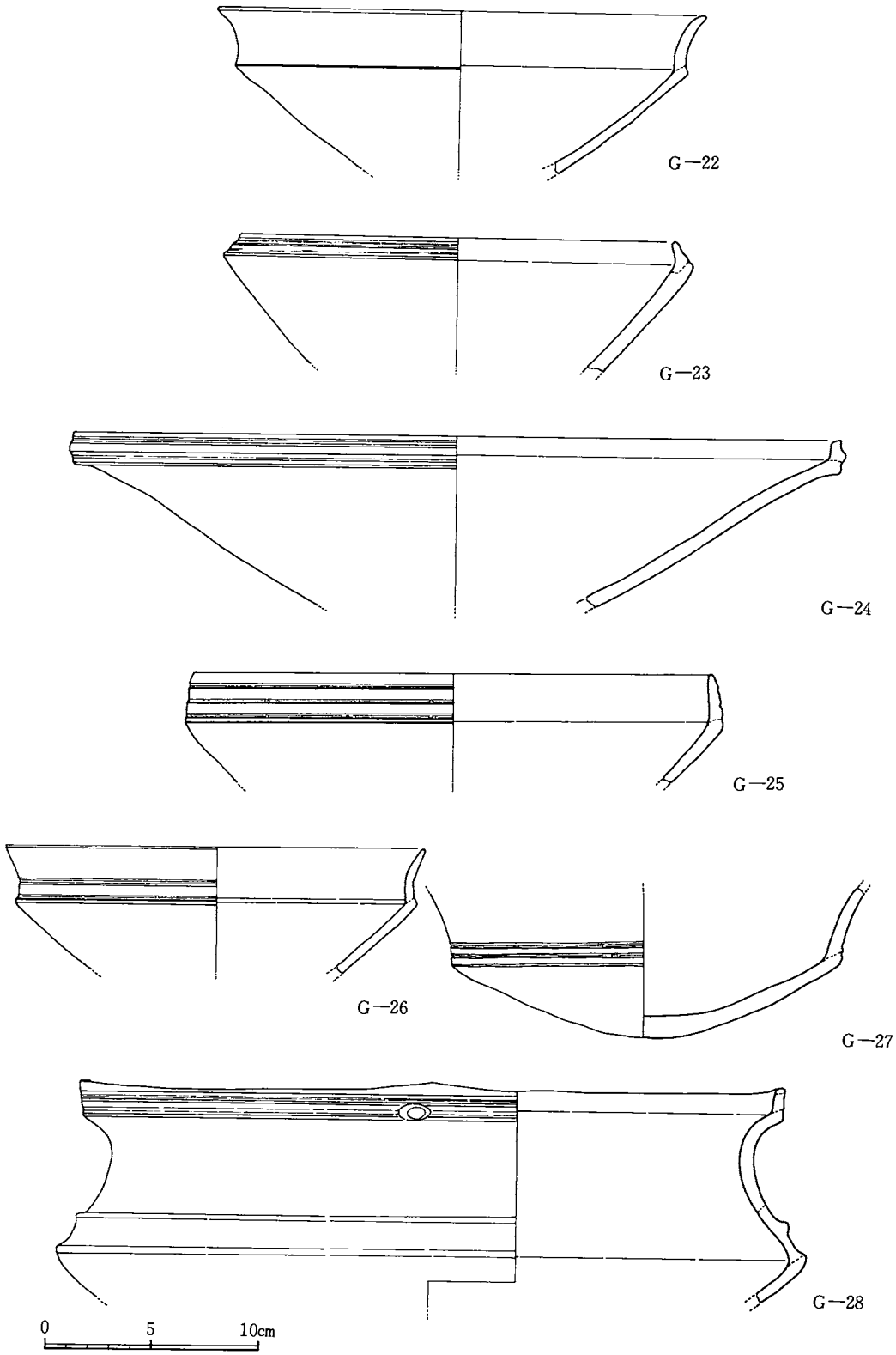
第71図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



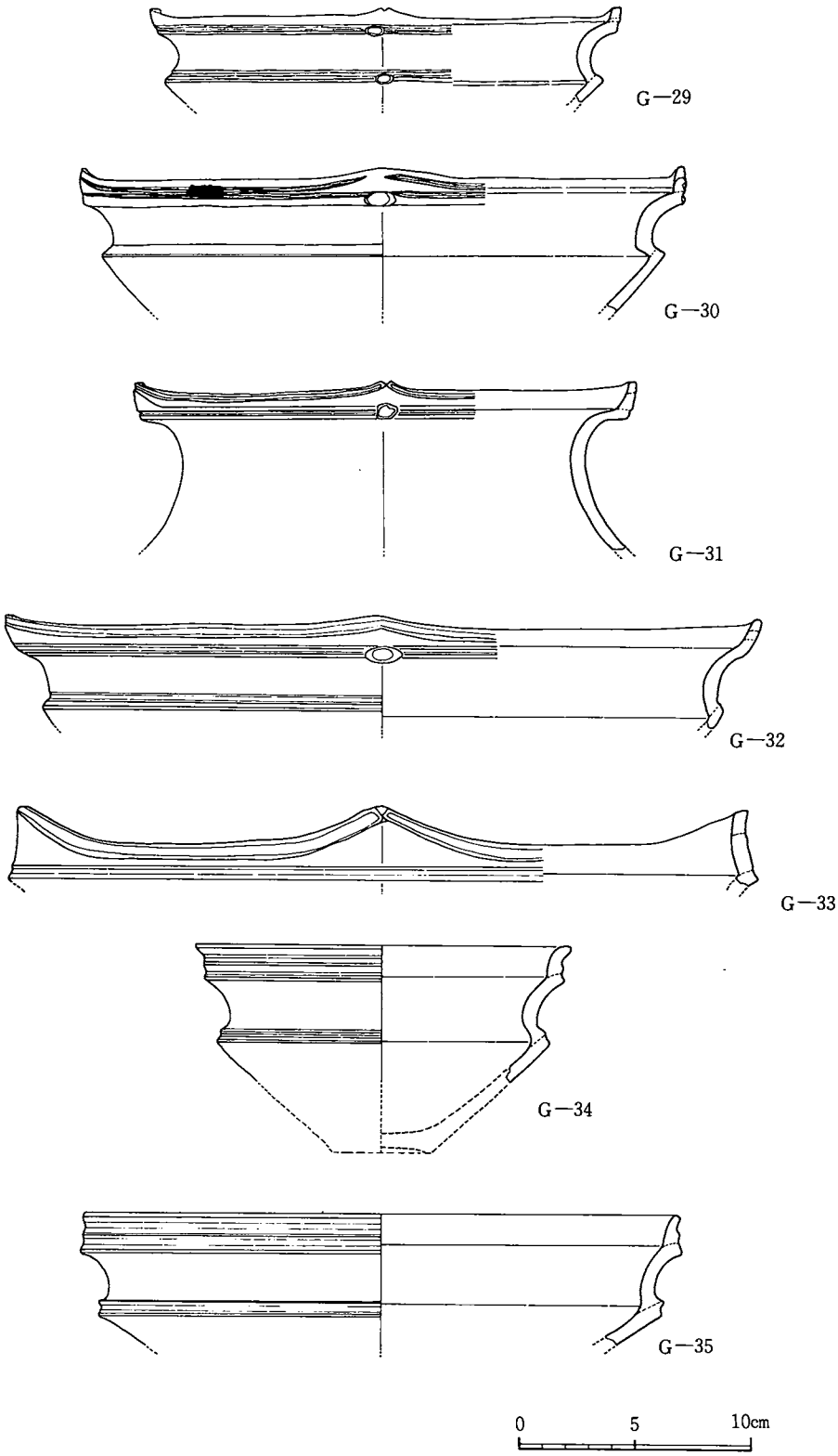
第72図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



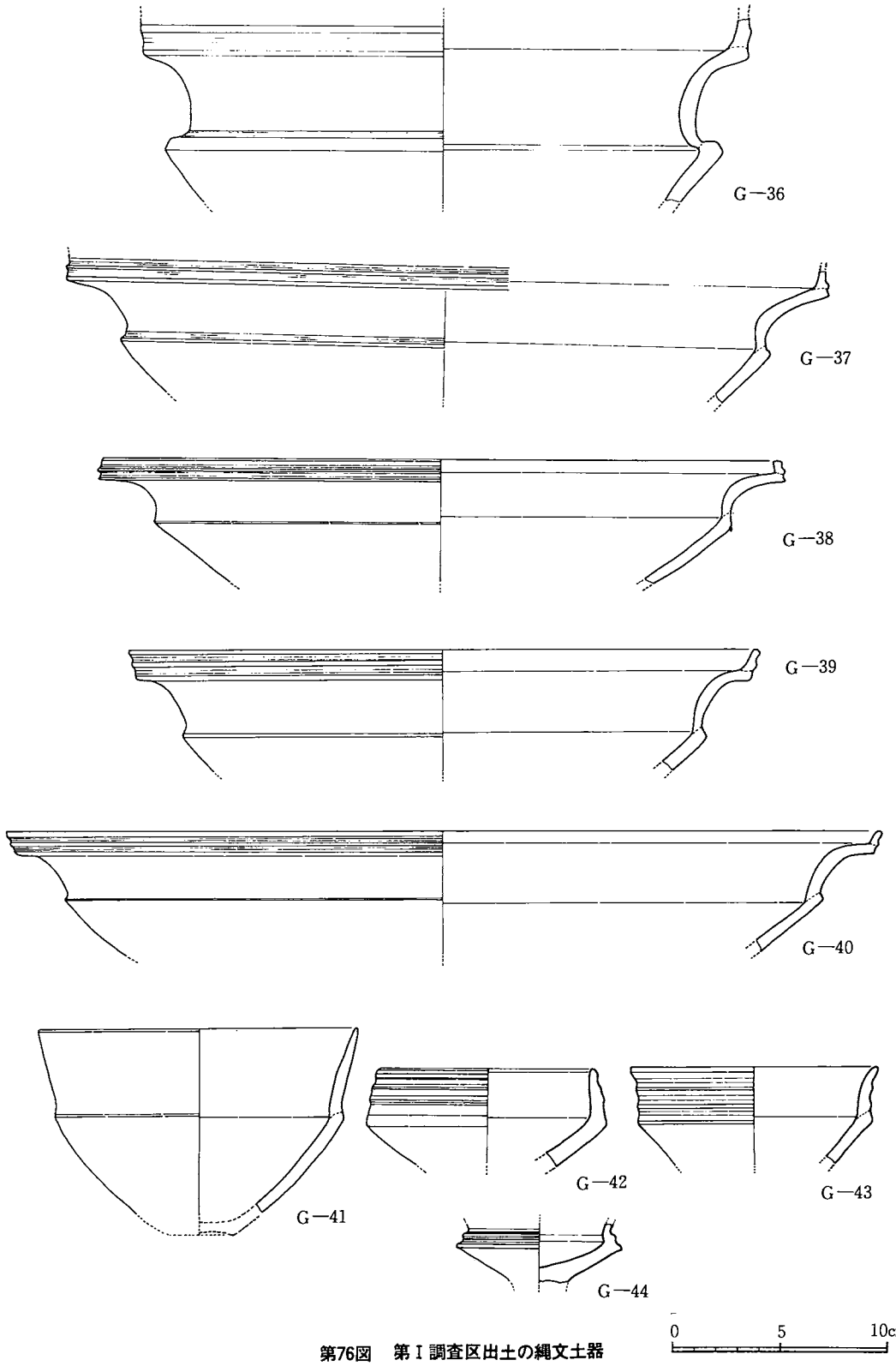
第73図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



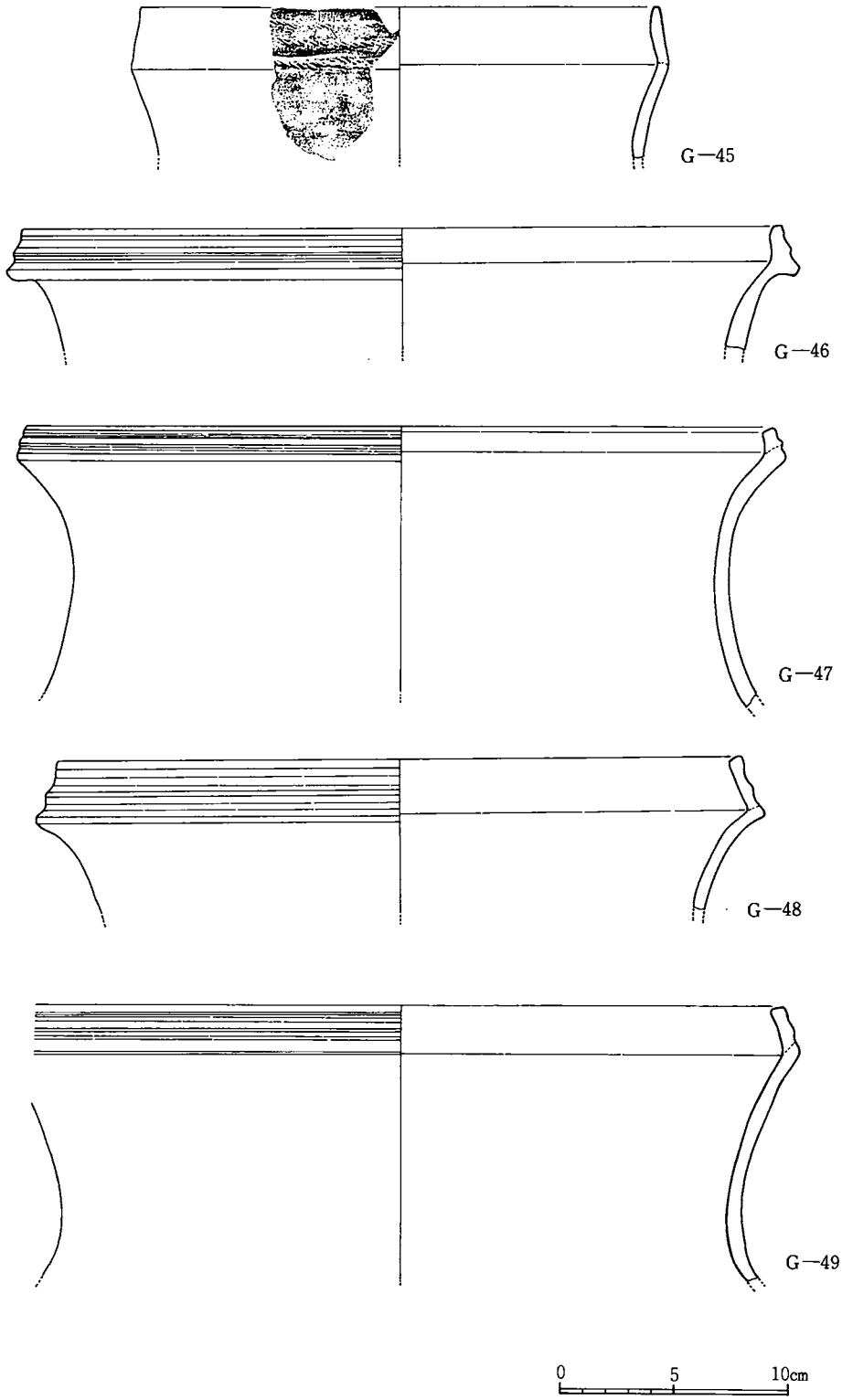
第74図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



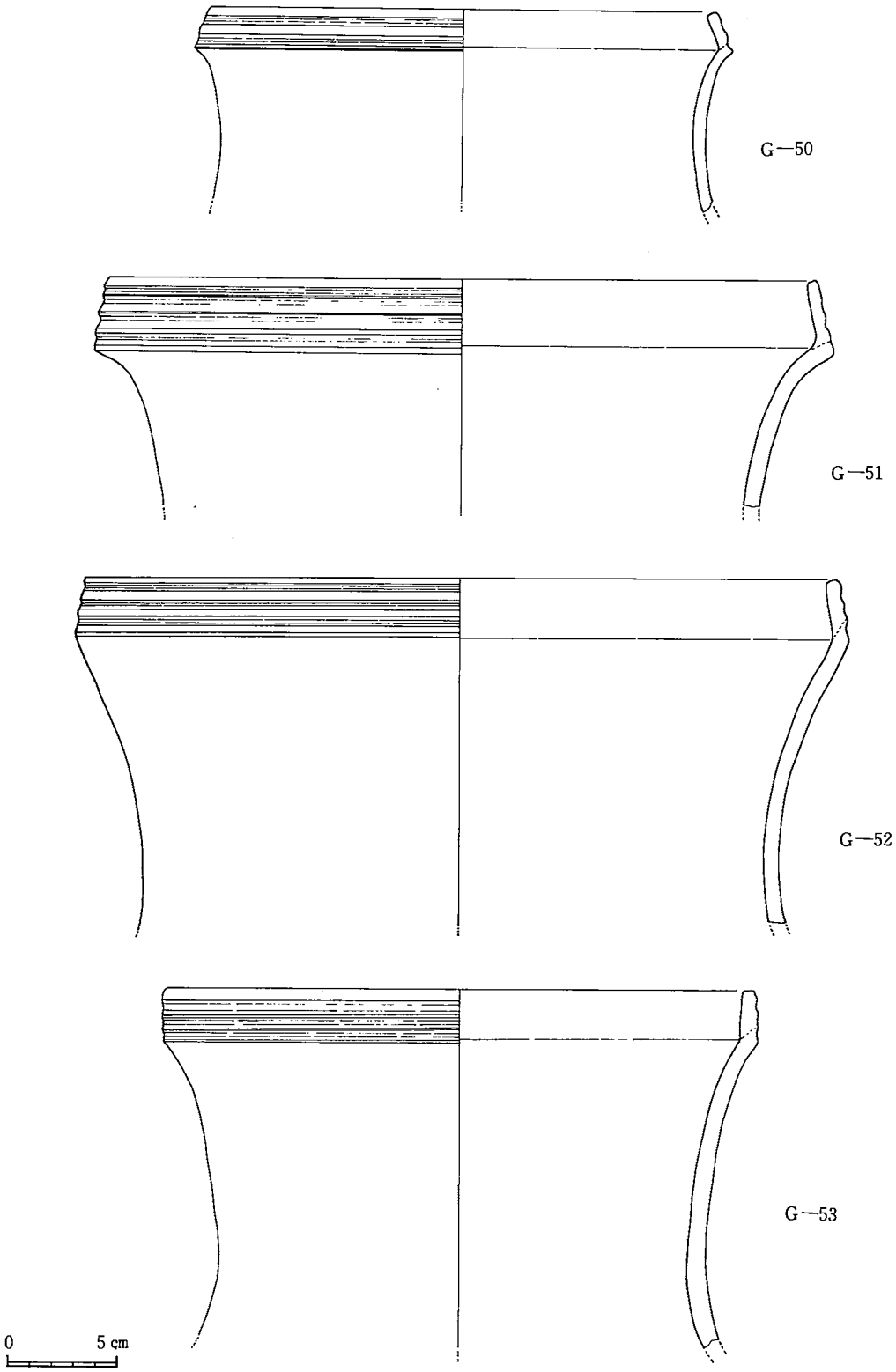
第75図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



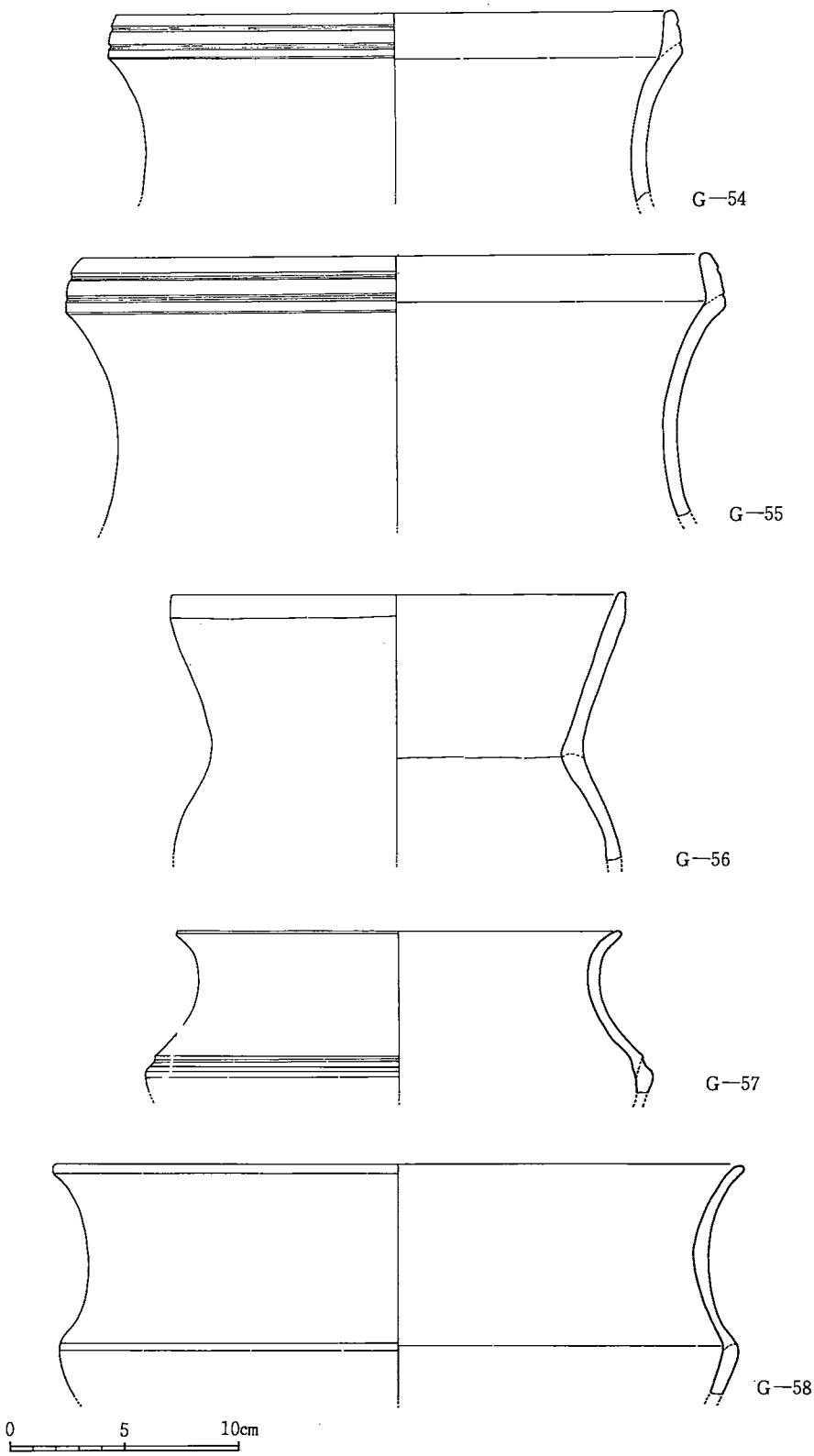
第76図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



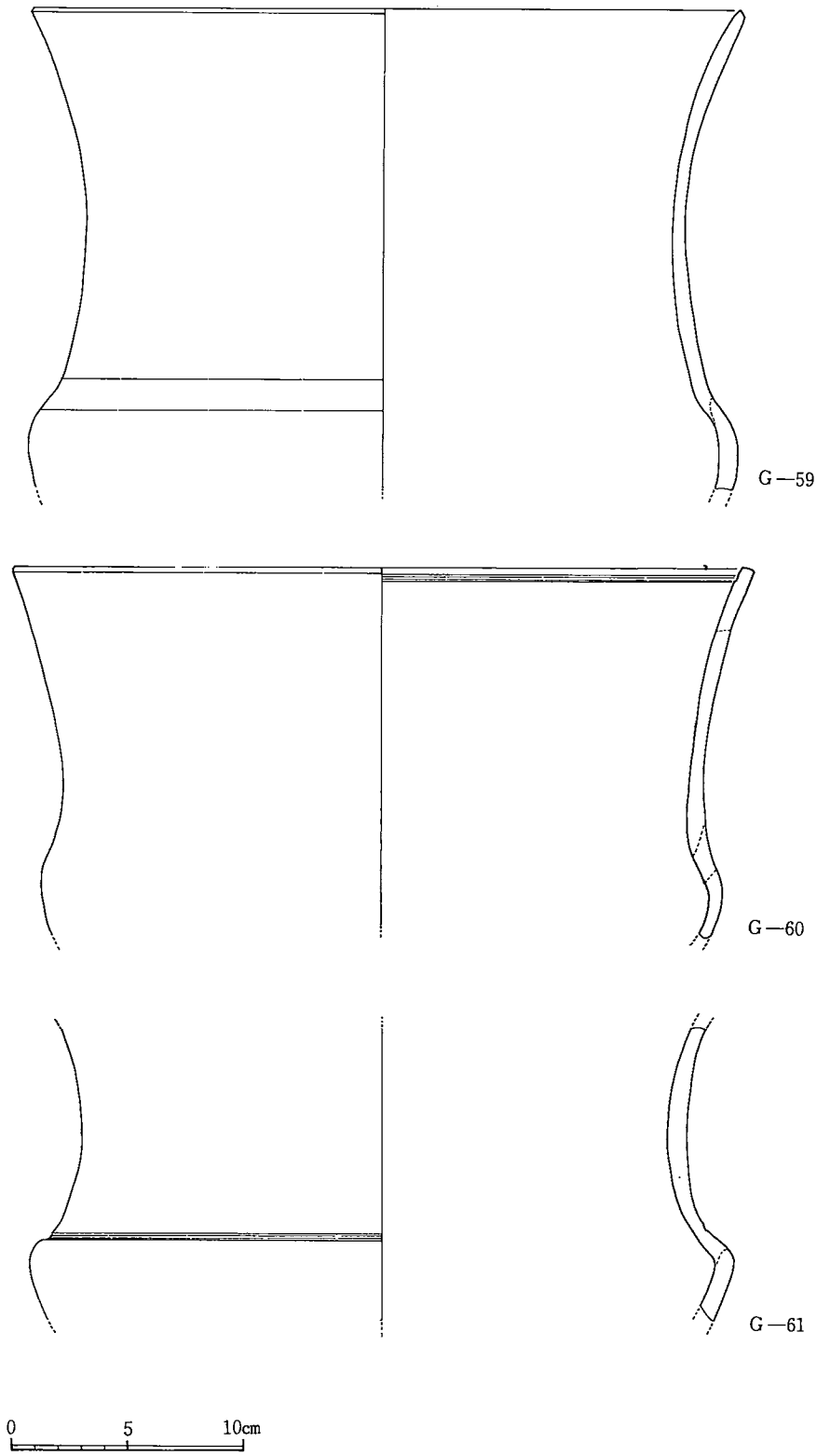
第77図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



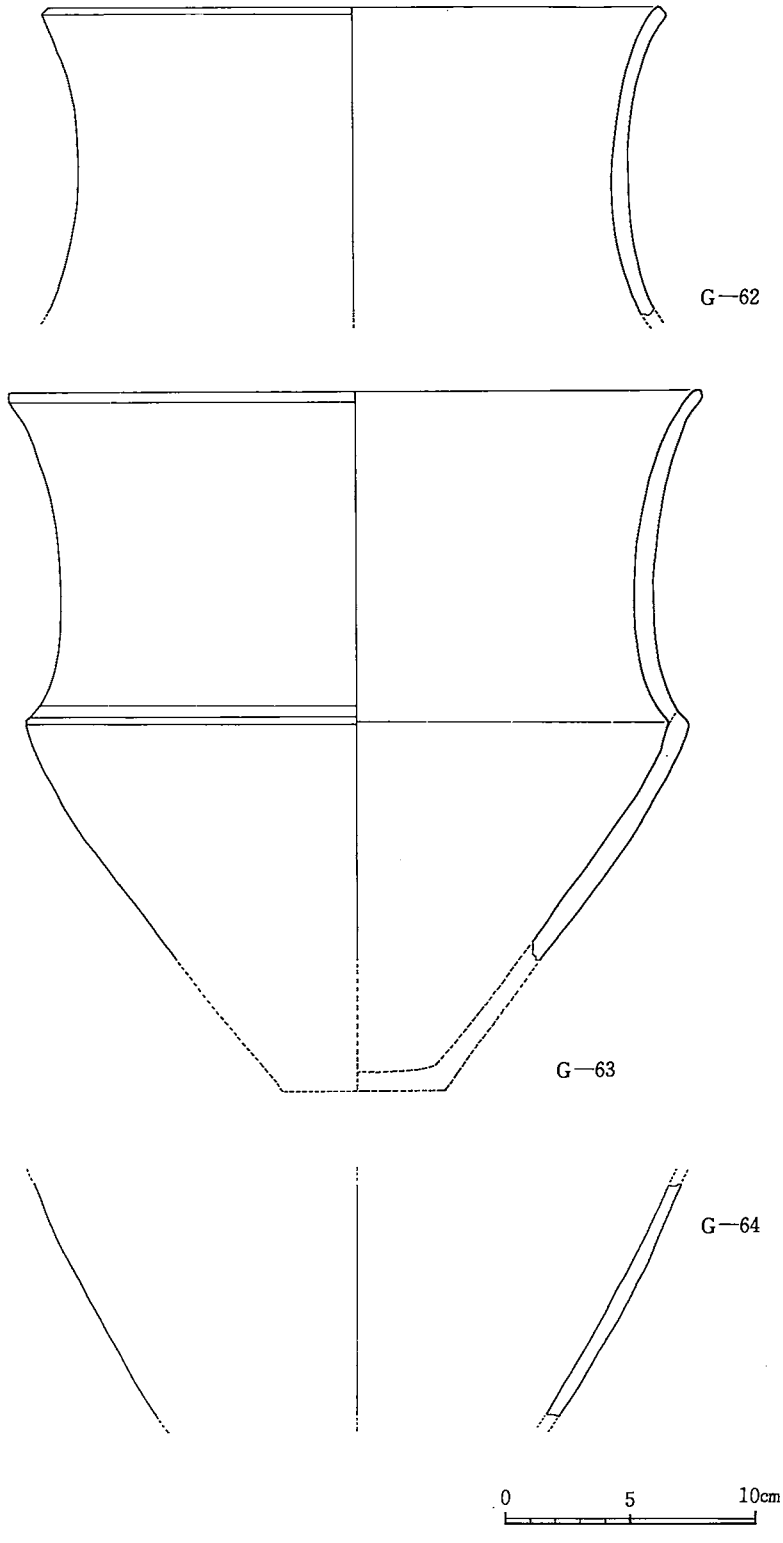
第78図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



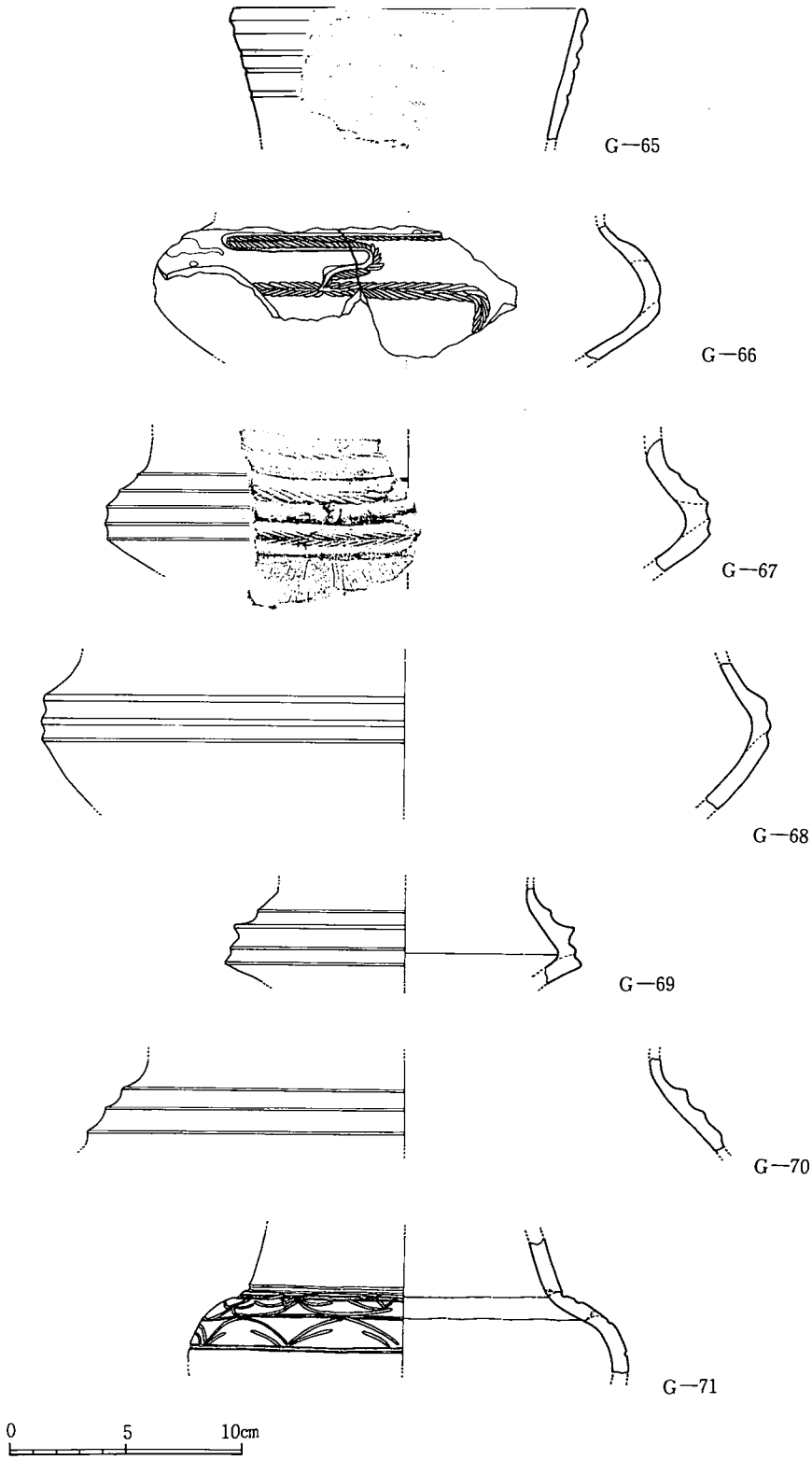
第79図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



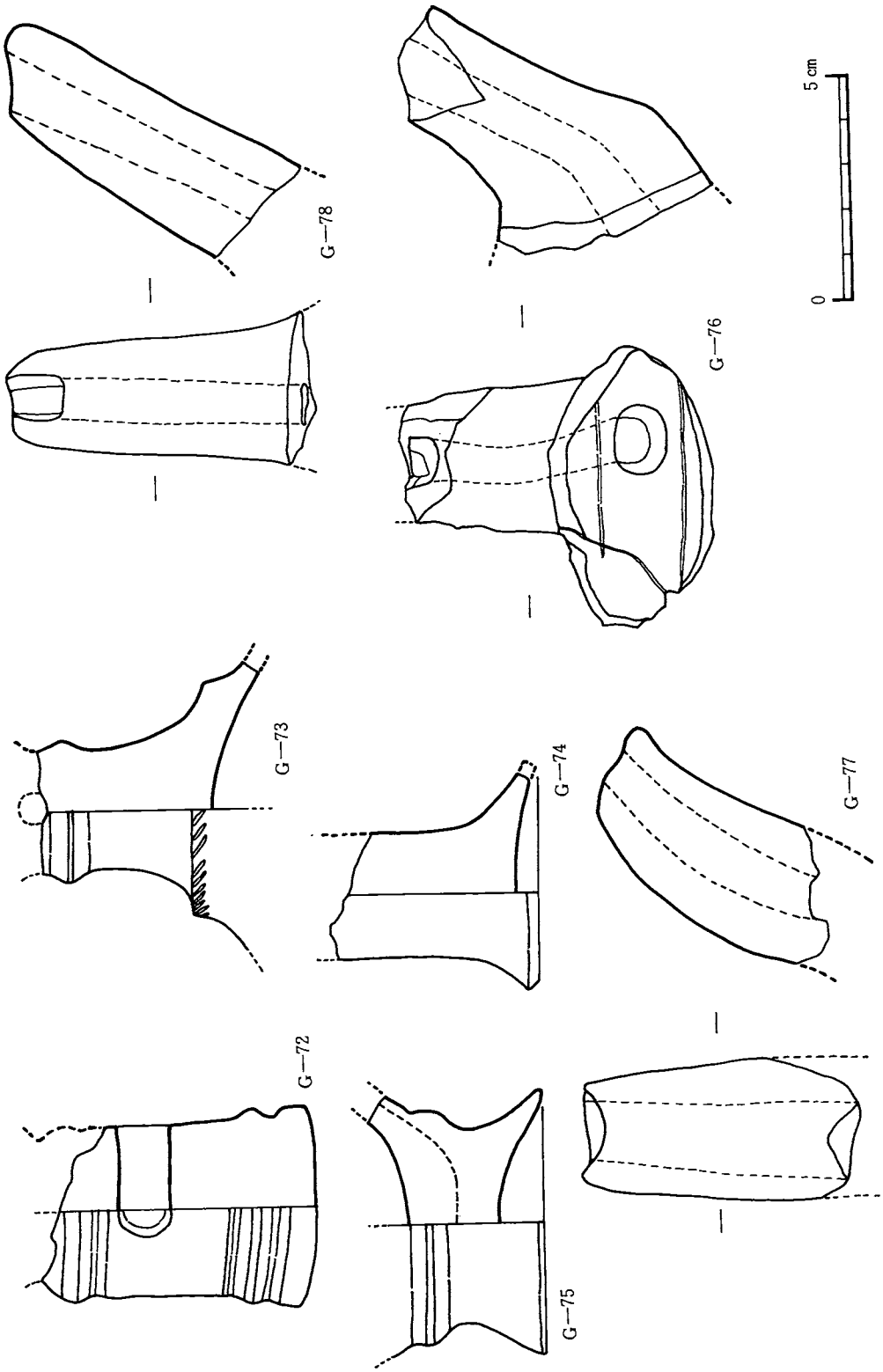
第80図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



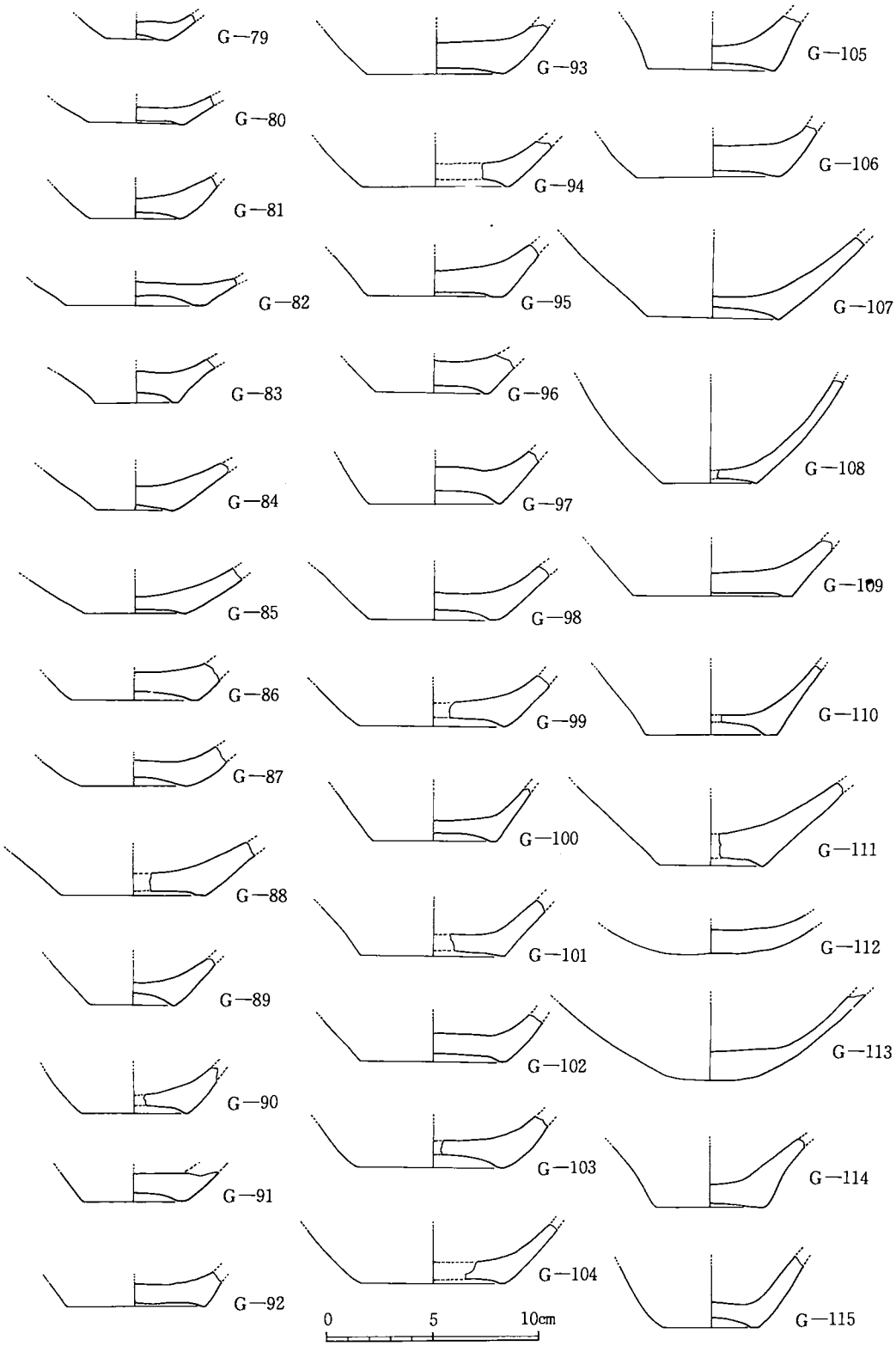
第81図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



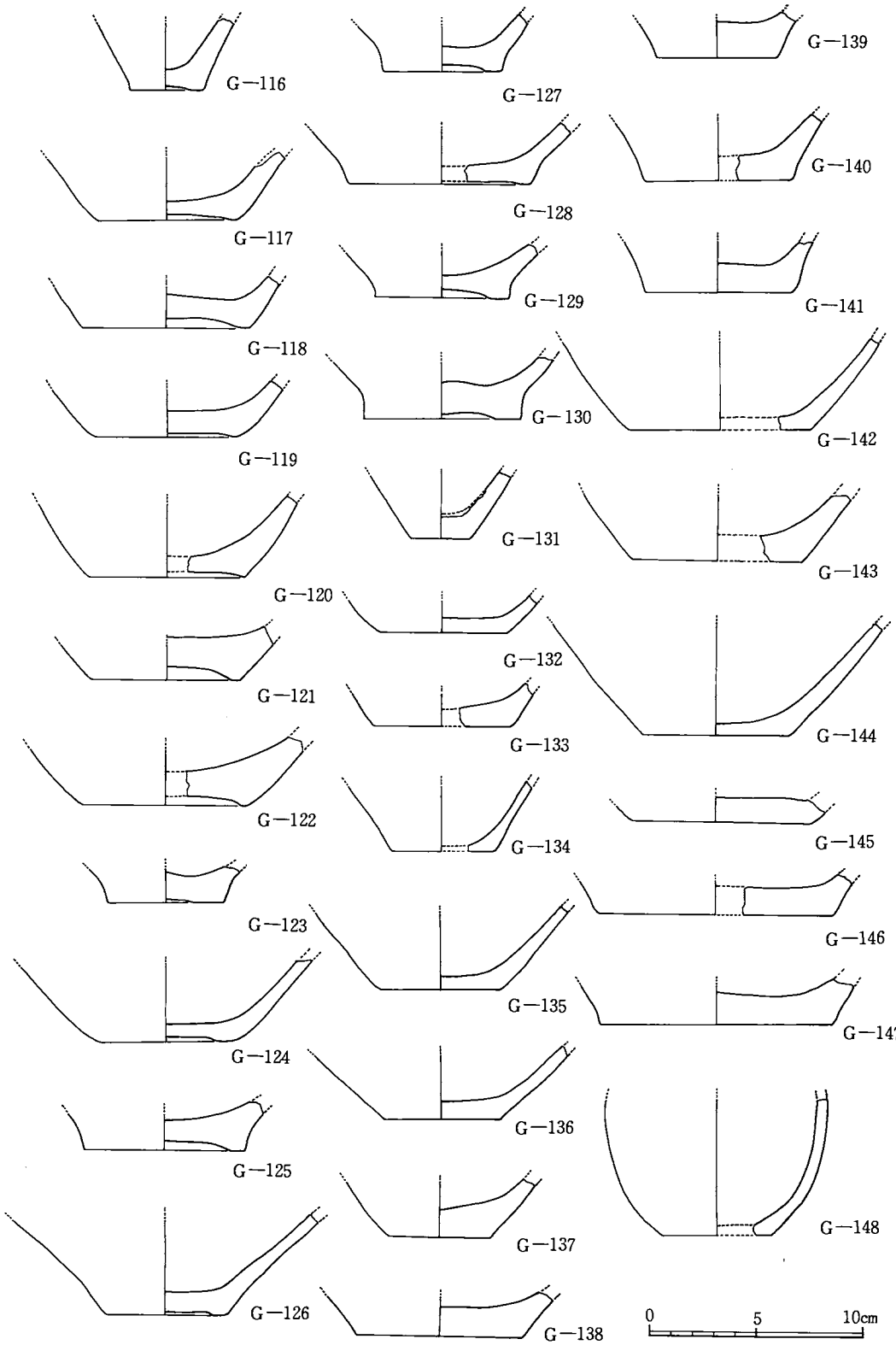
第82図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



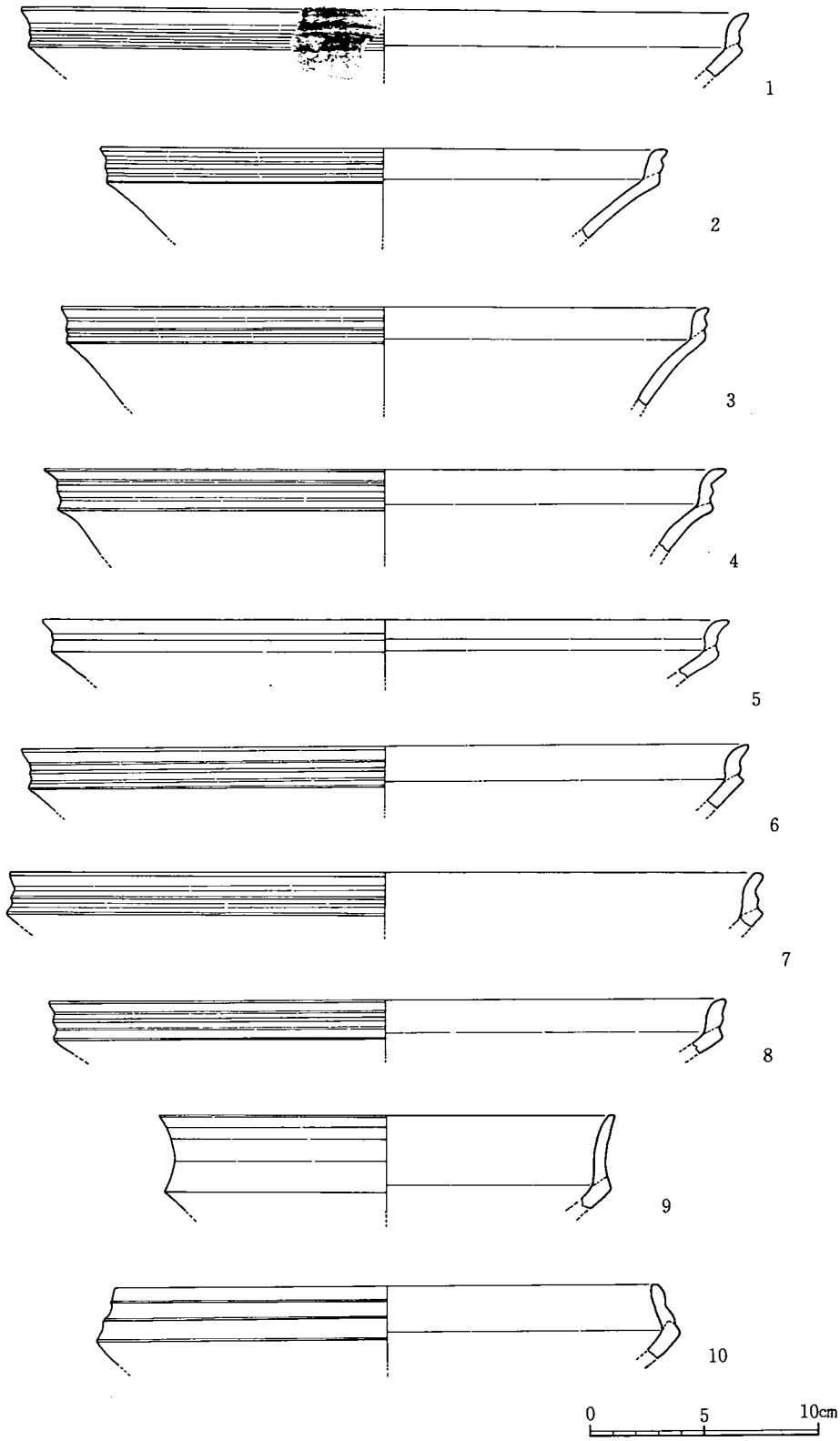
第83図　第Ⅰ調査区出土縄文後期末～晩期初頭の遺物



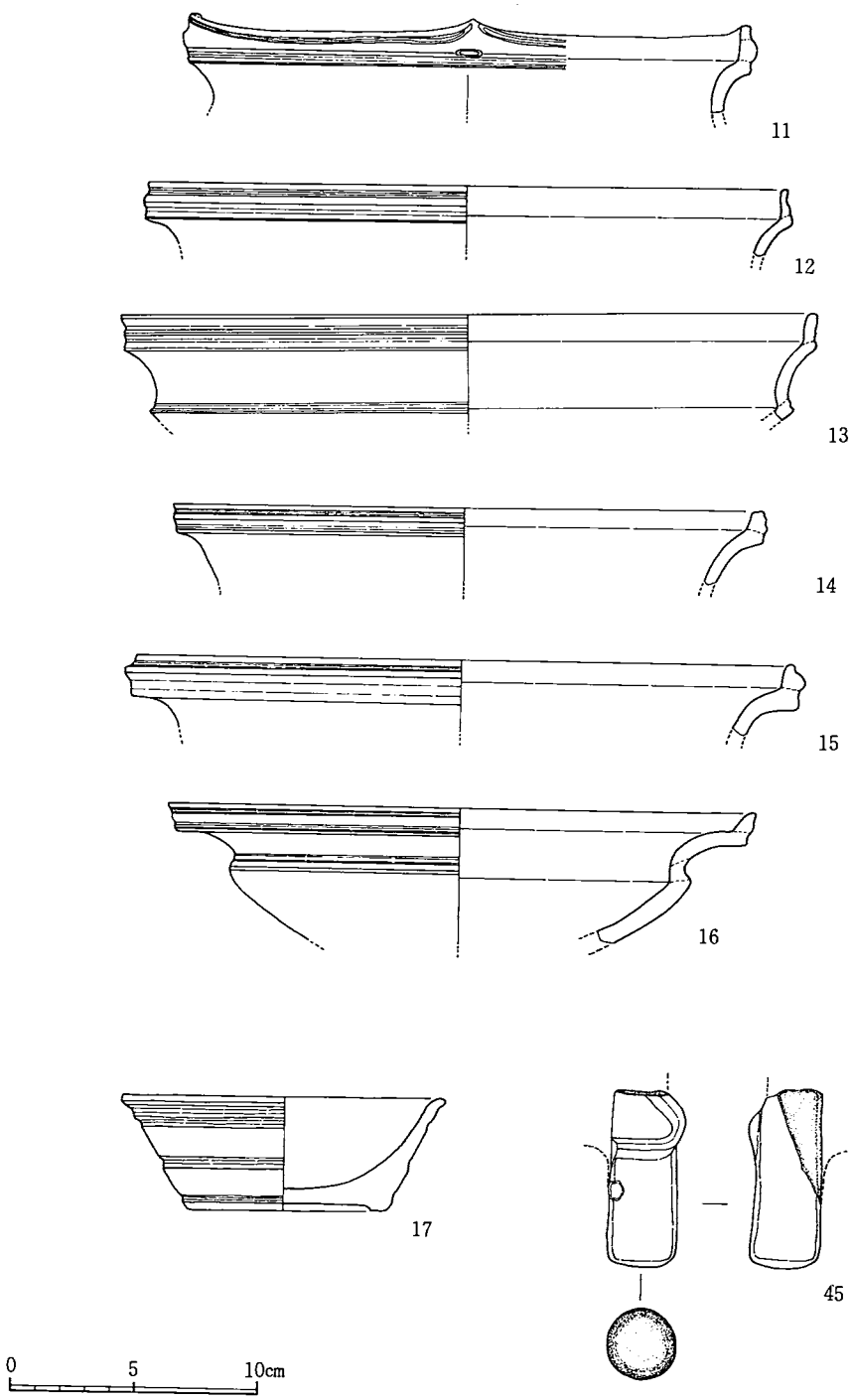
第84図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



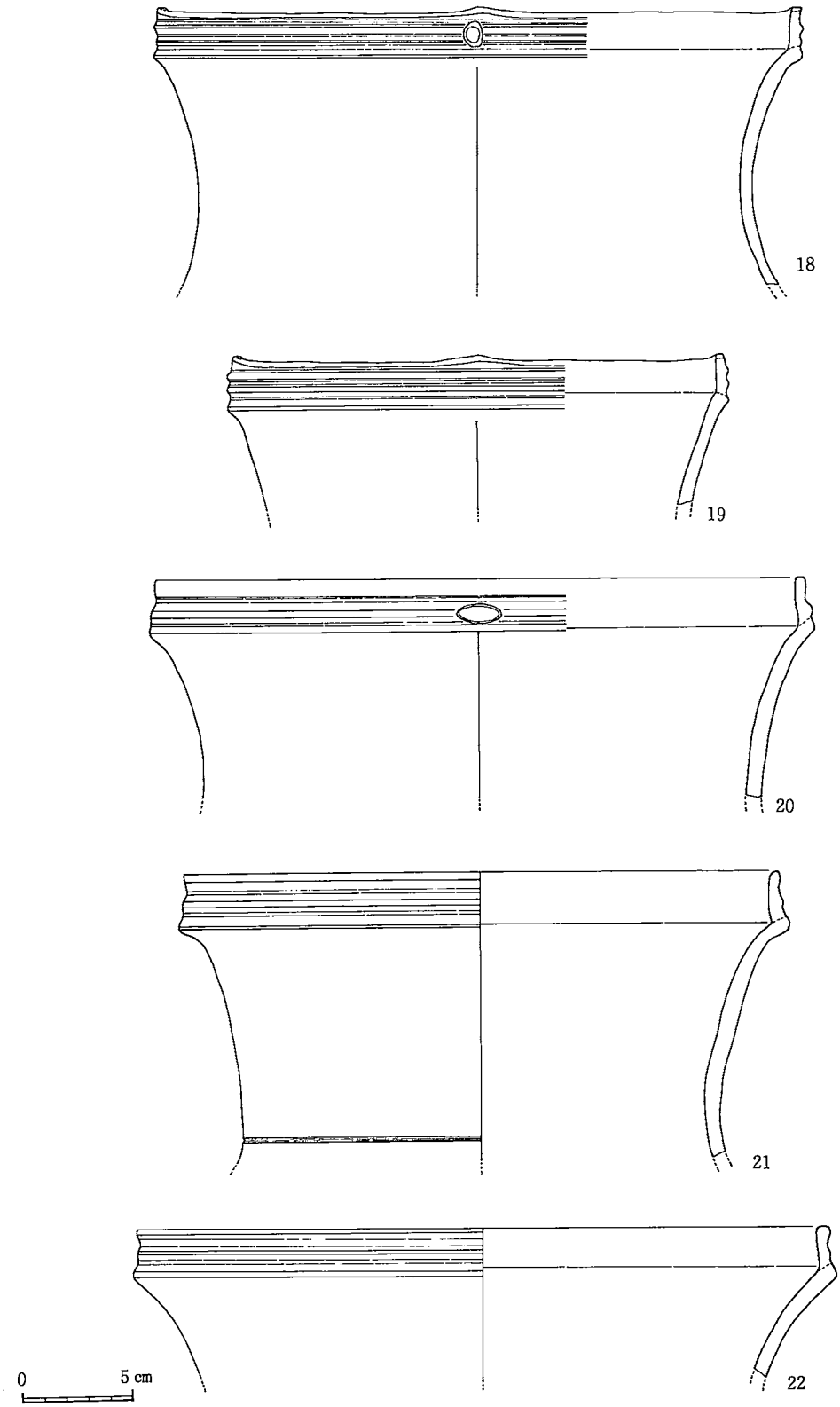
第85図　第Ⅰ調査区出土の縄文土器



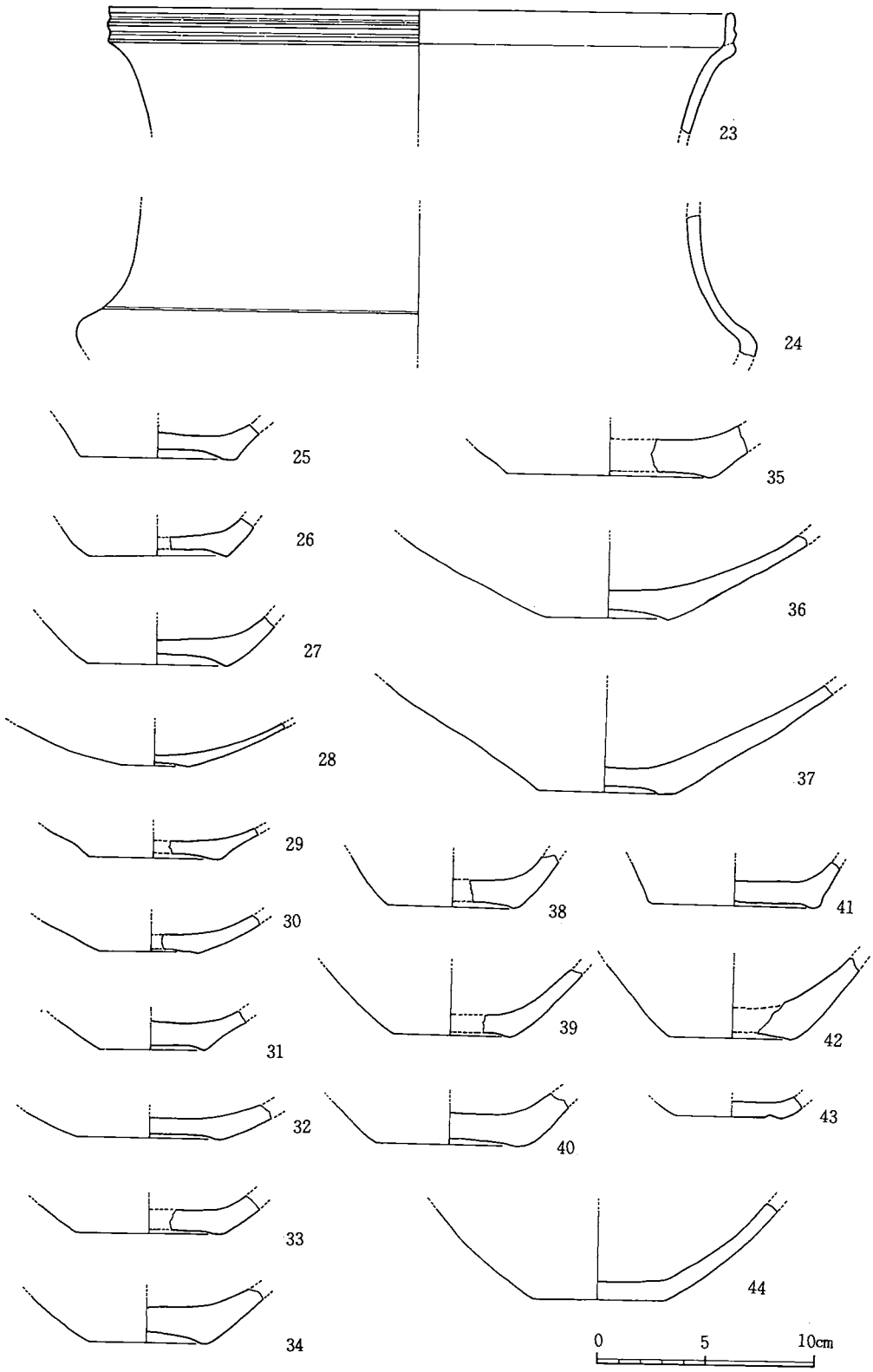
第86図　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器



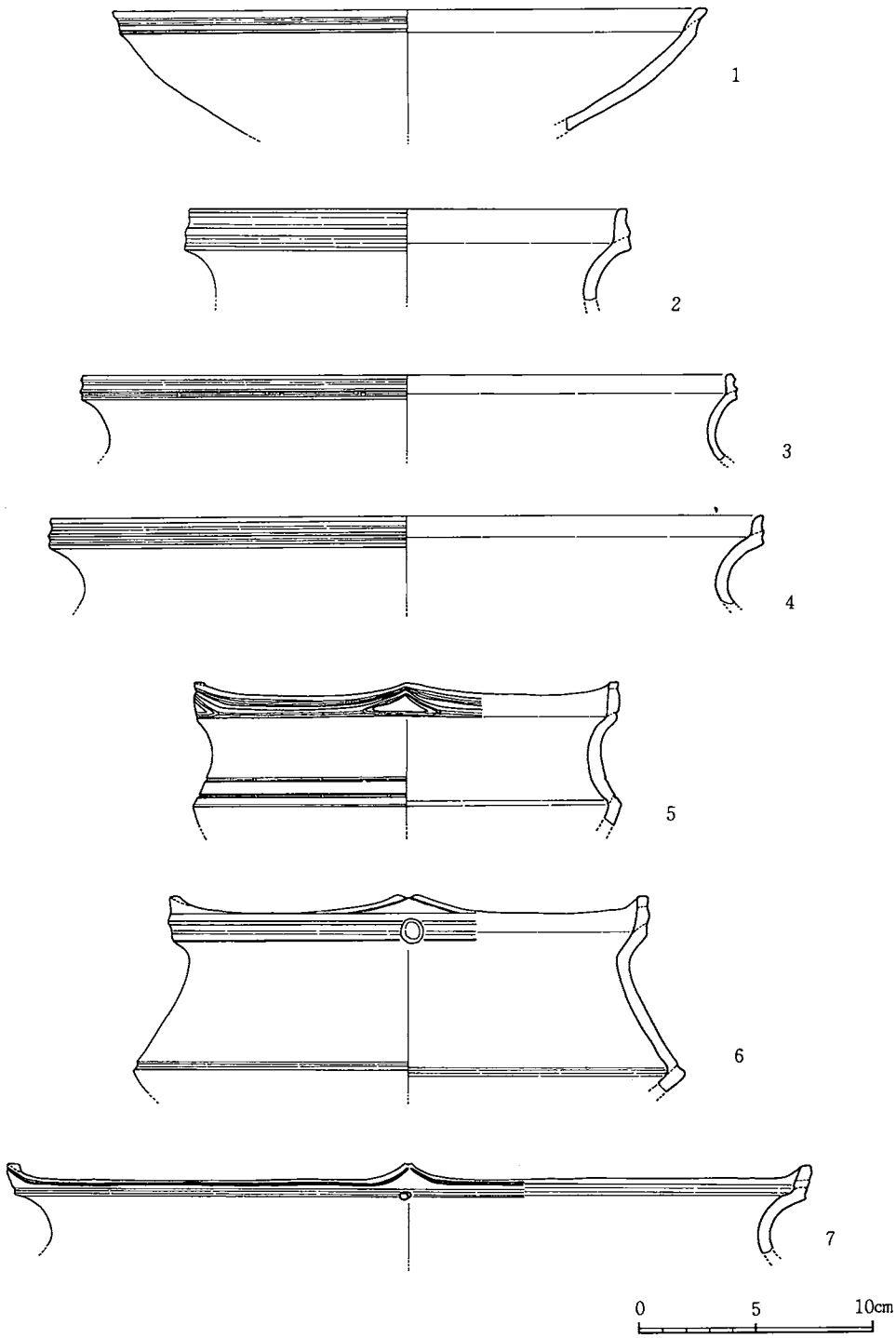
第87図　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器



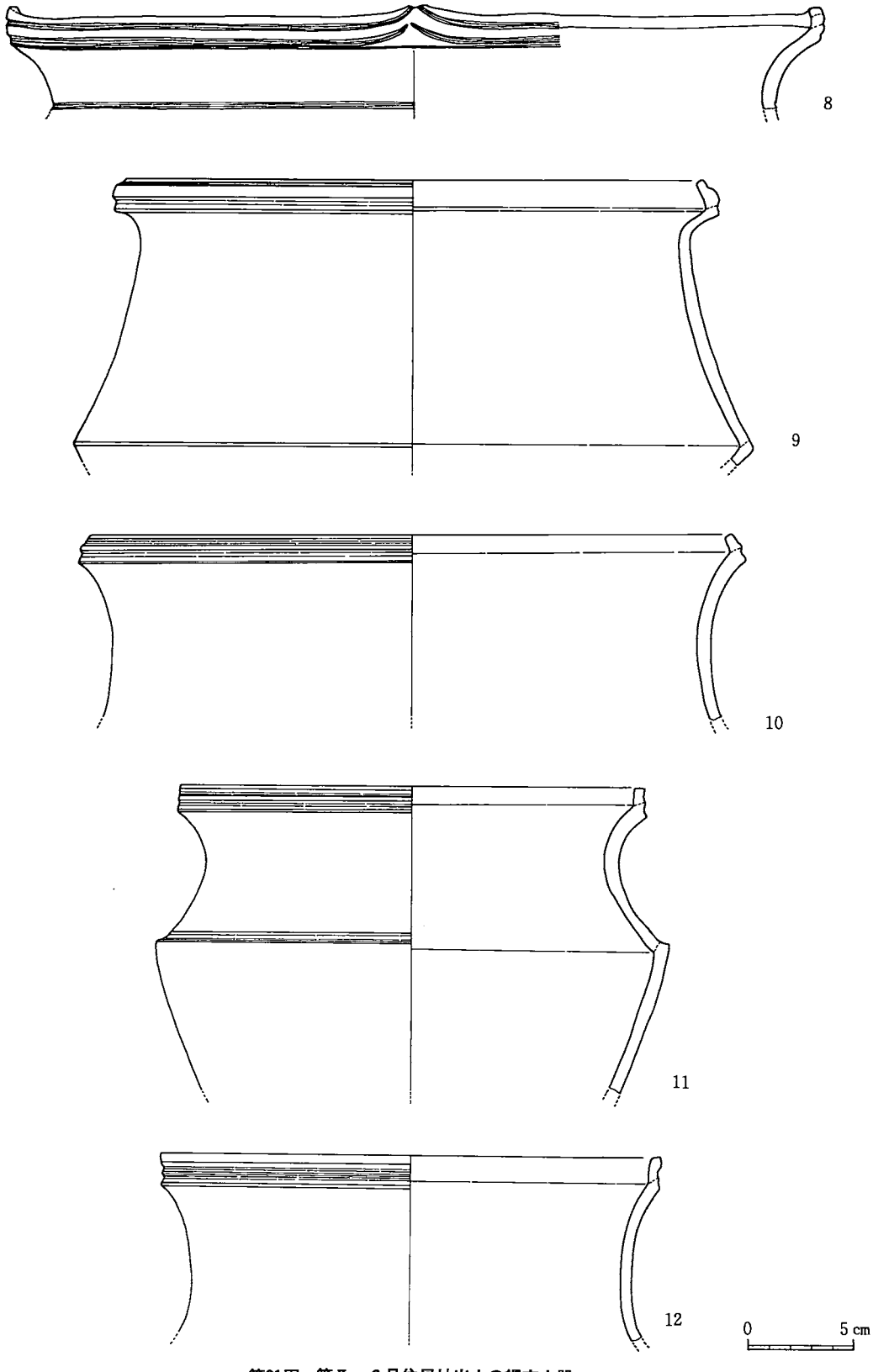
第88図　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器



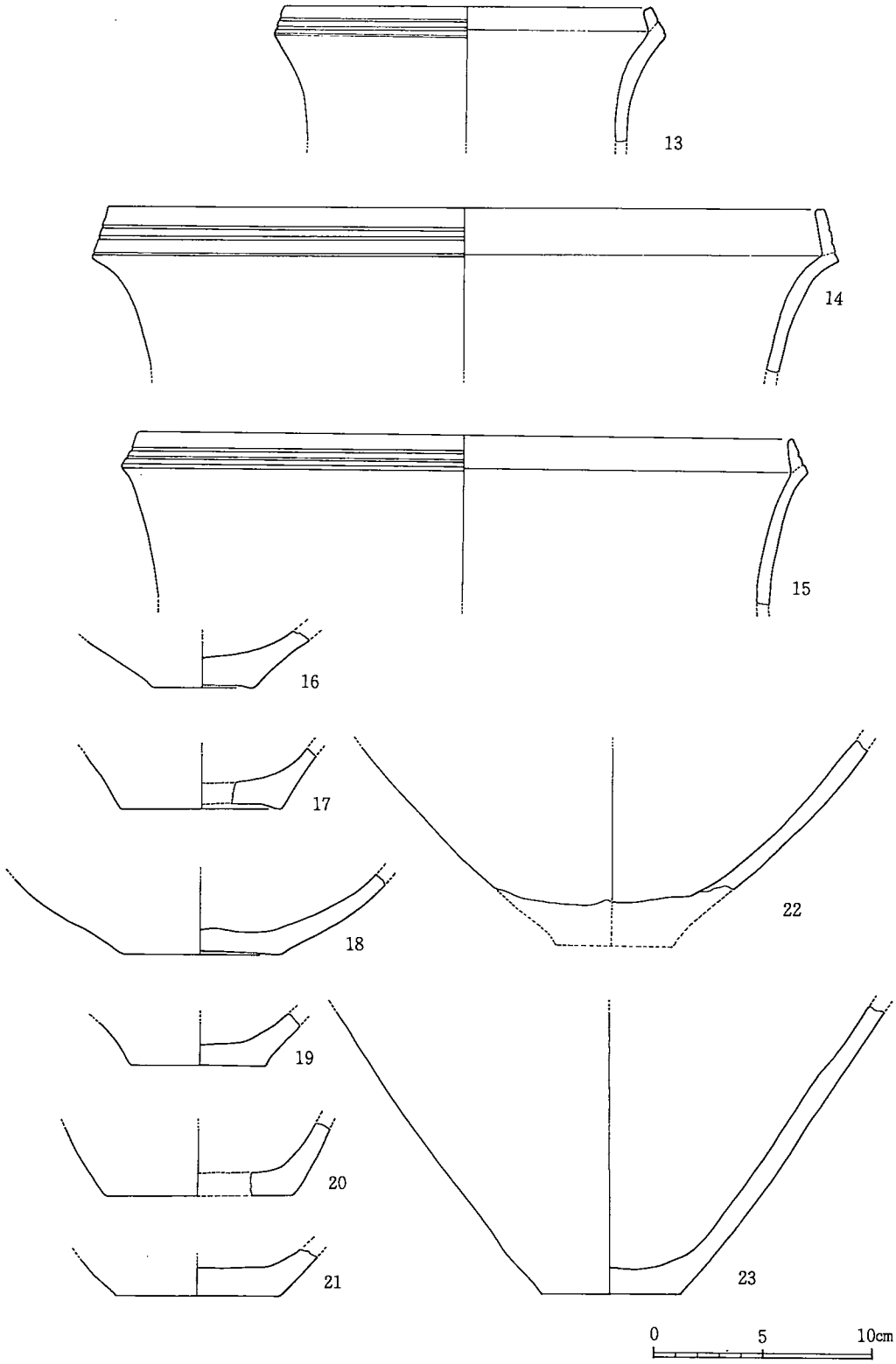
第89図　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器



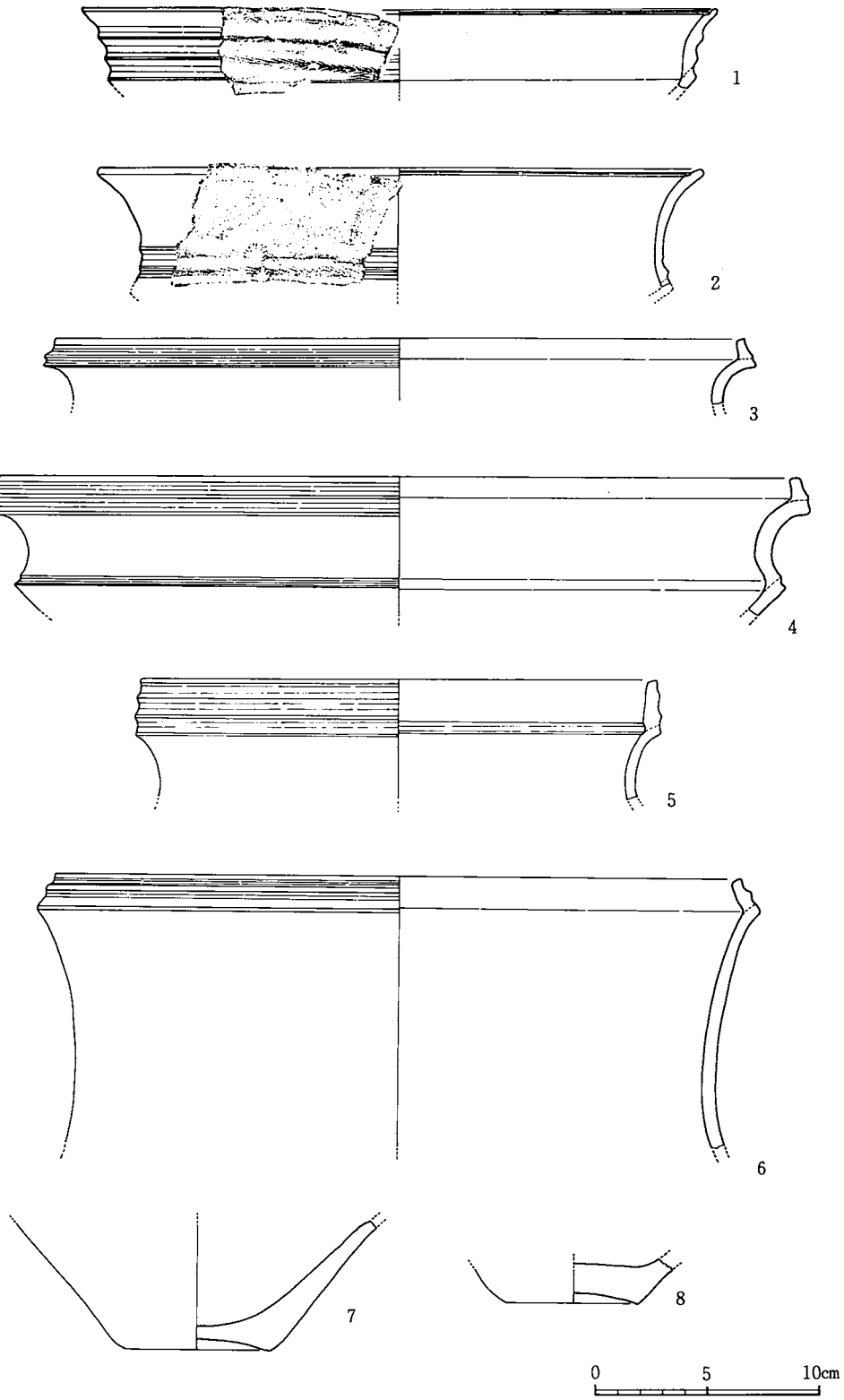
第90図　第Ⅱ－2号住居址出土の縄文土器



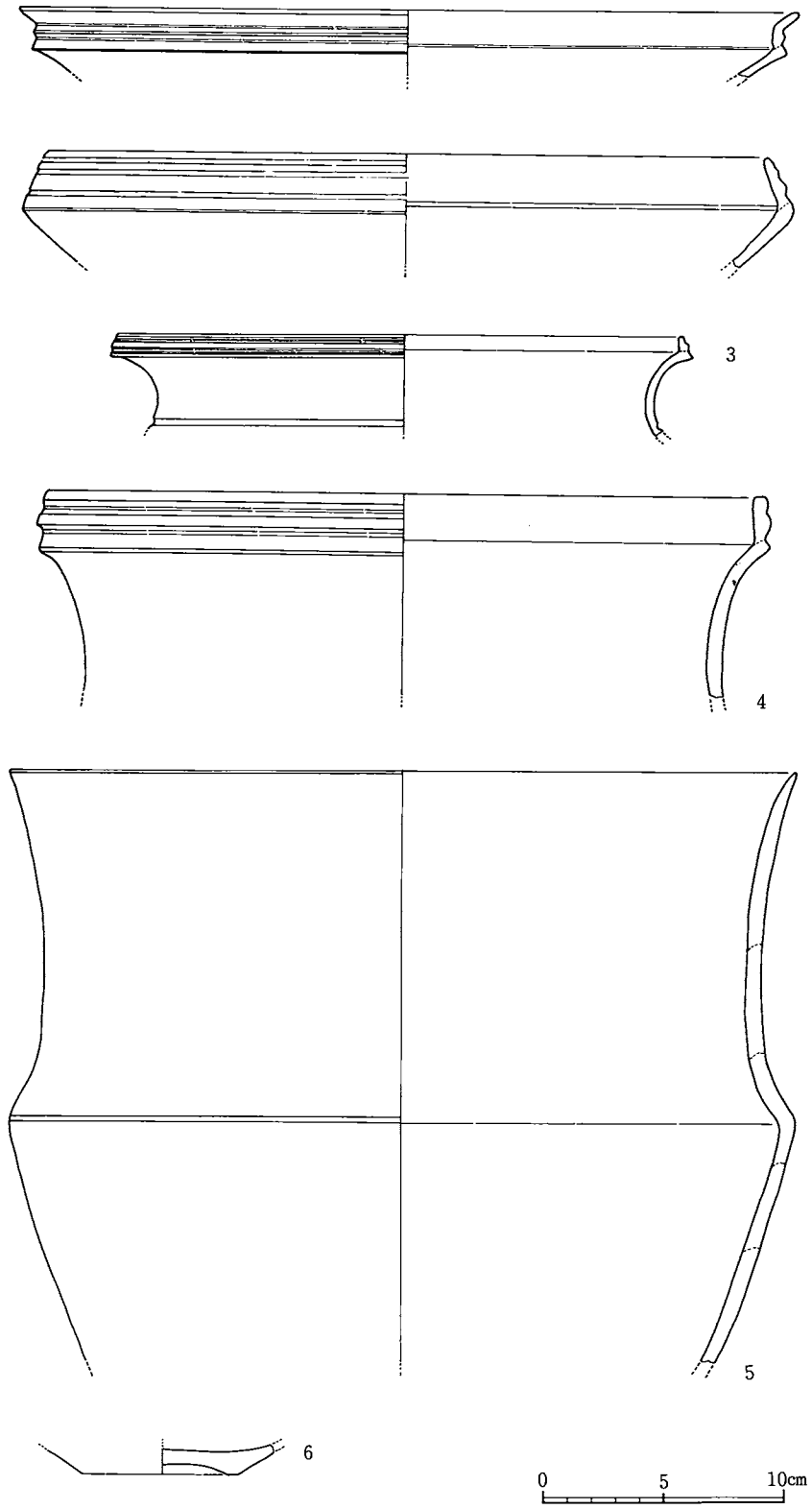
第91図　第Ⅱ－2号住居址出土の縄文土器



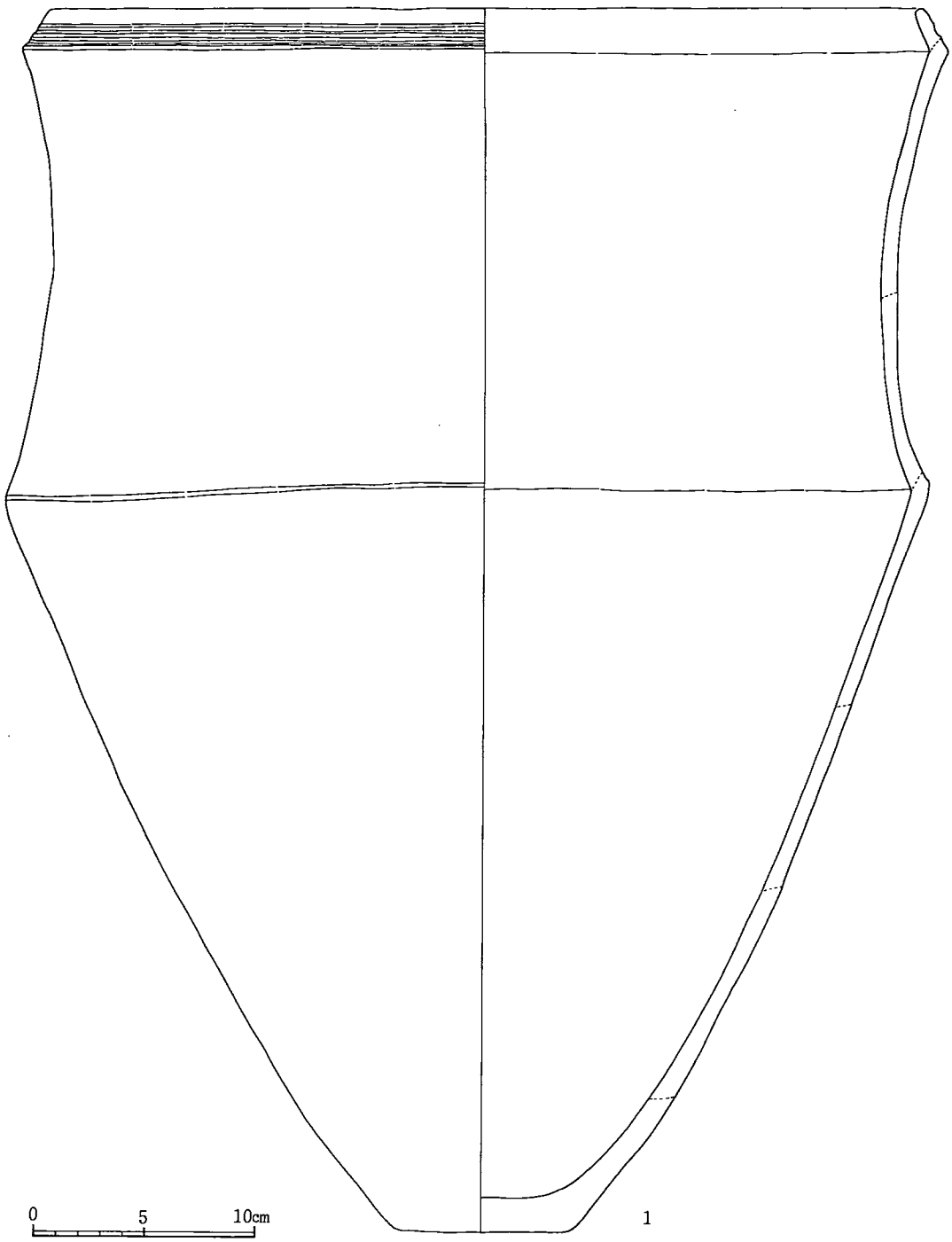
第92図　第Ⅱ－2号住居址出土の縄文土器



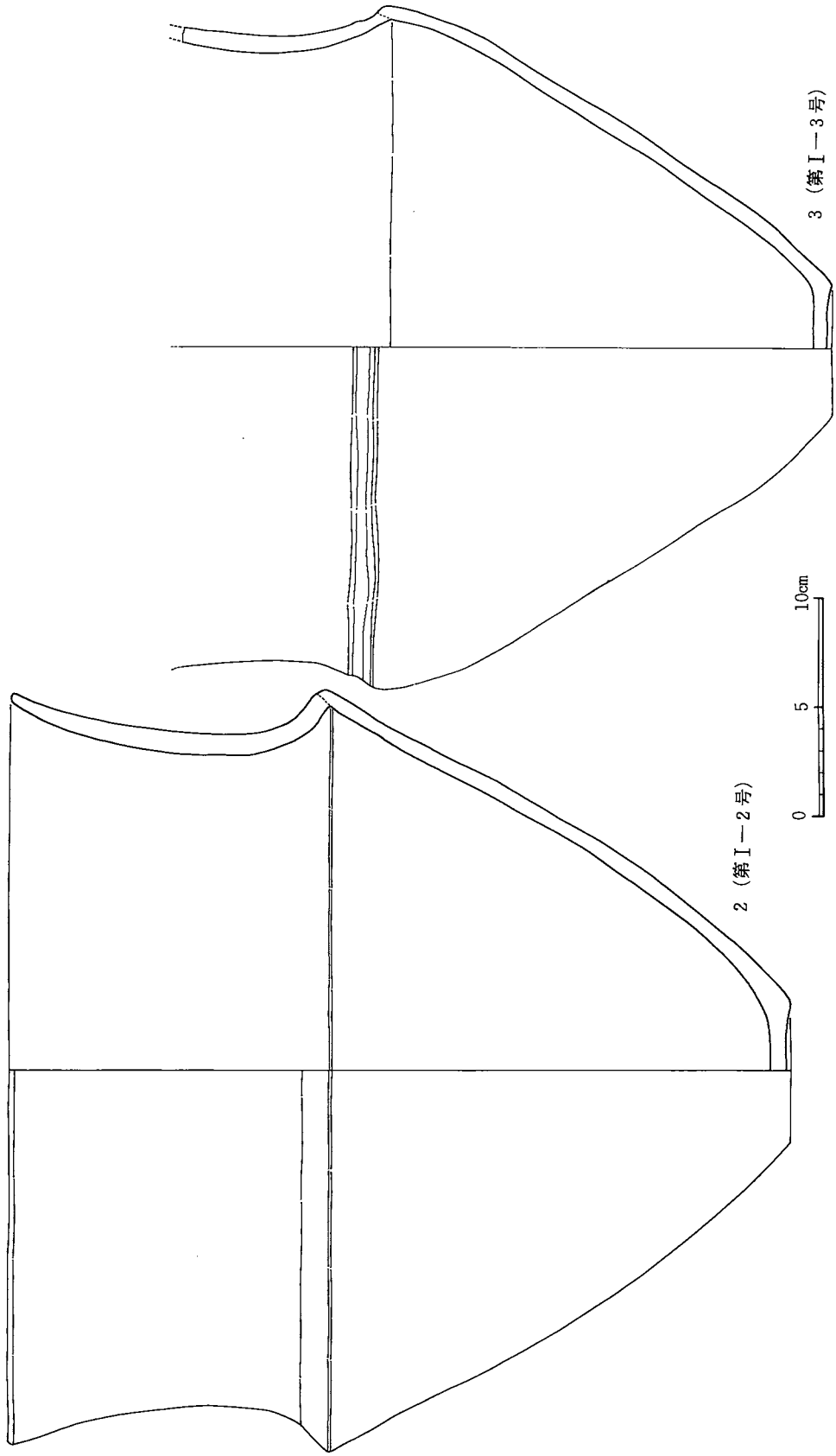
第93図　第Ⅱ－1号円形周溝遺構出土の縄文土器



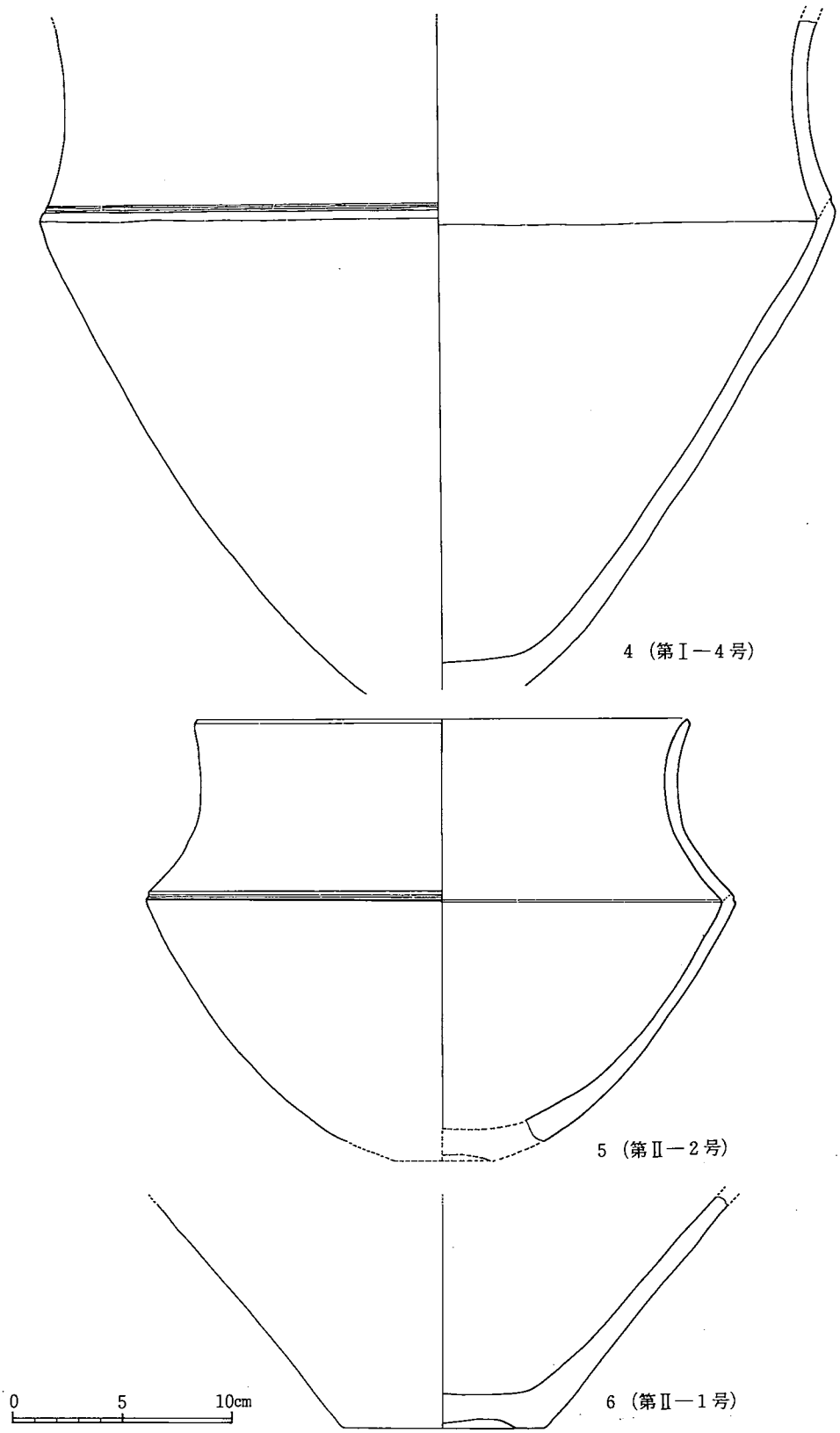
第94図　第Ⅱ－2号円形周溝遺構出土の縄文土器



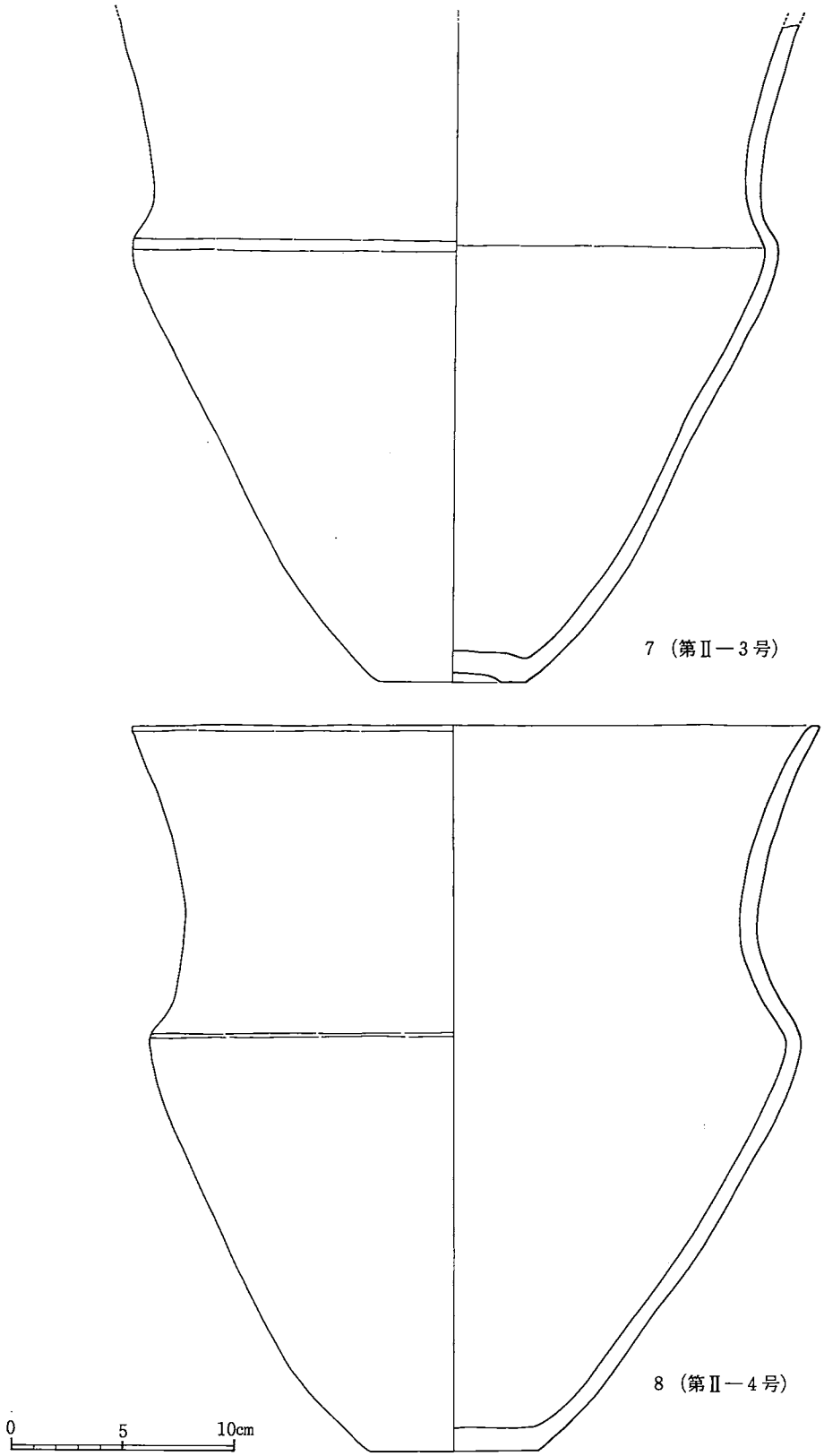
第95図　第Ⅰ－1号埋鉢実測図



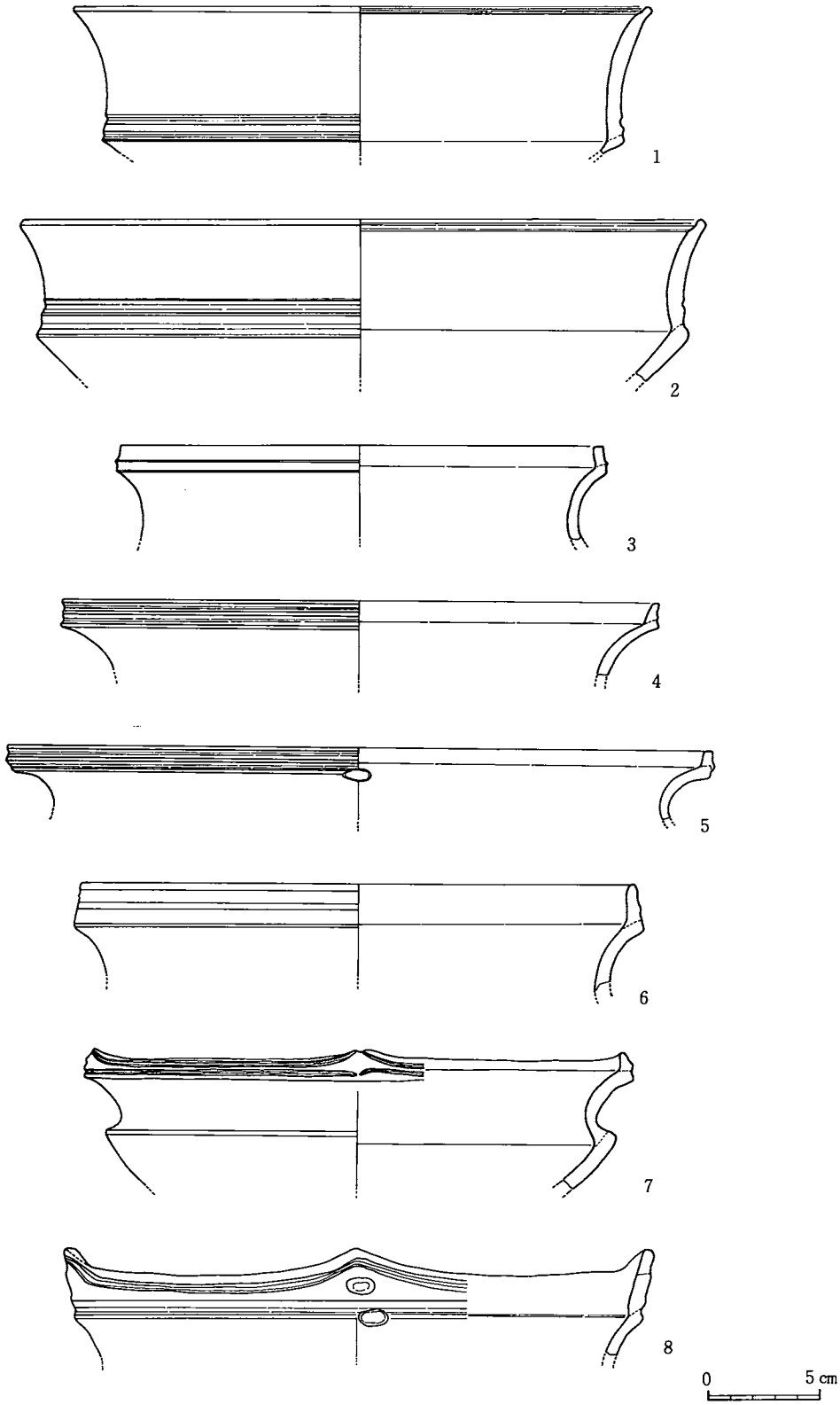
第96図　第Ⅰ－2・3号埋鉢実測図



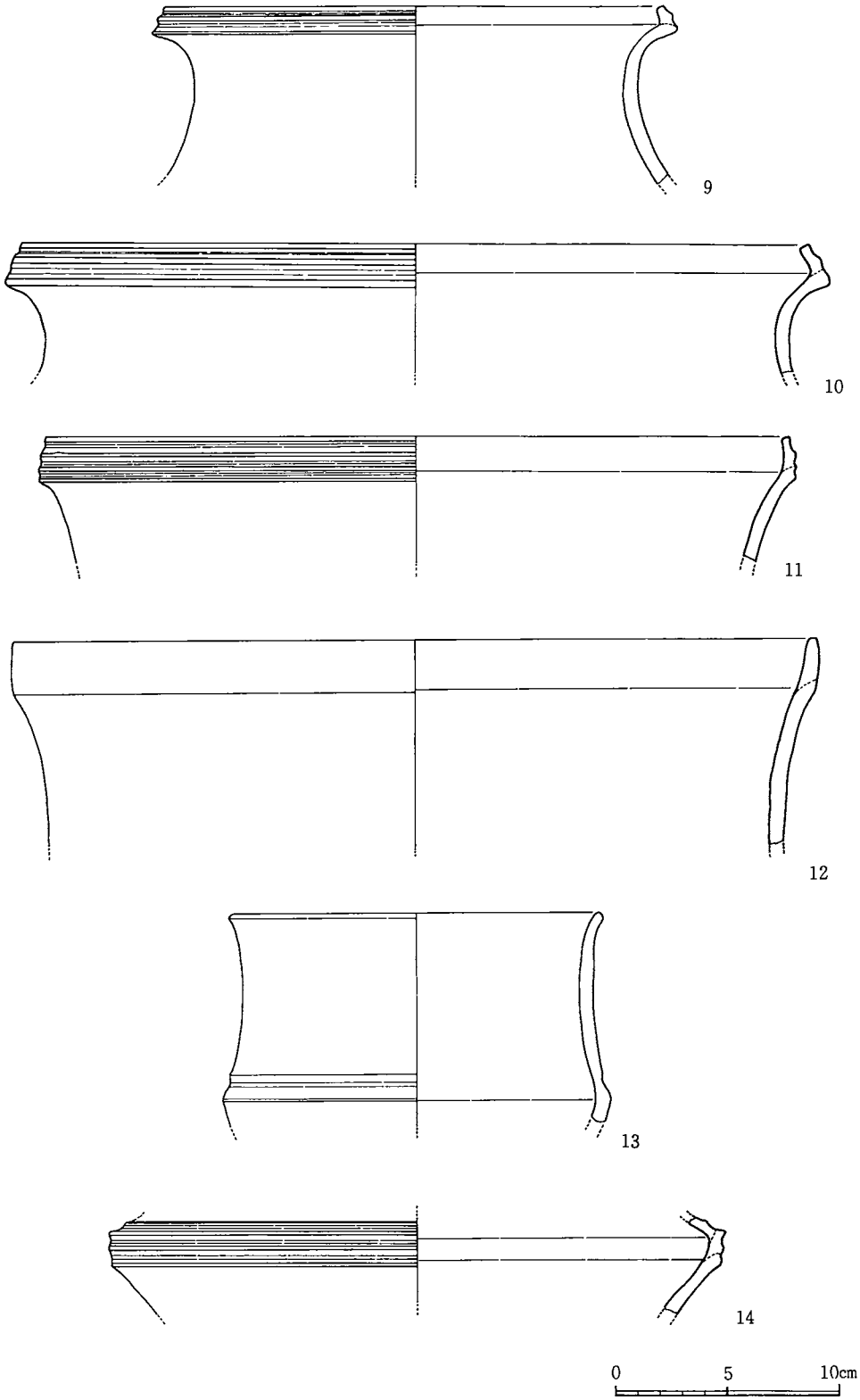
第97図　第Ⅰ－4号・第Ⅱ－1・2号埋鉢実測図



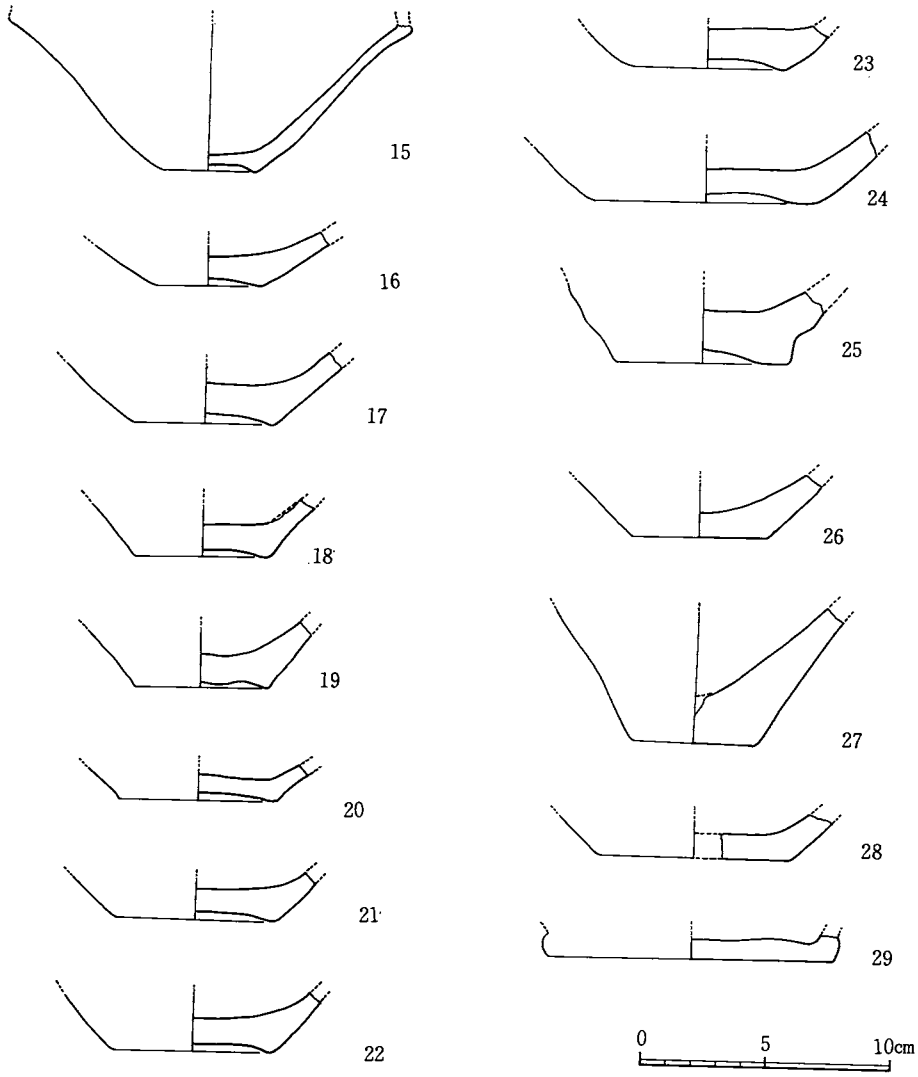
第98図　第Ⅱ－3・4号埋鉢実測図



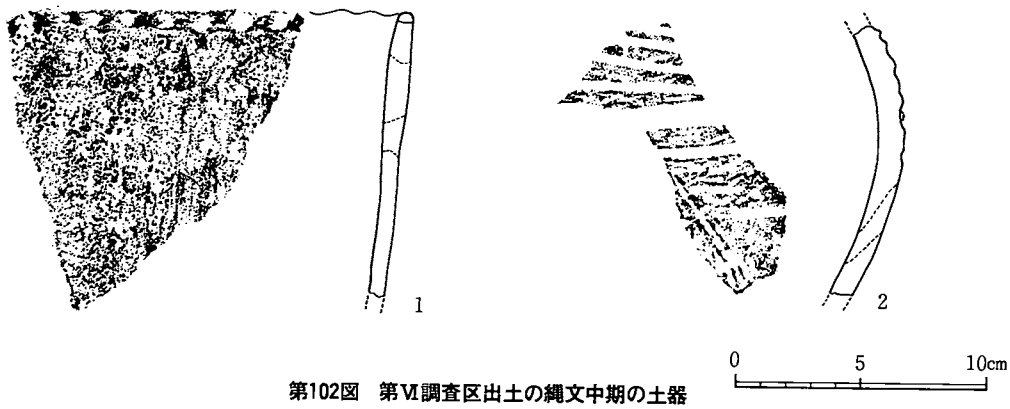
第99図　第Ⅰ－1号方形溝遺構出土の縄文土器



第100図 第Ⅰ－1号方形溝遺構出土の縄文土器



第101図　第Ⅰ－1号方形溝遺構出土の縄文土器



第102図　第Ⅵ調査区出土の縄文中期の土器

第12表　第Ⅰ調査区出土の縄文土器一覧表　　Ⅰ区グリッド出土（第71～85図）

挿図番号	出土地	器種	残存部位 器形	分類	法量（cm） 口径	最大径	器高	底径	技法の特徴	色調	焼成	備考
1	Ⅰ区 11—D	深鉢	頸部～胴部	Ⅲ—A類					外面「x」字状沈線文及研磨 内面 横方向の磨消か？	外面 黒色 内面 白茶褐色	良	
2	〃 9—D	浅鉢	口縁部～胴部	Ⅱ—A類	28.9	28.9			外面 羽状文及横研磨 内面 横方向研磨	黒色	良好	2ヶ所押点あり
3	〃 10—D	〃	頸部～胴部	〃					外面 羽状文及横研磨二条の凹線 内面 横研磨	外面 暗褐色 内面 茶褐色	〃	
4	〃 7—H	〃	口縁部～胴部	Ⅰ—B類	19.6	19.6			外面 三段に羽状文及横研磨 内面 横研磨	黒色	〃	
5	〃 10—D	〃	〃	〃	25.3	25.3			〃	〃	〃	
6	〃 9—D	〃	〃	〃	30.4	30.4			外面 三条の凹線、羽状文磨消 内面 磨消	暗褐色	良	
7	〃 12—D	〃	〃	Ⅰ—C類	24.8	24.8			外面 凹線文及縦研磨 内面 横研磨	〃	良好	
8	〃 12—G	〃	〃	〃	30.5	30.5			外面 三条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	〃	〃	
9	〃 13—I	〃	口縁部～胴部下半	〃	30.8	30.8			外面 三条の凹線及横研磨 内面 一条の沈線及横研磨	暗茶褐色	〃	口縁部に漆付着か
10	〃 13—H	〃	〃	〃	21.7	21.7			外面 三条の凹線文及羽状文横研磨　内面 横研磨			
11	〃 12—G	〃	〃	〃	29.4	29.5			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	黒色	良好	
12	〃 11—D	〃	〃	〃	25.6	25.6			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
13	〃 11—C	〃	口縁部～胴部	〃	24.6	24.6			〃	〃	〃	
14	〃 12—G	〃	〃	〃	16.7	16.7			〃	〃	〃	
15	〃 11—D	〃	〃	〃	29.4	29.4			〃	黒褐色	〃	
16	〃 7—G	〃	〃	〃	25.8	25.8			〃	黒色	〃	
17	〃 7—H	〃	〃	〃	35.3	35.3			外面 二条の凹線文及丁寧な横研磨　内面 丁寧な横研磨	茶褐色	〃	
18	〃 8—I	〃	〃	〃	26.1	26.1			外面 四条の浅い凹線文及横研磨 内面 横研磨	黒色	〃	
19	〃 9—G	〃	口縁部～底部	〃	18.9	19.4	9.5	5.2	外面 三条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	〃	〃	
20	〃 7—I	〃	口縁部～胴部	〃	24.3	24.3			〃	〃	〃	
21	〃 8—H	〃	〃	〃	29.0	29.5			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 暗茶褐色 内面 白茶褐色	〃	

22	Ⅰ区	13—F	浅鉢	口縁部～胴部	Ⅰ—D類	23.1	23.1			横研磨	黒色	良　好	
23	〃	11—F	〃	〃	Ⅰ—C類	20.7	22.2			外面　二条の凹線及横研磨 内面　横研磨	外面　白茶褐色 内面　暗褐色	〃	
24	〃	10—H	〃	〃	〃	36.2	36.6			〃	黒　色	〃	
25	〃	10—C	〃	〃	Ⅰ—A類	24.5	25.3			外面　三条の沈線文及横研磨 内面　横研磨	〃	〃	
26	〃	9—D 10—E	〃	〃	Ⅱ—C類	19.7	19.7			外面　二条の沈線文及横研磨胴部下位は縦研磨　内面　横研磨	茶褐色	〃	
27	〃	9—H	〃	〃	〃					外面　三条の沈線文及横研磨 内面　横研磨	淡茶褐色	〃	
28	〃	8—G	〃	〃	Ⅲ—B類	33.3	35.3			外面　二条の凹線文、「x」字状凹線文及横研磨　内面　横研磨	赤茶褐色	〃	胎土に金雲母粒子含む。口縁部に1ヶ所押点
29	〃	7—H	〃	〃	Ⅲ—C類	20.6	20.6			外面　口縁部と胴部に一条の凹線文及横研磨　内面　横研磨	黒　色	〃	2ヶ所押点あり
30	〃	14—H	〃	〃	〃	26.5	26.5			外面　二条の凹線文及横研磨 内面　横研磨		〃	1ヶ所押点
31	〃	14—G	〃	〃	〃	22.0	22.0			外面　二条の凹線文及横研磨 内面　横研磨	暗褐色	〃	〃
32	〃	9—G	〃	〃	〃	32.4	32.4			外面　口縁に二条の凹線・胴部に一条の凹線文・横研磨 内面　横研磨	黒色	〃	〃
33	〃	9—D	〃	〃	〃	31.8	32.6			外面　二条の凹線文及横研磨 内面　横研磨	暗褐色	〃	
34	〃	7—H	〃	〃	Ⅲ—A類	16.4	16.4			外面　口縁部に二条の凹線・胴部に一条の凹線文及横研磨 内面　横研磨	黒色	〃	
35	〃	10—C	〃	〃	〃	26.0	26.3			〃	暗褐色	〃	
36	〃	9—C	〃	〃			28.8			横研磨	黒色	〃	
37	〃	14—H	〃	〃			35.9			〃	〃	〃	
38		12—D	〃	〃	Ⅲ—D類	32.0	32.4			外面　二条の凹線文及横研磨 内面　横研磨	白茶褐色	〃	
39		7—H	〃	〃	〃	29.7	29.7			〃	黒色	〃	
40		10—H	〃	〃	〃	41.2	41.2			〃	〃	〃	
41	Ⅰ区	7—H	〃	〃	Ⅱ—C類	15.0	15.0			横研磨	淡褐色	〃	
42		13—D	〃	〃		10.3	11.4			外面　三条の凹線文及横研磨 内面　横研磨		〃	
43	〃	11—D	高坏	〃		11.6	11.6			〃	黒色	〃	
44	〃	13—F	浅鉢	〃		7.8	7.8			外面　凹線文・横研磨 内面　横研磨	赤茶褐色	〃	
45	〃	12—D	深鉢	口縁部～頸部	Ⅰ—A類	23.0				外面　口縁部に三段の羽状文及横研磨　内面　横研磨	外面　暗褐色 内面　白茶褐色	〃	

46	Ⅰ区	9—F	深鉢	口縁部～頸部	Ⅰ—C類	33.5	35.0			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	暗茶褐色	良 好	
47	〃	11—H	〃	〃	〃	33.0	33.9			〃	外面 暗褐色 内面 白茶褐色	〃	
48	〃	6—I	〃	〃	〃	30.3				〃	外面 白茶褐色 内面 暗茶褐色	〃	
49	〃	8—H	〃	〃	〃	33.7				〃	黒色	〃	
50	〃	7—I	〃	〃	〃	23.2				〃	〃	〃	
51	〃	11—H	〃	〃	〃	32.3				外面 三条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	茶褐色	〃	
52	〃	7—H	〃	〃	〃	34.4				〃	外面 暗褐色 内面 茶褐色	〃	
53	〃	11—H	〃	〃	〃	26.5				〃	暗褐色	〃	
54	〃	10—H	〃	〃	Ⅰ—D類	24.7				外面 二条の沈線文及横研磨 内面 横研磨	淡褐色	〃	
55	〃	14—H	〃	〃	〃	27.6				〃		〃	
56	〃	6—I	〃	〃	Ⅲ—B類	20.1	20.1			横研磨	外面 黒褐色 内面 暗褐色	〃	
57	〃	9—F	〃	〃	Ⅱ 類	19.7	22.4			外面 胴部に一条の凹線及横研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
58	〃	14—H	〃	〃	Ⅲ—C類	30.3	30.3			横研磨	外面 暗褐色 内面 黒色	〃	
59	〃	8—H	〃	〃	〃	30.9	30.9			外面 縦研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
60	〃	7—H	〃	〃	〃	32.1	32.1			外面 左斜め方向研磨 内面 口脣部に一条の沈線及横研磨	〃	〃	
61	〃	8—F	〃	〃	〃					横研磨	外面 黒色 内面 白茶褐色	〃	
62	〃	6—H	〃	〃	〃	25.3						〃	
63	〃	11—H	〃	〃	〃	28.0	28.0			外面 縦研磨 内面 横研磨・縦研磨（下位）	黒色	〃	
64	〃	6—H	〃	胴部中位～下位	不 明						外面 黒色 内面 暗褐色	〃	胎土中に微小な砂粒を含む
65	〃	10—D	注口土器	口縁部	Ⅰ—A類	14.4				外面四本沈線と羽状文及横研磨 内面 横研磨	黒色	〃	
66	〃	9—D	〃	胴部	〃		22.0			外面 羽状文及横研磨 内面 横撫でか？	黒茶褐色	〃	一部赤色顔料を塗っている
67	〃	14—G	〃	〃	〃		26.2			外面 五条の凹線文及三段羽状文及横研磨 内面 横研磨	黒褐色	〃	
68	〃	14—F	〃	〃	Ⅰ—B類		31.6			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
69	〃	14—I	〃	〃	〃		15.6			外面 三条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	黒褐色	〃	

70	Ⅰ区　11—D	注口土器	胴部	Ⅰ—B類					外面 凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 暗褐色 内面 白茶褐色	良　好	
71	〃　10—Ⅰ	〃	頸部～胴部	Ⅰ—C類					外面 沈線文・瓔状文及横研磨 内面 横研磨	茶褐色	〃	
72	〃　10—E	高坏	脚部	Ⅰ—A類					外面 羽状文及横研磨	暗茶褐色	〃	1ヶ所穿孔あり
73	〃	〃	〃	Ⅰ—C類				4.6	丁寧な横研磨	黒色	〃	〃
74	〃　6—G	〃	〃	Ⅰ—B類					横研磨	茶褐色	〃	
75	〃　14—H	〃	〃	Ⅰ—D類					外面 縦方向研磨	暗褐色	〃	
76	〃　11—H	注口土器	注ぎ口						〃	黒色	〃	
77	〃　8—H	〃	〃						丁寧な横研磨	暗褐色	〃	
78	〃　12—F	〃	〃						横研磨	〃	〃	
79	〃　12—H	浅鉢	底部	Ⅰ　類				3.0	〃	外面 暗茶褐色 内面 白茶褐色	〃	
80	〃　7—H	〃	〃	〃				4.5	〃	外面 赤褐色 内面 黒色	〃	
81	〃　10—C	〃	〃	〃				4.2	〃	暗褐色	〃	
82		〃	〃	〃				6.5				
83	Ⅰ区　8—H	〃	底部	〃				3.9	横研磨	外面 淡褐色 内面 黒色	良　好	
84	〃　7—Ⅰ	〃	〃	〃				3.6	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 淡茶褐色 内面 黒色	〃	
85	〃　7—F	〃	〃	〃				4.8	横研磨	黒色	〃	
86	〃　7—Ⅰ	〃	〃	〃				5.9	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 暗褐色 内面 黒色	〃	
87	〃　8—H	〃	〃	〃				5.0		外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
88	〃　7—Ⅰ	〃	〃	〃				6.8	外面 縦方向研磨 内面 横撫で	外面 淡褐色 内面 茶褐色	〃	
89	〃　9—C	〃	〃	〃				4.0				
90	〃　6—Ⅰ	〃	〃	〃				4.9	横研磨	外面 淡茶褐色 内面 黒色	良　好	
91	〃　6—G	〃	〃	〃				4.8	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 暗茶褐色 内面 暗褐色	〃	
92	〃　10—C	〃	〃	〃								
93	〃　8—G	〃	〃	〃				6.5	横研磨	淡褐色	良　好	

94	Ⅰ区	6—H	浅鉢	底部	Ⅰ類				6.8	縦研磨	外面 淡褐色 内面 黒色	良好	
95	〃	7—I	〃	〃	〃				6.3	横撫で	〃	〃	内面に媒付着
96	〃	6—I	〃	〃	〃				5.3	〃	〃	〃	
97	〃	6—H	〃	〃	〃				6.2	外面 縦撫で 内面 横撫で	〃	〃	
98	〃	8—F	〃	〃	〃				6.1	横研磨	淡褐色	〃	
99	〃	11—D	〃	〃	〃				6.9	〃	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
100	〃	7—I	〃	〃	〃				5.9	〃	外面 茶褐色 内面 黒色	〃	
101	〃	6—I	〃	〃	〃				6.8	横撫で	外面 茶褐色 内面 白茶褐色	〃	
102	〃	12—D	〃	〃	〃				6.9	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 淡褐色 内面 白茶褐色	〃	
103	〃	13—H	〃	〃	〃				6.9	外面 横研磨 内面 磨消しか	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
104	〃	10—D	〃	〃	〃				6.7	横研磨	黒色	〃	
105	〃	7—G	〃	〃	〃				5.9	〃	外面 赤褐色 内面 黒色	〃	
106	〃	7—H	〃	〃	〃				6.7	外面 縦研磨 内面 横撫で	外面 淡褐色 内面 白茶褐色	〃	
107	〃	12—G	〃	〃	〃				6.2	横研磨	黒色	〃	
108	〃	10—D	〃	〃	〃				4.4	〃	暗褐色	〃	
109	〃	9—F	〃	〃	〃				6.4				
110	〃	10—D	〃	〃	〃				6.1	横研磨	暗褐色	良好	
111	〃	7—F	〃	〃	〃				4.8	〃	黒色	〃	
112	〃	12—F	〃	〃	Ⅱ類				4.0				
113	〃	8—H	〃	〃	〃				4.2	横研磨	外面 淡褐色 内面 黒色	良好	
114	〃	12—D	深鉢	〃	Ⅲ類				5.0	外面 縦研磨 内面 横研磨	淡褐色	〃	
115	〃	12—H	〃	〃	〃				4.4	横研磨	暗褐色	〃	
116	〃	6—G	〃	〃	〃				3.4	縦研磨	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
117	〃	14—D	〃	〃	〃				6.5	磨消しか？	〃	〃	

118	Ⅰ区　8—Ⅰ	深鉢	底部	Ⅲ　類				7.9	横撫で	淡褐色	良　好	
119	〃　11—E	〃	〃	〃				6.6	横研磨	外面　淡褐色 内面　黒色	〃	
120	〃　6—Ⅰ	〃	〃	〃				7.3	横撫で	外面　茶褐色 内面　黒色	〃	
121	〃　10—F	〃	〃	〃				7.0	外面　縦研磨 内面　横研磨？	淡褐色	〃	
122	〃　7—Ⅰ	〃	〃	〃				7.7	横撫で	外面　淡褐色 内面　黒色	〃	
123	〃　12—C	〃	〃	〃				5.4	縦研磨	淡褐色	〃	
124	〃　7—H	〃	〃	〃				5.9	外面　縦撫で 内面　横撫で	外面　淡褐色 内面　暗褐色	〃	
125	〃　12—F	〃	〃	〃				7.6	横研磨	白茶褐色	〃	
126	〃　8—C	〃	〃	〃				5.7	〃	暗茶褐色	〃	
127	〃　11—C	〃	〃	〃				5.6	縦研磨	外面　淡褐色 内面　黒色	〃	
128	〃　12—G	〃	〃	〃				8.7	外面　磨消しか？ 内面　横研磨	〃	〃	
129	〃　13—C	〃	〃	〃				6.4	横研磨	〃	〃	
130	〃　10—C	〃	〃	〃				7.5	〃	〃	〃	
131	〃　12—G	〃	〃	Ⅳ　類				2.8	〃	淡褐色	〃	
132	〃　7—H	〃	〃	〃				6.1	〃	外面　赤褐色 内面　淡褐色	〃	
133	〃　13—D	〃	〃	〃				6.5	磨消し	外面　淡褐色 内面　黒茶褐色	〃	
134	〃　6—Ⅰ	〃	〃	〃				4.9	外面　縦方向研磨 内面　横研磨	外面　淡褐色 内面　黒色	〃	
135	〃　10—C 10—D	〃	〃	〃				5.7	磨消し	黒色	〃	
136	〃　11—E	〃	〃	〃				5.6	縦研磨	外面　淡褐色 内面　暗褐色	〃	
137	〃　11—D	〃	〃	〃				4.8	横研磨	黒色	〃	
138	〃　10—E	〃	〃	〃				8.0	縦研磨	暗褐色	〃	
139	〃　6—H	〃	〃	〃				5.6	横研磨	外面　茶褐色 内面　黒色	〃	
140	〃　11—C	〃	〃	〃				7.0	縦研磨	淡茶褐色	〃	
141	〃　10—E	〃	〃	〃				6.9	外面　縦研磨 内面　磨消し	外面　淡褐色 内面　暗茶褐色	〃	

142	Ⅰ区 6—H	深鉢	底部	Ⅲ類				8.6	外面 横研磨 内面 縦研磨	外面 淡赤褐色 内面 黒色	良好	
143	〃 6—H	〃	〃	〃				8.0	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 淡褐色 内面 茶褐色	〃	
144	〃 10—C	〃	〃	〃				6.8	外面 縦研磨 内面 磨消	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
145	〃 7—H	〃	〃	〃				8.4	横撫で	外面 淡茶褐色 内面 茶褐色	〃	
146	〃 11—D	〃	〃	〃				11.0	横研磨	外面 茶褐色 内面 黒色	〃	胎土に酸化鉄を含む
147	〃 10—C	〃	〃	〃				11.0	磨消	白茶褐色	〃	
148	〃 11—H	碗形土器	胴部～底部	Ⅰ類				5.1	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 茶褐色 内面 暗褐色	〃	

第13表　第Ⅰ—11号住居址出土の縄文土器一覧表　　Ⅰ区、11号住居址（第86～89図）

挿図番号	出土地	器種	残存部位 器形	分類	法量 (cm) 口径	最大径	器高	底径	技法の特徴	色調	焼成	備考
1	Ⅰ区 8・9—G・H	浅鉢	口縁部～胴部	Ⅰ—B類	30.4	30.4			外面 二条の凹線文及羽状文・横研磨 内面 横研磨	黒色	良好	
2	〃	〃	〃	Ⅰ—C類	25.2	25.2			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	茶褐色	〃	
3	〃	〃	〃	〃	28.7	28.7			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	淡褐色	〃	
4	〃	〃	〃	〃	30.2	30.2			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	黒色	〃	
5	〃	〃	〃	〃	30.4	30.4					〃	
6	〃	〃	〃	〃	32.2	32.2			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 黒色 内面 茶褐色	〃	
7	〃	〃	〃	〃	33.4	33.4			〃	黒色	〃	
8	〃	〃	〃	〃	30.0	30.0			〃	〃	〃	
9	〃	〃	〃	〃	20.3	20.3			横研磨	黒褐色	〃	
10	〃	〃	〃	〃	24.1	25.8			〃	〃	〃	
11	〃	〃	口縁部	Ⅲ—C類	22.7	23.3			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 黒茶褐色 内面 黒色	〃	口縁部に押点
12	〃	〃	〃	Ⅲ—A類	26.0	26.4			〃	黒色	〃	

13	I区 8・9—G・H	浅鉢	口縁部	Ⅲ—A類	28.3	28.3			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	黒色	良　好	
14	〃	〃	〃	〃	24.0	24.0			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	〃	〃	
15	〃	〃	〃	〃	26.7	27.7			〃	〃	〃	
16	〃	〃	〃	〃	24.0	24.0			〃	〃	〃	
17	〃	〃	口縁部～底部	Ⅱ—A類	13.3	13.3	4.5	8.0	外面 四条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	黒褐色	〃	底面は上げ底
18	〃	深鉢	口縁部～頸部	Ⅰ—B類	29.3				外面 三条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	口縁部に押点
19	〃	〃	〃	Ⅰ—B類	22.3				外面 三条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 茶褐色 内面 暗褐色	〃	
20	〃	〃	〃	Ⅰ—C類	29.5				外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	〃	〃	頸部に一条の沈線文
21	〃	〃	〃	Ⅰ—C類	27.0				外面 二条の凹線文及縦方向研磨 内面 横研磨	外面 茶褐色 内面 暗褐色	〃	
22	〃	〃	〃	〃	31.6				外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
23	〃	〃	〃	〃					外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 暗茶褐色 内面 白茶褐色	〃	
24	〃	〃	〃						横研磨	外面 暗褐色 内面 茶褐色	〃	
25	〃	浅鉢	底部	Ⅰ　類				7.2	外面 横撫で 内面 横研磨	外面 茶褐色 内面 黒褐色	〃	
26	〃	浅鉢	〃	〃				6.4	横研磨	茶褐色	〃	
27	〃	〃	〃	〃				6.6	〃	外面 淡褐色 内面 黒褐色	〃	
28	〃	〃	〃	〃				3.0	〃	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
29	〃	〃	〃	〃				6.0	〃	〃	〃	
30	〃	〃	〃	〃				4.5	〃	外面 淡褐色 内面 黒褐色	〃	
31	〃	〃	〃	〃				4.8	〃	黒色	〃	
32	〃	〃	〃	〃				6.6	〃	外面 茶褐色 内面 黒色	〃	
33	〃	〃	〃	〃				6.8	〃	外面 淡褐色 内面 暗褐色	〃	
34	〃	深鉢	〃	Ⅲ　類				5.3	〃	外面 茶褐色 内面 暗褐色	〃	
35	〃	〃	〃	〃				9.5	〃	外面 淡褐色 内面 暗茶褐色	〃	
36	〃	〃	〃	〃				5.8	〃	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	

37	I 区 8・9—G・H	深鉢	底部	Ⅲ 類				6.3	横研磨	外面 淡褐色 内面 黒色	良 好	
38	〃	〃	〃	〃				5.9	外面 縦方向研磨 内面 横研磨	〃	〃	
39	〃	〃	〃	〃				5.6	横研磨	外面 淡褐色 内面 黒褐色	〃	
40	〃	〃	〃	〃				6.8	〃	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
41	〃	〃	〃	〃				7.5	〃	外面 淡褐色 内面 茶褐色	〃	
42	〃	〃	〃	〃				5.4	〃	外面 淡褐色 内面 黒褐色	〃	
43				Ⅳ 類				4.7	〃	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
44				〃				6.1	〃	黒褐色	〃	
45		土偶	脚部						縦方向研磨	暗褐色	〃	

第14表　第Ⅱ—2号住居址出土の縄文土器一覧表　　Ⅱ区　2号住居址（第90～92図）

挿図番号	出土地	器種	残存部位 器形	分類	法量（cm） 口径	最大径	器高	底径	技法の特徴	色調	焼成	備考
1	Ⅱ区 10—S 11—S	浅鉢	口縁部～胴部	Ⅰ—C類	25.9	25.9			外面 一条の薄い凹線文及横研磨 内面 横研磨	黒色	良 好	
2	〃	〃	口縁部	Ⅲ—A類	19.1				外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	〃	〃	
3	〃	〃	〃	〃	28.3				〃	外面 茶褐色 内面 淡褐色	〃	
4	〃	〃	〃	〃	31.0				〃	暗褐色	〃	
5	〃	〃	口縁部～胴部	Ⅲ—E類	18.5	18.7			外面 二条の凹線文及沈線文・横研磨　内面 横研磨	淡茶褐色	〃	外面頸部に媒付着
6	〃	〃	〃	Ⅲ—C類	20.9	24.0			外面 口縁部二条の沈線文・胴部屈折部に一条の沈線文及横研磨 内面 横研磨			
7	〃	〃	口縁部	Ⅲ—E類	34.9	34.9			外面 二条の沈線文及横研磨 内面 横研磨	黒褐色	良 好	押点あり
8	〃	〃	〃	〃	39.0	39.0			外面 口縁部に二条の沈線文及横研磨　内面 横研磨	黒色	〃	
9	〃	深鉢	口縁部～胴部	Ⅰ—C類	27.7	32.6			外面 二条の凹線文及縦研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
10	〃	〃	口縁部	〃	30.8				外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	淡褐色	〃	

11	Ⅱ区 10—S 11—S	深鉢	口縁部～胴部	Ⅰ—C類	22.4				外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	黒色	良　好	
12	〃	〃	口縁部	〃	24.2				〃	外面 黒褐色 内面 茶褐色	〃	
13	〃	〃	〃	Ⅰ—D類	17.0				外面 二条の沈線文及横研磨 内面 横研磨	外面 黒色 内面 暗褐色	〃	
14	〃	〃	〃	〃	33.2				外面 三条の沈線文及横研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
15	〃	〃	〃	〃	30.3				外面 二条の沈線文及横研磨 内面 横研磨	外面 黒褐色 内面 茶褐色	〃	
16	〃	浅鉢	底部	Ⅰ　類	4.6				外面 縦研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
17	〃	〃	〃	〃	7.4				横研磨	〃	〃	
18	〃	〃	〃	〃	7.2				〃	淡褐色	〃	
19	〃	〃	〃	Ⅳ　類	5.2				外面 縦研磨 内面 横研磨	〃	〃	
20	〃	〃	〃	〃	8.5				横撫で	暗褐色	〃	
21	〃	〃	〃	〃	7.5				〃	外面 淡褐色 内面 黒褐色	〃	
22	〃	〃	胴部下半	〃					外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
23	〃	〃	〃	〃	6.4				横撫で	外面 淡褐色 内面 茶褐色	〃	

第15表　第Ⅱ—1号円形周溝遺構出土の縄文土器一覧表　　Ⅱ区　1号円形周溝（第93図）

挿図番号	出土地	器種	残存部位 器形	分類	法量（cm）				技法の特徴	色調	焼成	備考
					口径	最大径	器高	底径				
1	Ⅱ区 4・5—P・Q	浅鉢	口縁部	Ⅰ—B類	28.7	28.7			外面 二条の凹線文・羽状文及横研磨 内面 口縁部に一条の沈線及横研磨	白茶褐色	良　好	
2	〃	〃	〃	Ⅱ—A類	27.7	27.7			外面 二条の凹線文・羽状文及横研磨 内面 口縁部に一条の沈線文及横研磨	茶褐色	〃	
3	〃	〃	〃	Ⅲ—A類	31.0				外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	赤茶褐色	〃	
4	〃	〃	口縁部～胴部	〃	36.0	36.8			外面 口縁部に二条の凹線文・胴部に一条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	暗褐色	〃	
5	〃	〃	口縁部	〃	23.4				外面 口縁部に二条の凹線文及横研磨 内面 一条の沈線文及横研磨	黒色	〃	
6	〃	深鉢	〃	Ⅰ—C類	31.0				外面 二条の凹線文及縦研磨 内面 横研磨	外面 暗褐色 内面 茶褐色	〃	一部媒付着

7	Ⅱ区 4・5—P・Q	浅鉢	底部	Ⅰ類				6.4	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 茶褐色 内面 黒色	良好	
8	〃	〃	〃	〃				6.0	〃	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	

第16表　第Ⅱ—2号円形周溝遺構出土の縄文土器一覧表　　Ⅱ区　2号円形周溝（第94図）

挿図番号	出土地	器種	残存部位 器形	分類	法量（cm）				技法の特徴	色調	焼成	備考
					口径	最大径	器高	底径				
1	Ⅱ区 4・5—R・S	浅鉢	口縁部～胴部	Ⅰ—C類	32.7	32.7			外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	暗褐色	良好	
2	〃	〃	〃	Ⅰ—A類	30.3	32.5			外面 三条の沈線文及横研磨 内面 横研磨	〃	〃	胎土に金雲母を含む
3	〃	〃	口縁部～頚部	Ⅲ—A類	23.9	24.5			外面 口縁部に二条の凹線文・頚部一条の沈線及横研磨 内面 横研磨	外面 茶褐色 内面 黒褐色	〃	
4	〃	深鉢	口縁部	Ⅰ—C類	30.2				外面 二条の凹線文及縦研磨 内面 横研磨	外面 暗褐色 内面 白茶褐色	〃	
5	〃	〃	口縁部～胴部	Ⅲ—C類	33.1	33.1			外面 口縁部磨消し、胴部横研磨 内面 磨消し	外面 暗褐色 内面 暗茶褐色	〃	
6	〃	浅鉢	底部	Ⅰ類				6.6	外面 横研磨 内面 磨消し	外面 茶褐色 内面 黒色	〃	

第17表　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の埋鉢一覧表　　Ⅰ・Ⅱ区　埋鉢（第95～98図）

挿図番号	出土地	器種	残存部位 器形	分類	法量（cm）				技法の特徴	色調	焼成	備考
					口径	最大径	器高	底径				
1	Ⅰ区 7—I	深鉢（第Ⅰ—1号埋鉢）	口縁部～底部	Ⅰ—C類	39.6	41.9	54.6	8.0	外面 口縁部に二条の凹線文及横研磨、胴部から底部にかけては縦研磨　内面 横研磨	外面 黒褐色 内面 茶褐色	良好	底面は若干レンズ状をなす
2	〃 6—I	深鉢（第Ⅰ—2号埋鉢）	〃	Ⅲ—C類	34.6	35.0	36.5	6.3	外面 横研磨 内面 撫で消し	外面 淡褐色 内面 白茶褐色	〃	底面は上げ底
3	〃 5—H	深鉢（第Ⅰ—3号埋鉢）	〃	〃				6.1	外面 口縁部横研磨、胴部～底部縦研磨。内面 口縁部横研磨 胴部～底部は撫で消し	外面 黒褐色 内面 白茶褐色	〃	〃
4	〃 9—C	深鉢（第Ⅰ—4号埋鉢）	〃	〃				6.5	外面 口縁部縦研磨、胴部～底部右斜め方向磨き 内面 右斜め方向磨き	外面 淡褐色 内面 暗茶褐色	〃	〃
5	Ⅱ区 6—R	深鉢（第Ⅱ—2号埋鉢）	口縁部～胴部	Ⅱ類	22.8	27.1			横研磨	黒褐色	〃	底部は穿孔されている
6	〃 9—P	深鉢（第Ⅱ—1号埋鉢）	胴部中位～底部	Ⅲ—C類				9.3	外面 磨消し 内面 横撫で	外面 暗茶褐色 内面 茶褐色	〃	底面上げ底

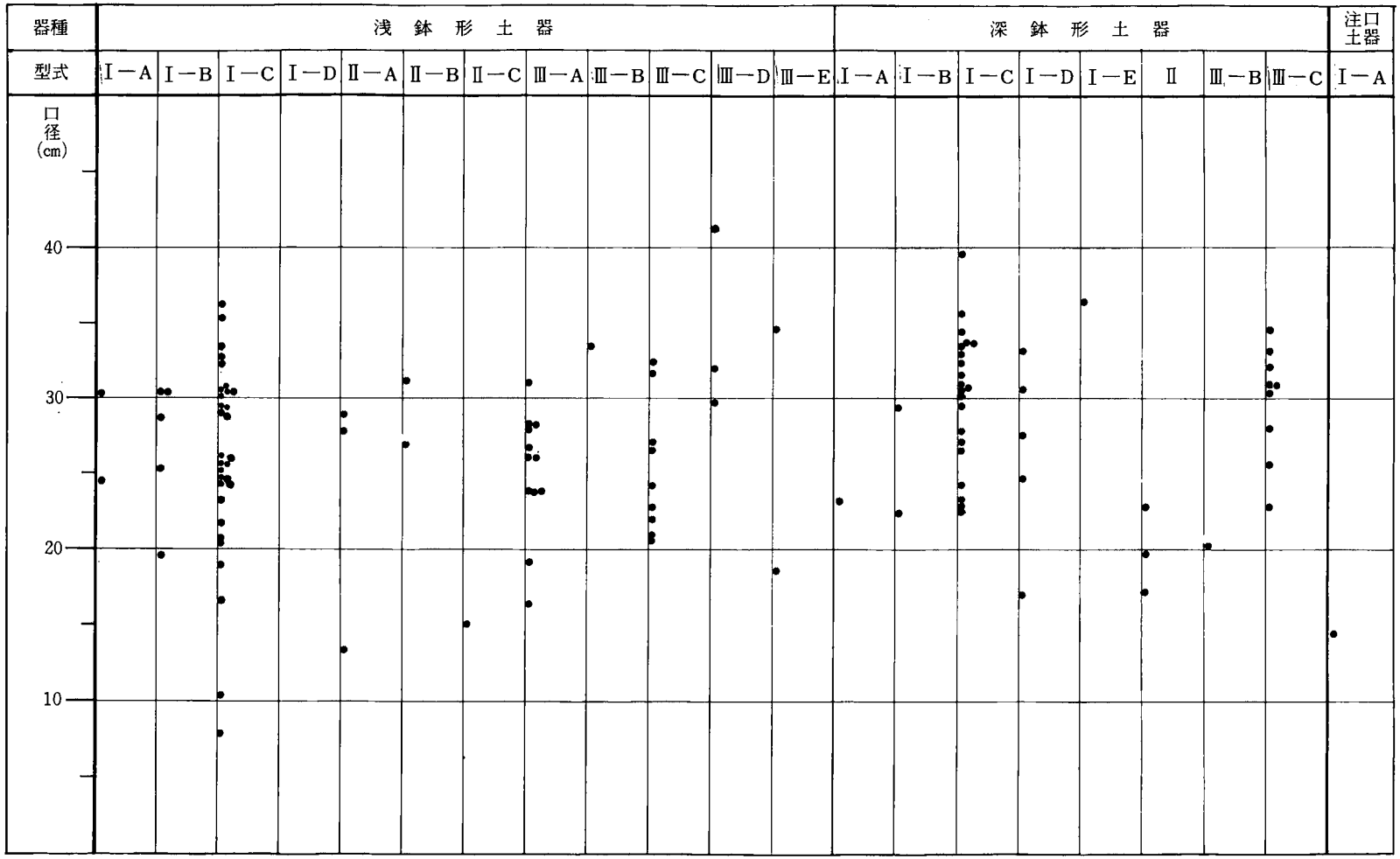
7	Ⅱ区　2—X	深鉢（第Ⅱ—3号埋鉢）	口縁部～底部	Ⅲ—C類				6.6	外面 口縁部縦研磨、胴部横研磨及縦研磨　内面 横研磨	暗褐色	良好	底面上げ底
8	〃　1—W	深鉢（第Ⅱ—4号埋鉢）	〃	〃	31.0	29.5	32.2	7.6	外面 縦研磨　内面 口縁部横研磨、胴部～底部横撫で	外面 淡褐色 内面 黒褐色	〃	底面は平底

第18表　第Ⅰ—1号方形溝遺構出土の縄文土器一覧表　　Ⅰ区　方形溝（第99～101図）

挿図番号	出土地	器種	残存部位 器形	分類	法量（cm） 口径	最大径	器高	底径	技法の特徴	色調	焼成	備考
1	Ⅰ区 9・10・11—F・G　D区	浅鉢	口縁部～胴部	Ⅱ—B類	26.9	26.9			外面 胴部屈折部に二条の凹線文及横研磨　内面 口唇部に一条の沈線及横研磨	黒色	良好	
2	〃　B区	〃	〃	〃	31.2	31.2			〃	〃	〃	
3	〃　D区	〃	口縁部	Ⅲ—A類	22.0				外面 二条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 黒色 内面 茶褐色	〃	
4	〃　C区	〃	〃	〃	27.2				〃	黒色	〃	
5	〃　D区	〃	〃	〃	32.1				〃	〃	〃	口縁部に押点
6	〃　A区	〃	〃	〃	25.4				〃	〃	〃	
7	〃　C区	〃	口縁部～胴部	Ⅲ—C類	24.1	25.0			〃	暗褐色	〃	
8	〃　A区	〃	口縁部	〃	27.0	27.0			〃	灰褐色	〃	口縁部に上・下位に押点あり
9	〃　C区	深鉢	〃	Ⅰ—C類	22.6				〃	黒色	〃	
10	〃　B区	〃	〃	〃	35.6				〃	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
11	〃　〃	〃	〃	〃	33.7				外面 三条の凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 淡褐色 内面 茶褐色	〃	
12	〃　C区	〃	〃	Ⅰ—E類	36.4				横研磨	外面 茶褐色 内面 暗褐色	〃	
13	〃　A区	〃	口縁部～胴部	Ⅱ　類	17.1				外面 胴部屈折部に一条の凹線文		〃	
14	〃　〃	注口土器	胴部	Ⅰ—B類		27.9			外面 凹線文及横研磨 内面 横研磨	外面 白茶褐色 内面 暗褐色	〃	
15	〃　C区	浅鉢	胴部～底部	Ⅰ　類				3.7	横研磨	黒色	〃	
16	〃　A区	〃	底部	〃				4.3	〃	暗褐色	〃	
17	〃　D区	〃	〃	〃				5.2	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	

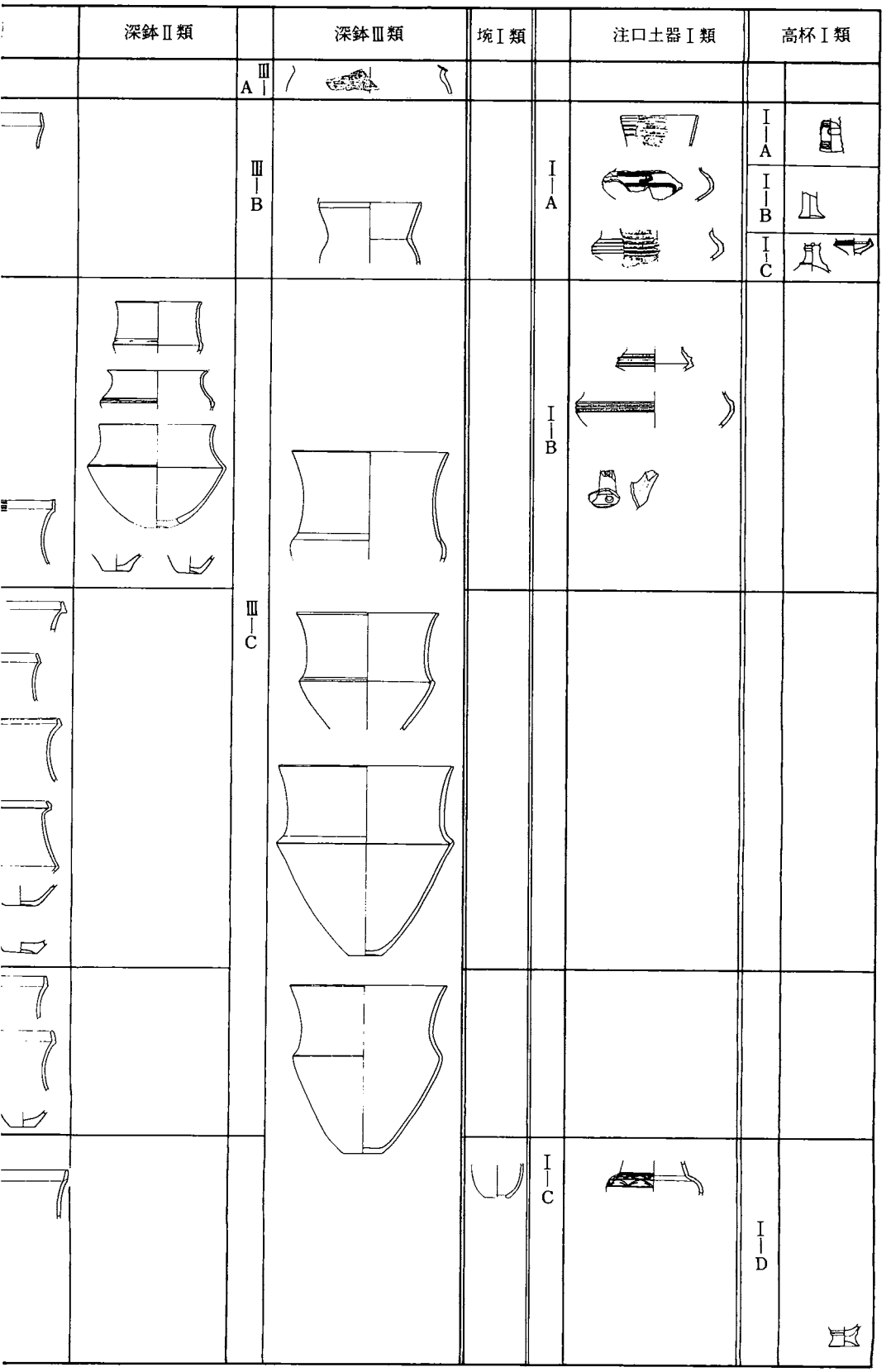
18	Ⅰ区 9・10・11 —F・G	浅鉢	底部	Ⅰ類				5.4	横撫で	外面 淡褐色 内面 黒色	良好	
19	〃 B区	〃	〃	〃				5.5	〃	暗褐色	〃	
20	〃 〃	〃	〃	〃				6.4	〃	外面 淡褐色 内面 白茶褐色	〃	
21	〃 D区	〃	〃	〃				6.5	外面 縦研磨 内面 横研磨	茶褐色	〃	
22	〃 C区	〃	〃	〃				5.4	横撫で	外面 淡褐色 内面 白茶褐色	〃	
23	〃 D区	〃	〃	〃				6.0	横研磨	外面 淡褐色 内面 暗褐色	〃	
24	〃	深鉢	〃	Ⅲ類				8.8	横撫で	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
25	〃 A区	〃	〃	〃				6.9	〃	〃	〃	
26	〃 C区	〃	〃	Ⅳ類				5.4	外面 横撫で 内面 横研磨	〃	〃	
27	〃 B区	〃	〃	〃				4.8	外面 縦研磨 内面 横研磨	外面 淡褐色 内面 暗褐色	〃	
28	〃	〃	〃	〃				7.5	横撫で	外面 淡褐色 内面 黒色	〃	
29	〃 C区	〃	〃	〃				11.4	丁寧な研磨	外面 暗茶褐色 内面 黒色	〃	

第19表　縄文土器の器種別・形式別口径分布表



型式 ＼ 形式		浅鉢Ⅰ類		浅鉢Ⅱ類		浅鉢Ⅲ類		深鉢Ⅰ類	
A 三万田式	Ⅰ A式	Ⅰ/A							
三万田B式	Ⅰ—B式	Ⅰ—B		Ⅱ—A				Ⅰ—A	
鳥井原式	Ⅱ式	Ⅰ—C		Ⅱ—B		Ⅲ—A		Ⅰ—B	
						Ⅲ—B			
御領式	Ⅲ式	Ⅰ—D		Ⅱ—C		Ⅲ—C		Ⅰ—C	
						Ⅲ—D			
天城式	Ⅳ式					Ⅲ—E		Ⅰ—D	
古閑式	Ⅴ式							Ⅰ—E	

第20表　伊坂上原遺跡出土の縄文土器編年表



(河北毅作成)

第Ⅵ章　弥　生　土　器

第１節　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の弥生土器の概要

弥生土器は第Ⅰ・Ⅱ調査区から検出した。時期の内訳は前期後半・中期初頭の甕形土器片（刻目突帯文を有するもの）と後期前半期に比定されるもの（６・８・10号住居址出土の土器群）がある。

第104図１～３は甕形土器の口縁部～胴部片である。

１はⅡ区４－Ｐグリッド第Ⅱ－１号溝への流れ込みによる遺物で、口縁部と胴部に刻目突帯文を廻らす。上位の突帯は貼り付けによる突帯で下位の突帯には線刻のように細くなっている。調整は横撫でで、色調は茶褐色を呈する。

２は第Ⅰ－３号住居址の一括出土で、口縁部片で突帯に刻目を有し、横撫で整形されている。色調は白茶褐色を呈する。

３は第Ⅰ－１号方形溝一括出土遺物である。胴部片で刻目突帯を有し刻目の線はやや大きい。色調は黒色をなし、横撫でで整形されている。

刻目突帯文の編年について、野田拓治氏は、『上の原遺跡Ⅰ』の中で、弥生前期末から中期前半を上原Ⅰ・ⅡＡ・ⅡＢ式に設定している。同氏の報告に対比すると、本遺跡の遺物は前期末～中期初頭に比定でき、上原Ⅰ式及びⅡＡ式と平行する。

第Ⅰ－６・８・10号住居址から出土した土器は甕・壺・鉢・器台に分類できる。甕をⅠ－a・b類、壺をⅠ－a・b・c、Ⅱ、Ⅲ・Ⅳ類、鉢をⅠ・Ⅱ・Ⅲ類（台付鉢も含む）、器台を１類に分類した。

第Ⅰ－６・８・10号住居址の出土土器の内訳は以下並記する。

第Ⅰ－６号住居址から甕２個体、壺１個体・甕脚部２点である。第Ⅰ－８号住居址では壺２個体、台付鉢１個体である。第Ⅰ－10号住居址からの出土土器は甕３個体、壺４個体、鉢２個体、器台２個体を数える。

６号住居址出土の土器（第105図）は甕・鉢である。第105図１は甕形土器の口縁部～胴部中位の破片で、口縁部から胴部にかけてやや強い「く」の字状をなす。口径は23.2cmを測る。器面の整形は、外面横撫でを主体とし一部に縦方向の刷毛目を施す。内面は、口縁部で横撫で調整がなされ、頭部から胴部にかけては右斜め方向の刷毛目で施文されている。（Ⅰ－a類）

第105図２は甕形土器の口縁部～胴部中位の破片で、口径20.5cmを測る。器外面では口縁部は

横撫を、頸部～胴部にかけては縦方向及び左斜め方向の刷毛目調整を施す。器内面は口縁部で横方向の刷毛目、頸部から胴部にかけては右斜め方向の刷毛目調整を施す。外面には煤が全面に付着する。

第105図３（Ⅳ類）は小形の鉢の破片で緩く「く」の字形をなし、胴部が彎曲ぎみに底部へと続き丸底になると思われる。器外面の頸部には煤が付着する。口径14.2cm、最大径は胴部中位にあり、14.7cmを測る。器面の整形は外面で縦方向の刷毛目及び横撫で、内面は横撫でが主体で一部右斜め方向からの刷毛目が施されている。色調は白茶褐色を呈する。外面の頸部から胴部中位には煤が付着する。

第105図４（Ⅰ－ｃ類）は甕形土器の脚部で底面が上げ底をなし、底径は10.0cmを測る。器の外面で横撫で、部分的には左斜め方向の刷毛目調整を施す。器の内面には横撫でと指圧痕が見うけられる。底面には小砂粒子を多量に含む。

第105図５も甕形土器脚部で底径11.4cmを測る。調整は器外面は横撫でで一部右斜め方向からの刷毛目を施す。器内面は横撫でで整形されている。第105図１・２の甕形土器はⅠ－ａ類に該当し、この甕形土器には第105図４・５の脚部が同一個体と考えられる。

第Ⅰ－８号住居址出土の土器（第106図）は少数で壺２個体、台付鉢１個体である。

第106図１（Ⅲ類）は複合口縁をなす壺形土器の口縁部である。口径は15.0cmを測り、調整は器外面横撫でで、下位に縦方向の刷毛目を施文する。器内面は横撫でによる整形。

第106図２（Ⅳ類）は壺形土器の口縁部～頸部片で頸部から口唇部にかけて外反ぎみに開く。口唇部には刻目を施す。図上復原による口径は15.0cmを測る。調整は器外面で右斜め方向による刷毛目を施し、器内面は横撫でで整形されている。

第106図３（Ⅰ類）は台付鉢で口縁部は外彎ぎみに開き、胴部はやや球形状をなし、脚部は外反する。口縁部が最大の径をなし、口径11.7cmを測る。調整は器外面では横撫でで整形されているが、胴部上位から胴部下半にかけて縦方向の刷毛目を施文する。器内面は横撫でによって整形されている。色調は外面淡褐色・内面暗褐色を呈する。

第Ⅰ－10号住居址出土の土器（第107～110図）は甕・壺・鉢・器台の４器種に分類できる。内訳は甕３個体・壺４個体・鉢２個体・器台２個体を教える。

第２節　弥生土器の分類

(1)　甕形土器の分類

甕形土器Ⅰ－ａ・ｂ類の２種類に分類した。Ⅰ－ａ類（第107図１・２）１は甕形土器の口縁

部から胴部下半にかけて殆ど残存する。口縁部は「く」の字形屈曲をなし外反ぎみに開口する。口径24.7cm、最大径は胴部上位にあり26.9cmを測る。調整は器壁外面では口縁部は横撫でで全面に左斜め方向の刷毛目を施す。器壁内面では口縁部に横撫でをなし、全面に右斜め方向の刷毛目を施し胴部下半部は横撫でによって整形されている。色調は外面に煤が付着しており黒褐色を呈し、内面は淡褐色をなす。

第107図２は甕形土器の口縁部から底面まで存在するが脚部が欠損する。器形は口縁部「く」の字形をなし、最大径が胴部上位に位置する。口径23.9cm、最大径26.1cmを測る。調整は器壁外面で縦方向の刷毛目を施し、器壁内面では、口縁部の一部に横方向の刷毛目があるが全体的には右斜め方向の刷毛目を施し胴部下半では横方向の刷毛目によって整形されている。器の外側全面に煤が付着し、色調は暗褐色を呈する。この甕形土器の底部は丸底整形後に脚部を貼り付けて使用したと考えられるが、脚部は欠損している。この甕形土器を煮炊き用に使用したと考えられ、使用段階で脚部が接合面から外れたのにもかかわらず再使用している事が底面に煤が付着していることから窺える。

Ⅰ－ｂ類（第108図　３）は甕形土器で口縁部から胴部中位が残存する。器形は口縁部が「く」の字形に外反し、口径28.3cmを測る。最大径は胴部上位にあり刻目突帯を貼り廻らす。最大径は、34.0cmを測る。調整は器外壁面では、口縁部と胴部突帯下位は右斜め方向の刷毛目を施し肩部から突帯上位にかけては左斜め方向の刷毛目で整形されている。器内壁面では口縁部に横方向の刷毛目、肩部から胴部にかけ右斜め方向の刷毛目によって整形されている。色調は茶褐色をなし、器外壁面の一部に煤が付着する。焼成は良好である。

(2)　壺形土器の分類

壺形土器はⅠ－ａ・ｂ・ｃ類、Ⅱ類の４種に分類した。

Ⅰ－ａ類（第109図　５）は壺形土器の口縁部から胴部中位までと底部が殆んど残存するが、胴部中位から底部上面までが欠損する。器形は肩部から口縁部にかけては若干立ち上りぎみに外彎する。胴部の中位程に一条の刻目突帯文を貼り廻らす。底部はややレンズ状を呈する。口径16.8cm、最大径27.7cm、図上復原による器高は34.4cm、底径7.6cmを測る。器面の整形は器外壁面では左斜め方向の刷毛目が施され、器内壁面は右斜め方向による刷毛目を施し、指圧痕も見られる。色調は赤褐色をなし焼成は良好である。

Ⅰ－ｂ類（第109図　６）は壺形土器の口縁部から底部にかけて殆ど残存する。器形は肩部から口縁部にかけて外反する。肩部と胴部中位に一条ずつ突帯を廻らす。底部はレンズ状をなす。最大径24.5cm、底径5.2cmを測る。調整は器壁外面では口縁部と胴部の一部に左斜め方向の刷毛目が施されているが、殆どが横撫で消しによる整形で仕上げられている。器壁内面は殆ど右斜

め方向からの刷毛目で施し一部横撫でによって整形がなされている。色調は外面淡褐色、内面黒色を呈する。焼成は良好。

Ⅰ－Ｃ類（第108図　４）は壺形土器で口縁部から胴部中位にかけての約４分の１が残存する。胴部中位よりやや下方に一条の刻目突帯を貼り廻らす。調整は器壁外面は左斜め方向の刷毛目を施し、器壁内面は右斜め方向の刷毛目によって整形されている。色調は茶褐色を呈する。器肉は５．６に比べると非常に薄い。

Ⅱ類（第110図　７）は無頸壺で口縁部が直立し胴部が円筒状に脹れ底部は若干のレンズ状をなす。口径10.0cm、最大径は胴部中位にあり17.9cm、器高23.3cm、底径12.6cmを測る。調整は器壁外面で一部縦方向の刷毛目が施されており、器外全面に横撫でがなされ刷毛目が撫で消しで再整形されている。器壁内面は右斜め方向の刷毛目を全面施し胴部下半には横方向の刷毛目を施す。色調は茶褐色をなし、底部に一部は焼成不良で黒色を呈する。

(3)　鉢形土器の分類

鉢形土器はⅠ・Ⅱ類に分類した。

Ⅰ類（第110図　８）は整形土器で底部から口縁部にかけては球形状に内彎する。底面はやや上げ底をなす。口径17.6cm、最大径19.5cm、器高17.5cm、底径8.0cmを測る。調整は器壁外面では、口縁部が横方向の撫で、胴部は左斜め方向の刷毛目、底面は横方向の撫でによって整形されている。器壁内面は右斜め方向の刷毛目を施し、胴部下半では縦方向の撫でを施す。色調は茶褐色を呈する。

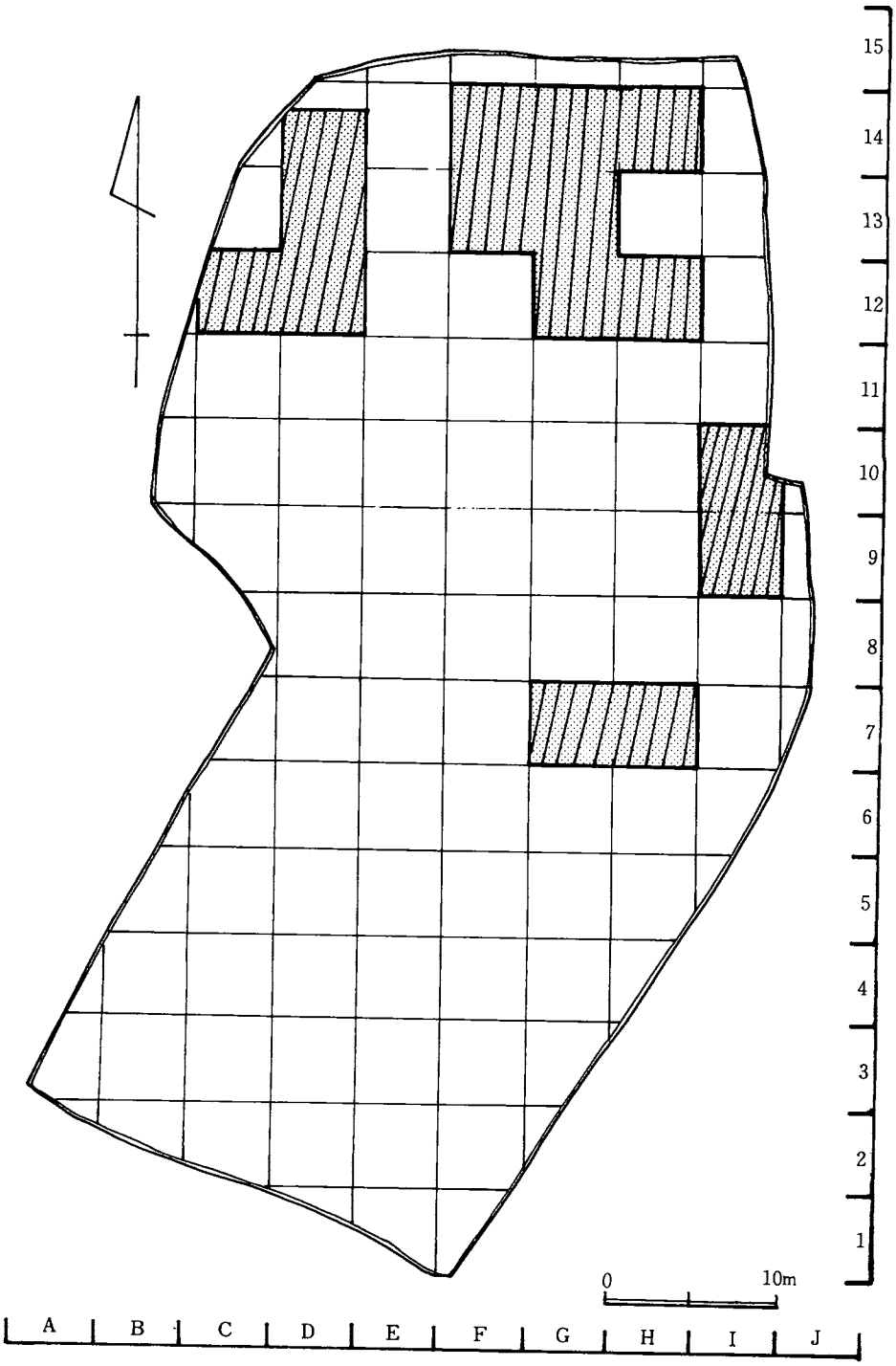
Ⅱ類（第110図　９）は鉢形土器で口縁部が「く」の字状に外反する。胴部上位から内彎ぎみに底部へと続き底面はレンズ状をなす。口径は最大径をなし25.0cm、器高は18.3cm、底径7.3cmを測る。器面の調整は、器壁外面で口縁部に横撫で胴部上位で縦方向の刷毛目を施し、胴部中位～下半にかけて左斜め方向の刷毛目によって整形されている。器壁内面は口縁部で横撫で、胴部には横方向及び左斜め方向の刷毛目を施し、底部は横撫でで整形されている。色調は茶褐色を呈する。

(4)　器台形土器の分類

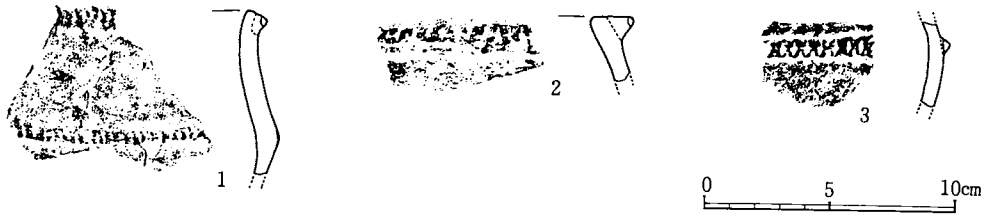
器台形土器は２個体出土し、Ⅰ分類した。

Ⅰ類（第110図　10・11）は器台形土器で10は口縁部が外反ぎみに開き、括部が胴部中位にあり裾部は外反する。最大径は口縁部にあり、口径12.6cm、器高15.6cm、底径12.2cmを測る。調整は器壁外面に縦方向の刷毛目を施し、器壁内面は横撫で整形されているが裾部には右斜め方

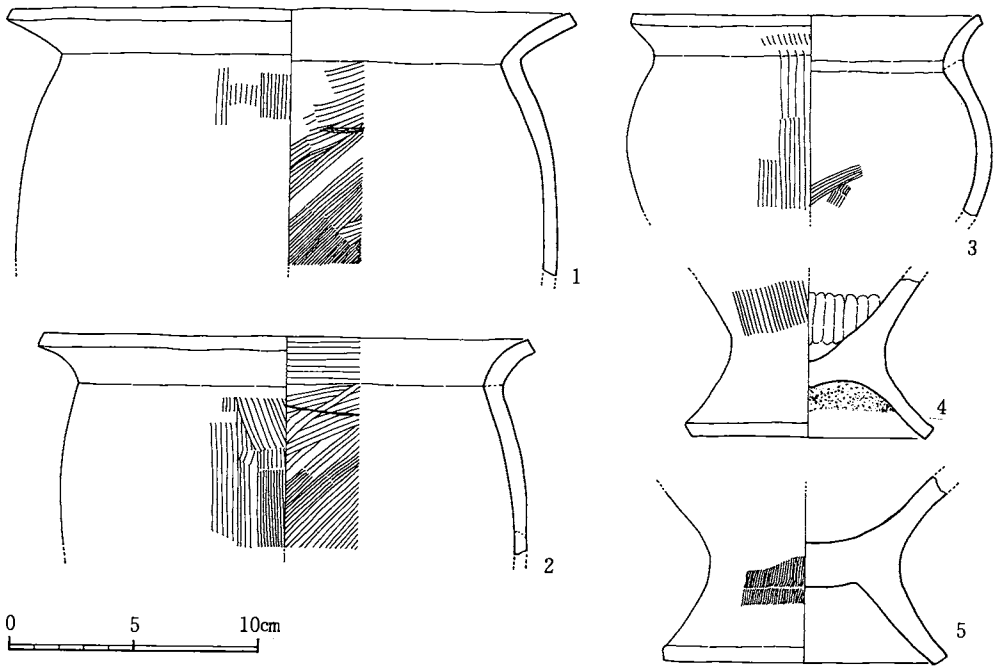
向の刷毛目が残る。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。11も器台形土器で口縁部がやや外反し、10の括部が胴部中位に位置するのに対し、括部は胴部上位に裾部にかけて外反する。口径12.3cm、器高16.7cm、底径12.3cmを測る。調整は器壁外面で胴部中位だけ縦方向の刷毛目を施すが器台の全面を横撫でによって整形がされている。器壁内面は一部刷毛目が見られるが殆ど横撫でによって整形されている。胴部中位には指圧の痕跡が残る。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。



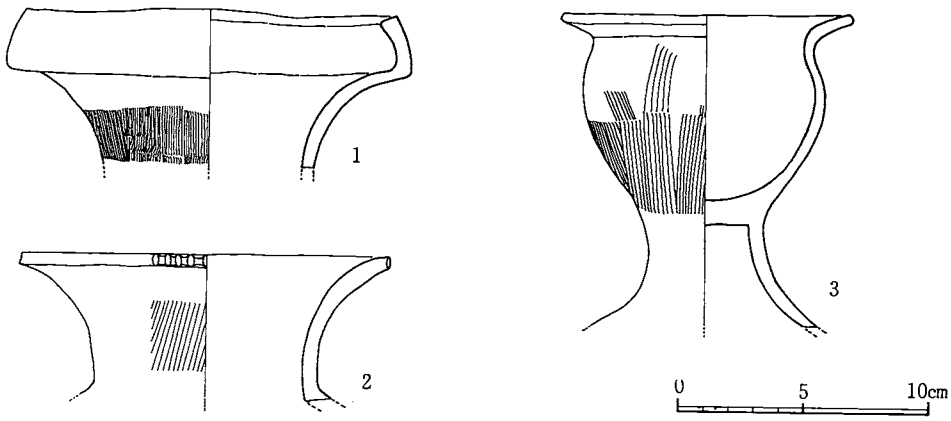
第103図　第Ⅰ調査区弥生時代遺物散布状況配置図



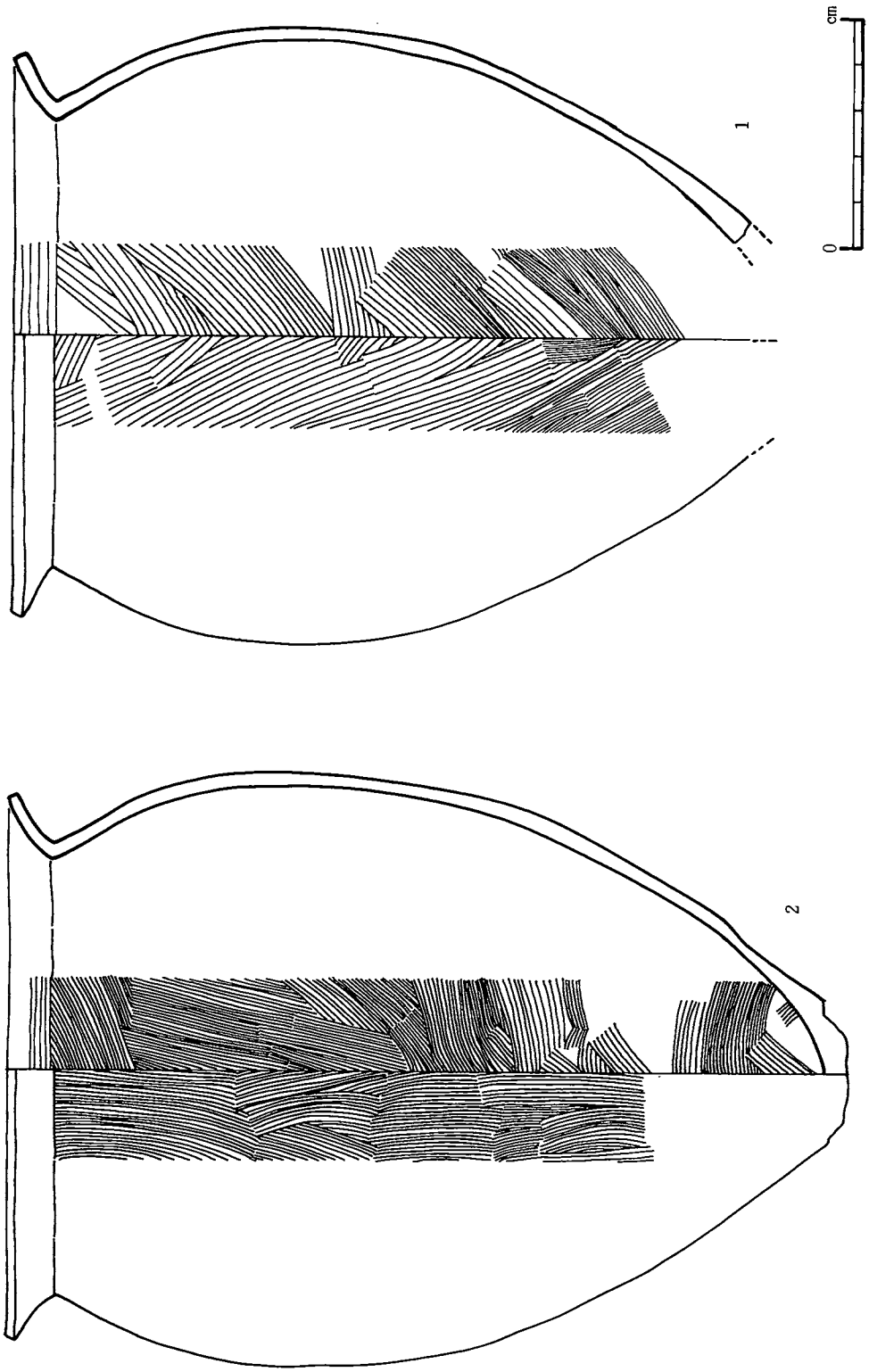
第104図　刻目突帯文土器



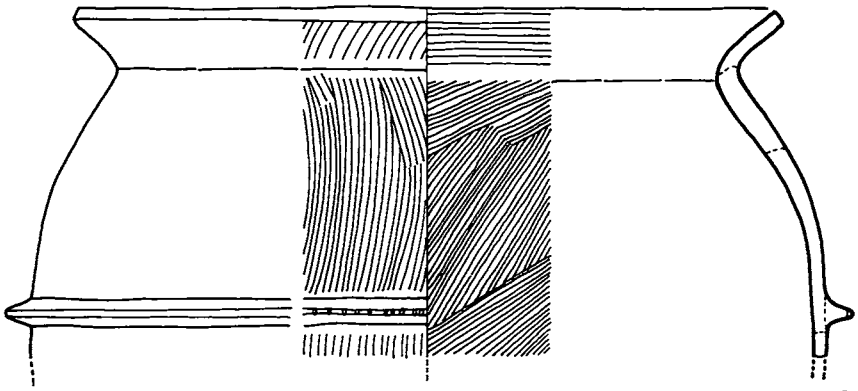
第105図　第Ⅰ－6号住居址出土の土器



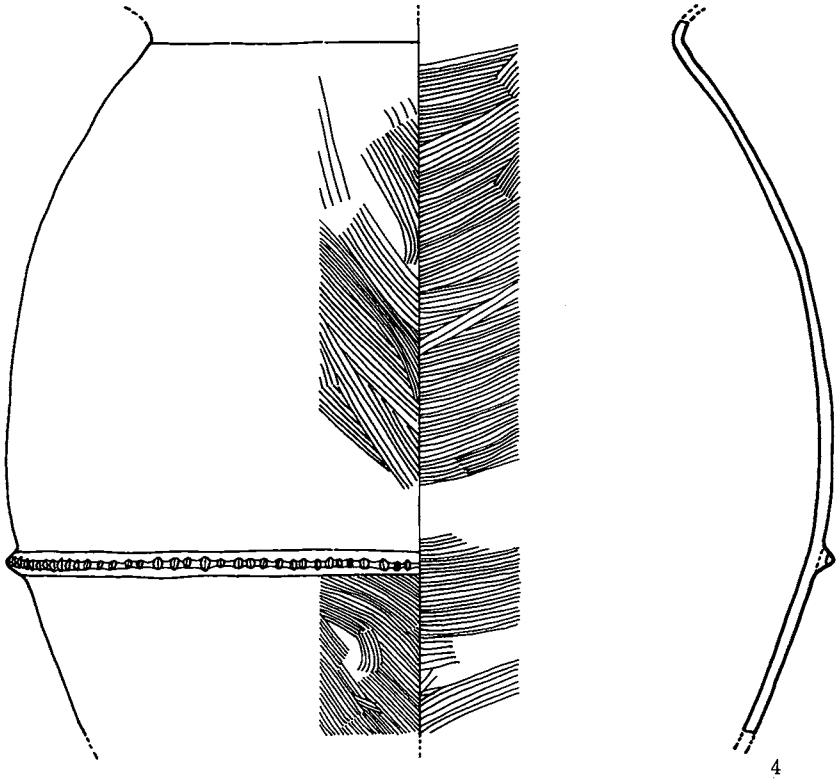
第106図　第Ⅰ－8号住居址出土の土器



第107図　第Ⅰ—10号住居址出土の土器



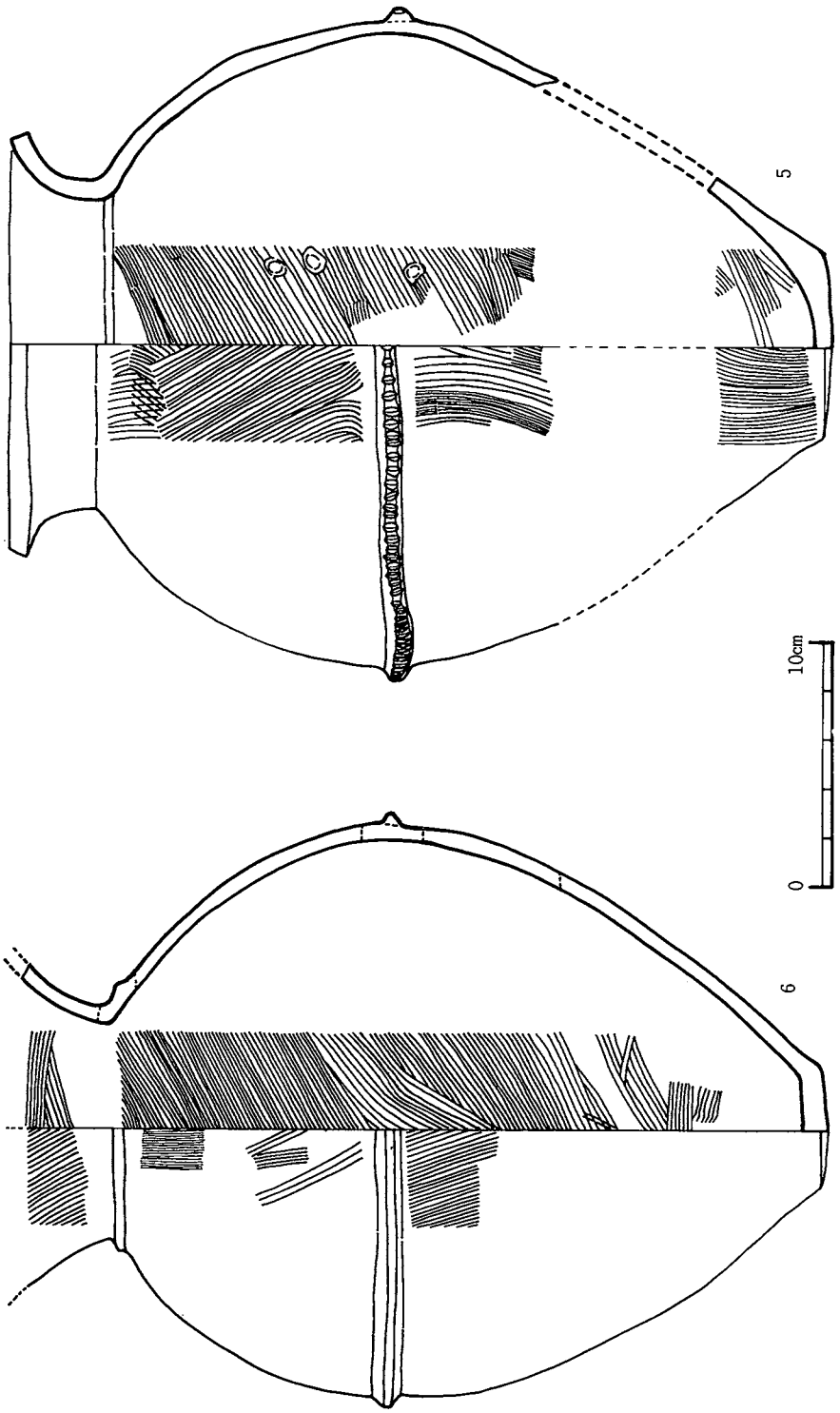
3



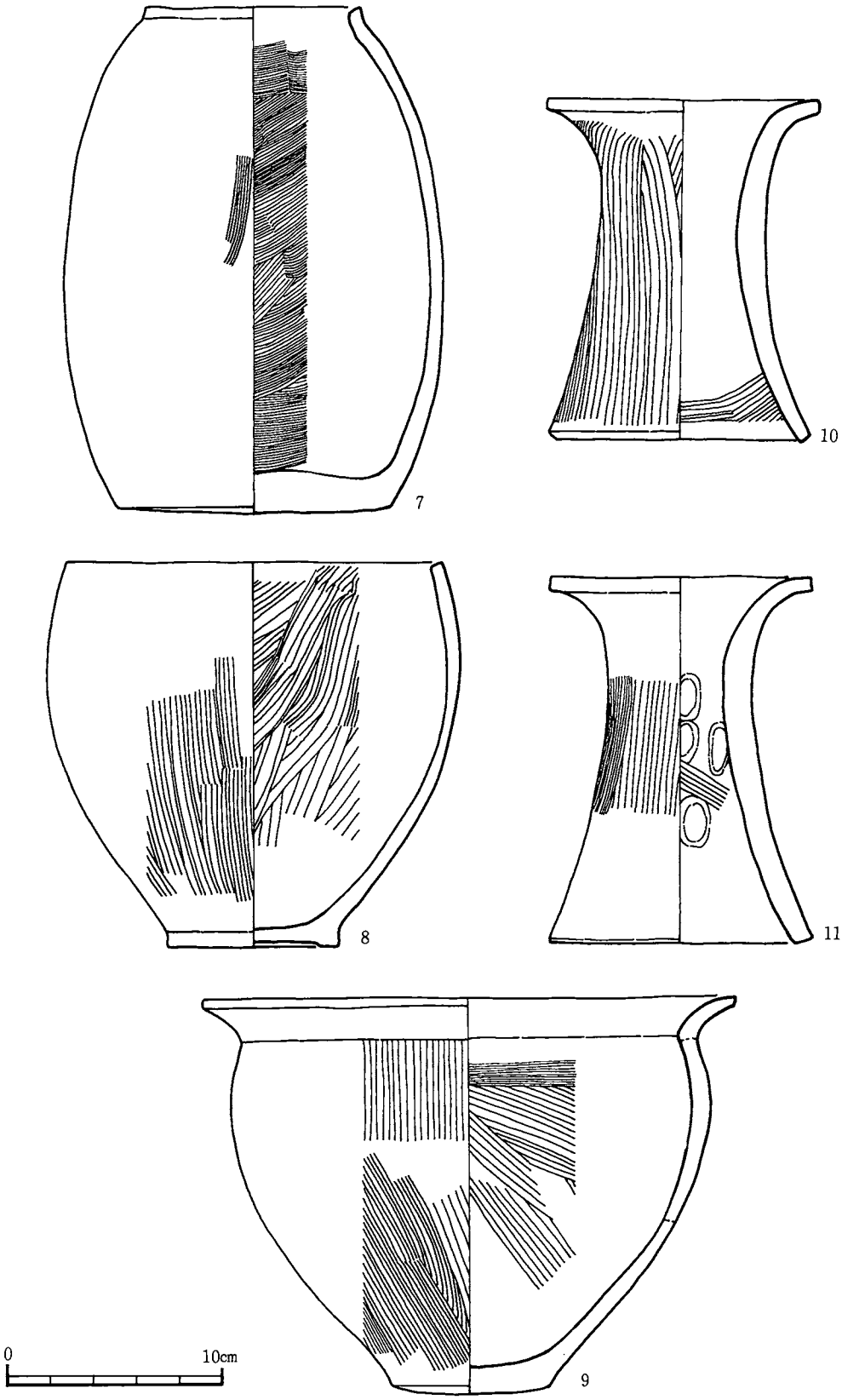
4

0　10cm

第108図　第Ⅰ—10号住居址出土の土器



第109図　第Ⅰ—10号住居址出土の土器



第110図　第Ⅰ—10号住居址出土の土器

第Ⅶ章　歴史時代の土器及び陶磁器

第１節　歴史時代の土師器

１．第111図　土師器（坏の蓋及び身）

(1)　第Ⅳ－２号住居址出土　覆土一括資料

輪状摘を持つ坏の蓋である。口径18.4cm・器高3.0cm・天井の高さ1.8cm・輪状摘の径7.8cmを測る。内外面ともに水引き調整のあとが残る。また、内外面に赤色顔料を化粧がけしている。器表には炭化物が付着しており、部分的に色調の変化が見られるので、二次焼成を受けている可能性が有る。胎土は緻密であり、良質の粘土を使用している。色調は明褐色である。

(2)　第Ⅳ－２号住居址出土　覆土一括資料

輪状摘を持つ坏の蓋と思われる。復元口径20.5cmを測る。内外面ともに水引き調整のあとが残る。また、内外面に赤色顔料を化粧がけしている。胎土及び焼成ともに良好である。

(3)　第Ⅱ－３号住居址カマド内出土

坏の身である。全体の半分を欠失する。復元口径18.5cm・器高3.4cm底径12.1cmを測る。内外面ともに水引き調整のあとが残る。また、内外面に赤色顔料を化粧がけしている。底面にはヘラ切りのあとが残る。器表が磨滅していることから、頻繁に使用されていたことが推測される。胎土は良好であり、焼成は少々あまい。

(4)　第Ⅱ－３号住居址口カマド内出土

坏の身である。全体の半分を欠失する。復元口径14.1cm・器高3.0cm・底径8.9cmを測る。内外面には水引き調整のあとがわずかに残る。また、内外面に赤色顔料を化粧がけしている。底面にはヘラ切りのあとが残る。器表の磨滅がはげしいことから、頻繁に使用されていたと推測される。胎土は良好であり、焼成は少々あまい。

(5) 第Ⅰ区出土　一括資料

坏の身である。底部の一部を残す。内外面に水引き調整のあとが残る。また、内外面に赤色顔料を化粧がけしている。底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土及び焼成は良好である。

(6) 第Ⅶ区出土　一括資料

底部の一部が残存する。復元底径9.4cmを測る。内外面に赤色顔料を化粧がけしている。底面にはヘラ切りのあとが残る。焼成があまく、軟質であり、磨滅がはげしい。胎土は緻密である。

(7) 第Ⅱ－3号住居址　カマド内出土

底部の一部（見込みの部分の6分の1）が残存する。復元底径9.5cmを測る。内外面に水引き調整のあとが残る。底面にはヘラ切りのあとが残る。色調は褐色を呈する。器表に炭素粒が付着することから、二次焼成をうけたことが解る。胎土は良好である。

(8) 第Ⅰ－2号住居址　覆土中より出土

口縁の一部が残存する。内外面に赤色顔料を化粧がけしている。非常に磨滅しているため、頻繁に使用されていたと推測される。胎土及び焼成は良好である。

(9) 第Ⅰ区出土　一括資料

底部のみ残存する。底径9.3cmを測る。焼成があまく、軟質であるため磨滅が非常にはげしい。色調は黄褐色を呈する。胎土は緻密である。

(10) 第Ⅳ区出土　一括資料

底部のみ残存する。底径9.5cmを測る。内面には水引きのあとが残る。底面にはヘラ切りのあとが残り、回転ヘラ削による整形をしたように見える。胎土及び焼成は良好である。

(11) 第Ⅶ区出土　一括資料

底部の3分の1が残存する。復元底径11.8cmを測る。外面は赤褐色を呈し、内面は明褐色を呈する。底面にはヘラ削りのあとが残る。胎土及び焼成は良好である。

⑿　第Ⅳ－６号住居址出土　覆土中一括資料

底部のみ残存する。底径9.3cmを測る。内外面に水引き調整のあとが残る。底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土中に石英分の多い小礫（最大径0.6cm）を少量含む。

⒀　第Ⅳ－２号住居址出土　覆土中一括資料

底部の一部が残存する。復元底径9.6cmを測る。底面にはヘラ切りのあとが残る。色調は黄褐色を呈する。きわめて軟質であり、焼成があまい。胎土は緻密であり、良質の粘土を使用している。

⒁　第Ⅳ－６号住居址出土　覆土一括資料

底部の一部が残存する。復元底径10.4cmを測る。内外面に水引き調整のあとが残る。底面にもヘラ切りのあとが残る。胎土中に石英質の礫（最大径0.7cm）を含む。器表が磨滅しており、非常に頻繁に使用されたと推測される。

⒂　第１区Ｄ—11グリッドの９より出土

底部と立ち上り部の小片のみ残る。復元底径7.5cmを測る。外面には水引き調整のあとが残る。また、外面に赤色顔料を化粧がけしている。内面は磨滅しており、調整痕や顔料の化粧がけについては不明である。焼成はあまく、軟質である。胎土は緻密である。

⒃　第Ⅳ－３号住居址出土　一括資料

口径11.2cm・器高2.0cm・底径7.0cmを測る。内外面に赤色顔料を化粧がけをする。底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土は良好である。焼成はややあまく、軟質である。

⒄　第Ⅰ－３号住居址出土　覆土中より出土

全体の４分の１が残存する。復元口径12.8cm・器高2.8cm・復元底径7.4cmを測る。内外面に赤色顔料を化粧がけしている。底面にはヘラ削りのあとが残る。また、底面には墨書が見られるが、破損のため文字は判読出来ない。器表は磨滅しており、その様子から、相当使い込んでいると思われる。胎土及び焼成は良好である。

⑱　第Ⅵ－１号住居址　床面上出土

高台付の坏であろう。底部を欠失し、口縁の10分の１を残すのみである。復元口径10.1cmを測る。内外面に水引き調整のあとが残る。色調は淡い赤褐色を呈する。胎土中に赤褐色の土粒と黒色の造岩鉱物を含む。焼成は良好である。

⑲　第Ⅰ－２号住居址　覆土中より出土

復元口径12.0cm・器高3.3cm・復元底径6.3cmを測る。内外面に水引き調整のあとが残る。底面にはヘラ切りのあとが残る。色調は赤褐色を呈する。胎土及び焼成は良好である。

⑳　第Ⅰ－３号住居址　カマド内出土

全体の４分の３を欠失する。復元口径11.6cm・器高3.3cm・復元底径6.2cmを測る。内外面に水引き調整のあとが残る。見込みの部分に炭素粒が付着している。底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土及び焼成は良好である。

㉑　第Ⅳ区出土　一括資料

小片である。復元口径12.5cm・器高4.1cm底径18.3cmを測る。内外面に水引きのあとが残る。胎土中に褐色の土粒を含む。胎土は緻密であり、焼成は良好である。

㉒　第Ⅶ区出土　一括資料

全体の２分の１残存する。復元口径12.4cm・器高3.6cm・復元底径7.2cmを測る。内外面に赤色顔料を化粧がけする。底面にはヘラ切りのあとが残る。器壁内には気泡が見られる。胎土中に赤褐色の粒子（鉱物？）が少量見られる。胎土は緻密である。焼成はあまく、軟質である。

㉓　第Ⅳ区出土　一括資料

口径10.7cm・器高4.0cm・底径6.3cmを測る。内外面とも水引き調整のあとが残る。底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土は緻密である。焼成はあまく、軟質である。

㉔　第Ⅰ区　Ｆ－10グリッドの22より出土

口径14.0cm・器高4.0cm・底径9.9cmを測る。内外面ともに水引き調整のあとが残る。底面は

凸凹しており、ヘラ切りのあとが明瞭に残る。色調は赤褐色を呈する。胎土は緻密であり、褐色の粒子（鉱物？）と石英質の砂粒を含む。内面の立ち上り部に植物の種子のスタンプが１ヶ所残る。スタンプの形状からイネ科植物（ノギが見られる）と推定される。

２．第112図　土師器（坏・埦）

(1)　第Ⅳ－１号溝出土

底径6.0cmを測る。色調は黄褐色を呈する。底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土は緻密であり、焼成は良好である。

(2)　第Ⅰ区出土　一括資料

復元口径13.3cm・器高2.7cm・復元底径8.7cmを測る。内外面とも横ナデ調整の後に赤色顔料を化粧がけしている。底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土中に石英及び黒色の造岩鉱物が含まれる。焼成は良好である。胎土・焼成・色調及び調整の様子は下記(3)に極めて類似する。

(3)　第Ⅰ区出土　一括資料

復元口径14.9cm・器高3.5cm・復元底径10.0cmを測る。内外面とも横ナデ調整の後に赤色顔料を化粧がけしている。器壁が厚いので、ぼってりとした感じをうける。底面や口唇部の磨滅が激しいので、非常に良く使用されていたと推定される。胎土中に石英及び黒色の造岩鉱物が含まれる。焼成は良好である。

(4)　第Ⅰ－５号住居址　床面上出土

復元口径13.9cm・器高4.2cm・復元底径10.4cmを測る。内外面とも横ナデ調整の後に赤色顔料を化粧がけしている。底面及び口唇部が磨滅しているので、非常に良く使用されたと推定される。胎土中に石英と黒色の造岩鉱物を多く含む。

(5)　第Ⅵ－３号溝出土　一括資料

底径7.5cmを測る。内外面に赤色顔料を化粧がけする。底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土は良好である。焼成はあまい。

(6) 第Ⅵ区出土　一括資料

見込み部のみ残存する。底径5.7cmを測る。見込みに横ナデのあとが残る。底面にはヘラ切りのあとが残る。

(7) 第Ⅵ－１号溝出土

立ち上り部の一部を残す。復元底径6.2cmを測る。色調は黄褐色を呈する、底面にはヘラ切りのあとが残る。胎土及び焼成は良好である。

(8) 第Ⅳ区出土　覆土一括

口径11.0cm・器高4.4cm・底径5.6cmを測る。内外面に横ナデのあとが、底面にヘラ切りのあとが残る。外見は、底部に円板の粘土を貼り付けたような形状を示すが、成形法はそうではないようだ。上記６・７もこれに類似する。色調は淡い赤褐色を呈する。胎土中に黒色の造岩鉱物（角閃石？）を含む。焼成はややあまい。

(9) 第Ⅵ－１号溝出土

高台部を含む立ち上り部の小片である。復元高台の外径6.2cm・高台の高さ0.9cmを測る。高台はほぼ垂直に付く。高台の内面（天井）はゆるやかな円弧を描くようになっている。器表の磨滅が激しい。色調は黄褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成はあまく、軟質である。

(10) 第Ⅳ区出土一括資料

高台部及び口縁部を欠失する。底径6.7cmを測る。高台は垂直か少し外反ぎみに付いていたと推定される。見込み部の器面荒れが激しいが、内外面に横ナデ調整のあとが残る。胎土中に砂粒を多く含む。焼成は良好である。

(11) 第Ⅳ－１号溝出土　一括資料

高台部及び口縁部を欠失する。底径7.3cmを測る。器壁が厚く、ぼってりとしたつくりである。高台の剝ぎ取れた後も凹凸の部分を磨滅らして安定を良くして再利用出来るように加工している。元の形状は上記10とよく類似していたと思われる。色調は黄褐色を呈する。胎土及び焼成は良好である。

(12)　第Ⅵ区　E—12グリッドより出土

高台を含む立ち上り部の小片である。高台の復元径8.2cm・高台の高さ0.7cmを測る。内外面に横ナデ調整のあとが残る。器壁がやや厚ぼったい感じをうける。外面には炭素粉が付着している。割れ口には付着していないので、破損する以前に炭素が付着したことは明らかである。胎土及び焼成は良好である。

(13)　第Ⅶ区出土　一括資料

見込み部の破片である。高台の外径8.0cm・高台の天井の高さ0.7cmを測る。高台の天井部(坏の底面）にヘラ切りのあとがよく残っている。また、底面から立ち上り部にかけて、ヘラ削りによる調整がなされている。このことから、底面から屈曲部にかけてヘラ削りによる調整を施した後に高台部を取り付けたと思われる。器形の調整は非常に良く行なわれている。見込み部は磨滅しており、非常によく使用されていたと推測される。内外面には赤色顔料を化粧がけしている。胎土は極めて良好である。焼成もまた良好である。

(14)　第Ⅳ—６号住居址出土　覆土一括資料

見込み部が残存する。高台の一部は剝落して、欠失する。高台の外径8.2cm・高台の高さ0.6cmを測る。高台はほぼ垂直に付くが、端部（畳付け）の部分が少し外反する。見込みの部分には、横ナデのあとと赤色顔料を化粧がけした赤色の顔料が残る。胎土中には赤褐色の土粒を点々と含む。胎土及び焼成は良好である。

(15)　第Ⅳ—６号住居址出土　覆土一括

底部の小片である。高台の復元外径12.6cm・高台の高さ0.6cmを測る。見込み部に赤色顔料を化粧がけしているので、内部一面に赤色顔料を化粧がけしていたと思われる。高台の天井部(坏の底面）にはヘラ切りのあとが残る。高台の端部（畳付け）は外反する。胎土は緻密であり、赤褐色の土粒（褐鉄鉱？）を含む。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

(16)　第Ⅶ—１号道路上土器溜より出土

底部のみ残存する。高台の外径12.8cm・高台の高さ0.5cm（中央部0.3cm）を測る。高台の外面に強く陵をもつ。高台の内面は内方に彎曲している。高台の付き方は断面を見ると「ハ」の字形になる。畳付けの部分が非常に狭く0.1～0.2cmである。胎土は緻密である。胎土の土色は

淡い赤褐色（ハダ色とも言える様な色調）を呈する。底面（高台の天井部）にはヘラ切りのあとが残る。焼成はあまく、軟質である。

(17)　第Ⅳ区より表採（表土排除中）

高台部は完全に残るが、口唇部は一部残存するのみである。復元口径11.8cm・器高5.7cm・高台外径6.7cmを測る。内外面に横ナデ調整のあとが残る。見込み部には指で押圧したあと横ナデを施す。高台を貼り付けた後、取り付けぎわを強く横ナデを施している。高台はほぼ垂直に付く。器表にはネズミの歯型（？）が残る。色調は赤褐色を呈する。胎土及び焼成は良好である。

(18)　第Ⅳ区より表採（表土排除中）

高台の半分を残す。見込み部はほぼ全体が残る。高台の外径8.3cm・高台の高さ1.2cmを測る。器表に横ナデ調整のあとが残る。色調は明褐色であるが、一部に黒褐色（焼成のつごう上）の部分がある。胎土には黒色の鉱物を含む。

(19)　第Ⅳ区出土　一括資料

高台部の一部が残存する。高台の復元外径8.8cm・高台の高さ1.4cmを測る。高台の天井部（坏の底面）にはヘラ切りのあとが残る。他の面には横ナデのあとが残る。胎土及び焼成は良好である。

(20)　第Ⅳ区より表採（排土中）

見込み部は、ほぼ完全に残る。高台部の半分を欠失する。復元高台径8.2cm、高台の高さ1.2cmを測る。器表には横ナデ調整のあとが残る。色調は明褐色を呈する。胎土中に黒色鉱物を含む。

(21)　第Ⅳ区より表採（表土排除中）

全体の約５分の１が残存する。復元口径14.3cm・器高7.0cm・高台の外径9.9cm・高台の高さ1.4cm（中央部は低くなる）を測る。外面には横方向に研磨されたあとが残る。内面は黒色を呈する。外面は黄褐色を呈する。いわゆる黒色土器（内黒）の碗である。胎土は非常に緻密である。

㉒　第Ⅰ－１号住居址　床面上出土

口縁部から胴部にかけての小片である。高台付の碗と推定される。復元口径15.9cmを測る。内外面に赤色顔料を化粧がけする。器表の磨滅が激しい。胎土は緻密である。二次焼成をうけている。

第113図　土師器（坏・盤・鉢・壺・甑）及び瓦

(1)　第Ⅰ－１号住居址　カマドより出土

坏の破片と推定されるが、立ち上りや器壁の断面の様子から他の器種も考えられる。復元口径15.2cmを測る。器表の磨滅がはげしい。胎土中に赤褐色の土粒（造岩鉱物？）および黒色の造岩鉱物（角閃石？）を含む。

(2)　第Ⅱ－１号住居址　覆土中出土

全体の５分の１を残す。復元口径14.3cm・復元器高4.7cmを測る。外面のみ赤色顔料を化粧がけしている。外面の立ち上り部（屈曲部）より上方は、強く押さえたようにして水引き調整を行なっている。また、それより下方は、ヘラ削りによる調整がたんねんに施されている。削りは、器の底部を上方にして左手に持ち、ヘラを右手に持って、廻しながら左前方から手前に引くようにして削ったと思われる。胎土中に黒色の造岩鉱物・花崗岩の砂粒と思われる物を含む。胎土の色調は黄褐色を呈する。

(3)　第Ⅱ－１号住居址　床面上より出土

全体の２分の１弱を残す。口径16.5cm・器高4.0cmを測る。内外面全面にわたって、化粧がけしている。内面と外面の立ち上がり部（屈曲部）より上方に、水引き調整のあとが残る。器形調整及び胎土は上記２にきわめて類似する。

(4)　第Ⅳ－２号住居址出土

盤の破片である。復元口径21.9cmを測る。外面の口縁部は水引き調整が、それより下方は回転ヘラ削りが施され、その後、赤色顔料を化粧がけしている。内面は水引き調整の後、赤色顔料を化粧がけしている。胎土は明るい赤褐色を呈し、胎土中に石英粒を含む。焼成は良好である。

(5) 第Ⅶ区出土　一括資料

無頸壺であり、底部を欠失する。口径9.9cm・胴部最大径20.3cmを測る。器高は不明である。外面の口縁部から胴部にかけて、研磨痕（ヘラ研き）が見られ、胴部以下にはヘラ削りのあとが残る。内面の口縁より胴部にかけて、横ナデの調整のあとが残る。内面の底部近くには、ナデ調整のあとが残る。色調は赤褐色を呈する。胎土は緻密であり、焼成は良好である。

(6) 第Ⅱ－6号住居址出土

底部の一部が不明である。口径16.7cm・最大胴部径21.9cm・器高18.0cmを測る。口縁部付近は、内外面ともに横ナデ調整がなされている。外面はハケ調整の後、ていねいにナデ調整を行なっている。また、外面の底部から胴部にかけては、ナデ調整の後に、研磨したようになめらかになっている。外面には、赤色顔料を化粧がけをする。内面は、ヘラ削りによる調整が施されている。胎土中に石英分の多い砂粒を含む。焼成は良好である。

(7) 第Ⅳ区出土　一括資料

器種不明である。(小型の壺の可能性がある。) 底部のみ残存する。底面径6.2cmを測る。内外面にはナデ調整のあとが残る。製作が非常に粗雑であるように見える。胎土及び焼成は良好である。

(8) 第Ⅵ－1号溝中より出土

平瓦の小片（7cm×11cm）と思われる。表面には布目が、裏面には平行敲きのあとが残る。平瓦にしては、カーブが急であり、丸瓦にしてはカーブがゆるやかに思える。色調は灰青色を呈する。胎土及び焼成は良好である。

(9) 第Ⅰ区H－7グリッドの4　第Ⅱ層下面出土

土師器の胎土と類似する塊片である。カベ土か土器製作中の不用の土塊をもぎ取ってすてた物が焼きしまったもののように見える。

(10) 第Ⅰ区H－7グリッドの3　第Ⅱ層下面出土

上記9と近接した位置から出土した。土師器の胎土と類似する塊片である。表面には、指や爪のあとと推定される窪みが残る。形状は、土器製作用の土をもぎ取ったような状態である。

胎土中に白色の土粒と赤褐色の鉱物粒（？）を含む。焼成は良好である。

(11) 第Ⅰ－３号住居址　覆土中出土

甑の取手である。胎土中に白色の砂粒が点々と混る。色調は黄褐色を呈する。胎土及び焼成は良好である。甑の胴部に強く粘土塊を押し付けて、その後、ねじり上げるようにして取手の部分を整形している。

(12) 第Ⅱ区０－６グリッドより出土　一括

甑の取手である。胎土中に白色の砂粒を含む、取手の取り付け部より剝離している。胎土及び焼成は良好である。上記11と類似する。

４．第114図　土師器（甑・甕）

(1) 第Ⅱ－１号住居址出土

甕又は甑の口縁部から頸部にかけての破片である。復元口径23.3cm・復元口縁部最大外径24.4cmを測る。口縁部の内外面には横ナデ調整を施す。外面の頸部より下位にはハケ調整を施す。内面の頸部以下にはヘラ削りを施す。外面の頸部付近には煤が付着する。色調は明褐色を呈する。

(2) 第Ⅳ－２号住居址出土　一括資料

甑の口縁部から肩部にかけての破片である。復元口径32.0cmを測る。口縁部の内外面と外面の頸部には横ナデ調整のあとが残る。外面の頸部より下方にハケ調整のあとがうっすらと残る。器面はかなり磨滅している。内面の頸部以下にはヘラ削りが施されている。色調は淡い褐色を呈する。胎土中に石英と黒色の造岩鉱物を含む。

(3) 第Ⅱ－１号住居址　床面上より出土

口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径32.9cmを測る。口縁部の内外面及び頸部外面に横ナデ調整のあとが残る。外面の頸部より下方にはハケ調整を施す。内面の頸部以下にはヘラ削りによる調整を施す。ていねいな調整がなされているため、器壁の厚みの変化がなめらかである。取手は、牛の角状の粘土塊を胴部に貼付けた後、接合部周辺に、他の粘土を補足し

て取り囲むように強く指で押さえ付けて貼り付けている。その後、本体と取手の間がなめらかになるようにハケで調整している。色調は褐色を呈する。胎土中に砂粒（石英・長石）を少量含む。

(4) 第Ⅰ－5号住居址出土

口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径31.2cmを測る。口縁部の内外面及び頸部の外面には横ナデ調整を施す。内面の頸部より下方にはヘラ削りによる調整を施す。取手の胴部への貼り付けは、内外面から指で強く粘土塊を押し付けるようにしている。取手を胴部に貼り付けた後に、牛の角状に粘土塊をねじり上げるようにして整形したと思われる。色調は明褐色を呈する。胎土中に石英の多い砂礫（最大径0.6cm）を含む。

5．第115図　土師器（甕）

(1) 第Ⅰ－5号住居址　床面上出土

口縁部から胴部にかけての破片を残すのみである。復元口径23.5cmを測る。頸部から口唇部にかけて、内外面ともに横ナデ調整を施す。頸部から下方の外面には、ヘラによる研磨の後、赤色顔料を化粧がけする。内面の頸部より上方にも赤色顔料を化粧がけする。内面の頸部より下方はヘラ削りを行っている。器壁の厚さは、頸部の方が厚く、胴部が薄くなる。胎土及び焼成は良好である。

(2) 第Ⅶ－1号道路上　土器溜り出土

口縁の約5分の1を残す。復元口径24.3cmを測る。赤色の顔料を外面及び内面の頸部から口唇部にかけて化粧がけする。外面の口縁部から頸部の約5cm下方（肩部）までは、横ナデによる調整痕が残る。それより下方には、ハケによる調整のあとがうっすらと所々に残る。このことから、ハケ調整の後、ナデ調整を行った後に化粧がけを施すことがわかる。口縁部の内面には横ナデによる調整痕が残る。頸部以下の内面にはヘラ削りによる調整痕が残る。胎土中には石英の多い砂粒を含む。焼成は良好である。

(3) 第Ⅳ－2号住居址　床面上出土

口唇部から頸部にかけての破片である。復元口径29.8cmを測る。外面の口縁部から頸部にかけて横ナデ調整を施す。口縁部の内面にも横ナデ調整のあとが残る。頸部より下方の内面には

ヘラ削り調整のあとが残る。色調は黄褐色を呈する。胎土中に白色の砂粒及び黒色の鉱物を含む。焼成は良好である。

(4) 第Ⅶ区より出土　一括資料

口縁部の破片である。復元口径24.4cmを測る。外面及び口縁部の内面には、赤色顔料を化粧がけする。口縁の内面及び外面には横ナデ調整のあとが残る。頸部より下方の内面にはヘラ削りを施す。口縁部は胴部に比較して薄く、頸部の粘土を引きずり上げるようにして整形したと思われる。胎土中に白色礫（径0.3～0.6cm・石英？)･黒色造岩鉱物・雲母（？・金色に輝く）を含む。焼成は良好である。

(5) 第Ⅰ－３号住居址出土　埋土中

口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径22.7cmを測る。口縁部の内外面は横ナデ調整が施され、その上に赤色顔料を化粧がけされている。しかし、この部分は使用のために磨滅し、赤色顔料は剝落している。外面の頸部以下には、ハケ調整がなされており、その上に赤色顔料を化粧がけしている。胴部に化粧がけした赤色顔料は部分的に剝落しており、このことから、おそらく煮炊に利用したと推定される。頸部以下の内面にはヘラ削りのあとが明瞭に残る。胎土中に砂粒を多く含む。焼成は良好である。

６．第116図　土師器（甕）

(1) 第Ⅶ－１号道路上土器溜一括資料

口縁部から頸部にかけての破片である。復元口径21.3cmを測る。口縁部は厚く、強く外反する。口縁部の内外面及び頸部下方の外面にはナデ調整が施されている。また、同所には、赤色顔料を化粧がけされている。内面の頸部以下には、ヘラ削りのあとがよく残る。胎土中に白色の砂粒及び黒色の造岩鉱物を含む。焼成はあまく、やや軟質である。そのためか、磨滅している。

(2) 第Ⅰ－１号住居址　床面上出土

口縁部から肩部にかけての破片である。復元口径23.9cmを測る。口縁部の内外面及び頸部の外面には、横ナデ調整のあとが残る。肩部以下の外面にはハケ調整のあとが残る。内面の頸部

以下はヘラ削りが施されている。器壁の厚さは、頸部より胴部が薄くなる。胎土中に白色の砂粒を多量に含む。器外に煤が付着していることから、煮炊に利用されていたことが解る。

(3) 第Ⅱ－5号住居址出土　一括資料

口縁部から肩部にかけての破片である。復元口径24.2cmを測る。頸部より上部は、内外面ともに水引きのあとが残る。頸部より下方の外面にはハケ調整のあとが残り、内面にはヘラ削りがていねいになされているあとが残る。胎土中には白色の砂粒を多く含む。

(4) 第Ⅶ区出土　一括資料

口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径22.8cmを測る。口縁部の内外面及び外面には横ナデ調整のあとが残る。同所には、横ナデ調整を施した後、赤色顔料を化粧がけする。内面の頸部より下方には、左上方から右下方へヘラ削りのあとが残る。口縁部の形状は、頸部の粘土を斜上方に引きずり上げたような形を呈する。肩部はなで肩となり、最大径の部位が下方に移る。器壁の厚さは、頸部より胴部が急激に薄くなる。胎土の色調は明褐色であるが、内面が黒色を呈する部分がある。これは焼成時にこのように変化したのであろう。胎土中に砂粒を含む。

(5) 第Ⅷ区出土　一括資料

口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径23.0cmを測る。口縁部の内外面及び頸部には横ナデ調整の後、赤色顔料を化粧がけする。外面の頸部より下方（胴部・肩部）では、横方向や縦方向に荒々しく研磨した後に、赤色顔料を化粧がけしている。内面の頸部以下には、中広のヘラによる削りが上方より下方になされている。胎土中には黒色の細長い鉱物(角閃石？)と砂礫を含む。

7．第117図　土師器（甕）

(1) 第Ⅱ－6号住居址　床面上出土

口縁部のみの小片であるので断面図のみ掲示する。口縁部の内外面ともに横ナデ調整が施されている。色調は黄褐色を呈する。胎土中に黒色の造岩鉱物及び白色の砂粒（石英？)を含む。焼成は良好である。

(2)　第Ⅳ－２号住居址出土　一括資料

口縁部のみの小片であるので断面図のみ掲示する。口縁部の内外面には横ナデ調整が施されている。胎土中に少量の石英粒を含む。

(3)　第Ⅶ区出土　一括資料

口縁部のみの小片である。復元口径22.3cmを測る。口縁部の内外面には横ナデ調整が施されている。胎土中に白色の砂粒が見られる。焼成は良好である。

(4)　第Ⅰ区出土

口縁部から胴部上半部までの破片である。復元口径23.7cmを測る。口縁部の内外面及び頸部には横ナデ調整のあとが残る。胴部の外面は使用による磨滅と火を受けたために剝離が激しい。剝離をしていない部分にはナデ調整（縦方向と横方向あり）のあとが観察される。胴部の内面にはヘラ削りを施す。胎土中に石英分の多い白色の砂粒と黒色の造岩鉱物を含む。

(5)　第Ⅶ－１号道路上土器溜より出土

口縁部から胴部上半部の破片である。復元口径28.5cmを測る。口縁部の内外面及び頸部の外面には横ナデ調整のあとが残る。胴部の外面にもナデ調整（縦方向と横方向あり）のあとが残る。口縁部は頸部の粘土を引きずり上げたような形に整形しており、その外側に粘土をつぎ足して厚みを調整している。内面の頸部以下はヘラ削りを施しており、頸部と胴部とでは削りの方向が逆になっている。肩の張りがほとんどなく、深鉢状を呈すると思われる。胎土中に石英の多い砂粒を含む。

(6)　第Ⅶ－１号道路上土器溜一括資料

口縁部の破片である。復元口径24.6cmを測る。口縁部の内外面に横ナデ調整のあとが残る。内面の頸部以下にはヘラ削りを施す。胎土は緻密であり、褐色の土粒を含む。色調は淡黄褐色を呈する。

(7)　第Ⅶ－１号道路上土器溜一括資料

口縁部の２分の１を残す。復元口径26.8cmを測る。口縁部の内外面に横ナデ調整のあとが残る。胴部外面はハケおよびナデ調整を施す。内面の頸部以下はヘラ削りによる調整を施す。

(8) 第Ⅱ－1号住居址出土　床面上出土遺物（一括資料）

全体の3分の2を残す。口径13.2cm・口縁部最大径14.3cm・胴部最大径11.8cm・器高9.7cmを測る。口縁部の内外面及び外面の頸部から肩部にかけて横ナデ調整のあとが残る。外面の胴部以下は火を受けて剥離が激しい。剥離していない部分には、胴部から底部にかけて、ヘラ削りによる調整のあとが観察される。内部の頸部以下に強くヘラ削り調整したあとが残る。このヘラ削りのあとから、当小型甕を左手に持ち、右手にヘラを持って、左下から右上へ削り上げたと推定される。器の大きさと比較して器壁は厚く、厚ぼったい感じをうける。色調は赤褐色を呈する。胎土中に砂粒を多く含む。砂粒の造岩鉱物は、色及び形状から、角閃石・長石・石英と思われる。

(9) 第Ⅱ区0－6グリッド一括資料

口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径14.7cm・復元胴部最大径15.2cmを測る。煮炊に用いられたと推定され、器面の荒れが激しい。口縁部の内外面及び頸部の外面には横ナデ調整のあとが残る。外面の肩部以下にもナデ調整のあとが残る。内面の頸部以下には荒々しいヘラ削りが施されている。胎土中に少量の砂粒を含む。

8．第118図　土師器（甕）

(1) 第Ⅰ－1号住居址　カマド内出土

口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径16.8cm、口縁部最大径17.9cm・復元胴部最大径16.5cmを測る。口縁部内外面・頸部内外面及び胴部外面にはナデ調整のあとが残る。胴部内面にはヘラ削りを荒々しく施す。二次焼成を受けているため、器面が荒れている。胎土中に、白色の砂粒（石英？）・金色に輝く鉱物（雲母？）・黒色の鉱物を含む。

(2) 第Ⅶ区出土　一括資料

口縁部から肩部にかけての破片である。復元口径19.0cm・口縁部最大径20.0cmを測る。口縁部内外面及び頸部外面には横ナデ調整のあとが残る。肩部以下の外面にはハケ調整を施す。色調は黄褐色を呈する、胎土中に白色の砂粒を含む、焼成は良好である。

(3) 第Ⅱ－５号住居址　床面上出土

口縁部から肩部にかけての小片である。復元口径19.4cmを測る。口縁部内外面及び外面の頸部以下にはナデ調整のあとが残る。内面の頸部以下には、ヘラ削りを施す。ヘラ削りはていねいに施されており、内面が滑らかになっている。二次焼成をうけており、煮沸用容器としてよく利用されたと思われる。胎土中に白色の砂粒（石英）と黒色の造岩鉱物を含む。

(4) 第Ⅰ－１号住居址出土

口縁部から頸部にかけての破片である。復元口径18.2cm・復元頸部外径15.0cmを測る。口縁部の内外面及び頸部外面には横ナデ調整のあとが残る。内面の頸部以下にはヘラ削りが施される。煮沸用容器として良く利用されたと思われ、二次焼成を受けている。胎土中に白色の砂粒を含む。

(5) 第Ⅶ－１号道路上土器溜出土一括資料

口縁部から頸部にかけての小片である。復元口径21.5cmを測る。口縁部の内外面及び頸部外面には横ナデ調整のあとが残る。内面の頸部以下はヘラ削り調整を施す。胎土中に黒色の造岩鉱物（細長く黒く光る、角閃石？）・乳白色の鉱物（長石？）・半透明で灰色に見える鉱物（石英？）が含まれる。口縁部の外面には外側に粘土を貼り付けて、口唇部の厚みを調整している。色調は明褐色を呈する。

(6) 第Ⅶ区出土　一括資料

口縁部から頸部にかけての小片である。復元口径17.0cmを測る。口縁部の内外面及び頸部の外面に横ナデのあとが残る。内面の頸部以下にヘラ削りを丁寧に施す。焼成はあまく、軟質であり、磨滅が激しい。器壁は薄く、丁寧なつくりである。色調は淡い赤褐色を呈する。

(7) 第Ⅱ－４号住居址　床面上より出土

全体のほぼ２分の１を残す。復元口径12.9cm・復元最大口径13.9cm・復元頸部外径11.4cm・復元最大胴部外径12.5cm・器高12.7cmを測る。口唇部は丸く玉縁状を呈する。口縁部の内外面及び頸部外面には横ナデ調整を施す。外面は、火を受けて、剝離がはげしい。胴部下位の外面にハケ調整のあとが残る。底面は使用による磨滅が激しい。内面の頸部以下には丁寧にヘラ削りを施す。胎土中には、砂粒及び黒色造岩鉱物が多く含まれる。

(8) 第Ⅱ－6号住居址　カマド内出土

ほぼ完形である。第Ⅱ－6号住居址のカマドの中央に伏せた状態で検出した。口縁部の約4分の1を欠失する。口縁部の外面と頸部の外面には横ナデ調整を行なっている。外面の肩部以下にはハケ調整を施す。内面の頸部以下には、ヘラ削りを施す。しかし、胴部の中位から低面にかけては、ヘラ削りのあとは使用による磨滅によって不鮮明になっている。器壁は薄く、丁寧な調整が施されている。色調は赤褐色を呈する。胎土中に砂粒を含むが、良質である。

(9) 第Ⅰ－9号住居址出土

口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径18.4cm・復元口縁部最大外径19.1cmを測る。口縁部の内外面及び頸部には、横ナデ調整のあとが残る。胴部外面には縦方向にハケ調整のあとが残る。胴部内面にはヘラ削りが非常に丁寧に施されている。器壁は薄く、作り方が丁寧である。煮沸用容器に用いられており、胴部外面に煤が付着している。色調は赤褐色を呈する。胎土中に砂粒を少量含む。

(10) 第Ⅳ区　E－12グリッド採集

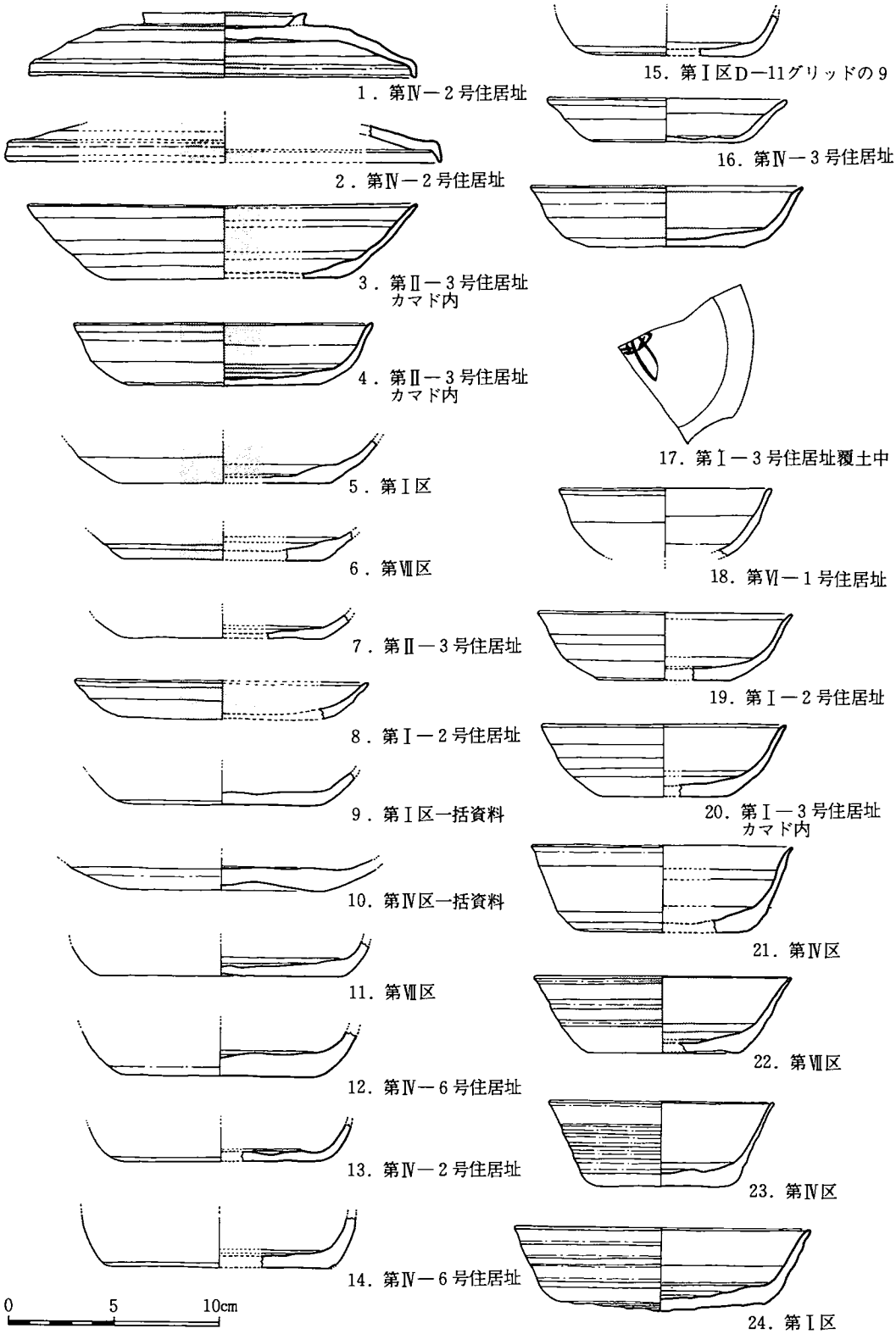
口縁部から頸部にかけての破片である。復元口径22.4cmを測る。口縁部内外面に横ナデ調整のあとが残る。外面の頸部以下に縦方向にハケ調整を施していたと思われ、わずかにハケのあとが残る。器壁は薄く、調整も丁寧である。色調は明褐色を呈する。胎土中に白色の砂粒と黒色と造岩鉱物を少量含む。

(11) 第Ⅳ－2号住居址　覆土一括資料

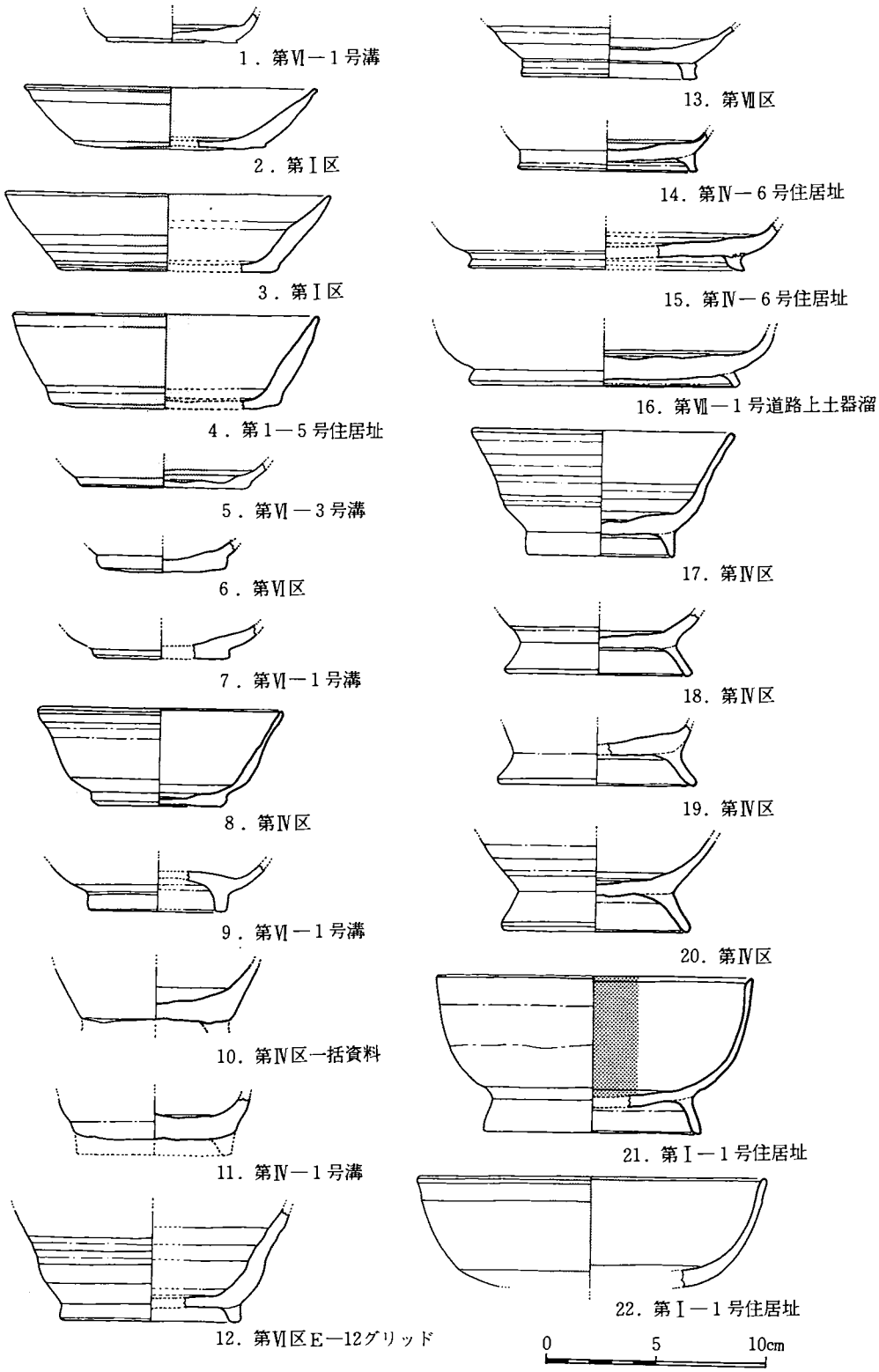
口縁部（口唇部欠失）から胴部にかけての破片（8cm×8cm）である。復元頸部外径14.3cm・推定器高12cmを測る。外面の胴部上半（胴部の屈曲部より上位）にはナデ調整が、それより下位には、丁寧に横方向のヘラ削りが施される。胎土は極めて緻密である。色調は赤褐色を呈する。焼成はあまく、極めて軟質である。

(12) 第Ⅳ－2号住居址　床面上出土一括資料

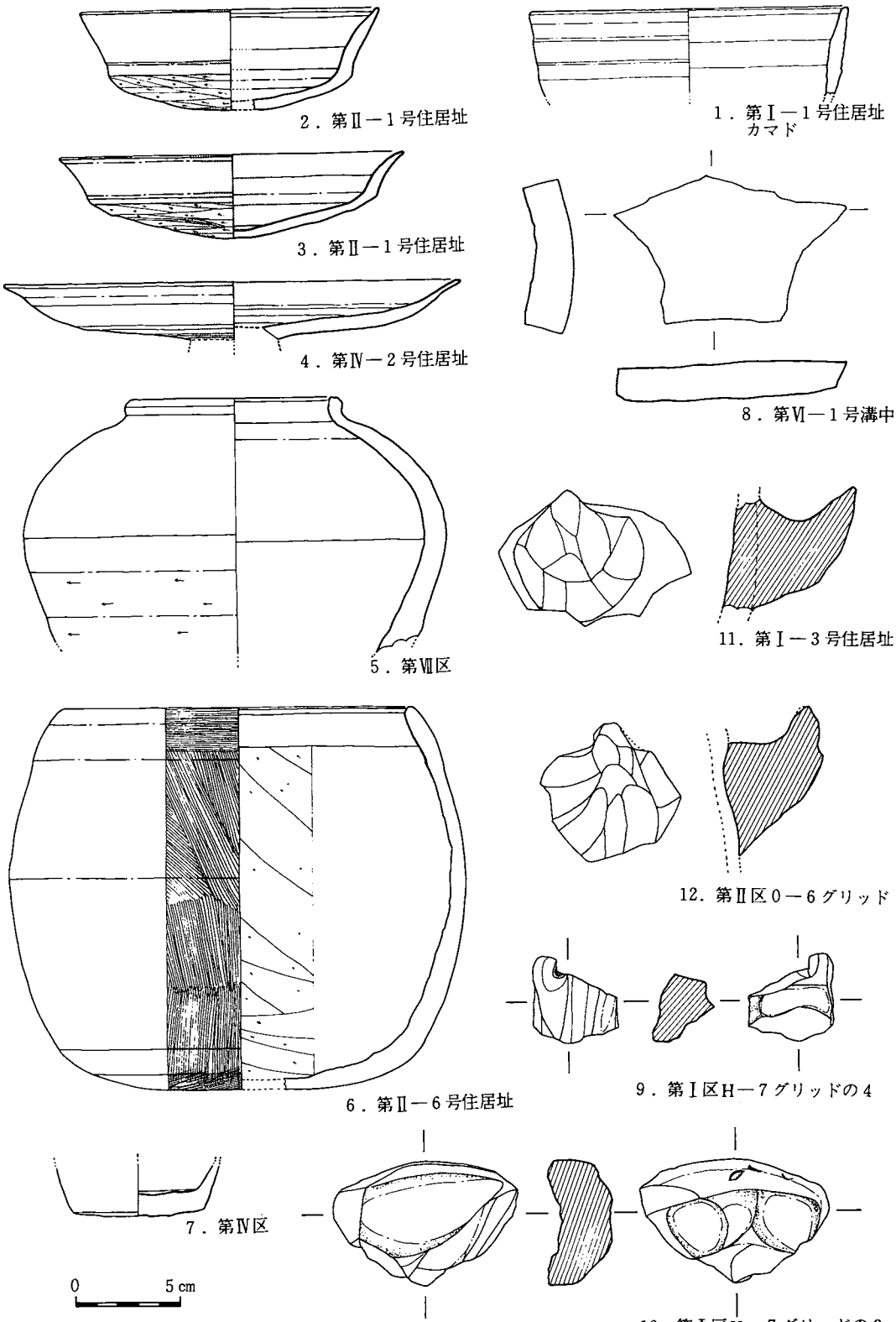
口縁部の小片である。復元口径18.4cmを測る。口縁部の内外面には横ナデ調整が施される。内面の頸部以下にはヘラ削り調整を施したと思われる。色調は赤褐色を呈する。胎土中に石英と角閃石を含む。



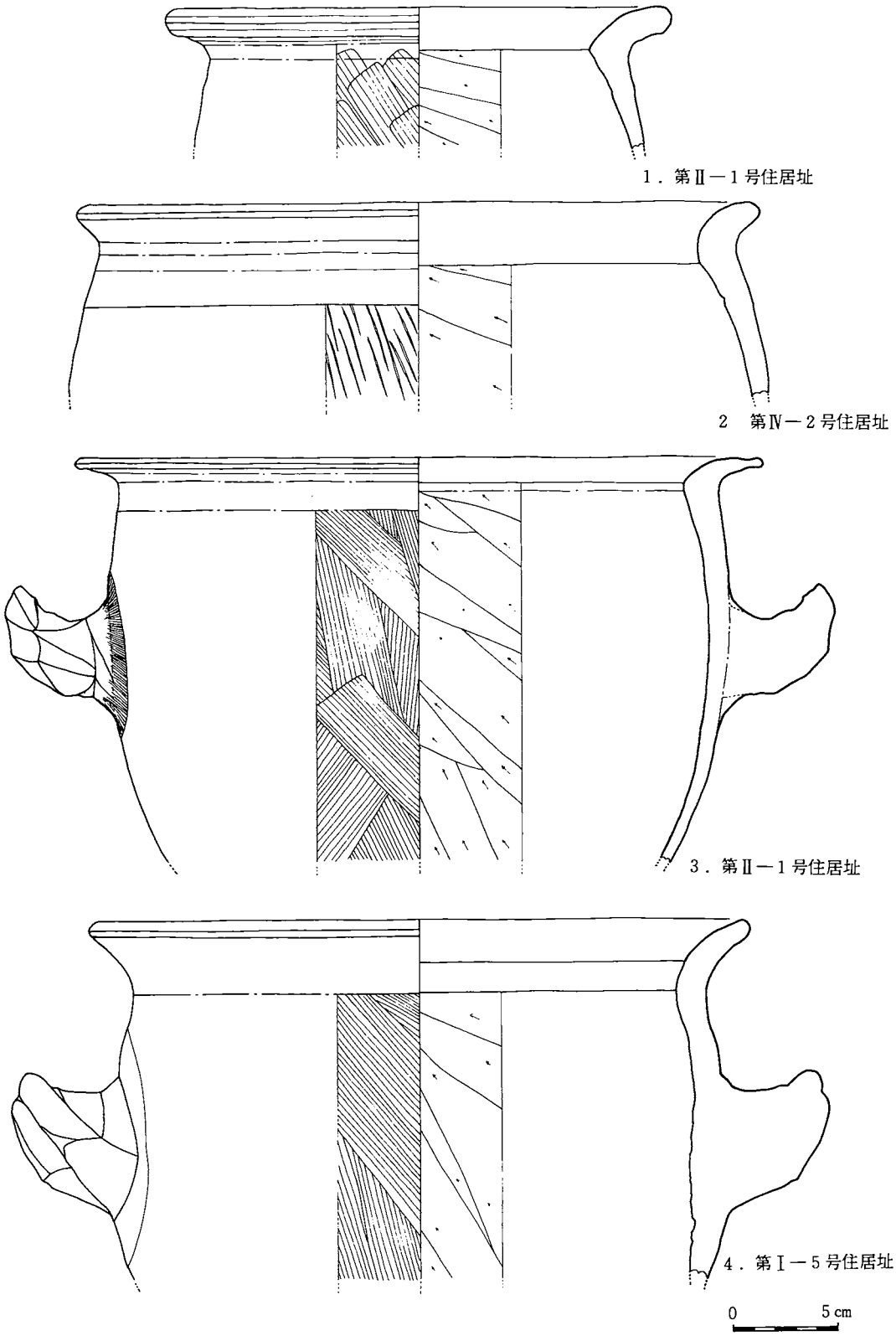
第111図　土師器(坏の蓋及び身)



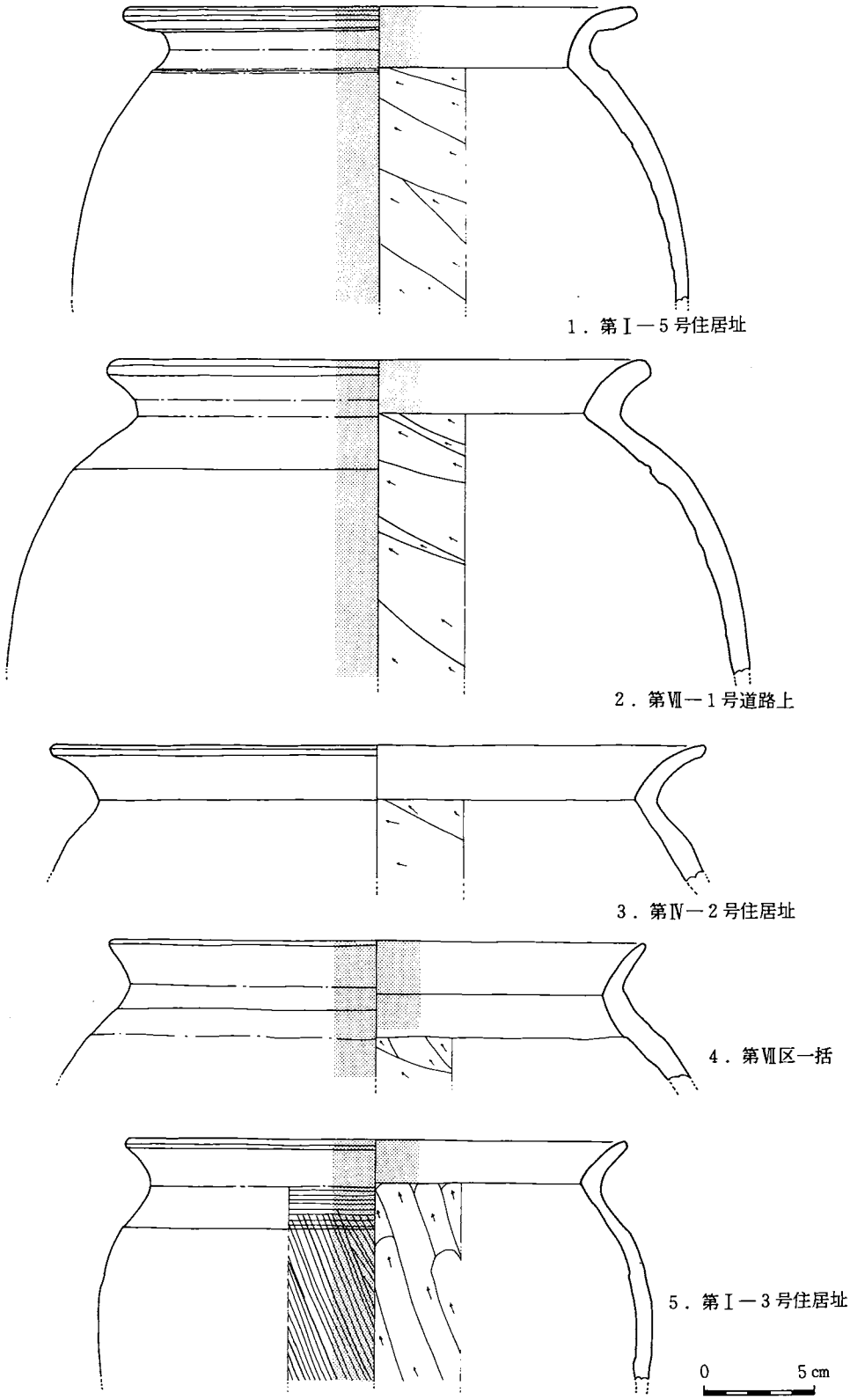
第112図　土師器（坏・皿・椀）



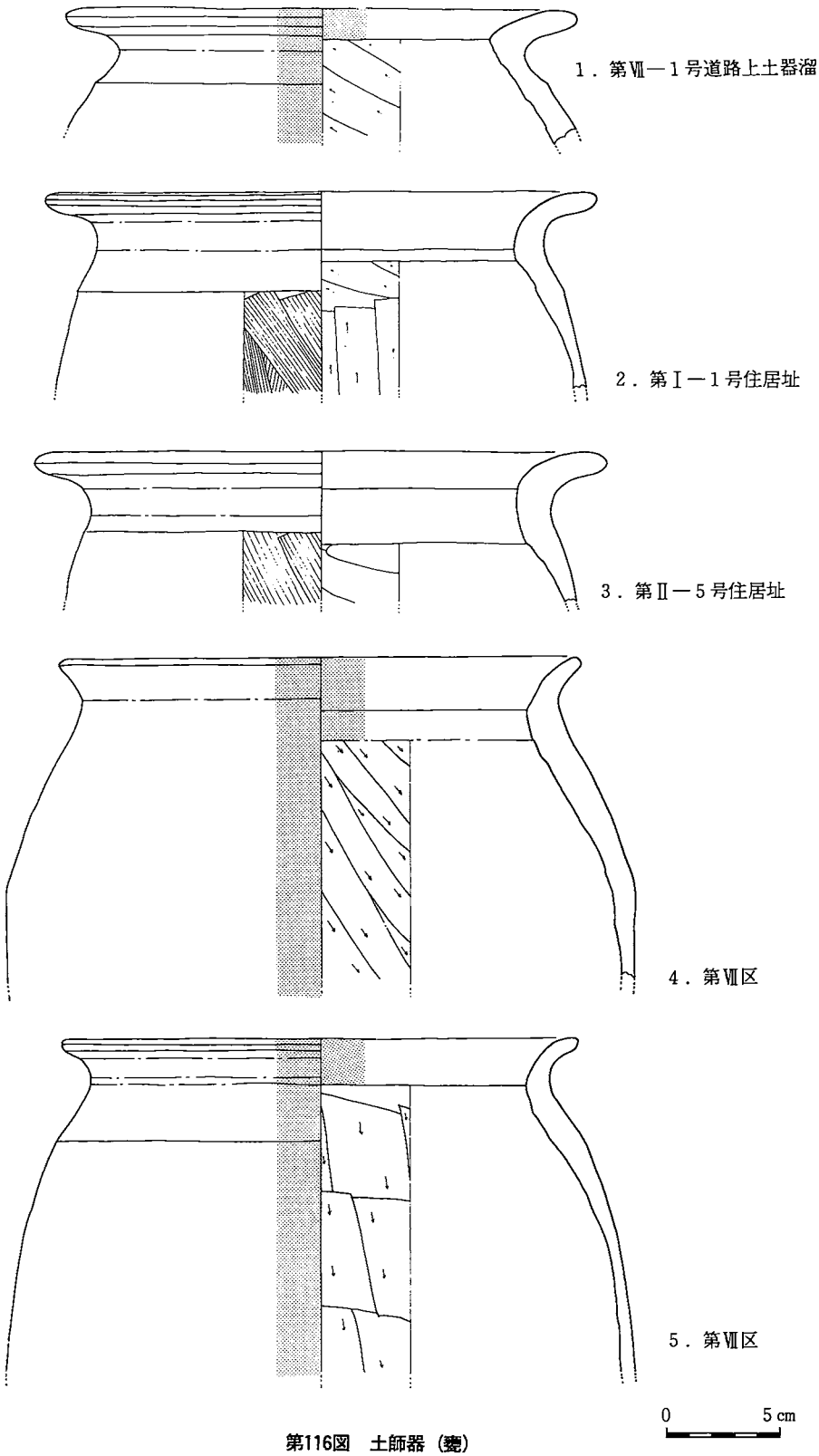
第113図　土師器（坏・盤・鉢・壺・甑）及び瓦



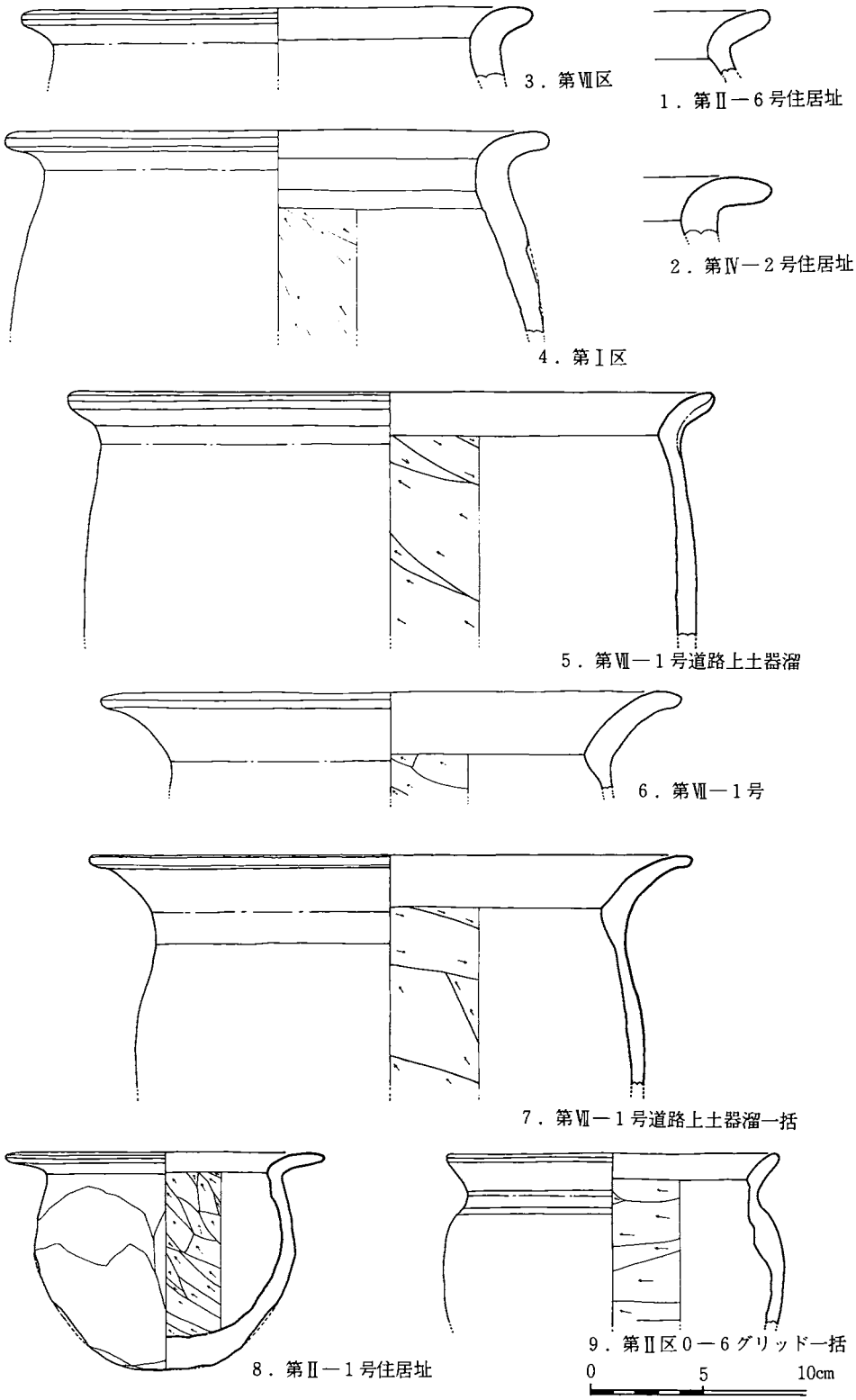
第114図　土師器（甑・甕）



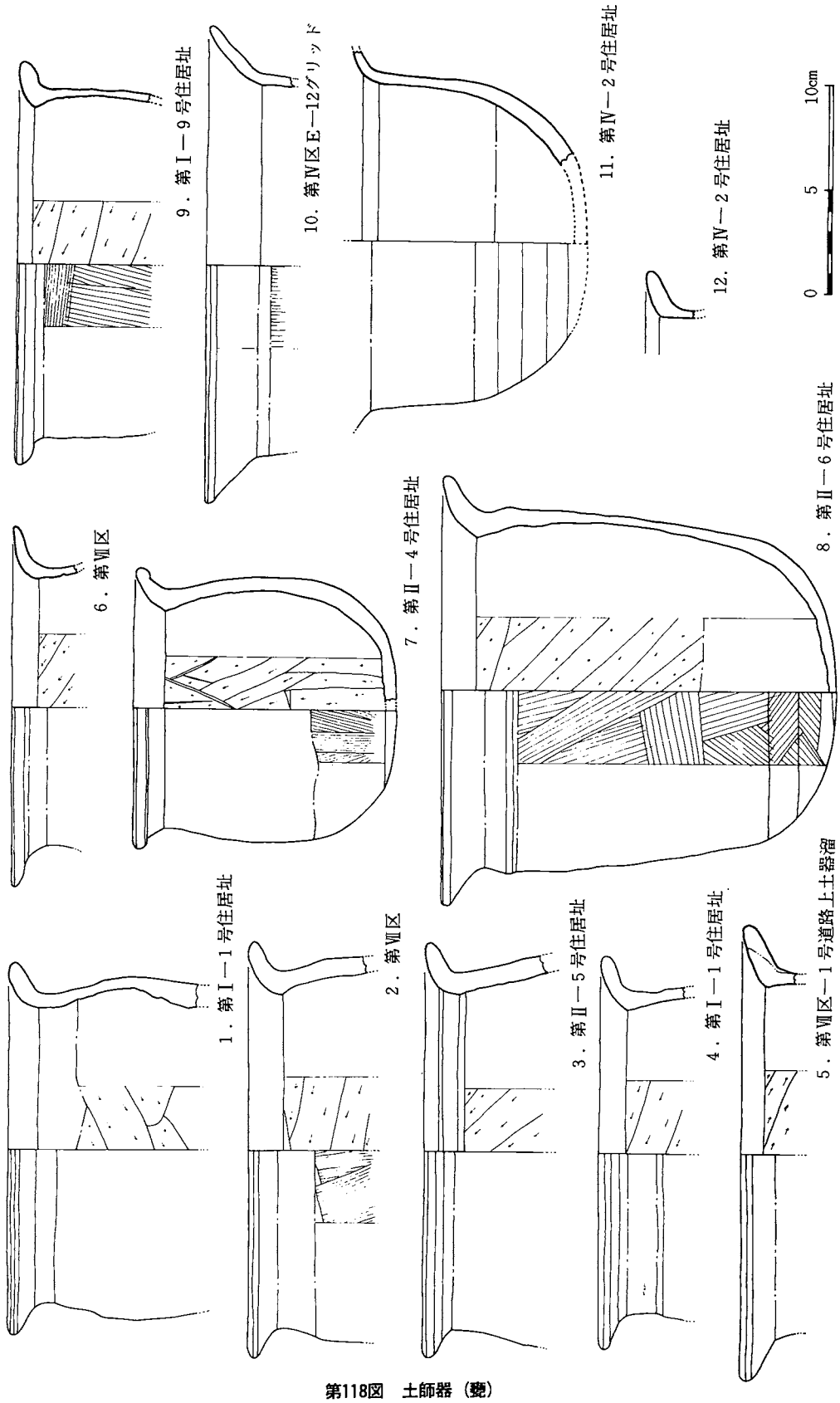
第115図　土師器（甕）



第116図　土師器（甕）


3．第Ⅶ区
1．第Ⅱ－６号住居址
2．第Ⅳ－２号住居址
4．第Ⅰ区
5．第Ⅶ－１号道路上土器溜
6．第Ⅶ－１号
7．第Ⅶ－１号道路上土器溜一括
8．第Ⅱ－１号住居址
9．第Ⅱ区０－６グリッド一括
0
5
10cm

第117図　土師器（甕）


1．第Ⅰ－1号住居址
2．第Ⅶ区
3．第Ⅱ－5号住居址
4．第Ⅰ－1号住居址
5．第Ⅶ区－1号道路上土器溜
6．第Ⅶ区
7．第Ⅱ－4号住居址
8．第Ⅱ－6号住居址
9．第Ⅰ－9号住居址
10．第Ⅳ区E－12グリッド
11．第Ⅳ－2号住居址
12．第Ⅳ－2号住居址
0
5
10cm

第118図　土師器（甕）

第２節　歴史時代の須恵器

１．第119図　須恵器（坏の蓋及び身・鉢・壺・甕）

(1)　第Ⅶ区出土・一括資料

宝珠摘を持つ坏の蓋である。宝珠の頂部は丸味をおび、摘の最大径は1.7cmを測る。蓋の天井部以外は欠失する。外面には、回転ヘラ削りの痕がよく残る。内面には、水引きによる整形の痕が観察される。焼成はあまく、内外面ともに赤褐色を呈し、一般に赤焼須恵器と呼称されるものである。胎土は良好である。

(2)　第Ⅱ－１号住居址床面上より出土

坏の蓋である。全体の約３分の１を残す。摘は持たなかったと思われる。蓋の復元径11cm・高さ1.3cmを測る。外面の上部（平担部）には回転ヘラ削りが施されており、中心部がわずかに低くなっている。外面の側縁部には、水引きによる調整がなされている。内面は、水引きによる調整がたんねんになされている。胎土及び焼成は良好であり、色調は灰青色を呈する。

(3)　第Ⅵ区５－Ｄグリッドの１区より出土

坏の蓋である。摘は持たない。蓋の径13.9cm・高さ1.2cmを測る。外面の上部（平担部）には回転ヘラ削りが施されており、周辺より中心部が0.3cmほど低くなっている。外面の側縁部には水引きによる調整がなされている。内面は、水引きによる調整がたんねんになされている。胎土及び焼成は良好であり、色調は灰青色を呈する。

(4)　第Ⅶ区出土・一括資料

二重の輪状摘を持つ壺の蓋である。須恵器の高台付きの坏に輪状摘を付けたような器形を呈する。完形であり、口径13.9cm・最大径14.2cm・器高4.0cm・内面の天井部までの高さ2.5cmを測る。二重の輪状摘のうち外輪の摘から口縁までの高さは3.6cm、内輪の摘から口縁までの高さは4.0cm、外輪の径10.8cm・内輪の径4.8cmを測る。外面の屈曲部には回転ヘラ削りの痕が、口縁部付近には水引き調整の痕が残る。内面は、ていねいに水引き調整が施されている。胎土は良好である。焼成は少しあまく、色調は黄色味を帯びた灰色を呈する。

(5) 第Ⅰ区出土　一括資料

坏の身である。口径11.5cm・器高2.8cmを測る。器壁は薄く、内外面にはていねいに水引き調整が施されている。底面には、ヘラ切りの痕跡が残る。胎土は良好である。焼成もきわめて良好である。色調は灰青色を呈する。

(6) 第Ⅰ区出土　一括資料

高台付坏の底部の残欠である。高台部の復元径8.4cm・高台の内面の高さ0.7cmを測る。高台の付く位置は、坏の屈曲部（立ち上がり部）である。内外面とも、器表に水引き調整の痕が残る。胎土及び焼成は良好である。色調は灰青色を呈する。

(7) 第Ⅰ－2号住居址の埋土中より出土

高台付坏の破片である。復元口径12.2cm・器高3.9cm・高台の外径8.0cm・高台の内面の高さ0.3cmを測る。高台の付く位置は、屈曲部（立ち上り部）より少し内側であり、垂直に付く。焼成による器形のひずみがあり、外面の屈曲部（立ち上り部）付近に集中してヒビが多く見られる。胎土には良く精製された土を使用したと思われる。焼成は良好であり、色調は灰青色を呈する。ところで、第Ⅰ－2号住居址の埋土中からは、当遺物の外に、須恵器の甕や盤の小片が出土した。

(8) 第Ⅰ－1号住居址の埋土中より出土

高台付坏の破片である。高台部の復元径7.2cm・高台の内面の高さ0.5cmを測る。高台の付く位置は、外面のほぼ屈曲部（立ち上り部）付近である。高台の接合部は内外面とも凹形になるよう強く指で押えて水引き調整がなされている。内外面とも器表には水引き調整のあとが残る。胎土及び色調は良好である。色調は灰青色を呈する。

(9) 第Ⅱ区0－6グリッド出土　一括資料

高台付坏の底部のみ残存する。高台の外径8.9cm・高台の内面の高さ0.4cmを測る。高台の付く位置は、坏の屈曲部（立ち上り部）である。高台の接合部は内外面とも凹形になるよう強く指で押えて水引き調整がなされており、高台が外反するように接合されている。胎土及び焼成は良好である。色調は灰青色を呈する。

⑽　第Ⅰ区Ｇ―14グリッド　柱穴内より出土

当遺物を出土した柱穴群は、第Ⅰ―８号住居址（弥生時代後期の住居址）を切っている。この柱穴群（第43図参照）は、３間×２間の掘建柱の建物の遺構（第Ⅰ―１号掘建柱建物遺構）と推定される。そのため、当遺物は、この建物遺構の年代を推定するための重要な手がかりとなる遺物である。

高台付坏である。口径11.2cm・器高4.4cm・高台の外径9.4cm・高台の内面の高さ0.3cmを測る。高台の付く位置は、坏の屈曲部（立ち上り部）である。高台の接合部は内外面とも強く指で押えるように水引き調整がなされており、高台は強く外反している。胎土は良好である。焼成は非常に良好であり、自然釉がかかっており、焼成によるひずみも生じている。色調は灰青色を呈する。

⑾　第Ⅵ区Ｅ―12グリッド出土　一括資料

鉢の破片である。復元口径13.0cm・最大径14.2cm・器高7.6cmを測る。器表は良く水引き調整がなされている。胎土及び焼成は良好である。内面の色調は灰青色である。外面の色調は赤褐色を呈し、器表には自然釉がかかり、一見、備前焼と見紛うような色調を呈する。

⑿　第Ⅳ区出土　一括資料

壺の胴部の破片である。小破片であるが、形状から長頸壺と推定される。胴部（肩部？）の復元最大径17.5cmを測る。内外面には水引き調整のあとが残る。胎土及び焼成は良好である。色調は赤褐色を呈し、一般に赤焼須恵器と呼ばれる遺物である。

⒀　第Ⅷ１号道路上土器溜出土　一括資料

壺の完形品である。口径12.8cm・胴部最大径22.9cm・器高24.1cmを測る。外面の口縁部から肩部にかけて、水引きによる調整痕が残る。肩部より下方には、格子目の敲き痕が残る。内面の頸部から口唇部にかけて、水引きによる調整痕が残る。頸部より下方には、青海波文の敲き痕が残る。胎土及び焼成は良好である。口縁部及び肩部は備前焼のような赤褐色の色調を呈し、自然釉がかかる。他の部分の色調は、灰青色を呈する。

⒁　第Ⅶ区出土　一括資料

甕の口縁部から頸部にかけての破片である。口径22.0cm・頸部の最小外径19.5cmを測る。頸

部より口唇部にかけて、内外面とも水引き調整が施されている。頸部より下方の外面には平行敲きが、内面には青海波文敲きのあとが残る。

2．第120図　蔵骨器

(1) 第Ⅲ区の西側隣接地表採

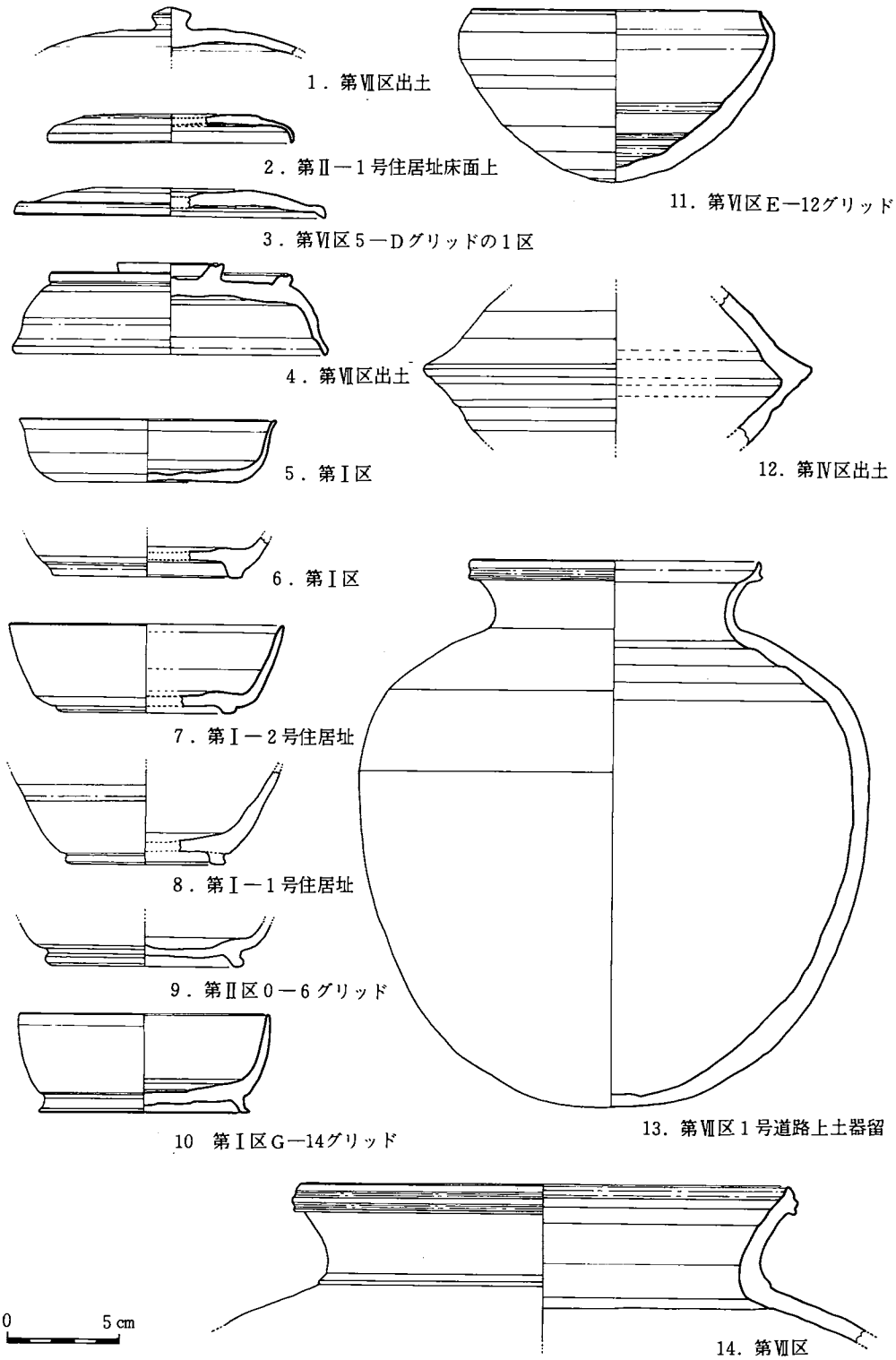
下図２の蔵骨器の蓋として再利用している。土師器の坏であり、底部のみ残存する。底径9.0cmを測る。器表に赤色顔料を化粧がけしており、うっすらと赤色顔料が見られる。内外面には横ナデによる調整のあとが残る。底面には、ヘラ切りのあとや指で押さえながらていねいになでたあとがのこる。

(2) 第Ⅲ区の西側隣接地表採

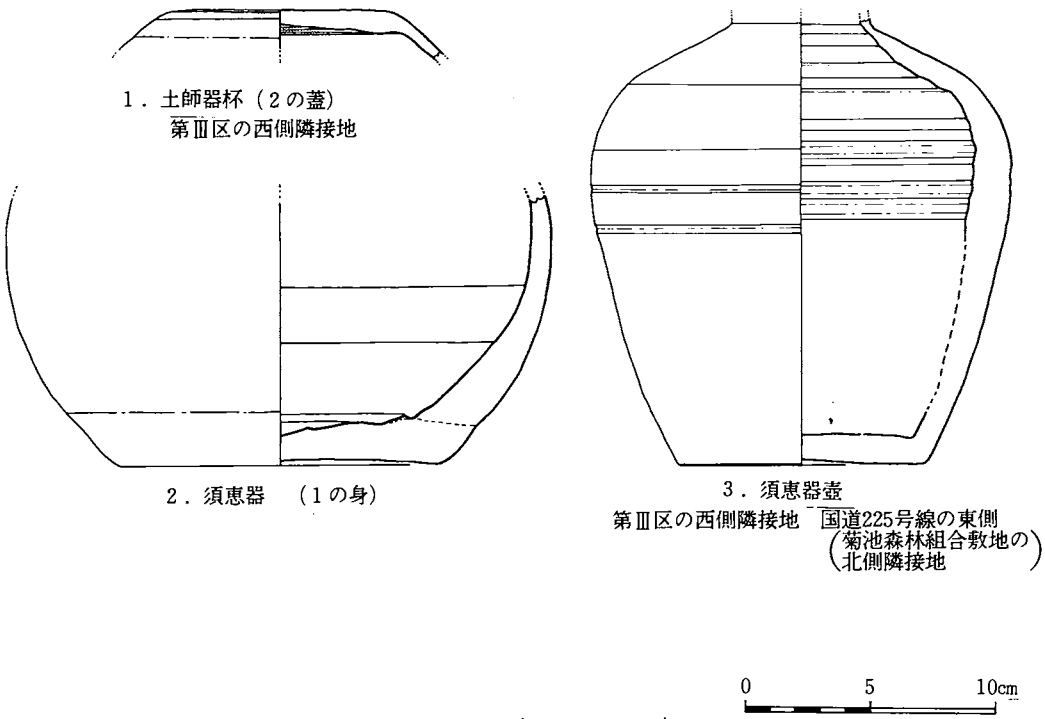
上図１とセットとなる蔵骨器の身である。須恵器の壺の胴部以下を残す。底面径13.0cm・胴部最大径22.0cmを測る。胴部の外面には平行敲きのあとが、内面には青海波状敲きのあと横ナデを行ない凹凸が少なくなるように調整したあとが残る。外面の底部の接合部は手で強く横ナデを施す。内部の底部（見込み部）から立ち上り部（胴部の下位部）にかけては、指で強くおさえて整形したのち、ナデによる調整を行なっている。底面は凹レンズ状に中央部が少し凹み底面に青海波状文の敲を行なったあとナデ調整を行なっていることが解る。器表の色調は、備前焼の様な褐色を呈する。焼成は極めて良好である。胎土も良好であり、一部に白色の砂粒を少量含む。内部に木炭粒と骨粉が残存した。

(3) 国道225号線の東側（菊池森林組合敷地の北側隣接地）より表採

須恵器長頸壺（蔵骨器）であり、頸部より上部を欠失する。底径9.9cm・肩部最大径16.8cm・頸部径5.6cm・頸部までの高さ17.4cmを測る。外面の肩部から胴部にかけて横ナデによる調整のあとが、それより以下にはヘラ削りのあとが残る。内面には横ナデ（水引き）のあとが残る。色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土も緻密であり良好である。



第119図　須恵器（坏の蓋及び身・鉢・壺・甕）


1．土師器杯（2の蓋）
第Ⅲ区の西側隣接地
2．須恵器　（1の身）
3．須恵器壺
第Ⅲ区の西側隣接地　国道225号線の東側
（菊池森林組合敷地の
北側隣接地）
0
5
10cm

第120図　蔵骨器（表採）

第３節　陶器及び磁器

第121図　陶器及び磁器（碗・皿・甕・徳利）

(1)　第Ⅳ区出土

碗の口縁から胴部にかけて、全体の４分の１を残す。復元口径19.7cmを測る。器壁の立ち上りはゆるやかであり、厚味は薄く調整されている。素地の色調は青灰色を呈する。器表は内外面とも梨子地状を呈し、ざらざらした感じを受ける。釉薬はうぐいす色を呈し、少々発色が悪いと思われる。外面の高台の接続部近くには、釉薬がかかっていない様である。越州窯の青磁と推定される。

(2)　第Ⅶ区出土（第Ⅵ－７号住居址覆土中）

碗の高台の２分の１を残す。畳付けの復元径6.3cmを測る。蛇の目高台であり、回転ヘラ削りによる削り出しのあとが良く観察できる。内面には塩目が残る。釉薬は青磁の青い釉の上に黄褐色の釉をうすくかけた様な感じに見える。釉薬の発色が部位によって異なる。素地は青灰色を呈する。上記１と器形が似ているが、立ち上りが少し異なるので別個体である。越州窯の青磁と推定される。

(3)　第Ⅵ－２号溝出土

碗の底部の破片である。畳付けの直径6.6cmを測る。高台は削り出されている。見込みには刻華（猫書き文）が見られる。釉薬の発色は非常に良好である。貫乳は大きくはいる程度で、小さな貫乳は見られない青磁である。

(4)　第Ⅳ区出土遺物一括資料

碗の底部の２分の１を残す。畳付けの直径5.3cm・見込み部の厚さ1.5cmを測る。見込みには刻花が見られる。釉の発色は極めて良好である。貫乳は大きなものが少し見られる。高台は削り出されており、厚くガッチリした感じをうける青磁碗である。

(5)　第Ⅳ区出土遺物一括資料

底部の破片である。畳付けの直径5.9cm・見込み部の厚さ1.5cmを測る。釉の色はうぐいす色

であり、軟らかい感じの色合いを呈する。器表には小さな貫乳が見られる。高台は削り出されており、高台の内面は褐色をおびる青磁の碗である。

(6) 第Ⅳ区出土遺物一括資料

水甕の底部破片と思われる。復元底径34cmを測る。備前焼によく似た色調を呈する。胎土中に白色の鉱物を含む。器表には土釉がかかり、濃い赤褐色を呈する。黒牟田焼の可能性がある。

(7) 第Ⅳ－1号溝出土

徳利の破片である。淡い黄褐色の釉がかかる。貫乳は小さく白薩摩焼の様な器表を呈する。素地は淡い黄褐色を呈する。

(8) 第Ⅵ－1号溝出土

見込み部の破片である。畳付けの径4.3cmを測る。高台部に透明の上釉が流れて固まったようになっている。外面に矢羽根状の文様を染付けしている。見込み部にも、織月状の文様が3ヶ所染付けしている。波佐美焼の碗と思われる。

(9) 第Ⅳ区表採資料

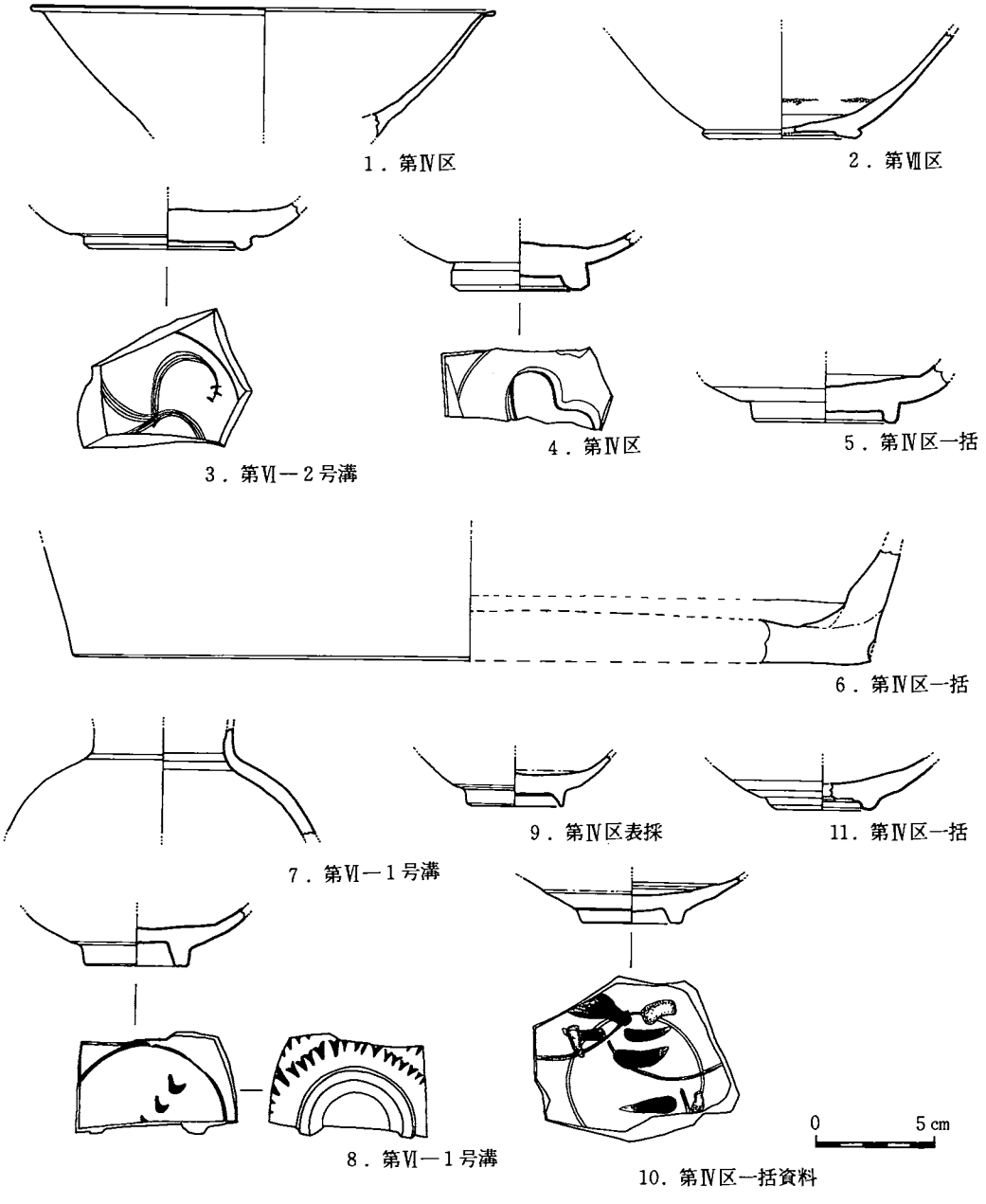
白磁の碗の破片である。くらわんか茶碗と推定される。畳付けの径4.0cmを測る。高台の内面にも釉薬がかかっている。陰になる部分にはうっすらと紅をさしたようになっている。素地は乳白色の良質の石から成っている。

(10) 第Ⅳ区出土一括資料

皿の底部のみ残る。畳付けの径4.2cmを測る。高台の内面にちりめん剝ぎが見える。見込み部には鉄釉で草華文を描き、透明な上釉をかけている。また、見込部には3ヶ所に離れ砂の跡が残る。古唐津焼と思われる。

(11) 第Ⅳ区出土遺物一括資料

皿の底部の破片である。畳付けの復元径4.1cmを測る。外面の高台及び立ち上がり部に削りのあとが残る。高台の内面にはちりめん剝が観察される。見込み部には灰釉がかかる。古唐津焼の皿と思われる。



第121図　陶器及び磁器（碗・皿・甕・徳利）

第Ⅷ章　石器及び鉄器

第1節　石　　器

1　検出した石器の概観

石器の大部分は第Ⅰ・Ⅱ調査区から出土し、採集した石器の総数は約4,000点を越える。多くの石器を出土した遺構として注目すべきは、第Ⅰ区の縄文包含層・第Ⅱ－2号住居址・第Ⅱ－1号円形周溝遺構・第Ⅱ－2号円形周溝遺構である。

第Ⅰ－6号住居址は弥生時代の竪穴式住居址であるが、この覆土の中からも石器（主に石皿）が出土した。

歴史時代の遺構であるカマド付竪穴式住居址・近世の溝遺構の覆土中からも石器が出土した。その他、表土排除中にも縄文土器と伴に石器が採集された。第Ⅰ区は茶園であり、耕作土の直下に縄文包含層があるため茶の抜根の際に根の間に取り込まれた遺物が排土中に取り込まれてしまった。

出土した主な石器は、黒曜石縦長剥片・石斧（多くは扁平打製石斧）・円板状石器・磨石・石皿である。その他、表採品であるが、石匙（安山岩製・大型・縦型1点）・石鏃（数点）・十字形石器片（片岩製・2点）がある。

石材の中で最も多く使用されているのは安山岩である。当遺跡出土の石器に使用されている安山岩の斑晶は大きく際立って良く見える。次に片岩が多い。黒曜石は縦長剥片の石材として使用されている。

2　黒曜石縦長剥片（第122図・第21表）

第Ⅰ・Ⅱ区より検出した。検出した縦長剥片の内8割は一部が欠損しており、側縁部には二次加工や刃こぼれが見られる。このことと、黒曜石剥片の縁部の鋭さから、これ等の剥片は削器として使用されていたと推測される。

剥片の大きさは、最大長2.3～7.0cm・最大幅1.0～3.5cm・厚さ0.3～1.6cmを測る。打角は70～130度の間である。打面は礫面の外平坦面（剥離面・調整打面）が見られる。

石質は漆黒を呈し均質で良質のものが多いが、中には気泡がはいっていたり、縞紋様が見える物もある。

第21表に提示した33個体の縦長剥片を観察した場合、調整剥離をあまり施していない。このことから、石核から剥片を取り出し、それをそのまま使用したと推測される。

3　打　製　石　斧

今回の調査によって250点に及ぶ打製石斧が出土した。しかも、所属時期が縄文時代後期（三万田・御領式土器）～縄文時代晩期（天城式土器）というある程度限られた時期幅の中にはいり、打製石斧の分析の上でも良好な資料といえよう。そこで、分析の視点を下記の３点に絞り、第Ⅰ形態を中心にして記述していきたい。

ａ．打製石斧の形態

ｂ．打製石斧形態別の欠損・残存状況

ｃ．打製石斧形態別の長幅比

ａ．打製石斧の形態（第129図）

伊坂上原遺跡第Ⅰ区・第Ⅱ区・第Ⅳ区の打製石斧は、刃部・側縁の状態から第Ⅰ形態～第Ⅵ形態に分類でき、さらに第Ⅰ形態がａ・ｂ・ｃの亜形態に分離可能である。

第Ⅰ形態は、円刃で側縁に抉入部を持たないもので、さらに両側縁がほぼ平行になるもの（ａ）、両側縁が平行にならないもの（ｂ）、そして両側胴部がふくらむもの（ｃ）に分類される。所謂「短冊形」と呼ばれるものに近い。第Ⅱ形態は、円刃で、両側縁に抉入部を有するものである。所謂「分銅形」に近い形状を呈している。第Ⅲ形態は、直刃でしかも片刃のもので、「トランシェ様石器」「直刃式片刃打製石斧」と呼ばれるものに近似している。第Ⅳ形態は、つまみ状の突出部が基部にみられるものである。第Ⅴ形態は、斜刃で側縁が斜めになるものである。第Ⅵ形態は、圭頭に近い形状を示すもので、側縁が斜行する。

伊坂上原遺跡の打製石斧は、以上６形態（内第Ⅰ形態に３亜形態）に分類することができる。これらの打製石斧の形態ごとの量的比率をみれば、第Ⅰ形態が95％という高い比率を示している。こうした傾向は、熊本県下の他の遺跡の状況と同様である。一方、第Ⅰ形態の三つの亜形態の量的比率では、第Ⅰａ形態（57％）・第Ⅰｂ形態（37％）・第Ⅰｃ形態（６％）という順序にある。

このような量的関係は、縄文時代後期中頃から晩期前半の打製石斧の中で第Ⅰ形態に属するものが主体的な位置にあったことを示している。さらにその中で第Ⅰａ形態及び第Ⅰｂ形態に

中心があり、それらが主体的利器として大きく機能していたものと考えられよう。

b. 打製石斧形態別の欠損・残存状況（第129図）

打製石斧の欠損及びその残存には、様々な要因が挙げられる。例えば、それが製作の過程の中で欠損した場合、使用による欠損の場合、それら人為的要因以外の要因の場合と、その判断の上で困難な複数の要因がある。その場合、打製石斧の側縁部及び刃部に残された使用痕・着柄痕の存否及び折れ面の状態そして遺跡の性格によって判断を加えることができる。

伊坂上原遺跡の打製石斧の場合、次の点より使用による欠損に属するものが多いと判断できる。

1.遺跡内に石斧の未加工品がなく、製作途中に生じたと考えられる剥片も少ない。この点より、伊坂上原遺跡では石斧製作がなされていないと考えることが妥当といえる。

2.側縁部・刃部の多くに着柄・使用に際してつけられたと考えられる「つぶれ」「すれ」が観察される場合が多い。

3.折れ面は、その風化の点で新しい状態を示していない。又、その折れの状態にかなり規則性がみうけられる。

以上３点の条件によって伊坂上原遺跡の打製石斧についてはそれらの多くが使用に係わる欠損によって廃棄されたものとみなすことにする。

さて、打製石斧の欠損残存状況は、使われた時点での使用及び着柄状態に係わるものと言える。そこで石斧の形態ごとの残存状況を見ていきたい。第Ⅰａ形態（資料数 129）では刃部を欠損した例に特に集中する傾向が強く、その比率は、全体の67％におよんでいる（基部欠損20％、完形13％）。第Ⅰｂ形態（資料数83）でも、同じ様な傾向が指摘できる（刃部欠52％、完形28％、基部欠20％）。第Ⅰｃ形態（資料数14）では、刃部欠36％、完形43％、基部欠21％の比率を示している。この第Ⅰ形態の欠損・残存状況を見れば、第Ⅰａ形態及び第Ⅰｂ形態は、刃部を欠損した状況がめだち、第Ⅰｃ形態ではその比率の差が少なくなる。

これらの事例は、第Ⅰａ・ｂ形態が刃部を欠損し、廃棄された場合が多いことを示している。そしてその刃部は、遺跡内に廃棄されず、欠損した場所に遺棄されたという想定ができようか。

c. 打製石斧形態別の長幅比（第128図）

打製石斧の長幅の比較は、使用に際して製品がどの様に仕上げられているかに係わる。すなわち、打製石斧の長さ・幅は、その重量にも少なからず関係するであろうし、その素材及びその使用目的にも係わってくる可能性がある。

第128図を参照して、伊坂上原遺跡出土の打製石斧の長幅比を見ると３：１～３：２に集中す

る傾向がある。そしてさらに、形態によってその傾向に違いが出てくる。

第Ⅰａ形態は、集中する傾向が３：１寄りにある。そしてまた、その傾向にも三つの群を見い出される。それをここでは仮りにＡ群、Ｂ群、Ｃ群としてみる。Ａ群は、長さ10.4～12.4cm幅3.9～6.0cmに集中するものである。Ｂ群は、長さ14.2～14.8cm、幅5.25～6.2cmにあるものがあたる。Ｃ群は、長さ20cm前後、幅７～８cm前後にあるものである。第Ⅰｂ形態は、３：２寄りに集まり、かつ第Ⅰａ形態の傾向と比較するとより散在する。この形態にもＡ群・Ｂ群・Ｃ群の三つのまとまりがみられる。Ａ群は長さ９～12cm、幅3.7～6.75cmに集まり、Ｂ群では長さ7.9～15.5cm、幅5.4～８cmに、Ｃ群は、長さ19cm前後、幅８～９cm附近に集中する傾向があるものである。第Ⅰｃ形態は、資料的にも少なく、大略の傾向になるが、長さ８cm前後、幅５cm前後のもの（Ａ群）、長さ７cm前後、幅６cm前後のもの（Ｂ群）、長さ11cm～14cm附近幅７～８cm前後にあるもの（Ｃ群）という傾向にある。

4　円盤状石器

円盤状石器の石材は、片岩及び板状節理の発達した安山岩である。整形は扁平打製石斧と同様な手法でなされている。確認した総数は40個体未満である。

円盤状石器の大きさは、長径6.9～11.4cm・短径6.0～10.4cm・厚さ0.9～2.5cmを測る。大多数の石器の重さは80～280gの間にある。

ほぼ正円をした石器の一部に刃こぼれがあり、その反対側には強くつぶれた部分が認められる。このことは、この石器の使用目的の解明の手掛りの一つとなると思われる。

第133図のベン図は、第70図を基にして、第23表から円盤状石器が縄文後期のどの土器型式に伴うか、推論するために作成した。

第133図のベン図において、円盤状石器が御領式土器に伴うと仮定すると、可は35個体・否は３個体となる。鳥井原式土器に伴うと仮定すると、可は29個体・否は９個体となる。三万田式土器に伴うと仮定すると、可は９個体・否は29個体となる。もし、御領式土器にも鳥井原式土器にも伴うと仮定すると、可は37個体・否は１個体となる。

以上のことから、御領式土器に伴うと推論出来るであろう。ところで、第130図から推論すると、鳥井原式土器に円盤状石器が伴う可能性は高いが、三万田式土器に伴う可能性は低い。

旧来、三万田式土器の中に鳥井原式土器は含まれていた。富田紘一氏は三万田式を二分して三万田式と鳥井原式に分けたと聞く。上記の円盤状石器と土器との伴ない方から考えると、旧来の三万田式を二分したことは第133図の円盤状石器に伴う土器型式のあり方から故あることと思われる。本書第Ⅴ章でも上記の時期を伊坂Ⅰ式・Ⅱ式に分類した。

5　敲打痕及び研磨痕のある石器

第134図には丸い団子状の磨石、第135・136図には棒状あるいは板状の磨石を提示した。いずれも、研磨したような面と何かを敲打した痕が残る。

丸いものは平坦部も側縁部にも敲打した痕が残る。棒状のものは、側端部に集中して敲打した痕が残る。

丸い磨石では研磨したように擦れた跡は平坦な両面に見られるが、棒状のものは長い側面の一面あるいは二面に擦れた跡が見られる。

これ等２種類の磨石と対応する石皿は、すり減り具合から見て、中央部が強くくぼんだ石皿と丸い磨石とが、また砥石状を呈した板状の石皿と棒状の磨石とが対応すると推定される。

第127図の34は小礫の一面が研磨されたようになっており、使用目的は不明である。それ以外の磨石はこぶし大より大きな安山岩の礫から成る。重さは、0.5～３kgほどである。

6　石　　皿

第137～139図に示すように、中央部が強くくぼんだ石皿と砥石状に表面が板状で少し中央がくぼむが両端が少しそり上がった石皿がある。

中央部が強くくぼんだ石皿の上面は平坦であり、明らかに皿の縁部を調節している。また、末端部は中世の片口の鉢のごとくなっているものもある。この二点から見て、永年に渡って使用された結果として中央部がくぼんだと言うより、当初から乳鉢状に使用する目的で整形されたとも考えられる。

器形からして、おそらくは、固形の物を微細な粉末にするためと、水と混ぜて乳化する目的の器具であろう。

表面が板状で少し中央がくぼむか両端が少しそり上がった石皿は、第５項で述べたように棒状の磨石と対応して、固形の物を荒く粉砕するのに使用されたのではなかろうか。棒状の磨石とこの石皿を対応させると、すり減った面が互いによくマッチすることから、上記の様に推論するのは可能であろう。

上面が平坦な石皿の中には、側縁部がすり減ったものがあり、これは砥石として使用されたと見られる。このことから、一部には砥石として使用された物もあるようだ。また中には工作台のようなものとして使用されており、打ち痕の残るものも有る。

石皿の重量は６～30kg程度である。

7　その他の石器及び石材

第140図に打痕及び研磨痕のある石材の重量別個数を棒グラフにして掲載した。ここに示した石材の総数は3435個体である。この中には、石斧・円盤状石器は含まれていない。主な石器は磨石・石皿と器種不明の石器の破片である。

第140図のグラフが双曲線を描くことから、自然礫を収集して使用した石器や無作為に破砕された石片であることが理解できるであろう。

以上述べた石器及び石片の外に第１節で述べた石匙・石鏃・十字形石器片がある。これ等は全て表採品である。これ等の石器の中で特に注目したいのは、石鏃が極度に少数であることである。このことは、採集生活の中で、強く植物食に依存していたことを示しているのではなかろうか。

第２節　鉄　　器

図版16の27・28・29に鉄器の写真を示す。第Ⅰ－３号住居址から鉄鎌・第Ⅱ－１号住居址から刀子の柄・第Ⅱ－６号住居址から刀子を検出した。いずれも発掘後の保存が悪く実測図をここに提示できなかったことはくやまれる。大きさは写真からの推定される大きさを示す。

図版16の27は第Ⅱ－１号住居址のカマド内出土遺物であり、刀子の柄の部分と思われる。長さ5.7cm・最大巾1.1cmを測る。

図版16の28は第Ⅱ－６号住居址出土遺物である。上記27と同様に刀子の柄と思われる。長さ6.0cm・最大巾1.2cmを測る。

図版16の29は第Ⅰ－３号住居址出土の鉄鎌である。長さ10.2cm・最大巾2.1cmを測る。

奈良時代から平安時代にかけてのカマド付竪穴式住居址を多く発掘したが、出土した鉄器は２種類（刀子・鉄鎌）のみであった。

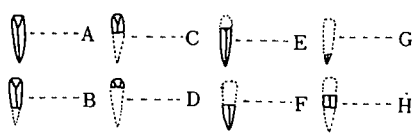
第21表　黒曜石縦長剝片の一覧表

No	第122図中の番号	出土地 地区名	出土地 グリッド名	出土地 遺構名	部位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	打角 (cm)	打面	大剝離面	主要剝離面	材料	備考
1		Ⅰ区		(縄文の遺構でない) 第Ⅰ－9号住居址	B↓	— (7.0+α)	2.75	0.45	113	礫面	礫面	↓1	漆黒ｏｂ	二次加工
2		Ⅰ区		方形溝中A区	E↓	—	1.35	0.68	—	—	↓3、↙△1、←1	↓1	漆黒ｏｂ	二次加工
3	9	Ⅱ区		(縄文の遺構でない) 第Ⅱ－3号住居址		—	1.6	1.00	—	—	↓2、↘△1、→1、↖1	↓2	漆黒ｏｂ	刃こぼれ、頭部以外の縁側に使用痕あり、上端を切り取っている
4		Ⅰ区		(縄文の遺構でない) 第Ⅰ－3号住居址	A	3.22	0.9	0.97	112	剝離面	↘△2以上、↙1、不明1	↓1	漆黒ｏｂ	微細な刃こぼれ
5		Ⅰ区	4－Fの12		H↑↑	—	1.39	0.35	—	—	↓2	↓1	漆黒ｏｂ	二次加工
6	5	Ⅰ区	14—Fの7		A	6.97	2.17	0.36	112	調整打面	←6以上、↓5、下端に礫面	↓1	漆黒ｏｂ (部分的に半透)	刃こぼれ、左右に使用痕あり 背面より打面調整を施す。定形品
7		Ⅰ区	8－Iの9	第Ⅱ層中	H↓↓	—	2.35	0.85	—	—	礫面、↓3	↓	漆黒ｏｂ (巣入り)	刃こぼれ、全体にキズ
8	7	Ⅰ区	9－Eの7	第Ⅱ層下面	B↑	— (4.74+α)	2.5	0.37	88	剝離面	↓4、不明1	↓1	漆黒ｏｂ (部分的に半透)	刃こぼれ、下端部を欠失する。左右辺に使用痕あり、打面は一枚剝離面である。非常に薄い剝片より成る。
9		Ⅰ区		(縄文の遺構でない) 第Ⅰ－4号住居址	A	5.22	2.3	0.98	124	剝離面	←3、→1、↑3、礫面	↓1	漆黒ｏｂ (巣入り)	二次加工、刃こぼれ
10		Ⅰ区	6－Iの25		F↓	—	—	0.65	—	—	↓2、↑1、	↓1	漆黒ｏｂ	二次加工
11		Ⅰ区	11—Hの13	第Ⅱ層下面	A	2.33	0.94	0.3	118(?)	礫面	↓3、→1	↓1	漆黒ｏｂ	刃こぼれ
12		Ⅰ区	11—Eの20	第Ⅱ層下面	E↓	—	1.84	0.73	—	—	↓2、→ 1、↙1	↓1	漆黒ｏｂ 白シマ入り	二次加工
13	4	Ⅰ区		第Ⅱ層	A	7.16	1.81	0.47	131	調整打面	↓3	↓1	漆黒ｏｂ	刃こぼれ、左右辺に使用痕あり。 調整打面あり、稜を消している。 尾部剝離面あり、完形品
14	10	Ⅱ区		第Ⅱ-1号円形周溝	H↑↓	—	1.8	0.9	—	—	↓5、↑1	↓	漆黒ｏｂ (巣入り)	刃こぼれ、全辺に使用痕あり 交互剝離痕あり、上端を欠失する。
15		—		不明	A	8.0	3.12	1.57	110	剝離面	礫面、↓多数	↓	漆黒ｏｂ (巣入り)	二次加工（削器）
16		Ⅰ区		方形溝A区	H↓→	—	1.5	0.5	—	—	↓2	↓	漆黒ｏｂ (パティナ厚く)	二次加工（削器）
17		Ⅰ区	12—Hの6	第Ⅱ層上面	H↑↑	—	2.1	0.5	—	—	礫面、↓2	↓	漆黒ｏｂ	二次加工（擦痕？）
18		Ⅰ区	10—Cの2	第Ⅱ層下面	B↑	—	2.2	0.56	123	剝離面	礫面、↓1	↓	漆黒ｏｂ	刃こぼれ

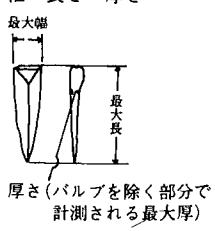
No	第122図中の番号	出土地 地区名	出土地 グリッド名	出土地 遺構名	部位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	打角 (度)	打面	大剥離面	主要剥離面	材質	備考
19		Ⅱ区		第Ⅱ－2号住居址 No26	E↑	—	2.38	0.66	—	—	↓6、礫面	↓	漆黒ｏｂ シマ入り	—
20		Ⅰ区	9－H		D↓	—	1.73	0.68	110(?)	剥離面	↓2、?1	↓	漆黒ｏｂ (巣入り)	—
21		Ⅱ区		第Ⅱ－2号住居址	C↑	—	1.6	0.4	108	剥離面礫面	↓2、→1	↓	漆黒ｏｂ	—
22		Ⅰ区	9－Dの7	第Ⅱ層下面	C↑	—	1.3	0.31	74	剥離面擦痕	↓3	↓	漆黒ｏｂ	刃こぼれ
23		Ⅰ区	9－Eの6	第Ⅱ層下面	C↑	—	3.0	0.75	115	礫面、剥離面	礫面、←1	↓	漆黒ｏｂ (巣入り)	—
24	3	Ⅰ区	10—H	第Ⅱ層	A	6.5	1.95	0.43	110	剥離面	↓4、礫面	↓	漆黒ｏｂ	刃こぼれ、左右辺に使用痕あり 打面は剥離面である。
25		Ⅱ区		(縄文の遺構でない) 第Ⅱ－4号住居址	H↓→	—	1.7	0.6	—	—	↓5	↓	漆黒ｏｂ	刃こぼれ
26		Ⅱ区		(縄文の遺構でない) 第Ⅱ－2号溝中	B↓↑	—	1.2	0.33	100	礫面	↓1	↓	漆黒ｏｂ	二次加工、削器
27	1	Ⅰ区	—	不明	H←↑	—	1.14	0.47	—	—	↓3、↑1	↓	漆黒ｏｂ	粗い二次加工を施す。(使用によるものか?) 上下端部を欠失する。下端に下からの剥離面がある。
28	8	Ⅰ区	7－Dの11	第Ⅱ層下面	H↓↑	—	1.91	0.88	—	—	礫面、↓2	↓	漆黒ｏｂ	刃こぼれ、削器、右辺中央部に使用痕あり。粗い二次加工を施す。上下端部を欠失する。
29		—	—	不明	G↓	—	2.90	0.92	—	—	→1、→1、礫面	↓	漆黒ｏｂ	刃こぼれ
30	2	Ⅰ区	13—Ⅰの22	第Ⅲ層上面	H↑↑	—	1.67	0.95	—	—	↑1、↓1	↓	漆黒ｏｂ	右辺に使用痕あり、上下の端部を欠失する。刃こぼれ、左辺の一部に礫面が残る
31	6	Ⅰ区			B↓	5.48	3.5	0.7	130	剥離面	↓1、→1、↑1	↓	漆黒ｏｂ シマ入り	無使用?ほとんど無加工である。下端を欠失する。打面は一枚の剥離面である。
32		Ⅰ区	8—G 9—H	第Ⅰ—11号住居址	A		3.03	0.62	97	剥離面	↓2	↓	漆黒ｏｂ シマ入り	刃こぼれ
33		Ⅰ区	11—Dの21	第Ⅱ層下面	C↓	—	2.58	0.54		調整打面(?)	↓1、礫面	↓	漆黒ｏｂ シマ入り	削器

黒曜石縦長剥片の残存部位及び計測位置の説明

① 部位



② 幅・長さ・厚さ



③ 打角

打面↔打点↔バルブの頂点を結ぶ角度

④ 大剥離面
剥片の背面側に見られて剥離痕の剥離方向とその数

⑤ 主要剥離面
剥片の腹面側に見られる剥離痕の剥離方向とその数

第22表　石斧の一覧表（第123～127図参照）

（木崎作成）

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測 長さ cm	計測 幅 cm	計測 厚さ cm	計測 重さ g	計測 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
1		Ⅰ区		表採	a	欠・基部	F	よわいつぶれ	—	表↓剝離4枚	—	6.0	1.7	128	—	—	—	—		
2		Ⅰ区	13—C	縄文一括	b	完	A	刃部より左につぶれ	よわいすれ	—	11.6	5.8	2.0	120	78°	鳥	御	三		
3		Ⅰ区	13—Gの10		a	基部	E	つぶれなし	—	裏↓	—	7.0	1.4	78	—	鳥	御			
4		Ⅰ区	10—Eの7		a	胴部	H	つぶれなし	—	裏↓	—	4.9	1.7	78	—	鳥	御	三		
5		Ⅰ区	9—Dの23		a	基部	E	基部よりの左側につぶれあり	—	表↓	—	6.3	1.9	112	—		御			
6		Ⅰ区	11—Hの7		b	基部	G	両側縁によわいつぶれ	—	裏↓	—	6.6	2.0	160	—	鳥	御			
7		Ⅱ区	1—X	取り上げNo.1	b	刃部半欠	G	つぶれなし	すれている	裏↓	10.9	6.2	1.8	128	71°	—	—	—	安山岩	片刃であり刃部を半分欠失
8	25	Ⅰ区	7—Fの21	Ⅱ層下面	b	基部	F	両側によわいつぶれ	—	表↓	—	7.3	1.6	168	—	鳥		三	安山岩	
9	32	Ⅰ区	13—Gの10	縄文一括	b	完	A	両側につぶれあり	よわいすれ	—	12.9	6.3	1.9	177	42°	鳥	御	三	安山岩	
10		Ⅰ区	6—G		a	刃部半欠	G	両側縁によわいつぶれ	すれている	表↓	—	5.4	1.5	109	81°	鳥	御	三		
11		Ⅰ区	14—D		c	基部	G	つぶれなし	—	裏↓	—	5.9	1.6	130	—	—	—	—		
12		Ⅰ区	9—Dの11		a	基部	G	刃部よりの方につぶれ	—	裏↓	—	5.5	1.7	151	—	鳥	御	三		
13	26	Ⅰ区		Ⅱ層一括	b	刃部	C	よわいつぶれ	よわいすれ	表↓	—	6.9	1.5	136	43°	—	—	—	安山岩	
14	3	Ⅰ区	9—Dの20	Ⅱ層下面	c	完	A	よわいつぶれ	すれている	—	11.1	4.7	1.3	78		鳥	御	三	安山岩	
15		Ⅰ区	9—Ⅰ		a？	胴部	H	つぶれなし	—	両面とも表↓	—	5.8	1.7	53	—	鳥	御			
16		Ⅰ区		Ⅱ層一括	b	基部半欠	A	よわいつぶれ	よわいすれ	—	(10)	5.4	1.3	94	64°	—	—	—	安山岩	
17	13	Ⅰ区	7—Ⅰの16	Ⅱ層下面	b	基部	F	よわいつぶれ	—	裏↓	—	6.6	1.3	92	—		御		安山岩	
18		Ⅰ区	11—Hの7		a	基部	F	胴部の右側につぶれ	—	表↓	—	5.7	2.2	142	—	鳥	御			
19		Ⅰ区	11—Hの14	Ⅱ層下面	b	基部	F	よわいつぶれ	—	裏↓	—	7.2	1.0	90	—	鳥	御		安山岩	
20		Ⅰ区	9—Cの3		a	基部	G	右側縁につぶれ	—	裏↓	—	5.8	1.8	122			御			

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測量 長さ cm	計測量 幅 cm	計測量 厚さ cm	計測量 重さ g	計測量 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
21		Ⅰ区	9－Eの6		a	基部	G	つぶれなし	—	表↓	—	6.0	1.6	105	—		御			
22		Ⅰ区		6号住居址一括	a	基部	F	左側縁につぶれ	—	左側縁↓	—	6.1	2.1	151	—	—	—	—		
23	2	Ⅰ区	13—C—13	縄文一括	a	刃部	D	よわいつぶれ	よわいすれ	裏↓	—	5.0	1.4	103		—	—	—	安山岩	刃部上方に磨耗した部分あり
24		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.193	c	完	A	胴部につぶれあり	すれている	—	12.7	6.6	1.1	115	31°					縄文時代の住居址である。
25	30	Ⅰ区	6—Hの23	Ⅱ層下面	b	完	A	よわいつぶれあり	片刃すれている	—	11.2	4.6	1.3	75	66.5°		御	三	安山岩	
26		Ⅰ区	9—Gの22		a	胴部	H	つぶれなし	—	不明	—	5.6	1.5	68	—	鳥	御			
27		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.20	a	基部	F	左側縁に顕著なつぶれあり	—	3枚表↓2裏↓1	—	6.1	1.6	118	—					縄文時代の住居址
28		Ⅱ区	5—O	5号住居址一括	a	基部	E	よわいつぶれ	—	表↓2枚	—	—	1.3	43	—	—	—	—		カマド付住居址 縄文の遺構でない。
29		Ⅱ区	5—O	5号住居址一括	a	基部	F	つぶれあり	—	不明	—	5.3	0.5	40	—	—	—	—		同上
30		Ⅱ区	S—10	2号住居址No.95	b	基部	E	左側つぶれない	—	表↓	—	5.0	1.9	76	—					
31		Ⅰ区	H—12	Ⅱ層一括	b	基部	F	つぶれなし	—	表↓	—	4.0	0.7	20	—	鳥	御		片岩	
32		Ⅱ区	6—O	一括	b	胴部	H	つぶれなし	—	不明	—	5.6	1.1	50	—	—	—	—	片岩	
33		Ⅰ区	—	表採	c	基部	F	つぶれなし	—	不明	—	5.3	0.6	34	—	—	—	—	片岩	
34		Ⅰ区	10—Ⅰの24	縄文一括	不明	胴部剝離	F	右側つぶれ	—	不明	—	—	—	60	—	鳥	御		安山岩	局部磨製石斧の剝離片
35		Ⅰ区	8—F	1号住居址一括	b	胴部	H	つぶれなし	—	不明	—	5.7	0.6	30	—	—	—	—	片岩	カマド付住居址 縄文の遺構でない。
36	18	Ⅱ区	5—O	5号住居址一括	b	完	A	左側つぶれあり	すれている	—	7.9	5.3	1.1	50	22°	—	—	—	頁岩	カマド付住居址 縄文の遺構でない
37		Ⅰ区	—	Ⅱ層一括	b	胴部	H	不明	—	3枚表2裏1	—	6.2	1.5	98	—	—	—	—	安山岩	
38		Ⅰ区	10—Cの6		a	基部	F	つぶれなし	—	2枚表1裏1	—	7.3	2.1	115	—	鳥	御	三		
39		Ⅰ区		Ⅰ・Ⅱ層	b	刃部	D	右側縁につぶれあり	ややすれている	表↓	—	5.7	1.0	63	72.5°	—	—	—		
40		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.147	a	基部	E	つぶれなし	—	表↓2	—	—	1.1	19	—					基部の半分も欠損
41		Ⅱ区	4—Q	6号住居址	a	刃部	C	つぶれなし	すれている	裏↓1・不明1	—	5.2	0.9	50	70°	—	—	—		6号住はⅡ—2号円形溝を切っている。

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a·b·c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測量 長さ cm	計測量 幅 cm	計測量 厚さ cm	計測量 重さ g	計測量 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
42		Ⅱ区	4—Q	6号住居址一括	b	基部	E	つぶれなし	—	表↓	—	4.1	1.0	18	—	—	—	—	安山岩	
43		Ⅰ区	9—Eの17		a	基部	E	つぶれなし	—	不明	—	5.8	0.9	32	—	鳥	御			
44		Ⅰ区	7—Hの5		a	胴部	H	つぶれなし	—	2枚表↓裏↓	—	4.8	1.2	22	—	鳥	御			
45		Ⅰ区	9—Cの3		c	刃部	F	つぶれなし	—	不明	—	5.8	0.6	25	—	鳥	御	三		
46		Ⅳ区	—	4号住居址覆土	c	基部	F	よわいつぶれあり	—	裏↓	—	5.8	1.0	48	—	—	—	—		
47		Ⅰ区	—	Ⅱ層一括	b	基部	F	よわいつぶれあり	—	表↓・裏↓	—	6.6	1.9	86	—	—	—	—	安山岩	
48		Ⅰ区	9・10—Ⅰ	2号住居覆土	b	胴部	H	基部の方からつぶれている。	—	裏↓	—	6.6	1.9	86	—	—	—	—	安山岩	
49		Ⅳ区	—	4号住居址覆土	a	胴部	H	よわいつぶれあり	—	表↓・裏↓	—	6.5	1.1	49	—	—	—	—		縄文時代の遺構でない
50		Ⅳ区	—	4号住居址覆土	a	胴部	H	よわいつぶれあり	—	表↓	—	5.5	1.5	105	—	—	—	—		縄文時代の遺構でない
51		Ⅱ区	4・5—R	2号円形溝	a	刃部	B	つぶれなし	刃こぼれあり	不明	—	4.8	1.0	52	—					
52		Ⅰ区	14—Fの3		a	刃部	C	基部よりにつぶれあり	ややすれている	3枚表↓2裏↓1	—	8.2	3.2	210	68°		御	三		
53		Ⅰ・Ⅱ区		表採	a？	基部半欠	F	ややつぶれあり	—	表↓2	—	—	1.9	36	—	—	—	—		基部の半分を残す
54		Ⅳ区	—	4号住居址覆土	c	基部	F	つぶれあり	—	表↓3	—	6.0	1.6	90	—	—	—	—		縄文時代の遺構でない
55		Ⅰ区	14—Hの24		b	完	A	つぶれなし	刃こぼれあり	—	14.4	6.0	1.1	125	83°		御			
56	31	Ⅳ区	—	4号住居址覆土	b	完	A	つぶれなし	刃こぼれあり	—	10.6	5.7	1.1	72	54°	—	—	—	片岩	縄文時代の遺構でない
57		Ⅱ区	5・4—O	5号住居址一括	a	基部	H	つぶれなし	—	表↓1裏↓1	—	6.5	2.8	93	—	—	—	—		縄文時代の遺構でない
58		Ⅳ区			a	胴部	H	不明	—	表↓2裏↓1	—	—	1.8	60	—	—	—	—		
59		Ⅳ区	—	4号住居覆土	b	基部	F	右側つぶれ	—	表↓	—	15.2	1.2	49	—	—	—	—	片岩	
60		Ⅱ区	10・11—O	2号住居址No18	b	基部	D	よわいつぶれあり	すれている	裏↓	13.9	7.3	2.0	252	64°					縄文時代の遺構である
61			ラベルなし		b	基部	F	左側基部につぶれあり	—	裏↓	—	5.6	1.8	115	—	—	—	—		
62		Ⅰ区	8—Gの21		a	完	A	右側縁及び胴部につぶれあり	ややすれている	—	11.9	5.4	1.2	93	40°	鳥				

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	形状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測量 長さ cm	計測量 幅 cm	計測量 厚さ cm	計測量 重さ g	計測量 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
63	4	Ⅰ区	6—F	1号溝遺物一括	a	基部	F	胴部につぶれあり	—	表↓	—	6.0	1.9	143	—	—	—	—	安山岩	
64		Ⅱ区	10・11—O	2号住居址No.7	c	完	A	胴部につぶれあり	ややすれている	—	18.7	6.8	3.3	437	52°					縄文時代の遺構である
65		Ⅰ区	7—Hの19		a	完	A	よわいつぶれあり	すれていない	—	14.8	6.2	2.0	234	57°	鳥	御	三		
66		Ⅰ区	10—Ⅰの21		a	基部	E	つぶれなし	—	表↓	—	5.3	1.2	45	—	鳥	御			
67	8	Ⅰ区	11—Hの13	縄文一括	a	基部	F	ややつぶれあり	—	表↓	—	6.3	2.0	180	—	鳥	御		安山岩	
68		Ⅰ区	ラベルなし		a	完	A	ややつぶれあり	ややすれている	—	11.5	4.3	1.5	110	67°	—	—	—		
69		Ⅰ区	4—Fの7		a	基部	G	ややつぶれあり	—	表↓	—	6.3	2.2	216	—	—	—	—		
70		Ⅰ区	ラベルなし		b	胴部	H	基部よりの方につぶれあり	—	裏↓2	—	5.8	2.8	117	—	—	—	—		
71	12	Ⅱ区	4—R	2号円形溝	a	基部	F	ややつぶれあり	—	表↓	—	5.0	1.9	90	—				安山岩	
72		Ⅰ区			a	刃部	C	右側縁にややつぶれあり	刃こぼれあり	裏↓	—	6.7	1.4	152	60°	—	—	—		
73		Ⅰ区	9—Eの10		a？	基部	E	刃部よりにややつぶれあり	—	表↓	—	5.5	1.6	70	—	鳥	御	三		
74		Ⅰ区	9—Dの12		a	完	A	胴部にややつぶれあり	すれている	—	11.1	5.3	1.5	110	65°	鳥	御	三		
75		Ⅰ区	9—Dの12		a	基部	G	左側縁につぶれあり	—	裏↓	—	5.7	2.1	163	—	鳥	御	三		
76		Ⅰ区	9—Dの12	Ⅱ層下面	a	基部	F	左側縁ややつぶれ	—	表↓裏↓	—	5.6	2.2	150	—	鳥	御	三	安山岩	
77		Ⅱ区	13・14—D	6号住居址一括	a	刃部	B	つぶれなし	ややすれている	裏↓	—	5.1	—	30	63°	—	—	—		裏面が剝落している
78		Ⅰ区	13—F・G	4号住居址	b？	胴部	H	ややつぶれあり	—	表↓	—	—	1.7	52	—	—	—	—		縄文時代の遺構でない
79		Ⅱ区	5—O	5号住居址	a	胴部	H	つぶれなし	—	表↓	—	5.5	1.1	47	—	—	—	—		縄文時代の遺構でない
80		Ⅰ区			a	基部	F	つぶれなし	—	表↓	—	7.2	1.9	172	—	—	—	—	安山岩	
81		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.187	a	胴部	H	ややつぶれあり	—	表↓	—	—	2.0	61	—					胴部の半分を欠失
82		Ⅰ区	10—C	Ⅱ層	a	基部の½	F	ややつぶれ	—	表↓2	—	—	0.7	18		鳥	御		安山岩	
83		Ⅰ区	10—Cの14	Ⅱ層下面		基部の½	F	つぶれなし	—	不明	—	—	1.1	40		鳥	御		片岩	

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測量 長さ cm	計測量 幅 cm	計測量 厚さ cm	計測量 重さ g	計測量 刃部角度	廃棄部出土縄文土器 鳥井原	廃棄部出土縄文土器 御領	廃棄部出土縄文土器 三万田	石材	備考
84		Ⅰ区	13・14—D	6号住居址	a	基部	F	つぶれなし	—	左側→	—	5.8	2.0	123	—		御		安山岩	
85	33	Ⅰ区	8—Hの7	Ⅱ層下面	a	基部	F	ややつぶれ	—	表↓	—	6.1	2.1	156	—	鳥	御		安山岩	
86		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.22	b	胴部	H	刃部よりにつぶれあり	—	表↓裏↓	—	6.5	1.7	112	—					
87		Ⅰ区	7—Hの19		b	完	A	ややつぶれあり	すれている	—	9.0	5.9	1.2	79	73.5°	鳥	御	三		
88		Ⅰ区	11—Eの24		a	基部	G	ややつぶれあり	—	左側→	—	5.3	1.6	137	—	鳥	御	三		
89		Ⅰ区	11—Dの21		a	基部	E	ややつぶれあり	—	表↓	—	4.7	1.3	49	—	鳥	御	三		
90		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.6	b	刃部	C	つぶれなし	すれていない	不明	—	8.4	2.1	210	80°					再利用している
91		Ⅱ区	13—P 14—Q	1号住居址覆土	a	刃部	C	左側縁につぶれあり	すれている	表↓2	—	5.7	1.7	114	71.5°	—	—	—		カマドは住居址縄文時代の遺構でない
92		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.3	b	完	A	左側縁の基部より右側刃部よりにつぶれあり	刃こぼれあり	—	19.2	8.9	3.2	568	33°					
93		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.17	a	完	A	胴部につぶれあり	すれている	—	18.8	7.6	2.5	495	65.5°					
94		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.2	a	完	A	基部以外ははげしくつぶれている	すれている	—	14.4	6.1	2.6	384	80°					
95		Ⅱ区	4—R	2号円形溝	a	基部	E	つぶれなし	—	表↓	—	—	0.9	23	—					
96		Ⅰ区	13—C 14—C	7号住居址	a	完	A	つぶれなし	ややすれている	—	10.5	4.8	1.4	90	77.5°	—	—	—		歴史時代の住居遺構である。
97		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.1	b	刃部	E	ややつぶれている	すれている	裏↓	13.8	7.0	1.4	174	72.5°					
98		Ⅰ区	13—G		b	刃部	E	ややつぶれている	すれている	裏↓	15.5	7.2	2.3	315	79.5°	鳥	御	三		
99		Ⅰ・Ⅱ区	表採		a	刃部	D	右側縁につぶれあり	すれている	裏↓	—	6.6	1.5	208	73.5°	—	—	—		
100		Ⅰ区	9・10—Ⅰ	2号住居址覆土	b	刃部	D	つぶれあり	すれている	表↓	—	5.0	1.6	108	71°	—	—	—		
101	28	Ⅰ・Ⅱ区	表採		b	完	A	ややつぶれている	すれている	—	10.5	5.5	1.4	118	73.5°	—	—	—		片刃である。
102		Ⅰ区	7—Eの11	Ⅱ層下面	b	基部	F	つぶれあり	—	裏↓	—	6.0	1.4	84	—	—	—	—		
103					b	胴部	H	ややつぶれている	—	裏↓	—	7.7	1.7	200	—	—	—	—		
104		Ⅰ区			b	完	A	つぶれなし	すれている	—	14.6	7.1	1.5	190	62°	—	—	—		

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測量 長さ cm	計測量 幅 cm	計測量 厚さ cm	計測量 重さ g	計測量 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
105		Ⅰ区	14—Fの5		a	基部	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	5.4	1.4	79	—	鳥	御	三		
106		Ⅰ・Ⅱ区	表採		a	胴部	H	右側縁につぶれあり	—	表↓・裏↓	—	6.7	2.3	175	—	—	—	—		
107		Ⅰ区	9—Dの4		a	基部	F	右側縁にややつぶれあり	—	表↓	—	5.0	1.4	62	—	鳥	御	三		
108		Ⅱ区	4—R・S	2号円形溝	a	刃部	C	ややつぶれている	すれている	表↓	—	6.1	1.1	103	72°					
109		Ⅰ区	13—Cの13		a	基部	F	ややつぶれている	—	表↓	—	6.9	1.4	102	—	—	—	—		
110		Ⅰ区	10—Cの2		a	刃部	D	ややつぶれている	すれている	裏↓	—	5.5	1.3	76	63°	鳥	御	三		
111		Ⅰ区	11—Dの15		a	基部	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	—	1.1	109	—	鳥	御	三		基部の半分を欠失
112		Ⅰ区	13—Hの19		a	刃部	D	ややつぶれている	—	表↓	11.7	5.3	2.0	120	—	鳥	御			
113		Ⅰ区	10—Cの9		b	刃部	D	ややつぶれている	すれている	不明	—	5.2	1.3	84	60°	鳥	御			
114		Ⅱ区	4・5—Q	1号円形溝	a	刃部	C	つぶれなし側縁がすれている	刃こぼれあり	表↓	—	5.9	0.9	83	60.5°					
115		Ⅰ区	9—F 10—G	1号方形溝	b	刃部	D	ややつぶれている	ややすれている	表↓	13.3	6.6	1.6	168	65.5°					縄文時代の遺構である
116		Ⅰ・Ⅱ区	表採		a	胴部	H	つぶれなし	—	裏↓	—	—	—	40	—	—	—	—		刃部の半分を欠失
117		Ⅱ区	6—P		b	刃部	D	ややつぶれている	ややすれている	表↓	—	6.9	0.9	115	66.5°	—	—	—		
118		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.1	b	完	A	右側縁胴部につぶれあり	すれている	—	25.7	8.9	3.4	980	48°					丸のみ状を呈する
119		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.5	b	完	A	つぶれなし	刃こぼれあり	—	18.7	8.1	1.8	365	71.5°					
120		Ⅰ区	9・10—Ⅰ	2号住居址覆土	b	刃部	G	つぶれなし	すれている	表↓	10.8	5.4	1.5	99	78°	—	—	—		
121		Ⅰ区	10—Cの7		b	基部	E	基部より下方につぶれあり	—	表↓	—	5.6	2.4	115	—	鳥	御	三		
122					a	胴部	H	左側縁につぶれあり	—	裏↓2左側→	—	5.8	2.4	207	—	—	—	—		
123		Ⅰ区	8—Ⅰの9		a	基部	F	刃部よりにつぶれあり	—	裏↓	—	6.4	1.9	170	—	鳥	御			
124		Ⅰ区	8—Hの14		a	胴部	H	つぶれあり	—	裏↓・右側→	—	5.4	2.2	130	—	鳥	御			
125		Ⅰ区	14—F		a	胴部	H	つぶれなし	—	表↓・裏↓	—	6.0	1.6	140	—	鳥	御	三		

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測量 長さ cm	計測量 幅 cm	計測量 厚さ cm	計測量 重さ g	計測量 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
126		Ⅰ区	9—Hの1		b	胴	H	ややつぶれている	—	表↓	—	8.0	1.5	167	—	鳥	御			
127		Ⅰ区	7—Hの4		a	刃	C	胴部につぶれあり	刃こぼれあり	表↓	—	8.1	3.3	410	79°	鳥	御			
128	24	Ⅰ区	8—Iの4		c	完	A	左側縁胴部につぶれあり	すれなし	—	15.8	8.4	2.0	277	55°	鳥	御			
129	22	Ⅰ区	5—Iの9		b	完	A	基部付近につぶれあり	すれている	—	13.1	8.0	2.9	332	69°		御			
130		Ⅰ区	12・13—D	5号住居址	b	刃	C	つぶれなし	刃こぼれあり	裏↓	—	6.9	0.8	—	35.5°	—	—	—		
131	10	Ⅰ区	10—Cの7		b	刃	C	つぶれなし	ややすれている	不明	—	7.0	1.5	—	59°	鳥	御	三		
132		Ⅰ区	13—H		a	基	F	左側縁より右側縁が強くつぶれている	—	裏↓	—	6.8	1.5	—	—	鳥	御	三		
133		Ⅰ区	10—Cの11		c	完	A	ややつぶれている	すれている	—	10.9	4.8	1.4	88	75°	鳥	御	三		
134		Ⅰ区	8—H		b	胴	H	つぶれあり	—	裏↓2	—	5.7	2.9	—	—	鳥	御			
135	9	Ⅰ区		不明	a	完	A	つぶれあり	すれている	—	14.2	5.3	1.7	158	78°	—	—	—	片岩	基部の右辺にみがかれた部分あり
136		Ⅱ区	5—O	5号住居址	a	基	F	つぶれなし	—	裏↓	—	5.4	1.7	—	—	—	—	—		縄文時代の遺構でない
137		Ⅰ区	10—Hの4		b	完	A	左側縁にややつぶれあり	刃こぼれあり	—	16.0	9.5	3.0	533	30.5°	鳥	御			
138		Ⅰ区	9—F 10—G	1号方形溝	a	基	E	つぶれなし	—	裏↓	—	6.3	1.0	—	—					縄文時代の遺構である
139		Ⅰ区	13—F・G	4号住居址	不明	基	F	右側縁につぶれあり	—	表↓	—	5.8	1.6	—	—	—	—	—		縄文時代の遺構でない
140		Ⅰ区	7—Gの10		a	基	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	5.8	1.9	—	—	鳥				
141		Ⅱ区		2号溝	b	完	A	つぶれあり	すれている	—	9.9	3.7	1.5	65	60.5°	—	—	—		近世の溝である
142	7	Ⅰ区	6—Iの18	Ⅱ層下面	a	完	A	ややつぶれ	すれている	—	11.2	3.9	1.2	80	66°		御		片岩	
143		Ⅱ区	10—S	2号住居址	b	完	A	つぶれあり	すれている	—	11.6	8.4	1.9	255	73°					
144		Ⅰ区	10—Cの14		a	基	F	つぶれなし	—	不明	—	5.2	0.6	—	—	鳥	御			
145		Ⅰ区	7—Hの4		b	刃	D	つぶれなし	すれている	不明	10.6	6.8	1.0	—	73°	鳥	御			
146		Ⅰ区	6—Iの24		a	刃	D	つぶれなし	すれている	表↓	—	5.9	0.8	—	31°		御			

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測量 長さ cm	計測量 幅 cm	計測量 厚さ cm	計測量 重さ g	計測量 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
147		Ⅰ区	10—Dの17		c	刃部	D	基部よりにつぶれあり	すれている	裏↓	—	4.4	1.7	—	38°	鳥	御	三		
148		Ⅰ区	14・15—H	8号住居址	a	基部	F	つぶれなし	—	不明	—	—	0.8	—	—	—	—	—		弥生時代の住居址である
149	11	Ⅰ区	13—E		a	完	A	左側縁胴部につぶれあり	すれている	—	20.9	7.0	2.3	392	65°	鳥	御			
150	6	Ⅰ区	8—Ⅰ	Ⅱ層下面	a	完	A	すれている	すれている	—	10.9	5.5	1.3	112	60°	鳥	御		安山岩	
151		Ⅰ区	14—Hの2		b	基部	E	つぶれなし	—	不明	—	5.2	0.9	—	—		御	三		
152		Ⅰ区	7—Ⅰの13		b	刃部	C	つぶれなし	すれている	不明	—	7.0	0.9	—	72.5°	鳥	御			
153		Ⅰ区	13—G		a	胴部	H	すれている	—	裏↓2	—	6.1	1.5	—	—	鳥	御	三		
154		Ⅰ区	12—Gの1		a	刃部	C	つぶれている	すれている	表↓	—	6.4	1.9	—	76°	鳥	御			
155		Ⅰ区	9—Eの8		b	基部	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	3.9	1.3	—	—		御			
156		Ⅰ区	9—Eの8		a	基部	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	4.5	1.3	—	—		御			
157		Ⅰ区	9—Eの8		b	刃部	D	つぶれなし	すれている	不明	—	4.6	0.9	—	78°		御			
158		Ⅰ区	8—Dの23		a	刃部	D	つぶれなし	すれている	表↓	—	5.1	1.1	—	65.5°	—	—	—		
159		Ⅰ区	7—Dの1		a	刃部	D	つぶれている	すれている	表↓・裏↓	—	6.1	1.6	—	76°	—	—	—		
160		Ⅰ区	7—Dの1		a	基部	F	つぶれている	—	不明	—	6.7	1.8	—	—	—	—	—		
161		Ⅰ区	8—C		a	基部	F	つぶれている	—	表↓	—	6.3	1.1	—	—		御			
162		Ⅰ区	14・15—H	8号住居址	b	基部	E	刃部よりにつぶれあり	—	表↓・裏↓	—	—	1.1	—	—	—	—	—		弥生時代の住居址である
163		Ⅱ区	5—O	5号住居址	b	胴部	H	ややつぶれている	—	裏↓	—	4.3	0.8	—	—	—	—	—		
164		Ⅱ区	13—R		a	完	A	右側縁につぶれあり	すれ刃こぼれなし	—	11.0	6.0	2.0	185	30°	—	—	—		
165		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.14	a	基部	F	左側縁につぶれあり	—	表↓	—	15.6	2.7	—	—					
166		Ⅰ区	8—Ⅰの9		c	完	A	つぶれなし	すれている	—	11.7	6.4	1.2	121	68°	鳥	御			
167		Ⅰ区	10—Eの2		b	完	A	ややすれている	すれている	—	12.1	5.1	1.4	95	70°	鳥	御	三		

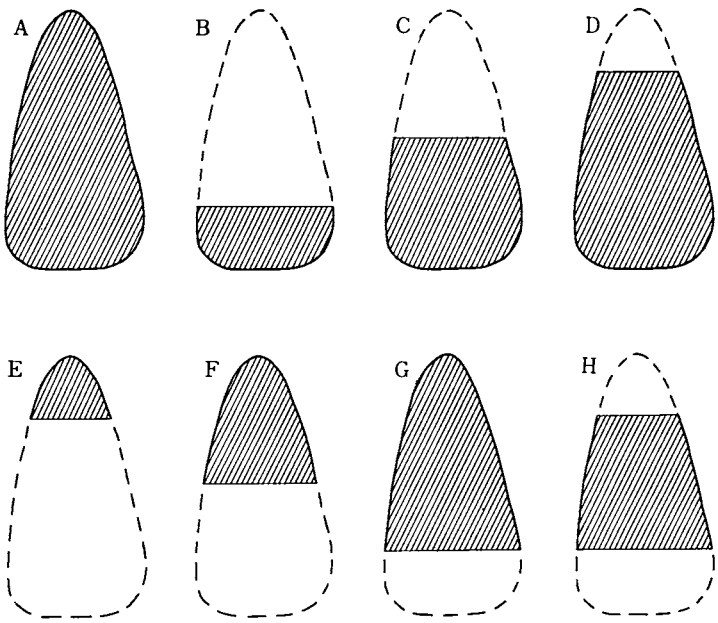
番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測 長さ cm	計測 幅 cm	計測 厚さ cm	計測 重さ g	計測 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
168		Ⅰ区			c	刃部	D	両側縁につぶれあり	すれている	表↓・裏↓	—	7.0	1.9	—	68°	—	—	—		
169		Ⅰ区	6—Ⅰの6		a	基部	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	5.9	1.4	—	—	鳥	御	三		
170		Ⅰ区	10—Cの24		b	基部	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	5.1	1.9	—	—	鳥	御			
171		Ⅱ区		1号円形溝	a	完	A	左側縁につぶれあり	すれ・刃こぼれあり	—	10.7	4.8	1.6	118	73°					
172		Ⅱ区		10号溝	b	基部	G	ややつぶれている	—	裏↓	—	5.4	1.9	—	—	—	—	—		近世の溝である
173		Ⅰ区	10—Cの16		a	完	A	右側縁につぶれあり	刃こぼれあり	—	11.2	4.3	1.7	118	43.5°	鳥	御	三		
174		Ⅰ区	7—Ⅰの20		a	基部	F	右側縁につぶれあり	—	裏↓	—	4.9	1.7	—	—	鳥	御	三		
175		Ⅰ区	6—Hの17		c	基部	G	ややつぶれあり	—	表↓	—	5.8	1.4	—	—		御	三		
176		Ⅰ区	9—Dの20		a	基部	F	左側縁につぶれあり	—	表↓	—	4.5	1.6	—	—		御			
177		Ⅰ区	11—Eの20		a	基部	G	ややつぶれあり	—	表↓	—	4.4	1.4	—	—	鳥	御	三		
178		Ⅰ区	14—Fの7		b	胴部	H	左側縁につぶれあり	—	不明	—	7.5	2.1	—	—		御			
179		Ⅰ区	8—H		a	基部	E	つぶれなし	—	裏↓	—	—	1.3	—	—	鳥	御			
180		Ⅰ区			a	胴部	H	つぶれなし	—	表↓・裏↓	—	6.6	1.7	—	—	—	—	—		
181		Ⅰ区			a	基部	F	つぶれなし	—	表↓・裏↓	—	—	1.8	—	—	—	—	—		
182		Ⅰ区			b	完	A	右側縁にややつぶれあり	すれ・刃こぼれあり	—	11.6	5.1	1.4	85	47°	—	—	—		
183		Ⅰ区	8—Ⅰの9		b	完	A	ややつぶれている	刃こぼれあり	—	13.9	5.4	2.1	187	66°	鳥	御			
184		Ⅰ区			c	完	A	つぶれなし	刃こぼれあり	—	8.2	4.2	0.8	40	46°	—	—	—		
185		Ⅱ区	6—S		a	刃部	C	少しつぶれている	すれている	表↓2	—	7.2	1.7	—	54°	—	—	—		
186		Ⅰ区	10—Eの17		a	胴部	H	ややつぶれている	—	裏↓2	—	5.2	1.4	45	—	鳥	御	三		
187		Ⅰ区			a	基部	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	7.6	1.5	—	—	—	—	—		
188		Ⅰ区			b	完	A	つぶれなし	すれている	不明	9.7	6.4	0.7	85	75°	—	—	—		一部欠損している（ほぼ完形）

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測 長さ cm	計測 幅 cm	計測 厚さ cm	計測 重さ g	計測 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
189		Ⅰ区	14—F		a	刃	D	つぶれあり	刃こぼれあり	表↓	—	4.2	1.4	—	70°		御	三		
190		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.16	b	完	A	つぶれあり	すれ・刃こぼれあり	—	11.0	6.7	1.0	127	43°					
191		Ⅰ区			b	基	G	胴部につぶれあり	—	裏↓2	—	4.5	1.4	—	—	—	—	—		
192		Ⅰ区			a	完	A	胴部のやや上方につぶれあり	すれている	—	11.4	4.7	1.6	110	73°	—	—	—		
193		Ⅰ区	10—Hの14		b	基	G	左側縁につぶれあり	—	表↓	—	5.2	1.7	123	—	鳥	御			
194		Ⅰ区			b	刃	B	つぶれなし	すれている	表↓	—	6.4	1.4	—	64°	—	—	—		
195		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.21	a	刃	C	つぶれなし	すれている	表↓	—	6.5	0.7	41	59°					
196		Ⅰ区	10—Eの6		c	胴	H	左側縁につぶれあり	—	表↓2	—	5.2	1.4	112	—	鳥	御			
197		Ⅰ区			b	刃	C	つぶれなし	すれている	裏↓	—	6.6	0.7	55	60°	—	—	—		
198		Ⅰ区	13—C		b	胴	H	ややつぶれている	—	表↓・裏↓	—	4.8	1.4	68	—	—	—	—		
199		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.16	b	基	F	つぶれあり	—	表↓	—	6.1	2.2	148	—					
200		Ⅰ区			b	基	F	つぶれたのちにすれている	—	裏↓	—	6.5	1.2	75	—	—	—	—		
201		Ⅰ区	10—Dの15		b	刃	D	ややつぶれている	すれている	表↓	—	5.6	1.3	100	66.2°	鳥	御	三		
202		Ⅰ区	11—Dの2		b	刃	B	—	すれている	裏↓	—	5.0	0.9	20	62°	鳥	御	三		
203		Ⅰ区	13・14—D	6号住居址	c	刃	C	ややつぶれている	すれている	裏↓	—	7.1	1.3	89	62°	—	—	—		弥生時代の遺構である
204		Ⅰ区			b	基	F	ややつぶれている	—	裏↓	—	6.2	1.9	75	—	—	—	—		
205		Ⅰ区			b	胴	H	つぶれあり	—	表↓	—	4.9	2.3	112	—	—	—	—		
206		Ⅱ区	4—Q	6号住居址	a	胴	H	ややつぶれている	—	表↓2	—	7.7	1.2	58	—	—	—	—		カマド付住居址
207		Ⅰ・Ⅱ区	表採		b	基	E	不明	—	裏↓2	—	—	1.2	25	—	—	—	—		半分を欠失する
208		Ⅰ区	表採		a	刃	C	ややつぶれている	すれている	不明	—	—	1.0	38	73°	—	—	—		半分を欠失する。
209		Ⅰ区		1号溝	a	胴	H	不明	—	表↓2	—	—	0.8	25	—	—	—	—		

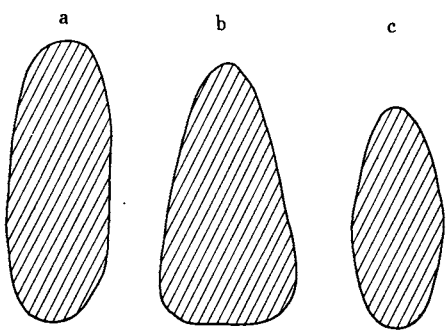
番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測 長さ cm	計測 幅 cm	計測 厚さ cm	計測 重さ g	計測 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三方田	石材	備考
210		Ⅰ区	12—Gの12		a	胴部	H	不明	—	裏↓2	—	—	0.9	20	—	鳥	御			
211		Ⅱ区		10号溝	a	完	A	つぶれている	すれている	—	12.4	5.7	1.8	175	75°	—	—	—		近世の溝である
212		Ⅱ区	10—S	2号住居址No.152	a	刃部	B	不明	すれている	裏↓3	—	—	1.2	—	58°	—	—	—		
213		Ⅰ区		10号住居址	b	完	A	ややつぶれている	すれている	—	13.0	7.7	2.0	215	77°	—	—	—		弥生時代の遺構である
214		Ⅰ区	11—Hの5		a	完	A	つぶれなし	不明	—	7.7	5.5	1.3	80	73°	鳥	御			
215		Ⅱ区	4/5—R	2号円形溝	a	基部	F	ややつぶれている	—	表↓	—	5.9	2.3	—	—					
216		Ⅰ区	9—Dの5		b	基部	E	不明	—	表↓	—	3.3	0.8	—	—	鳥	御	三		
217		Ⅰ区	9—Hの12		a	基部	F	ややつぶれている	—	表↓	—	4.9	2.0	—	—	鳥	御			
218		Ⅰ区	9—G	11号住居址No.31	a	基部	F	ややつぶれている	—	左側→	—	5.5	2.3	—	—					縄文時代の遺構である
219		Ⅰ・Ⅱ区			a	胴部	H	ややつぶれている	—	不明	—	—	0.8	—	—	—	—	—		
220		Ⅰ区	13/12—D	5号住居址	b	基部	E	つぶれている	—	裏↓	—	—	1.1	—	—	—	—	—		基部の一部にも欠損ありカマド付住居址である。
221		Ⅰ区	13/14—D	6号住居址	a	胴部	H	不明	—	表↓2、裏↑1	—	—	1.8	—	—	—	—	—		弥生時代の遺構である
222		Ⅰ区	10/9—F/G	1号方形溝	a	刃部	C	左側縁にややつぶれあり	すれている	裏↓	—	5.0	1.4	—	84°					縄文時代の遺構である
223		Ⅰ区	14—H		不明	胴部	H	ややつぶれている	—	不明	—	—	—	—	—	鳥	御	三		
224		Ⅱ区	8—Iの9		a	基部	F	つぶれなし	—	不明	—	4.4	0.7	—	—	鳥	御			
225			表採		a	刃部	C	不明	ややすれている	不明	—	5.2	0.7	—	36°	—	—	—		
226		Ⅰ区	9—Hの2		a	胴部	H	つぶれなし	—	裏↓2	—	6.7	1.2	—	—	鳥	御			
227		Ⅰ区	9—C		a	基部	F	ややつぶれている	—	表↓	—	—	0.8	—	—	鳥	御			基部の一部にも欠損あり。
228		Ⅰ区	9—Hの12		不明	胴部	H	ややつぶれている	—	表↓裏↓	—	—	1.8	—	—	鳥	御			胴部が三角形状に残存する。
229		Ⅰ区	10/9—F/G	1号方形溝	a	基部	F	不明	—	不明	—	—	0.5	—	—					
230		Ⅰ区	11—Dの13		a	胴部	H	ややつぶれている	—	裏↓2	—	5.2	1.0	—	—	鳥	御	三		

番号	挿図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 遺構	型状 a・b・c	残存状況 完・欠損	残存状況 形状	側縁状況	刃部状況	折れの方向	計測量 長さ cm	計測量 幅 cm	計測量 厚さ cm	計測量 重さ g	計測量 刃部角度	周辺部出土縄文土器 鳥井原	周辺部出土縄文土器 御領	周辺部出土縄文土器 三万田	石材	備考
231		Ⅰ区	13—D 14	6号住居址	a	刃部	C	不明	すれている	表↓	—	—	0.8	—	44.5°	—	—	—		弥生時代の遺構
232		Ⅰ区	8—G		a	刃部	B	不明	すれ・刃こぼれあり	裏↓	—	6.4	0.9	—	47.5°	鳥	御			
233		Ⅰ区	11—Cの12		a	基部	F	つぶれなし	—	裏↓	—	5.5	1.6	80	—	鳥	御	三		
234		Ⅱ区	10—S	2号住居址	a	基部	E	つぶれなし	—	不明	—	5.2	0.5	21	—					
235		Ⅰ区	8—Hの18		不明	刃部	B	—	すれている	不明	—	6.1	1.1	25	71°	鳥	御			
236	16	Ⅰ区	14—Hの5	Ⅱ層縄文一括	a	刃部	D	つぶれ・すれあり	すれ・刃こぼれあり	表↓	—	5.0	0.9	85			御	三	片岩	基部の一部を欠失する
237	27	Ⅰ区	10—Hの5	Ⅱ層縄文一括	c	完	A	両側縁が研磨したようにすれている	刃こぼれあり	—	8.3	6.1	1.2	73		鳥	御		片岩	表面も使用による摩滅がある
238	17	Ⅱ区	10—S	2号住居址No.4	b	完	A	すれている	刃こぼれあり	—	14.1	6.0	1.7	228					片岩	局部磨製である
239	23	Ⅰ区	14—Fの7	Ⅱ層下面	b	完	A	右側縁につぶれあり	刃こぼれあり	—	11.5	7.4	1.2	115		鳥			安山岩	
240	29	Ⅰ区	12—H	2号円形溝	b	完	A	つぶれなし	わずかにすれている	—	9.3	5.6	1.2	80		—	—	—	安山岩(サヌカイト?)	
241	19				a	刃部	B	—	研ぎ出している	表↓	—	—	0.8	58		—	—	—	安山岩	
242	14	Ⅰ区	6—Hの6	Ⅱ層下面	a	胴部	H	つぶれあり	—	表↓裏↓	—	6.0	1.3	103	—	鳥	御	三	安山岩	磨製石斧であり表面が剝離している
243	1	Ⅱ区	5—Q	1号円形溝	a	刃部	C	すれている	強くすれている	表↓	—	7.9	1.4	180					安山岩	表の面が強く摩耗している
244	20	Ⅱ区		9号溝	不明	刃部	B	—	刃こぼれあり 磨滅している	裏↓	—	7.9	1.7	80		—	—	—	安山岩	近世の溝
245	21	Ⅰ区	14—Hの19	Ⅱ層縄文一括	不明	刃部	B	すれている	すれている	表↓	—	7.1	1.0	70			御		安山岩	表の面が摩耗している
246	5	Ⅰ区	6—Hの6	Ⅱ層下面	a	刃部	B	すれている	刃こぼれあり 研ぎ出している	不明	—	—	1.9	88		鳥	御	三	安山岩	胴部から刃部にかけてななめに割れている
247		Ⅰ区	9—F 10—G	方形溝	不明	刃部	B	—	すこしすれている	表↓裏↓	—	8.0	1.0	37					安山岩	
248	15	Ⅱ区	10—S	2号住居址No.9	a	完	A	すれている	刃こぼれあり 研ぎ出している	—	10.6	5.8	1.0	110					片岩	表面が摩耗している
249		Ⅰ区	10—Cの11	Ⅱ層下面	不明	基部	E	すこしすれている	—	不明	—	5.7	0.7	38	—	鳥	御		安山岩	表面がすれている
250																				
251																				

石斧の残存状況及び形状分類のモデル一覧（第22表の表記の説明）



石斧の残存状況モデル



石斧の形状分類モデル

第23表　円盤状石器の一覧表

（木崎作成）

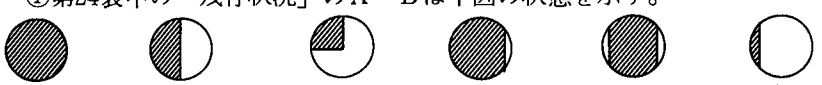
番号	挿図番号	出土地			残存状況		側縁状況	折れの方向	計測量（cm）（g）				周辺部出土土器			備考
		地区	グリッド	遺構	完,欠損	形状			長径	短径	厚さ	重さ(g)	鳥井原	御領	三万田	
1		Ⅰ区	6－F	1号溝	完	A	よわいすれ	—	6.9	6.0	1.3	93				縄文時代の遺構ではない
2	第130図1	Ⅱ区		5号住居址一括	完	A	すれている	—	10.5	9.3	2.0	78				上部側縁の4分の1周に強いつぶれあり　縄文時代の遺構ではない　安山岩
3	第130図2	Ⅰ区	10－Fの25		欠	D	よわいすれ	表↓	(9.5)	9.5	1.0	(132)	鳥	御		片岩
4		Ⅳ区		4号住居址覆土	欠	D	すれていない	裏↓	9.2	(9.0)	1.4	(162)				縄文時代の遺構ではない。
5		Ⅰ区	7－Iの18		欠	B	すれている	表↓	11.4	(10.5)	2.1	(168)	鳥	御		
6		Ⅰ区	10－Hの7		欠	B	すれていない	裏↓	(11.0)	(7.8)	1.0	(50)	鳥	御		片岩
7		Ⅰ区	7－F		欠	F	すれていない	表↓	—	—	1.3	(45)	鳥		三	安山岩
8	第130図3	Ⅰ区	8－Hの20		欠	D	すれていない	裏↗	9.0	(9.0)	1.0	(110)	鳥	御		安山岩
9		Ⅰ区	9－Hの4		完	A	一部にすれあり	—	9.0	8.3	1.3	115	鳥	御		安山岩
10		Ⅰ区	10－Hの10		完	A	一部にすれあり	—	9.1	8.0	1.7	190	鳥	御		片岩
11	第130図4	Ⅰ区	14－Gの18	第Ⅱ層下面	完	A	すれていない	—	8.4	7.8	1.5	122		御	三	上部側縁の8分の1周につぶれあり　安山岩
12		Ⅰ区	16－Hの4		完	A	すれている	—	8.5	7.8	1.6		鳥	御		
13		Ⅱ区		5号住居址一括	完	A	すれていない	—	10.9	9.8	1.8	275				片岩 縄文時代の遺構ではない
14		Ⅰ区	14－Gの3		完	A	すれている	—	8.3	7.5	1.3	135		御	三	安山岩
15	第130図6	Ⅰ区		表　採	完	A	よわいすれ	—	9.8	9.7	1.8	215				安山岩 片面は礫面である
16		Ⅰ区	9－Dの12		欠	F	すれていない	裏↑	10.4	—	1.8	(100)		御	三	片岩
17	第131図7	Ⅱ区		2号住居址 pit 1	完	A	よわいすれ	—	10.6	10.4	1.6	252				表面及び稜もすれている 縄文時代の遺構である　安山岩
18	第131図8	Ⅱ区		2号住居址	欠	D	すれている	表↓	(10.7)	8.9	2.3	(220)				同上 取り上げ番号No16　凝灰岩
19	第131図9	Ⅰ区	12－Dの20		完	A	すれていない	—	7.4	6.6	1.2	75	鳥	御	三	片面は礫面である　上部側縁につぶれあり
20				表　採	欠	E	一部にすれあり	表↓裏↑	8.7	—	1.6					
21		Ⅱ区		4号住居址覆土	欠	D	すれていない	表↓	(8.7)	8.3	1.2	(130)				片岩

22	第131図10	Ⅰ区	H－9		欠	B	すれている	不明	(8.8)	—	0.9		鳥	御		
23	第131図11	Ⅰ区	8－Ⅰの9		完	A	すれていない	—	9.2	7.7	1.2	115	鳥	御		上部側縁がつぶれている 片岩
24		Ⅰ区	8－Ⅰの9		完	A	すれていない	—	7.3	6.9	1.1	75	鳥	御		片岩
25	第131図12	Ⅰ区	14－Fの8	第Ⅱ層下面	完	A	一部にすれあり	—	6.9	6.7	1.7	110		御	三	上部側縁の4分の1周と下部側縁の一部につぶれあり　安山岩
26		Ⅰ区	10－Hの4		欠	D	やや一部にすれあり	表↓	8.9	8.7	2.5	(231)	鳥	御		安山岩 表面に研磨された部分あり
27		Ⅰ区	10－Gの10		完	A	すれていない	—	9.5	8.5	1.9	160				
28	第132図14	Ⅰ区	8－G 9－H	11号住居址	完	A	両側の一部にすれあり	—	9.4	9.1	1.1	125	鳥	御		安山岩 縄文時代の遺構(取り上げ番号3)
29		Ⅰ区	10－Hの4		欠	F	すれていない	裏↑	(7.5)	—	1.0	(31)	鳥	御		表面に研磨された部分あり片岩
30	第132図15	Ⅰ区	10－Hの15		完	A	〃	—	7.7	7.1	1.7	105	鳥	御		上部側縁の6分の1周ほどに強いつぶれがある　安山岩
31	第132図16	Ⅰ区	14－Hの8		完	A	〃	—	7.4	7.2	1.7			御	三	側縁の全周につぶれがある 扁岩
32	第132図17	Ⅰ区		第Ⅱ層一括	欠	D	〃	裏↑	8.0	(6.8)	1.7	(100)				上部側縁約半周ほどつぶれている　安山岩
33	第132図18	Ⅰ区	7－Ⅰの24	第Ⅱ層下面	完	A	〃	—	9.1	9.1	1.6	195		御		上部側縁の8分の1周ほどにややつぶれた部分あり　安山岩
34	第132図19	Ⅰ区	9－G		完	A	〃	—	8.8	8.6	1.6		鳥	御		上部側縁8分の1周ほどにややつぶれた部分あり　安山岩
35	第132図20	Ⅰ区	13－H		欠	D	〃	表↘	—	7.2	1.4	(125)	鳥	御		安山岩
36	第132図21	Ⅰ区	7－Ⅰの18		欠	B	〃	表↘	11.4	—	2.1	(175)	鳥	御		安山岩
37	第130図5	Ⅰ区	10－Hの16		完	A	すれている	—	10.6	10.2	1.9	300	鳥	御		安山岩　一面自然面
38		Ⅱ区		5号住居址一括	完	A	すれている	—	9.5	8.5	1.6	145				安山岩
39		Ⅰ区	7－Gの15		—	—	—	—	7.9	6.3	1.9	187	鳥		三	安山岩　未完成品
40		Ⅱ区	P－5	一括	完	F	すれていない		—	(6.9)	1.2	(35)				片岩
41		Ⅰ区		6号住居址	完	F	すれていない		—	(7.6)	0.55	(25)				安山岩
42		Ⅰ区	10－Hの17	Ⅱ層下	欠	C	すれている		—	—	1.2	(80)	鳥	御		片岩
43		Ⅰ区	9－Dの4	Ⅱ層下	完	A	すれていない		5.9	4.8	0.95	45		御		安山岩　小型である
44		Ⅰ区	13－Gの3		完	A	すれていない		8.1	7.8	0.8	85	鳥	御		片岩
45		Ⅰ区	9－Hの12	Ⅱ層下面	欠	D			7.9	7.4	1.7	145	鳥	御		安山岩

46		Ⅰ区	13—Gの3		欠	D	すれている		—	—	1.55	130	鳥	御		安山岩
47		Ⅰ区	10—Hの4		完	A	すれている		8.45	7.6	1.6	160	鳥	御		安山岩
48		Ⅵ区		S0—02一括	欠	B	すれている		11.1	—	1.3	110				安山岩
49		Ⅰ区	9—Cの18	Ⅱ層下面	欠	B	すれている		9.2	—	1.4	105		御		安山岩
50		Ⅰ区	10—Hの12	Ⅱ層下面	完	A	すれている		8.1	7.7	1.1	85	鳥	御		安山岩　サヌカイト状である
51		Ⅱ区		2号住居址No 2	欠	D	すれている		9.1	7.4	1.6	170				安山岩
52		Ⅰ区		8号住居址	欠	D	すれている		9.0	—	1.7	140				安山岩
53		Ⅰ区		8号住居址	完	A	すれている		6.4	5.7	1.3	65				安山岩
54		Ⅰ区	8—Hの21		完	A	すれていない		8.6	8.4	0.9	110	鳥	御		片岩
55		Ⅰ区	6—Gの3	Ⅱ層下	欠	B	すれていない		8.4	—	1.5	90			三	安山岩
56		Ⅰ区	10—Hの1		欠	D	すれている		7	—	1.1	90	鳥	御		片岩
57		Ⅰ区		方形溝埋土中A区	完	A	すれている		9.1	8.4	1.6	160				片岩
58		Ⅰ区		方形溝A区	完	A	すれていない		7.2	7.1	0.9	80				片岩
59		Ⅰ区		Ⅱ層一括	完	A	すれていない		7.9	6.4	1.5	110				安山岩
60		Ⅰ区		表　採	完	A	すれていない		9.6	8.6	1.6	200				安山岩
61				〃	完	A	すれていない		9.2	8.0	1.6	155				安山岩
62		Ⅰ·Ⅱ区		工事終了後表採	欠	B	すれていない		7.9	—	1.3	60				安山岩
63																
64																
65																
66																

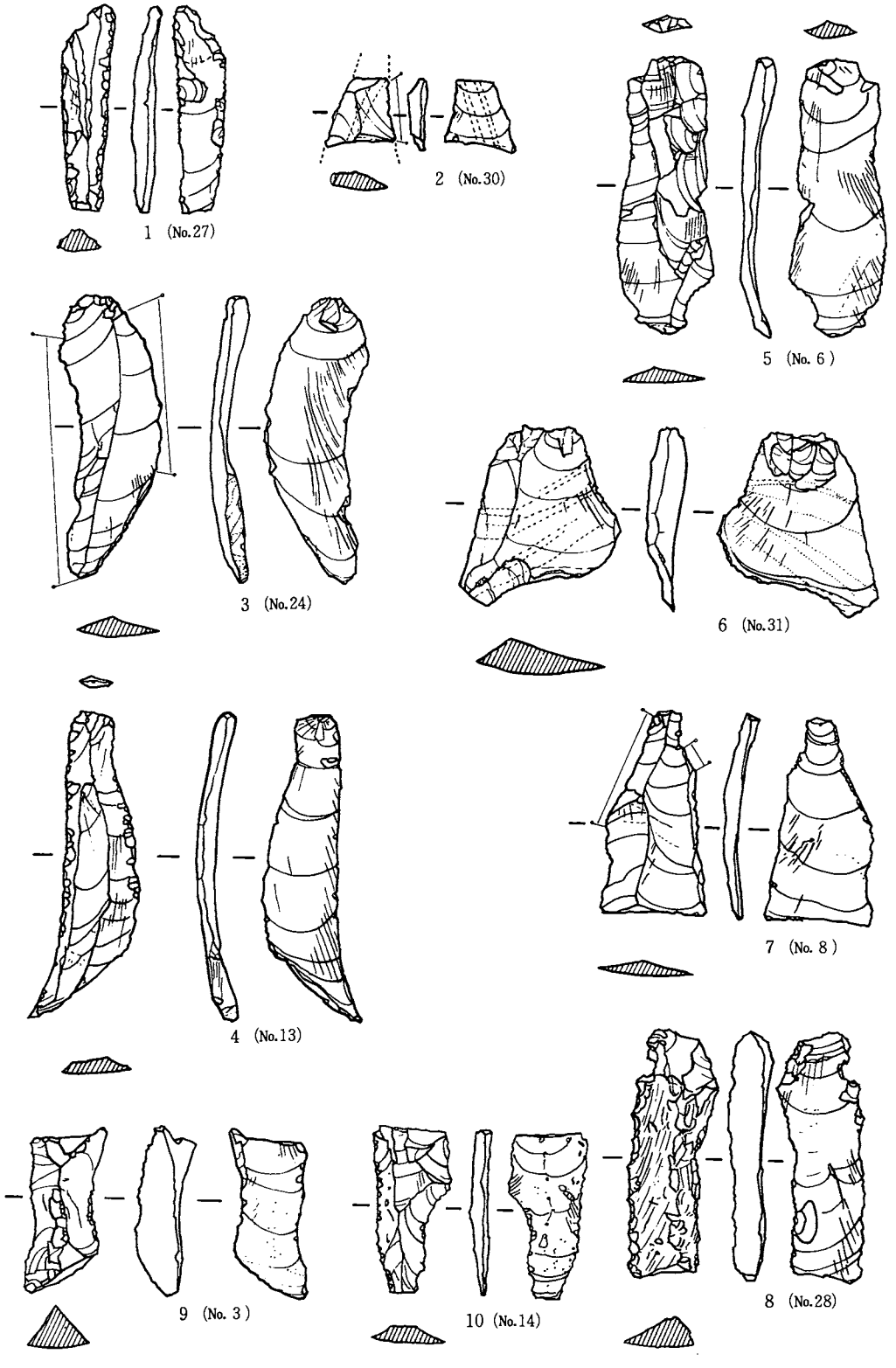
※第24表及第130、131、132図中の表記の説明

①第24表中の「残存状況」のA～Bは下図の状態を示す。

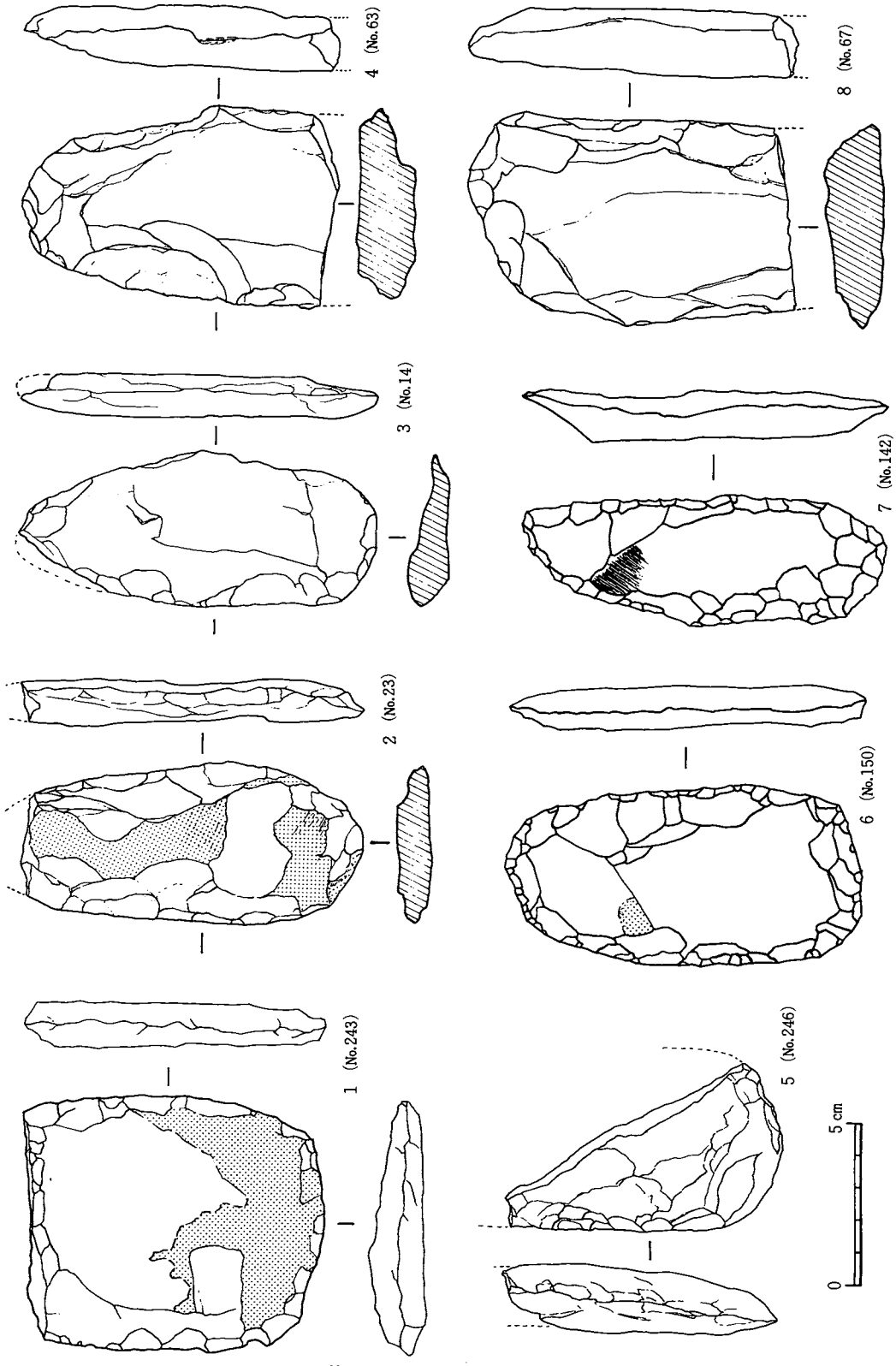


A　B　C　D　E　F

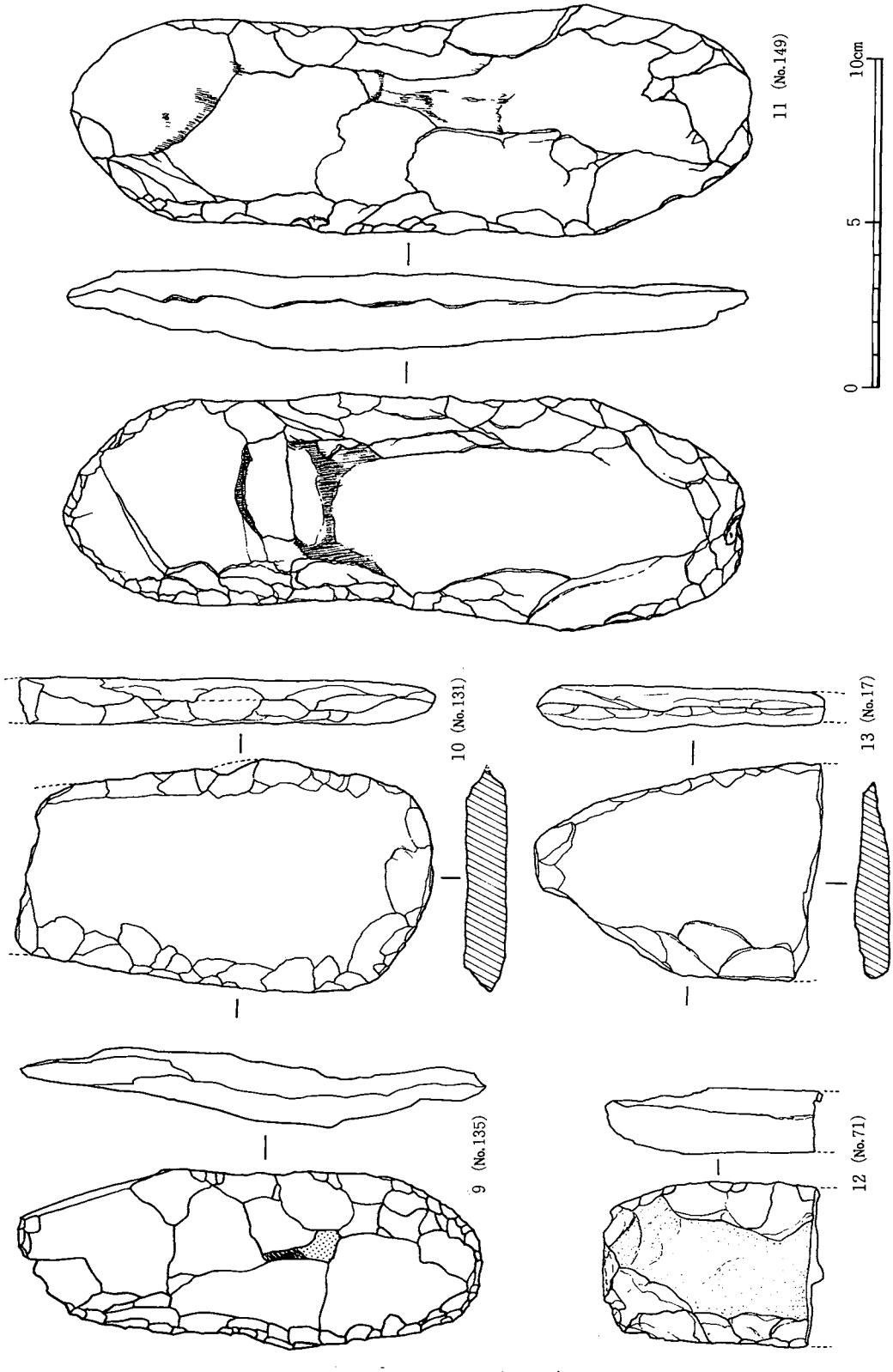
②第130、131、132図中においてスクリーントーンをかけた部分は、使用により刃こぼれをおこしている部分と認めた所である。



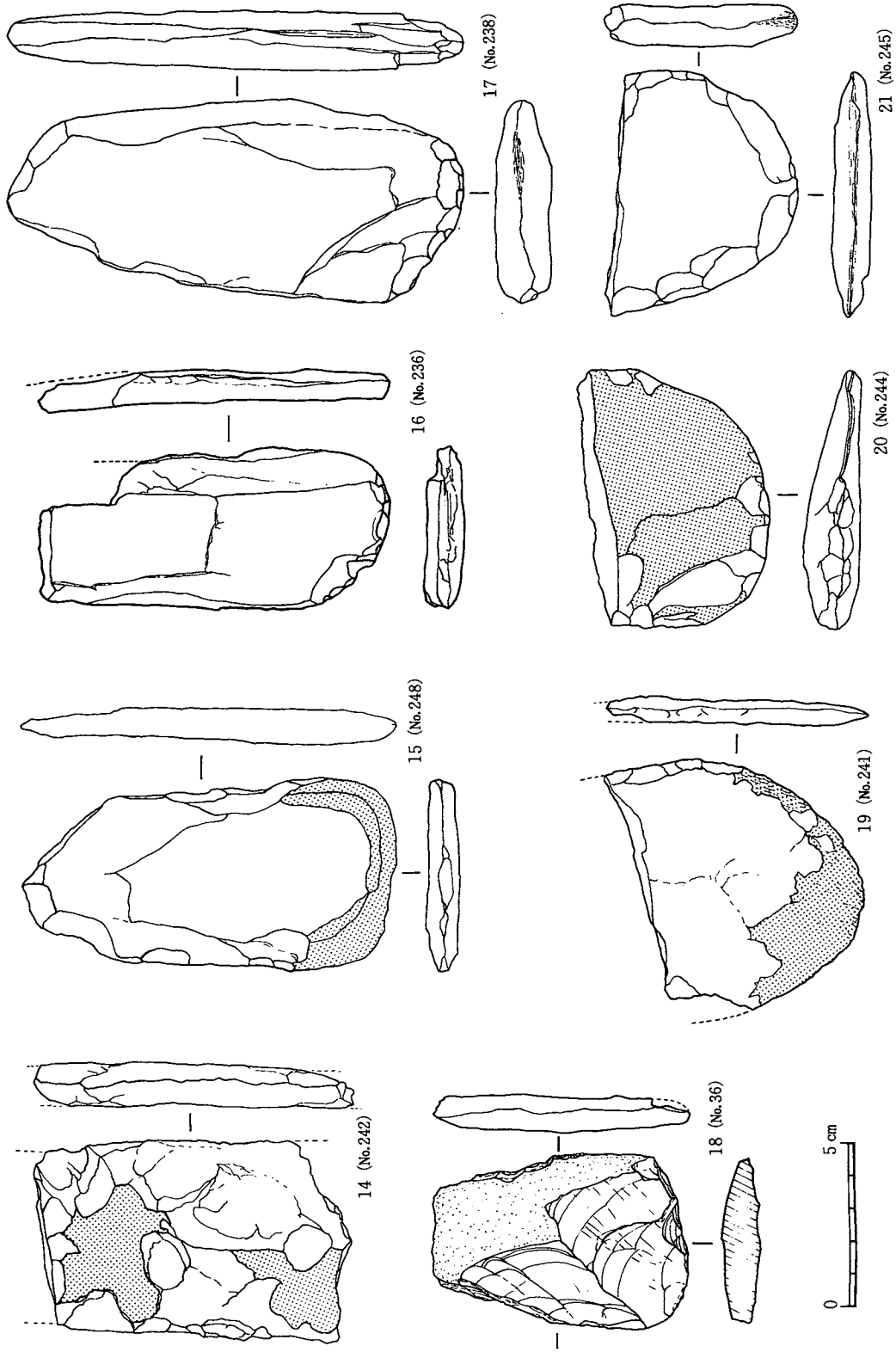
第122図　黒曜石縦長剝片石器



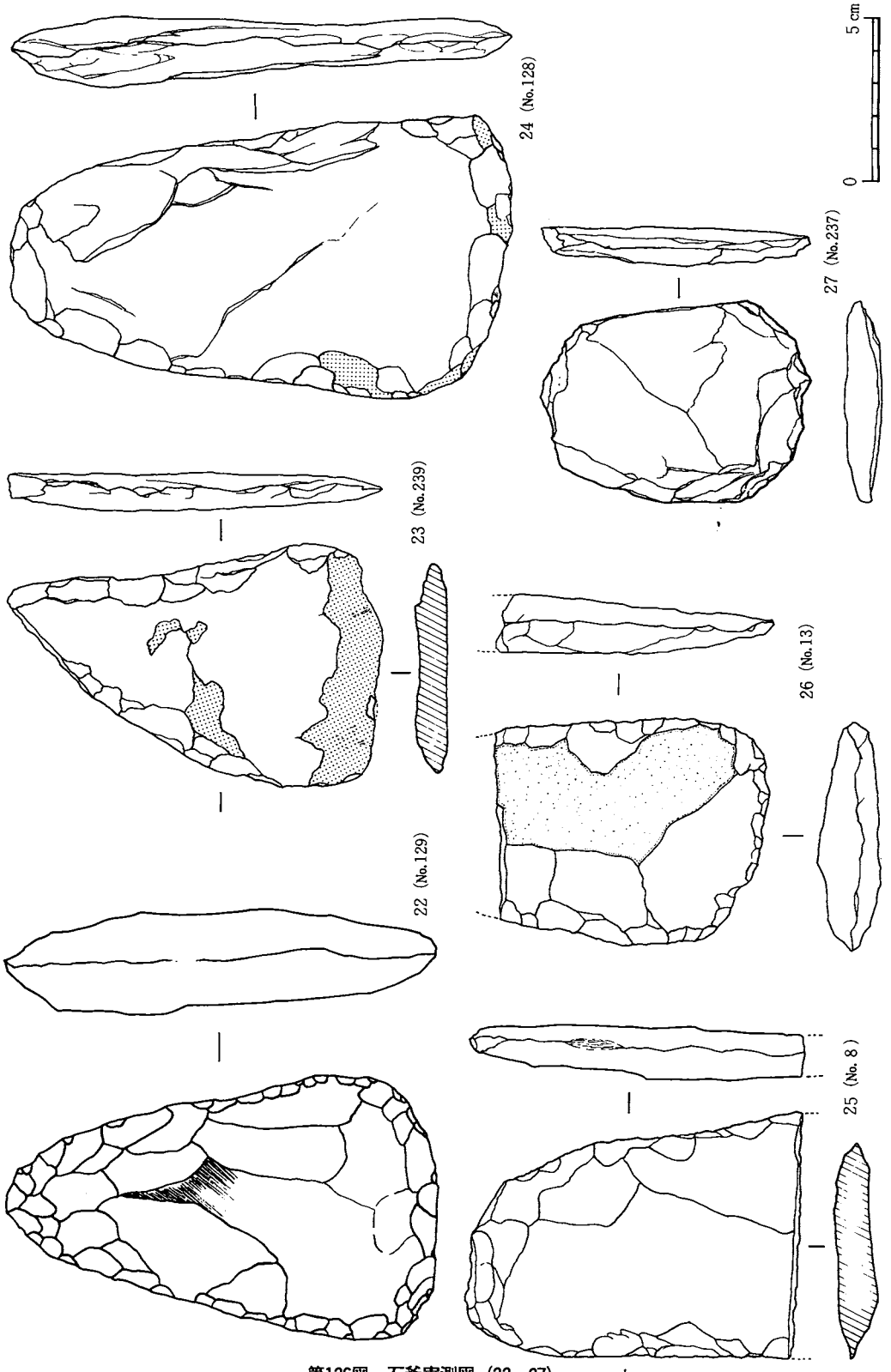
第123図　石斧実測図（１～８）



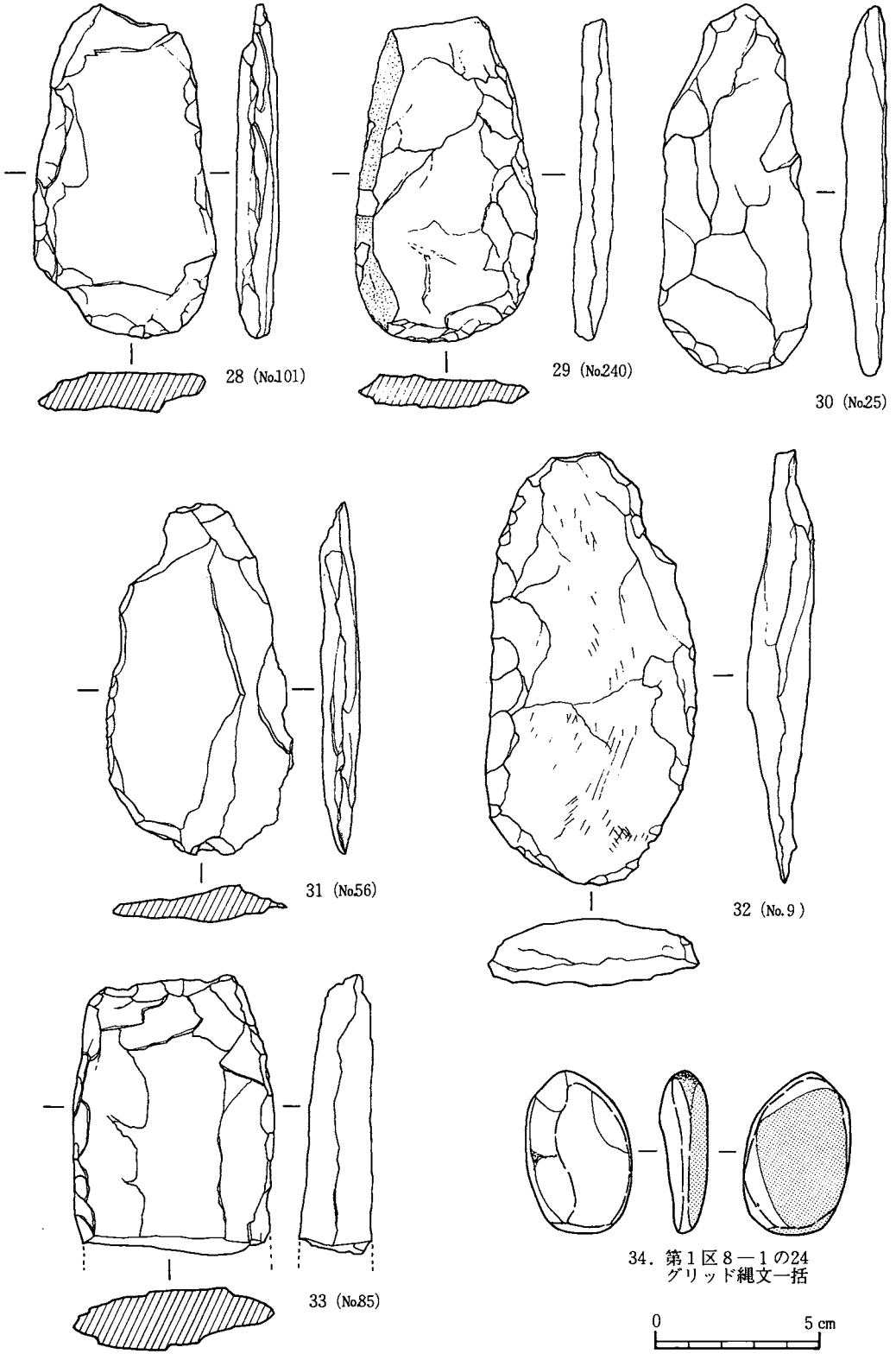
第124図　石斧実測図（9～13）



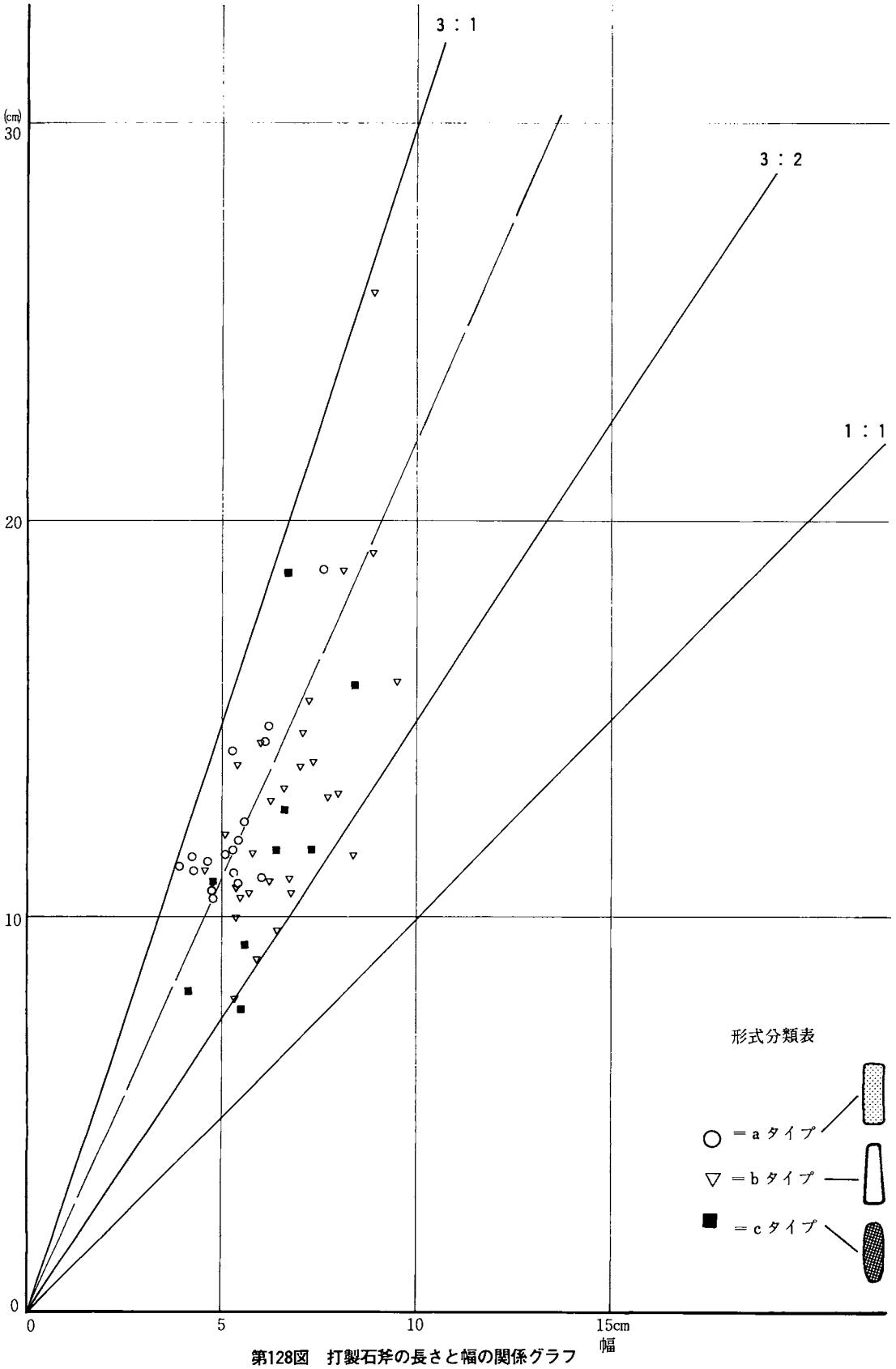
第125図　石斧実測図（14～21）



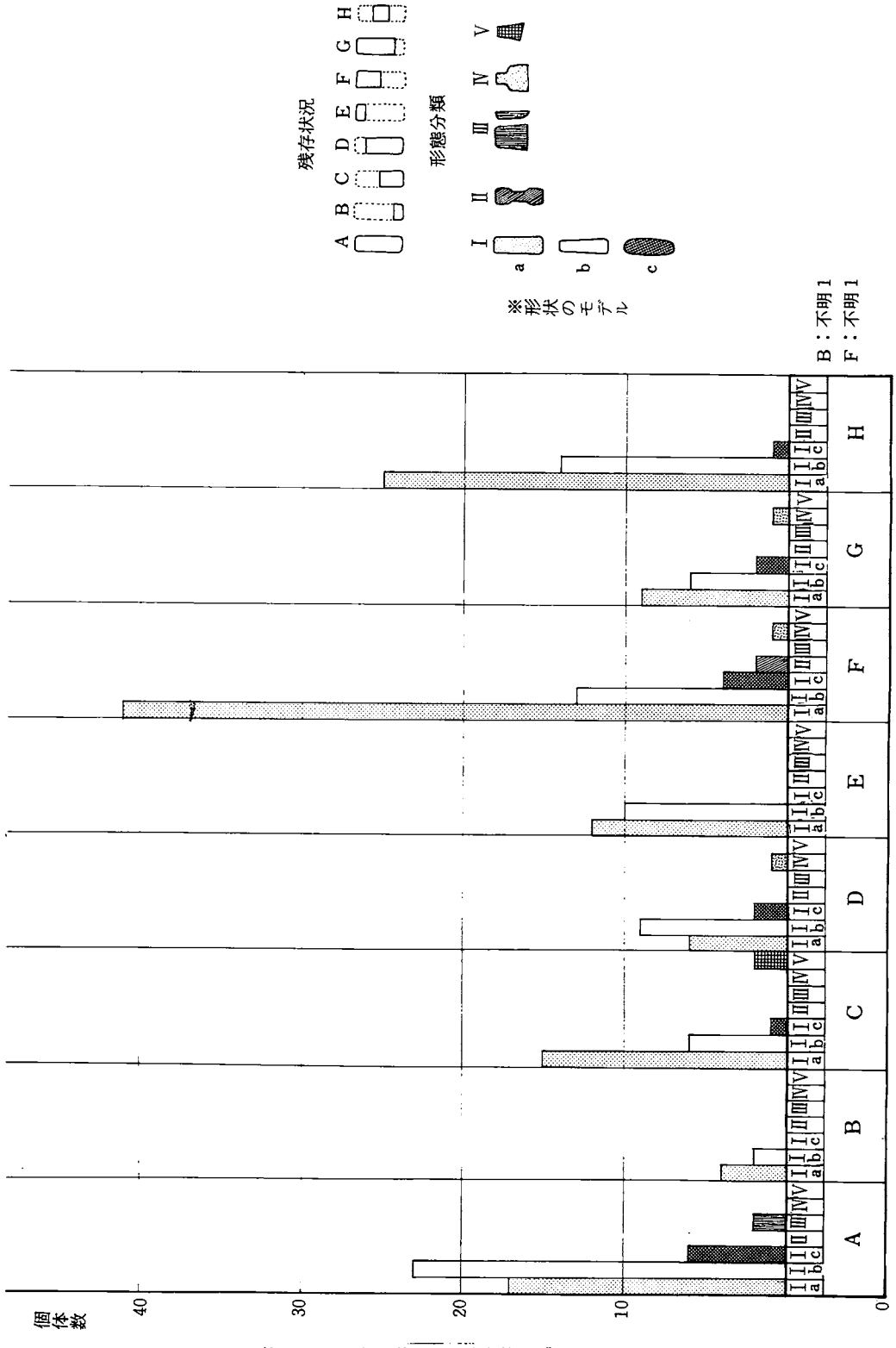
第126図　石斧実測図（22～27）



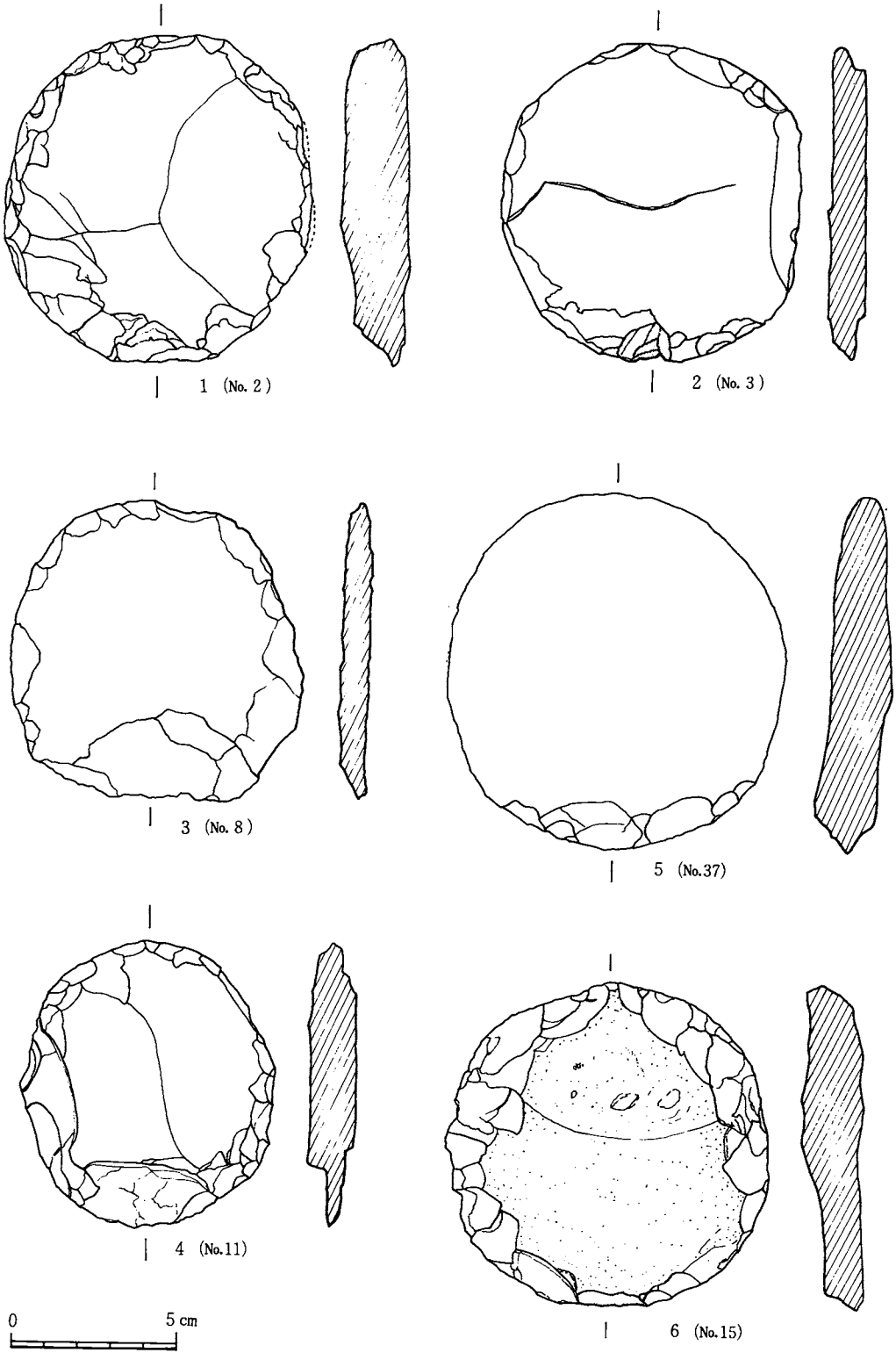
第127図　石斧及び磨石実測図（28～34）



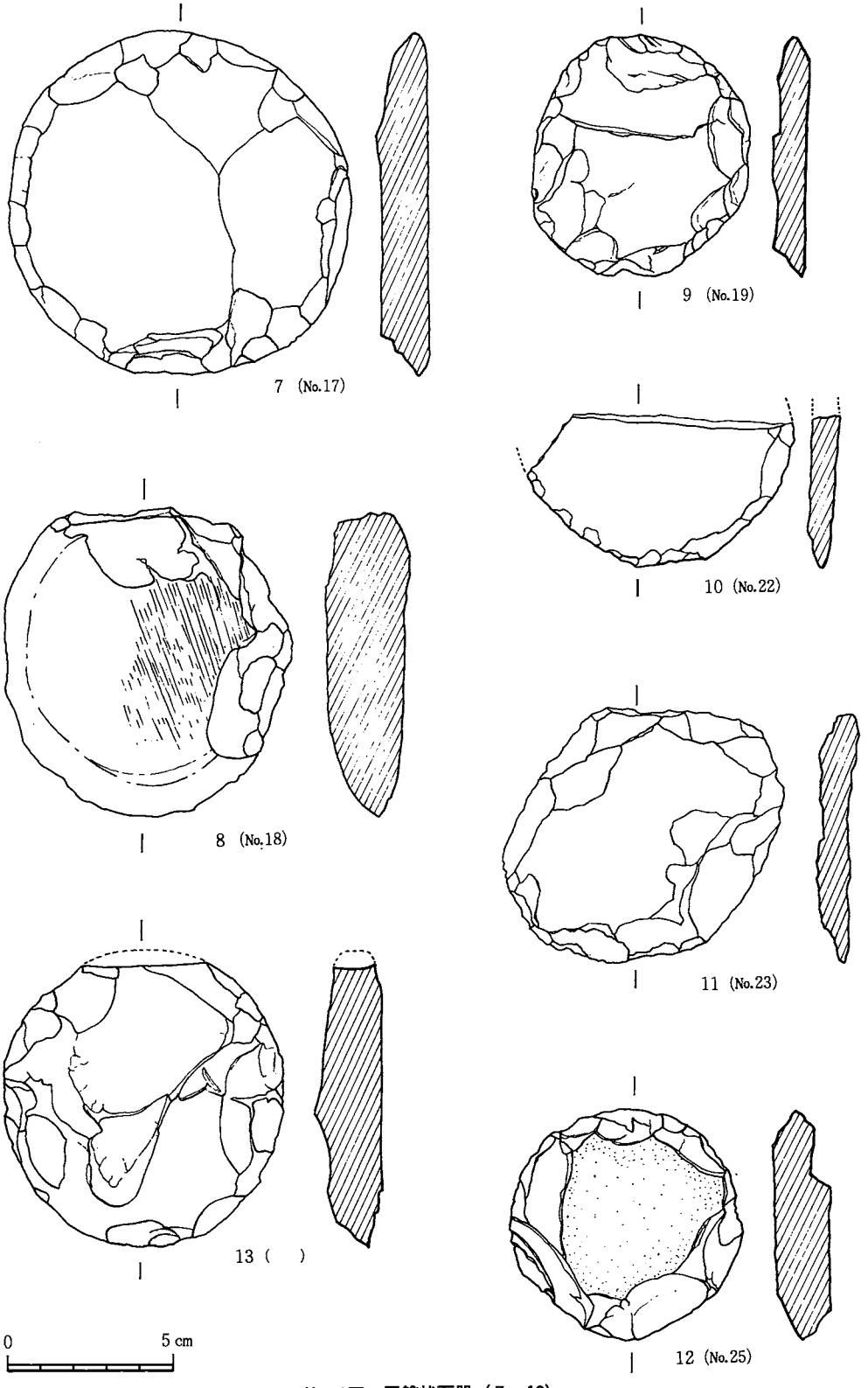
第128図　打製石斧の長さと幅の関係グラフ



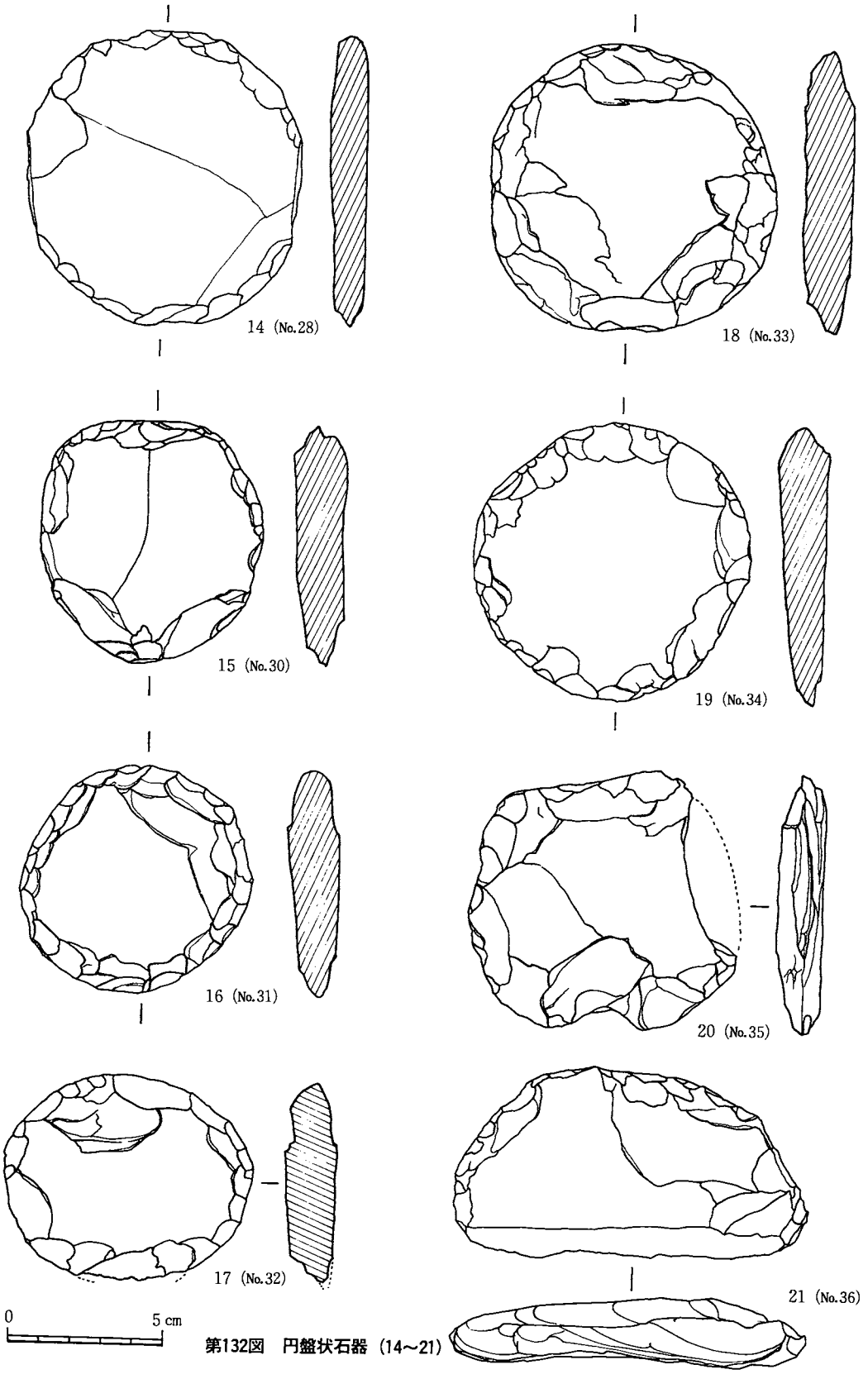
第129図　打製石斧形態別残存状況グラフ



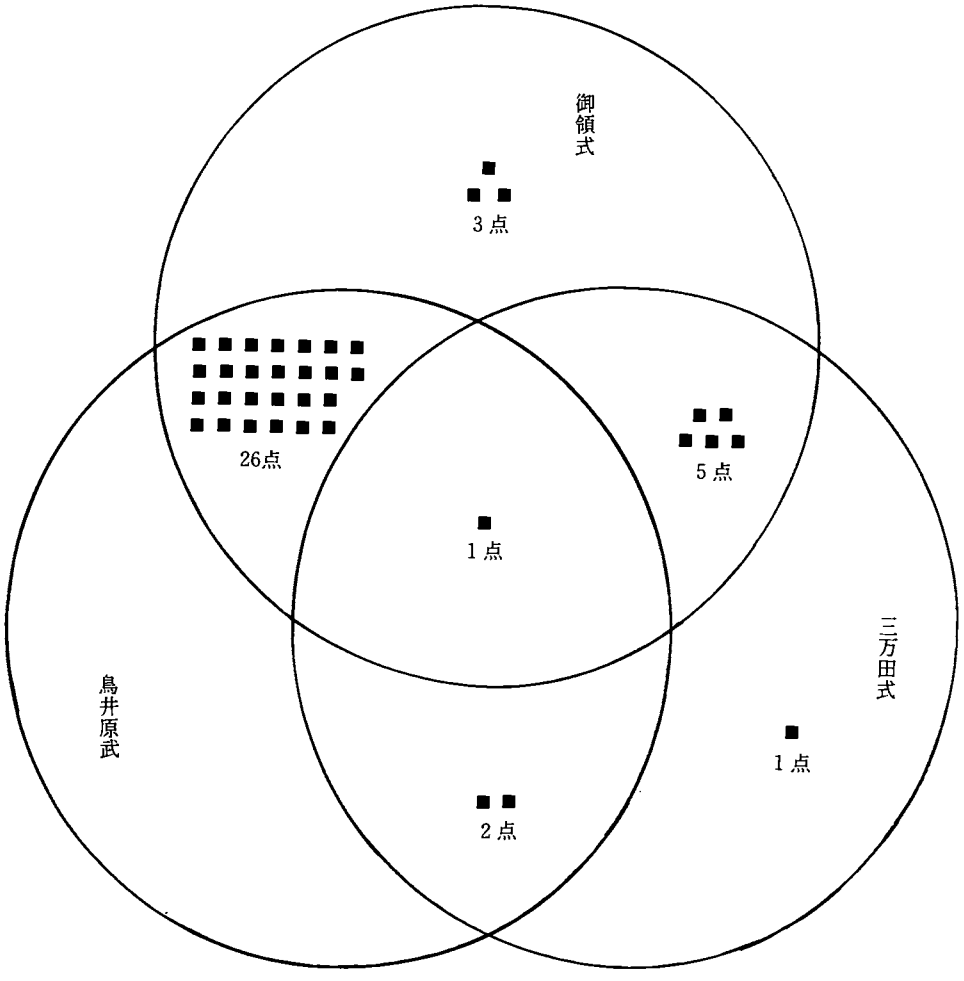
第130図　円盤状石器（1～6）



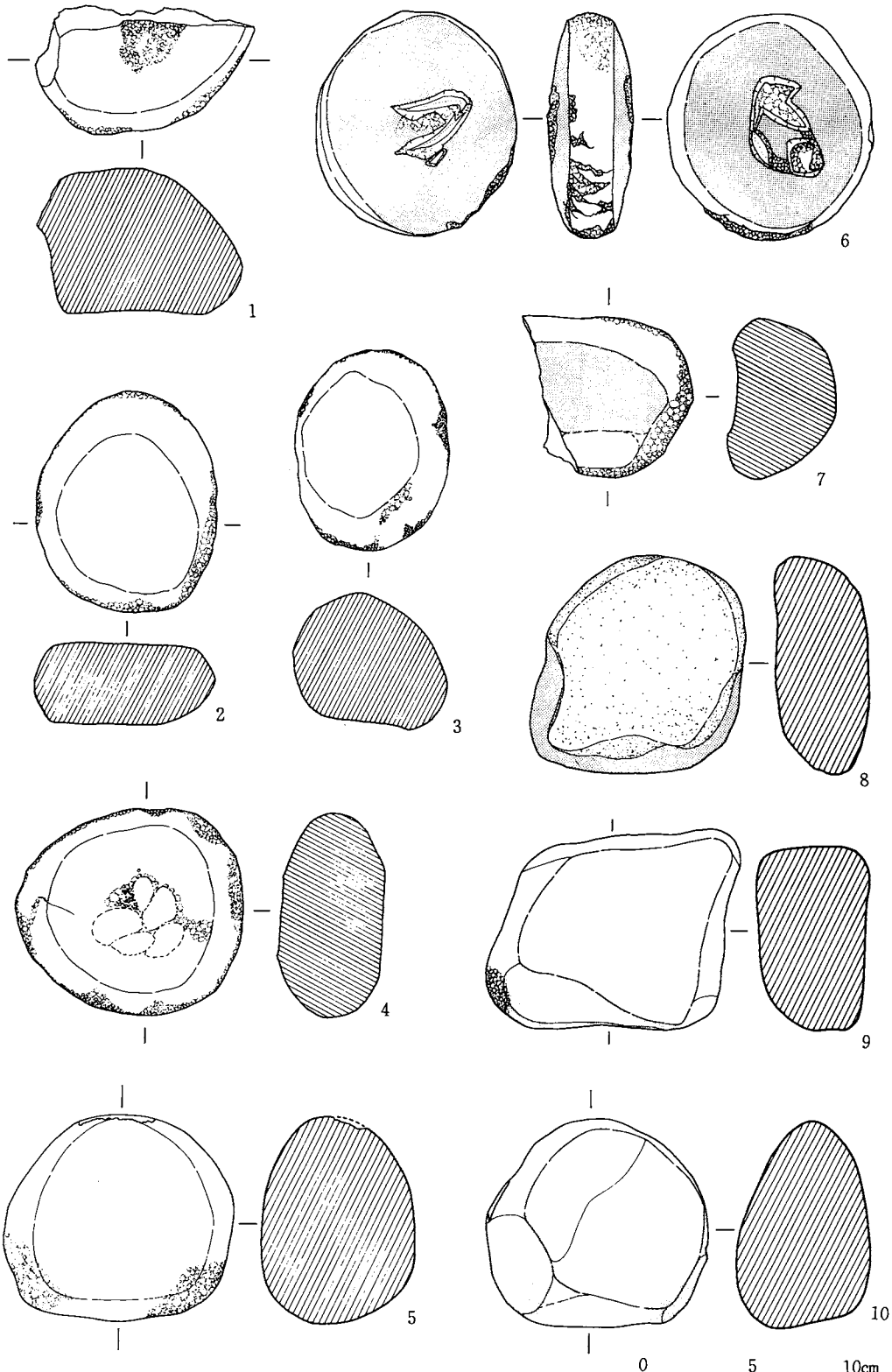
第131図　円盤状石器（7～13）



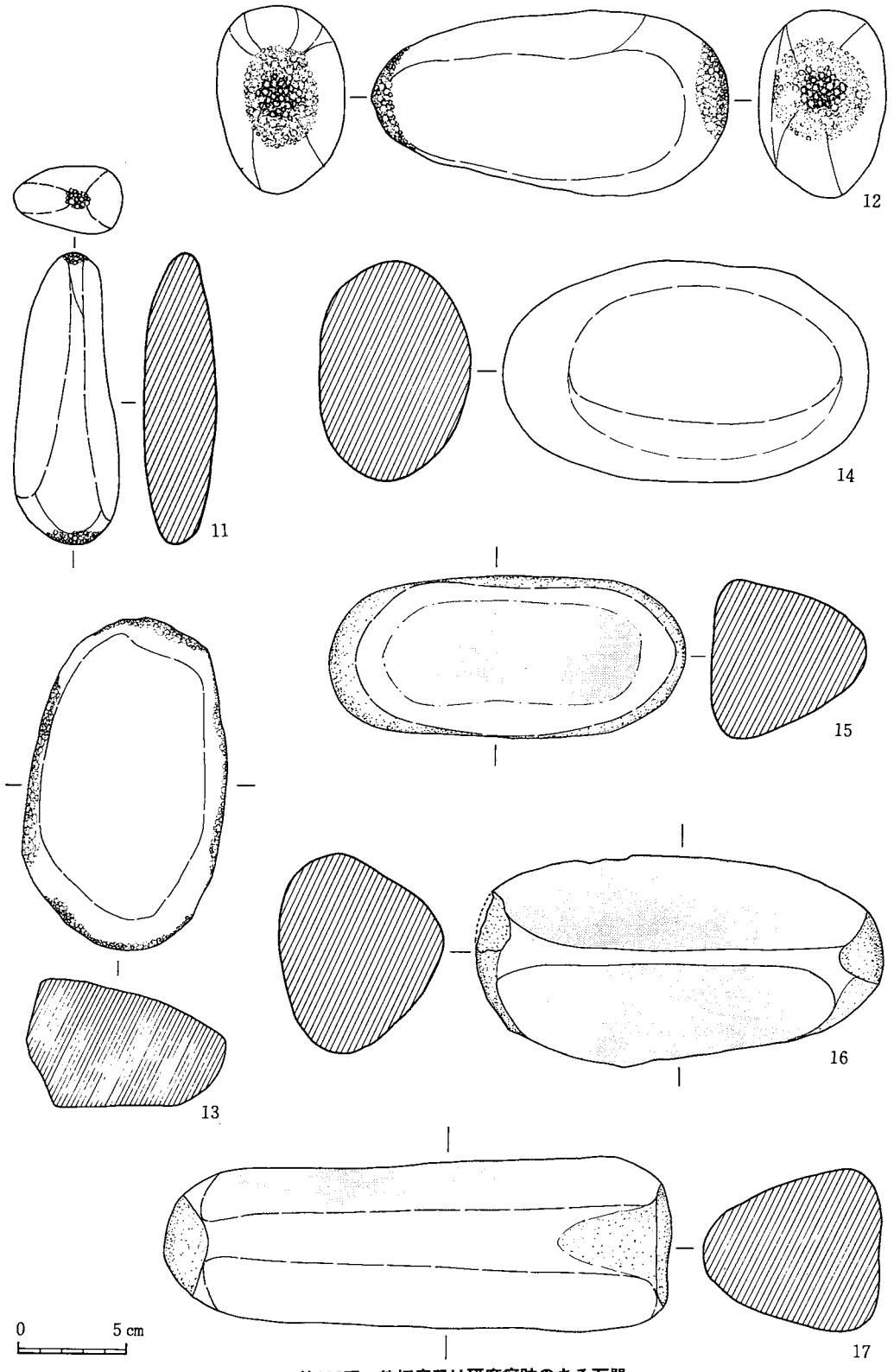
第132図　円盤状石器（14～21）



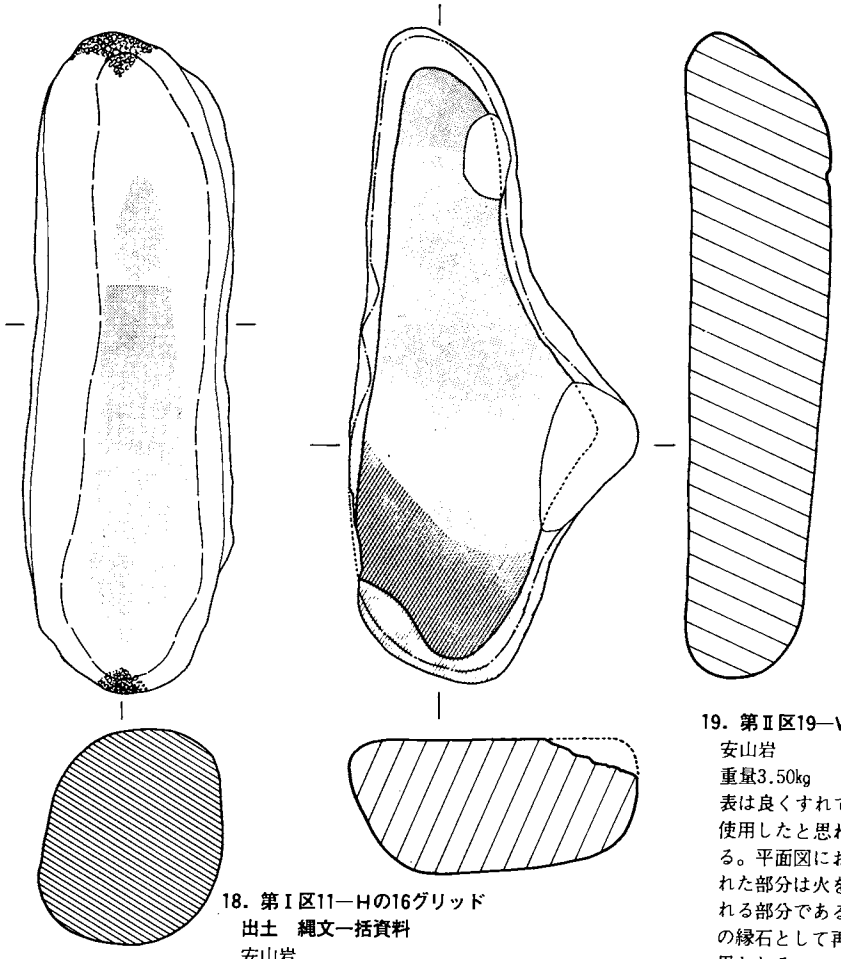
第133図　円盤状石器に伴う土器型式



第134図　敲打痕又は研磨痕のある石器



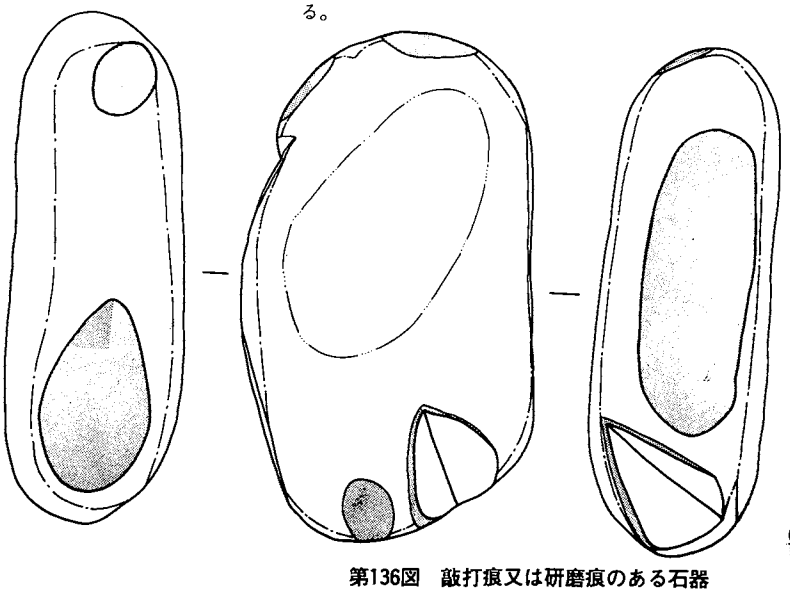
第135図　敲打痕又は研磨痕跡のある石器



18. 第Ⅰ区11—Hの16グリッド出土　縄文一括資料
安山岩
両側端に敲打痕が残る。長い側面にはすりへった部分がある。

19. 第Ⅱ区19—Wグリッド出土
安山岩
重量3.50kg
表は良くすれている。裏面も使用したと思われ、平坦である。平面図において斜線を入れた部分は火をうけたと思われる部分である。おそらく炉の縁石として再利用されたと思われる。

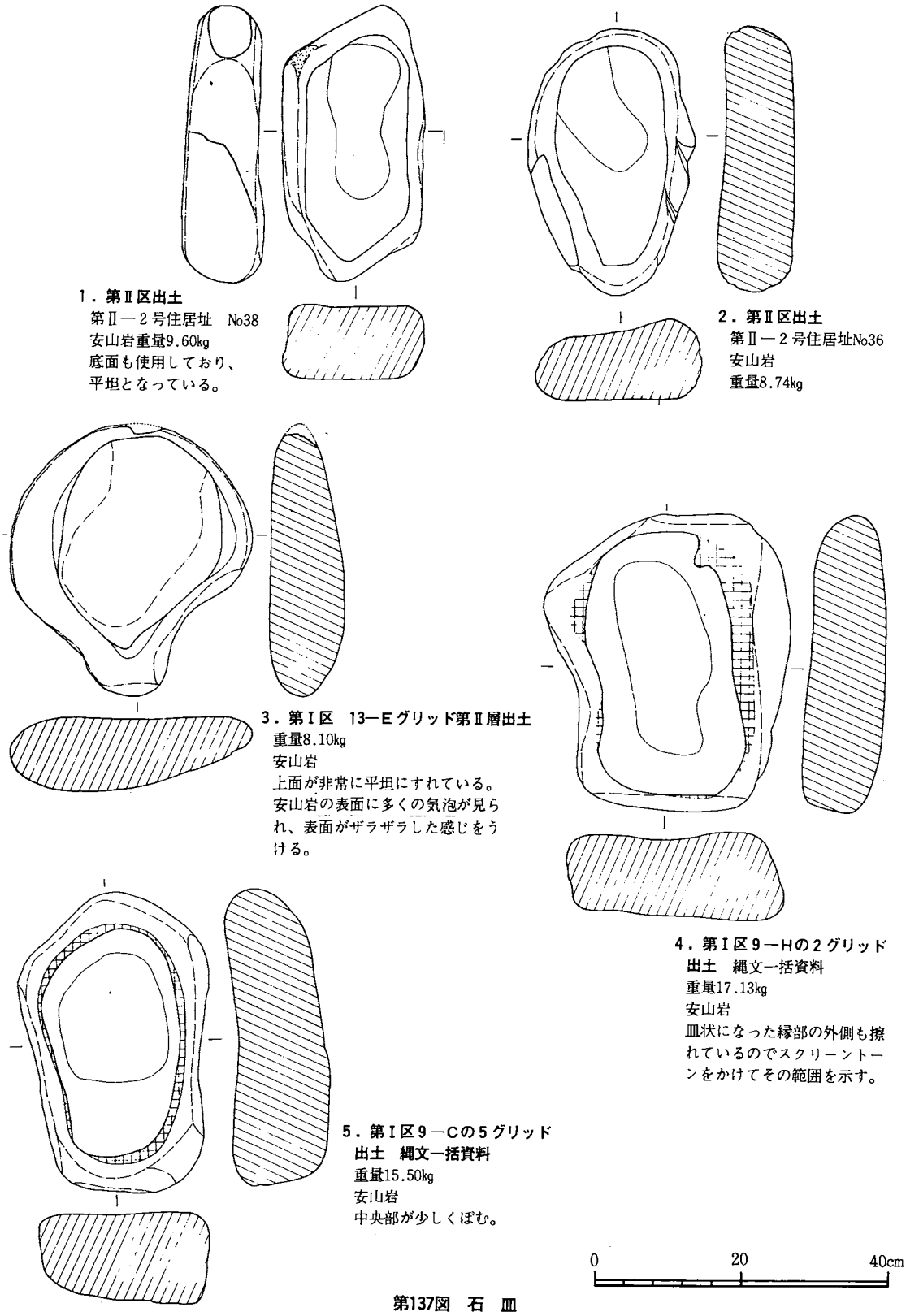
0　10cm



20. 第Ⅰ区　近世溝中出土
安山岩
ハート形になっている。部分は砥石として使用されたと思われる。極部的に「V」字形に研ぎべりが見られる。

0　5 cm

第136図　敲打痕又は研磨痕のある石器



1．第Ⅱ区出土
第Ⅱ－２号住居址　No38
安山岩重量9.60kg
底面も使用しており、
平坦となっている。

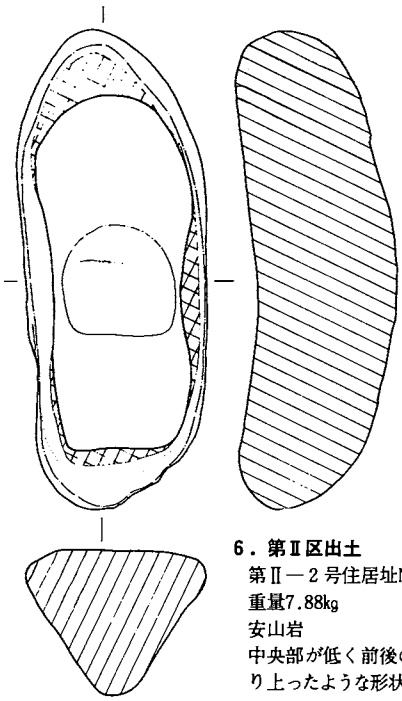
2．第Ⅱ区出土
第Ⅱ－２号住居址No36
安山岩
重量8.74kg

3．第Ⅰ区　13－Ｅグリッド第Ⅱ層出土
重量8.10kg
安山岩
上面が非常に平坦にすれている。
安山岩の表面に多くの気泡が見られ、表面がザラザラした感じをうける。

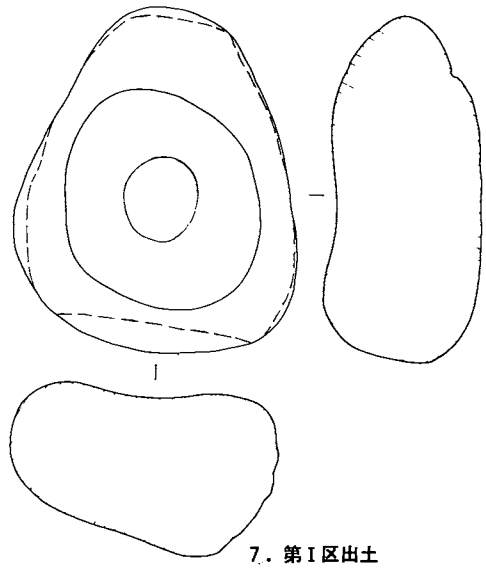
4．第Ⅰ区９－Ｈの２グリッド出土　縄文一括資料
重量17.13kg
安山岩
皿状になった縁部の外側も擦れているのでスクリーントーンをかけてその範囲を示す。

5．第Ⅰ区９－Ｃの５グリッド出土　縄文一括資料
重量15.50kg
安山岩
中央部が少しくぼむ。

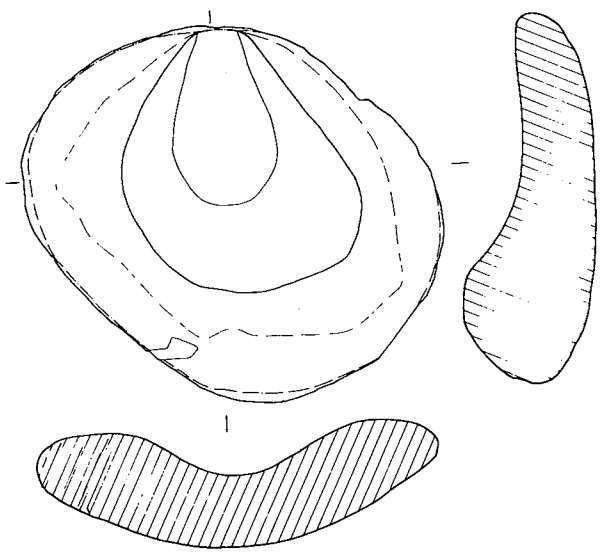
第137図　石　皿



6．第Ⅱ区出土
第Ⅱ－2号住居址No12
重量7.88kg
安山岩
中央部が低く前後の端部がそり上ったような形状を呈する。



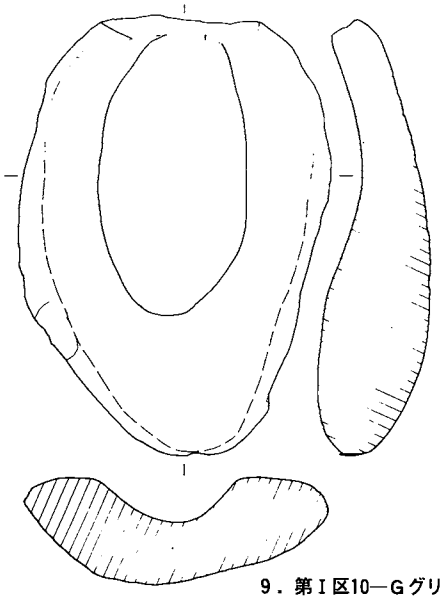
7．第Ⅰ区出土
第Ⅰ－6号住居址(弥生時代)
安山岩(角肉石安山岩？)
重量18.48kg
巨礫の平坦な一面の中央に円形（長径22cm・短径19cm）のくぼみ（深さ1cm）が見られ内面はよくすりへっている。



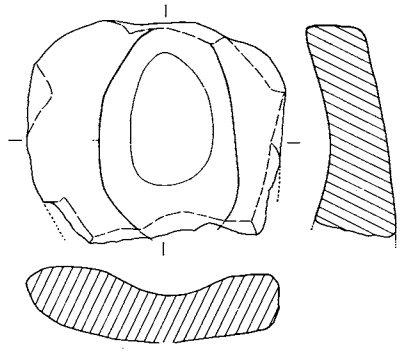
8．第Ⅱ区出土
第Ⅱ－2号住居址No33
安山岩
重量19.10kg
中央部は強くくぼみ先端は片口状になっている。くぼみの周辺部は平坦になるように面調整をした様子がうかがえる。

0　20　40cm

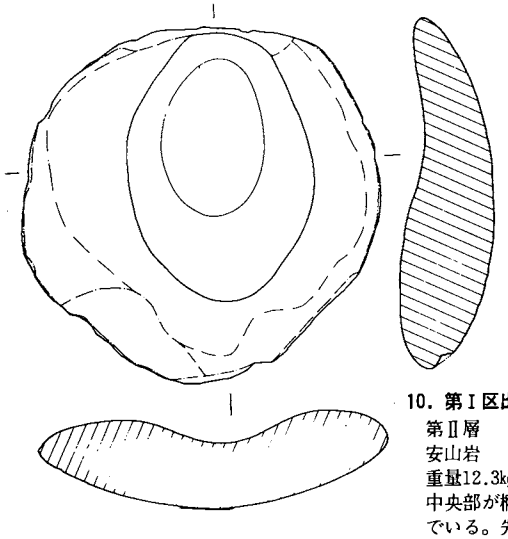
第138図　石　皿



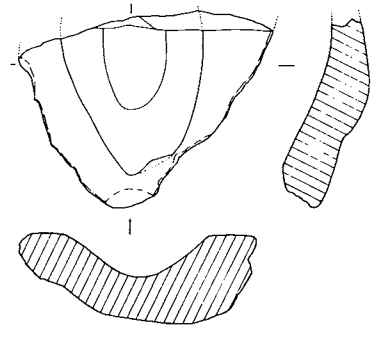
9．第Ⅰ区10—Ｇグリッド出土
第Ⅱ層
安山岩（角肉石安山岩）
重量14.80kg
中央部が楕円状に強くくぼみ端部は片に状になっている。くぼみの周辺部は平坦になるよう面調整を施している。



11．第Ⅰ区８—Ｄの24グリッド出土一括資料
安山岩
重量9.13kg
中央部に楕円形の強いくぼみがある。末端部は片に状に自然に開口している。くぼみの周辺部は平坦になるよう面調整を施す。
基部の一部は欠失する。



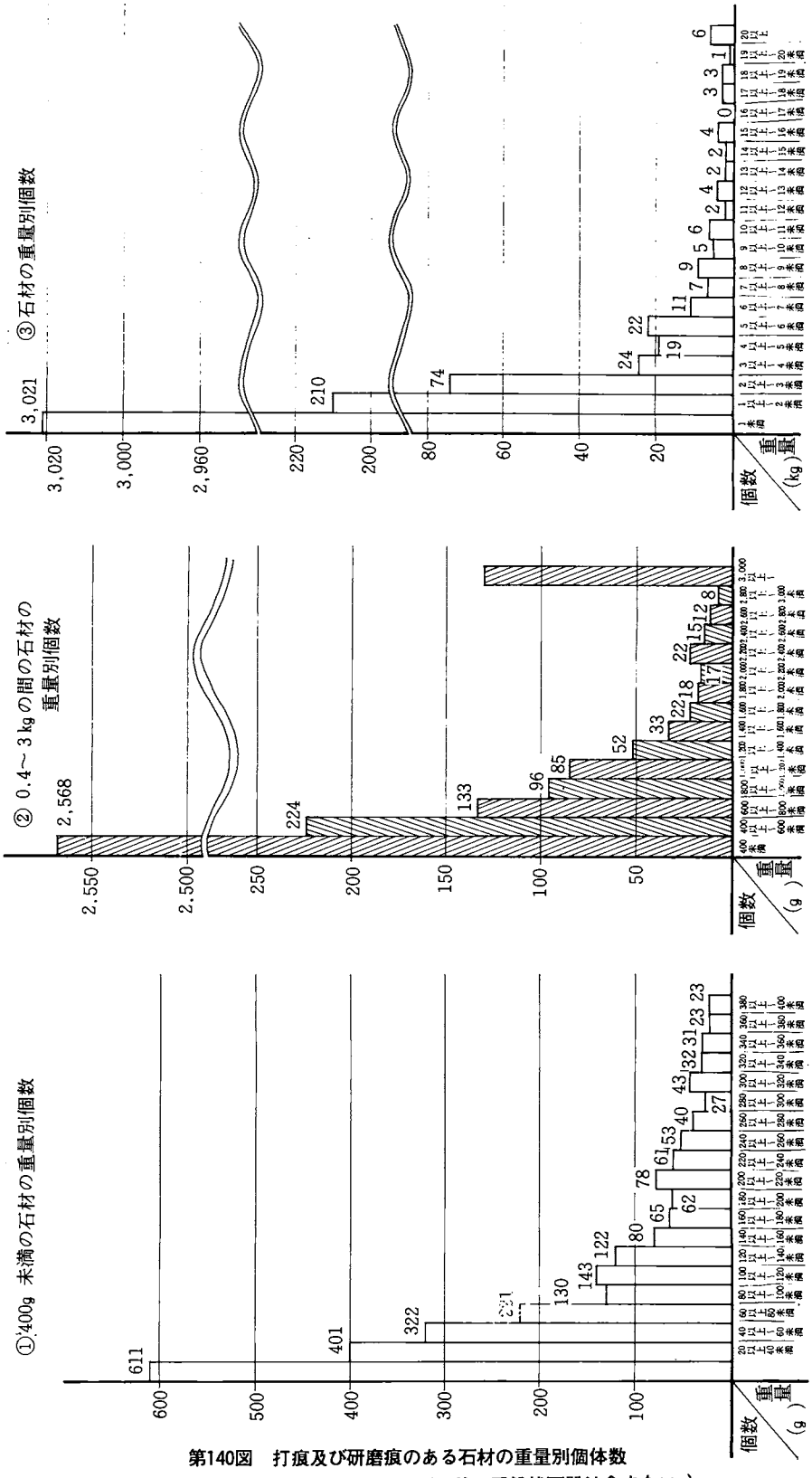
10．第Ⅰ区出土
第Ⅱ層
安山岩
重量12.3kg
中央部が楕円形に強くくぼんでいる。先端部は自然に片に状に開口している。くぼみの周辺部は平坦になるよう面調整を施す。
熊本県立美術館で実施された「熊本の古代の美展」に出品展示された



12．第Ⅰ区７—Ｅの６グリッド出土　縄文一括資料
安山岩
重量4.60kg
全体の半分（先端部）を欠失する。中央部には楕円形のくぼみがある。くぼみの周辺部は平坦になるようていねいに面調整を施す。

0　20　40cm

第139図　石　皿



第140図　打痕及び研磨痕のある石材の重量別個体数
（石斧・円盤状石器は含まない。）

第Ⅸ章　ま　と　め

旭志村大字伊坂の集落の中には、点々と中世の遺構・遺物（中世寺院址・五輪塔・板碑等）が見られる。また、当集落の南側の台地上には、縄文時代の遺跡が存在することは、坂本経堯先生の紹介によって広く知られていた。

今回の発掘調査は、先にも述べたように、7ヶ所の調査区を設定した中で、第Ⅰ・Ⅱ調査区から検出した縄文時代の遺跡の発掘調査に主眼をおいて実施した。第Ⅱ～Ⅶ章に示すように、縄文時代の遺構・遺物の外に、弥生時代・奈良時代・平安時代の遺構・遺物を数多く発掘した。

発掘調査を実施した面積（2.4ha）は、当圃場整備施工地域の約1割に達するほどの広さであった。そのため、多数の調査員と日数を要した。また、発掘した遺物は、普通トラック2台分に達した。

発掘した遺構、遺物から、遺跡の形成された時代背景や性格について、何かを導き出し、本章において総括的に提示すべきであるが、遺跡の形成された時間も長く、遺物も多いため、明確な結論を即座に導き出せない。そのため、これまで発掘調査及び遺物整理に携わる中で気付いたことを羅列することで、本書のまとめとしたい。

第1節　縄文時代の遺構・遺物について

1．第Ⅰ・Ⅱ調査区の縄文時代の土器・石器群

(1)　土器群

第Ⅱ章において述べたように、足の踏場もないほど多く出土した。これ等の土器を形態分類して、分布図と重ね合せると、馬蹄形状に分布する2つの土器群と3ブロックに分かれて分布する1つの土器群（第70図参照）に分かれる。

前者の2つの土器群を形成している土器の形式は、第Ⅴ章で述べたように、伊坂Ⅱ式と伊坂Ⅲ式である。伊坂Ⅱ式は鳥井原式に、伊坂Ⅲ式は御領式に相当すると思われる。

後者の1つの土器群を形成している土器の形式は、伊坂Ⅰ－A式と伊坂Ⅰ－B式である。こ

れ等の土器は、従来から言われている三万田B式の中で古い形状を示す土器形式を示している。

各グリッドから出土する土器群を形式分類することにより、上記のような3つの土器群であることに気付いた。この各土器群の分布状態から、第Ⅱ章でも言ったように、この遺物群は、内陸に形成された「縄文時代のゴミの山」であることは、明らかである。つまり、貝塚と類似した遺構であり、先に示したように、「貝のない貝塚」と言う認識は極めて当を得ている。

(2) 石器群

上記(1)に示した土器群中に、多数の石器が出土した。これ等の石器は、第Ⅷ章に述べたとおりである。その中で、数の多さから言って注目したいのは、円盤状石器・扁平打製石斧及び石皿である。

円盤状石器は、第Ⅷ章のベン図で説明したように、御領式土器に伴うことは明らかであろう。また、従来から言われている三万田B式を大きく前後に分けた場合、その後半の時期の土器に伴う石器である可能性は高く、前半の時期の土器に伴う石器である可能性は低いと推定される。

円盤状石器に伴う土器について、上記のように推論してみると、従来言われている三万田B式の土器群を二時期に分別することについて、故あることと思われる。

扁平打製石斧については、第Ⅷ章にくわしく述べているので、ここでは略したい。

石皿は、小さい物でも5～6㎏・大きい物は30㎏以上ある。出土したすべての石皿が安山岩製である。これ等の石皿は、扁平な物と鉢状に窪みのある物の2種類に分類される。扁平な物について、当初、砥石と考えてもみたが、研磨痕のある石材（磨石・棒状の物）との対応を考えると、石皿であることは、明らかである。このことも、第Ⅷ章に述べたので、参照されたい。

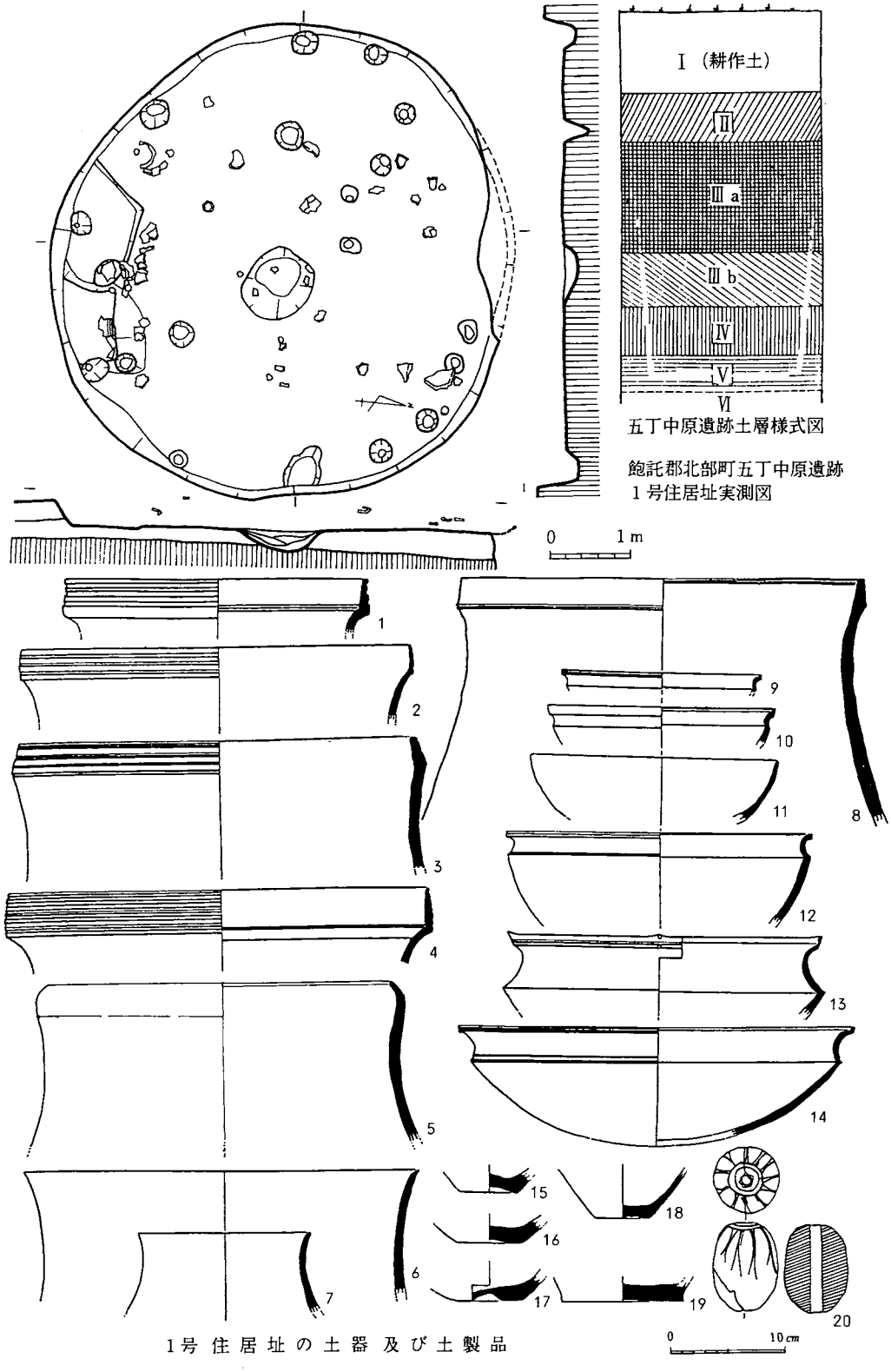
2．縄文時代の遺構

(1) 縄文時代の住居址

縄文時代の住居址は、第Ⅰ区から1基（第Ⅰ－11号住居址）・第Ⅱ区から1基（第Ⅱ－2号住居址）検出した。それ等の住居址の遺構についての説明は第Ⅱ章で、出土遺物については第Ⅴ章で述べた。

住居址内出土の土器から2基の住居址の時期を推定すると、第Ⅰ－11号住居址は伊坂Ⅰ－B式から伊坂Ⅱ式（三万田B式から鳥井原式）、第Ⅱ－2号住居址は伊坂Ⅲ式から伊坂Ⅳ式（御領式から天城式）にかけての時期に比定される。

これ等2基の住居址の遺構及び遺物は、「第141図に示す五丁中原遺跡検出の住居址の遺構及び



第141図　五丁中原遺跡検出の住居址及び遺物（熊本短期大学文化財研究会調査　清田純一氏作図）

遺物」にきわめて類似していると思われる。特に、平面プランは第Ⅰ—11号住居址と、出土した土器の形式は第Ⅱ—2号住居址と類似すると言える。そこで、清田純一氏の好意により、五丁中原遺跡検出の住居址及び遺物（第141図）を本章に例示した。

(2)　その他の遺構

住居址の外に、炉址・埋鉢・方形溝遺構・円形周溝遺構を検出した。各遺構の形状及び出土遺物については、第Ⅱ章と第Ⅴ章で述べた。

縄文時代の遺構を相対的年代順に出土した土器形式から推定して並べると、次のようになると思われる。

第Ⅱ—1号円形周溝遺構→第Ⅰ—11号住居址→第Ⅱ—2号円形周溝遺構→第Ⅰ—1号方形溝遺構→第Ⅱ—
2号住居址

上記の遺構の相対的年代順と前記の土器・石器群の分布から、東西にゆれながら、少しづつ西方から東方へと遺構を構築する時期が移動して行ったのであろうと、調査員一同は推定した。

第2節　弥生時代の遺構・遺物について

1．円形周溝遺構

円形周溝遺構は、第1区から2基・第Ⅱ区から2基検出した。しかし、第Ⅱ区から検出した円形周溝遺構については、前述のごとく、縄文時代の遺構であろう。

第Ⅰ区から検出した2基については、第Ⅲ章で述べたように、埋土の様子から、弥生時代の遺構であろう。

同一の遺跡から、時代の異なる類似の遺構を計らずも検出した。発掘終了後、円形周溝遺構がどのような目的で使用されたものであるか、調査員各自の意見を求めたが、確固たる意見は出なかった。先学の諸兄姉の御教示を待ちたい。

2．住居址

第Ⅰ区から3基（第Ⅰ—6・8・10号住居址）の方形プランを持つ竪穴式住居址を検出した。第Ⅰ—6号と8号住居址からの出土遺物は、主に甕であった。

第Ⅰ—10号住居址からの出土遺物は、甕(3)・壺(4)・鉢(2)・器台(2)とバラエティーに

富んでいる。しかも、単独の遺構であり、全てが床面直上の遺物である。これ等11個体の遺物（第107～110図参照）は、単独の住居址が持つ一つのセットであると思われる。

第Ⅰ―10号住居址から出土したこれ等の土器は、弥生時代後期前半の一時期の指標としてとらえることの出来得る資料である。

第３節　歴史時代の遺構・遺物について

１．奈良・平安時代の遺構・遺物

(1)　カマド付竪穴式住居址

第Ⅰ区から７基・第Ⅱ区から５基・第Ⅳ区から７基・第Ⅵ区から２基検出した。これ等の竪穴式住居址の平面プランは、主に方形であった。

調査地区から見た場合、第Ⅰ・Ⅱ区の12基と第Ⅳ区の７基については、別個の集落を形成していたと推定される。このことから、第Ⅰ・Ⅱ区の12基の年代順と第Ⅳ区の７基の年代順を対比させるべきであろう。しかし、前者の12基について、遺物の上から年代差を明確にせよとの要望に、現状における土師器の編年からは答えることは困難であると思われる。

ところで、第Ⅳ区の７号住居址の排土と推定される土の中から、越州窯産と推定される青磁を採集している。このことに注目して、第Ⅰ・Ⅱ区の集落と第Ⅳ区の集落の新旧を問うとするならば、第Ⅳ区の方が新しい傾向にあると推論出来るであろう。

竪穴式住居址の規模から見た場合、第Ⅱ―１号住居址が最大である。カマドの大きさも無論、最大である。また出土した土師器は赤色顔料を化粧がけしている点についても注意しておく必要がある。

掘建柱建物遺構と竪穴式住居址との切り合い関係を見ると、掘建柱建物遺構の方が新しい遺構である。

(2)　掘建柱建物遺構

第Ⅰ区から１棟・第Ⅱ区から４棟・第Ⅳ区から１棟検出した。これ等の掘建柱建物遺構の主な物は、２間×３間となっている。

柱と柱の間隔は、６尺又は６尺５寸（１尺を約30cmとした場合）を基準として１間又は１間

半である。ところで、柱の痕跡を掘り方の中で調べて行くうちに、それ等が千鳥に並ぶ遺構があることに気付いた。このことは、柱と梁や桁が枘によって接合されていない証であろうと推測した。つまり、柱を大地に建てた後に、梁や桁をロープによって結(ゆ)わえ付けたと推定した。

(3) 蔵骨器

調査区域外から2個体表採した。旭志村周辺からは、従来から多くの蔵骨器が発見されている。また、旭志村湯舟原からは、石帯が出土している。ところで、旭志村の東方（矢護川の上流）に「真木(まき)（菊池郡大津町）」と云う集落がある。この「真木」を古代の「牧(まき)」の比定地とする意見がある。

伊坂上原遺跡から2個体出土したことは、カマド付竪穴式住居址や掘建柱建物遺構から成る村落の存在と関連付けて考えると、興味あることである。

(4) 近世の溝遺構

第Ⅰ～Ⅵ区から検出した。幅・深さ・長さはそれぞれ異なる。検出する位置は、きわめて現在の畑の境界に近い位置である。埋土の様子から短時間で埋没していることがわかる。出土遺物としては染付けの磁器がよく出土する。

地元の徳農家の方々に、溝を掘削する理由について、色々おたずねしたが、明確な答えは返えってこなかった。

溝を掘削する理由について考えるに、耕作土が流出することを防ぐこと・客土用の土の確保があろう。その外、畑地の開墾の過程についても検討すべきであろう。県下の各地で検出されているので、農業技術史の面からも考えてみる必要があろう。

以上、第1節から第3節にかけて、気付いたことを色々並べたててみたが、あまりにも大きな遺跡を発掘したとの思いが先にたちます。

事実の報告については、執筆者一同、努力しましたが、遺跡の持つ意味や解釈については、先学の諸兄姉の御教示をお願いします。

石佛（イシボトケ）遺跡

—旭志村尾足所在板碑調査報告—
—尾足の地蔵板碑と沙門元志—
—姫井乙姫神社石塔塔身二例—

発掘調査及び執筆者

島津　義昭・安達　武敏

山城　敏昭・坂本　戸一

旭志村尾足所在板碑調査報告

1．はじめに

2．調査の経過

3．板碑

付論

石仏遺跡の地蔵板碑と沙門元志

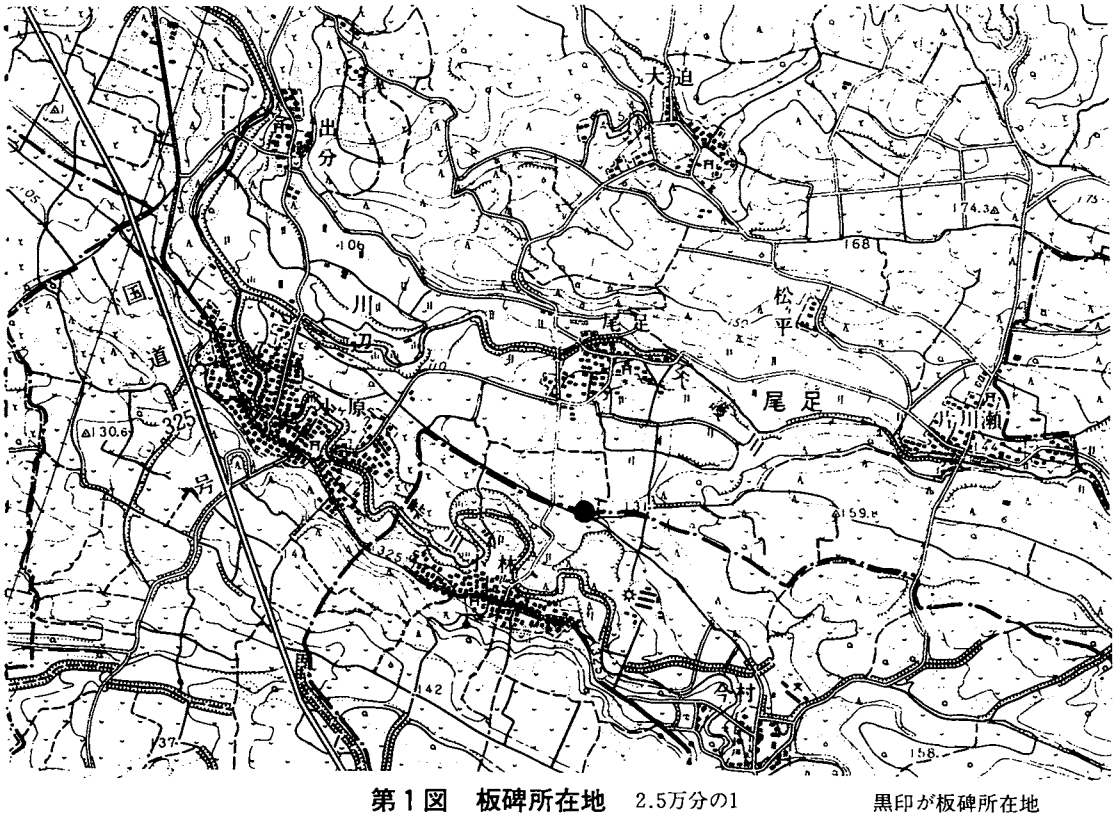
旭志村乙姫神社石塔二例

1．は　じ　め　に

本文は昭和59年度、圃場整備事業で現状変更を受け、移転復原した板碑の調査報告書である。

所在地は熊本県旭志村大字尾足字鶴1025番地（くまもとけん　きょくしむら　おおあざおたるあざつる）通称石仏（いしぼとけ）である。1984年（昭和59年）２月21日から同年３月９日まで現地調査をおこなった。石碑は、玉名、植木、泗水の各邑を経て旭志村に入り、川辺村の尾足、片川瀬各集落の南側を貫け、二重峠に至る旧道の端に存する。このあたりの古道は、大きく窪地となっているが、この板碑の存する地点は、道から見ると恰も小山を呈している。

調査は、石碑そのものを調べるとともに、石碑の下部、あるいは周辺の遺構の有無の確認、



第１図　板碑所在地　2.5万分の1　　黒印が板碑所在地

さらに石碑の所在する高まり部が、人工のものであるかどうか、の諸点を知る事を目的として実施した。

発掘の結果、板碑の下部および周辺に遺構は存しなかった。また板碑建立の事情を直接に示す遺物は出土しなかった。

2．調 査 の 経 過

1月17日　石仏を訪れて、調査方法等を検討する。

2月21～27日　40分の1の地形測量を開始する。

2月24日　トレンチの設定。上層から近世陶器の小破片が出土する。表土の黒色土（10～20cm）を除くとすぐ地山の褐色土に達する。

3月1日　板碑の前方に黒色土の落込みがあるが、自然の窪みと思われる。

3月2日　板碑の前面の表土幅より、寛永通宝3枚出土。樹根の取り除きに時間を要する。かつては（大正期頃か）桜、杉、榎だけであったという。

3月5日　トレンチ断面図の作成。石碑周辺の遺物は、近世陶磁片ばかり。

3月6日　石碑の前に凝灰岩で作った、花立とみられる石が二個出土。それぞれ、仁平(？)内金(？)の文字が刻されている。坂本戸一旭志村文化財保護委員長に調査を依頼する。

3月7日　トレンチ断面観察用の土手を除く。寛永通宝1枚出土。

3月8日　写真撮影。板碑を移動して、下部を精査するが遺構はない。

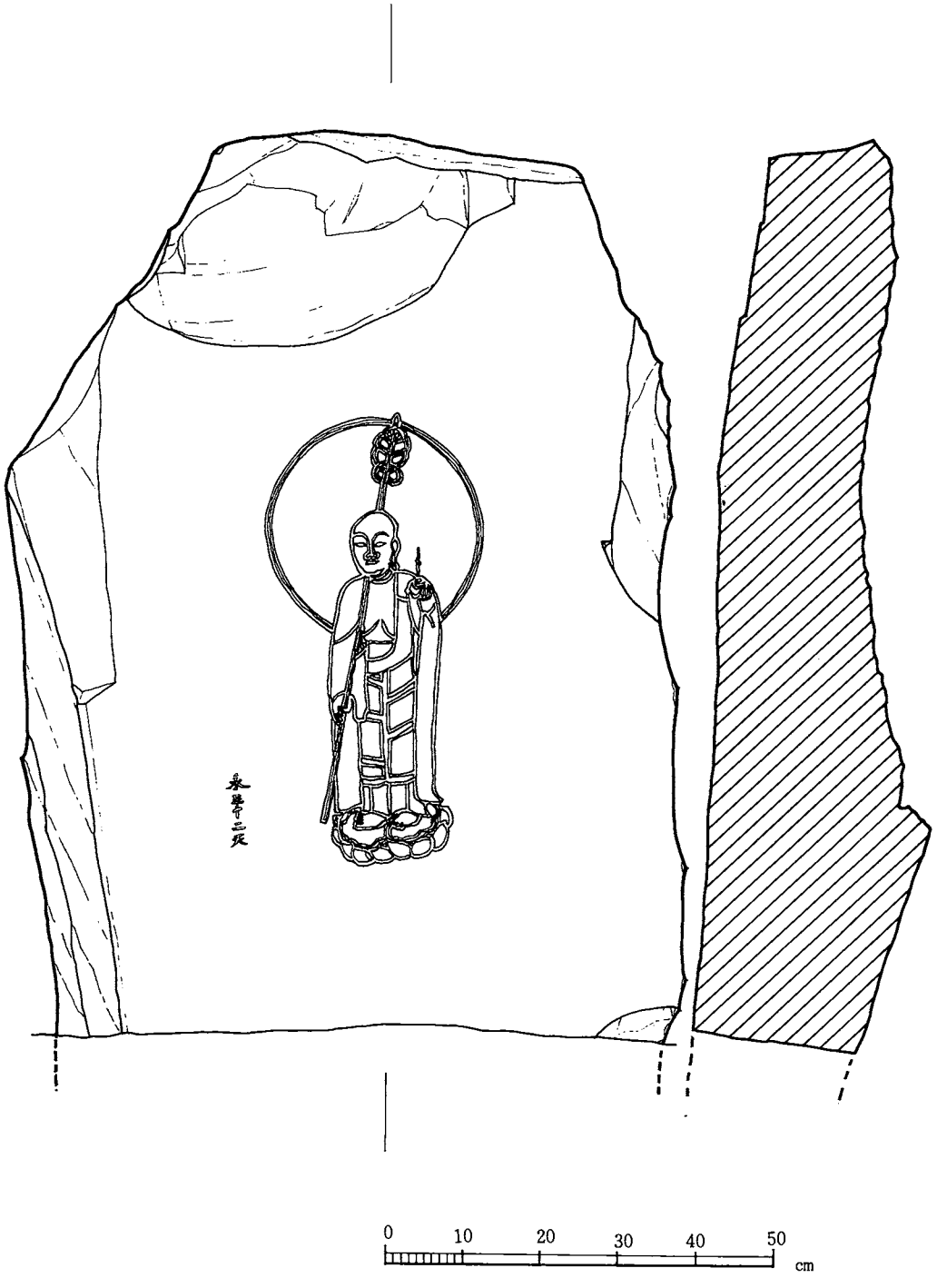
3月9日　発掘道具の整理。本日にて現地調査は終了する。

板碑前の花立に刻まれていた人名については、坂本戸一氏の調査の結果、1927年（昭和2年）3月3日、67才で没した方で、尾足に住んでいた仁平という人がいた事が解った。石垣つきを仕事としていて、今日、同村の桐原道雄氏が末孫にあたるとの事であった。内金さんについては不明。

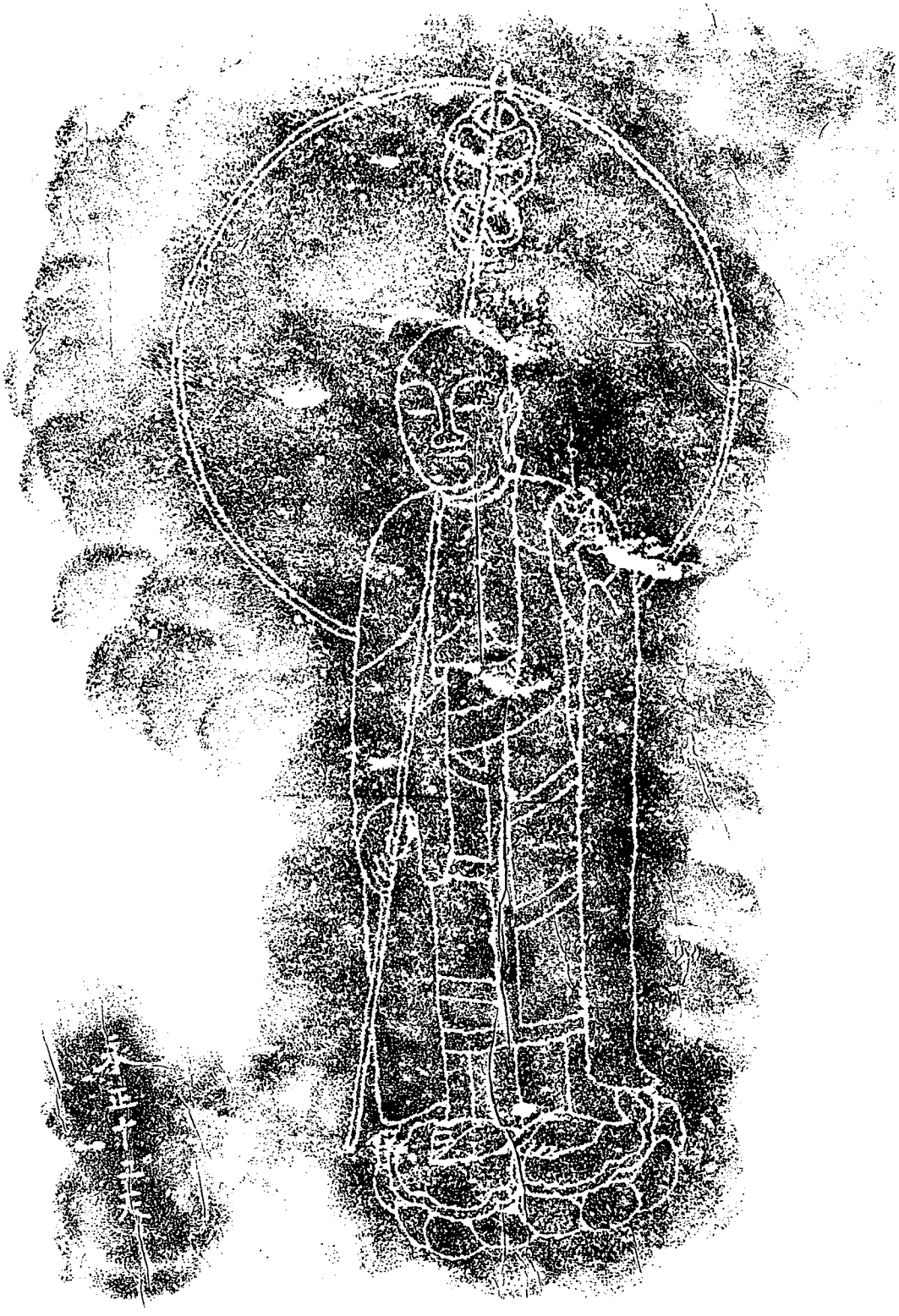
なお、本遺跡の現地調査は島津義昭、安達武敏が行った。遺跡の最初の案内者は、故廣瀬正照・故河北　毅氏の両氏である。調査にあたっては、坂本戸一旭志村文化財保護委員長、旭志村教育委員会の多大の協力があった。また、整理には山城敏昭が協力した。地蔵菩薩全般について坂口雅柳氏の御教示を多く得た。関係者各位に謝意を表する。本文の執筆1、2が島津、3を山城が行った。併せて関連資料を付論として掲載した。

3．板　　碑

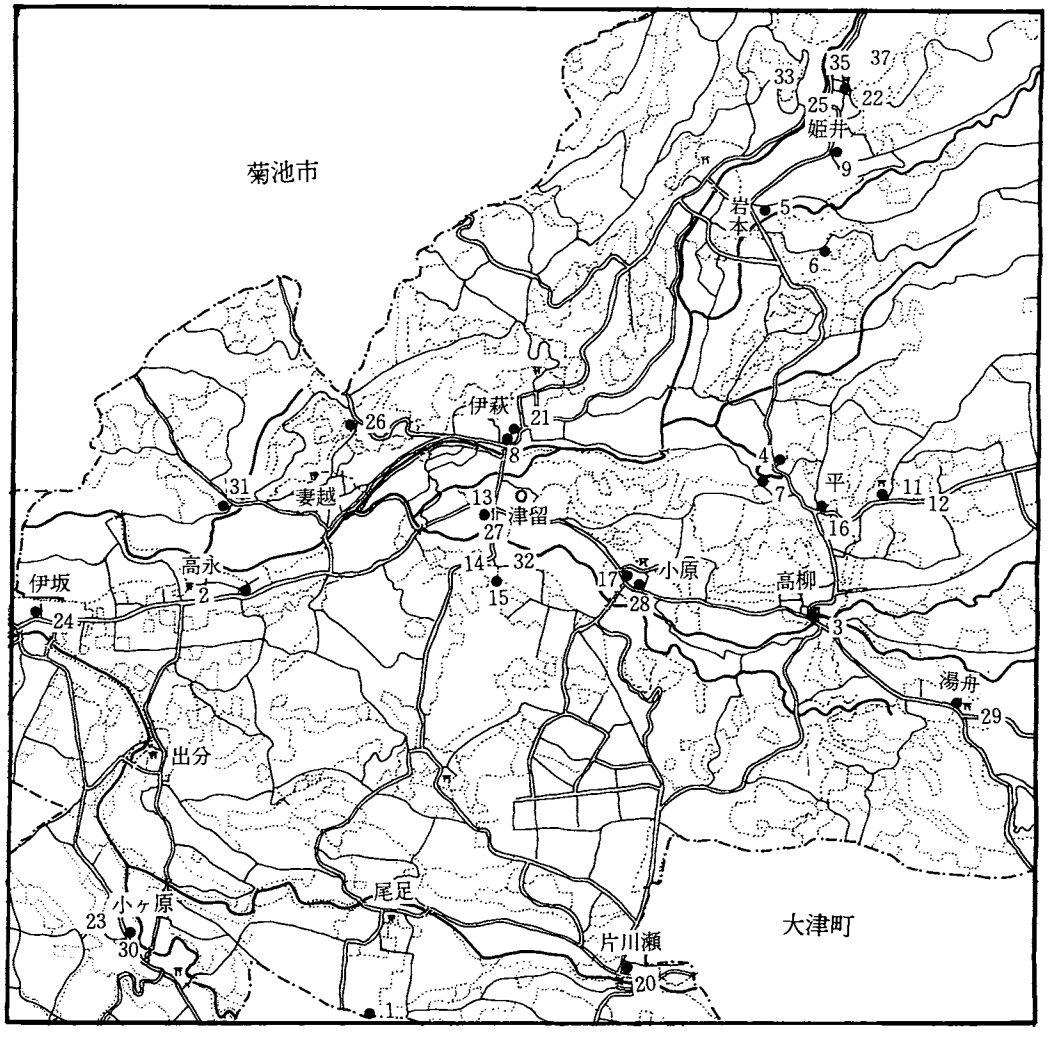
板碑は明灰色の安山岩を用いている。外形加工をせず、その節離面を利用して地蔵菩薩立像



第２図　尾足地蔵菩薩立像自然石板碑実測図



第3図　尾足地蔵菩薩立像自然石板碑



第4図　旭志村石造文化財分布図

1	尾足 (1515)例	15	村上家墓地(1739)例	※29	湯船神社(1790)例
2	高永妙巣庵(1529)例	※16	平　(1745)例	30	小ヶ原(1791)例
3	高柳(1540)例	※17	小原(1752)例	※31	妻越(1806)例
4	平納骨堂(1540)例	※18	高永妙巣庵(1756)例	※32	村上家墓地(1812)例
5	岩本(1558)例	※19	平一岩本(1759)例	33	姫井神社(1818)例
6	岩本(1558)例	※20	片川瀬(1760)例	34	妻越(1827)例
7	平納骨堂(1558)例	※21	三浦食堂角(1762)例	35	姫井神社(1839)例
8	伊萩公民館(1574)例	22	姫井神社(1763)例	36	出分(1896)例
9	姫井(1579)例	※23	小ヶ原(1763)例	37	姫井神社石塔塔身二基
10	岩本(1581)例	※24	伊坂(1769)例		
11	寺の坂(1582)例	25	姫井神社(1772)例	※舟型光背地蔵板碑	
12	寺の坂(1590)例	※26	妻越(1773)例		
13	津留(1591)例	※27	津留(1773)例		
14	村上家墓地(1579)例	※28	小原(1779)例		

を陰刻した自然石板碑である。

大きさは、総高174cm、現高112.5cm、最大幅86.5cm、最大厚さ36cmを測る。地蔵菩薩立像は全体的に身体を右に向けて表現されており、総高56.5cm、頭光幅27.5cm、像の最大幅14.0cm、陰刻の線の幅1.5mm、深さ1.5mmを測る。

像容の表現は、蓮座上に立ち、右手に輪が2個の錫杖を持ち、左手は肩まであげ、湯気のあがる如意宝珠を持つ。額に白豪は無く、首に三首を刻む。右肩には肩組、納衣の内側に袈裟、その下には袁裙を刻む。

銘文は、像容の左下に、『永正十二天』(1515)と紀年銘のみを陰刻する。陰刻は像容と同様に、幅1.5mm、深さ1.5mmを測り、字の大きさは、概ね1.5cm四方である。

尾足地蔵菩薩立像自然石板碑（以後は尾足（1515）例と記す。)の移転前の立地地点が、現植木町から二重峠に通じる旧道から尾足の集落への分岐点にあったことから、造立目的の一つとして、往来の人々の安全や集落の守護を祈願して造ったことが考えられる。ここで他の造立の目的について考察してみよう。

一般に石塔造立の目的には、墓碑、納経、逆修供養、追善供養の四つがあげられる。尾足(1515)例の場合、発掘調査の結果、板碑下に墓坑はなく、納骨孔もない。移動がないものであれば、墓碑の可能性は薄くなる。また納経孔もないので納経の為の造立は考えられない。逆修・追善供養の可能性を考えると、願主が個人であれば、紀年銘と同時に陰刻されるべきであろうから、願主は集団（講衆）で、人名を墨書で表わした可能性が強い。逆修、追善供養であれば、十三佛供養の七五日の本地佛である地蔵菩薩を刻したのであろう。

旭志村に分布する石塔は、そのほとんどが山麓の集落周辺に立地する（第4図)。紀年銘を有する例に注目してみると、16世紀前葉～後葉に1つのまとまりを示し、すべてが板碑であるという様相を示す。その後、およそ1世紀半の間、空白期間があり18世紀中葉から19世紀後葉までに1つのまとまりを示す。後半のまとまりは、ほとんどが地蔵菩薩像を半肉彫りにした舟型光背の板碑である。尾足（1515）例は、前半のまとまりの最古のものとなる。

尾足の地蔵板碑と沙門元志

安　達　武　敏

尾足の地蔵板碑は、尾足集落の南方約400mの村境にあり、玉名・植木方面から泗水を径て、二重峠を通り阿蘇へむかう道路の横に西をむいて建っていた。所在地は菊池郡旭志村尾足（おたる）字鶴1025番地で、菊池郡大津町小林の合志典義氏所有であった。[1]

石仏（いしぼとき）さんと村人から親しまれ、ときには恐れられさえしていた地蔵板碑は、圃場整備のため今は近くの道路端に以前のように西側を正面にして移転され「尾足石仏」と名づけられた説明板がたっている。この板碑には蓮華座に立った地蔵の姿が線刻され、右手に錫杖を、左手に宝珠を持ち、わきに「永正十二天」(1515年）の文字がある。自然の安山岩を少し板状に加工したものなので地蔵立像自然石板碑とよばれ、地表からの高さ約110cm、幅約80cm、厚さ約30cmである。

尾足には、地蔵板碑のほかに、村落のなかを流れる矢護川にかかる尾足橋のたもとに元文3年（1738）の石造地蔵があり、この橋から100mほど東の道路ぞいに破損しているが地蔵らしい石造物が安置されている。尾足の片川瀬観音堂境内には舟形光背をもつ6体の石造地蔵をならべた六地蔵がある。これらはもと宝来橋のたもとの三差路にあったもので、6体のうち南端の1体には宝暦10年（1760）の記年銘がある。さらに宝来橋からやや上流の矢護川にそった道路の塀のところに舟形光背の石造地蔵があるが破損して記年銘は明瞭でない。尾足の近隣の集落には地蔵を祭った所が多い。この付近では菊池市隈府の正観寺が地蔵の信迎が厚かった。[2]

尾足の地蔵板碑、すなわち尾足石仏と似た図像の板碑が、尾足から南西に約20kmはなれた熊本市花園町柿原の成道寺にある。成道寺は板碑、五輪塔、六地蔵塔などの石造品に富む地域で、[3]明治16年（1883）をもとに、これより400年以前、つまり文明15年（1483）以前の記年銘ある古社寺、堂、塔碑などを図絵ともに集成した『肥後国古塔調査録』には、この地蔵板碑が「花園村成道寺の石仏」として紹介されている。[4]板碑は地表からの高さ約100cm、幅約54cm厚さ約22cmで、尾足の地蔵板碑よりやや小さい。碑面の磨耗がはげしく、文字が読みにくかったらしく、「該石仏ハ多文字磨滅シテ難弁文」としているが、図絵のなかには文正元年（1466）の文字が入っている。現在ではこれを手掛りとして辛うじて碑面の年代が判読できる状態である。文正元年は尾足板碑の永正12年より約50年古いことになる。

成道寺には、ほかに享禄3年（1530）と天文7年（1538）の地蔵板碑があり、文正板碑と合せると3基の地蔵板碑がある。『肥後国誌』は、「萬歳山成道寺境内片石ニ地蔵ノ像ヲ彫刻セシ碑三箇アリ」と記録している。[5]さらに付近には、柿原公民館下の崖に、享禄2年（1529）の地蔵

板碑があり、柿原菜恵木（なえき）墓地、通称シブラ墓地入口に大永（1521～1528）らしい記年銘の地蔵板碑がある[6]。成道寺を中心とした地域は、地蔵板碑の特別に集中する稀有のところといえる。

成道寺は、臨済宗に属し、応永33年（1426）12月８日、寰中元志禅師によって景勝の地である柿原の梅谷に創建された。

寰中禅師は、菊池の正観寺を開いた大方元恢の法嗣で、『本朝高僧伝』の「肥後成道寺沙門元志伝」によると、「釋元志。字寰中。小足氏。肥後合志郡人」となる[7]。父は小足三郎左衛門定重といった。

伝記によると[8]、小足定重は常に天満宮を信じ、菊池の赤星に天神を勤請して、子供が授かるよう祈っていた。母が神から扇の骨を賜わる夢を見て生まれたのが元志であった。扇の骨を人に比すれば出家の形なので、菊池の正観寺にいき、大方元恢に会って出家し僧となった。

正観寺は臨済宗の寺院で、元志が生まれる２年前の興国５年（1344）元恢によって開山されていた[9]。元志は幼児から英敏で、成長して京に赴いた。栄西によって開基された建仁寺の西来院や夢窓疎石がかっていた南禅寺などで修行した。後に中国に渡り、楚石梵琦について禅をおさめた。元志のことばに「日本非生士、大唐又客郷」とあるから、中国とはよほど縁が深かったといえる。

中国から帰って元志は正観寺にすんでいた。師の大方元恢は応安元年（1368）元志23才のころすでになくなっていた。この寺の開山は大方であるが、後に大方の師の秀山元中も正観寺に来てすんだので、正観寺では秀山も開山にくわえ、大方とともに両開山としていた。続いて、隆庵（３世）、大愚道賢（４世）、節之中禮（５世）、中岳中正（６世）、玉林聖璨（７世）、寰中元志（８世）の順となる。元志が正観寺８世住職であった時期は、秀山・大方の両開山の次に５代の住職がいることと、幼時に元恢に会っていることなどから、晩年のころのことであったと推測される。

寰中のころの中国は宋の次の元の時代であったが、元志は中国に３度渡ったとか、中国でなくなったとか伝説的なことが伝えられている。正観寺には、至正26年（1366）中国に赴いて、かの地の楚石禅師に賛をもらったという秀山と大方の両開山の画像がある[10]。至正26年は元の年号で、日本の正平21年（1366）にあたり、元志21才のころのことになる。中国に17才で渡ったとも伝えられている[11]から、もしそうだとすればありえないことではない。さらに菊池郡菊陽町大堀木の役場西側の町民総合運動場内にある板碑は、道路改修のため移転されているが、台石からの高さ約75cm、幅約65cm、厚さ約12cmで、寰中の逆修碑とも伝えられ[12]、『肥後国志』には、「幅広キ石ニシテ碑文数行アレドモ文字消滅シテ不明、能因法師ノ逆碑ト云ヒ、一設ニハ寰中和尚（正観寺八世之住職飽田郡成道寺開山）ノ逆碑トモ云」とある。沙門元志は伝説的に民衆とともに生きていたことがわかる。

正観寺にすんでいた元志は庵をむすんで、西鶴軒と名づけていた。晩年になって閑居するにふさわしい地を探すように、門弟の志道に命じた。志道は肥後の国中をまわり、柿原の梅谷にきて佳境を見つけたので、帰って師に告げた。寰中は喜んで梅谷に梵宇を造立し、萬歳山と祝号した。時に応永33年（1426）12月８日であった。釈迦のさとり、つまり成道が12月８日であったことにちなんで成道寺と名づけられた。

正長元年（1428）３月13日、元志は83才でなくなったが、この成道寺を中心として、板碑、五輪塔、六地蔵石塔など多くの石造品があり、そして地蔵板碑がつくられた。

寰中元志の父は小足三郎左衛門定重といった。合志系図を見ると[13]、合志四郎左衛門長綱の子を太郎左衛門隆敏といい、その子の刑部少輔定実の長男を式部丞隆冬といい、次男を少足三郎左衛門定重といい、その長男が寰中元志となり、「菊池郡正観寺八世之住職飽田郡成道寺開祖也」と説明されている。

沙門元志は、合志郡の人であった。かつての合志郡は明治29年（1896）４月から菊池郡になったが[14]、尾足の地蔵板碑、つまり尾足石仏のあった尾足も合志郡であった。そして尾足はまた小足とも書いていた[15]。元志の父の姓「小足」と尾足石仏の「尾足」は非常に関連してくることになる。寛政６年（1794）に澁江公正によって著された『菊池風土記』には、赤星天満宮の項に、「寰中元志和尚は合志尾たり村の産に而……」とあり、さらに熊耳山正観寺の項に、「此人は合志郡尾足村の産に而赤星はいたか天神の申子と云伝ふ」と記録されている。すなわち沙門元志は尾足の出身だったのである。

寰中元志は合志郡尾足村に小足三郎左衛門定重を父として生まれ、正観寺にはいり、建仁寺や南禅寺で修行し、若くして中国に渡った。帰国して正観寺にすみ、晩年に成道寺を草創した。元志がなくなったのは正長元年（1428）であるから、成道寺が創建されて２年後のことになる。正長元年から38年後に成道寺の最初の地蔵板碑、つまり文正元年地蔵板碑がつくられ、この板碑の49年後に尾足の地蔵板碑がたてられた。さらに15年後に享禄３年地蔵板碑がつくられた。このように見てくると、成道寺の地蔵板碑がつくられる時期のなかに、尾足の地蔵板碑がつくられたことになる。

なお、寰中元志が若い時に渡った元の国は、師の大方元恢がなくなった年に滅び、新しく明国が興った。元志の墓碑は成道寺にたてられているということである[16]。

〈 註 〉

（１）旭志村文化財保護委員会編『旭志の文化財第２号（板碑の部）』旭志村教育委員会　1979

（２）渋江公正『菊池風土記』（肥後文献業書三）の神社の項に、地蔵は正観寺の本尊という意味の記述がある。

（３）森下功「成道寺周辺地域」『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1967

（４）杉尾宗竪他『肥後国古塔調査録』（熊本県史料集成５）国書刊行会　1985

（５）森本一瑞『肥後国誌』青潮社　1971。飽田郡池田手永成道寺の項による。

(6) 森下功「柿原城周辺地域」『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1967

(7) 師蠻『本朝高僧伝』(大日本仏教全書) 有精堂出版部　1932

(8)『延宝伝證録』(大日本仏教全書)『本朝高僧伝』『群書類従(伝部)』(続群書類従完成会) をもとにして、『国郡一統誌』『肥後名勝略記』『肥後地誌略』(以上青潮社)『肥後国誌』などを参考にした。これらの本は熊本県立図書館に所蔵されている。

(9) 菊池市史編纂委員会『菊池市史上巻』菊池市　1982。正観寺の草創年代には興国2年と5年の2説がある。

(10) 上米良利晴「正観寺」『熊本の神社と寺院』(熊本の風土とこころ第二集) 熊本日日新聞社　1980

(11) 註(2)同書。熊耳山正観寺の項に、「初渡唐の節十七歳、天寧の梵綺楚石に近待せしと云」とある。

(12) 板本経堯『菊池の文化財』熊本県菊池事務所　1965

(13) 八木田政名『新撰事蹟通考』(肥後文献業書三) 歴史図書社　1971

(14) 圭室諦成編『熊本県市町村合併史」熊本県総務部地方課　1969

(15) 註(5)同書。合志郡大津手永尾足村の項による。ここには、細字で「尾足又作小足」とある。

(16) 鈴木喬編著「寰中元志」『熊本の人物』(熊本の風土とこころ第三集) 熊本日日新聞社　1982

尾足地蔵板碑と元志関連年表

興国5年	1344年	大方元恢が正観寺を草創する
正平元〃	1346〃	寰中元志生まれる
応安元〃	1368〃	元恢なくなる
応永33〃	1426〃	元志が成道寺を草創する
正長元〃	1428〃	元志83才でなくなる
文正元〃	1466〃	成道寺の文正地蔵板碑
永正12〃	1515〃	尾足の文正地蔵板碑(尾足石仏)
享禄3〃	1530〃	成道寺の享禄地蔵板碑
天文7〃	1538〃	成道寺の天文地蔵板碑
元文3〃	1738〃	尾足の石造地蔵
宝暦10〃	1760〃	片川瀬の六地蔵

姫井乙姫神社石塔塔身二例

山　城　敏　昭

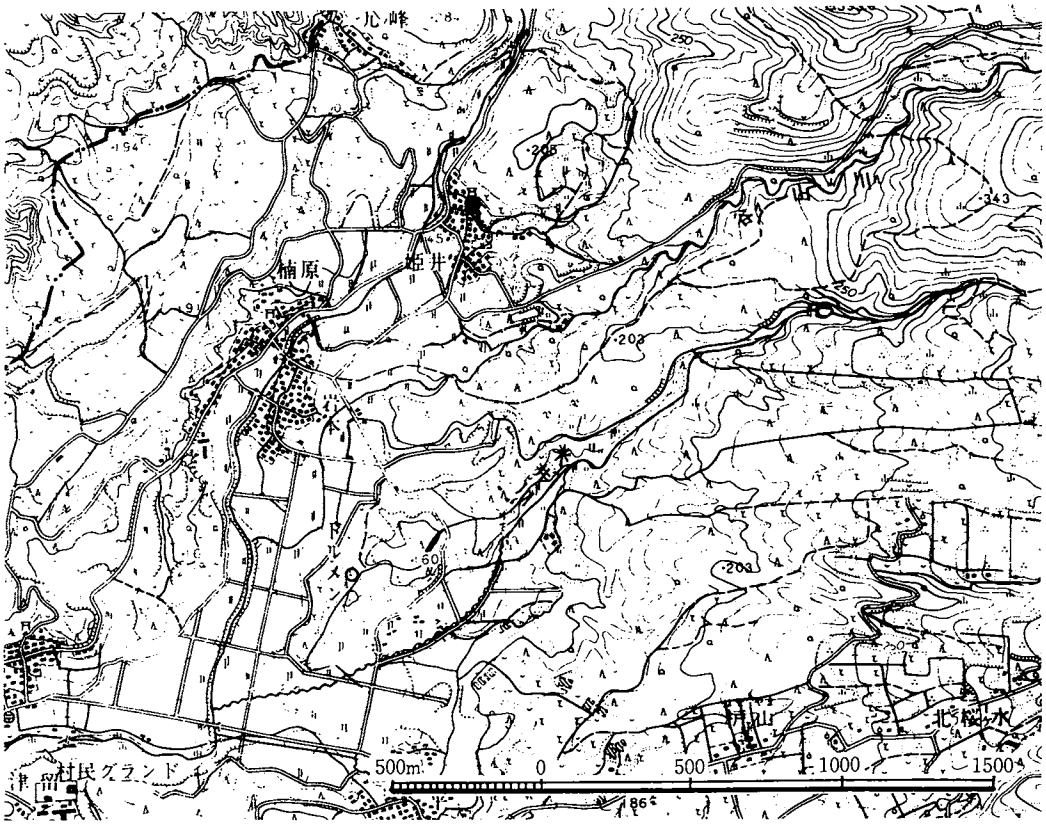
旭志村姫井乙姫神社前には五輪塔などの残欠に加えて、石造宝塔の塔身と見られるものが二基存在する。二基とも四方に像容を半肉彫りで表わし、像容間の四方に種子を陰刻している。

1号塔身は高さ46.5cm、最大径38.3cmを測る。像容は像高16.6cmを測り、四方とも全て同じ印相で、頭部は髪を結い、手は上印を結ぶ。種子は四面とも𑖨で構成される。

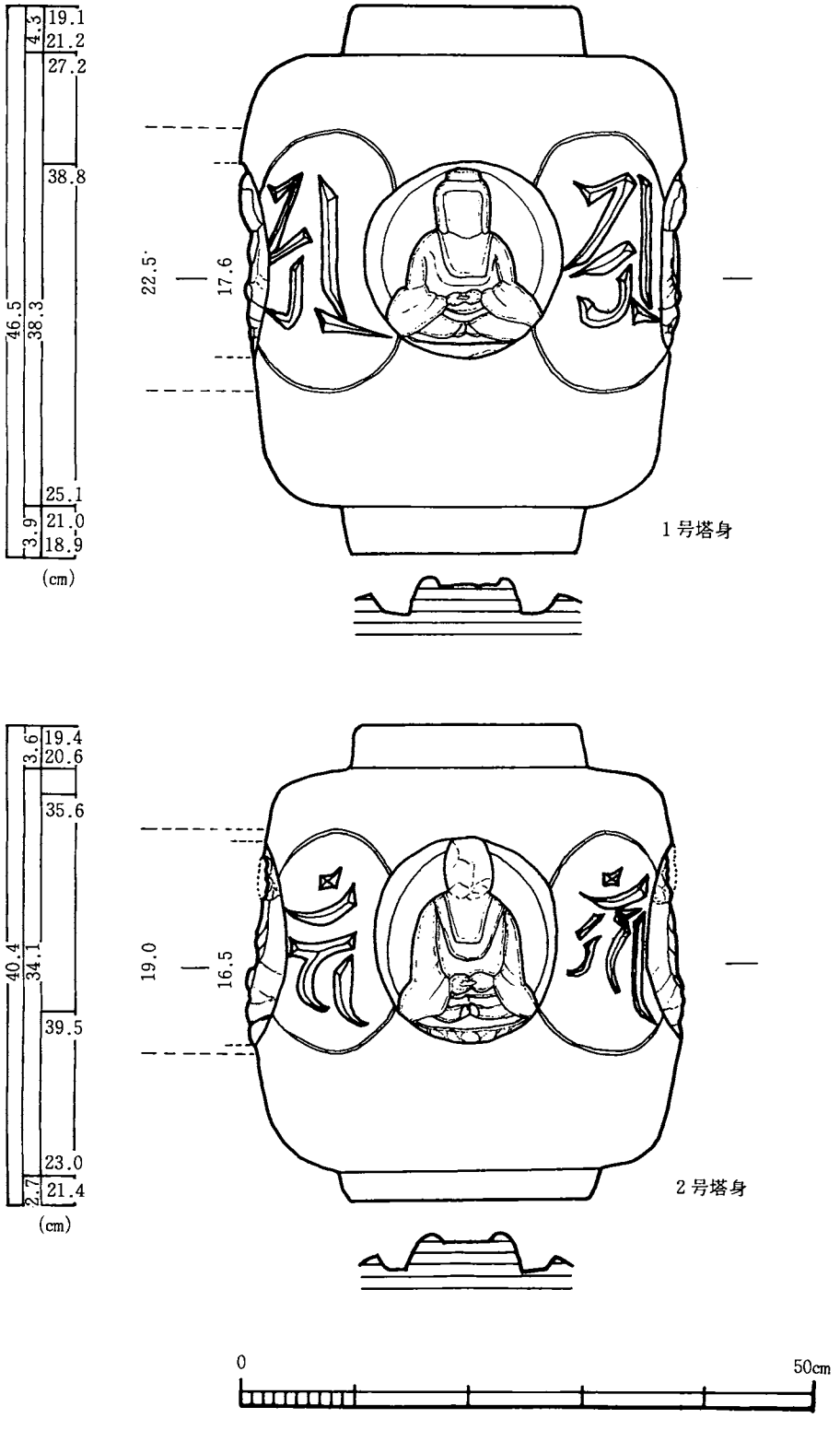
2号塔身は高さ40.4cm、最大径39.5cmを測る。像容は像高16.5cmを測り、1号塔身と同様四方とも同じ印相で、頭部は欠損が激しく形状は不明であるが、手は上印を結ぶ。種子は𑖨𑖩𑖪□で構成される。

1号塔身は、像容が何であるかの決め手に欠けるが、釈迦如来であるとすれば、種子の𑖨は多宝如来と考えることができよう。2号塔身は種子の組み合わせに該当するもの(註)がなく、像容名も不明である。

(註) 法華経、見宝塔本



第1図　石塔塔身所在地



第2図　姫井乙姫神社石塔塔身実測図

図　　版

1．第Ⅰ区　遺構検出開始（右手トウモロコシ畑は第Ⅱ区）

2．遺物出土状態（南方を見る）

3．遺物出土状態（西方を見る）

4．遺物出土状態（北方を見る）

5．遺構・遺物検出状態（南方を見る）

6．遺構検出状態（南方を見る）

8．縄文土器出土状態

7、発掘調査風景

9．縄文土器出土状態（注口土器片）

図版1　第Ⅰ調査区遺構・遺物の検出状態

1．第Ⅰ－5号住居址（上方は6号住居址）

5．第Ⅰ－7号住居址

2．第Ⅰ－4号住居址
（カマドを2基持つ、カマドの中央に自然石の支脚あり）

6．第Ⅰ－1号住居址（西方を見る）

3．第Ⅰ－2号住居址

7．第Ⅰ－1号住居址（東方を見る）

4．第Ⅰ－9号住居址

8．第Ⅰ－1号住居址カマド

図版2　第Ⅰ調査区検出の竪穴式住居址（奈良・平安時代）

1．第Ⅰ—10号住居址遺物出土状態

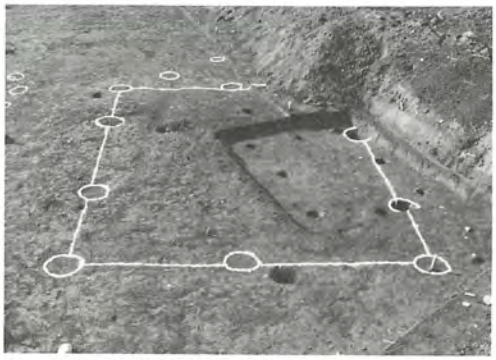
2．第Ⅰ—10号住居址西方より見る。

3．第Ⅰ—10号住居址　東方より見る

4．第Ⅰ—10号住居址完掘状態

5．第Ⅰ－8号住居址遺物出土状態

6．第Ⅰ－8号住居址完掘状態



7．第Ⅰ－8号住居址と第Ⅰ－1号掘建柱建物遺構との切り合い状態

8．第Ⅰ－6号住居址と第Ⅰ－5号住居址との切り合い状態（弥生住居手前）

図版3　第Ⅰ調査区検出の弥生時代の住居址

1．第Ⅰ—11号住居址プラン検出状態

2．第Ⅰ—11号住居址 発掘開始状態

3．第Ⅰ—11号住居址内 遺物出土状態

4．上図極部アップ写真

5．第Ⅰ—11号住居址内遺物出土状態

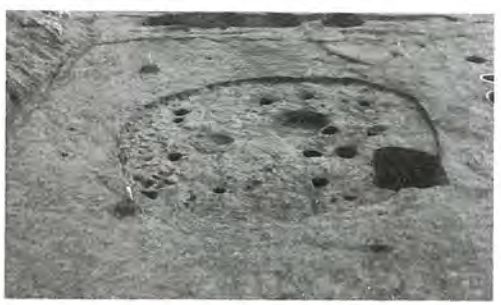
6．第Ⅰ—11号住居址床面近くの遺物出土状態

7．第Ⅰ—11号住居址 完掘状態

8．第Ⅱ—2号住居址内出土の石器

9．第Ⅱ—2号住居址 発掘開始状態

10．第Ⅱ—2号住居址内出土の石皿



11．第Ⅱ—2号住居址 完掘状態

図版4　縄文時代の住居址（第Ⅰ—11号・第Ⅱ—2号住居址）

1．第Ⅰ－1号円形周溝遺構

2．第Ⅰ－2号円形周溝遺構

3．第Ⅱ－1号円形周溝遺構

4．第Ⅱ－2号円形周溝遺構

5．方形溝遺構

6．方形溝遺構の断面

7．方形溝遺構の断面

8．方形溝遺構の断面

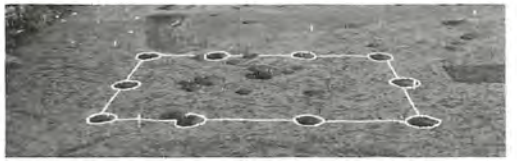
9．方形溝遺構の断面

図版5　円形周溝遺構及び方形溝遺構

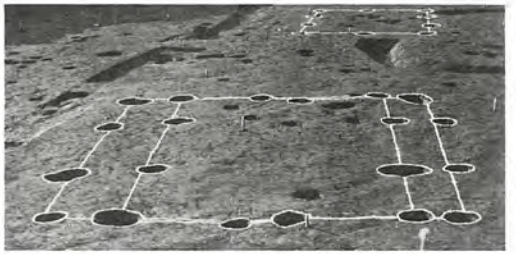
8、第Ⅱ－5号住居址

9．第Ⅱ－6号住居址カマド

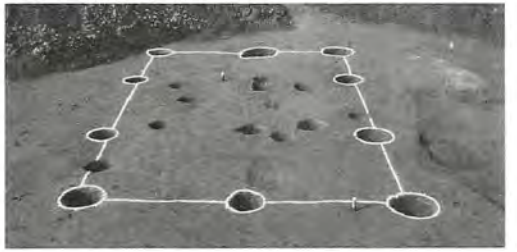
10．第Ⅱ－1号土拡



4．第Ⅱ－1号掘建柱建物遺構



5．第Ⅱ－2・4号掘建柱建物遺構
（右手上方は1号掘建柱建物遺構）



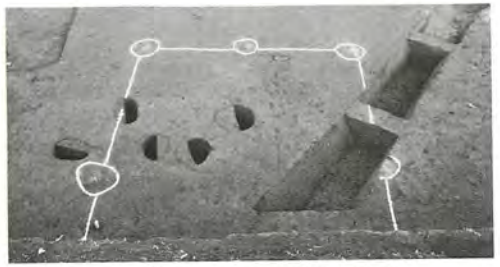
6．第Ⅱ－3号掘建柱建物遺構

7．第Ⅱ－1号住居址のカマド（中央の穴はイモ穴）

1．第Ⅱ区遺構検出状態（南東方向を見る）

2．同　　上（北東方向を見る）

3．同　　上（北方を見る）



9．第Ⅳ－1号掘建住建物遺構

10．第Ⅳ－1号溝（西方を見る）

11．第Ⅳ－1号溝内の埋土（西方を見る）

12．第Ⅳ－1号溝内の埋土（東方を見る）

5．第Ⅳ－1号土壙

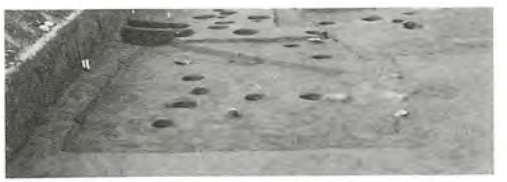
6．第Ⅳ－1号住居址のカマド

7．第Ⅳ－7号住居址のカマド

8．第Ⅳ－7号住居址完掘状態
（第Ⅳ－3号溝によって切られる）

1．第Ⅳ区全景

2．第Ⅳ－2・3・4・5・8号住居址の切り合い状態



3．第Ⅳ－6号住居址

4．第Ⅳ区中央部検出の遺構

図版7　第Ⅳ調査区検出の遺構

図版 8　第Ⅲ調査区及び第Ⅶ調査区の景観

3．第Ⅶ区検出の道路遺構

1．第Ⅲ区景観（右上方第Ⅶ区
左上方送風器下第Ⅵ区）

4．第Ⅶ区検出の道路遺構

2．第Ⅶ区景観（右手桑園幼木植栽の畑地より銅鉾出土
右手上方送風器下の茶園第Ⅵ区）

1．第Ⅰ—10号住居址出土（第107図の2）

3．第Ⅰ—10号住居址出土（第108図の4）

4．第Ⅰ—10号住居址出土（第109図の6）

2．第Ⅰ—10号住居址出土）第107図の1）

5．第Ⅰ—10号住居址出土（第108図の3）

6．第Ⅰ—10号住居址出土（第109図の5）

7．第Ⅰ—10号住居址出土（第110図の8）

8．第Ⅰ—10号住居址（第110図の9）

12．第Ⅰ—8号住居址出土（第106図の1）

9．第Ⅰ—10号住居址出土（第110図の7）

10．第Ⅰ—10号住居址出土（第110図の11）

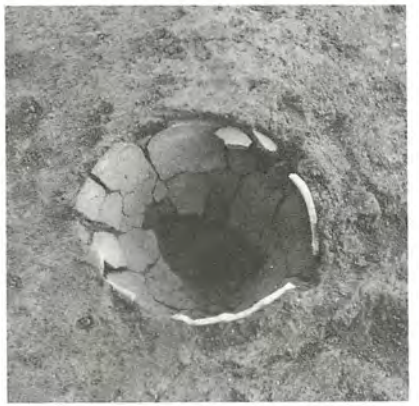
11．第Ⅰ—10号住居址出土（第110図の10）

13．第Ⅰ—8号住居址出土（第106図の3）

図版9　第Ⅰ調査区（第Ⅰ—10号・第Ⅰ—8号住居址）出土の弥生土器

図版10　第Ⅰ・Ⅱ調査区検出の埋鉢の出土状態

5．第Ⅰ－2号　埋鉢



3．第Ⅱ－2号　埋鉢

1．第Ⅰ－4号　埋鉢

6．第Ⅱ－3号　埋鉢

4．第Ⅰ－3号　埋鉢

2．第Ⅰ－1号　埋鉢

7．第Ⅱ－1号埋鉢

5．第Ⅱ－4号埋鉢

3．第Ⅰ－3号埋鉢

1．第Ⅰ－1号埋鉢

8．第Ⅱ－3号埋鉢

6．第Ⅱ－2号埋鉢

4．第Ⅰ－4号埋鉢

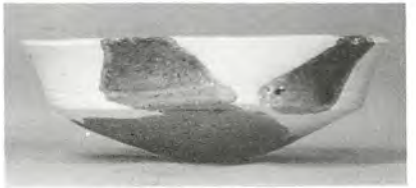
2．第Ⅰ－2号埋鉢

図版11　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の埋鉢

7．注口土器（第Ⅰ区10—Ⅰの25）　6．注口土器（第Ⅰ区9—Dの8）

10．注口土器（第Ⅰ区12—Fの16）　9．注口土器（第Ⅰ区8—Hの23）　8．注口土器（第Ⅰ区12—Fの16）

16．高坏（第Ⅰ区10—Eの14）　15．高坏（第Ⅰ区11—Hの14）　14．高坏



3．浅鉢（第Ⅰ区9—Hの2）

4．浅鉢（第Ⅰ区9—G）

5．注口土器（第Ⅰ区10—Dの19）

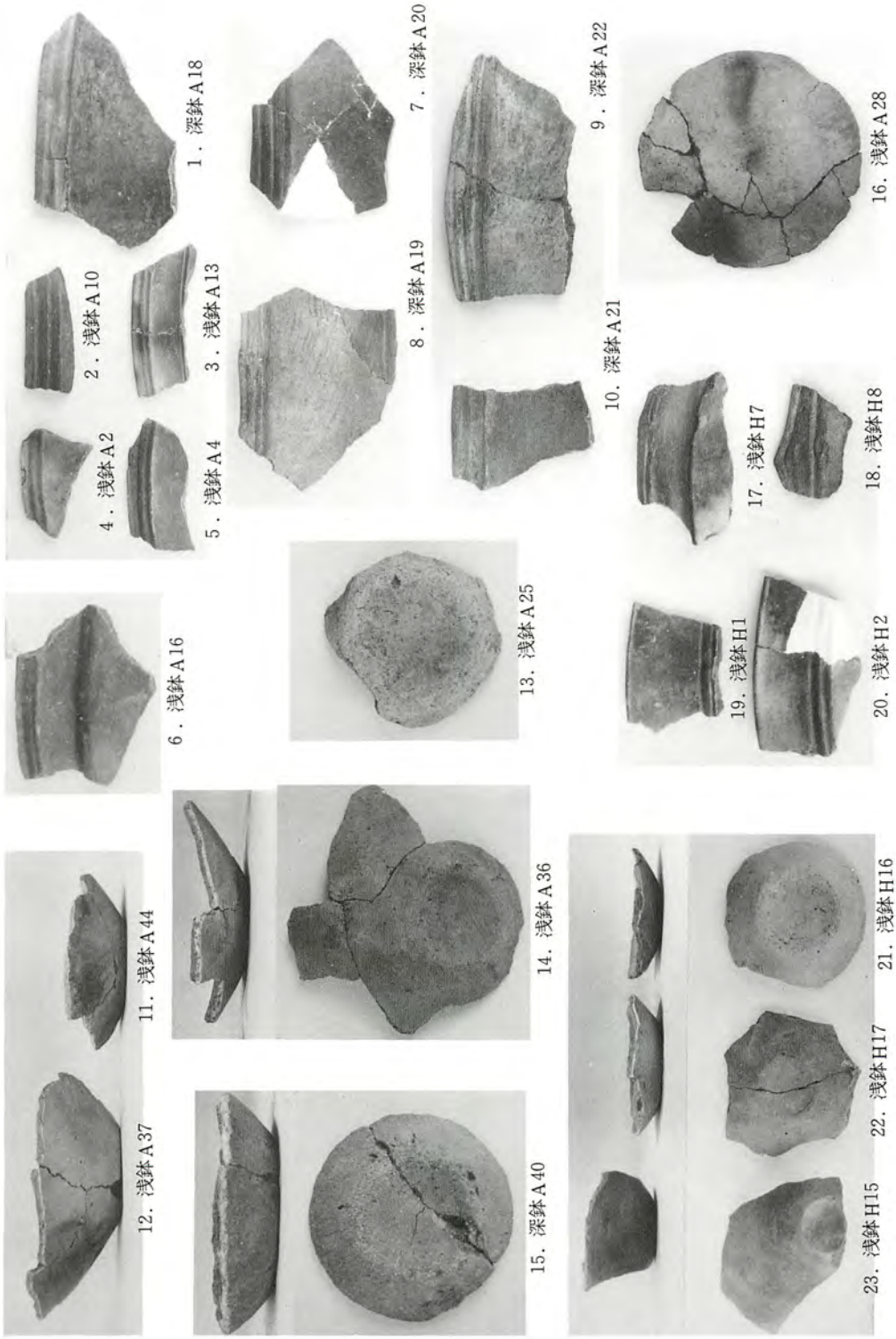
13．高坏（第Ⅰ区7—Hの13）　12．高坏

2．浅鉢（第Ⅰ—11号住居址）

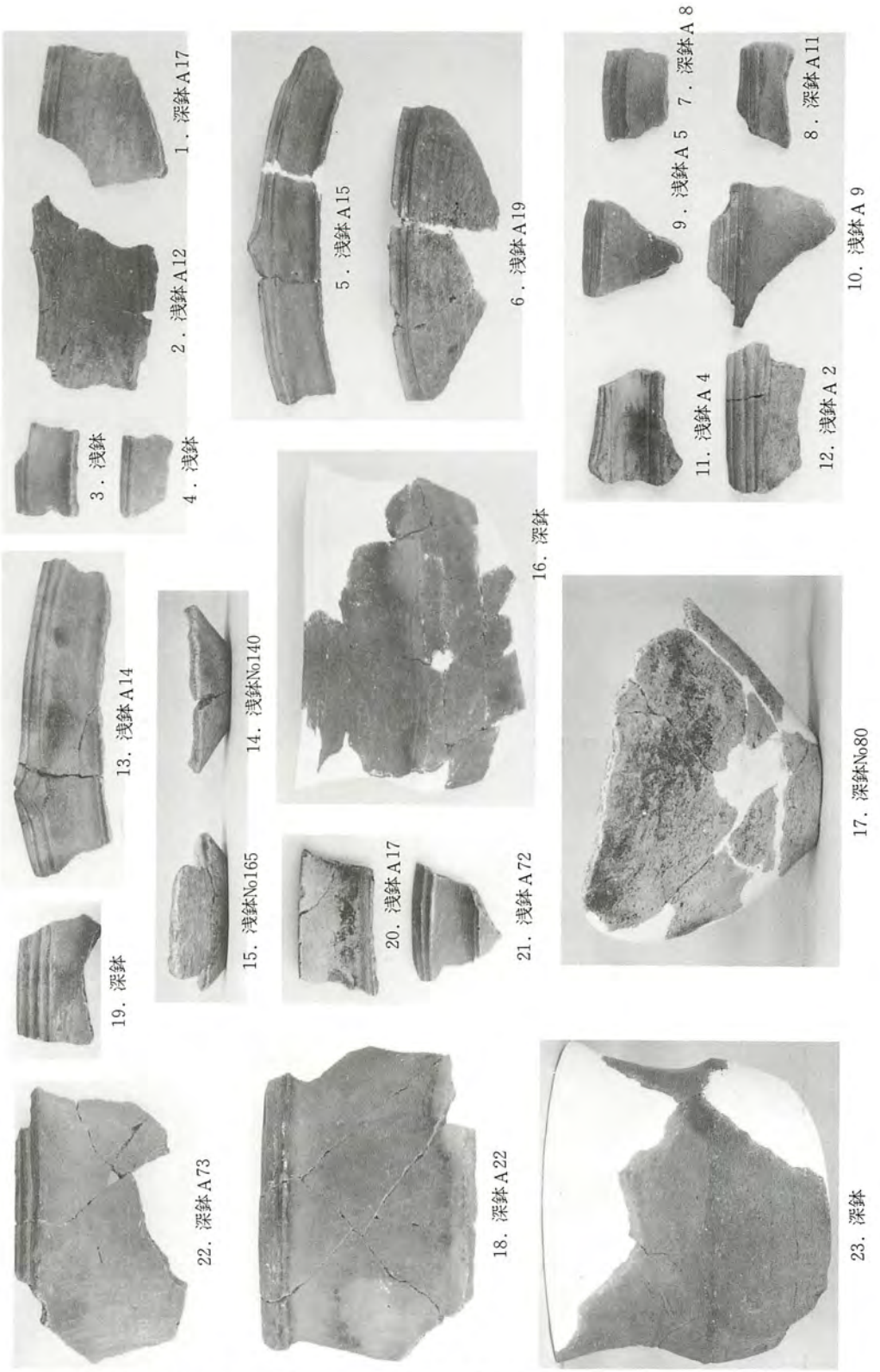
土偶（第Ⅰ—11号住居址No17）

11．高坏（第Ⅰ区13—D）

図版12　土偶及び縄文土器（浅鉢・注口土器・高坏）



図版13　縄文土器（第Ⅰ－11号住居址 1～16・第Ⅰ－1号方形溝 17～23）



図版14　縄文土器 第Ⅱ—2号住居址（1~18）・第Ⅱ—1号円形周溝（19~22）・第Ⅱ—2号円形周溝（23）

3．第Ⅰ区11—Gの3　26．第Ⅰ区7—H　G17　29．G 6

図版15　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の縄文土器（深鉢1～15・浅鉢16～34・鉢の底部35～52）

21．第Ⅴ区北側表採

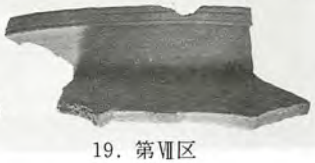
18．第Ⅶ区１号道路上

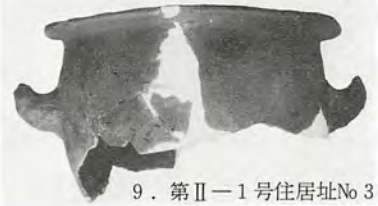
8．第Ⅶ区１号道路遺構上土器溜一括

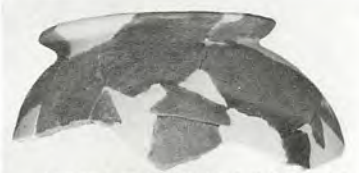
5．第Ⅶ区一括

1．第Ⅳ区一括

24．第Ⅱ－１号住居址No 6


19．第Ⅶ区

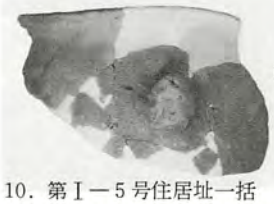

9．第Ⅱ－１号住居址No 3


6．第Ⅶ区１号道路遺構上土器溜一括

2．第Ⅶ区一括

25．第Ⅳ－２号住居址一括

20．第Ⅲ区西側表採蔵骨器


10．第Ⅰ－５号住居址一括

11．第Ⅰ区10－Ｆの22グリッド

12．第Ⅳ区一括

7．第Ⅱ－６号住居址No 1

3．第Ⅱ－６号住居址カマドの支脚

30．第Ⅳ区近世の溝中

22．第Ⅶ区

15．第Ⅳ区一括

16．第Ⅲ区西側表採

13．第Ⅳ区一括

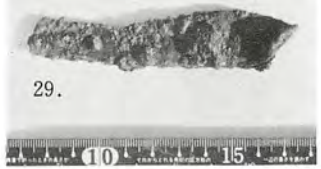
14．第Ⅳ区一括

17．第Ⅰ－3号住居址

31．第Ⅳ区

23．第Ⅶ区一括

26．第Ⅰ区13－Ｇグリッドのピット内


29．

28．第Ⅱ－6号住居址

27．第Ⅱ－1号住居址カマド内

4．第Ⅱ－１号住居址一括

図版16　歴史時代の遺物（土師器1～17・須恵器18～26・鉄器27～29・越州31・近世の磁器30）

編集後記

発掘調査終了後、伊坂上原遺跡・石佛遺跡とも報告書執筆のための整理に取りかかりました。それから今日の日を迎えるまでに、3年（石佛遺跡は2年）の歳月が流れました。

発掘調査を実施するに当って、地権者を始めとし、多数の工事関係及び教育関係の方々の御協力がありました。その御協力の成果として、本書の出版の日を迎えることが出来たと存じます。報告書執筆及び編集作業の終了するに当り、これまで色々御配慮いただいた数多くの方々に、衷心から御礼申し上げます。

遺跡の発掘調査・遺物整理・報告書執筆の担当者は、本書の初めの方に記したとおりです。事前の遺跡踏査及び試掘関係者を入れると、もっと多数になります。本県文化課文化財調査係の6割以上の者が、この両遺跡の調査に関与したと言っても過言ではありません。

多くの発掘調査及び報告書執筆担当者の中で、どうしても特筆しておかねばならない御二人がいらっしゃいます。その方は、廣瀬正照氏と河北毅氏です。

廣瀬正照氏は、歴史考古特に佛教考古に研究の的を絞って、研鑽を積んでおられました。発掘調査現場においては、常に、「オレタチの仕事は、遺構の正確な実測図作成と良い写真を残すことだ。それ以外には、何もない。」と、言っておられました。休息時間には、柔和で若者らしいジョークを言って、作業員一同を笑わせ、気持をなごませておられました。しかし、調査を開始してからの表情は、正に真剣勝負と言った感をうけました。昭和59年1月27日、17時過ぎ、「発掘作業は、29日には終了する。31日には撤収しよう。」と話し合って、互に帰宅しました。その翌朝、訃報に接するとは……。別れとは、このようにして、訪れるものなのでしょうか。

河北毅氏のここ数年間の学究研鑽の成果は目覚しく、近年は、弥生土器の形態変化に強い関心をよせて研究されておられました。発掘調査現場においては、よく、「遺構が何か、ものを言うように掘らにゃいかん。足の裏に目の玉の付いたごとなっと一人前たいね。」と、言っておられました。武道で鍛えた体は大きく立派で、皆が驚くほどでした。その上、心やさしく、物腰は柔かでした。本書掲載の縄文土器を実測する時は、机を抱きかかえるようにして作業されていた様子が目に浮びます。昭和60年4月上旬、59年度の作業が無事終了した喜びから私的に同志が一堂に会し、祝の宴を開きました。「龍は譲り、虎は闘う。」と大書された掛け軸の前で、酒盃を交しました。それから一週間過ぎた4月13日に、突然、不帰の客となられました。あの喜びの宴が、別れの宴となるとは、いったい誰が予測できたでしょうか。

この三年間に、真摯な態度で発掘調査や自己の学究生活を送ってこられた御二人の若き考古学徒が、不帰の旅につかれました。調査及び研究を伴にした文化財調査係員一同の悲しみは、筆舌に、つくせません。御二方の御家族のおなげきは、察して余りあるものがあります。

唐の国の白居易は「長恨歌」の中で、上皇となった玄宗は、修験者に依頼して、いとおしい楊貴妃のたましいの行くえをたずねたと歌っています。もしも、もしも、冥界をたずねる手法が今の世にあるならば、本書の初校を修験者に依託して、両氏の霊に本書の可否を問いたい思いにかられました。

今はただ、御二人の御霊前に、本書を供え、これまでの御努力を感謝し、合掌するのみであります。

本書刊行に際し、本書を手にされました先学の諸兄姉に、今はなき御二方の情熱が伝わり、本書の一言半句なりとも学究の御役に立てばと祈念いたします。

（編集者記す。）

熊本県文化財調査報告　第78集

伊坂上原遺跡
石佛遺跡

昭和61年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　株式会社　秀巧社
上益城郡益城町古閑106
TEL(096)286-2221(代)

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 78 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：伊坂上原遺跡 石佛遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/